

鑄師屋遺跡群

前田遺跡

—長野県北佐久郡御代田町前田遺跡発掘調査報告書—

1987

御代田町教育委員会

鑄師屋遺跡群

前田遺跡

—長野県北佐久郡御代田町前田遺跡発掘調査報告書—

1987

御代田町教育委員会

新野屋遺跡

前田遺跡

新野屋遺跡

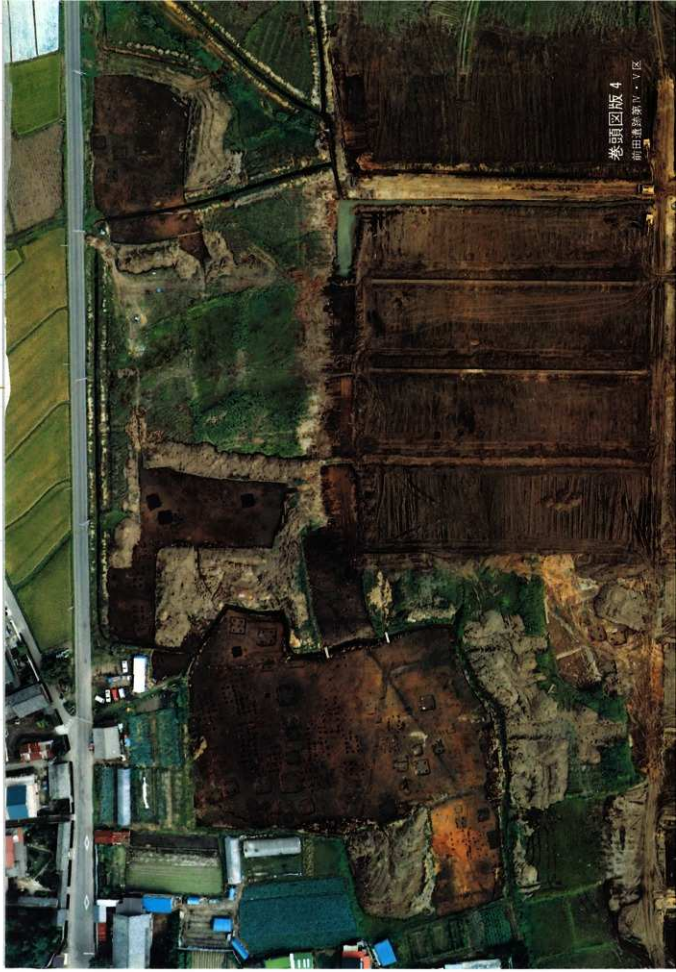






巻頭図版 4

前田重造遺跡Ⅳ・Ⅴ区





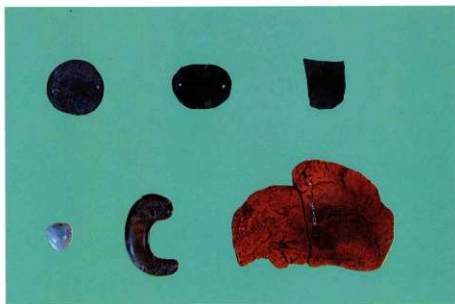
1 奈良時代の竪穴住居址 (H-52~H-55)



2 カマドと遺物の出土状態 (H-84)



1 初期須恵器



2 祭祀遺物



3 円蓋椀

序 文

雄大な浅間山の麓にあたる小田井・御影地区において、農業生産の向上化を目的として県営圃場整備事業が実施される運びとなりました。当御代田町内においては、その小田井・御影地区にあって野火付遺跡の存在が確認されましたが、当該事業実施に伴って破壊がやむなき事となり、発掘調査を実施して記録保存に努めることとなりました。調査は、由井茂也氏を団長とする調査団、町文化財審議委員、並びに関係者皆様の御尽力によって滞りなく進められ、奈良・平安・鎌倉期を中心とした遺構が多数検出されました。その中でも、平安初頭の埋葬馬の検出は特筆すべき発見となり、貴重な文化遺産が我々の目の前に姿を現しました。

この野火付遺跡を含む一帯は、奈良・平安時代を中心とする古代の大集落を眠らせており、銚師屋遺跡群と総称されております。野火付遺跡の北に隣接するのが、今回の調査をみた銚師屋遺跡群前田遺跡です。

前田遺跡の24万㎡におよぶ広大な調査地区からは、古墳時代中期の集落をはじめとして、奈良・平安時代の竪穴住居址100軒あまりが検出されました。また、90棟近くの独立柱建物址は、おそらく県内で最も多い検出事例ではないでしょうか。古代の地方集落がまさに現代に顕現したと言えるでしょう。

前田遺跡の発掘調査は昭和60年の4月より9月にかけて実施され、ひき続き本昭和61年度にかけてはその整理が行われ、本書刊行の運びとなった次第です。

埋蔵文化財はできれば原状のまままで保存しておくべきでありましたが、やむをえずに実施した今回の調査であります。正確な記録保存のために献身的な御協力をいただいた各位に深甚な謝意を呈して序といたします。

昭和62年3月

御代田教育委員会

教育長 原 田 正 夫

序 文

「しなのなる浅間の嶽に立つ樞遠近の人の見やはとがめぬ」。伊勢物語において在原業平が詠じている浅間は、東山道を旅する途中、この御代田付近でも作られたものでありましょうか。浅間の雄姿はいにしえの人々の眼にも今と変わりなく映ったことでしょう。

さて、この雄大な浅間の麓、御代田町において、速く奈良・平安を中心とした遺跡が調査されることになりました。しかし残念なことにそれは、県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査で、破壊を余儀なくされた記録保存のための調査となりました。幸いなことに調査は、佐久考古学会員を中心とする探究心旺盛な調査員諸氏と地域の歴史を自ら掘り起こそうとする地元の協力者の皆様のお力を得て滞りなく進んでまいりました。鎗師屋遺跡群と総称される一帯において、まず、昭和59年には野火付遺跡が調査され、ひき続いて昭和60年に調査されたのが本前田遺跡であります。

前田遺跡は予想以上に広大なひろがりを見せ、そこからは奈良・平安時代を中心とした竪穴住居址117軒・掘立柱建物址87棟あまりが検出されました。東国の一集落が今千年の眠りから目覚めたのです。この集落は、付近を通過したともいわれる新しい東山道や御牧塩野牧との深いかかわりあいが見られそうです。本報告書においては、こうした点についての論及を試みました。また、当地域において八世紀代の土器様相の変化が細かに追えることもしだいに明らかになり、それに基づいて集落様相の一端を垣間みることができました。

前田遺跡を含む鎗師屋遺跡群一帯は、御代田町のみならず、佐久市・小諸市の三市町にまたがっており、そのそれぞれの努力により、また、その協力によって調査が進められてまいりました。この調査によって東国の地方集落の実像が、僅かなりとも解明されることを願ってやみません。

最後になりましたが、本調査実施に際し深い御理解をいただきました農政および文化財保護部局各位、調査に実際にあたられた方々、本調査・報告に際し貴重な御配慮・御助言を賜りました皆様に対し厚く御礼を申し上げ、序にかえさせていただきます。

昭和62年3月

前田遺跡発掘調査団

団長 由井茂也

例 言

- 1 本書は、昭和60年4月15日より昭和62年3月31日までにわたって発掘調査・遺物整理された長野県北佐久郡御代田町大字御代田所在の鑄師屋遺跡群前田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、北佐久地方事務所（旧東信土地改良事務所）の委託を受け、御代田町教育委員会が実施した。
- 3 本調査の体制については、本文中発掘調査の概要のなかに記しておいた。
- 4 本書を作成するにあたっての作業分担は以下のとおりである。
 - ◎遺物復原 伴野有希子 ◎遺物実測 鳥居 亮、堤 隆、小林美智明、太田和子、伴野有希子、下角圭司
 - ◎遺物トレース 堤 隆 ◎遺物写真撮影 鳥居 亮 ◎遺物観察表作成 堤 隆
 - ◎遺物拓本 尾台久美子 ◎版組み 鳥居 亮、小林美智明、太田和子、田村祐子
 - ◎遺構トレース 鳥居 亮
- 5 本書の本文編の執筆は、堤 隆が行った。
- 6 本書の付編については以下の各位より玉稿を賜わった。厚く御礼申し上げる次第である。その掲載については、受付順とした。
 - バリノサーヴェイ株式会社 「前田遺跡出土材樹種同定報告」
 - 奈良県橿原考古学研究所 木下 亘先生 「前田遺跡の初期須恵器について」
 - 奈良教育大学 三辻利一先生 「前田遺跡出土土器の蛍光X線分析」
- 7 本遺跡出土の石器の石材鑑定は、白倉盛男先生にお願いした。
- 8 本書の編集は、堤 隆、鳥居 亮が行い、御代田町教育委員会がこれを校閲した。
- 9 本遺跡の佐久市分についての写真・図面の掲載にあたっては、佐久市教育委員会に快諾を得た。厚く御礼申し上げる次第である。
- 10 本調査および報告書刊行に際しては、以下の方々に貴重な御助言・御配慮を得た。御芳名を記して厚く御礼申し上げる次第である。（順不同・敬称略）

金井塚良一、笹沢 浩、田中正二郎、花岡 弘、岩崎直也、林部 均、西山克己、桐原 健
小林 孚、樋口昇一、小林秀夫、太田喜幸、芦部公一、宮下健司、川島雅人、林原利明、
鶴柄俊夫、諏訪間順、諏訪間伸、櫻田 誠、菅谷みのぶ、新田浩三、関口昌和、林 幸彦、
石野博信、関川尚功、羽毛田卓也、高村博文、小山岳夫、三石宗一、福島邦男、齋藤洋一、
村沢正弘、伊丹 徹、中田 英、大上周三、山下誠一、木内 捷、保坂康夫、河西 学

凡 例

1 遺構の略称

H→竪穴住居址 F→掘立柱建物址 D→土塹 M→溝状遺構

2 遺構ナンバーは、時代別になっておらず、分布のまとまりの順に付してある。

3 挿図の縮尺

遺構および遺物の挿図の縮尺は、各図毎に明示してある。

4 写真図版の縮尺

遺構写真の縮尺については統一されていない。

遺物写真は、土器・石器ともに挿図と同じ縮尺に統一してある。

材の顕微鏡写真については図版中に縮尺を示しておいた。

5 挿図中におけるスクリーントーンは下記のものを表す。

1) 遺構

斜線 = 遺構断面 網点 = カマド(太点)、炉(細点)

2) 遺物

断面の網点 = 須恵器 内・外面の網点 太=黒色処理 細=赤色塗彩

石器表面の網点 = 使用痕範囲

6 遺構面積の計測にはプランニメーターを用い、3回の計測の平均値を面積として示した。

7 出土遺物一覧表〈土器〉の法量は、上から口径・器高・底径の順に記載し、無記載は不明()は推定値、〈 〉は大幅な推定値、カッコがない場合は完存値を表す。単位はcm。

8 出土遺物一覧表〈石器・金属器〉の法量は、無記載が不明、()は現存値、〈 〉がない場合は完存値を表す。単位はcmおよびg。

9 遺構の層序説明は本文中に記した。

10 遺物胎土の色調は『新版 標準土色帖』の表示に基づいて示した。

目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
目 次	

I 発掘調査の概要	1
1 調査に至る動機	1
2 発掘調査の概要	2
3 発掘区の設定と遺構の検出	3
4 発掘調査経過	4
II 遺跡の環境	7
1 前田の風土	7
2 前田遺跡の歴史的環境	9
III 層序	13
IV 遺構と遺物	15
1 竪穴住居址	15
(1) H-1号住居址	15
(2) H-2号住居址	17
(3) H-3号住居址	19
(4) H-4号住居址	21
(5) H-5号住居址	23
(6) H-6号住居址	25
(7) H-7号住居址	28
(8) H-8号住居址	30
(9) H-9号住居址	32
00 H-10号住居址	33
01 H-11号住居址	35
02 H-12号住居址	37
03 H-13号住居址	38
04 H-14号住居址	40
05 H-15号住居址	43
06 H-16号住居址	44
07 H-17号住居址	47
08 H-18号住居址	48
09 H-19号住居址	50
00 H-20号住居址	54
01 H-21号住居址	57
02 H-22号住居址	61
03 H-23号住居址	63
04 H-24号住居址	67
05 H-25号住居址	70
06 H-26号住居址	72
07 H-27号住居址	77
08 H-28号住居址	78

029	H-29号住居址	81	601	H-61号住居址	165
030	H-30号住居址	84	602	H-62号住居址	173
031	H-31号住居址	86	603	H-63号住居址	175
032	H-32号住居址	87	604	H-64号住居址	180
033	H-33号住居址	90	605	H-65号住居址	182
034	H-34号住居址	93	606	H-66号住居址	184
035	H-35号住居址	94	607	H-67号住居址	189
036	H-36号住居址	94	608	H-68号住居址	193
037	H-37号住居址	96	609	H-69号住居址	195
038	H-38号住居址	99	610	H-70号住居址	198
039	H-39号住居址	102	611	H-71号住居址	200
040	H-40号住居址	104	612	H-72号住居址	201
041	H-41号住居址	106	613·614	H-73·74号住居址	204
042	H-42号住居址	110	615	H-75号住居址	208
043	H-43号住居址	113	616	H-76号住居址	212
044	H-44号住居址	114	617	H-77号住居址	214
045	H-45号住居址	118	618	H-78号住居址	219
046	H-46号住居址	121	619	H-79号住居址	220
047	H-47号住居址	125	620	H-80号住居址	224
048	H-48号住居址	127	621	H-81号住居址	227
049	H-49号住居址	132	622	H-82号住居址	231
050	H-50号住居址	134	623	H-83号住居址	232
051	H-51号住居址	135	624	H-84号住居址	234
052	H-52号住居址	136	625	H-85号住居址	239
053	H-53号住居址	140	626	H-86号住居址	240
054	H-54号住居址	143	627	H-87号住居址	243
055	H-55号住居址	148	628	H-88号住居址	247
056	H-56号住居址	153	629	H-89号住居址	249
057	H-57号住居址	154	630	H-90号住居址	252
058	H-58号住居址	157	631	H-91号住居址	253
059	H-59号住居址	160	632	H-92号住居址	255
060	H-60号住居址	162	633	H-93号住居址	257

94	H-94号住居址	259	(106)	H-106号住居址	284
95	H-95号住居址	260	(107)	H-107号住居址	285
96	H-96号住居址	261	(108)	H-108号住居址	288
97	H-97号住居址	262	(109)	H-109号住居址	294
98	H-98号住居址	265	(110)	H-110号住居址	295
99	H-99号住居址	268	(111)	H-111号住居址	298
(100)	H-100号住居址	271	(112)	H-112号住居址	302
(101)	H-101号住居址	272	(113)	H-113号住居址	305
(102)	H-102号住居址	275	(114)	H-114号住居址	309
(103)	H-103号住居址	277	(115)	H-115号住居址	311
(104)	H-104号住居址	280	(116)	H-116号住居址	313
(105)	H-105号住居址	282	(117)	H-117号住居址	314
2	掘立柱建物址	317			317
(1)	F-1号掘立柱建物址	317	(20)	F-20号掘立柱建物址	334
(2)	F-2号掘立柱建物址	317	(21)	F-21号掘立柱建物址	336
(3)	F-3号掘立柱建物址	318	(22)	F-22号掘立柱建物址	336
(4)	F-4号掘立柱建物址	319	(23)	F-23号掘立柱建物址	337
(5)	F-5号掘立柱建物址	319	(24)	F-24号掘立柱建物址	338
(6)	F-6号掘立柱建物址	320	(25)	F-25号掘立柱建物址	339
(7)	F-7号掘立柱建物址	321	(26)	F-26号掘立柱建物址	340
(8)	F-8号掘立柱建物址	322	(27)	F-27号掘立柱建物址	340
(9)	F-9号掘立柱建物址	323	(28)	F-28号掘立柱建物址	341
(10)	F-10号掘立柱建物址	323	(29)	F-29号掘立柱建物址	342
(11)	F-11号掘立柱建物址	324	(30)	F-30号掘立柱建物址	343
(12)	F-12号掘立柱建物址	325	(31)	F-31号掘立柱建物址	343
(13)	F-13号掘立柱建物址	325	(32)	F-32号掘立柱建物址	344
(14)	F-14号掘立柱建物址	326	(33)	F-33号掘立柱建物址	346
(15)	F-15号掘立柱建物址	327	(34)	F-34号掘立柱建物址	346
(16)	F-16号掘立柱建物址	328	(35)	F-35号掘立柱建物址	347
(17)	F-17号掘立柱建物址	329	(36)	F-36号掘立柱建物址	348
(18)	F-18号掘立柱建物址	331	(37)	F-37号掘立柱建物址	351
(19)	F-19号掘立柱建物址	332	(38)	F-38号掘立柱建物址	352

39	F-39号掘立柱建物址	352	64	F-64号掘立柱建物址	377
40	F-40号掘立柱建物址	353	65	F-65号掘立柱建物址	378
41	F-41号掘立柱建物址	354	66	F-66号掘立柱建物址	378
42	F-42号掘立柱建物址	354	67	F-67号掘立柱建物址	378
43	F-43号掘立柱建物址	355	68	F-68号掘立柱建物址	380
44	F-44号掘立柱建物址	356	69	F-69号掘立柱建物址	381
45	F-45号掘立柱建物址	357	70	F-70号掘立柱建物址	381
46	F-46号掘立柱建物址	358	71	F-71号掘立柱建物址	382
47	F-47号掘立柱建物址	359	72	F-72号掘立柱建物址	382
48	F-48号掘立柱建物址	361	73	F-73号掘立柱建物址	384
49	F-49号掘立柱建物址	362	74	F-74号掘立柱建物址	385
50	F-50号掘立柱建物址	364	75	F-75号掘立柱建物址	386
51	F-51号掘立柱建物址	364	76	F-76号掘立柱建物址	386
52	F-52号掘立柱建物址	365	77	F-77号掘立柱建物址	388
53	F-53号掘立柱建物址	366	78	F-78号掘立柱建物址	388
54	F-54号掘立柱建物址	368	79	F-79号掘立柱建物址	389
55	F-55号掘立柱建物址	369	80	F-80号掘立柱建物址	389
56	F-56号掘立柱建物址	370	81	F-81号掘立柱建物址	390
57	F-57号掘立柱建物址	370	82	F-82号掘立柱建物址	390
58	F-58号掘立柱建物址	372	83	F-83号掘立柱建物址	391
59	F-59号掘立柱建物址	373	84	F-84号掘立柱建物址	391
60	F-60号掘立柱建物址	374	85	F-85号掘立柱建物址	391
61	F-61号掘立柱建物址	375	86	F-86号掘立柱建物址	392
62	F-62号掘立柱建物址	375	87	F-87号掘立柱建物址	392
63	F-63号掘立柱建物址	377			
3	土 壌	399			
(1)	D-1号土壌	399	(5)	第I区ゾー41グリッドの土壌群	402
(2)	D-2号土壌	400	(6)	第II区シ・スー23・24	
(3)	D-3号土壌	400		25グリッドの土壌群	403
(4)	第I区シー41・42グリッドの土壌群	402	(7)	D-52号土壌	403
4	溝状遺構	407			
(1)	M-1号溝状遺構	407			

5	表面採集遺物	408
V	総括	411
1	はじめに	411
2	前田遺跡における古墳時代中・後期の土器様相	411
	(1) 古墳時代中期(前田遺跡第Ⅰ期)	411
	(2) 古墳時代中期末(前田遺跡第Ⅱ期)	417
	(3) 古墳時代後期中葉(前田遺跡第Ⅲ期)	421
3	前田遺跡における奈良・平安時代の土器様相	423
	(1) 須恵器坏について	423
	(2) 須恵器高台付坏	422
	(3) 須恵器長頸瓶	424
	(4) 須恵器蓋	424
	(5) 須恵器円面碗	425
	(6) 須恵器その他の器種	426
	(7) 土師器坏	427
	(8) 土師器長胴甕	427
	(9) 土師器小形球胴甕	440
	(10) 土師器埴	440
	(11) 土師器その他の器種	441
	(12) 奈良・平安時代の土器様相とその編年的予察	442
	(13) 畿内系暗文を有する土器について	445
4	奈良・平安時代の石器・鉄器について	446
	(1) 石鏃	446
	(2) 紡錘車	446
	(3) 鉄器	450
5	前田遺跡における遺構および集落の様相	452
	(1) 竪穴住居址	452
	(2) 掘立柱建物址	472
	(3) 前田遺跡における集落様相	482
	(4) 奈良・平安時代における住居廃絶時のカマド破壊について	487
6	前田遺跡における古代集落の性格とその歴史的背景	489
	(1) 古墳時代中期	496

(2) 古墳時代後期	500
(3) 奈良・平安時代	501
引用・参考文献	506
付 編 1 前田遺跡出土材の樹種同定	
付 編 2 前田遺跡の初期須恵器について	
付 編 3 前田遺跡出土土器の蛍光X線分析	
図 版	
後 記	

挿 図 目 次

第1図 前田遺跡発掘調査対象区	1	第28図 H-10号住居址実測図	34
第2図 発掘区の設定と拡張区	5・6	第29図 H-10号住居址出土遺物	34
第3図 御代田町地形地質図	8	第30図 H-11号住居址実測図	35
第4図 前田遺跡と周辺の遺跡分布	10	第31図 H-11号住居址カマド実測図	36
第5図 H-1号住居址実測図	15	第32図 H-11号住居址出土遺物	37
第6図 H-1号住居址カマド実測図	16	第33図 H-12号住居址実測図	38
第7図 H-1号住居址出土遺物	17	第34図 H-13号住居址実測図	38
第8図 H-2号住居址実測図	18	第35図 H-13号住居址カマド実測図	39
第9図 H-2号住居址出土遺物	18	第36図 H-13号住居址出土遺物	39
第10図 H-3号住居址実測図	19	第37図 H-14号住居址実測図	41
第11図 H-3号住居址カマド実測図	20	第38図 H-14号住居址カマド実測図	41
第12図 H-3号住居址出土遺物	20	第39図 H-14号住居址出土遺物	42
第13図 H-4号住居址実測図	21	第40図 H-14号住居址出土遺物	42
第14図 H-4号住居址カマド実測図	21	第41図 H-15号住居址実測図	43
第15図 H-4号住居址出土遺物	22	第42図 H-15号住居址出土遺物	43
第16図 H-5号住居址実測図	23	第43図 H-16号住居址実測図	44
第17図 H-5号住居址出土遺物	24	第44図 H-16号住居址カマド実測図	44
第18図 H-6号住居址実測図	25	第45図 H-16号住居址出土遺物	45
第19図 H-6号住居址カマド実測図	26	第46図 H-16号住居址出土遺物	46
第20図 H-6号住居址出土遺物	27	第47図 H-17号住居址実測図	47
第21図 H-7号住居址実測図	28	第48図 H-17号住居址出土遺物	48
第22図 H-7号住居址出土遺物	29	第49図 H-18号住居址カマド実測図	48
第23図 H-8号住居址実測図	31	第50図 H-18号住居址実測図	49
第24図 H-8号住居址出土遺物	31	第51図 H-18号住居址出土遺物	49
第25図 H-9号住居址実測図	32	第52図 H-19号住居址実測図	50
第26図 H-9号住居址カマド実測図	32	第53図 H-19号住居址カマド実測図	51
第27図 H-9号住居址出土遺物	32	第54図 H-19号住居址出土遺物	52

第55図	H-19号住居址出土遺物	53	第96図	H-31号住居址出土遺物	87
第56図	H-20号住居址実測図	54	第97図	H-32号住居址実測図	88
第57図	H-20号住居址カマド実測図	54	第98図	H-32号住居址カマド実測図	88
第58図	H-20号住居址出土遺物	55	第99図	H-32号住居址出土遺物	89
第59図	H-20号住居址出土遺物	56	第100図	H-33号住居址実測図	90
第60図	H-21号住居址実測図	58	第101図	H-33号住居址カマド実測図	90
第61図	H-21号住居址カマド実測図	58	第102図	H-33号住居址出土遺物	91
第62図	H-21号住居址出土遺物実測図	59	第103図	H-34号住居址実測図	93
第63図	H-21号住居址出土遺物実測図	60	第104図	H-35号住居址実測図	94
第64図	H-22号住居址実測図	61	第105図	H-36号住居址実測図	94
第65図	H-22号住居址カマド実測図	62	第106図	H-36号住居址カマド実測図	95
第66図	H-22号住居址出土遺物	62	第107図	H-36号住居址出土遺物	95
第67図	H-23号住居址カマド実測図	63	第108図	H-37号住居址実測図	96
第68図	H-23号住居址実測図	64	第109図	H-37号住居址カマド実測図	97
第69図	H-23号住居址出土遺物	65	第110図	H-37号住居址出土遺物	98
第70図	H-23号住居址出土遺物	66	第111図	H-38号住居址実測図	100
第71図	H-24号住居址実測図	67	第112図	H-38号住居址カマド実測図	100
第72図	H-24号住居址カマド実測図	67	第113図	H-38号住居址出土遺物	100
第73図	H-24号住居址出土遺物	68	第114図	H-39号住居址実測図	102
第74図	H-24号住居址出土遺物	69	第115図	H-39号住居址カマド実測図	103
第75図	H-25号住居址実測図	70	第116図	H-37号住居址出土遺物	103
第76図	H-25号住居址カマド実測図	71	第117図	H-40号住居址実測図	104
第77図	H-25号住居址出土遺物	71	第118図	H-40号住居址カマド実測図	104
第78図	H-25号住居址出土遺物	72	第119図	H-40号住居址出土遺物	105
第79図	H-26号住居址実測図	73	第120図	H-41号住居址実測図	105
第80図	H-26号住居址カマド実測図	73	第121図	H-41号住居址出土遺物	107
第81図	H-26号住居址出土遺物	74	第122図	H-41号住居址カマド実測図	108
第82図	H-26号住居址出土遺物	75	第123図	H-41号住居址出土遺物	108
第83図	H-26号住居址出土遺物	76	第124図	H-42号住居址実測図	110
第84図	H-27号住居址実測図	77	第125図	H-42号住居址カマド実測図	110
第85図	H-27号住居址出土遺物	77	第126図	H-42号住居址出土遺物	111
第86図	H-28号住居址カマド実測図	78	第127図	H-43号住居址実測図	112
第87図	H-28号住居址実測図	79	第128図	H-43号住居址カマド実測図	113
第88図	H-28号住居址出土遺物	80	第129図	H-43号住居址出土遺物	113
第89図	H-28号住居址出土遺物	81	第130図	H-44号住居址実測図	115
第90図	H-29号住居址実測図	82	第131図	H-44号住居址カマド実測図	116
第91図	H-29号住居址出土遺物	83	第132図	H-44号住居址出土遺物	117
第92図	H-30号住居址実測図	84	第133図	H-45号住居址実測図	118
第93図	H-30号住居址カマド実測図	85	第134図	H-45号住居址カマド実測図	119
第94図	H-30号住居址出土遺物	85	第135図	H-45号住居址出土遺物	119
第95図	H-31号住居址実測図	86	第136図	H-46号住居址カマド実測図	121

第137回	H-46号住居址実測図	122	第178回	H-59号住居址実測図	181
第138回	H-46号住居址出土遺物	123	第179回	H-59号住居址出土遺物	181
第139回	H-47号住居址実測図	125	第180回	H-60号住居址実測図	183
第140回	H-47号住居址カマド実測図	125	第181回	H-60号住居址出土遺物	184
第141回	H-47号住居址出土遺物	126	第182回	H-60号住居址出土遺物	185
第142回	H-48号住居址実測図	127	第183回	H-61号住居址実測図	187
第143回	H-48号住居址カマド実測図	128	第184回	H-61号住居址炉	188
第144回	H-48号住居址出土遺物	129	第185回	H-61号住居址出土遺物	189
第145回	H-48号住居址出土遺物	130	第186回	H-61号住居址出土遺物	189
第146回	H-49号住居址実測図	132	第187回	H-61号住居址出土遺物	191
第147回	H-49号住居址カマド実測図	133	第188回	H-62号住居址実測図	193
第148回	H-49号住居址出土遺物	133	第189回	H-62号住居址炉	194
第149回	H-50号住居址実測図	135	第190回	H-62号住居址出土遺物	194
第150回	H-51号住居址実測図	135	第191回	H-63号住居址実測図	195
第151回	H-51号住居址出土遺物	136	第192回	H-63号住居址炉	195
第152回	H-52号住居址実測図	137	第193回	H-63号住居址カマド実測図	197
第153回	H-52号住居址カマド実測図	138	第194回	H-63号住居址出土遺物	198
第154回	H-52号住居址出土遺物	139	第195回	H-63号住居址出土遺物	199
第155回	H-53号住居址実測図	140	第196回	H-64号住居址実測図	200
第156回	H-53号住居址カマド実測図	141	第197回	H-64号住居址カマド実測図	201
第157回	H-53号住居址出土遺物	142	第198回	H-64号住居址出土遺物	201
第158回	H-53号住居址出土遺物	143	第199回	H-65号住居址実測図	203
第159回	H-54号住居址実測図	145	第200回	H-65号住居址炉	203
第160回	H-54号住居址カマド実測図	146	第201回	H-65号住居址出土遺物	203
第161回	H-54号住居址出土遺物	146	第202回	H-66号住居址実測図	205
第162回	H-54号住居址出土遺物	147	第203回	H-66号住居址カマド実測図	206
第163回	H-55号住居址実測図	149	第204回	H-66号住居址出土遺物	207
第164回	H-55号住居址カマド実測図	150	第205回	H-66号住居址出土遺物	208
第165回	H-55号住居址出土遺物	151	第206回	H-67号住居址実測図	209
第166回	H-55号住居址出土遺物	152	第207回	H-67号住居址カマド実測図	209
第167回	H-55号住居址出土遺物	153	第208回	H-67号住居址出土遺物	210
第168回	H-56号住居址実測図	154	第209回	H-67号住居址出土遺物	210
第169回	H-56号住居址カマド実測図	154	第210回	H-68号住居址実測図	210
第170回	H-56号住居址出土遺物	155	第211回	H-68号住居址出土遺物	210
第171回	H-57号住居址実測図	156	第212回	H-68号住居址出土遺物	215
第172回	H-57号住居址出土遺物	156	第213回	H-69号住居址実測図	216
第173回	H-57号住居址カマド実測図	157	第214回	H-69号住居址カマド実測図	217
第174回	H-58号住居址実測図	158	第215回	H-69号住居址出土遺物	217
第175回	H-58号住居址カマド実測図	159	第216回	H-70号住居址実測図	218
第176回	H-58号住居址出土遺物	159	第217回	H-70号住居址カマド実測図	218
第177回	H-59号住居址カマド実測図	180	第218回	H-70号住居址出土遺物	219

第208図	H-71号住居址実測図	200	第260図	H-85号住居址出土遺物	260
第209図	H-72号住居址実測図	202	第261図	H-86号住居址実測図	261
第210図	H-72号住居址カマド実測図	202	第262図	H-86号住居址カマド実測図	261
第220図	H-72号住居址出土遺物	203	第263図	H-86号住居址出土遺物	262
第221図	H-73・H-74号住居址実測図	205	第264図	H-87号住居址カマド実測図	263
第224図	H-73・H-74号住居址出土遺物	206	第265図	H-87号住居址実測図	264
第225図	H-75号住居址実測図	207	第266図	H-87号住居址出土遺物	265
第226図	H-75号住居址カマド実測図	208	第267図	H-87号住居址出土遺物	266
第227図	H-75号住居址出土遺物	209	第268図	H-88号住居址実測図	268
第228図	H-75号住居址出土遺物	210	第269図	H-88号住居址カマド実測図	268
第229図	H-76号住居址実測図	211	第270図	H-88号住居址出土遺物	268
第230図	H-76号住居址カマド実測図	213	第271図	H-89号住居址実測図	269
第231図	H-76号住居址出土遺物	214	第272図	H-89号住居址カマド実測図	269
第232図	H-76号住居址出土遺物	214	第273図	H-89号住居址出土遺物	269
第233図	H-77号住居址実測図	215	第274図	H-90号住居址実測図	269
第234図	H-77号住居址炉	215	第275図	H-91号住居址実測図	269
第235図	H-77号住居址出土遺物	216	第276図	H-91号住居址カマド実測図	269
第236図	H-77号住居址出土遺物	217	第277図	H-91号住居址出土遺物	269
第237図	H-78号住居址実測図	218	第278図	H-92号住居址実測図	269
第238図	H-78号住居址カマド実測図	219	第279図	H-92号住居址出土遺物	269
第239図	H-79号住居址実測図	221	第280図	H-93号住居址実測図	269
第240図	H-79号住居址カマド実測図	222	第281図	H-93号住居址カマド実測図	269
第241図	H-79号住居址出土遺物	222	第282図	H-93号住居址出土遺物	269
第242図	H-79号住居址出土遺物	223	第283図	H-94号住居址実測図	269
第243図	H-80号住居址実測図	224	第284図	H-94号住居址出土遺物	269
第244図	H-80号住居址実測図	225	第285図	H-95号住居址実測図	269
第245図	H-80号住居址出土遺物	226	第286図	H-96号住居址実測図	269
第246図	H-81号住居址実測図	227	第287図	H-97号住居址カマド実測図	269
第247図	H-81号住居址カマド実測図	228	第288図	H-97号住居址実測図	269
第248図	H-81号住居址出土遺物	229	第289図	H-97号住居址出土遺物	269
第249図	H-81号住居址出土遺物	230	第290図	H-98号住居址実測図	269
第250図	H-82号住居址実測図	231	第291図	H-98号住居址カマド実測図	269
第251図	H-82号住居址出土遺物	231	第292図	H-98号住居址出土遺物	269
第252図	H-83号住居址実測図	232	第293図	H-99号住居址カマド実測図	269
第253図	H-83号住居址カマド実測図	232	第294図	H-99号住居址実測図	269
第254図	H-83号住居址出土遺物	233	第295図	H-99号住居址出土遺物	269
第255図	H-84号住居址実測図	234	第296図	H-100号住居址実測図	270
第256図	H-84号住居址カマド実測図	235	第297図	H-100号住居址出土遺物	270
第257図	H-84号住居址出土遺物	236	第298図	H-100号住居址実測図	270
第258図	H-84号住居址出土遺物	237	第299図	H-100号住居址カマド実測図	270
第259図	H-85号住居址実測図	239	第300図	H-100号住居址出土遺物実測図	271

第300区	H-10号住居址実測図	275	第302区	H-115号住居址実測図	312
第300区	H-10号住居址カマド実測図	276	第302区	H-115号住居址カマド実測図	312
第300区	H-10号住居址出土遺物	276	第304区	H-115号住居址出土遺物	313
第304区	H-110号住居址実測図	277	第306区	H-116号住居址実測図	314
第306区	H-110号住居址カマド実測図	278	第306区	H-117号住居址実測図	314
第306区	H-110号住居址出土遺物	279	第306区	H-117号住居址カマド実測図	315
第307区	H-114号住居址実測図	280	第306区	H-117号住居址出土遺物	316
第308区	H-114号住居址カマド実測図	280	第308区	F-1号獨立柱建物址実測図	317
第308区	H-114号住居址出土遺物	281	第308区	F-2号獨立柱建物址実測図	318
第310区	H-116号住居址実測図	282	第310区	F-3号獨立柱建物址実測図	319
第310区	H-116号住居址カマド実測図	283	第310区	F-5号獨立柱建物址実測図	320
第310区	H-116号住居址出土遺物	283	第310区	F-6号獨立柱建物址実測図	321
第314区	H-116号住居址実測図	284	第314区	F-7号獨立柱建物址実測図	322
第314区	H-116号住居址カマド実測図	285	第316区	F-10号獨立柱建物址実測図	323
第316区	H-116号住居址出土遺物	285	第316区	F-11号獨立柱建物址実測図	324
第316区	H-116号住居址実測図	286	第316区	F-12号獨立柱建物址実測図	325
第317区	H-118号住居址カマド実測図	286	第316区	F-13号獨立柱建物址実測図	326
第318区	H-118号住居址出土遺物	287	第316区	F-14号獨立柱建物址実測図	327
第318区	H-118号住居址実測図	288	第316区	F-15号獨立柱建物址実測図	328
第318区	H-118号住居址カマド実測図	289	第316区	F-16号獨立柱建物址出土遺物	328
第320区	H-118号住居址出土遺物	289	第316区	F-16号獨立柱建物址実測図	329
第320区	H-118号住居址実測図	290	第316区	F-17号獨立柱建物址実測図	330
第320区	H-118号住居址出土遺物	292	第316区	F-17号獨立柱建物址出土遺物	330
第324区	H-118号住居址実測図	294	第316区	F-18号獨立柱建物址出土遺物	331
第326区	H-118号住居址出土遺物	294	第316区	F-18号獨立柱建物址実測図	332
第326区	H-118号住居址実測図	295	第316区	F-19号獨立柱建物址出土遺物	332
第327区	H-118号住居址実測図	296	第316区	F-19号獨立柱建物址実測図	333
第328区	H-118号住居址カマド実測図	297	第316区	F-20号獨立柱建物址実測図	333
第328区	H-118号住居址出土遺物	297	第316区	F-21号獨立柱建物址実測図	334
第328区	H-118号住居址カマド実測図	298	第316区	F-22号獨立柱建物址実測図	335
第330区	H-111号住居址実測図	299	第316区	F-23号獨立柱建物址実測図	336
第330区	H-111号住居址出土遺物	300	第316区	F-24号獨立柱建物址実測図	337
第330区	H-111号住居址出土遺物	301	第316区	F-25号獨立柱建物址実測図	338
第334区	H-112号住居址実測図	303	第316区	F-26号獨立柱建物址実測図	339
第336区	H-112号住居址出土遺物	304	第316区	F-27号獨立柱建物址実測図	340
第336区	H-112号住居址実測図	306	第316区	F-28号獨立柱建物址実測図	341
第337区	H-113号住居址カマド実測図	306	第316区	F-29号獨立柱建物址実測図	342
第338区	H-113号住居址出土遺物	307	第316区	F-30号獨立柱建物址実測図	343
第338区	H-113号住居址出土遺物	309	第316区	F-31号獨立柱建物址実測図	344
第340区	H-114号住居址実測図	310	第316区	F-32号獨立柱建物址実測図	345
第340区	H-114号住居址出土遺物	311	第316区	F-33号獨立柱建物址実測図	346

第30回	F-34号獨立柱建物址実測図	347	第40回	F-70号獨立柱建物址実測図	382
第31回	F-35号獨立柱建物址実測図	348	第42回	F-71号獨立柱建物址実測図	383
第36回	F-36号獨立柱建物址出土遺物	348	第43回	F-72号獨立柱建物址実測図	384
第36回	F-36号獨立柱建物址実測図	349	第47回	F-73号獨立柱建物址実測図	385
第37回	F-37号獨立柱建物址実測図	350	第48回	F-74号獨立柱建物址実測図	385
第38回	F-38号獨立柱建物址実測図	351	第49回	F-75号獨立柱建物址実測図	386
第39回	F-39号獨立柱建物址実測図	352	第50回	F-76号獨立柱建物址実測図	387
第39回	F-40号獨立柱建物址実測図	353	第51回	F-77号獨立柱建物址実測図	387
第39回	F-41号獨立柱建物址実測図	354	第52回	F-78号獨立柱建物址実測図	388
第39回	F-42号獨立柱建物址実測図	355	第53回	F-79号獨立柱建物址実測図	388
第39回	F-43号獨立柱建物址実測図	356	第54回	F-80号獨立柱建物址実測図	389
第39回	F-44号獨立柱建物址実測図	357	第55回	D-1号土溝実測図	389
第39回	F-45号獨立柱建物址実測図	358	第56回	D-4号土溝実測図	389
第39回	F-46号獨立柱建物址実測図	359	第57回	D-6, D-5号土溝実測図	389
第39回	F-47号獨立柱建物址実測図	360	第58回	D-30, D-31, D-32号土溝実測図	389
第39回	F-48号獨立柱建物址実測図	361	第59回	D-23・20, D-24, D-26・25, D-22・21号土溝実測図	389
第39回	F-48号獨立柱建物址実測図	362	第60回	D-10, D-11, D-12, D-13号土溝実測図	389
第40回	F-49号獨立柱建物址実測図	363	第61回	D-15・14, D-16号土溝 D-52号土溝実測図	389
第40回	F-49号獨立柱建物址出土遺物	363	第62回	D-15・14, D-16号土溝 D-52号土溝実測図	389
第40回	F-50号獨立柱建物址実測図	364	第63回	土溝出土遺物	389
第40回	F-51号獨立柱建物址実測図	365	第64回	M-1号溝状遺構実測図	389
第40回	F-52号獨立柱建物址実測図	366	第65回	表面採集遺物	389
第40回	F-53号獨立柱建物址出土遺物	366	第66回	第I期土器分類図	389
第40回	F-53号獨立柱建物址実測図	367	第67回	第II期土器分類図	389
第40回	F-54号獨立柱建物址実測図	368	第68回	第III期土器分類図	389
第40回	F-55号獨立柱建物址実測図	369	第69回	須恵器坏形態A・B・Cの法量分化	389
第40回	F-56号獨立柱建物址実測図	370	第70回	須恵器坏分類図	389
第40回	F-57号獨立柱建物址実測図	371	第71回	須恵器高台付坏の形態	389
第40回	F-58号獨立柱建物址実測図	371	第72回	須恵器高台付坏形態A・B・Cの法量分化	389
第40回	F-59号獨立柱建物址実測図	372	第73回	須恵器蓋分類図	389
第40回	F-60号獨立柱建物址実測図	373	第74回	円面硯	389
第40回	F-61号獨立柱建物址実測図	374	第75回	須恵器その他の器種	389
第40回	F-62号獨立柱建物址実測図	375	第76回	土師器坏分類図	389
第40回	F-63号獨立柱建物址実測図	376	第77回	土師器長胴甕分類図	389
第40回	F-64号獨立柱建物址実測図	377	第78回	土師器長胴甕甕形変遷模式図	389
第40回	F-65号獨立柱建物址実測図	377	第79回	小形甕分類図	389
第40回	F-66号獨立柱建物址実測図	378	第80回	土師器坑	389
第40回	F-67号獨立柱建物址実測図	379	第81回	土師器その他の器種	389
第40回	F-68号獨立柱建物址実測図	380	第82回	畿内系陶文を有する土師	389
第40回	F-69号獨立柱建物址実測図	381	第83回	奈良・平安時代の紡錘車	389
第40回	F-70号獨立柱建物址出土遺物	381			

第46回	紡錘車最大径と重量のグラフ	40
第46回	奈良・平安時代の鉄器	41
第46回	竪穴住居址における主柱穴のあり方	43
第46回	各期毎の竪穴住居址形態別面積分布	44
第46回	奈良・平安時代時期別住居形態構成比	45
第46回	竪穴住居址の上屋構造の推定	46
第46回	奈良・平安時代時期別遺物分布図	46
第46回	奈良・平安時代竪穴住居址における機能空間の想定	47
第47回	竪立柱建物址の分類	47
第47回	竪立柱建物址形態別面積分布	48
第47回	一連聖絵にみる竪立柱建物址 (佐久平野市・歡喜光寺本)	47
第47回	墨書土器「倉」	48
第47回	第I期の集落	48
第47回	第II期の集落	48
第47回	第III期の集落	48

第47回	第IV期・第I区集落	48
第47回	第IV期・第II・III区集落	48
第47回	第V期・第I区集落	48
第47回	第V期・第II区集落	48
第47回	第VI期・第I区集落	48
第47回	第VI期・第II区集落	48
第47回	第VII期・第I区集落	48
第47回	第VII期・第II区集落	48
第47回	第VIII期の集落	48
第47回	前田遺跡の集落と低地(観点)	48
付 編		
第1回	前田遺跡第I期集落と初期須恵器の分布	
第2回	前田遺跡出土初期須恵器	
第3回	佐久市舞台場遺跡初期須恵器	
第1回	前田遺跡蛍光線分析対象遺物	
第2回	前田遺跡出土土器の各因子の分布と他遺跡との対応	

付 表 目 次

第1表	前田遺跡と周辺の遺跡地名表	11
第2表	H-1号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	16
第3表	H-2号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	18
第4表	H-3号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	20
第5表	H-4号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	22
第6表	H-5号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	24
第7表	H-6号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	26
第8表	H-6号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	27
第9表	H-7号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	29
第10表	H-8号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	31
第11表	H-9号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	33
第12表	H-10号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	34
第13表	H-11号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	37
第14表	H-11号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	37
第15表	H-13号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	40
第16表	H-14号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	42
第17表	H-14号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	42
第18表	H-15号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	43
第19表	H-16号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	46
第20表	H-16号住居址出土遺物一覧表〈金属器・石器〉	46

第21表	H-17号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	48
第22表	H-18号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	49
第23表	H-19号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	53
第24表	H-19号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	53
第25表	H-20号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	56
第26表	H-20号住居址出土遺物一覧表〈金属器・石器〉	57
第27表	H-21号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	60
第28表	H-21号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	60
第29表	H-22号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	62
第30表	H-23号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	66
第31表	H-23号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	66
第32表	H-24号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	69
第33表	H-24号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	70
第34表	H-25号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	72
第35表	H-25号住居址出土遺物一覧表〈金属器〉	72
第36表	H-26号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	75
第37表	H-26号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	76
第38表	H-27号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	78
第39表	H-28号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	80
第40表	H-28号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	81

第113表	H-87号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	247
第114表	H-88号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	248
第115表	H-89号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	252
第116表	H-91号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	255
第117表	H-92号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	256
第118表	H-92号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	256
第119表	H-93号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	258
第120表	H-94号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	260
第121表	H-94号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	260
第122表	H-97号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	265
第123表	H-98号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	268
第124表	H-99号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	271
第125表	H-100号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	272
第126表	H-100号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	274
第127表	H-100号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	276
第128表	H-100号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	278
第129表	H-100号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	281
第130表	H-100号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	281
第131表	H-100号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	284
第132表	H-100号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	285
第133表	H-100号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	288
第134表	H-100号住居址出土遺物一覽表〈金屬器・石器〉	292
第135表	H-100号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	293
第136表	H-100号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	295
第137表	H-100号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	296
第138表	H-100号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	298
第139表	H-100号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	301
第140表	H-100号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	301

第141表	H-113号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	303
第142表	H-114号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	311
第143表	H-115号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	313
第144表	H-117号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	316
第145表	F-16号獨立柱建物址出土遺物一覽表〈土器〉	329
第146表	F-17号獨立柱建物址出土遺物一覽表〈土器〉	331
第147表	F-18号獨立柱建物址出土遺物一覽表〈土器〉	331
第148表	F-36号獨立柱建物址出土遺物一覽表〈土器〉	346
第149表	F-48号獨立柱建物址出土遺物一覽表〈土器〉	352
第150表	F-49号獨立柱建物址出土遺物一覽表〈土器〉	353
第151表	F-53号獨立柱建物址出土遺物一覽表〈土器〉	357
第152表	獨立柱建物址ピット一覽表	353-358
第153表	土層出土遺物一覽表〈土器〉	426
第154表	表面採集遺物一覽表〈土器〉	428
第155表	表面採集遺物一覽表〈土製品・石器〉	428
第156表	須恵器坯底部調整手法概念表	433
第157表	須恵器坯底部調整数一覽表	434
第158表	須恵器坯底部調整事例一覽表(住居址毎)	435
第159表	須恵器高台付坯底部調整数一覽表	433
第160表	時期別出土器種・形態数一覽表	444
第161表	遺跡毎における鉄製農具出土数	451
第162表	第I期整穴住居址一覽表	454
第163表	第II期整穴住居址一覽表	455
第164表	第III期整穴住居址一覽表	455
第165表	第IV期整穴住居址一覽表	456-457
第166表	第V期整穴住居址一覽表	458-459
第167表	第VI期整穴住居址一覽表	459-460
第168表	第VII期整穴住居址一覽表	461-462
第169表	獨立柱建物址一覽表(時期・形態別)	461

付 編

第1表 前田遺跡出土土器の分析値

図 版 目 次

図版 一	前田遺跡付近の航空写真
図版 二	第I区航空写真
図版 三	第II・III区航空写真
図版 四	第V区航空写真
図版 五	第IV区航空写真・重機による表土剥ぎ
図版 六	H-1号住居址

図版 七	H-2号住居址・H-3号住居址
図版 八	H-3号住居址・H-4号住居址
図版 九	H-4号住居址・H-5号住居址
図版 十	H-5号住居址・H-6号住居址
図版 十一	H-6号住居址・作樂風景
図版 十二	H-7号住居址

图版 十三	H-8号住居址	图版 五十三	H-51号住居址
图版 十四	H-9号住居址	图版 五十四	H-52号住居址
图版 十五	H-10号住居址, H-11号住居址	图版 五十五	H-53号住居址
图版 十六	H-11号住居址, H-12号住居址	图版 五十六	H-54号住居址
图版 十七	H-12号住居址, H-13号住居址	图版 五十七	H-55号住居址
图版 十八	H-13号住居址, H-14号住居址	图版 五十八	H-52·53·54·55号住居址, H-56号住居址
图版 十九	H-14号住居址, H-15号住居址	图版 五十九	H-56号住居址, H-57号住居址
图版 二十	H-15号住居址, H-16号住居址	图版 六十	H-57号住居址, H-58号住居址
图版 二十一	H-16号住居址, H-17号住居址	图版 六十一	H-58号住居址, H-12号住居址
图版 二十二	H-18号住居址	图版 六十二	H-59号住居址, H-60号住居址
图版 二十三	H-19号住居址	图版 六十三	H-61号住居址
图版 二十四	H-20号住居址	图版 六十四	H-62号住居址, H-63号住居址
图版 二十五	H-21号住居址	图版 六十五	H-63号住居址, H-64号住居址
图版 二十六	H-21号住居址, H-22号住居址, 作業風景	图版 六十六	H-64号住居址, H-66号住居址
图版 二十七	H-22号住居址, H-23号住居址	图版 六十七	H-66号住居址, 作業風景
图版 二十八	H-23号住居址, H-24号住居址	图版 六十八	H-67号住居址
图版 二十九	H-24号住居址, H-25号住居址	图版 六十九	H-67号住居址, H-68号住居址
图版 三十	H-25号住居址, H-26号住居址	图版 七十	H-69号住居址
图版 三十一	H-26号住居址, H-27号住居址	图版 七十一	H-70号住居址
图版 三十二	H-28号住居址	图版 七十二	H-71号住居址, H-72, 90号住居址
图版 三十三	H-29号住居址, H-30号住居址	图版 七十三	H-72号住居址, H-73, 74号住居址
图版 三十四	H-30号住居址, H-32号住居址	图版 七十四	H-75号住居址
图版 三十五	H-32号住居址, H-33号住居址	图版 七十五	H-76号住居址
图版 三十六	H-33号住居址	图版 七十六	H-77号住居址, H-78号住居址
图版 三十七	H-34号住居址, H-35号住居址	图版 七十七	H-78号住居址, H-79号住居址
图版 三十八	H-36号住居址	图版 七十八	H-79号住居址, H-80号住居址
图版 三十九	H-37号住居址	图版 七十九	H-80号住居址, H-81号住居址
图版 四十	H-38号住居址	图版 八十	H-81号住居址, H-82号住居址
图版 四十一	H-39号住居址	图版 八十一	H-82号住居址, H-83号住居址
图版 四十二	H-40号住居址	图版 八十二	H-83号住居址, H-84号住居址
图版 四十三	H-41号住居址	图版 八十三	H-84号住居址
图版 四十四	H-42号住居址	图版 八十四	H-85号住居址, H-86号住居址
图版 四十五	H-43号住居址	图版 八十五	H-86号住居址, H-87号住居址
图版 四十六	H-44号住居址	图版 八十六	H-87号住居址, H-88号住居址
图版 四十七	H-45号住居址	图版 八十七	H-88号住居址, H-89号住居址
图版 四十八	H-46号住居址	图版 八十八	H-89号住居址, H-91号住居址
图版 四十九	H-47号住居址	图版 八十九	H-91号住居址, H-92号住居址
图版 五十	H-48号住居址	图版 九十	H-93号住居址, H-94号住居址
图版 五十一	H-48号住居址, H-49号住居址	图版 九十一	H-95号住居址, H-96号住居址
图版 五十二	H-49号住居址, H-50号住居址	图版 九十二	H-97号住居址

- 图版 九十三 H-98号住居址
- 图版 九十四 H-99号住居址
- 图版 九十五 H-100号住居址, H-101号住居址
- 图版 九十六 H-102号住居址, H-103号住居址
- 图版 九十七 H-104号住居址, H-105号住居址
- 图版 九十八 H-106号住居址, H-107号住居址
- 图版 九十九 H-108号住居址, H-109号住居址
- 图版 百 H-110号住居址, H-111号住居址
- 图版 百一 H-112号住居址, H-113号住居址
- 图版 百二 H-114号住居址, H-115号住居址
- 图版 百三 H-116号住居址, H-117号住居址
- 图版 百四 H-118号住居址
- 图版 百五 H-119号住居址
- 图版 百六 H-120号住居址, H-121号住居址
- 图版 百七 H-122号住居址, H-123号住居址
- 图版 百八 H-124号住居址
- 图版 百九 H-125号住居址, H-127号住居址
- 图版 百十 H-128号住居址, 作窠風景
- 图版 百十一 F-1号獨立柱建物址, F-2号獨立柱建物址
- 图版 百十二 F-3号獨立柱建物址, F-4号獨立柱建物址
- 图版 百十三 F-5号獨立柱建物址, F-9号獨立柱建物址
- 图版 百十四 F-10号獨立柱建物址, F-11号獨立柱建物址
- 图版 百十五 F-12号獨立柱建物址, F-13号獨立柱建物址
- 图版 百十六 F-14号獨立柱建物址, F-15号獨立柱建物址
- 图版 百十七 F-16号獨立柱建物址, F-17号獨立柱建物址
- 图版 百十八 F-18号獨立柱建物址, F-19号獨立柱建物址
- 图版 百十九 F-20号獨立柱建物址, F-21号獨立柱建物址
- 图版 百二十 F-22号獨立柱建物址, F-25号獨立柱建物址
- 图版 百二十一 F-27号獨立柱建物址, F-30, 31, 33号獨立柱建物址
- 图版 百二十二 F-32, 36号獨立柱建物址, F-39号獨立柱建物址
- 图版 百二十三 F-51号獨立柱建物址, F-54号獨立柱建物址
- 图版 百二十四 F-55号獨立柱建物址, F-58号獨立柱建物址
- 图版 百二十五 F-64号獨立柱建物址, F-65号獨立柱建物址
- 图版 百二十六 F-66号獨立柱建物址, F-68号獨立柱建物址
- 图版 百二十七 F-69号獨立柱建物址, F-70号獨立柱建物址
- 图版 百二十八 F-71号獨立柱建物址, F-72号獨立柱建物址
- 图版 百二十九 F-73号獨立柱建物址, F-74号獨立柱建物址
- 图版 百三十 F-75号獨立柱建物址, F-76号獨立柱建物址
- 图版 百三十一 F-77号獨立柱建物址, F-78号獨立柱建物址
- 图版 百三十二 F-79号獨立柱建物址, F-80号獨立柱建物址
- 图版 百三十三 D-1号土塊, D-4号土塊
- 图版 百三十四 D-6号土塊, D-10土塊
- 图版 百三十五 D-11号土塊, D-12号土塊
- 图版 百三十六 D-13号土塊, D-14, 15号土塊
- 图版 百三十七 D-16号土塊, D-52号土塊
- 图版 百三十八 D-5号土塊, M-1号溝坎遺構
- 图版 百三十九 H-1, 2, 3, 4号住居址出土遺物
- 图版 百四十 H-5, 6号住居址出土遺物
- 图版 百四十一 H-7, 8, 9, 10, 11, 13号住居址出土遺物
- 图版 百四十二 H-14, 16, 17, 19, 20号住居址出土遺物
- 图版 百四十三 H-20, 21号住居址出土遺物
- 图版 百四十四 H-22, 23, 24号住居址出土遺物
- 图版 百四十五 H-24, 25, 26号住居址出土遺物
- 图版 百四十六 H-27, 28, 29, 30, 31, 32号住居址出土遺物
- 图版 百四十七 H-33, 36, 37号住居址出土遺物
- 图版 百四十八 H-37, 38, 40, 41号住居址出土遺物
- 图版 百四十九 H-41, 42, 44号住居址出土遺物

図版 百五十	H-45・46・47号住居址出土遺物	物
図版 百五十一	H-48号住居址出土遺物	図版 百六十九 H-97・98号住居址出土遺物
図版 百五十二	H-48・49・51・52・53号住居址出土遺物	図版 百七十 H-99・100号住居址出土遺物
図版 百五十三	H-53・54号住居址出土遺物	図版 百七十一 H-101・102・106・107号住居址出土遺物
図版 百五十四	H-54・55・57・58・59号住居址出土遺物	図版 百七十二 H-103・111・112・113号住居址出土遺物
図版 百五十五	H-60号住居址出土遺物	図版 百七十三 H-113・114・115号住居址出土遺物
図版 百五十六	H-61号住居址出土遺物	図版 百七十四 H-117号住居址・F-48・49号獨立建築物 址D-1・52号土坑・表採遺物
図版 百五十七	H-61・62号住居址出土遺物	図版 百七十五 石鏡・石製品・土製品・石器
図版 百五十八	H-63・64号住居址出土遺物	図版 百七十六 石器・その他
図版 百五十九	H-65・66号住居址出土遺物	図版 百七十七 灰石
図版 百六十	H-67・68・69・70号住居址出土遺物	図版 百七十八 石鏡・磨石
図版 百六十一	H-72・73・74号住居址出土遺物	図版 百七十九 砥石・台石
図版 百六十二	H-75号住居址出土遺物	図版 百八十 台石・石鉢・石臼
図版 百六十三	H-75・76・77号住居址出土遺物	図版 百八十一 鉄線・遺物整理作業
図版 百六十四	H-77・79・80号住居址出土遺物	図版 百八十二 調整各種
図版 百六十五	H-80・81・83・84号住居址出土遺物	図版 百八十三 *
図版 百六十六	H-84号住居址出土遺物	図版 百八十四 *
図版 百六十七	H-85・86・87号住居址出土遺物	図版 百八十五 材の顕微鏡写真(H-32・N(水柱))
図版 百六十八	H-87・88・89・92・93号住居址出土遺物	

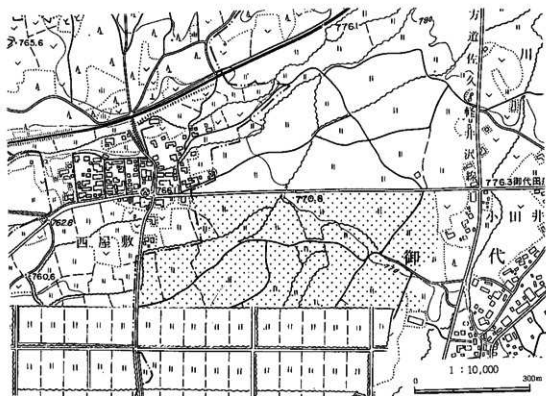
I 発掘調査の概要

1 調査に至る動機

農業の近代化に即応するため、小田井・御影地区において、長野県営園場整備事業が実施される運びとなった。しかし一方、この地区において埋蔵文化財の包蔵も確認され、その破壊が余儀なくされた。鎗師屋遺跡群がそれである。その保護に関して、事業主体である東信土地改良事務所と長野県教育委員会、当教育委員会の三者によって協議が重ねられ、当教育委員会が主体となって発掘調査を実施し記録保存を行なうことで話がまとまった。

これを受けて、昭和59年度には鎗師屋遺跡群野火付遺跡の発掘調査が実施され、多大なる成果をおさめた(御代田町教育委員会 1985)。翌昭和60年度には、野火付遺跡の北に隣接する本前田遺跡が保護の対象となった。

前田遺跡の保護にあたっては、野火付遺跡の調査成果に鑑み、その重要性を当教育委員会は主



第1図 前田遺跡発掘調査対象区(網点)

I 発掘調査の概要

張し続けてきた。殊に予算的な折り合いをつけるべく幾度か関連当局の話し合いが持たれたが、結局二年度継続事業として分割することで双方が合意し、予算の膨大さが弛緩され、期間的な余裕をもたせることができた。

昭和60年の年度当初には、東信土地改良事務所と当教育委員会との委託契約が締結され、同年は発掘調査と遺跡整理が、翌昭和61年には遺物整理が実施され、本書刊行の運びとなった。

2 発掘調査の概要

- 1 遺跡名 鋳師屋遺跡群 前田遺跡
- 2 所在地 長野県北佐久郡御代田町大字御代田 字前田原・原田・竹の花
- 3 発掘期間 昭和60年4月15日 ～ 昭和60年9月30日 (昭和60年度)
整理期間 昭和60年10月14日 ～ 昭和61年3月31日 (昭和60年度)
昭和61年4月4日 ～ 昭和62年3月31日 (昭和61年度)
- 4 発掘理由 昭和60年度小田井・御影地区県営園場整理事業に伴い、鋳師屋遺跡群前田遺跡の破壊が予想されるため、緊急に発掘調査を実施し記録保存を図る。
- 5 発掘方針 広大な調査対象区について、集落全体の検出に努める。
- 6 費用負担 調査費用総額のうち、72.5%を原因者である農政部局（東信土地改良事務所・北佐久地方事務所）が負担し、残りの27.5%（農家負担分）は文化財補助事業として文化財保護部局が負担した（国庫50%、県費15%、町費35%）。
- 7 事務局 教育次長 市川誠，社会・同和教育係長 萩原茂，社会・同和教育係 内堀篤志、同係 堤 隆
- 8 調査団
顧問 古越寅男（前御代田町長）、古越顕助（現御代田町長）、原田正夫（教育長）
参与 ㈱ 大井豊、桜井為吉、田村泉、内山俊雄、柳沢恒三郎、小林五郎、山本直夫、堀龍源、大井源寿（御代田町文化財審議委員）
団長 由井茂也（佐久考古学会会長）
副団長 尾台卓一（御代田町文化財審議委員長）
担当者 堤 隆（御代田町教育委員会）
調査員 白倉盛男、井上行雄、大井今朝太（佐久考古学会）、鳥居亮、綿貫俊一
協力者 小林美智明、太田和子、伴野有希子、今井みさ子、尾台春子、古越敏彦、田辺光三、重田文枝、柳沢トメヨ、宮沢節子、中島靖幸、小宮山徳男、諸星博之、須江茂和、

早川聖、木内政彦、浅沼陽二、荻原茂之、中山春彦、中山たのし、小井土みつひ、武井豊子、角田すい、並木ことみ、遠藤しずか、桜井すず子、荻原ふさ、岡田せい、内堀さち子、内堀あつ子、竹内安子、高山玲子、内堀なお、六川泉、尾台久美子(一般)、宮沢陽子、篠原智恵子、柳沢晃、土屋正巳、山崎英寿、鈴木秀勝、荻原夏夫、大井さゆり、市村さよ子、山田正文、中里牧夫(高校生)、関邦吉、五加春三、仲沢芳夫、角田修、岡村政信、吉沢重光、坪川敦子(国立小諸療養所)、新田浩三(千葉県文化財センター)

3 発掘区の設定と遺構の検出

圃場整備の施工面積は、およそ25万平方メートルにもおよぶ広大なものであった。この広大な工区を把握するため、国家座標第Ⅷ系を用い、25m四方のグリッドを設定した(第2図)。したがってグリッドの一方の軸(X軸)は、真北を指すようになっている。

グリッドの名称は、鋳師屋遺跡群全体を統一してカバーできるように冠したので、本遺跡におけるグリッドの呼称は、中途から始まることとなる。

調査は集落全体を検出するという発掘方針にのっとり、重機による試掘トレンチにより遺跡の範囲と地形を見きわめるところから始めた。検出された遺構のまとまりについては、自然地形によって画されることを目安とし、Ⅰ区からⅤ区の5つの地区に区分した。

なお、Ⅴ区の大部分は、佐久市の行政区域(アミ線以西)となっており、本調査と併行して、佐久市教育委員会によって調査がなされている。この地区は、現在では行政管轄が異なるとはいえ、当時してみれば同一の集落であり、本来なら双方が一体的に報告されなければならないものであろう。佐久市分の前田遺跡の調査成果については、本報告と併行して明らかにされる予定であるので、その成果の公表をまって、改めて両者を総合的に論ずることになろう。

さて、調査は、第Ⅰ区、第Ⅱ区、第Ⅲ区、第Ⅳ区、第Ⅴ区の順で進行した。各区の面積と検出された遺構は以下のとおりである。

第Ⅰ区	面積11,250㎡	竪穴住居址57軒	掘立柱建物址63棟	土壇29基	
第Ⅱ区	面積7,250㎡	竪穴住居址40軒	掘立柱建物址9棟	土壇19基	
第Ⅲ区	面積1,125㎡	竪穴住居址5軒	掘立柱建物址2棟		
第Ⅳ区	面積1,500㎡	竪穴住居址6軒	掘立柱建物址2棟		
第Ⅴ区	面積2,875㎡	竪穴住居址9軒	掘立柱建物址11棟	土壇4基	溝1基
全区総数	面積24,000㎡	竪穴住居址117軒	掘立柱建物址87棟	土壇52基	溝1基

I 発掘調査の概要

佐久市分 面積6,250㎡ 竪穴住居址28軒 掘立柱建物址32棟 土境ナシ 溝3基
井戸址2基 特殊遺構1基

なお、遺構の名称については、全区について通し番号とし、なるべく各地区毎に番号がとぶことのないよう心掛けたが、一部には数字のとぶものもある。また、御代田町分と佐久市分については、各々が名称を冠し遺構名が重複するので注意されたい。

4 発掘調査経過

昭和60年4月15日 発掘調査準備開始。

4月24日 重機を導入しての遺跡範囲確認開始。

4月25日 テント設営、器材搬入。

4月30日 重機による第Ⅰ区拡張開始。併行して第Ⅰ区の調査を行う。

6月 第Ⅰ区において住居址57軒を確認。

6月 重機による第Ⅱ区拡張開始。

7月17日 第Ⅱ区において調査開始。住居址40軒を確認。

7月 重機による第Ⅲ区拡張開始。

8月 第Ⅰ区～第Ⅴ区を総計し、住居址117軒、掘立柱建物址87棟を確認。

9月 第Ⅳ区・第Ⅴ区調査継続。

9月30日 発掘調査終了。

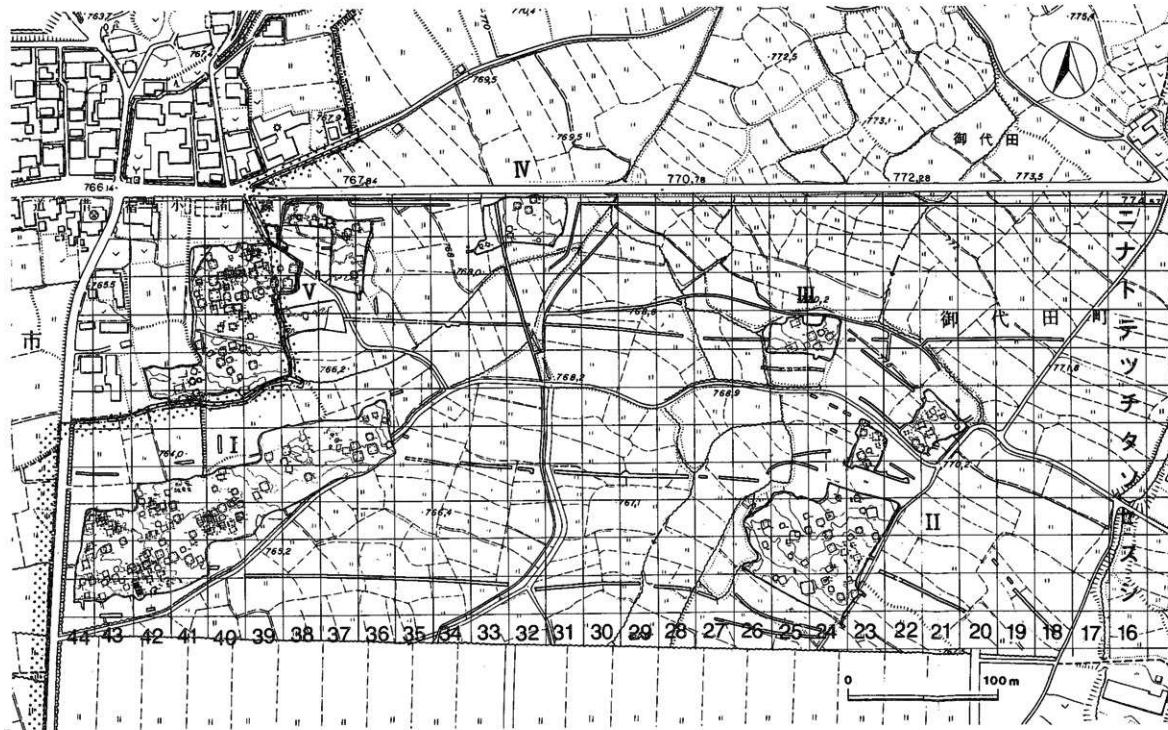
10月14日 遺物整理開始。

昭和61年3月31日 昭和60年度 遺物整理終了。

4月4日 昭和61年度 遺物整理開始。

昭和62年1月 発掘調査報告書入稿。

3月31日 昭和61年度 遺物整理完了。発掘調査報告書刊行。



第2図 発掘区の設定と区域図

II 遺跡の環境

1 前田の風土

鎗師屋遺跡群前田遺跡は、浅間山南麓の緩傾斜面の最末端部に位置し、標高765~770mを測る。前田遺跡の背後の聳える浅間山は、現在も活発に活動を続けている三重式コニーデ火山で、標高2,560mを測る。御代田町の地形・地質の基盤は、この浅間山の影響を大きく受けて形成されたものである(第3図)。その火口から同心円状に、標高2,000m付近までは釜山噴出物が、1,200m付近までは黒斑溶岩が覆っている。

標高1,200mを境として、それ以下にあっては、火山灰砂軽石流と追分砂流が広範囲に及んでいる。その軽石流域域には、永年にわたる浸蝕によって、佐久地方に特有な「田切地形」が脈状に形成されている。前田遺跡一帯は、この軽石流の堆積地帯にあたる。

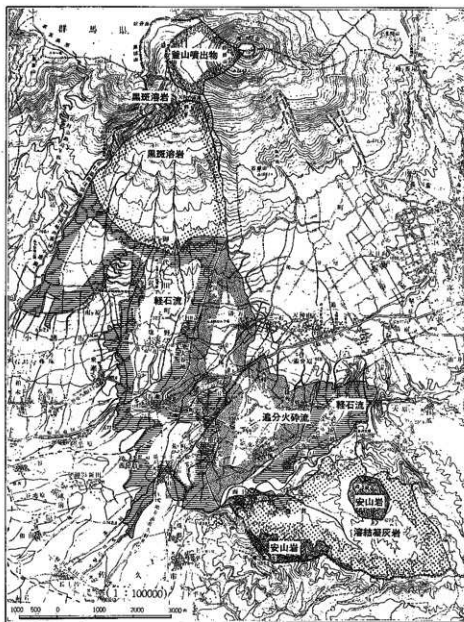
前田遺跡の東側には、浅間の中腹標高1,500mに端を発する濁川が南流しており、また、その北側には繰矢川が西流している。

翻って、前田遺跡の東南には、標高1,155mの平尾富士を望むことができる。平尾富士は、安山岩の岩体から構成されるが、その安山岩は「安原石」とも称され、古くは古墳の石室に、近年においても墓石・石碑等に活用されている。

さて、前田遺跡の所在する御代田町は、東西9.5km、南北13.8km、周囲58.5km、面積61.54km²を測るが、その面積の約 $\frac{1}{2}$ が山林原野で占められている。年平均気温は8度前後で、年間降雨量は1,200mm前後、気候的には冷涼乾燥地帯に属することになる。

町では、その冷涼乾燥の風土を生かした、高冷地農業や精密機械工業が発達している。殊に、全戸数の4割強は農業に従事しているが、その中でも高原野菜が主要農産物となっている。反面、冷涼な気候は稲作には適しておらず、稲作の占める割合は大きいものではない。ちなみに、昭和57年の農産物粗生産額順位は、1位がレタス、2位がキャベツ、3位がはくさい、4位が生乳、5位が米となっている。米の生産額が下位であることが窺えよう。

現在、御代田町の人口は1万人強を数えるが、徐々に人口が増加しつつある。



第3図 御代田町地形地質図 (1:100,000)

2 前田遺跡の歴史的環境

前田遺跡をとりまく歴史的環境のなかで、まず、当地への人類の第一歩の足跡として印された遺跡に、押型文土器を伴出した塩野地籍の滝沢遺跡があげられる(御代田町教育委員会 1985)。滝沢遺跡の押型文土器は3片のみであるが、楕円の押型がなされた縄文時代早期の遺物である。

縄文時代中期になると、浅間南麓の標高900m内外にみられる湧水地帯にそって、集落が数多く形成されるようになる。昭和60年に発掘調査を実施し、縄文時代中期後半の遺物包含層を確認するに至った大沼遺跡(御代田町教育委員会 1985)を筆頭に、西荒神遺跡・東荒神遺跡・西城西遺跡・西城東遺跡等が散見される。

大沼遺跡の東方には、広畑遺跡・西駒込遺跡・東二ツ石遺跡も存在している。この3遺跡は、いわゆる「広域農道」の予定ルート内にもあっており、近く発掘調査が実施される予定である。

一方、前田遺跡の東南、八風山北麓の湯川沿いにも縄文時代中期から後期にかけての遺跡が点々と残されている。軽井沢町の茂沢南石堂遺跡もそのうちのひとつである。南石堂より湯川をやや下ると御代田町豊昇地区に入る。この豊昇地区には、宮平遺跡が存在している。

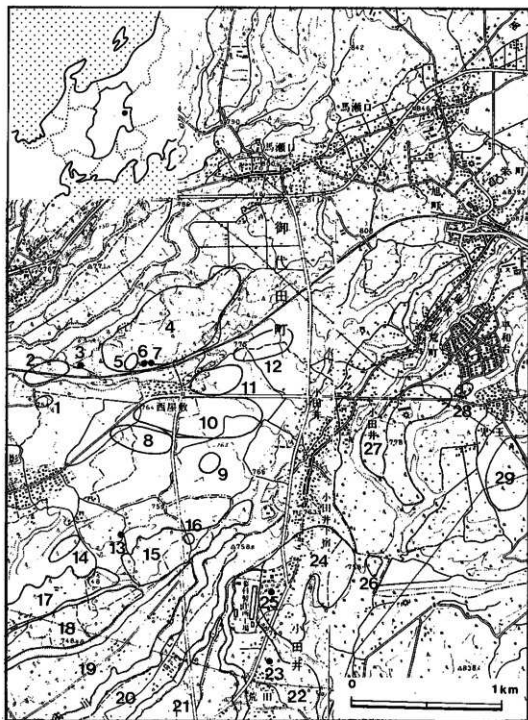
宮平遺跡は、古くから出土遺跡の豊富さで人々の関心をひいていた。昭和5年には、日本における旧石器文化の存在をいち早く説いていたことでも知られるN・G・マンローも、この遺跡を訪れている。昭和56年には、農道舗装事業に際し、宮平遺跡の発掘調査がなされた(御代田町教育委員会 1985)。僅か3mの道幅部分が130mにわたって調査されたにすぎないが、そこからは縄文時代中期後半から後期にかけての竪穴住居址27軒(うち敷石住居址8軒)・土壇50基・石組み棺4基が検出された。殊にその伴出遺物の中でも、縄文時代中期後半の加曾利E式に比定される土器は豊富で、当該期の詳細な土器変遷を追ううえでの重要な資料となるものであろう。

この宮平遺跡よりさらに湯川を下ると、本遺跡の東方に位置することになる見玉地籍の池尻遺跡がある(第4図29)。池尻遺跡では、昭和53年に御代田町教育委員会が主体となって発掘調査がなされ、縄文時代後期の竪穴住居址一軒が検出されている。

さて、縄文時代にかわる弥生時代の遺跡は、現在のところでは前田遺跡の以北には確認されていない。初期水稻栽培にあっては御代田の冷涼な気候は大きな障害となったであろう。

続く古墳時代の中期になってようやく本地域に遺跡がみられるようになる。ここに報告する前田遺跡第1期の集落が、今のところ唯一の例ではあるが、他にも同時期の遺跡が残されている可能性も大である。水稻耕作の技術等が向上し、佐久平の中央部より冷涼な本地域へと耕地が拡大してきたのはこの頃だったのであろう。

古墳時代後期の集落としても、ここに報告する前田遺跡第III期の事例が今のところ唯一ではあ



第4図 前田遺跡と周辺の遺跡分布

第1表 前田遺跡と周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	歴史	中世	備考
1	宮ノ反遺跡	小諸市大字御影字宮ノ反				○	○		昭和59年度発掘調査
2	長野原遺跡	" 平原字大豆田					○		
3	長野原塚古墳	" 長野原				○			
4	下前田原遺跡群	佐久市大字小田井字前田原				○	○		
5	後原遺跡	" 字後原		○					昭和57年度発掘調査
6	後原1号墳	" "				○			昭和47年度発掘調査
7	後原2号墳	" "				○			"
8	鑄師屋遺跡	" 字鑄師屋					○		昭和59年度発掘調査
9	野火付遺跡	御代田町大字御代田字野火付					○	○	昭和59年度発掘調査
10	前田遺跡	" 字前田原				○	○	○	昭和60年度発掘調査
11	十二遺跡	御代田町大字御代田字下十二					○		昭和61年度発掘調査
12	根岸遺跡	" 字根岸					○		昭和62年度発掘調査予定
13	野火付古墳	小諸市大字御影字野火付				○			昭和56年度発掘調査
14	野火付遺跡	" "					○		
15	曾根城遺跡群	" 曾根城					○		
16	曾根城遺跡	" "					○		昭和57年度発掘調査
17	近津遺跡群	佐久市大字長土呂字北近津			○	○	○		
18	周防畑遺跡群	" 字周防畑	○	○	○	○	○		
19	芝宮遺跡群	" 字北上中原			○	○	○		
20	長土呂遺跡群	" 字長土呂			○	○	○	○	
21	栗毛坂遺跡群	" 大字小田井字笹沢			○	○	○		
22	跡坂遺跡群	" 字跡坂			○	○	○		
23	島原古墳	" 字下金井				○			
24	中金井遺跡群	" 字中金井			○	○	○		
25	皎月古墳	" 字皎月				○			昭和45年度発掘調査
26	唄坂遺跡	" 字唄坂		○	○	○	○		
27	小田井城跡	御代田町大字御代田字城の内						○	
28	児玉遺跡	" 字児玉			○		○		
29	池尻遺跡	" 字池尻			○				昭和53年度発掘調査

る。しかし一方で、前田遺跡の北隣りに同時期の後原1・2号墳（佐久市教育委員会 1972）が存在し（6・7）、南隣りには野火付古墳（小諸市教育委員会 1983）が存在（13）、やや離れてその北方には下原古墳群（御代田町教員委員会 1975）が、その南方には皎月古墳（25）も存在

しており、これらの古墳を残した人々の居住地もいずれかに求められなければならない。したがって、本遺跡の近隣のいずれかに古墳時代後期の集落が残されていたとみるのが妥当であろう。

奈良・平安時代において本地域は、信濃国佐久郡に含まれていることがわかるが、「和名抄」によれば佐久郡には、美理・大村・大井・餘戸・青沼・刑部・茂理・小沼の八郷がみえる。このうち本地域は小沼郷に属する地域ではなかったかと推察される。ちなみに、大井郷の範囲を知るうえで重要な「大井」と刻書された平安時代の坏が、本遺跡南方佐久市近津渋谷エ門遺跡より採集されている。

本遺跡の南に隣接し、昭和59年に発掘調査が実施された佐久市鋳師屋遺跡(8)(佐久市教育委員会 1985)、御代田町野火付遺跡(9)(御代田町教員委員会 1985)は、奈良・平安時代を中心とした遺跡である。

野火付遺跡においては、竪穴住居址7軒で構成される奈良時代前半の一集落、竪穴住居址8軒で構成される平安時代(9世紀前半)の一集落が検出された。特筆すべきは、平安時代の集落と共時的な関係にあると思われる埋葬馬5頭の検出である。

ところで、この時代には、「延喜式」にみる御牧である長倉牧や塩野牧が、本遺跡の北方に展開していたとされている。また、官道として整備された東山道は、御代田町のいずれかの地籍を通過していたものとみられるが、前田遺跡のある前田原地籍を通過したとする見解もある(一志 1957、菊池 1985)。その中では、清水駅(小諸市諸に所在想定)に続く長倉駅が、この地域に設施されたともされている。ちなみに長倉駅では、15頭の駅馬が置かれたという。

野火付遺跡の埋葬馬は、この長倉牧・塩野牧の牧場か、長倉駅の駅馬ではなかったかと考えられた(堤 1985・1986)。ここにおいて、これらの馬を埋葬した集団の性格をも推察せしめるのである。このことは、当然本遺跡の性格にも深く関わってくるものであろう。

いずれにしても、本地域の奈良・平安時代の歴史を再構成する上で、御牧や東山道の問題は避けては通れない。後の考察において、この問題について再び取り上げることとなる。

さて、中世においては、前田遺跡の南方に八条院領大井庄の直営田である佃が存在していた。野火付遺跡で検出された60数基にもおよぶ竪穴遺構は、この佃と関連するものかと考えられている。その遺構のいくつかからは、渡来銭や中国青白磁などの遺物も検出されている。

以上、縄文時代から中世までの考古学的事象を取り上げ、前田遺跡をとりまく歴史的環境についてふれてみた。

III 層序

前田遺跡の層序は、14頁に示したが、殊にローム層以上の黒色土堆積は地区毎によって差がみられるようである。

Aは全体的な基本層序で、Bは黒色土堆積の厚い第V区ニー39グリッド付近のローム層以上の層序である。

まず、Bについて述べる。

そのIa層は、水田耕作土の黒色土で、厚さ30cm前後を測った。

Ib層は鉄分をよく含んだ粘性のある水田の床土で、25cm程度を測る褐色土層である。

II層以下は耕作の影響の及ばないプライマリーな堆積である。

IIa層は厚さ27cm程度を測る若干のバミスを含む黒褐色土層であった。

IIb層は、径2～5mm程のバミスとスコリアをよく含む厚さ20cm程の黒色土層である。

IIc層は厚さ22cm程のバミス・スコリアを含む黒褐色土層であった。

III層は粘性のある黄色ローム層である。

上記のIIa～IIcの層序中においては、遺構の掘り込みを確認することができず、遺構を確認し得たのはローム層であるIII層の上面においてであった。

ところで、群馬県においては、A (AD1783)・B (AD1109)・C (4世紀前半)と呼ばれる浅間のバミスが、年代決定のための重要な鍵層としておさえられている。本地域においてもこれらの有効なバミスがみられないものかどうか、河西学氏にお願いして調査をいただいた。まず、本地域の層序中において肉眼ではこれらのバミスは認められないとのことであった。続いてIIa層からIIc層までの間を5cmメッシュに15箇所サンプリングし、バミスの抽出を試みたが、残念ながらこれらを検出することができないということであった。本地域には、おおよそ偏西風の関係でこれらのバミスは降下しなかったものと考えられる。

さて、基本層序AのIV層以下について、白倉氏の観察(白倉 1985)をもとにふれてみよう。

IV層は、明赤紫色を呈する追分火山灰流層で、軽石を多く含んでいる。本遺跡の奈良・平安時代のカマドに多用されている軽石は、この追分火山灰流層中より抜かれたものであろう。

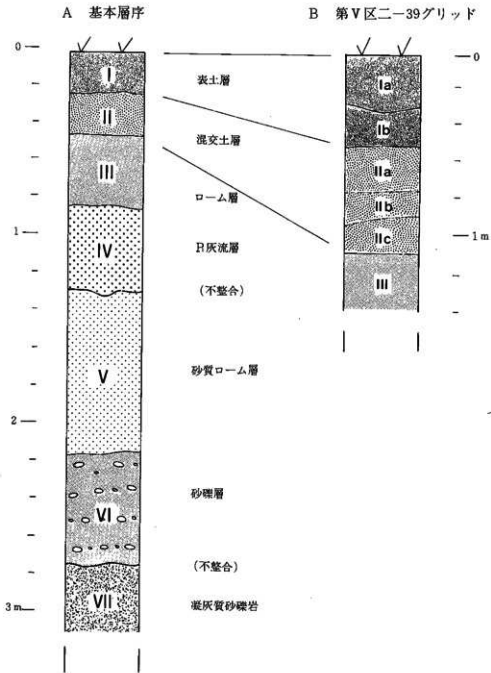
V層は、IV層とは不整合の、粘性の強い黄褐色砂質ローム層である。

VI層は、黄赤褐色を呈する砂礫層で、径5cm前後の軽石を含んでいる。

VI層・VII層間是不整合で、その層理には地下水が浸透している。

VII層は、灰褐色の堅固な凝灰岩質砂礫岩層である。

III 層序



前田遺跡層序模式図 (1:3)

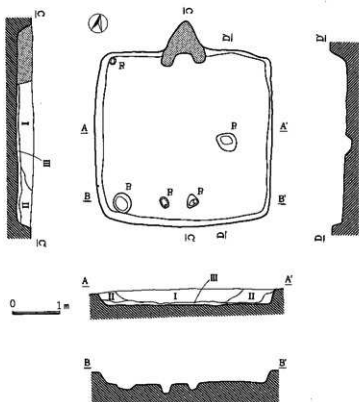
IV 遺構と遺物

1 竪穴住居址

(1) H-1号住居址

遺構 第5・6図

H-1号住居址は、第I区シ-43グリッドより検出された。南北3.8m東西3.8mの隅丸方形を呈し、床面積は11.7㎡を測り、主軸方向はN-13°-Wを指す。壁高は20~30cm前後で、周溝は認められない。支柱穴と考えられるピットは認められず、入口部に付属するかとも思われるピット2個(P₃・P₄)が並んで南壁側に検出された他は、径40cm深さ10cm程度のピット2個(P₁・P₂)が検出されたにとどまった。



第5図 H-1号住居址実測図

IV 遺構と遺物

覆土は3層に分かれ、プライマリーな自然堆積状況を示していた。I層は褐色土層で多量のバミスを含み、若干のスコリアと拳大の軽石を含む。II層は暗褐色土層でバミスをよく含み若干のスコリアが混入、III層は黒色土層でバミス・スコリアが含まれない粘性のある土層であった。

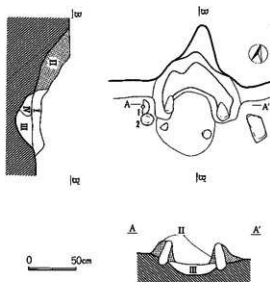
遺物は、須恵器の蓋と坏(1・2)がセットで、カマドの左袖の西側より検出された。この他は、覆土中からの出土である。

カマドは北壁中央に位置し、破壊された状態であるが、火床は掘り込まれた後

黒色土(III層)が貼られ、左右両袖は面取りをした軽石が配された後白色粘土(II層)が貼られ、煙道部にも白色粘土(II層)が貼られたもので、いわゆる石組粘土カマドである。カマドの東脇には、袖部に用いられていたと考えられる面取り軽石がみられた。カマドの覆土I層は、カマドの使用に伴うプライマリーな堆積層とは考えられないもので、カマドの構材となっている白色粘土と灰・微量の焼土粒子によって構成されるものであり、カマド破壊時の堆積土層と考えられる。

遺物 第7図

遺物の出土量は総じて少ないが、須恵器では蓋・坏・甕、土師器では甕がある。

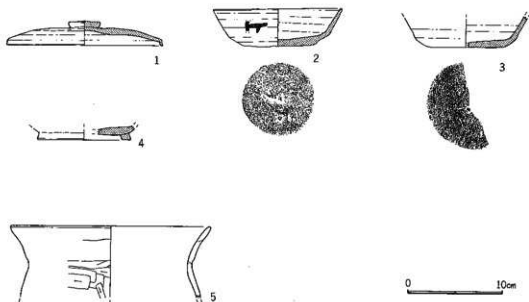


第6図 H-1号住居カマド実測図(1:40)

第2表 H-1号住居出土遺物一覧表(土器)

検出 番号	器種	法量	器形の特徴	図	備考
1 (回)	蓋 (須)	3.0 2.6 (16.7)	つまみは全体的に扁平ではあるが、中央部がやや突出する。	外面 天井部 回転ヘラケズリ 体部 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ(ロクロ右回転)	胎土は粘濁され、灰色(N6/O)を呈し焼成良好
2 (坏)	坏 (須)	13.8 4.0 8.0	底部平底、体部は外反する。完形	外面 体部ロクロヨコナデ 底部回転ヘラケリ 内面 ロクロヨコナデ(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(N8/O)、体部に「上」?の裏書あり。
3 (甕)	坏 (須)	- (8.1)	底部平底、体部は外反する。	外面 体部ロクロヨコナデ 底部回転ヘラケリ 内面 ロクロヨコナデ(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(N7/O)、底面に「×」のへろ記号あり
4 (坏)	坏 (須)	- (10.0)	底部平底、高台付(貼り付け)	外面 底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を多く含み、暗赤灰色(5B4/11)
5 (甕)	甕	(21.3) -	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部はややふくらむ。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を多く含み、明赤褐色(5YR5/6)

1 竪穴住居址



第7図 H-1号住居址出土遺物(1:4)

1の須恵器蓋は、その出土状態より2の環とセットをなすものと考えられる。2の須恵器環には体部に「上」の墨書があり、さらにもう一字書かれている可能性もある。2・3の須恵器環はいずれも回転ヘラキリによるもので、この他糸切りによる坏底部は認められなかった。

5は、「く」の字状に外反する口縁の土師器甕である。

なお、鉄製品・石器等の出土はみられなかった。

時期

本住居址は、奈良時代の所産で、前田遺跡第IV期に位置付けられる。

(2) H-2号住居址

遺構 第8図

H-2号住居址は、第I区ス-42グリッドより検出された。南北3.5m東西4.0mの隅丸方形を呈し、床面積11.9㎡を測り、主軸方向はN-5°-Wを指す。床面から確認面までの壁高は、全体に15cmと低く、周溝は認められない。支柱穴は、東西の壁中に1本ずつ対に配されるものと考えられるが、西側は風倒木による擾乱のため柱穴を検出し得なかった。東壁に残る柱穴は、住居址の外側に向けて斜に穿たれている感があり、深さ27cmを測る。

IV 遺構と遺物

住居址覆土はI層のみで、バミスをよく含む若干のカーボンを含む粘性のある黒色土であった。

遺物はいずれも破片のみで、良好な出土状態を示すものは認められない。

カマドは、住居址の北壁中央にあったと考えられるが、僅かに粘土をとどめるのみで、大半を失った状態にあり旧状は不明である。

遺物 第9図

遺物の出土量は少なく、須恵器では蓋・坏・甕、土師器では坏・甕の破片が認められたにすぎなかった。

1の土師器坏は、IV区より検出された破片で、ロクロ整形がなされ内面黒色研磨がなされている。なお、この他土師器坏では、高台付坏の破片が1点認められている。

また、須恵器坏の破片では糸切り底のものが存在する。

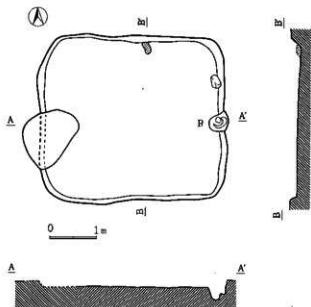
鉄製品・石器等は認められなかった。

時期

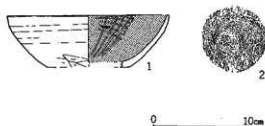
H-2号住居址は、奈良-平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられる。

第3表 H-2号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (回)	坏	<17.3> 5.5 <8.8>	体部は外折し、口唇部で直立きみに僅かに外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。体部下半、手持ちヘラケズリ。底部手持ちヘラケズリ 内面 黒色研磨(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにびい黄褐色(10YR 6/4)。



第8図 H-2号住居址実測図(1:80)

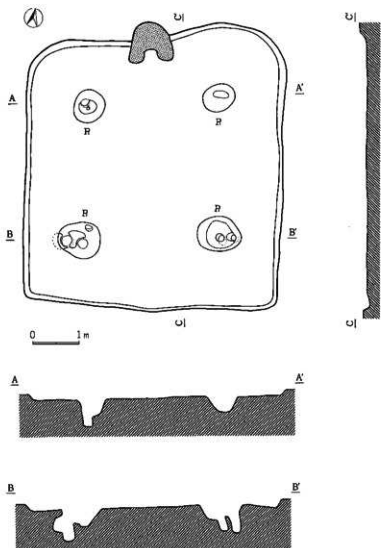


第9図 H-2号住居址出土遺物(1:4)

(3) H-3号住居址

遺構 第10・11図

H-3号住居址は、第I区スー41グリッドより検出された。南北6.1m東西5.5mで北壁の東半分がやや膨らんだ隅丸方形を呈し、床面積は28.1㎡を測り、主軸方向はN-14°-Wを指す。確認面から床面までの壁高は全体に10cm前後と低く、周溝は認められなかった。ピットは、主柱穴4



第10図 H-3号住居址実測図 (1:80)

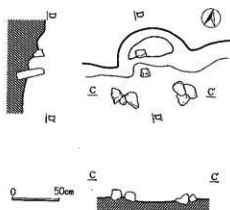
IV 遺構と遺物

個が検出された (P₁~P₄)。うちP₂・P₃・P₄では柱痕が確認でき径20cm前後を測った。また、P₁では2本の柱痕が確認されたが、一方は支柱等の柱痕であろうか。床面は、硬質な貼床であった。

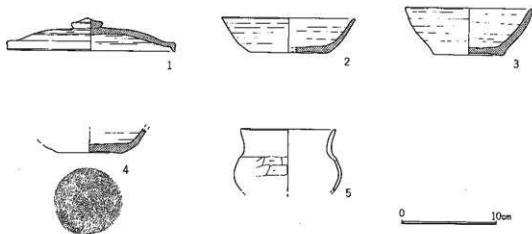
覆土はI層のみで、バミスはほとんど含まず粘性をおびた黒色土層である。

遺物は、1の蓋がP₂付近より検出されたが、原位置を保っているものかどうかはわからない。

カマドは、北壁中央に位置し、大半が破壊さ



第11図 H-3号住居址カマド実測図 (1:40)



第12図 H-3号住居址出土遺物 (1:4)

第4表 H-3号住居址出土遺物一覽表 (土器)

標記 番号	器種	法量	器形の特 徴	調 整	備 考
1 (圓)	蓋 (頂)	3.4 3.5 (18.0)	つまみ部は窪線形を呈する。	外面 ロクロコナダの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み青灰色 (5B6/1)
2 (圓)	杯 (頂)	(14.2) 3.7 (8.2)	体部はゆるく外湾する。底部平底。	外面 ロクロコナダ。底部回転糸切り 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み青灰色 (5B6/1)
3 (圓)	杯 (頂)	(13.5) 5.0 (7.4)	体部は外湾し、器高はやや高い。底部平 底。	外面 ロクロコナダ。底部回転糸切り 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 く含み、にぶい 黄褐色 (OYR7/4)
4 (碗)	杯 (頂)	- 7.0	底部平底	外面 ロクロコナダ。底部回転糸切り 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒含み 灰オリーブ色 (5Y6/2) 内面文字の火傷
5 (例)	壺	(10.1) - -	胴部は球状を呈し、口縁部は直立きみに 外反する。	外面 口縁部コナダの後、胴部ヘラケズリ 内面 コナダ	胎土は砂粒を含 み褐色 (OYR4/6)

れた状態であったが、左右両袖に配された軽石はそれぞれ3個ずつ残存しており、角柱状に面取りされた長さ60cmを測る軽石製の支脚は埋め込まれたままであった。カマドの使用に伴う焼土等のプライマリな堆積は認められない。

遺物 第12図

遺物の出土量は少ない。須恵器では蓋・坏・甕の破片が、土師器では甕の破片が検出された。

1は宝珠形をつまみを有する須恵器蓋である。

2～4の須恵器坏は、いずれも回転糸切りによるものである。

5は、口縁部が直立気味に外反する小形の土師器甕である。

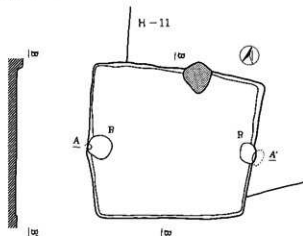
時期

H-3号住居址は、奈良～平安時代の所産で、前田遺跡第VII期に位置付けられる。

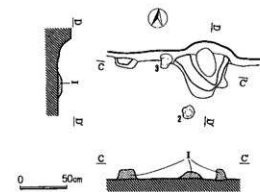
(4) H-4号住居址

遺構 第13・14図

H-4号住居址は、第I区ス-43グリッドより検出された。H-11号住居址と重複関係をもつが、本住居址のほうが新しいものである。本住居址は、南北3.25m東西3.66mのやや歪んだ隅丸方形を呈し、床面積は9.9㎡を測り、主軸方向はN-16°-Wを指す。確認面から床面までの壁高は総じて10cmに満たずきわめて低い。当初より浅い掘り込みなのか、上面が削平されているのか、あるいは掘り込み面が上位にあるのか等検討を要する必要があるが、本住居址と同様

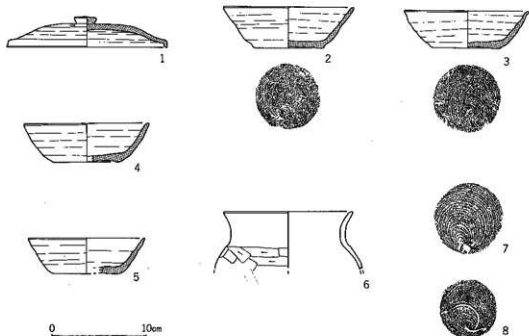


第13図 H-4号住居址実測図(1:80)



第14図 H-4号住居址カマド実測図(1:40)

IV 遺構と遺物



第15図 H-4号住居址出土遺物(1:4)

第5表 H-4号住居址出土遺物一覽表(土器)

検出 番号	器種	法量	器形の特 徴	調 査	備 考
1 (完)	蓋 (須)	2.5 3.2 17.1	つまみ部は全体的に扁平ではあるが中央部がやや突出する。	外面 ロクロコナダの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰色(N4/O)焼成良好
2 (回)	杯 (須)	(14.0) 4.4 7.4	体部は外湾する。底部平底。	外面 ロクロコナダ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナダ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色(N8/O)外湾次第あり
3 (完)	杯 (須)	(13.2) 4.1 7.3	体部は外湾するか、口唇部でくびれてさらに外湾する。底部平底。	外面 ロクロコナダ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(N8/O)外湾次第あり
4 (回)	杯 (須)	(13.3) 4.1 (7.1)	体部は外湾する。底部平底。	外面 ロクロコナダ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みオリーブ灰色(2.5GY8/1)
5 (回)	杯 (須)	(12.4) 3.8 (7.0)	体部は外湾する。底部平底。	外面 ロクロコナダ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナダ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を多く含み、雜灰黄色(2.5Y8/2)
6 (回)	蓋	(13.8) -	口縁部は「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部コナダの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナダ、胴部ヘラケズリ	胎土は細砂粒を含み明褐色(7.5YR5/6)

な規模構造をもつ住居址に浅いものが多い点を考えると、当初より浅い掘り込みであったことも十分に想される。周溝は認められない。主柱穴は、東西の壁中に斜の穴が各一個ずつ穿たれたものである(P₁・P₂)。P₁・P₂ともに深さ45cm程度を測る。

覆土はI層のみで、若干のバミスを含む黒色土層であった。

遺物は、カマドの前方より坏(2)が、カマドの西脇より(3)が比較的良好な状態で検出された。

カマドは、北壁中央よりやや東寄りに検出された。その天井部はすでに破壊されていると考えられるので、その袖の構材には軽石等を用いず粘土に黒色土を混じた土のみが用いられていた(I層)。カマド内には、掻き出されたためか焼土カーボン等の堆積は認められなかった。

遺物 第15図

遺物の検出量は少なかった。そのうち須恵器では蓋・坏・甕が、土師器では甕がみられた。

1の須恵器蓋は、つまみ部が潰れた宝珠形を呈するものである。

2～5の須恵器坏は、いずれも回転糸切りによる底部を有している。

6の土師器甕は、弱い「コ」の字状口縁をとるものである。

なお、本住居址には、鉄製品・石器等は認められなかった。

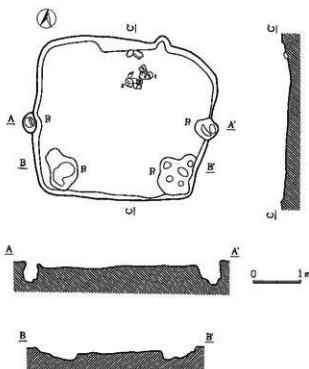
時期

本H-4号住居址は奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられる。

(5) H-5号住居址

遺構 第16図

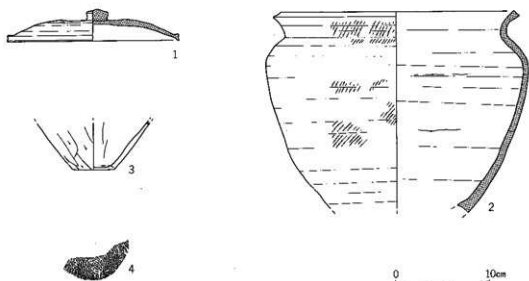
H-5号住居址は、第I区シー43グリッドより検出された。H-10号住居址とコーナーが僅かに切り合い、微妙ではあるがH-5が新しくとらえられた。南北3.4m東西3.8mのやや歪んだ隅丸方形を呈し、床面積は10.5㎡を測り、主軸方向はN-10°-Wを指す。確認面から床面までの壁高は総じて10cmに満たずきわめて低く、H-4と同様上面が削平されているか、あるいは掘込み自体も浅いものなのかを検討する必要がある。周



第16図 H-5号住居址実測図(1:80)

第6表 H-5号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標記番号	器種	法量	器形の特徴	器 整	備 考
1 (回)	蓋 (須)	2.3 3.3 (18.3)	つまみ部は扁平な宝珠形を呈する。	外面 ロクロコナダの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色 (N 5 / 0)
2 (甕)	甕 (須)	(26.0) — —	口縁部は短く外反する。	外面 叩きの後、ロクロコナダ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み 灰黄色 (2.5 Y 6 / 2)
3 (回)	甕	— (4.5)	底部平底。	外面 刷毛ヘラケズリ 底面ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は砂粒を含み 明赤褐色 (7.5 Y R 5 / 8)



第17図 H-5号住居址出土遺物(1:4)

溝は認められない。支柱穴は東西の壁中にそれぞれ1個ずつ配されている(P_1 ・ P_2)。 P_1 は60cm×60cm深さ50cmを測り、 P_2 は35cm×55cm深さ50cmを測るもので、双方ともやや斜に穿たれている感がある。 P_3 ・ P_4 は南壁側の隅コーナーにある不規則なビットで、この両者の上面に床面が確認されないため掘り進んだが、あるいは単なる掘り方の一部かもしれない。

覆土は、I層のみで若干のバミスを含む黒褐色土層であった。

遺物は、カマドが存在したと考えられる北壁寄りの場所に、1の須恵器蓋と2の須恵器甕が検出された。破損してしまったこれらの個体が、残置または廃棄された状態であろう。

カマドは、北壁中央に位置するが、およそ原形をとどめず、カマドに使用されたと考えられる軽石4個が散乱しているのみの状況であった。

遺物 第17図

遺物の出土量は総じて少ないが、須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕の器種が、土師器では甕の破片がみられた。うち、大方の器形を知り得たのは図示した1～3である。

1は、潰れた宝珠形のつまみをもつ須恵器蓋である。

須恵器坏は、回転米切りによる底部をもつものがみられた(4)。

2の須恵器甕は、外面に叩きがなされた後、ロクロ調整されたものである。

3は、土師器甕の底部である。この他、「く」の字状に外反する口縁部もみられた。

時期

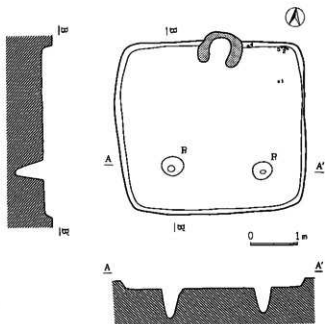
本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第Ⅷ期に位置付けられる。

(6) H-6号住居址

遺構 第18・19図

H-6号住居址は、第Ⅰ区シ-43グリッドより検出された。H-9号住居址と重複関係をもつが、本H-6がH-9に後出する新しい時期のものである。

本住居址は、南北3.7m東西4.1mの隅丸方形を呈し、床面積12.5㎡を測り、主軸方向はN-7°-



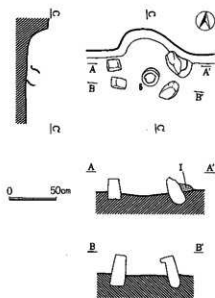
第18図 H-6号住居址実測図(1:80)

Wを指す。壁高は、15~20cm前後で、周溝は認められない。床面は粘床となっている。支柱穴は、中央より南壁よりにP₁・P₂の2個が配されているのみであった。P₁は42cm×37cm深さ50cmを測り、P₂は47cm×41cm深さ60cmを測るものである。

覆土は、細粒バミスをよく含みやや粘性のある黒褐色土I層のみであった。

遺物は、カマドの東側の床面直上より1の完形の須蓋器蓋が出土した。また2の須蓋器杯は半割してしまったもので重ねられた状態で北東コーナーより出土し、その上に3の環が逆転した状態で出土した。5の甕はカマド中より出土した同一個体の破片との接合をみた。6の小形甕はカマド中より転倒した状態で出土した。

カマドは、北壁中央に位置するもので、石組み粘土カマドと考えられるが、粘土部（I層）は僅かに東側の袖に残るのみであった。東側の袖は奥に溶結凝灰岩が、手前には「」状に面取りされた軽石が据えられ、西側の袖には面取り軽石2個が据えられていた。なお、カマドの使用に伴う



第19図 H-6号住居址カマド実測図(1:40)

第7表 H-6号住居址出土遺物一覧表<土器>

発見番号	器種	注記	器形の特徴	調査	備考
1 (完)	蓋 (須)	3.0 3.0 12.1	つまみ部は宝珠形を呈する。 径が比較的小さい。 完形。	外面 ロクロヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ? 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	粘土は中砂粒を多く含み灰白色(5Y7/1)
2 (完)	杯 (須)	15.2 4.5 8.8	体部は外湾する。底部平砥。 ほぼ完形。	外面 ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	粘土は中砂粒を含み黄灰色(5B5/1)焼成良好
3 (完)	環	(14.8) 4.2 (10.3)	体部は直線的に外湾する。 底部平砥	外面 ロクロヨコナデの後、ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデの後、底部にらせん状隆起文部に放射状隆起文を施す。	粘土は中砂粒を多く含み藍色(7.5YR7/6)焼成良好
4 (完)	杯	(18.0) 6.9 (11.0)	体部は丸縁をおびて外反し、口縁部は短く直立する。 底部平砥。	外面 横のヘラケズリの後、横のヘラミガキ 内面 黒色研磨	粘土は中砂粒を多く含み藍色(5YR6/8)
5 (完)	甕 (須)	(33.6) —	口縁部は短く強く外反し、胴部は球状を呈する。	外面 叩きがなされた後、口縁部にヨコナデ(ロクロ?)が施される。 内面 ヨコナデ(ロクロ?)	粘土は中・大の砂粒を多く含み明褐色(7.5YR8/8)引ひの硬質と脆性
6 (完)	甕	14.6 15.3 7.3	口縁部は「コ」の字状に外反し、胴部はほぼ完形。	外面 口縁部ヨコナデ。胴部・胴部・底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ	粘土は赤褐色の砂粒を多量に含み、灰褐色(5YR5/4)

1 整穴住居址



第20図 H-6号住居址出土遺物 (1 : 4)

と考えられる焼土等のプライマリーな堆積は認められなかった。

遺物 第20図

遺物の出土量は少ないが、須恵器では蓋・坏・甕が、土師器では坏・甕が検出さ

第8表 H-6号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	面数	備考
7	敷石	安山岩	12.0	5.4	4.3	500	

れた。

1は、小形の須恵器蓋の完形品で、内面の端部はかえりを有さないが、かえりが退化したような感もうける。2の坏は、回転ヘラキリによる底部を有するものである。3の土師器坏は、内面の体部に放射状の暗文が、底部にラセン状の暗文が施こされている。4の土師器坏は大形の器形で内面黒色研磨がなされている。

5の須恵器甕は、外面に叩きがなされるものである。6は、球胴を呈する土師器の小形甕である。また、図示しなかったが「く」の字状口縁の土師器甕の破片もみられる。

石器では、河床礫を用いたハンマーが1点出土している。

時期

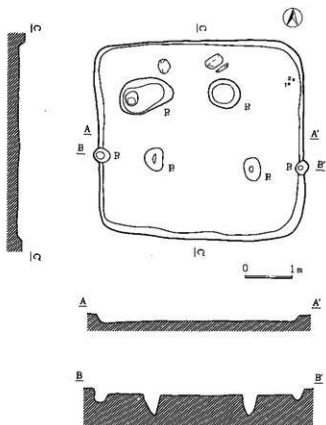
本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられる。

(7) H-7号住居址

遺構 第21図

H-7号住居址は、第I区シー44グリッドより検出された。

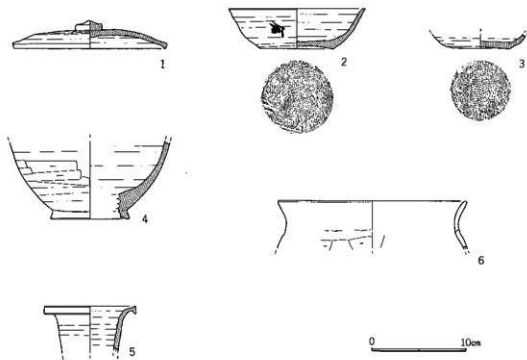
本住居址は、南北4.2m東西4.35mを測る隅丸方形を呈し、床面積16.2㎡を測り、主軸方向はN-6°-Wを指す。壁高は15~20cm前後で、周溝は認められない。主柱穴は、中央よりやや南壁寄りにP₁・P₂が検出された。P₁は、50cm×35cm深さ45cm、P₂は50cm×40cm深さ45cmを測る。P₁P₂の延長線上の東西両壁中にはそれぞれ1個ずつP₃・P₄が認められた。P₃は32cm×27cm深さ10cm、P₄は32cm×37



第21図 H-7号住居址実測図(1:80)

第9表 H-7号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

図号	器種	寸法	器形の特徴	調 整	備 考
1 (完)	甕 (須)	3.0 3.0 16.1	つまみ部は宝珠形を呈する。 完形。	外面 ロクロヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を多く含む青灰色 (5B5/1) 惣成良材
2 (完)	杯 (須)	14.6 4.3 7.7	体部はやや丸味をおびて外反する。 底部平底。	外面 ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を多く含む青灰色 (5B6/1) 十字の穴あり。体部に「真」の刻印
3 (完)	杯 (須)	- - 6.3	底部平底。	外面 ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を含む灰色 (7.5Y6/1)
4 (破)	長頸瓶 (須)	- - <8.4>	貼り付け高台	外面 胴部ロクロヨコナデ。胴下半部回転ヘラケズリ 底部調整不明 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む灰色 (5Y5/1)
5 (破)	長頸瓶 (須)	<9.8> - -	頸部は外反きみに直立し、口縁部は短く 強く外反する。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ回転方向不明)	胎土は砂粒を含む青灰色 (10B6/1)
6 (破)	甕	20.1 - -	口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ	胎土は赤褐色 (5YR4/8)



第22図 H-7号住居址出土遺物 (1:4)

cm深さ20cmを測るもので、双方ともP₁P₂よりは浅いピットである。また、柱穴とは異なる機能を有するものと考えられるピットにP₃・P₄がある。P₃は67cm×63cmの円形、P₄は73cm×117cmの

楕円形を呈しその底面にはさらに小さなピットがある。

覆土は、I層のみでバミスをよく含む黒褐色土層であった。

遺物は、住居址北東コーナー近くより須恵器蓋と坏がセットで検出された(図版参照)。その出土状態より良好な位置を保っているものと思われる。坏には「倉」の墨書がなされていた。

カマドは、北壁中央付近に存在したものと考えられたが、すでに破壊状態にあり、その部分には、構材であった面取り軽石1点と、焼土の堆積のみが認められたにすぎなかった。

遺物 第22図

本住居址より検出された遺物量は少ないが、そのうち須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕の器種が土師器では甕がみられた。

1の須恵器蓋は2の坏とセットで検出されたもので宝珠形のつまみをもつものである。2の坏は、体部に「倉」の墨書がなされている。倉と墨書された事例は、多摩ニュータウンNo.769遺跡12号住居址(丹野 1985)、中央道遺跡調査地区内松本市三の宮遺跡S B75(中央道遺跡現地説明会にて実見した)等に散見される。

2・3の坏の底部はいずれも回転糸切りによるものである。4・5は長頸瓶の一部である。

6は、弱く「く」の字状に外反する土師器甕の口縁部である。

なお、本住居址からは石器・鉄製品等の出土はみられなかった。

時期

本住居址、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられる。

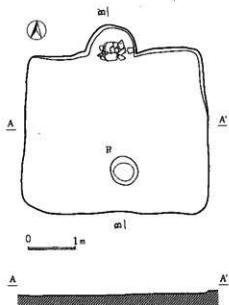
(8) H-8号住居址

遺構 第23図

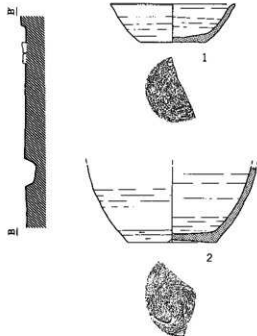
H-8号住居址は、第I区シー44グリッドより検出された。その平面プランは、南北3.5m東西3.9mを測る隅丸方形を呈し、床面積12.7㎡を測り、主軸方向はN-2'-Wを指す。壁高は10cm未満で、前述したいくつかの住居址と同様上面が削平されている可能性もあろうが、掘り込み自体が浅いことも想定できよう。本住居址においては柱穴は認められなかったが、ピットとしてはP₁が検出された。P₁は60cm×55cm深さ25cmを測る不整形のピットである。なお、本住居址においては良好な出土状態を示す遺物は認められなかった。

カマドは、北壁中央に認められたが、完全に破壊された後、その構材であった面取り軽石がその部分に整然と置かれている状態であった。そのカマドのプランは壁外に半円形に突出している。住居廃絶時におけるカマドの破壊に関する興味深い事例といえよう。ちなみにこのような事例は、本遺跡第I区H-32・H-37・H-47号住居址において認められた。

1 竪穴住居址



第23図 H-8号住居址実測図 (1:80)



第24図 H-8号住居址出土遺物 (1:4)

第10表 H-8号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

検出 番号	器種	法量	器形の特長	測 量	備 考
1 (回)	坏 (須)	13.3 4.0 (6.8)	体部は外反し、平部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切り 内面 体部ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は白色砂粒 を微かに含む灰色 (N6/1) 外面焼成の火傷
2 (回)	長頸瓶 (須)	- (0.5)	底部平底。 長頸瓶の底部と思われる。	外面 胴部ロクロコナデ、底部回転糸切り 内面 胴部ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は白色砂粒 を含ま灰色 (5Y8/1)

遺 構 第24図

検出された遺物はきわめて少ない。そのうち須恵器では坏・長頸瓶・甕の破片が、土師器では甕の破片がみられた。

1は、回転糸切りによる底部をもつ須恵器坏である。2も、回転糸切りによる底部をもつ長頸瓶の胴部下半と考えられる。

土師器甕は図示できなかったが、「く」の字状の口縁部がみられた。

なお、本住居址では石器・鉄製品等は検出されなかった。

時 期

本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられる。

(9) H-9号住居址

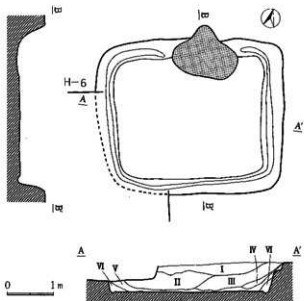
遺構 第25・26図

H-9号住居址は、第I区ス-43グリッドより検出されたもので、IV区上面をH-6号住居址に切られている。

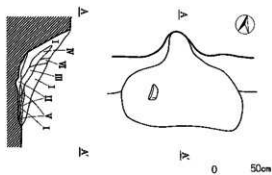
本住居址は、南北3.35m東西4.0mの隅丸方形を呈し、床面積9.8㎡を測り、主軸方向はN-14°-Wを指す。柱穴等のピットはまったく認められなかった。壁高は60cm前後を測り、他の住居址と比べて深い堅穴といえそうである。周溝は10-15cm幅深さ5cm程度のもが住居址を一周している。

覆土は、4層に分層できた。I層は径5mm程度のバミスを多く含む粘性のある黒褐色土層で、II層はローム粒子を多量に含む粘性のある褐色土層、III層もI層と同様で径5mm程度のバミスを多く含む粘性のある黒褐色土層であった。IV層はバミス等をほとんど含まない黒色土層で、V層は径5mm程度の軽石をよく含む黒色土層、VI層はローム粒子を多量に含む褐色土層である。覆土の構成と堆積状況はH-11・H-19・H-22と近似する。

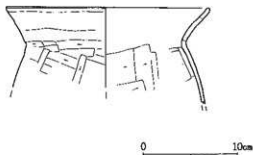
カマドは、北壁中央に存在するが、破壊されており、灰・カーボン・焼土等の分厚い堆積がみられるのみで、その構造は不明であった。土層堆積はVI層に分層された。I層は灰・焼土・炭化物を少量含む灰褐色土層、II層は炭化物を多量に含む黒色土層、III層



第25図 H-9号住居址実測図(1:80)



第26図 H-9号住居址カマド実測図(1:40)



第27図 H-9号住居址出土遺物(1:4)

第11表 H-9号住居址出土遺物一覽表(土器)

発掘 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	測 量	備 考
1 (完)	甕	21.6 —	口縁部は「く」の字状に外湾する。	外面 口縁部ヨコナゲの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナゲ。	胎土は砂粒を多く含み、赤褐色(2.5 YR 6/4)

は焼土を多量に含み炭化物を含む赤褐色土層、IV層は炭化物・灰を含む黒色土層、V層はローム粒子を含む黄褐色土層、VI層は小粒バミスを含む黒褐色土層であった。これらの堆積層はプライマリなものではなく、カマド破壊による攪乱層と考えられた。

遺 物 第27図

遺物の出土量はきわめて少なく、本住居址に共伴すると考えられる土器は唯一の「く」の字状口縁の土師甕のみであった。

時 期

本住居址は遺物量が少ないため時期決定が難しいが、その特異な覆土の堆積状況や掘り込みの深さ、切り合い関係等から後述するH-19・H-22との共時性が考えられる。よって奈良時代・前田遺跡第IV期に位置付けられる。

(10) H-10号住居址

遺 構 第28図

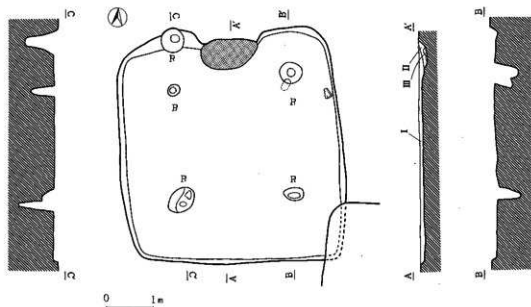
H-10号住居址は、第I区スー43グリッドより検出された。その東南コーナーをH-5号住居址に切られている。

本住居址は、南北4.9m東西4.8mを測り、基本的には隅丸方形を呈するがカマド側の北壁がカマドよりやや張り出している。床面積は20.2㎡を測り、主軸方向はN-12°-Wを指す。壁高は10cm程度を測るのみであり、掘り込み自体が浅いものなのかどうか一考を要する。周溝は認められない。主柱穴は5個検出された(P₁・P₂・P₃・P₄・P₅)。P₁は45cm×50cm深さ50cmを測り、やや傾むいた二段のビットである。P₂は25cm×25cm深さ50cmを測るもので、P₃は65cm×45cm深さ75cmを測る二段となるビットである。P₄は27cm×43cm深さ45cmを測る楕円形のビットである。P₅は、P₂、P₃の延長線上の北壁中にあるもので52cm×50cm深さ69cmを測る。

覆土は、I層のみで、細粒バミスを含む粘性のある黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、完全に破壊された状態にあった。図の網点はカマドの構材である粘土(II層)の範囲を示している。その粘土の下には僅かに焼土(III層)が認められた。なお、住居址の東壁付近には支脚に用いられたと思われる面取り軽石が残置されていた。

IV 遺構と遺物



第28図 H-10号住居址実測図 (1:80)

遺物 第29図

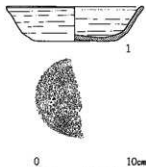
検出された遺物はきわめて少ない。そのうち、本住居址に伴うと考えられる遺物は、図示した1の須恵器環と土師器甕の胴部のみであった。

1の須恵器環は回転ヘラキリによる底部をもつものである。

土師器甕胴部は、外面に須恵器にみられるような叩きの施こされるものであった。

時期

本住居址は、遺物量の少なさから時期決定が難しいが、切り合い関係等もふまえ、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けておこう。

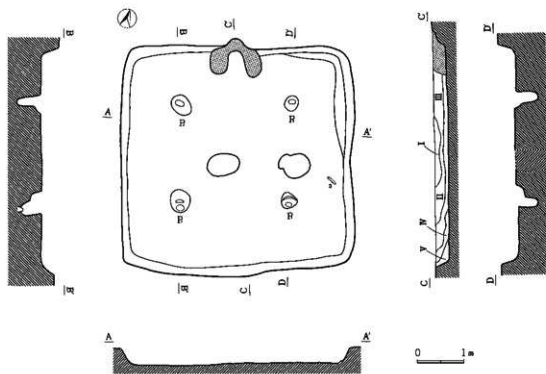


第29図 H-10号住居址出土遺物 (1:4)

第12表 H-10号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出番号	器種	法量	器形の特徴	説	備考
1 (個)	環 (須)	(14.5) 3.7 (9.2)	体部は外周する。底部平底。	外面 体部ロコロヨコナデ、底部は回転ヘラキリ 内面 ロコロヨコナデ (ロコロ左回転)	胎土は砂粒を僅かに含み緑灰色 (10GY 5/1)

1 壑穴住居址



第30図 H-11号住居址実測図 (1:80)

(11) H-11号住居址

遺構 第30・31図

H-11号住居址は、第I区ス-43グリッドより検出された。そのIII区上部はH-4号住居址に、IV区の一部はF-38号掘立柱建物址に切られている。

本住居址は、南北4.9m東西4.0mを測る隅丸方形を呈し、床面積20.1㎡を測り、主軸方向はN-23°-Wを指す。壁高は30~35cmを測り、その北東コーナーの壁は段をもって床面へと続く。周溝は認められない。主柱穴は、P₁-P₄の4個である。P₁は35cm×30cm深さ47cmを測り、P₂は50cm×35cmの楕円形を呈し深さは50cmを測る。P₃は50cm×43cm、その底面は自然礫につきあたっており深さ45cmを測り、中段にテラスを有するものとなっている。P₄は、35cm×35cm深さ45cmを測り、P₃と同様中段にテラスを有している。

遺物は、IV区の東壁寄りの床面直上より岩の細長い礫が検出されたが、これが唯一良好な出土状態を示すのみで、他は覆土中よりの出土であった。

覆土は、5層に分層できたが、基本的にはH-9・H-19・H-22と同様な土層構成・堆積をみせていた。まず、I層は細粒バミスをよく含む粘性のある黒色土層で、II層はバミス・ローム

粒子の多量に混入する粘性のある暗褐色土層であった。III層は小粒バミスをよく含む粘性のある黒色土層、IV層はバミス・ローム粒子の多量に混入する暗褐色土層で、V層は粒子が細かく粘性のある黒色土層であった。

カマドは、北壁中央に存在している。両袖の前方部と、天井部がすでに崩壊してしまっているものであったが、その大方の構造は理解できた。その両側の袖は、面取り軽石が据えられ粘土（I層）で固められている。東の袖も同様で、溶結凝灰岩礫が据えられた後、粘土（I層）で固められている。天井部にも面取り軽石2個が乗せられ粘土が貼られたと考えられるが、それらはすでに崩壊してしまっ

ている。火床部は、特にその前方が掘り込まれており、その中央には柱状に面取りした軽石の支脚石がみられた。

カマドの覆土は、4層に分層できた。I層はカマドの構材となっている粘土層で、II層は炭化物・焼土を若干含む灰をよく含む黒褐色土層で、III層は灰をよく含む炭化物を含む黒褐色土層であった。

遺物 第32図

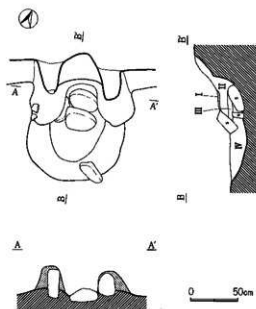
本住居址より検出された遺物は少なかった。そのうち、須恵器では蓋・坏・甕の破片が、土師器では甕の破片がみられた。

1の須恵器坏の底部には、切り離しの後手持ちヘラケズリがなされているが、おそらくその切り離し方法は回転ヘラケズリであったかと推定される。2は須恵器高台付坏で底部は回転ヘラケズリによって調整されているものである。

土師器甕の破片は図示し得なかったが、「く」の字状の口縁部が検出されている。

3は石墨石英片岩の棒状礫である。端部には敲打痕等が認められず、また石墨石英片岩という特殊な石材であるということを考え合わせると、これを日常的な工具である敲石等とするより、祭祀等にかかわる石製品とみたほうがよいであろうか。

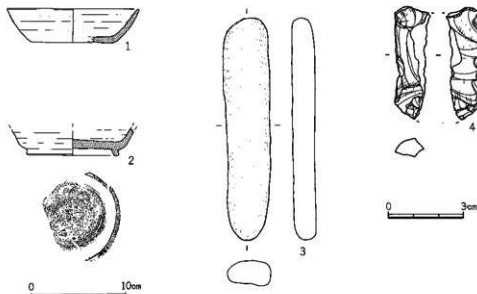
時期



第31図 H-11号住居址カマド実測図(1:40)

第13表 H-11号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

発掘番号	器種	法線	器形の特徴	調査	備考
1 (四)	杯 (3須)	(14.1) 3.6 (8.7)	体部は外周し、底部平底。	外面 ロクロヨコナデ、底部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を多量に含む灰白色(N7/0)
2 (四)	杯 (須)	— (9.9)	貼り付け高台。	外面 ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む灰白色(10YR5/2)



第32図 H-11号住居址出土遺物(4のみ2:3, 他は1:4)

本住居址は、その切り合い関係、覆土堆積状態、遺物の特徴等から考えて、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

第14表 H-11号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

発掘番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
3	棒状物	石炭石 長片岩	23.5	5.0	2.8	580	
4	不明	麻礫石	(4.4)	(1.3)	0.9	(5)	

(12) H-12号住居址

遺構 第33図

H-12号住居址は、第I区ス-43グリッドより検出された。

本住居址は、床面近くが僅かに確認されたにすぎないが、南北3.4m東西3.65mの隅丸方形を呈し、床面積は10.7㎡を測り、主軸方向はN-10°-Wを指す。柱穴等のピットはまったく認められなかった。

カマドは、焼土等によって北壁のやや東寄りに存在することが確認できたが、壊滅状態にあった。その部分には、その構材に用いられたと考えられる面取り軽石1個と小さな軽石が残存しているのみであった。

遺物

本住居址内からは、僅かに須恵器片土師器片が計十数片程検出されたにすぎず、本住居址に確実に相伴すると考えてもよい遺物は認められなかった。

時期

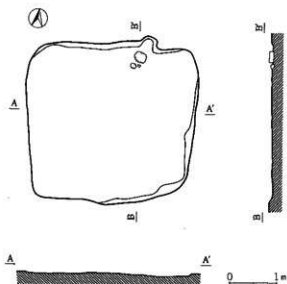
本住居址は、相伴する遺物がないだけに時期決定が難しいが、その規模や構造等から、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期の所産と想定しておこう。

(13) H-13号住居址

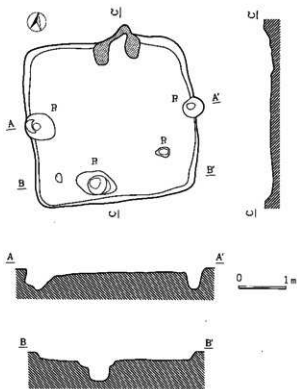
遺構 第34・35図

H-13号住居址は、第I区スー41グリッドより検出された。

本住居址は、南北3.4m東西3.5mの隅丸方形を呈し、床面積10.3㎡、主軸方向はN-14°-Wを指す。壁高は10cm前後を測るのみであり、他の浅い住居址と同様な問題を孕んでいる。主柱穴は、東西両壁に1個ずつ配されたものであ



第33図 H-12号住居址実測図 (1:80)



第34図 H-13号住居址実測図 (1:80)

1 竪穴住居址

る ($P_1 \cdot P_2$)。 P_1 は $45\text{cm} \times 45\text{cm}$ 深さ 35cm 、 P_2 は $70\text{cm} \times 60\text{cm}$ の斜にあく二段のピットで深さ 30cm を測る。 P_3 は、南壁沿いにある二段の掘り方をもつピットで、 $80\text{cm} \times 55\text{cm}$ 深さ 40cm を測る。 P_4 は $30\text{cm} \times 20\text{cm}$ の貧弱なピットである。

遺物は、良好な出土状態を示すものは認められなかった。

覆土は、細粒バミスを若干含む粘性のある黒灰色土層 1 層のみであった。

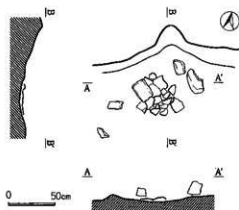
カマドは、北壁の中央よりやや東寄りに検

出された。完全に破壊されており、その構材に用いられていた面取り軽石等が散乱している状態にあった。また、その火床と考えられる部分からは須恵器 1~3 の個体の破片が集中して出土した。これらは、カマドの火床部に一括廃棄された破片と考えられる。

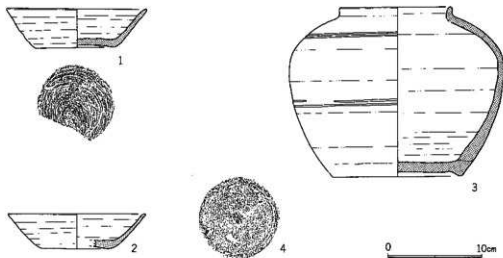
遺物 第36図

遺物の出土量は少ないが、須恵器では坏・短頸壺・長頸瓶・甕、土師器では甕の破片がみられた。

1・2の須恵器坏は、いずれも回転糸切りによる底部を有するもので、カマド火床部より出土したものである。なお、この他カマド火床部からは、回転ヘラキリの須恵器坏底部も認められた。



第35図 H-13号住居址カマド実測図 (1:40)



第36図 H-13号住居址出土遺物 (1:4)

第15表 H-13号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標記 番号	器種	法線	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	坏 (須)	(14.9) 4.3 (8.3)	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切り 内面 体部ロクロコナデ (ロクロ左回転)	胎土は中砂粒を 多量に含む灰白色 (7.5Y7/1)内面 に(井)の水溝あり
2 (破)	坏 (須)	(14.6) 3.7 (7.0)	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を 含む灰色 (N6/0)
3 (破)	短頸甕 (須)	(12.0) 17.9 (14.2)	頸部は短く直立する。肩部には高台が貼 りつけられる。胴部には上位と中位に2 条の花線が施される。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を 含む灰色 (7.5Y6/1)

3は、ロクロ整形による須恵器短頸甕で、胴部の上半と下半にそれぞれ二条の沈線が施されたものである。

土師器甕は、図示し得なかったが、僅か「コ」の字状に外反する口縁部も認められた。

なお、本住居址においては石器・鉄製品等は認められなかった。

時 期

本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。

(14) H-14号住居址

遺 構 第37・38図

本住居址は、第I区ス-41グリッドより検出された。その西壁においてH-15と僅かに重複するもので、微妙ではあるが本住居址がこれに先行するものとしてとらえた。

H-14は、南北5.88m東西5.7mの隅丸方形を呈し、床面積28.6㎡を測り、主軸方向はN-14'-Wを指す。壁高は15～20cm前後で、周溝は巡らない。主柱穴は、P₁～P₄の4個が検出された。P₁は65cm×50cm深さ50cm、P₂は60cm×50cm深さ50cm、P₃は70cm×55cm深さ50cm、P₄は72cm×67cm深さ50cmを測る。

遺物は、良好な出土状態を示すものは認められなかった。

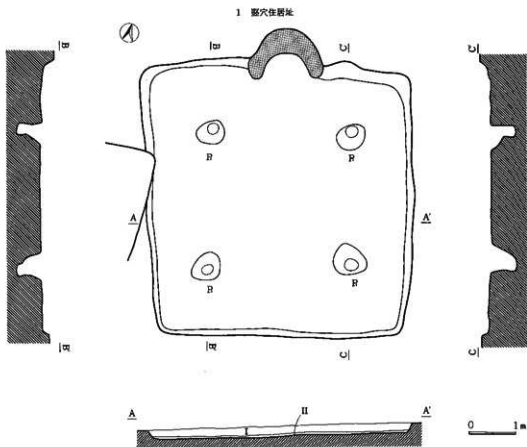
覆土は、2層に分層できた。I層は小粒バミスを含むやや粘性のある黒褐色土で、II層はバミス等をあまり含まない黒色土層であった。

カマドは、北壁中央より検出されたが、壊滅状態にあった。しかし、僅かに抽らしきローム層の張り出しが左右に認められ、その構材に用いられたと思われる軽石数個が認められた。

遺 物 第39・40図

遺物の出土量は多くないが、須恵器では蓋・坏・甕、土師器では甕の各器種が認められた。

1～3は須恵器蓋で、つまみ部が宝珠形を呈する1・2と皿状を呈する3がある。

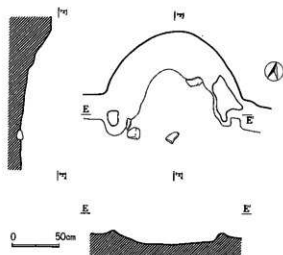


第37図 H-14号住居址実測図 (1 : 80)

須恵器環では、底部切り離しの後手持ちへラケズリを加える例が4・5を含め7例認められ、その他承切りによる底部が2例、回転へラキリによりその後に調整を加えられない底部が2例認められた。

土師器壺は、7のように「く」の字状の口縁部をもつものがみられた。

石器は、用途不明ではあるが偏平な楕円の河床礫が認められた(8)。

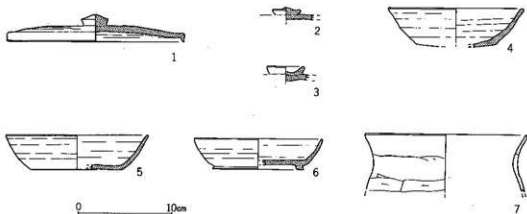


第38図 H-14号住居址カマド実測図 (1 : 40)

IV 遺構と遺物

第16表 H-14号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

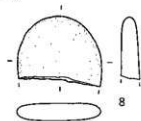
神田番号	器種	注量	器形の特徴	調査	備考
1 (完)	蓋 (須)	2.8 2.9 18.9	つまみ部は宝珠形を呈する。	外面 ロクロコナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を多く含む灰色 (N4/0)
2 (完)	蓋 (須)	3.0 —	つまみ部は宝珠形を呈する。	外面 ロクロコナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を含む灰色 (N4/0)
3 (回)	蓋 (須)	4.0 —	つまみ部は中央のくぼむ皿状を呈する。	外面 ロクロコナデ 内面 ロクロコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選され灰白色 (N7/0)
4 (回)	杯 (須)	<14.4> 4.2 <8.7>	体部は外反する。底部は僅かに丸縁をおびた平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ左回転)	胎土は細砂粒を多く含む灰色 (10Y5/1) 外面火煙あり
5 (回)	杯 (須)	<15.2> 3.7 <9.8>	体部は丸縁をおひて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を含む灰色 (10Y5/1)
6 (回)	杯 (須)	<13.7> 3.3 <9.8>	体部は外反する。貼り付け高台。 注量では、器縁があまりない。	外面 ロクロコナデ、底部は高台貼り付けの後回転 ヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含む赤褐色 (5YR4/6)
7 (回)	蓋	(17.2) —	口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。	外面 口縁部コナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部斜位のナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は明赤褐色 (5YR5/6)



第39図 H-14号住居址出土遺物 (1:4)

第17表 H-14号住居址出土遺物一覽表〈石器〉

神田番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
8	不明	玄部岩質 灰山岩	(5.0)	6.6	1.4	(80)	

第40図 H-14号住居址
出土遺物 (1:3)

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第

V期に位置付けられよう。

(15) H-15号住居址

遺構 第41図

H-15号住居址は、第I区スー42グリッドより検出された。その北東コーナーは、H-14号住居址の西壁の一部を僅かに切っていることが捉えられた。

本住居址は、南北3.7m東西3.9mを測る隅丸方形を呈し、床面積12.9㎡を測り、主軸方向はN-3°-Wを指す。壁高は、5cm前後を測るのみと浅く、周溝は認められなかった。柱穴等のピットも、まったく認められなかった。

覆土は、I層のみで粒子の細かく粘性のある黒褐色土層であった。

遺物は、北壁寄りの中央より須恵器片がまとまって検出された。これらの破片は、意図的に置かれた感が強い。

カマドは、現段階では捉えられなかった。本住居址が非常に浅く、カマドが飛ばされてしまっていることも考えられようが、焼土等も特に認められないためカマドはないものと判断しておこう。

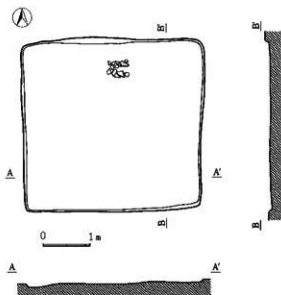
遺物 第42図

本住居址から検出された土器は、北壁寄りからまとまって出土した須恵器甕の破片のみであった。その甕については器形を知り得なかったため図示しなかった。

1は、IV区より検出された黒曜石の両面加工の石鏃で、先端部を僅かに欠損する。

時期

本住居址は、遺物がほとんどないため時期決定が難しいが、住居址の規模・構造・切り合い関係等から、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けておこう。



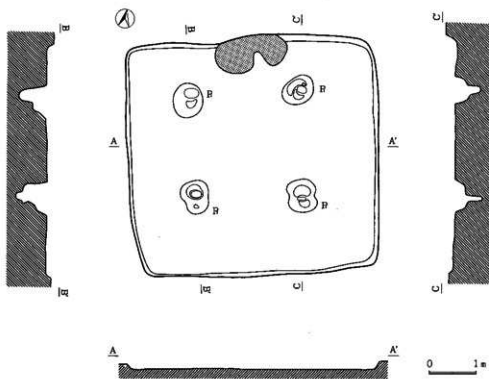
第41図 H-15号住居址実測図 (1:80)

第18表 H-15号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	石鏃	黒曜石	(2.4)	1.9	0.4	(1.1)	



第42図 H-15号住居址出土遺物 (2:3)



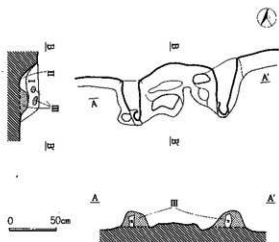
第43図 H-16号住居址実測図 (1 : 80)

(16) H-16号住居址

遺構 第43・44図

H-16号住居址は、第I区スー42グリッドより検出された。

本住居址は、南北5.03m東西5.3mの隅丸方形を呈し、床面積24.3m²を測り、主軸方向はN-14°-Wを指す。壁高は10~20cmを測り、周溝は認められない。柱穴は、P₁~P₄の4個が検出された。P₁は70cm×55cm深さ55cm、P₂は73cm×62cm深さ55cmを測る。P₃は70cm×60cm深さ63cm、P₄は70cm×60cm深さ55cmを測る。4個のピットはいずれも二段の掘り方を有している。



第44図 H-16号住居址カマド実測図 (1 : 40)

覆土はI層のみで、細粒バミスをよく含む黒褐色土層であった。

遺物は、良好な出土状態を示したものは、北東コーナー付近より出土した1の坏のみであった。

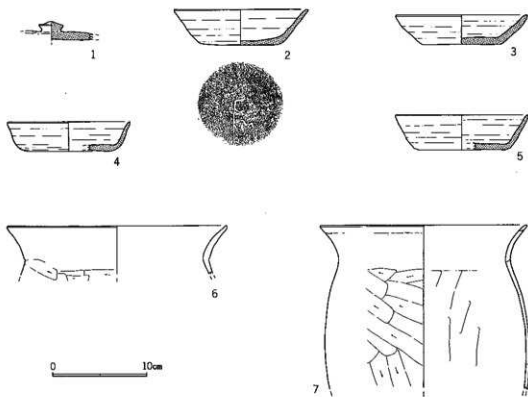
カマドは、北壁中央に存在し、その大半が破壊されていた。粘土の天井部はすでに火床部に崩落している(II・III層)。東西の両袖はその後方が残存しており、双方とも面取り軽石を軸に粘土(III層)で固めたものであることが捉えられた。カマド内の覆土は、カマド使用に伴う焼土カーボン等のプライマリー堆積ではなかった。I層は、住居址覆土I層と同一の黒褐色土層で、II層をブロック状に含んでいる。II層は、若干の粘土を含む白色粘土層で、III層の攪散したものとみなし得よう。III層はカマドの構材となっている白色粘土層である。

遺物 第45・46図

遺物の検出量は少ないが、須恵器では蓋・坏・甕、土師器では甕の各器種がみられた。

1の須恵器蓋は、宝珠形つまみを有するものである。

2は回転ヘラキリの底部を有する須恵器坏で、3は回転ヘラキリの後手持ちヘラケズリのな

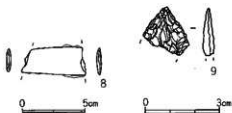


第45図 H-16号住居址出土遺物(1:4)

IV 遺構と遺物

第19表 H-16号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標記番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (完)	壺 (須)	2.5 —	つまみ部は宝珠形を呈する。	外面 ロクロヨコナゲの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を多く含むオリーブ灰色(2.5GY8/7)
2 (完)	坏 (須)	14.4 3.8 9.0	体部は外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナゲ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を多く含む灰白色(GOY8/1)
3 (回)	坏 (須)	<14.0> 3.1 <8.4>	体部は大きく外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナゲ、底部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む浅黄褐色(GOYR8/4) 胎土は粗粒ではない
4 (回)	坏 (須)	<13.0> 3.2 <9.0>	体部は直立気味に外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナゲ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ右回転)	胎土は比較的精選されにくい赤褐色(5YR4/3) 焼成良好
5 (回)	坏 (須)	<14.2> 3.7 <10.2>	体部は外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナゲ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ右回転)	胎土は比較的精選されにくい赤褐色(5YR4/3) 焼成良好
6 (回)	甕	<23.4> —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナゲの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナゲ、胴部ヘラケズリ	胎土は赤褐色(5YR4/8)
7 (回)	甕	<22.0> —	口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナゲの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナゲ、胴部ヘラケズリ	胎土は赤褐色(5YR4/8)



第46図 H-16号住居址出土遺物(1:3)(2:3)

れたものである。4・5の坏は、いずれも回転ヘラケズリのなされた底部を有する須恵器坏である。

6・7は、土師器甕の口縁部で「く」の字状を呈するものである。鉄器では、Ⅲ区より、鎌の刃部中央の破片が検出された(8)。石器では、黒曜石の両面調整の石鎌が1点みられた(9)。

時期

H-16号住居址は、奈良時代、前田遺跡第Ⅳ期に位置付けられよう。

第20表 H-16号住居址出土遺物一覧表
(金属器・石器)

標記番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
8	鎌	鉄	(5.1)	2.1	0.4	(13)	
9	石鎌	黒曜石	(1.8)	(1.8)	0.4	(1)	

(17) H-17号住居址

遺構 第47図

本住居址は、第I区ス-42グリッドより検出された。その西半分においてF-47号掘立柱建物址と重複している。その両者の前後関係の認定は困難であったが、一応本住居址の床面上においてはF-47のビットは認められず、床面を剥がした時点において検出できたため、本住居址はF-47に後出するものとして捉えた。

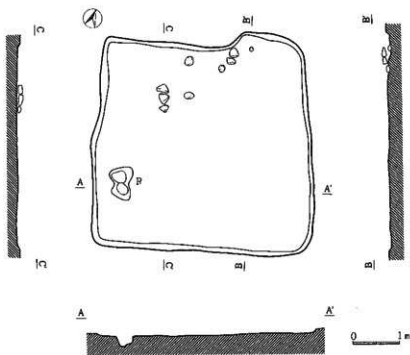
本住居址は、南北4.7m東西4.7mの隅丸方形を呈するが、その北壁の東半分はやや突出している。床面積は18.9mを測り、主軸方向はN-19°-Wを指す。壁高は10cm未満を測るのみで、他の浅い住居址と同様な問題を孕んでいるといえる。周溝は認められない。ビットは、70cm×50cm深さ20cmの蕨形をしたビット1個をもつにすぎない。

覆土は、小粒のバミスを若干含み粘性のある黒褐色土I層のみであった。

良好な出土状態を示す遺物は認められない。

カマドは、北壁の中央よりやや東に存在したが、壊滅状態にあり、その構材に用いられていたと考えられる軽石が、住居址の北半分に散乱していた。

遺物 第48図



第47図 H-17号住居址実測図(1:80)

第21表 H-17号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出 番号	器種	注量	器 種 の 特 徴	調 査 整	備 考
1 (回)	蓋 (須)	2.5 3.3 (15.1)	つまみ部は宝珠形を呈する。	外面 ロクロヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎上は砂粒を多く含み灰色 (N6/0)

本住居址より検出された遺物はきわめて少ないが、須恵器では蓋・坏・甕の破片が、土師器では甕の破片が認められた。

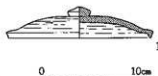
1の須恵器蓋は宝珠形つまみ部をもつものである。

須恵器坏は、図示でき得るものがなかったが、回転糸切りによる底部をもつものが2点認められた。

土師器甕は、「く」の字状の口縁部をもつものであった。

時 期

本住居址の時期決定となり得る根拠は少ないが、遺物、住居の構造、掘立柱建物址との切り合い関係等から奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けておこう。



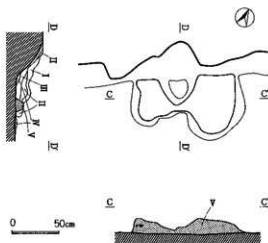
第48図 H-17号住居址
出土遺物 (1 : 4)

(18) H-18号住居址

遺 構 第49・50図

H-18号住居址は、第I区S-42グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.5m東西4.5mの隅丸方形を呈し、床面積16㎡を測り、主軸方向はN-16-Wを指す。壁高は20～25cmを測り、周溝は認められない。支柱穴は、P₁～P₄の4個が認められた。P₁は50cm×55cm深さ45cm、P₂は60cm×55cm深さ35cm、P₃は57cm×50cm深さ40cm、P₄は70cm×60cm深さ25cmを測る。



第49図 H-18号住居址カマド実測図 (1 : 40)

覆土は、2層に分層できた。I層は多量のバミスを含む粘性のある黒褐色土層で、II層は小粒バミスをよく含む粘性のある黒色土層であった。

良好な出土状態を示す遺物は、住居址内に認められなかった。

1 壘穴住居址

カマドは、北壁中央に位置するが、ほぼ壊滅状態にあり、その構材に用いられ粘土（V層）の堆積がみられるのみであった。カマドの覆土は、4層に分層された。I層は灰褐色土層、II層は褐色土層、III層は暗褐色土層でいずれも焼土を多量に含むものであったが、IV層は焼土を含まない黒色土層であった。

遺物 第51図

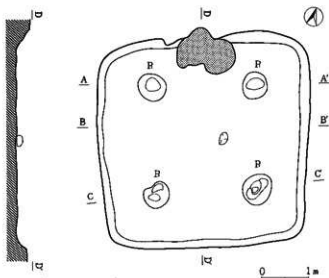
本住居址より検出された遺物は、土器片30片に満たない。須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕の破片がみられたが、いずれも器形を知り得るには程遠いものであった。ただし、土師器甕の破片で叩きの施されたものがあったことを特記しておこう。なお、石器では滑石製の紡錘車がI区より出土した（1）。

時期

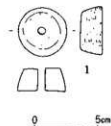
本住居址は、遺物がないうに等しいため時期決定は難しい。

第22表 H-18号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

図号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	紡錘車	滑石	3.9	3.9	1.8	50	



第50図 H-18号住居址実測図（1：40）



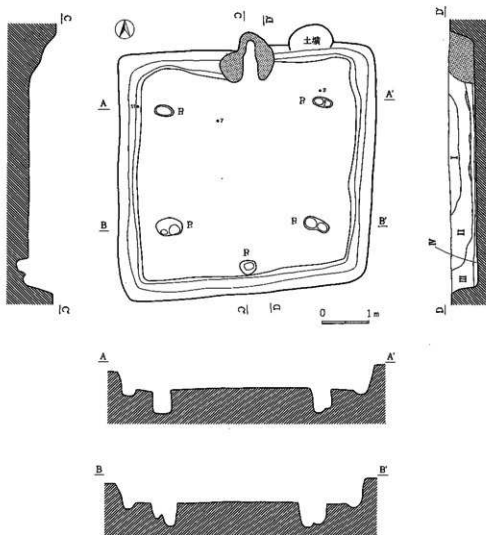
第51図 H-18号住居址出土遺物（1：4）

(19) H-19号住居址

遺構 第52・53図

H-19号住居址は、第I区スー43グリッドにおいて検出された。その西半分の上面をH-20号住居址に切られ、また、その北壁の一部を土壌に切られている。

本住居址は、南北5.75m東西5.45mの隅丸方形を呈し、床面積24.7㎡を測り、主軸方向はN-5°-Wを指す。壁高は、50cm前後を測り、他の住居址と比べ深いものといえる。周溝は、幅30cm深さ10~15cmを測るものが住居址を一周する。主柱穴は、P₁~P₄の4個が検出された。P₁は43



第52図 H-19号住居址実測図 (1:80)

cm×20cm深さ50cm、P₂は40cm×25cm深さ48cm、P₃は55cm×40cm深さ48cm、P₄は55cm×30cm深さ53cmを測る。このうち、P₁P₃P₄の3個はその掘り方がW字形を呈しており、支柱に付随する支柱的な柱があるかもしれないことを予測させた。また、P₅は南壁際中央にあり35cm×30cm深さ20cmを測る。

遺物は、北西コーナーの周溝中より紡錘車(11)が、P₂の東の床面直上より土師器甕(7)がP₁の北の床面直上より須恵器坏(2)が検出された。他の遺物は、覆土中のものである。

覆土は、4層に分層された。I層は小粒パミスをよく含む黒褐色土層、II層は小粒パミスを多く含む径2cm程の軽石・カーボン若干含む黒褐色土層、III層は細粒パミスを含む黒褐色土層、IV層はパミスをほとんど含まない粘性のある黒色土層であった。その土層構成は、H-9・H-11・H-22と同様なものであった。

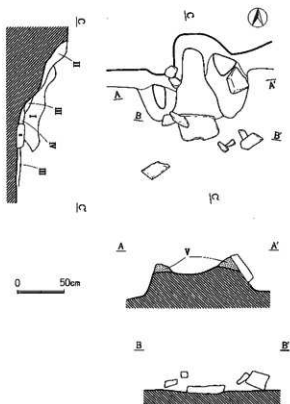
カマドは、北壁中央部に位置するもので、ほぼ半壊状態にあった。その構造としては、住居址が掘り込まれる時点でカマドの部分はロームが一部高く残され、さらにその上に粘土(V層)が貼られている。また、その前方部の袖や天井部は、面取り軽石が粗まれ粘土で固められたものと思われるが、その構材である軽石は散乱している状態にあった。

カマド覆土は、4層に分層された。I層は多量の灰を含み若干のロームが混入する混色土層、II層は焼土を多く含む黒褐色土層、III層は焼土を含まない黒色土層、IV層は焼土をよく含む黒色土層であった。

遺物 第54・55図

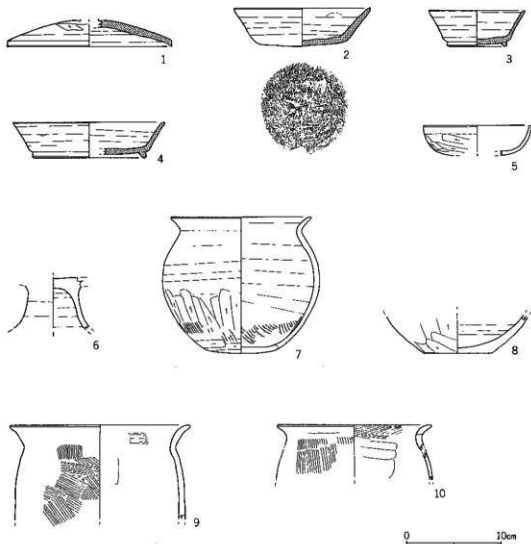
本住居址より検出された遺物は、須恵器では蓋・坏・高坏・甕、土師器では坏・甕の各器種がみられた。

1の須恵器蓋は、かえりを有さないものでつまみ部の形状は不明である。



第53図 H-19号住居址カマド実測図(1:40)

IV 遺構と遺物



第54図 H-19号住居址出土遺物 (1:4)

2の坯は、完全な還元炎焼成となっていない須恵器坯で、回転ヘラキリによる底部をもつ。3・4は須恵器高台付坯で、3は小形品である。

5は、偏平な丸底を呈し体部が弓なりに外反する土師器坯である。

6は、2と同様完全な還元炎焼成となっていない須恵器高坯で、ロクロ整形によるものである。

7は、小形球胴の土師器甕で、ロクロ整形の後、その外面胴部下半には須恵器にみられる叩きがなされ、またこれに対応する内面には青海波文も観察されるものである。なお、8の甕も7と同様ロクロによるものかもしれない。

第23表 H-19号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標記 番号	器種	法量	器種の特長	調 整	備 考
1 (回)	蓋 (須)	— (7.2)	かえりを有さない。 つまみ部の形状不明	外面 ロクロヨコナデ、天井部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は中砂粒を多く含み、 褐色(5YR5/4) 焼成良好
2 (完)	杯 (須)	14.6 4.1 8.6	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を多く含み、 褐色(7.5YR6/6)
3 (回)	杯 (須)	(10.2) 3.9 (6.4)	体部は外反する。貼り付け高台。 口縁は比較的小さい。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部調整不明 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は若干の砂粒を含み、 褐色(5YR4/3) 焼成良好
4 (回)	杯 (須)	<16.1> 3.8 <12.1>	体部は断片的に外反する。 貼り付け高台。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み、 黄灰色(5B5/1)
5 (回)	杯	<11.5> (3.2) —	体部は丸状をおびて内湾し、底部は扁平な丸底を呈する。	外面 ヨコナデの後、体部以下ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含み、 黄灰色(7.5YR6/4)
6 (完)	高杯 (須)	— —	—	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み、 黄褐色(7.5YR8/3) 須恵器?
7 (回)	甕	(15.0) 14.4 8.0	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。底部はやや丸味をおびた平底。	外面 胴下半部叩きの底、全体をロクロヨコナデ、続いて胴上半部ヘラケズリ 内面 背海渡のあて具痕が認められ、胴上半部はロクロヨコナデ	胎土は比較的精選され、 黄褐色(2.5Y8/3)
8 (回)	甕	— — (7.2)	胴部は球状を呈し、底部平底。	外面 胴部ヘラケズリ、底部ナデ? 内面 ヨコナデ(ロクロ使用?)	胎土は比較的精選され、 黄褐色(2.5Y8/3)
9 (回)	甕	<19.1> — —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は比較的直線的に下降する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部に粗い刷毛目状調整を施す 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を多く含み、 黄褐色(2.5Y8/3) 焼成良好でない
10 (回)	甕	<16.4> — —	口縁部は「く」の字状に強く外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部に粗い縦方向の刷毛目状調整 内面 口縁部粗い刷毛目状調整、胴部ヘラナデ	胎土は金重を多く含み、 黄褐色(7.5YR8/4)

第24表 H-19号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

標記 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
11	紡錘車	須恵器	5.6	5.7	3.2	95	

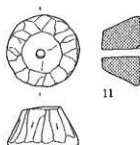
9・10は、外面に刷毛目状調整がなされる土師製の破片である。

なお、この他図示しなかったが、いわゆる「く」の字状口縁の甕型土器の破片が認められた。

11は、須恵器製の紡錘車で、外面がヘラケズリによって整形されているものである。なお、須恵器製の紡錘車は、望月町の岩清水遺跡(望月町教育委員会 1986)等に散見される。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。



0 5cm

第55図 H-19号住居址出土遺物(1:3)

(20) H-20号住居址

遺構 第56・57図

H-20号住居址は、第I区スー43グリッドより検出された。その東半分は、H-19号住居址の上部を切っている。

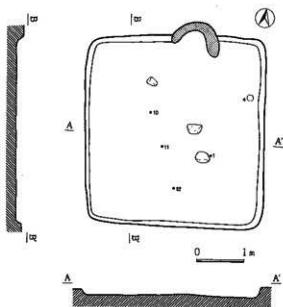
本住居址は、南北4.1m東西3.8mを測る隅丸方形を呈し、床面積13.0㎡を測り、主軸方向はN-10°-Wを指す。壁高は10~15cmを測り、周溝は認められない。床面は、非常に硬質化した貼床である。ピットは、柱穴その他1個も認められない。

遺物は、住居の中央付近より1の円面碗の破片が曝下より出土し、またその西からは床に埋め込まれた砥石が砥面を上にして出土した(11)。さらにその北の床面直上からは刃子(10)が検出された。東壁の中央よりやや北寄りの床面直上には4の坏が正常位で出土した。

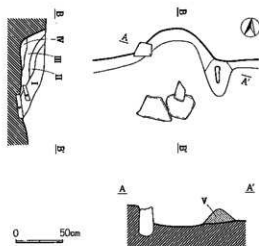
覆土は、I層のみで、細粒バミスを含み粘性のある黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央よりやや東寄りにあり、半壊状態にあった。ただし、西側の袖の奥に据えられた面取り軽石は残存しており、黒色土に若干ロームが混入する土(V層)を構材に用いた東側の袖も一部残存していた。また、火床部に残置された偏平面取り軽石二枚もカマドの構材に用いられていたものである。

カマドの覆土は4層に分層できたが、カマドの破壊に伴いプライマリーな状態ではないものと

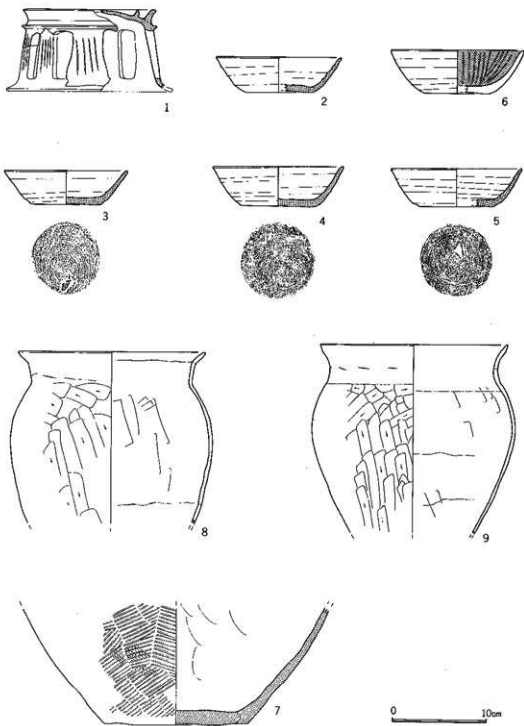


第56図 H-20号住居址実測図(1:80)



第57図 H-20号住居址カマド実測図(1:40)

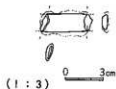
1 野穴住居址



第58图 H-20号住居址出土遗物 (1:4)

第25表 H-20号住居址出土遺物一覧表 (土器)

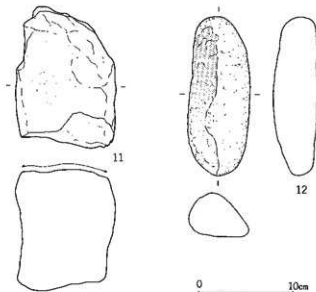
標記 器号	器種	法量	器形の特長	調 整	備 考
1 (回)	内面碗 (須)	(14.2) —	腹面では、シャープな線から底・内面へと抜き跡面をゆるく高まりをみせる。通しは9箇所のなるものと考えられ、脚部には4本の沈線が施こされる。	外面 ロクロヨコナデ? 腹面にはあまり光沢がみられず、墨の付着も認められない。 内面 ナデ	胎土は細砂粒を多く含む灰色(N5/D) 脚部には自然焼付着
2 (回)	杯 (須)	(13.3) 3.7 (7.0)	体部は外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ(ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を多く含む灰色(7.5Y6/1)内外面に火傷痕あり
3 (回)	杯 (須)	(13.2) 3.6 7.5	体部は外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む灰色(Q5/D)
4 (完)	杯 (須)	14.0 4.2 8.1	体部は外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ(ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を多く含む灰白色(Q0Y8/1)内外面に火傷痕あり
5 (回)	杯 (須)	(14.0) 4.0 8.0	体部は外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ(ロクロ左回転)	胎土は細砂粒を多く含む黄褐色(Q0YR5/6)
6 (回)	杯	(14.2) 4.5 (6.9)	体部は外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 黒色刷漉(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多量に含む暗褐色(7.5YR3/4)
7 (回)	甕 (須)	— (16.4)	胴下半部は外反する。底部平底。	外面 叩きが施こされる 内面 ナデ	胎土は細砂粒を多く含む灰色(10Y5/1)
8 (回)	甕	(20.0) —	口縁部は「コ」の字状に外反し、胴上半部はややふくらむ。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は明赤褐色(5YR5/8)
9 (回)	甕	(20.0) —	口縁部は「コ」の字状に外反し、胴上半部はややふくらむ。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は赤褐色(5YR4/8)



察せられる。I層は若干の焼土を含む黒褐色土層、II層は多くの焼土粒子を含み若干のカーボンも含む褐色土層、III層は若干の焼土・カーボンを含む黒褐色土層、IV層は多くの焼土を含む褐色土層であった。

遺物 第58図・59図

検出された遺物は、須恵器で



第59図 H-20号住居址出土遺物 (1:4)

は円面硯・蓋・坏・甕が、土師器では坏・甕がみられた。

1の須恵器円面硯は脚台部に9個所の透しを有するものである。その磨墨面には顕著な磨滅も認められず墨の付着もないため、使用頻度が低かったのであろうか。また、その胎土等もあまり精選されておらず、在地の窯で焼かれた製品なのかもしれない。

2～5の須恵器坏は、いずれも回転糸切りによる底部を有している。

6の土師器坏は、内面黒色研磨のなされたもので、底部は回転糸切りとなっている。

8・9は、「コ」の字状口縁の土師器甕である。

鉄製品には、10の刃子がある。出土した時点においては、ほぼ完存していたが、錆が激しく中央部が取り上げられたのみであった。なお、本刃子は円面硯とセットとなり、文房具（木簡等の削削用）としての機能を果たしていたとも考えられよう。

石器では、11の砥石と12の敲石がある。

11の砥石は、砥面が一面のみで、その面には敲打痕も観察できる。10の刃子等が砥がれたのであろうか。

12の敲石は、その側面が敲打によって剥落するものである(図の網点)。礫の端部が用いられる敲石とは使用法が異なるのであろうか。

時期

本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。

(21) H-21号住居址

遺構 第60・61図

H-21号住居址は、第I区セ-41グリッドより検出された。

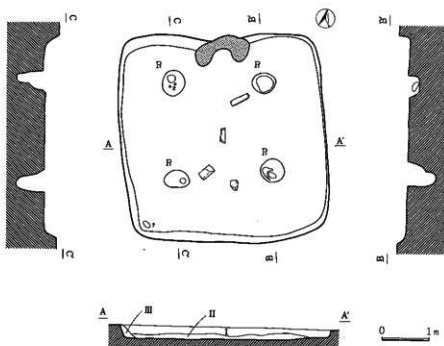
本住居址は、南北4.4m東西4.35mを測る隅丸方形を呈し、床面積は16.2㎡を測り、主軸方向はN-17°-Wを指す。壁高は、15～30cm前後で、周溝は認められない。主柱穴は、P₁～P₄の4個が検出された。P₁は、50cm×45cmで、深さは25cmと他より浅く、その内部には礎がみられた。P₂は55cm×48cm深さ55cm、P₃は55cm×35cm深さ60cm、P₄は50cm×50cm深さ60cmを測る。P₂とP₄の掘り方は二段になっている。

遺物は、P₃のピット内より2の須恵器大甕の破片が出土した。おそらくP₂の埋土中に埋め込まれたのであろう。この甕は、H-6のカマド内出土の破片と接合をみており、両者の時間的關係

第26表 H-20号住居址出土遺物一覧表(金属器・石器)

MEI番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
10	刃子	鉄	(3.8)	1.5	0.5	(8)	
11	砥石	砂岩	(13.8)	10.6	13.5	(2,900)	
12	敲石	安山岩	16.9	6.4	4.9	710	

IV 遺構と遺物



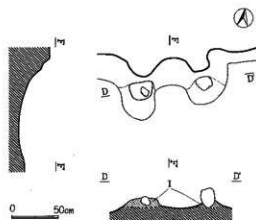
第60図 H-21号住居址実測図 (1:80)

を考えるうえで格好な資料となった。また、南西コーナー床面より7の偏平な円礫が出土した。

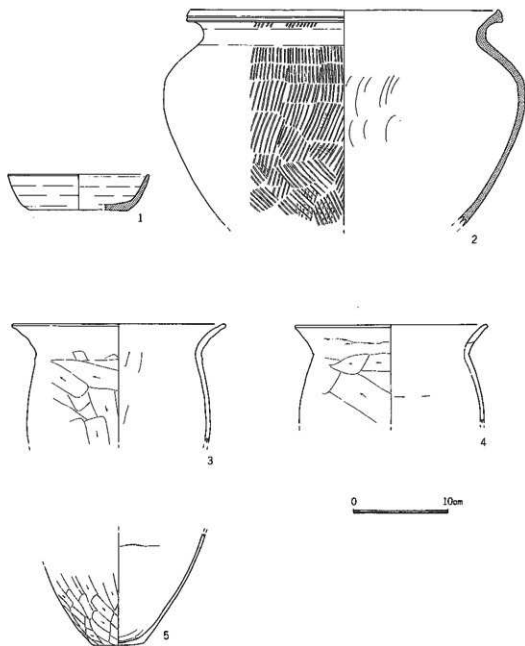
覆土は、3層に分層された。I層は細粒バミスをよく含む粘性のある黒褐色土層で、II層は細粒バミスをよく含む粘性の強い黒色土層、III層はローム粒子が多く混入する黒褐色土層である。

カマドは、北壁中央に位置するが、その大半が破壊され、構材に用いられていた面取り軽石4点は住居の中央部に散乱していた。かろうじて残された両袖の一部は、その芯に安山岩礫が据えられ、周囲を白色粘土 (I層) で固めたものであった。カマドの使用に伴う焼土等の堆積はまったくみられなかった。

遺物 第62・63図



第61図 H-21号住居址カマド実測図 (1:40)



第62図 H-21号住居址出土遺物実測図(1:4)

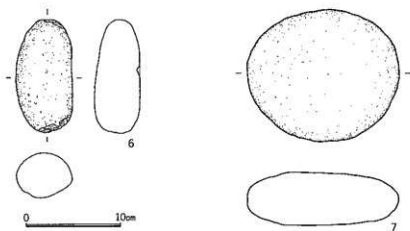
遺物の出土量は少ないが、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕の各器種がみられた。

1の須恵器坏は、回転ヘラキリによる底部を有するものである。

2の須恵器甕は、叩きがなされた後、全体的に弱くロクロヨコナデの施されるものである。

第27表 H-21号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

神田 番号	器種	法量	器形の特 徴	測 量	備 考
1 (回)	坏 (須)	<15.0> 3.8 <10.6>	底部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部刷削ヘラケリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ回転)	胎土は砂粒を含 み淡黄色 (2.5Y 8/3)
2 (回)	壺 (須)	(33.6) — —	口縁部は短く強く外反し、胴部は球状を 呈する。	外面 叩きがなされた後、口縁部にロクロコナデが 施こされる 内面 ロクロコナデ	胎土は中・大の砂 粒を多く含む明 色(7.5YR 5/6) H-6の破片と接合
3 (回)	甗	<22.8> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ココナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ココナデ、胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色 (5YR 4/6)
4 (回)	甗	<20.6> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ココナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ココナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色 (2.5YR 5/6)
5 (完)	甗	— — 5.4	底部平底。	外面 胴部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ 内面 胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色 (2.5YR 4/6)



第63図 H-21号住居址出土遺物実測図(1:4)

3・4は、「く」の字状に外反する口縁を有する土師器甗である。

また、この他図示でき得なかったものに、H-6等でみられたラセン状の暗文が施される土師器坏と同様な胎土をみせる土師器坏があるが、風化が激しく暗文等は捉えられなかった。

石器では、一方の端部が敲打に用いられた敲石と(6)、あるいは合石等として使用されたのが偏平な円礫(7)が出土している。

時 期

第28表 H-21号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

神田 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
6	敲石	輝岩	12.0	6.0	4.8	450	
7	合石	安山岩	14.0	16.0	5.7	1,750	

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

(22) H-22号住居址

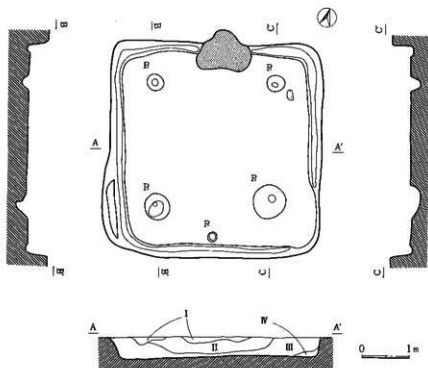
遺構 第64・65図

H-22号住居址は、第I区ス-43グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.6m東西4.5mの隅丸方形を呈し、床面積18㎡を測り、主軸方向はN-22°-Wを指す。壁高は40~45cmと深く、周溝は幅15cm深さ5cm程度のもので、東南コーナーを除きほぼ全周する。主柱穴は、P₁~P₄の4個が認められた。P₁は40cm×35cm深さ20cm、P₂は35cm×35cm深さ15cm、P₃は55cm×55cm深さ20cm、P₄は70cm×70cm深さ20cmを測るものであった。これらは、他の住居址に比べるといずれも浅い柱穴といえる。また、H-19と同様南壁際の中央からピットが検出された(P₅)。P₅は20cm×20cm深さ20cmを測る。

遺物は、良好な出土状態を示すものは認められなかった。

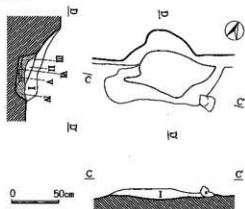
覆土は、4層に分層された。基本的にはH-9・H-11・H-19と同様な土層構成であった。I層は細粒・中粒のバミスをよく含む粘性のある黒褐色土層で、II・III層は多量のバミス・ローム粒子の混入する粘性のある暗褐色土層、IV層は粒子の細かい黒色土層であった。



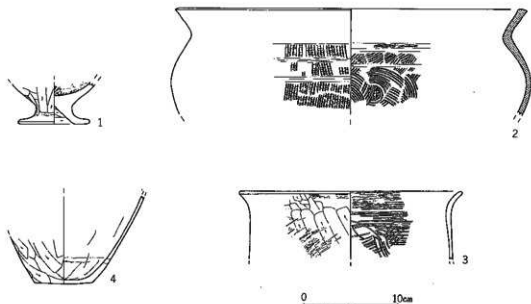
第64図 H-22号住居址実測図 (1:80)

IV 遺構と遺物

カマドは、北壁中央に存在するが、破壊状態にあり、その構材である灰粘土層（I層）が集積するのみであった。なお、その火床部は一度ピットが掘り込まれ、それがさらに埋め戻されて火床面となっていた。その部分の埋土は、ロームが多量に混じる黄褐色土層 III・IVと黒色土層 IV・V層である。なお、II層の黒色土層はカマド使用に伴う焼土・カーボンを含み若干含んだ。



第65図 H-22号住居址カマド実測図 (1:40)



第66図 H-22号住居址出土遺物 (1:4)

第29表 H-22号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

押図番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (回)	高杯	— 7.6	丸味をおいて外反する環部に側平な脚部が つながらず。	外面 環部ヘラケズリ、脚部ヨコナデ 内面 環部放射状のヘラミガキ、脚部ヘラケズリ		胎土は砂粒を多く 含む褐色 (7.5YR 6/6)
2 (回)	壺 (頸)	<37.5> —	口縁部は「く」の字状に外反し、脚部は ふくらむ。	外面 格子目の叩きがなされた後、ロクロヨコナデ 内面 当て具痕（背海波）が認められる、口縁部ロクロヨコナデ		胎土は細砂粒を 多く含む黄褐色 (10YR 6/4)
3 (回)	壺	<23.7> —	口縁部は短く外反し、胴上半部はほぼ直線的に 下降する。	外面 胴上半および口縁部ヘラケズリの後、若干のヘ ラミガキ 内面 横位を中心としたミガキ状のヘラナデ		胎土は中砂粒を 多く含む褐色 (7.5YR 6/6)
4	壺	— 6.1	底部平底。	外面 胴部および底部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ		胎土は明赤褐色 (5YR 5/8)

遺物 第66図

本住居址より検出された遺物は少ないが、須恵器では甕、土師器では高環・甕が認められた。

1は、土師器の高環で坯部内面は放射状にヘラミガキがなされている。類例は、本遺跡に隣接する十二遺跡のH-1号住居址の高環等に求められる。

2は須恵器の甕で、外面には叩き目内面には青海波がみられ、その後、弱いロクロ調整のなされたものである。

3は、口縁部の短く外反する土師器甕で、この他、「く」の字状口縁の土師器甕もみられた。石器・鉄製品等は本住居址では検出されなかった。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第Ⅳ期に位置付けられよう。

(23) H-23号住居址

遺構 第67・68図

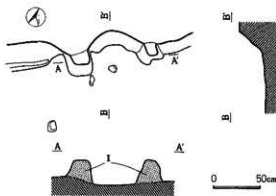
H-23号住居址は、第Ⅰ区セ-41グリッドより検出された。その東壁は、F-12号掘立柱建物址と接するが、両者の新旧関係は明らかでない。

本住居址は、南北4.85m東西4.4mの隅丸方形を呈し、床面積18.0㎡を測り、主軸方向はN-11'-Wを指す。壁高は、20~25cmを測る。周溝は、幅10cm深さ5cm程度のもので、東壁北半分・北壁東半分を除き、巡っている。支柱穴と考えられるものは、P₁~P₄の4個である。P₁は55cm×50cm深さ55cmを測る。P₂は、Ⅱ区の中央部には位置せず北西コーナー寄りに存在するもので、50cm×50cm深さ25cmを測る。P₃は55cm×55cm深さ60cm、P₄は75cm×55cm深さ60cmを測る。

遺物は、須恵器環が良好な出土状態で検出された。2・6はカマドの西より、3は北西コーナーより、4は西壁際より検出された。また、12・13の河床礫は、南西コーナー寄りから他の2個とまとめて検出された。11の砥石は、Ⅰ区からの出土である。

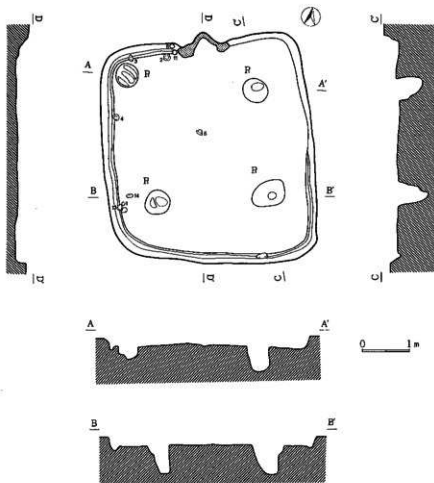
覆土は、Ⅰ層のみで、細粒バミスをよく含む粘性のある黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央より検出された。



第67図 H-23号住居址カマド実測図(1:40)

IV 遺構と遺物



第68図 H-23号住居址実測図 (1:80)

その大半はすでに破壊されてしまっており、僅かに粘土 (I層) を用いた両袖の後部が残っているにすぎなかった。カマド付近には、多量の灰・焼土が散乱していた。

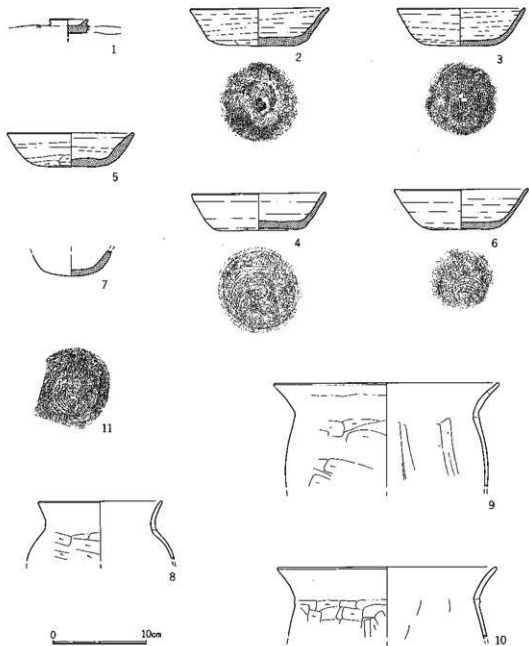
遺物 第69・70図

遺物は、須恵器では蓋・坏・甕が、土師器では坏・甕がみられた。

1の須恵器蓋は、皿状にくぼつつまみ部をもつものである。

須恵器坏では、2のように回転ヘラキリの後周囲に手持ちヘラケズリの加えられるもの、3のように切り離しの後全面に手持ちヘラケズリが加えられるもの、5の切り離しの後全面に回転ヘラケズリの加えられるもの、6・11のように回転糸切りの後周囲に手持ちヘラケズリの加えられるもの、4のように回転糸切りの後周囲に回転ヘラケズリが加えられるものと様々であったが、

1 整穴住居址



第69図 H-23号住居址出土遺物 (1:4)

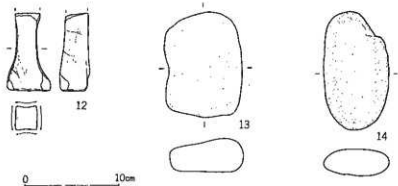
いずれも底部切り離しの後にヘラケズリがなされるという点において共通する。

8～10は、いずれも「く」の字状に外反する口縁部をもつ土師器甕である。

なお、図示できなかったが、本遺跡にいくつかみられるラセン暗文の施された土師器甕と同様

第30表 H-23号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

標記番号	器種	法数	形 状 の 特 徴	調 査 整	備 考
1 (完)	重 (須)	4.2 —	つまみ部は中央が粗状にくぼむ。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は比較的精選され灰白色 (7.5 Y 8 / 2)
2 (完)	杯 (須)	14.7 4.0 7.4	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラケリの後、 潤滑手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は中砂粒を多く含み灰白色 (10 Y 8 / 1)
3 (完)	杯 (須)	13.6 4.0 7.4	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後手持ち ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を含み灰白色 (7.5 Y 7 / 1) 焼成良好 内面に「明」の火押 痕は砂粒を含むが比較的精選され灰白色 (7.5 Y 7 / 1) 焼成良好
4 (完)	杯 (須)	14.3 4.0 8.8	体部は外反し、底部平底。 ほぼ完形。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転糸切りの後、 潤滑回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を含み灰白色 (5 Y 7 / 1)
5 (回)	杯 (須)	(13.6) 3.8 (7.7)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後、回 転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は中砂粒を含み灰白色 (5 Y 7 / 1)
6 (回)	杯 (須)	(14.3) 4.3 6.2	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転糸切りの後、 潤滑手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (Q 7 / 0)
7 (完)	？ (須)	— —	底部は扁平な丸底。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土は砂粒を含み灰白色 (7.5 Y 7 / 1)
8 (回)	壺	(13.3) —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は明赤褐色 (5 Y R 5 / 6)
9 (回)	壺	(24.0) —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は明赤褐色 (5 Y R 5 / 8)
10 (回)	壺	(23.3) —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は褐色 (7.5 Y R 6 / 6)



第70図 H-23号住居址出土遺物 (1 : 4)

な胎土をみせる土師器杯の破片が一片出土している。

石器では、4面が使用された流紋岩の小形な砥石が出土している (12)。また、13・

第31表 H-23号住居址出土遺物一覽表〈石器〉

標記番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
12	砥石	流紋岩 黒化物	(8.1)	4.5	3.0	(125)	
13	不明	安山岩	11.1	8.1	3.5	535	
14	不明	—	12.5	6.8	2.9	410	

14は河床礫で、この他2個とあわせて検出されたものである。編み物等における「おもり」になったものであろうか。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

(24) H-24号住居址

遺構 第71・72図

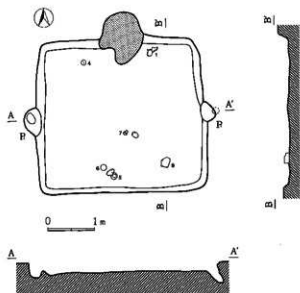
H-24号住居址は、第I区セー42グリッドに位置する。

本住居址は、南北3.28m東西3.6mの隅丸方形を呈し、床面積は10.0㎡を測り、主軸方向はN-2°-Wを指す。壁高は、10~20cmを測り、周溝は認められない。主柱穴は、東西の壁中に各1個ずつ認められた。P₁は東壁中央に認められる斜に穿たれたピットで、45cm×30cm深さ25cmを測る。P₂は西壁中央にあり、60cm×37cm深さ15cmを測る。

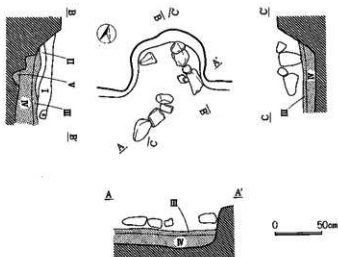
遺物は、4・5・6の坏が床面直上より出土した。6は正常位、4・5は伏せた状態で出土した。5の上には礫が乗っていた。9の台石は、機能面が上となって床面直上より出土した。

覆土はI層のみで、細粒バミスをよく含む粘性のある黒褐色土層であった。

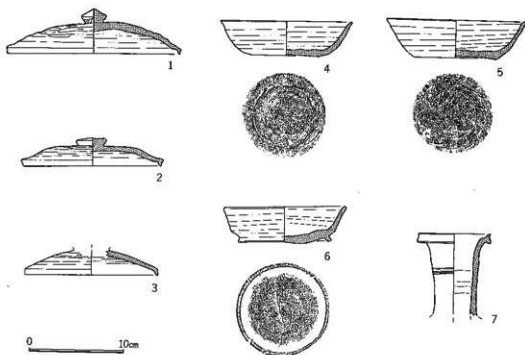
カマドは、北壁中央に位



第71図 H-24号住居址実測図(1:80)



第72図 H-24号住居址カマド実測図(1:80)



第73図 H-24号住居址出土遺物(1:4)

置し、すでに半壊した状態にあった。他のカマドに較べると壁外への突出が大きく、その主体部はやや奥まった部分にあったと考えられる。カマドの構材には、軽石・安山岩等が用いられていた。火床は、住居の貼床にある。貼床は、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの3層より構成される。Ⅲ・Ⅴ層は黒色土とロームが混じるもので、Ⅳ層は黒褐色土層である。カマド覆土は、Ⅰ層がカーボンをよく含む黒褐色土層で、Ⅱ層が焼土層である暗赤褐色土層であった。

遺物 第73・74図

遺物は、残存度の高い坏・蓋等が多かった割には、総出土量は少なかった。

1の須恵器蓋は、宝珠形つまみ部をもつものである。2つの須恵器蓋は、つまみ部が宝珠形ものが偏平化した形態といえようか。

4・5・6の須恵器坏は、いずれも向転糸切りによる底部をみせている。

7は須恵器長頸瓶の頸部である。二条の沈線が施されている。

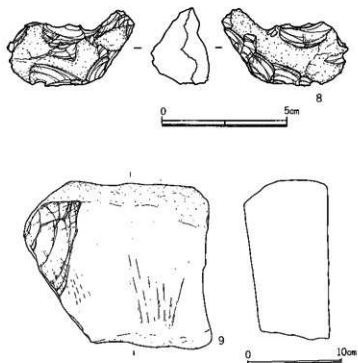
土師器は、甕の破片が十数個みられたのみであった。

石器は、8の黒曜石の小形品がみられた。小さな原石に剥離がなされたもので、石鏃等の素材を取るための石核とも考えられようか。剥離はさほど進行していない。

9は、安山岩の台石で、平坦な作業面が上になって検出された。作業面には顕著な線状痕がみ

第32表 H-24号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出 番号	器種	数量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (完)	蓋 (須)	2.7 4.8 18.3	つまみ部は宝珠形を呈する。	外面 ロクロヨコナゲの後、天井部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む暗青灰色 (5B4/1)
2 (完)	蓋 (須)	3.1 3.0 14.7	つまみ部は扁平な宝珠形を呈する。 底面。	外面 ロクロヨコナゲの後、天井部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を含み灰色 (5Y5/1)
3 (回)	蓋 (須)	- - 14.1		外面 ロクロヨコナゲの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ左回転)	胎土は精選され灰色 (5Y5/1)
4 (完)	杯 (須)	14.0 3.7 7.1	体部は丸味をおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナゲ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を含み赤褐色 (5YR5/4) 外側「+」の火傷
5 (完)	杯 (須)	14.8 4.0 8.7	体部は丸味をおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナゲ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (7.5Y7/1)
6 (完)	杯 (須)	13.0 3.0 14.7	体部は外反する。底部は丸味をおびた平底。貼り付け高台。	外面 体部ロクロヨコナゲ、底部は回転糸切りの後、 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む灰色 (N4/0)
7 (完)	長頸瓶 (須)	7.5 -	頸部はラッパ状を呈する。	外面 ロクロヨコナゲ、頸部中央に二条の沈線が施される 内面 ロクロヨコナゲ	胎土は黄褐色(6YR2/4) 内外面に自然釉付着



第74図 H-24号住居址出土遺物 (8 = 2 : 3, 9 = 1 : 4)

られた。

時期

本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡
第VII期に位置付けられよう。

第33表 H-24号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
8	不明	黒曜石	5.2	2.3	2.2	24	
9	台石	安山岩	19.5	17.1	9.8	6,000	

(25) H-25号住居址

遺構 第75・76図

H-25号住居址は、第I区セー
42グリッドより検出された。

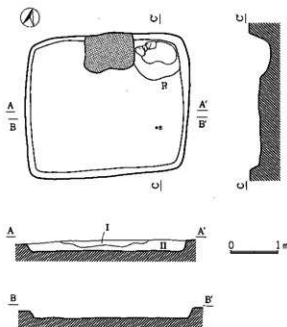
本住居址は、南北3.0m東西3.5mの隅丸方形を呈し、床面積8.5㎡を測り、主軸方向N-14°-Wを指す。壁高は、20～25cm前後を測り、周溝は認められない。柱穴と考えられるピットはまったく認められなかった。カマドの東脇から北東コーナーにかけては、95cm×85cm深さ20cmの大きな掘り込みとなっており(P₁)、カマドの構材であったと考えられる礎3点が検出され、また、2の坏も検出された。

遺物は、P₁から出土した2の坏以外は、いずれも良好な出土状態をみせなかった。

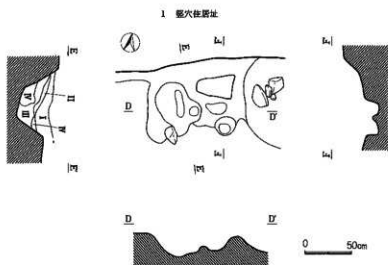
覆土は、2層に分層された。I層は、ローム粒子をよく含むやや粘性のある黒褐色土層で、II層は細粒バミスをよく含む粘性のある黒色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、壊滅状態にあり、その構材である軽石はP₁内に落ち込んでいる。図にはカマドの掘り方を示しておいた。火床部は一旦掘り込まれた後、III・IV層で埋め戻され浅く窪んだ状態にある。III層はロームを若干含む黒色土層、IV層はロームを多量に含む黄色土層である。カマド覆土は、I層が焼土を少量含む黒褐色土層、II層が赤褐色の焼土層である。

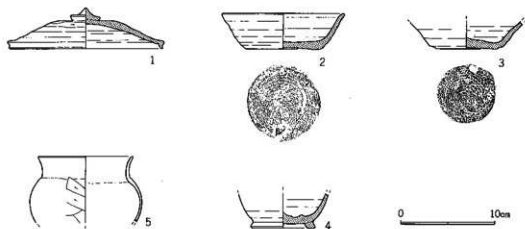
遺物 第77・78図



第75図 H-25号住居址実測図 (1:80)



第76図 H-25号住居址カマド実測図(1:40)



第77図 H-25号住居址出土遺物(1:4)

遺物は、須恵器では蓋・環・長頸瓶の各器種が、土師器では甕の破片がみられた。

1の須恵器蓋は宝珠形つまみ部を有するものである。

2、3の須恵器環は、いずれも回転糸切りによる底部を有するものである。

4は、須恵器長頸瓶の底部かと考えられる。高台が付されたものである。

5は、口縁部が直立気味に外反する球状の胴部をもつ土師器の小形甕である。

6は、鉄製の鎌の刃部である。錆が激しいが、完存品である。刃部の湾曲はさほど大きくない。

基部は一方側に僅かに折れ曲がるものと思われる。

時期

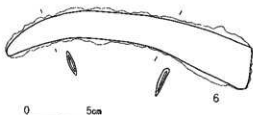
本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられる。

第34表 H-25号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標頭番号	器種	法量	器形の特徴	測 量	備 考
1 (回)	蓋 (須)	3.4 4.4 (16.4)	つまみ部は宝珠形を呈する。	外面 ロクロコナダの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ左回転)	胎土は大砂粒を 含む青灰色 (5B5/1) 外面「井」の火摺
2 (泥)	坏	13.1 3.8 7.9	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナダ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を 多く含む灰色 (N5/0) 外面「井」の火摺
3 (泥)	坏	— 3.8 6.2	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナダ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を 多く含む灰白色 (5Y7/1) 内外 面に「+」の火摺
4 (回)	長頸瓶 (須)	— 6.3	高台部は貼り付けによる。	外面 胴部ロクロコナダ、底部は高台部貼り付けの 後、ナダ。 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を 多く含む灰白色 (N7/0)
5 (回)	甕	(10.2) —	口縁部はあまり大きく外反せず、胴部は 球状を呈する。	外面 口縁部コナダの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナダ、胴部ヘラケズリ	胎土は赤褐色 (5YR4/6)

第35表 H-25号住居址出土遺物一覧表〈金属器〉

標頭番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
6	鎌	鉄	19.5	3.3	0.5	(110)	



第78図 H-25号住居址出土遺物 (1:3)

(26) H-26号住居址

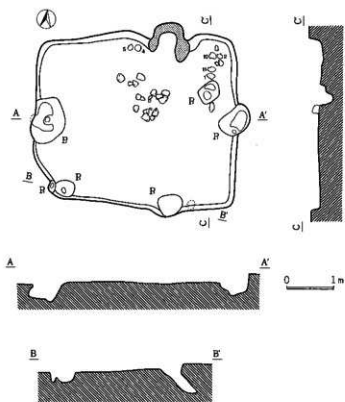
遺 構 第79・80図

H-26号住居址は、第I区ゾー42グリッドにおいて検出された。

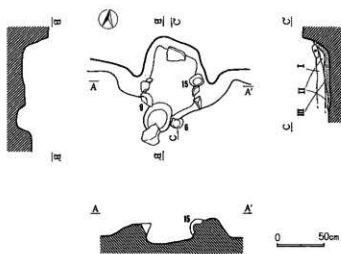
本住居址は、南北3.7m東西4.35mのやや歪んだ隅丸方形を呈し、床面積13.1m²を測り、主軸方向はN-10°-Wを指す。壁高は20~25cmを測り、周溝は認められない。ビットは、P₁~P₆の6個が検出されたが、このうち主柱穴と考えられるものは東西の両壁中に1個ずつみられるP₁とP₂である。P₁は70cm×70cm深さ27cm、P₂は100cm×70cm深さ40cmを測る。P₄・P₅も柱穴と考えてよいであろうか。P₄は40cm×35cm深さ23cmを測り南西コーナーに位置する。その隣りには25cm×15cm深さ10cmを測る小形のビットP₆がある。P₅は南壁中にかなり斜に開くもので、50cm×45cm深さ75cmを測る。P₃はI区にあるビットで、53cm×45cm深さ30cmを測る。

遺物は、須恵器環等が比較的良好な状態で出土した。カマド東の北東コーナーからは、1・2・10の須恵器環・11の須恵器長頸瓶底部が一括出土した。また、4・5の坏はカマドの西脇の床面上より検出された。カマド内からは、6・9の坏片が出土し、また15の石鉢は半欠した状態でカマドの東袖の構材に用いられていた。

1 塚穴住居址

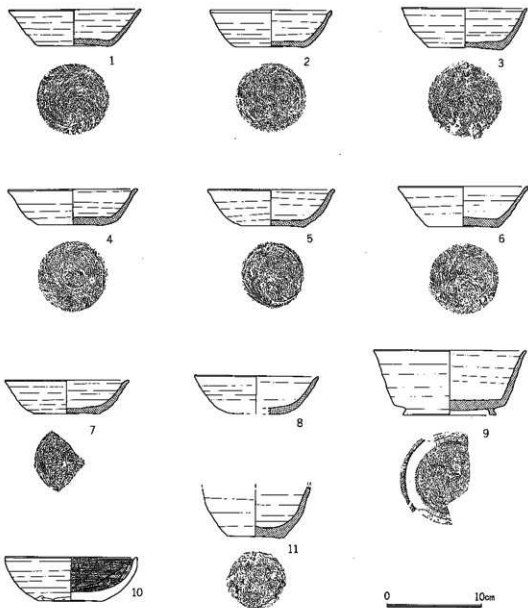


第79図 H-26号住居址実測図 (1 : 80)



第80図 H-26号住居址カマド実測図 (1 : 40)

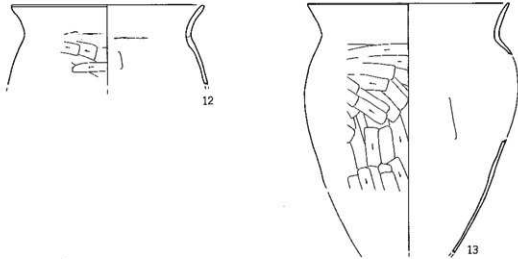
IV 遺構と遺物



第81図 H-26号住居址出土遺物 (1:4)

カマドは、北壁の中央よりやや東壁寄りに位置するが、すでに破壊状態にあった。図には掘り方を示したが、火床部は一旦掘り込まれた後黒色土(Ⅲ層)が埋め戻された状態のものである。また、掘り方の時点で袖部が意識されロームがいくぶん削り出されており、それに続いて軽石等の石材が配列されている。ただし、その構材となった石材の大部分は、カマドの前方部へ振り出された状態であった。カマドの覆土は2層に分層された。I層はカーボンを少量含む黒色土層、

1 墓穴住器址



第82図 H-26号住居址出土遺物(1:4)

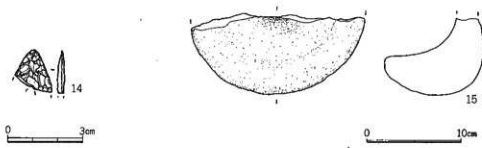
36

第36表 H-26号住居址出土遺物一覧表(土器)

標記 番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (完)	杯 (須)	14.1 3.9 7.8	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く 含む灰白色 (5Y7/1)
2 (完)	杯 (須)	12.9 3.9 7.2	体部はやや丸味をおびて外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され た白い褐色 (7.5YR5/3)内外 面に「井の火燗」
3 (完)	杯 (須)	13.4 4.2 7.8	体部はやや丸味をおびて外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含 み灰白色 (5Y7/1) 外面に「井の火燗」
4 (完)	杯 (須)	13.8 3.8 7.2	体部はやや丸味をおびて外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色(N5/0) 焼成時の油跡が アヘケ跡に付着
5 (完)	杯 (須)	13.6 3.9 6.9	体部はやや丸味をおびて外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色 (10Y 6/1)内外 面に「×」の火燗
6 (回)	杯 (須)	13.8 4.3 7.3	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 く含む灰色 (7.5Y6/1)
7 (回)	杯 (須)	13.2 3.6 7.1	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰色(10Y 6/1) 焼成時
8 (回)	杯 (須)	13.2 —	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部は回転糸切りの後、 周部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナデ(ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を 多量に含む灰色 (10Y 6/1) 外面に火燗あり
9 (回)	杯 (須)	16.2 6.9 9.9	高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロコナデ、底部は回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含 み灰色 (N5/0)
10 (完)	杯	14.1 4.7 6.7	体部は丸味をおびて外反し、口唇部はやや直立気味になる。 底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部手持ちヘラケズリ 内面 黒色鉄質 (ロクロ右回転)	胎土は精選され た白い褐色 (7.5YR5/4)
11 (完)	長頸瓶 (須)	— 6.1	瓶下半部はややふくらむ。 底部平底。	外面 胴部ロクロコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を多く 含む灰色(N5/0) 内外面に自然輪 付着

IV 遺構と遺物

12 (回)	甕	(20.5) —	口縁部は僅か「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナゲの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナゲ、胴部ヘラナゲ	胎土は褐色を呈する (7.5YR6/6)
13 (完)	甕	21.4 —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナゲの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナゲ、胴部ヘラナゲ	胎土はにぶい褐色 (7.5YR6/4)



第83図 H-26号住居址出土遺物 (14=2:3, 15=1:4)

II層は赤褐色の焼土層であった。

遺物 第81・82・83図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では環・長頸瓶・甕が、土師器では環・甕の器種がみられるが、とりわけ環類が

良好な遺存状態で一括出土したことは特徴的である。

1~7の須恵器環は、いずれも回転糸切りによる底部を有している。8の須恵器環も切り離しは回転糸切りによるが、その後周面に手持ちヘラケズリが加えられている。

9は、須恵器の高台付環で、底部は切り離しの後回転ヘラ削り加えられている。

10は、内面黒色研磨のなされた土師器環で、切り離しは回転糸切りによっている。

11は、須恵器の長頸瓶の底部と考えられるもので、切り離しは回転糸切りによる。

12は、土師器甕で、口縁部は僅か「コ」の字状に外反している。13は、「く」の字状に外反する口縁を有する土師器甕である。

14は、II区より検出された黒曜石の両面調整の石鎌である。両脚を古く欠損している。

15は、半欠する石鉢の断片で、カマドの袖石に用いられていたものである。

時期

H-26号住居址は、奈良~平安時代、前田遺跡第七期に位置付けられよう。

第37表 H-26号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

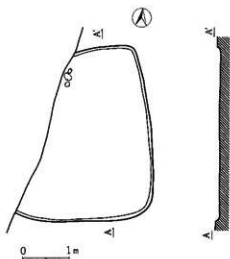
詳細図号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
14	石 鎌	黒曜石	(1.7)	1.6	0.3	(0.5)	
15	石 鉢	磨石 安山岩	18.4	(8.1)	10.7	1.940	

(27) H-27号住居址

遺構 第84図

H-27号住居址は、第I区ソ-42グリッドにおいて検出されたが、その西側部分を現在の水田造成時に大きく削平されてしまっている。

本住居址は、南北3.7m、東西は現況で2.9m残っており、隅丸方形のプランを呈していたものと考えられる。現状から推定した床面積は9.6㎡で、主軸方向はN-16°-Wを指す。壁高は10cm前後を測るのみで、周溝は認められない。柱穴や、その他ピットは一切検出されなかった。



第84図 H-27号住居址実測図(1:80)

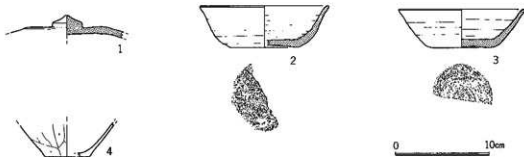
遺物は、原位置をとどめていると考えられるものは認められなかった。

カマドは、その構材であったと考えられる軽石等から、北壁中央に存在したと考えられるが、その部分はずでに削平されてしまっている状況にあった。

遺物 第85図

本住居址より検出された遺物はごく少量であったが、須恵器では蓋・坏・土師器では甕の破片が認められた。

- 1の須恵器蓋は、宝珠形つまみ部を有するものである。
- 2・3の須恵器坏は、いずれも回転糸切りによる底部を有している。
- 4の土師器甕は、底部のみで、口縁部の形状は不明であった。



第85図 H-27号住居址出土遺物(1:4)

第38表 H-27号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

種別 番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (回)	蓋 (須)	3.3 —	つまみ部は宝珠形を呈する。	外面 ロクロココナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロココナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (10Y7/1)
2 (回)	坏 (須)	(13.8) 4.4 (7.4)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロココナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロココナデ (ロクロ右回転)	胎土は珪藻土質灰 オリーブ色 (5Y5/2)焼成良好 内外面に火傷
3 (回)	坏 (須)	(13.5) 4.1 (6.2)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロココナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロココナデ (ロクロ右回転)	胎土は若干の砂粒を含み灰色 (10Y5/1)
4 (回)	甕	— (4.7)	底部平底。	外面 胴・底部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土はにぶい黄褐色 (10Y5/4)

時 期

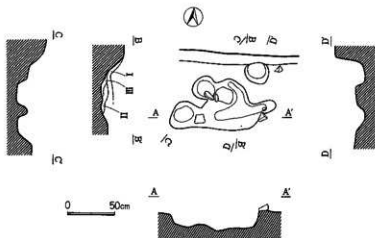
本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第Ⅶ期に位置付けられよう。

(28) H-28号住居址

遺 物 第86・87図

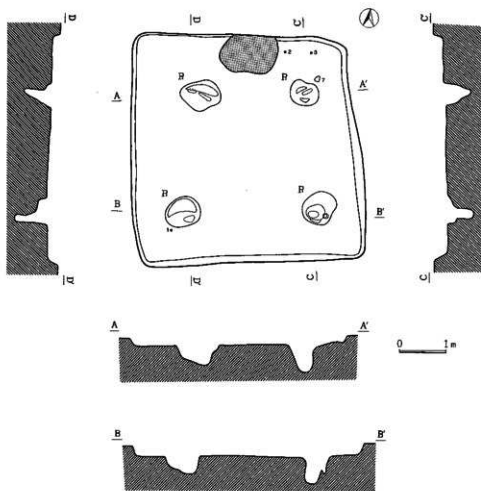
H-28号住居址は、第Ⅰ区セー41グリッドに位置し、H-29号住居址の大半を切っている。

本住居址は、南北5.0m東西4.95mの隅丸方形を呈し、床面積20.1㎡を測り、主軸方向はN-7°-Wを指す。壁高は、20cm～30cm程度を測り、周溝は認められない。主柱穴は、P₁～P₄の4



第86図 H-28号住居址カマド実測図(1:40)

1 竪穴住居址



第87図 H-28号住居址実測図 (1:80)

個が検出された。P₁は65cm×55cm深さ55cm、P₂は90cm×70cm深さ60cm、P₃は75cm×60cm深さ70cm、P₄は75cm×65cm深さ55cmを測る。いずれも掘り方は二段になっている。

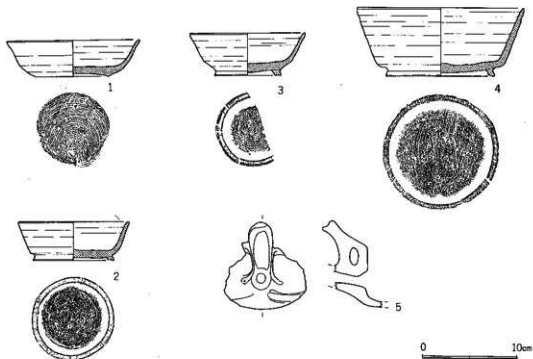
遺物は、カマド東脇より2、3の須恵器坏と7の台石が検出された。また、P₃の南からは1の坏が検出された。

覆土はI層のみで、細粒バミスをよく含む黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、壊滅状態にあった。図には、その掘り方を示したが、火床が作られる以前の浅い掘り込みと、袖石が嵌まっていたと考えられるピット3個が認められた。覆土は3層に分層された。I層は焼土を含む黒褐色土層、II層は赤褐色の焼土層、III層はローム粒子が若干混じる黒色土層であった。

遺物 第88図

IV 遺構と遺物



第88図 H-28号住居址出土遺物(1:4)

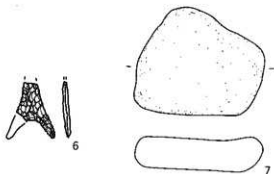
第39表 H-28号住居址出土遺物一覽表(土器)

標記 番号	器種	法量	器形の特 徴	圖	備 考
1 (完)	坏 (須)	14.1 3.9 7.9	体部は尖味をおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(7.5Y8/1) 内外面に「井」 の字 の文様
2 (完)	坏 (須)	11.8 4.1 8.7	体部はあまり強く外反しない。 高台が貼り付けられる。 完形。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は高台部貼り付けの 後、回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 緑灰色(6GY8/1) 焼成良好 内面に「井」の文様
3 (破)	坏 (須)	<12.4 4.5 7.0	体部は底端点をもって外反する。 高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は高台部貼り付けの 後、回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ(ロクロ右回転)	胎土は粘濁され 灰色(7.5Y6/1) 焼成良好
4 (破)	坏 (須)	(17.7) 7.3 11.7	体部はあまり強く外反しない。 高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は粗砂粒を 多く含む暗青灰色 (06B G 3/1)
5			縄文注口土器破片。 注口部円筒は欠失。		胎土は黄褐色 (2.5Y7/3) 床面直上出土

本住居址から検出された遺物には、須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕が、土師器では甕の破片があり、縄文器片も検出されている。

1は、回転糸切りのなされた須恵器坏である。2・3は高台付坏で、底部は回転ヘラケズリがなされている。4も高台付坏であるが、底部は全面手持ちヘラケズリがなされている。

5は、縄文中期後半の注口土器の破片である。筒状の注口部は欠損している。Ⅲ区床面直上か



第40表 H-28号住居址出土遺物一覧表<石器>

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
6	石鏃	チャート	(2.3)	(1.4)	0.2	(0.4)	
7	台石	玄武岩質 安山岩	11.3	13.4	4.0	860	

0 3cm

0 10cm

第89図 H-28号住居址出土遺物(6=2:3, 7=1:4)

らの出土で、本遺跡付近には縄文時代の遺構も認められないため、混入品ではなく、人の手による搬入品と思われる。どこかで目にとまった縄文土器が興味本位に住居内に持ち込まれたのであろうか。その他、図示しなかったが「く」の字状に外反する土師器製の口縁部もみられた。

石器では、6のチャートの両面調整の石鏃がみられた。また、7は偏平な河床礫の台石と考えられよう。

時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

(29) H-29号住居址

遺 構 第90図

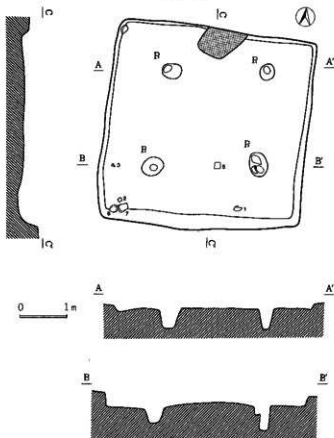
H-29号住居址は、第I区セー41グリッドにおいて検出された。その半分以上をH-28号住居址に破壊されるが、本住居址のほうが深いものであるために、その規模等を知り得た。

本住居址は、南北4.3m東西4.35mの隅丸方形を呈し、床面積15.5㎡を測り、主軸方向はN-3°-Wを指す。H-28に破壊されていない部分の壁高は30cmを測る。主柱穴は、P₁~P₄の4個が検出された。P₁は35cm×30cm深さ45cm、P₂は40cm×30cm深さ40cm、P₃は48cm×40cm深さ30cm、P₄52cm×37cm深さ52cmを測る。

図示した1~3・5・6の遺物は、III・IV区より検出されたもので、床面よりやや浮いた状態で出土している。

カマドは、焼土により北壁中央に存在することが確認されたが、H-28の構築等によりすでに破壊された状態にあった。

IV 遺構と遺物



第90図 H-29号住居址実測図 (1:80)

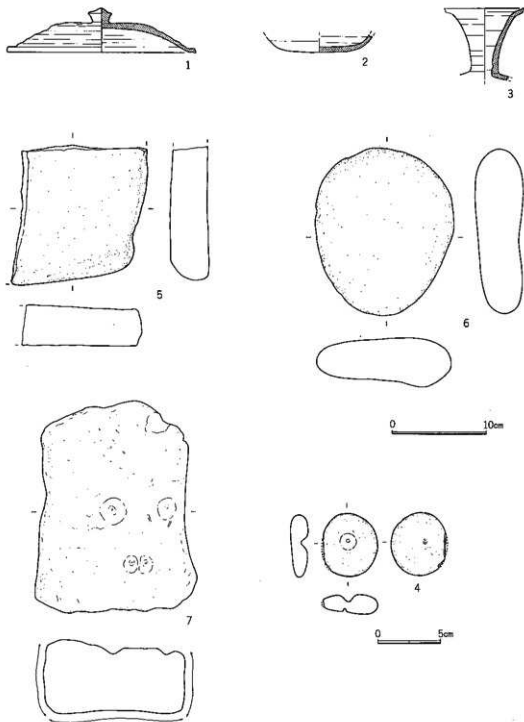
第41表 H-29号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

発見番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (完)	蓋 (須)	2.7 4.7 20.2	つまみ部は家珠形を呈する。	外面 ロクロコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 青灰色 (5B6/1) 焼成良好
2 (半)	杯 (須)	— 8.0	底面から体形への変換はゆるやか。 底面平底。	外面 体部ロクロコナデ、底面回転ヘラケリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含むに おいて赤褐色 (5YR5/3)
3 (完)	長頸瓶 (須)	8.6 —	頸部はラッパ状に外反するが、その下部 は比較的細くすぼまっている。	外面 ロクロコナデ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰色 (N4/0) 焼成良好

第42表 H-29号住居址出土遺物一覽表〈石器〉

発見番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
4	砂輪車?	砂岩	5.0	(4.3)	1.5	(25)	未成品
5	合石	輝石 安山岩	(4.5)	03.2	4.3	(1,760)	
6	不明	安山岩	17.7	14.7	5.4	2,140	
7	砥石	砂岩	22.1	16.9	7.9	4,600	

1 墓穴住居址



第91图 H-29号住居址出土遺物(4は1:3, 他は1:4)

遺物 第91図

遺物の出土量は少ないが、須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕が、土師器では甕の各器種がみられた。

1の須恵器蓋は、つまみ部が宝珠形を呈するものである。

2は、回転ヘラケリのなされた須恵器坏底部である。

3は、ラッパ状に開く須恵器長頸瓶の頸部である。

石器では、4の紡錘車未成品がある。偏平な円形の軽石に両側から穿孔がなされるが貫通していない。また、5は偏平な河床礫の台石である。6も偏平な河床礫で搬入石材であるが、用途は不明である。7は偏平な大形の砂岩の砥石で、表面一面と側面二面に研砥に供されており（図中矢印）、裏面は研砥に供されていないが4個の窪みがみられる。

なお、本住居址からはスラグ1点も出土している。

時期

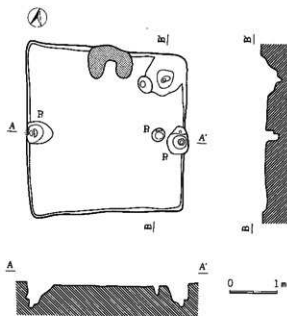
本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

(30) H-30号住居址

遺構 第92・93図

H-30号住居址は、第I区ソー42グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.6m東西3.33mの隅丸方形を呈し、床面積10.7㎡を測り、主軸方向はN-13°-Wを指す。壁高は10cm程度を測るのみである。周溝は認められない。支柱穴と考えられるのは、 P_1 ・ P_2 で、東西両壁に1個ずつ配されたものである。 P_1 は60cm×45cm深さ43cm、 P_2 は55cm×45cm深さ50cmを測る。 P_3 は、 P_1 の支柱のビットとも考えられるもので、30cm×25cm深さ27cmを測る。北東コーナーには P_4 ・ P_5 が接して存在する。 P_4



第92図 H-30号住居址実測図 (1:80)

1 竪穴住居址

は38cm×28cm、P₅は80cm×80cm深さ30cmを測る。

遺物は、1の須恵器蓋がカマド内より転倒した状態で出土した。

覆土は、パミス等をほとんど含まない暗褐色土層 I 層のみであった。

カマドは、北壁中央に存在している。半壊状態にあるが、東西両袖の袖石は旧状のまま土中に嵌っており、面取り軽石と安山岩の双方が用いられていた。カマド覆土は、I層が若干のカーボンを含む黒色土層、II層が焼土・カーボンをよく含む黒褐色土層であった。

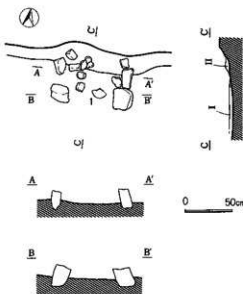
遺物 第94図

本住居址より検出された遺物は少ないが、須恵器では蓋・坏・土師器では甕がみられた。

1の須恵器蓋は、潰れた宝珠形のつまみ部を有するものである。

2の坏は、回転糸切りによる底部をみせる須恵器坏である。

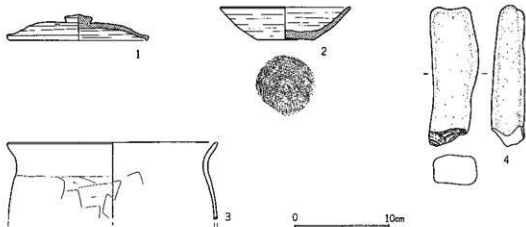
3は、僅か「コ」の字状に外反する土師甕



第93図 H-30号住居址カマド実測図 (1:80)

第43表 H-30号住居址出土遺物一覧表 <石器>

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
4	敲石	玄武岩質 安山岩	14.8	5.0	3.3	410	



第94図 H-30号住居址出土遺物 (1:4)

第44表 H-30号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標図 番号	器種	法量	器形の特 徴	調 整	備 考
1 (完)	甕 (須)	2.9 2.7 14.8	つまみ部は宝珠形を呈する。 完形。	外面 ロクロコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色 (10Y5/1)
2 (割)	坏 (須)	13.8 3.5 6.0	体部は大きく外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 く含み灰黄色 (2.5Y7/2) 地質は良好でない
3 (割)	甕	22.4 -	口縁部は壺か「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部コナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は赤褐色 (5YR4/8)

の口縁部である。

4は、細長い河床礫の敲石で、一端のみが敲打に供され、階段状に剥落している。

時 期

本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第七期に位置付けられる。

(31) H-31号住居址

遺 構 第95図

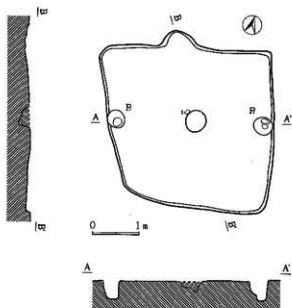
H-31号住居址は、第I区セー41グリッドにおいて検出された。ちなみに、F-41号獨立柱建物址のプランが延長し本住居址と重複した場合、本住居址よりF-41のほうが古いものとして捉えられよう。

本住居址は、南北3.4m東西3.65mの歪んだ隅丸方形を呈し、床面積10.8㎡を測り、主軸方向はN-17°-Wを指す。壁高は、僅か5cm程度を測るのみであった。支柱穴は、東西両壁際に各1個ずつ認め

られるもので、P₁は40cm×40cm深さ40cm、P₂が40cm×35cm深さ40cmを測った。

遺物は、住居中央の床面より正常位で1の須恵器坏が検出された。

覆土はI層のみで、粘性のある黒褐色土層であった。



第95図 H-31号住居址実測図 (1:80)

第45表 H-31号住居址出土遺物一覧表(土器)

発掘 番号	器種	寸法	器形の特 徴	備 考	
1 (4)	杯 (須)	(13.6) 3.3 7.0	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナテ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナテ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含 み灰白色 (5Y7/1) 外側に「+」の火焼

カマドは、北壁中央に存在したものと考えられ、北壁中央が半円状に突出している。

遺物 第96図

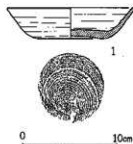
遺物のごく僅か検出されたのみであった。須恵器では杯・甕、土師器では甕の破片がみられた。

1の須恵器杯は、回転糸切りによる底部をみせるものである。

なお、図示でき得る遺物は、これ1点のみであった。

時期

本住居址は、その構造と切り合い関係・僅かな出土遺物より奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けておこう。



第96図 H-31号住居址
出土遺物(1:4)

(32) H-32号住居址

遺構 第97・98図

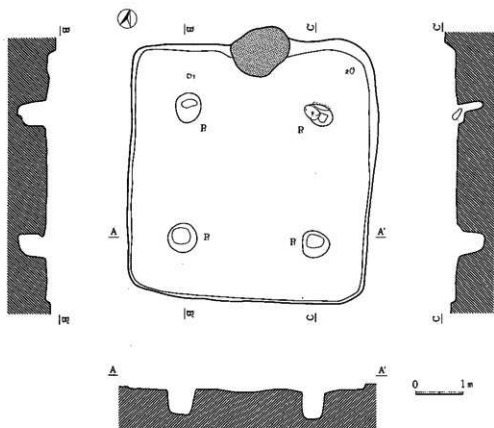
H-32号住居址は、第I区セー40グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北5.6m東西5.25mの隅丸方形を呈し、床面積25.3㎡を測り、主軸方向はN-22°-Wを指す。壁高は10-15cmを測り、周溝は認められない。主柱穴は、P₁~P₄の4個が検出された。P₁は60cm×40cm深さ55cmを測るもので、その上面には35cm×25cmの偏平な礎がみられた。P₂は60cm×55cm深さ60cm、P₃は60cm×60cm深さ57cmを測る。P₄は、60cm×60cm深さ60cmを測るが、そのピットの最下部には主柱が残存していた。詳細は後述するが、櫛バリノサーベいの樹種同定結果によるとクリ材であることが判明した。なお、残存した主柱の径は15cmを測り、少なくとも径15cm以上の柱が立っていたことが推察された。

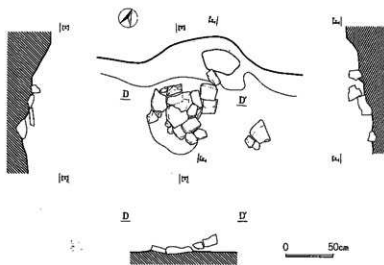
遺物は、北東コーナーの床面上より2の須恵器杯が、P₂の北の床面上からは1の須恵器杯が検出された。

カマドは、北壁中央に位置するが、住居址廃絶時に取り壊されたと考えられ、その構材であった面取り軽石は火床部にまとめて整然と残置されていた。ちなみに、これと同様な事例は、H-8・H-37・H-47号住居址において認められた。

IV 遺跡と遺物



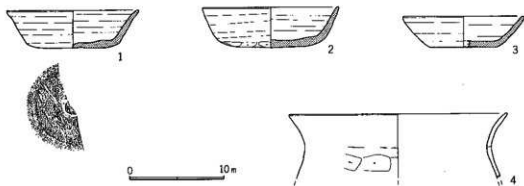
第97図 H-32号住居址実測図 (1 : 80)



第98図 H-32号住居址カマド実測図 (1 : 40)

第46表 H-32号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

押図番号	器種	法線	器形の特徴	調	整	備考
1 (回)	坏 (須)	(14.1) 4.0 (10.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリ ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は中砂粒を多く含む灰白色 (2.5Y8/2)
2 (回)	坏 (須)	(14.6) 4.3 (11.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 内面	ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリの後、手持ちヘラケズリ ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を多く含む灰白色 (10Y6/1)
3 (回)	坏 (須)	(12.9) 3.3 (7.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ、底部手持ちヘラケズリ ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む灰白色 (N8/0)
4 (回)	甕	(23.2) — —	口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は赤褐色 (5YR4/6)



第99図 H-32号住居址出土遺物 (1:4)

住居址覆土はI層のみで、若干のパミスを含み粘性のある黒色土層であった。

遺物 第99図

遺物は、須恵器では坏・甕が、土師器では甕が出土している。

- 1は、完全な還元炎焼成となっていない須恵器坏で、回転ヘラケリによる底部をみせている。
2は、回転ヘラケリの後、全面に手持ちヘラケズリのなされた底部をみせる須恵器坏である。3も底部切り離しの後手持ちヘラケズリのなされた須恵器坏である。
4は、「く」の字状に外反する土師器甕の口縁部である。この他、図示し得なかったが土師器小形丸底甕の底部もみられた。

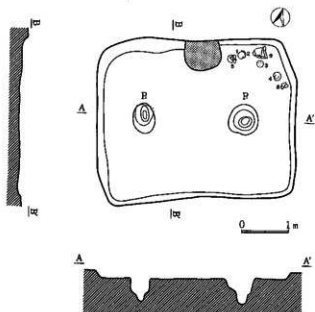
時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

(33) H-33号住居址

遺構 第100・101図

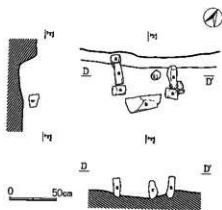
H-33号住居址は、第I区セー40グリッドにおいて検出された。本住居址は、南北3.5m東西4.25mの隅丸方形を呈し、床面積11.9㎡を測り、主軸方向はN-19°-Wを指す。壁高は10~15cmを測り、周溝は認められない。柱穴は住居の中央にP₁・P₂の2個が配されている。P₁は65cm×65cm深さ57cm、P₂は65cm×45cm深さ48cmを測る。双方のピットとも二段の掘り方となっている。



第100図 H-33号住居址実測図 (1:80)

遺物は、住居址の北東コーナ

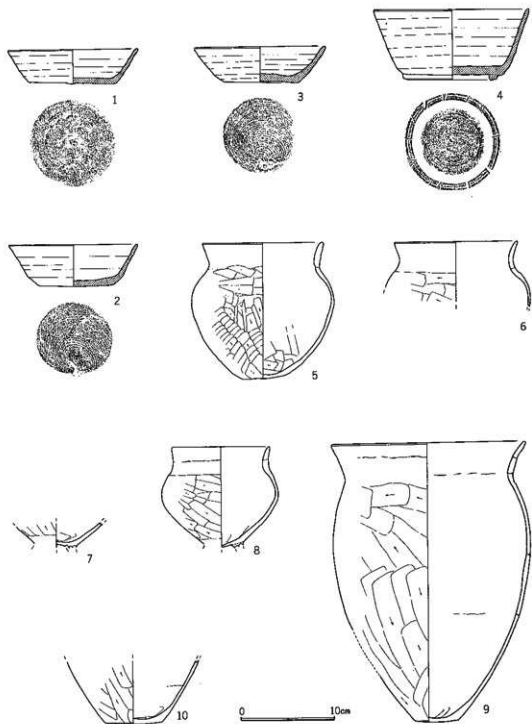
一よりきわめて良好な状態で検出された。これらはその出土状態や配列性からおおよそ原位置をとどめているものと考えられよう。まず、カマドの東脇からは5の小形甕が横倒しで潰れた状態で出土した。その東隣りには、半割した2の環が重ねて置かれ、さらにその上に1の環が重ねられている。さらにその東隣りには、9の甕が横倒しで潰れており、その南に3・4の環が正常位で検出された。その隣りには、8の小形台付甕がみられた。このような遺物の出土状態は、住居址内における機能空間を考えるうえで、きわめて示唆的といえる。



第101図 H-33号住居址カマド実測図 (1:40)

住居址覆土はI層のみで、細粒パミスをよく含む径5mm程度のパミスを若干含む粘性のある黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、その袖・天井部の石組みが比較的良好に残っていた。袖石(a)・天井石(b)には直方体に面取りした軽石が用いられていた。また、支脚は角柱状に面取りされた軽石であった(c)。袖石と天井石によって囲われた四角い部分が火床となっている。この石組



第四图 H-33号住居址出土遗物 (1:4)

第47表 H-33号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

発掘番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (完)	坏 (環)	13.9 3.5 9.3	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラキリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい褐色 (7.5 YR 5/4) 内外面に火傷
2 (完)	坏 (環)	13.7 4.4 7.7	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい褐色 (7.5 YR 5/4) 内外面に火傷
3 (完)	坏 (環)	14.1 3.8 8.0	体部は外反し、底部平底。 完形。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みオリブ灰色 (2.5GY 5/1) 外周 に火傷
4 (完)	坏 (環)	16.6 7.5 8.9	体部は外反する。 高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切りの後、高 台部貼り付け 内面 ロクロコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み 灰色 (N 4/0)
5 (完)	甕	13.0 — 14.4 4.9	口縁部は比較的直立的に外反し、胴部上 手のふくらむ小形の器形。 底部平底。	外面 口縁部コナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナデ、胴部ヘラナデ	胎土はぶい褐色 (7.5 YR 6/4)
6 (完)	甕	10.4 — —	口縁部がゆるく外反し、胴部のふくらむ 小形の器形。	外面 口縁部コナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナデ、胴部ヘラナデ	胎土は褐色 (7.5 YR 4/4)
7 (完)	台付甕	— — —	6と同一個体の可能性あり	外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ヘラナデ	胎土はぶい赤 褐色 (5 YR 5/4)
8 (完)	台付甕	10.4 — —	口縁部は外反気味に直立し、胴部のふくら む小形の器形。台部欠失。	外面 口縁部コナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナデ、胴部ヘラナデ	胎土は褐色 (7.5 YR 5/6)
9 (完)	甕	20.7 20.5 4.7	口縁部が「く」の字状に外反する長胴の 器形を呈する。底部平底。	外面 口縁部コナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明褐色 (7.5 YR 4/6)
10 (破)	甕	— — 6.0	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は明黄褐色 (10 YR 6/6)

みに粘土が貼られていたものかどうかは不明である。なお、両袖石間は85cmを測り、焚口から奥壁までは90cmを測った。カマド覆土中には、若干の焼土とカーボンがみられた。

なお、本住居址の廃絶状況は他と異なるものと考えられる。カマドを破壊したり、遺物を搬出したりすることのできなかった理由が、そこに介在していたものと思われる。

遺物 第102図

本住居址からは、比較的遺存度の高い土器がいくつか検出されている。器種は、須恵器では坏・甕が、土師器では甕がみられた。

1の須恵器坏は、回転ヘラキリによる底部をみせている。2～4は、回転糸切りによる底部をみせる須恵器坏で、このうち4は高台付坏である。

5は、土師器の小形甕である。また、6も5と同様な小形甕の口縁部があるが7と同一個体とも考えられ台付甕となる可能性もある。

8は、5・6よりさらに小形の土師甕で、台付となっている。ただし脚台部を失っており、その形状は明らかでない。

9は、土師器長胴甕で、口縁部は「く」の字状に外半するが、その口唇部が微妙に折れ僅か「コ」の字状に外反する要素も見出せる。

なお、本住居址において石器・鉄製品等は認められなかった。

時 期

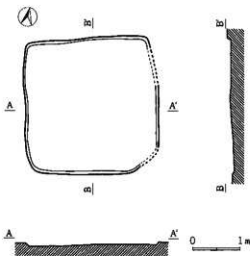
本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。

(34) H-34号住居址

遺 構 第103図

H-34号住居址は、第1区セ-40グリッドにおいて検出された。その東壁は、F-42号掘立柱建物址と重複しており、また、そのⅢ・Ⅳ区もF-56号掘立柱建物址と重複している。

本住居址は、南北2.92m東西2.85mの隅丸方形を呈し、床面積7.2㎡を測り、主軸方向はN-14°-Wを指す。壁高は10cm未満を測るのみであり、周溝は認められない。また、柱穴その他のピットは認められなかった。



第103図 H-34号住居址実測図(1:80)

遺物は、本住居址からは須恵器甕の破片が1片検出されたのみであった。

本住居址内には、壁際に焼土等も検出されず、カマドの痕跡が認められなかった。

なお、本遺構を居住施設として捉えてよいものかどうか疑問も残る。

遺 物

前述したように、本住居址から検出された遺物は、叩き目のある須恵器甕の破片1片のみである。

時 期

本住居址は、その構造・規模と切り合い関係のみを手がかりとして時期決定するほかないが、一応、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期と捉えておこう。

(35) H-35号住居址

遺構 第104図

H-35号住居址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。僅かにその南東コーナーが検出されたのみであり、F-83・F-84号孤立柱建物址と重複するが、その新旧関係は明らかでない。

本住居址は、その規模・構造ともに不明と言わざるを得ないが、もし4本の主柱をもつものであればしかるべき位置に柱穴が検出されてよいはずである。しかし柱穴は認められなかった。ただし、そのIV区においてP₁が検出されたが、本住居址に伴うかどうかははっきりしなかった。したがって基本的には無柱穴のタイプの住居址として捉えておこう。

その主軸方向は、おおよそN-17°-Wを指すものと思われる。

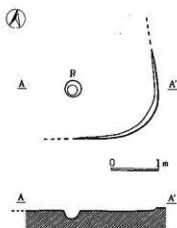
カマドの存在の有無は、確認することができなかった。

遺物

本住居址においては、遺物は1点も検出されなかった。

時期

本住居址は時期決定が困難であるが、周囲の遺構の時間的位置付けをふまえて、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期の所産と考えておきたい。

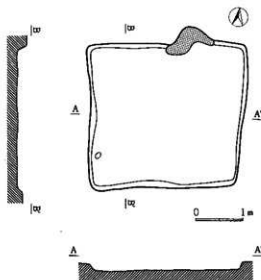


第104図 H-35号住居址実測図 (1:80)

(36) H-36号住居址

遺構 第105・106図

H-36号住居址は、第I区セ-40グリッドより検出された。本住居址は、H-37号住居址を切って存在し、また、F-55号孤立柱建物址と重複する。本H-36とF-55の新旧関係については、現場において確認できなかったが、F-55が新しいものと考えられよう。



第105図 H-36号住居址実測図 (1:80)

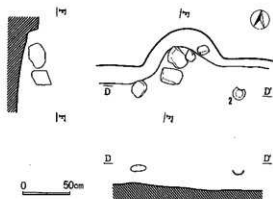
1 整穴住居址

本住居址は、南北3.1m東西3.4mの隅丸方形を呈し、床面積8.9㎡を測り、主軸方向N-8°-Wを指す。壁高は15~20cmを測り、周溝は認められない。柱穴その他のピットは伴わなかった。

遺物は、2の環が正常位でカマド東脇より検出されたが、床面より15cm浮いた状態であった。

覆土はI層のみで、若干のパミスを含み粘性のある黒色土層であった。

カマドは、北壁中央よりやや東寄りに存在するが、ほぼ壊滅状態にあり、その構材であった軽石や安山岩礫がいくつかみられた程度であった。

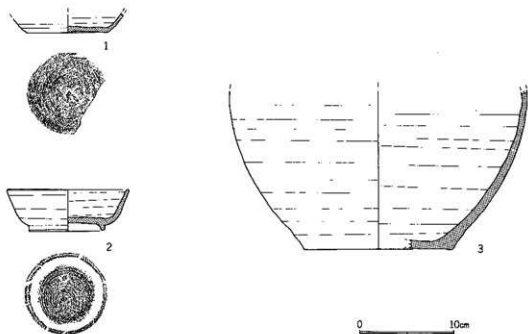


第16図 H-36号住居址カマド実測図(1:40)

遺物 第107図

遺物の検出量は少ないが、須恵器では環・甕が、土師器では甕の各器種がみられた。

1の須恵器は、回転ヘラキリの底部をみせる環である。



第107図 H-36号住居址出土遺物(1:4)

第48表 H-36号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

部 位 番 号	器 種	法 量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	坏 (須)	- 8.5	体部は外反する。底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラキリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色 (10Y7/1) 内面に火傷痕あり 胎土は黒砂粒を多く含み灰色 (N5/0)内面に「目」の火傷
2 (完)	坏 (須)	13.0 4.5 8.1	体部は外反し、底部には高合が貼り付けられる。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転系切り 内面 ロクロコナデ (ロクロ左回転)	
3 (破)	甕 (須)	- (15.8)	底部平底。	外面 胴部ロクロコナデ 内面 胴部ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (10Y6/1)

2は、回転系切りの底部をみせる須恵器台付坏である。

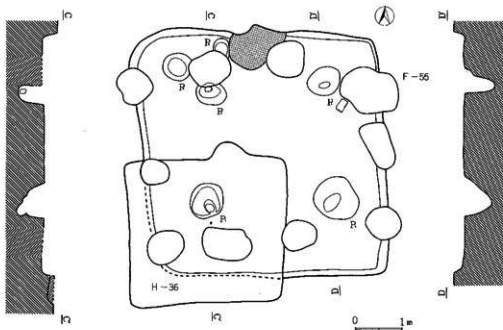
なお、図示し得なかったが、「く」の字状口縁の土師器甕破片もみられた。

時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

(37) H-37号住居址

遺 構 第108・109図

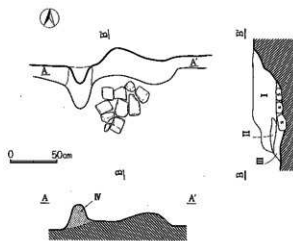


第108図 H-37号住居址実測図 (1:80)

1 竪穴住居址

H-37号住居址は、第I区セー40グリッドにおいて検出されたが、H-36号住居址およびF-55号独立柱建物址の双方に切られている。

本住居址は、南北5.15m東西5.3mの隅丸方形を呈し、床面積24.1㎡を測り、主軸方向はN-6°-Wを指す。壁高は15~30cmを測り、周溝は認められない。支柱穴はP₁~P₄の4個が検出され、その他II区よりP₅・P₆が



第108図 H-37号住居址カマド実測図 (1:40)

検出された。P₁は70cm×60cm深さ60cm、P₂は55cm×50cm深さ55cm、P₃は80cm×70cm深さ60cm、P₄は95cm×85cm深さ55cmを測る。P₅は45cm×35cm、P₆は65cm×60cmを測る。

覆土はI層のみで、ロームの若干混入する黒色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、住居廃絶時に取り壊されたと考えられ、その構材であった面取り軽石は火床部にまとめて整然と残置されていた。なお、粘土 (IV層) の貼られた東側の袖は若干残っていた。カマド覆土は、3層に分層された。I層は灰を含む黒灰色土層、II層は二次的堆積のローム層、III層は若干のカーボンを含む黒色土層であった。ちなみに、本カマドと同様な事例は、H-8・H-32・H-47に認められた。

遺物 第110図

遺物は、須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕が、土師器では坏・甕の各器種がみられた。

須恵器蓋では、1のようにかえりを有するものと、2のかえりを有さないものの二種がみられた。両者のつまみ部の形状は不明である。

須恵器坏には3~6があるが、いずれも切り離しは回転ヘラケリによっており、その後手持ちヘラケズリか、回転ヘラケズリの加えられたものであった。

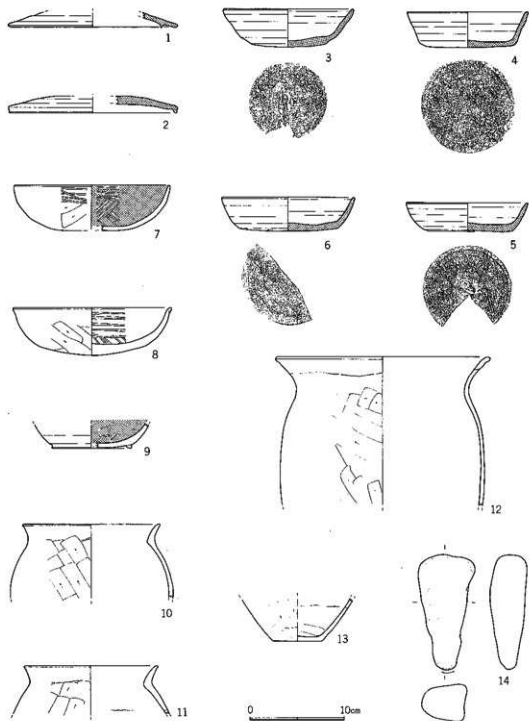
土師器坏には、ロクロ整形により内面黒色研磨のなされる7・9 (高台付) と、ロクロを用いられず内面もヘラミガキのみの8がある。

土師器甕には、胎土が精選されず肉厚で小形の器形の10・11と、「く」の字状に外反する口縁部をみせる薄手の長胴甕12がみられた。

石器では、敲打痕は顕著に認められないが敲石と考えられる14がIV区より出土している。

時期

IV 透網と遺物



第110図 H-37号住居址出土遺物(1:4)

第49表 H-37号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

押印番号	器種	注量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (内)	蓋 (須)	— <18.0>	内面にかえりを有する。	外面 ロクロコナデ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰白色 (5Y8/1) 焼成良好
2 (内)	蓋 (須)	— <18.0>		外面 ロクロコナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選され 黄灰色 (2.5Y6/1) 焼成良好
3 (内)	杯 (須)	14.0 4.1 8.0	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラケリの後、 若干の手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は中体部を 多量に含む褐色 (5YR5/6) 焼成不良
4 (完)	杯 (須)	13.0 3.8 10.0	体部は直線的に外反し、底部平底。 完形。	外面 体部ロクロコナデ、底部は切り離しの後、手 持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰オリーブ色 (5Y6/2) 焼成良好
5 (内)	杯 (須)	13.0 3.1 9.4	体部は外反し、底部平底。 器高は短い。	外面 体部ロクロコナデ、底部は回転ヘラケリの後、 回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 緑灰色 (10GY5/1) 焼成良好
6 (内)	杯 (須)	(14.2) 3.6 10.5	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は比較的精選 され灰色 (N5/0)
7 (内)	杯	<16.6> <4.8> —	体部は丸味をおびて外反する。 底部は扁平な丸底。	外面 体部および底部ヘラケズリ、口唇部ヨコヘラ イガキ 内面 黒色研磨	胎土は砂粒を多 く含む灰白色 (10YR8/2)
8 (内)	杯	<16.8> 5.0 11.4	体部は丸味をおびて外反する。 底部は扁平な丸底。	外面 ロ唇部コナデの後、体部および底部ヘラケズ リ 内面 ヨコヘライガキ	胎土は砂粒を多 く含む、にぶい 褐色(7.5YR5/4)
9 (内)	杯	— (8.4)	体部は外反し、底部には高台が貼り付け られる。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 黒色研磨 (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰黄色 (2.5Y8/3)
10 (内)	甕	<14.6> — —	口縁部は短く外反し、胴部はふくらむ小 形の器形。	外面 ロ縁部コナデの後、胴部ナメのヘラスベリ 内面 ロ縁部コナデ、胴部ヘラナデ	胎土は天部を多 量に含む明赤 褐色(5YR5/8) 焼成はよくない
11 (内)	甕	<14.2> — —	口縁部は短く「く」の字状に外反する。 小形の器形。	外面 ロ縁部コナデの後、胴部ナメのヘラケズリ 内面 ロ縁部コナデ、胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を含 みにぶい褐色 (7.5YR5/4)
12 (内)	甕	<22.7> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 ロ縁部コナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 ロ縁部コナデ、胴部ヘラナデ	胎土は比較的精選 され褐色 (7.5YR6/6)
13 (内)	甕	— (5.2)	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土はにぶい黄 色 (2.5Y6/3)

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に
位置付けられよう。

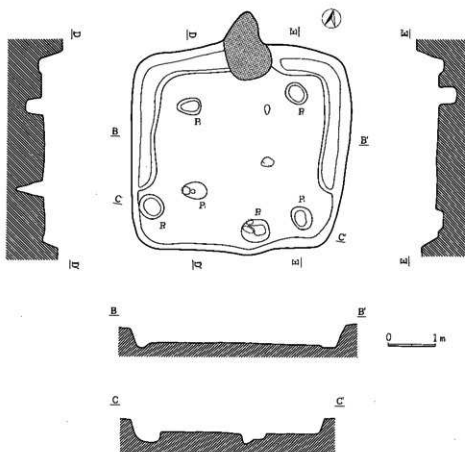
第50表 H-37号住居址出土遺物一覽表〈石器〉

押印番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
14	敷石	玄武岩質 金山灰	12.2	6.0	4.1	345	

(38) H-38号住居址

遺 構 第111・112図

H-38号住居址は、第I区セー40グリッドにおいて検出された。



第III図 H-38号住居址実測図 (1:80)

本住居址は、南北4.4m東西4.7mの隅丸方形を呈し、床面積16.1㎡を測り、主軸方向はN-13°-Wを指す。壁高は30~40cmを測る。周溝は幅30cm深さ10cm程度を測る幅広のものが、南壁と東西両壁の一部を除いて巡っている。支柱穴は、P₁~P₃の3個が検出され、また柱穴かどうかかわからないがP₄・P₅・P₆の3個が南壁寄りに検出されている。P₁は50cm×40cm深さ40cm、P₂は50cm×35cm深さ35cm、P₃は50cm×35cm深さ55cm、P₄は50cm×40cm深さ15cm、P₅は55cm×50cm深さ20cm、P₆は60cm×50cm深さ20cmを測る。なお、P₆際の南壁は僅かに突出する。

遺物は、良好な出土状態を示すものは認められなかった。

覆土はI層のみで、径5mm程度の軽石をよく含む粘性のある黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置し、半壊状態にあったが、かろうじて両側の袖石の一部と支脚石が生きていた。その構材には二点の安山岩(a)を除き面取り軽石(e)が用いられていた。また、支脚石(c)も角柱状に面取りされた軽石であった。天井部には、一部粘土が用いられていたと

考えられ、セクションにおいてIII層として認められた。なお、覆土I層は若干の粘土・焼土を含む黒色土層、II層はロームが混入し若干の焼土を含む黒褐色土層であった。

遺物 第113図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕の各器種がある。

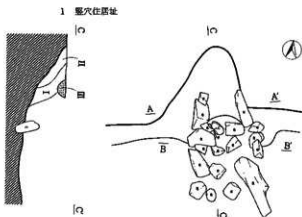
1は、回転ヘラキリのなされた底部をみせる須恵器坏である。

2は、体部が弓なりに外反し、底部が扁平な丸底の形態をとる土師器坏である。

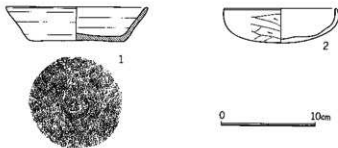
須恵器甕は、破片のみで、器形を知り得る良好なものはない。

土師器甕は、図示しなかったが、「く」の字状の口縁をみせる薄手の甕と、胎土が精選されず肉厚な甕の破片が認められた。

時期



第112図 H-38号住居址カマド実測図 (1:40)



第113図 H-38号住居址出土遺物 (1:4)

第51表 H-38号住居址出土遺物一覧表 (土器)

図号 番号	器種	数量	器形の特徴	調査	備考
1 (完)	坏 (須)	15.0 3.7 10.0	体部外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選され 灰白色 (10Y7/1) 焼成良好
2 (完)	坏	12.0 3.7 —	口縁部は内湾し、底部は扁平な丸底。	外面 口縁部ヨコナデ、体部および底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を多 く含む明褐色 (7.5Y5/6)

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

(39) H-39号住居址

遺構 第114・115図

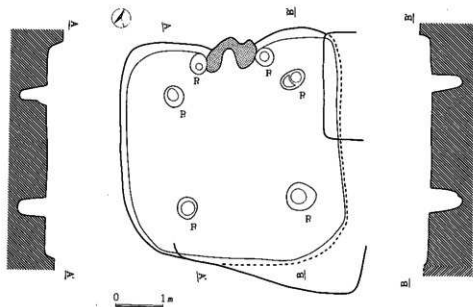
H-39号住居址は、第I区セー40グリッドにおいて検出された。その大半をH-47号住居址に切られ、さらにその第I区の壁際をH-40号住居址に切られていた。しかし、本H-39がいちばん深い掘り込みであった為、そのプランを知り得ることができた。

本住居址は、南北4.85m東西4.6mの隅丸方形を呈し、床面積19.9㎡を測り、主軸方向はN-24°-Wを指す。壁高は、他の住居址に破壊されていない部分において30cm程度を測り、周溝は認められない。主柱穴は、P₁～P₄の4個が検出された。P₁は、53cm×40cm深さ56cm、P₂は45cm×40cm深さ60cm、P₃は50cm×45cm深さ60cm、P₄は63cm×60cm深さ70cmを測る。

遺物は、良好な出土状態のものは認められなかった。

覆土はI層のみで、カーボンを若干含む黒色土層であった。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに壊滅状態にあり、僅かにその掘り方となる袖部のロームの張り出しが認められたにすぎない。また袖の両脇には、P₅・P₆が認められた。P₅は43cm×40cm深さ17cm、P₆は36cm×30cm深さ12cmを測った。両者は、長胴甕等でも据えておくビットだっ



第114図 H-39号住居址実測図(1:80)

1 墓穴住居址

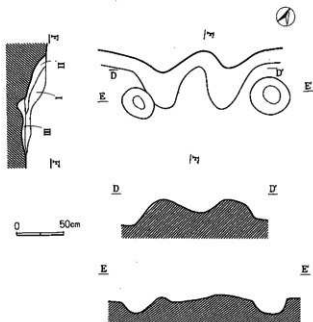
たのであろうか。カマド覆土は3層に分層された。I層は焼土・カーボンに多量の灰を含む灰褐色土層、II層が灰を含む黒色土層、III層がカーボンをよく含む黒色土層であった。

遺物 第116図

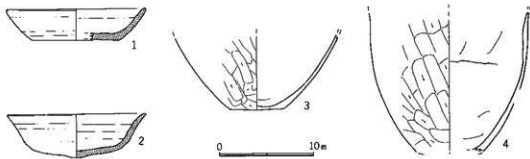
検出された遺物は少ないが、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕の破片がみられた。

1・2は、共に回転ヘラケリのなされた底部をみせる須恵器坏である。

須恵器甕は、破片のみであり



第115図 H-39号住居址カマド実測図 (1:40)



第116図 H-39号住居址出土遺物 (1:4)

第52表 H-39号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

博覧 番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (回)	坏 (須)	<14.8> 3.3 <9.1>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂質を含み 灰色 (N6/0)
2 (回)	坏 (須)	<14.7> 4.6 (9.5)	体部は外反し、底部はふくらみをおびた 平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラケリの後、 若干の手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナデ(ロクロ右回転)	胎土は砂質を多 量に含みにふい 黄褐色 (10YR 7/4)
3 (回)	甕	- (5.8)	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は明赤褐色 (5YR 5/6)
4 (回)	甕	- -		外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	胎土は濃い赤 褐色 (10YR 5/3)

大方の器形を知り得なかった。

土師器坯は、図示できなかつたが、体部が弓なりに外反し底部が偏平な丸底となる内面黒色研磨のなされたものが1点みられた。

3・4は土師器長胴甕の胴～底部であるが、これに対応すると考えられる「く」の字状の口縁部破片も認められた。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

(40) H-40号住居址

遺構 第117・118図

H-40号住居址は、第I区ゾー40グリッドにおいて検出され、H-39およびH-47号住居址の北東コーナーの一部を切って存在している。

本住居址は、南北2.4m東西2.35mの隅丸方形を呈し、床面積4.7㎡を測るのみの非常に小形のものである。主軸方向はN-70°-Eを指す。壁高は15cm程度を測り、周溝は認められない。ピットはまったく検出されなかつた。

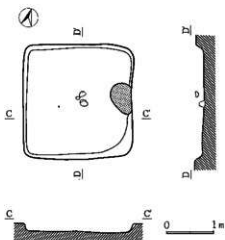
遺物は、良好な出土状態を示すものはみられなかつた。

覆土はI層のみで、細粒パミスを若干含む粘性のある黒灰色土層であった。

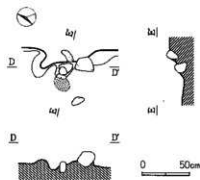
カマドは、他の多くの住居址とは異なり東壁の中央に存在した。すでに半壊状態であったが、いずれにしても本来は貧弱なカマドであったことが窺えた。その構材であった安山礫等4点が残りに、炭化物が火床部に集中的にみられた(網点)。

なお、その規模等から本遺構を居住施設として位置付けるのには疑問も残ろう。

遺物 第119図



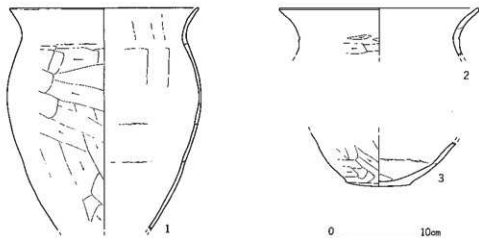
第117図 H-40号住居址実測図 (1:80)



第118図 H-40号住居址カマド実測図 (1:40)

第53表 H-40号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出 番号	器種	注記	器 形 の 特 徴	測 定	備 考
1 (回)	甕	<20.1> —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部および胴部ヘラナデ	胎土は緑色 (5YR 6/6)
2 (回)	甕	<21.3> —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土はにぶい黄 褐色 (10YR 7/4)
3 (完)	甕	— 6.9	底部平底。	外面 胴部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土はにぶい褐色 (7.5YR 6/4)



第119図 H-40号住居址出土遺物(1:4)

遺物の検出量はきわめて少ないが、須恵器では坏・甕の破片が、土師器では甕の破片がみられた。

須恵器の破片では、底部の調整方法は知り得るものがなかった。

土師器甕は、1・2のように「く」の字状に外半する口縁部をもつものがみられた。

時 期

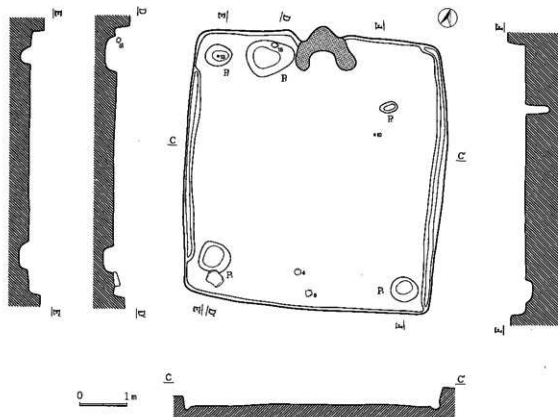
本住居址は、その規模・構造・切り合い関係・乏しい遺物等より、奈良～平安時代、前田遺跡第Ⅷ期のものと捉えておこう。

(41) H-41号住居址

遺 構 第120・122図

H-41号住居址は、第Ⅰ区ゾー39グリッドにいて検出された。

IV 遺構と遺物



第126図 H-41号住居址実測図 (1:80)

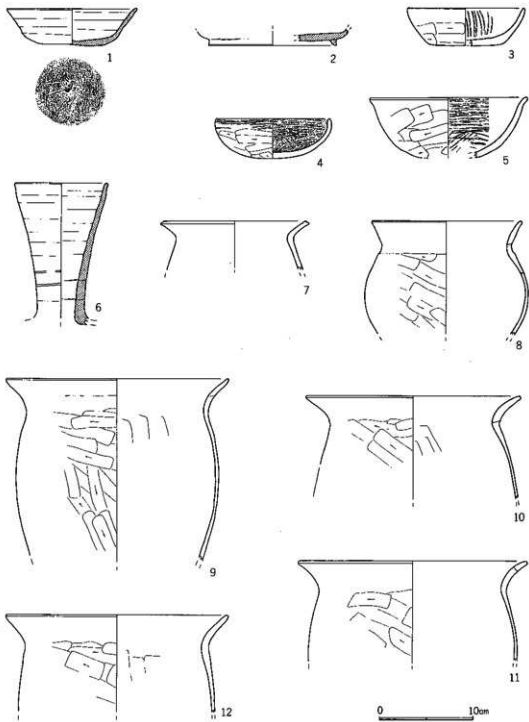
本住居址は、南北5.8m東西5.5mの隅丸方形を呈し、床面積29.1㎡を測り、主軸方向はN-13°-Wを指す。壁高は25~40cmを測る。周溝は幅15cm深さ7cm程度のもので、東西両壁際に認められる。主柱穴としては、P₁~P₄の4個が認められたが、P₁がI区中央に位置し径が小さく深めのビットであるのに対し、P₂~P₄はそれぞれ住居址のコーナー寄りにある径の大きい浅めのビットであった。P₁は40cm×20cm深さ50cm、P₂は58×45cm深さ20cm、P₃は70cm×70cm深さ20cm、P₄は55cm×60cm深さ15cmを測る。また、カマドの両脇にはP₅があり100cm×80cm深さ20cmを測る。

遺物は、良好な出土状態を示したものに、南壁寄りから正常位で出土した4の坏、P₁付近から出土した10の土師器甕、P₂中から出土した鎌、P₅の上面から出土した15の紡錘車がある。

覆土はI層のみで、小粒バミスをよく含む粘性のある黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置し、半壊状態にあったが、東西両袖の袖石が残っていた。袖口には例外なく面取り軽石が用いられ、白色粘土層(VII層)によって固められてきた。袖石で特徴的なのは、手前の両袖と東袖の後部に「」状に面取りされた軽石が用いられていたことである。カマ

1 墓穴住居址



第12图 H-41号住居址出土遗物(1:4)

ド覆土は6層に分層された。I層がブロック状にみられる灰の堆積、II層が灰を含む灰褐色土層、III層は焼土と少量のカーボンを含む黒色土層、IV層が赤褐色の焼土層、V層がカーボンと少量の焼土を含む黒色土層、VI層は焼土・カーボンを含まない黒褐色土層であった。

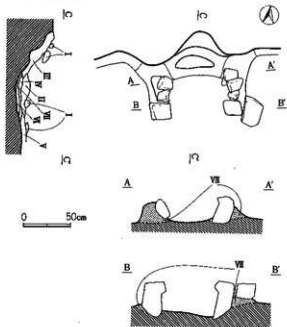
遺物 第121・123図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では坏・長頸瓶・甕、土師器では坏・甕がある。

1は、回転ヘラキリによる底部をみせる須恵器坏で、2は底部が回転ヘラケズリのなされた須恵器高台付坏である。

3は、体部に放射状暗文の施された特徴的な坏で、底部にはあるいはラセン状暗文がなされていた

IV 遺構と遺物



第122図 H-41号住居址カマド実測図 (1:40)

第54表 H-41号住居址出土遺物一覧表 <金属器・石器>

発掘番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
13	鏝	鉄	15.3	2.6	0.8	(57)	
14	鉄鏝	鉄	(6.7)	0.7	0.5	(8)	
15	紡錘車	軽石	10.4	13.1	5.6	420	

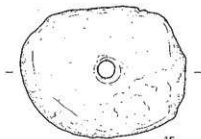


13



14

0 10cm



15



第123図 H-41号住居址出土遺物 (1:3)

第55表 H-41号住居址出土遺物一覧表(土器)

神図 番号	器種	質量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	環 (項)	13.9 3.8 7.0	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み、ぶい赤褐色(5YR5/4)底部に[●]のヘラ記号
2 (回)	環 (項)	— <13.6>	高台が付される。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み赤灰色(5P6/1)
3 (回)	環	<12.5> 4.0 <7.8>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部上半ヨコナデ、体部下半および頸部ヘラケズリ 内面 体部に放射状施文	胎土は赤褐色の粘土を特徴的に含み、淡黄褐色(7.5YR5/8)
4 (完)	環	12.1 4.3 —	体部は丸味をおび、口唇部で内湾する。底部平底。	外面 体部下半一底部ヘラケズリ、体部上半ヨコナデ 内面 黒色研磨	胎土は砂粒を含み淡黄色(2.5Y8/4)
5 (回)	環	<16.8> —	体部は丸味をおびて外反し、さらに口唇部は短く外反する。	外面 口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	胎土は砂粒を含み明赤褐色(2.5YR5/6)
6 (回)	長頸瓶 (項)	<10.0> —	頸部は頸状に開いて素口縁となり、その下半には二条の沈線が施こされる。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を含み灰色(7.5Y6/1)焼成良好
7 (回)	甕	<16.7> —	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁の端部は平坦に縁取られている。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は均質されにぶい赤褐色(7.5YR6/4)焼成良好
8 (回)	甕	<16.0> —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部のふくらむ小形の器形。	外面 口縁部ロクロヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部・胴部ヨコナデ	胎土はぶい黄褐色(10YR6/4)
9 (回)	甕	(23.9) —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はぶい黄褐色(10YR7/4)
10 (完)	甕	22.9 —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はぶい赤褐色(5YR5/4)
11 (回)	甕	<24.4> —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色(5YR5/8)
12 (回)	甕	<23.8> —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色(5YR5/8)

かもしれない。4は内面黒色研磨のなされた土師環で、体部は丸味をおび口唇部で内湾するものである。5は、内面にヘラミガキのなされた土師環である。

6は素口縁の須臾器長頸瓶で、頸部には二条の沈線が施こされている。胴部の器形は不明。

7は、口縁の端部が平坦に縁取られた土師甕の口縁部である。8は、土師器の小形甕である。

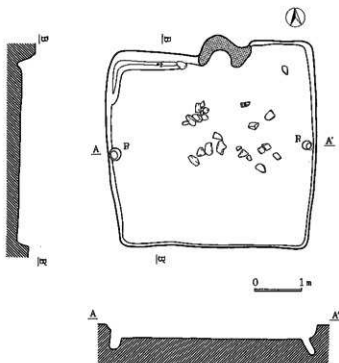
9・10・11・12は、「く」の字条に外反する口縁をみせる土師甕である。

鉄製品では、13の鎌と、14の鉄鎌の基部が検出されている。

石器では、楕円形で偏平に面取りされた軽石製の大型紡錘車15がみられる。

時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。



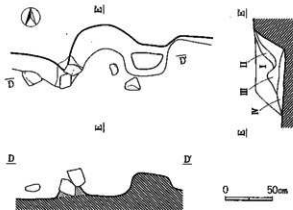
第124図 H-42号住居址実測図 (1:80)

(42) H-42号住居址

遺構 第124・125図

H-42号住居址は、第I区ソー38グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.4m東西4.5mの隅丸方形を呈し、床面積16.7㎡を測り、主軸方向はN-2°-Wを指す。壁高は、30cm前後を測る。周溝は北西コーナーにみいてのみ認められる。主柱穴と考えられる



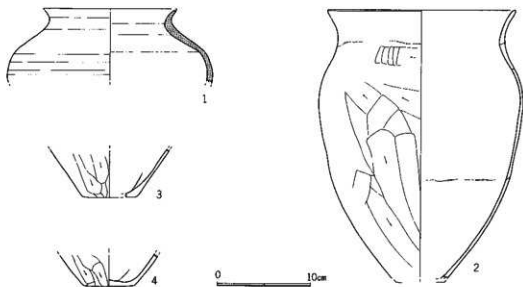
第125図 H-42号住居址カマド実測図 (1:40)

ものは、東西両壁際の中央にP₁とP₂が認められた。P₁は20cm×20cm深さ40cmを測る斜めに開いた柱穴で、P₂は25cm×25cm深さ25cmとなっている。住居中央の床面直上には、カマドに用いられていたと考えられる軽石が散乱していた状態にあった。

遺物は、2の壺の破片ほぼ1個体分がカマド西脇の北壁際より検出された。それ以外は、特記

第56表 H-42号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

図号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (四)	壺 (瓶)	— —	頸部は短く外反する。	外面 内面	ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ (ロクロ石回転)	胎土は焼成を多く含む暗褐色 (M5.7) 外面自然釉付着 焼成良好
2 (四)	壺	(20.0) —	口縁部は「く」の字状にゆるく外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい黄褐色 (10YR 7/4)
3 (四)	壺	— (5.8)	底部平底。	外面 内面	胴部および底部ヘラケズリ ヘラナデ	胎土は褐色 (7.5YR 4/3)
4 (四)	壺	— 5.4	底部平底。	外面 内面	胴部および底部ヘラケズリ ヘラナデ	胎土は褐色 (7.5YR 4/6)



第126図 H-42号住居址出土遺物 (1:4)

すべき遺物の出土状態は認められなかった。

覆土はI層のみで、径5～10mm程のバミスをよく含む粘性のある黒褐色層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、その大半を破壊された状態にあり、構材であった軽石は住居中央に散乱していた。そのうちaは角柱状に面取りされた軽石の支脚である。カマドの掘り方をみると、すでにその時点で袖が意識されロームが袖状に削り出されていることがわかる(殊に東袖)。カマド部分の覆土は4層に分層された。I層はカーボンを少量含んだ黒褐色土層、II層は焼土を多く含む若干のカーボンを含む黒褐色土層、III層は焼土・カーボンを含まない黒色土層、IV層は多量のカーボンを含む黒色土層であった。

遺物 第126図

IV 遺構と遺物

遺物の検出量は少ないが、須恵器では坏・壺、土師器では坏・甕が検出されている。

須恵器坏では図示し得るものがなかったが、回転ヘラキリによる底部をみせるものがある。

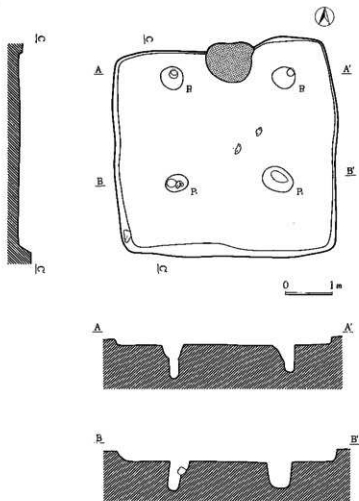
1は、小形の須恵器短頸壺で、外面には自然釉が付着する。

土師器坏も図示し得ないが、内面黒色研磨のなされたものが1個体ある。

土師器甕では、「く」の字状に外半する口縁部をみせる2が検出されている。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。



第127図 H-43号住居址実測図 (1:80)

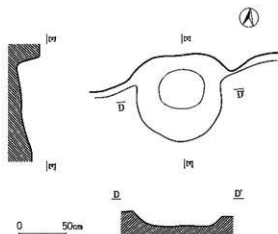
1. 塚穴住居址

(43) H-43号住居址

遺構 第127・128図

本住居址は、第I区ゾーン40グリッドにおいて検出された。そのⅢ区においては、F-52号獨立柱建物址と重複するが、両者の切り合い関係は微妙であった。ここでは一応F-52が新しいものとして把握しておいた。

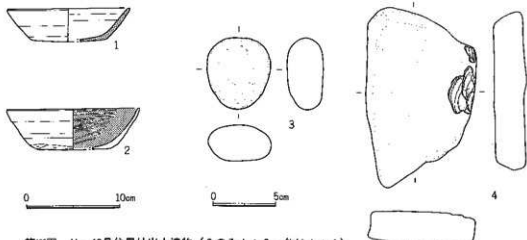
H-42は、南北4.7m東西4.8mの隅丸方形を呈し、床面積18.6㎡を測り、棟方向はN-8°-Wを指す。壁高は10~25cmを測り、周溝は認められない。支柱穴は、P₁~P₄の4個が検出された。P₁は45cm×50cm深さ60cm、P₂は50cm×50cm深さ70cm、P₃は50cm×35cm深



第128図 H-43号住居址カマド実測図 (1:40)

第57表 H-43号住居址出土遺物一覽表〈石器〉

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
3	紡錘車	軽石	5.6	5.0	2.9	40	未成品
4	台石	玄武岩質 火山岩	19.0	11.5	3.4	1,300	



第129図 H-43号住居址出土遺物 (3のみ1:3, 他は1:4)

第58表 H-43号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

検出番号	器種	注量	器形の特徴	調査	備考
1 (内)	坏 (須)	13.2 3.5 8.0	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクヨコナゲ、底部は切り離しの後、手持ちへラケズリ 内面 ロクヨコナゲ (ロクヨ左回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (7.5 Y 7 / 1)
2 (内)	坏	<14.3> 4.4 <7.6>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクヨコナゲ、底部は切り離しの後、手持ちへラケズリ 内面 黒色研磨 (ロクヨ右回転)	胎土は比較的精選され赤褐色 (6 Y R 4 / 8)

さ60cmを測り、その上部には礫がみられる。P₄は70cm×50cm深さ55cmを測る。

遺物は、良好な出土状態を示したものは認められなかった。

覆土はI層のみで、バミスをあまり含まない粘性のある黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、すでに壊滅状態にあった。図には、その掘り方を示したが、火床部が円形に掘り込まれた状態であり、90cm×90cm深さ15cmを測る。

遺物 第129図

遺物の出土量は少ないが、須恵器では坏・甕の破片、土師器では坏・甕の破片が認められた。

1は須恵器坏で、底部は切り離しの後全面に手持ちへのヘラケズリのなされたものであった。

2は、内面黒色研磨のなされた土師器坏で、1と同様手持ちヘラケズリの底部をみせる。この他、内面黒色研磨のなされた土師器坏で、回転糸切りの後周囲手持ちヘラケズリのなされた底部をみせるものも1点存在した。

土師器甕は、図示しなかったが、「く」の字状口縁の長胴甕破片や、台付甕の脚台部がみられた。

石器は、3の紡錘車の未成品かと考えられる面取りされた軽石と、4の偏平な河床礫の台石がみられた。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

(44) H-44号住居址

遺構 第130・131図

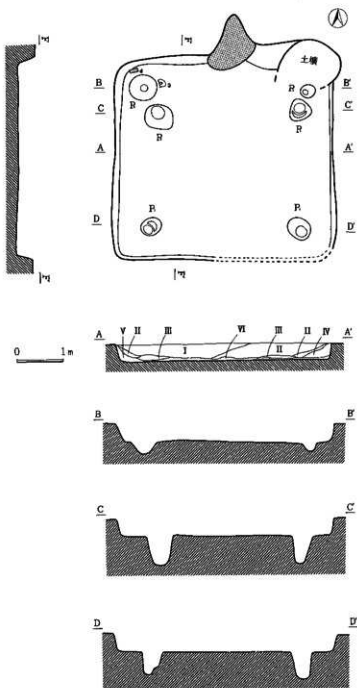
H-44号住居址は、第I区ター-38グリッドにおいて検出された。その北東コーナーは土壌に切られている。

本住居址は、南北4.3m東西4.8mの隅丸方形を呈し、床面積18.0㎡を測り、棟方向はN-5°-Wを指す。壁高は45cm程度を測り、周溝は認められない。主柱穴は、P₁~P₄の4個が認められた。P₁は45cm×45cm深さ55cm、P₂は55cm×55cm深さ60cm、P₃は45cm×35cm深さ50cm、P₄は50cm×45cm深さ55cmを測る。また、P₁・P₂の北側からは、P₅・P₆が検出された。P₅は30cm×25cm深さ15、P₆は60cm×55cm深さ25cmを測る。

遺物は、P₆の東側の床面直上より3の須恵器蓋が検出された。

覆土は、6層に分層された。I層が径5mm程度の軽石・ローム粒子をよく含む暗褐色土層、II層は径5mm程度の軽石をよく含むがローム粒子を含まない黒褐色土層、III層が黒色土のブロック状堆積、IV層がローム層のブロック状の二次堆積、V層はII層と同様な特徴を示すもので、IV層

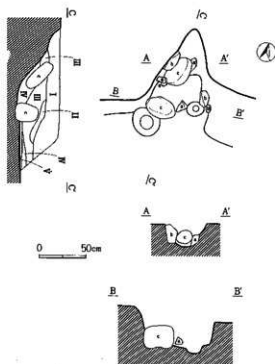
1 窑穴在居址



第136图 H-44号住居址实测图(1:80)

はバミス・ローム粒子をまったく含まない黒色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、煙道部の石組みと西側の袖石1個が残っているにすぎず、ほぼ壊滅状態にあった。その構材には、面取り軽石(a)と軽石(b)・河床礫(c)が用いられていた。また、支脚石は角柱状に面取りされた軽石(d)で、住居址の北西コーナーから検出された。煙道部は、A-A'の断面にみると、両側に軽石が配されその上に河床礫が伏せられていた状態であった。カマド覆土は、5層に分層された。I層は若干のカーボンを含む暗褐色土層、II層は黒色土層・III層は黒褐色土層とともに焼土・カーボン等を含まないものであった。IV層は焼土・灰を含む灰褐色土層、V層は灰層であった。V層の上下には薄いカーボンの集積が認められた。



第131図 H-44号住居址カマド実測図(1:40)

遺物 第132図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では蓋・坏・甕、土師器では坏・甕がある。

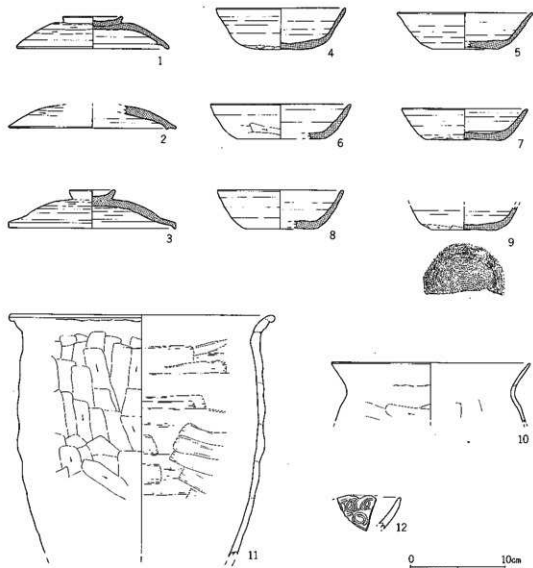
須恵器蓋には、内面にかえりを有する1・2と有さない3がある。このうち2はつまみ部の形状が不明であるが、1・3は中央が皿状にくぼんだつまみ部を有する。

須恵器坏は、6点を図示したが、その底部の調整方法には三種が認められた。ひとつは、回転ヘラキリのままの底部をみせるもので、7とその他破片3片が認められた。次は、底部全面に手持ちヘラケズリのなされるもので、4・5・6とその他破片が1点が該当する。最後は、回転糸切りの後周囲に手持ちヘラケズリのなされるもので、8・9がこれに該当する。

このなかで、特に問題となるのは8・9の回転糸切りによる底部をみせる坏と、1・2のかえりのある蓋の伴出である。ここでは両者の出土をとりあえず事実として報告するが、8・9の坏の出土に主体性をもたせ、かえりのある蓋を混入品とみなしておくことに妥当性がある。

土師器坏では、12のように内面体部にラセン状暗文が施されるものがみられた。また図示し得なかったが内面黒色研磨のなされた土師器坏破片も認められた。

1 壑穴住居址



第12図 H-44号住居址出土遺物(1:4)

土師器壺には、10の「く」の字状口縁をみせる薄手のものと、厚手で胎土が精選されず胴部に縦のヘラケズリがなされる長胴壺の二者がみられた。

鉄製品・石器等はまったく検出されなかった。

時 期

IV 遺構と遺物

第59表 H-44号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

埋蔵 番号	器種	注量	器 形 の 特 徴	調 査	備 考
1 (回)	蓋 (須)	6.3 3.4 (18.2)	つまみ部は径が大きく、中央部が皿状にくぼんだ形態を呈する。 内面にはかえりをもたない。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰白色を呈する。 QNT/0無成良好。
2 (回)	蓋 (須)	— — (17.8)	内面にはかえりを有する。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰白色を呈する。 QNT/0無成良好。
3 (回)	蓋 (須)	4.8 4.1 (17.8)	つまみ部は中央が皿状にくぼんだ形態を呈する。 内面にはかえりをもたない。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を若干 含む灰白色。 QNT/0無成良好。
4 (回)	坏 (須)	<13.8> 4.4 8.2	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 ロクロヨコナデ 底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く 含む灰色 (NS5/0) 内外面に「1」の火罫
5 (回)	坏 (須)	<14.4> 3.9 (8.8)	体部は外反し、平底平底。	外面 ロクロヨコナデ 底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く 含む黄灰色 (SRP4/0) 底成は 良好でない。
6 (回)	坏 (須)	<15.0> 3.7 (9.4)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデの後、体部下手持ちヘラケズリ、底部調整不明 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色 (GY6/1)
7 (回)	坏 (須)	<13.3> 4.1 (8.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰白色GYR/1 無成良好。
8 (回)	坏 (須)	<13.4> 4.1 (7.8)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切りの後、外周手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み 灰色 (7.5Y6/1)
9 (回)	坏 (須)	— — (6.8)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切りの後、外周手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み 緑灰色 (10GY5/1)
10 (回)	壺	<21.1> —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は明褐色 (7.5YR5/8)
11 (回)	壺	(28.3) —	口縁部の短く外反する長胴の器形を呈し、内球。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ (刷毛目状?)	胎土は精選されず 砂粒を多量に含み 濃い褐色 (7.5YR5/4) 無成不良
12 (破)	坏	— —	体部は外反する。	外面 口唇部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面 体部にラセン文様が施される	胎土はにぶい褐色 (7.5YR6/4)

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

(45) H-45号住居址

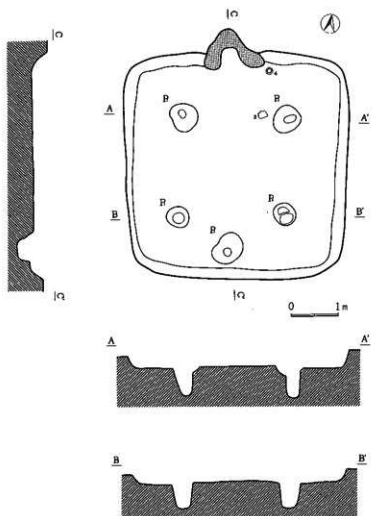
遺 構 第133・134図

H-45号住居址は、第I区ゾー38グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.85m東西4.8mの隅丸方形を呈し、床面積18.2㎡を測り、棟方向はN-12°-Wを指す。壁高は15-40cmを測り、周溝は認められない。主柱穴は、P₁-P₄の4個が認められた。P₁は60cm×55cm深さ65cm、P₂は60cm×55cm深さ60cm、P₃は50cm×45cm深さ55cm、P₄は50cm×45cm深さ55cmを測る。また、南壁際の中央からはP₅が検出され、70cm×55cm深さ25cmを測った。

遺物は、カマドの東脇の床面上より4の小形甕が検出されている他は、覆土中からの出土である。

1 竪穴住居址



第133図 H-45号住居址実測図 (1:80)

覆土はI層のみで、細粒バミスをよく含む粘性のある黒灰色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、後部両側の石組みを残しているのみであった。その構材には、面取りされた軽石(a)が主に用いられており、安山岩(b)もみられた。図のA-A'の断面をみると、カマドの東西両壁にそれぞれ二組ずつ礫が貼られており、またB-B'でも1個ずつ石材が貼られていることがわかる。カマド覆土は、4層に分層された。I層は多量の灰層、二層はカーボンをよく含む黒色土層、三層は焼土と灰からなる灰褐色土層、IV層は若干の焼土・カーボンを含む黒褐色土層であった。なお、カマド中からは2の坏が検出されている。

IV 遺構と遺物

遺物 第135図

遺物は、須恵器では環・甕が、土師器では環・甕が検出されている。

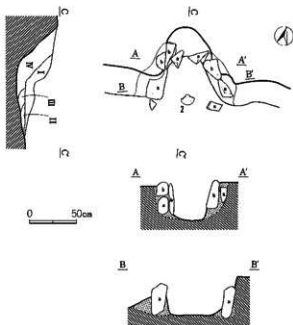
須恵器環では、底部切り離しの後全面に手持ちヘラケズリのなされる1と、回転ヘラケズリのなされる高台付の2とがみられた。

3は、頸部のくびれの弱い須恵器甕で、外面には叩き目がみられる。

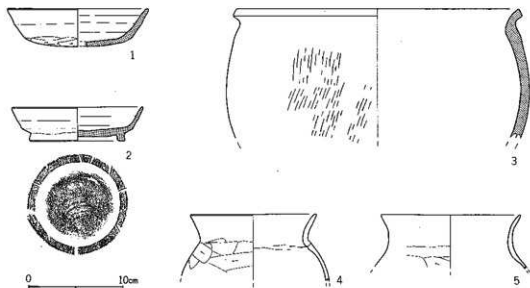
4は、「く」の字状に外反する口縁をみせる土師器小形甕で、5は僅かに「コ」の字状に外反する口縁をみせる土師器小形甕である。

土師器環は図示し得るものがなかったが、内面黒色研磨のなされた破片がみられた。

石器・鉄製品等は検出されていない。



第134図 H-45号住居址カマド実測図 (1:40)



第135図 H-45号住居址出土遺物 (1:4)

第60表 H-45号住居址出土遺物一覧表(土器)

検出番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (回)	坏 (須)	(15.0) 4.9 11.3	胴部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 胴部ロクロコナダ 底縁、切り離しの後、全面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナダ(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 量に含み (2.5YR6/1) 内外面に「刻」の 文様
2 (完)	坏 (須)	14.0 3.6 10.1	胴部は外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面 胴部ロクロコナダ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰色 (7.5Y5/1)
3 (回)	甕 (須)	<30.0> —	胴部から腹部にかけてのくびれは小さく、口縁部は短く外反する。	外面 口縁部ココナダ、胴部には叩きかたされる。 内面 ナデ	胎土は砂粒を多 く含み黄褐色 (5Y5/3)
4 (完)	甕	13.4 —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。小形。	外面 口縁部ココナダの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ココナダ、胴部ヘラナデ	胎土は精選され 褐色 (7.5YR6/8)
5 (回)	甕	<14.3> —	口縁部は激かに「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ココナダの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ココナダ、胴部ヘラナデ	胎土は精選され 褐色 (7.5YR6/8)

時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

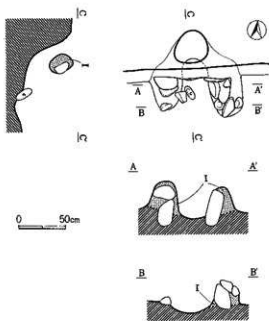
(46) H-46号住居址

遺 構 第136・137図

H-46号住居址は、第I区ゾー40グリッドにおいて検出された。その東壁の一部を土壌に切られている。

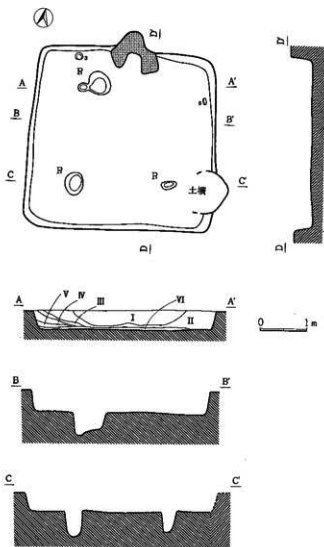
本住居址は、南北3.9m東西4.0mの隅丸方形を呈し、床面積13.2㎡を測り、棟方向N-9°-Wを指す。壁高は50cm前後を測り、周溝は認められない。主柱穴は、P₁~P₃の3個が検出されたが、I区中央に柱穴が認められない点において他の4本柱穴をもつものとは異なった様相を呈している。P₁は70cm×50cm深さ50cm、P₂は50cm×40cm深さ55cm、P₃は30cm×15cm深さ45cmを測る。

遺物は、3の坏がカマドの西脇の



第136図 H-46号住居址カマド実測図(1:40)

IV 遺構と遺物



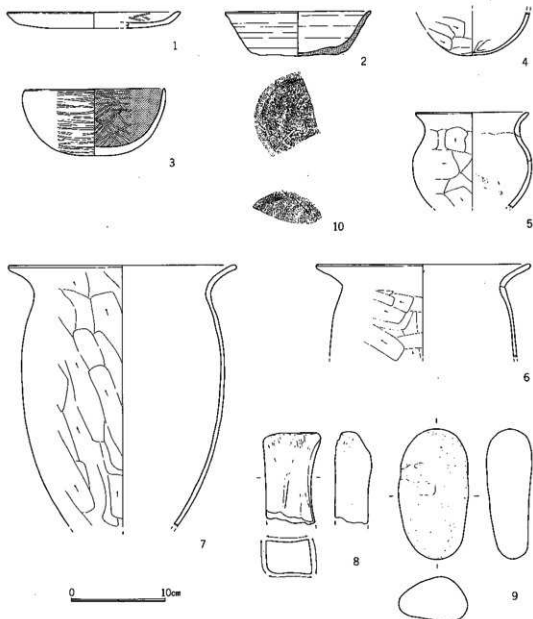
第137図 H-46号住居址実測図 (1:80)

北壁際から正常位で出土し、9の磨石が東壁際の床面直上より出土している。その他は覆土中からの出土である。

覆土は6層に分層された。I層がロームブロック・パミスを大量に含む黒褐色土層、II・IV層がロームブロック・パミスをよく含む黒褐色土層、III・V層がローム粒子を多く含む黒褐色土層、IV層がローム粒子・パミス等をあまり含まない黒色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置し、その前方部はすでに取り壊されたものとみられるが、後方は比較的よく残っていた。その煙道部は壁外へと延び円形のプランとなって検出された。また、そ

1 巖穴住居址



第139図 H-46号住居址出土遺物(1:4)

第61表 H-46号住居址出土遺物一覽表〈石器〉

標記番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
8	砥石	流紋岩 層化物	(9.5)	6.0	3.8	300	
9	磨石	安山岩	13.7	7.4	5.0	756	

第62表 H-46号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

図号 番号	器種	注記	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	皿	(18.5) — —	扁平な皿状の形態を呈する。	外面 体部ヨココナデ 底面ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	胎土は砂粒を多量に含む褐色(7.5YR7/6)焼成不良
2 (回)	杯 (環)	(15.5) 4.7 10.3	体部は外反し、底部平直	外面 体部ロクロヨココナデ 底部回転ヘラケリ 内面 ロクロヨココナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を含み灰白色(7.5Y7/1)
3 (完)	杯	14.9 7.1 —	体部は球状に湾曲し、底部は扁平な丸底。	外面 体部ヨコヘラミガキ 底面ヘラミガキ 内面 黒色研磨	胎土はにぶい黄褐色(10YR7/4)焼成良好
4 (完)	甕	— — —	小形の丸底甕底部。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土はにぶい褐色(10YR5/4)
5 (回)	甕	12.0 — —	口縁部はゆるく「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する小形の器形。やや肉厚	外面 口縁部ヨココナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部、胴部ともにヨココナデ 胴部に爪痕が残る	胎土は砂質を多量に含む褐色(5YR5/4)焼成はあまりよくない
6 (回)	甕	(22.8) — —	口縁部は「く」の字状にきつく外反する。	外面 口縁部ヨココナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨココナデ、胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色の粒状に含むにぶい褐色(7.5YR6/4)
7 (回)	甕	(24.4) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨココナデの後、胴部より口縁部近くまで縦方向のヘラケズリ 内面 口縁部ヨココナデ、胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を多く含むにぶい褐色(7.5YR6/4)

の天井部は、軽石を芯に粘土層（I層）で固められたものであった。袖も、安山岩礫が据えられ粘土（I層）で固められたものであった。支脚石には細長い河床礫が用いられていた（c）。

遺物 第138図

遺物は、須恵器では環、土師器では皿・環・高環・甕の各器種がみられた。

1の土師器皿は完存していないが、本遺跡の当該期の土器群のなかでは珍しい器種である。

2の須恵器環は、回転ヘラケリのなされた底部をみせるものである。

3は、扁平な丸底を呈し湾曲した体部をもつやや深めの土師器環で、内面黒色研磨がなされている。この他、土師器環の破片に、内面底部にラセン状暗文・体部に放射状暗文のなされたものが認められた。また、環部の内面に黒色研磨がなされた土師器高環の破片もみられた。

土師器甕では、5のやや肉厚な小形甕と、6・7にみる「く」の字状に外反する口縁部を有する薄手の長胴甕とがあった。

石器では、8の砥石と9の磨石が検出された。

8は、流紋岩の砥石で直方体の4面ともに研砥に供されている。その半分を欠損する。

9は、河床礫がそのまま用いられた磨石で、微妙ではあるが磨痕が一端を中心に焼える。

時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

(47) H-47号住居址

遺構 第139・140図

H-47号住居址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。H-39・H-40号住居址と重複関係をもつが、それらの新旧関係は古い順からH-39→H-47→H-40となる。

本住居址は、その西壁をやや掘りすぎたため、その規模はおおよそとなるが南北4.25m東西4.05mの隅丸方形を呈し、床面積は15.7㎡となるものと考えられる。棟方向はN-15°-Wを指す。壁高は生きている東壁部において10cm前後を測る。周溝は認められない。主柱穴は、P₁~P₄の4個が認められた。P₁が深さ60cm、P₂が深さ60cm、P₃が深さ60cm、P₄が深さ65cm程度を測るものと思われる。

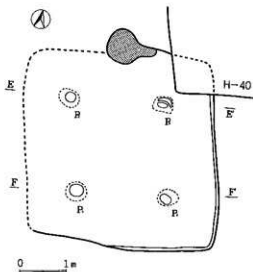
遺物は、いずれも覆土中からの出土であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、住居廃絶時に取り壊されたと考えられ、その構材であった面取り軽石は火床部にまとめて整然と残置されていた。ちなみに、これと同様な事例はH-8・H-37・H-47号住居址において認められた。

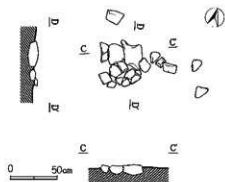
遺物 第141図

本住居址より検出された遺物は少ないが、須恵器では蓋・甕、土器では甕の破片がみられた。

1は、偏平な円盤状の須恵器蓋つまみ部である。



第139図 H-47号住居址実測図 (1:80)

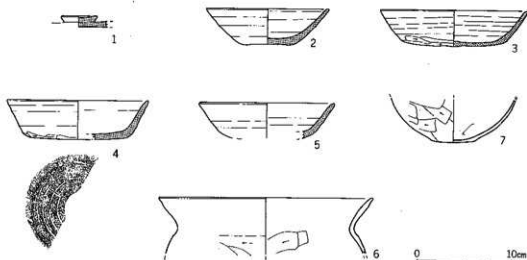


第140図 H-47号住居址カマド実測図 (1:40)

IV 遺構と遺物

第63表 H-47号住居址出土遺物一覧表 (土器)

押図番号	器形	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (完)	蓋 (環)	3.8 —	つまみ部は中央のややくぼんだ盤状を呈す。	外面 ロクロコナデ 内面 ロクロコナデ (ロクロ回転)	胎土は精選され褐色を呈する。 (7.5YR6/6) 焼成良好
2 (破)	坏 (環)	(13.6) 3.3 (6.0)	体部は外反し、底部平底	外面 体部ロクロコナデ 底部切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ回転)	胎土は砂粒を多く含み灰色 (7.5Y5/1)
3 (破)	坏 (環)	15.3 3.7 10.4	体部は外反し、底部平底	外面 体部ロクロコナデ 底部回転ヘラケリの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ回転)	胎土は砂粒を含み明オリブ灰色 (2.5GY7/1)
4 (破)	坏 (環)	(15.0) 4.2 (10.6)	体部は外反し、底部平底	外面 体部ロクロコナデ 底部回転ヘラケリの後、一部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (1.0Y5/1)
5 (破)	坏 (環)	(14.4) —	体部は外反する	外面 体部ロクロコナデ、底部調整不明 内面 ロクロコナデ (ロクロ回転)	胎土は砂粒を含み赤黄色 (2.5Y7/3)
6 (破)	甕	(22.8) —	口縁部は「く」の字状に外反する	外面 口縁部コナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナデ、胴部ヘラケズリ	胎土はにおい貴褐色 (10YR5/3)
7 (破)	甕	— (4.7)	底部は丸味をおびた平底 胴下半は球状を呈する小形の器形	外面 胴部および底部ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	胎土は褐色 (5YR6/6)



第14図 H-47号住居址出土遺物 (1:4)

須恵器坏は4点図示したが、このうち底部を失う5以外の2~4はいずれも底部切り離しの後手持ちヘラケズリのなされるものである。わけても3・4は回転ヘラケリによるものであることが理解できた。

土師器甕では、6の「く」の字状口縁をみせる薄手の長胴甕がみられた。

石器・鉄製品類は検出されなかった。

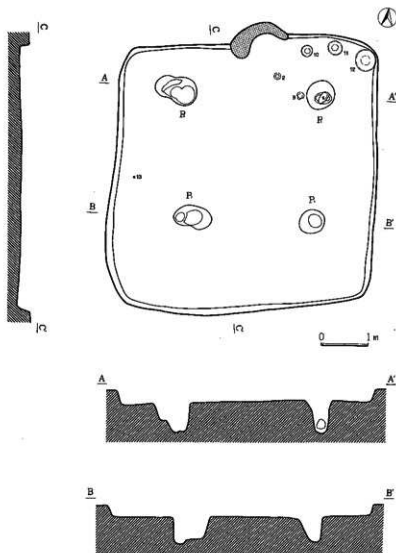
時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

(48) H-48号住居址

遺構 第142・143図

H-48号住居址は、第I区ター38グリッドにおいて検出された。



第142図 H-48号住居址実測図 (1:80)

IV 遺構と遺物

本住居址は、南北5.7m東西5.65mを測る隅丸方形を呈し、床面積27.8㎡を測り、棟方向N-7°-Wを指す。壁高は20~30cm前後を測り、周溝は認められない。支柱穴は、P₁~P₄の4個が認められた。P₁は55cm×60cm深さ70cmを測るもので、その下部には礎が認められた。P₂は90cm×60cm深さ60cm、P₃は80cm×45cm深さ60cm、P₄は55×50cm深さ53cmを測る。

遺物は、何点かはきわめて良好な出土状態を示していた。カマド東の北壁際には、10・11の須恵器甕の口縁部が並べて残置され、その隣りの北東コーナーには12の須

恵器大甕の胴下半部が据え置かれていた。10・11はすでに胴部を失っている、あるいは何らかの二次的機能が与えられて置かれていたものとも思える。また、12は上半部を失っていても貯蔵器としての一部の機能を満たし得たものと察せられ、その場所に置かれていたのであろう。2・9の環は、カマドの前方P₁の西側から正常位で検出された。なお、本住居址のⅢ・Ⅳ区上面からは馬歯3点が検出されたが、その部分においては河川堆積がみられたため混入品とみなせる。

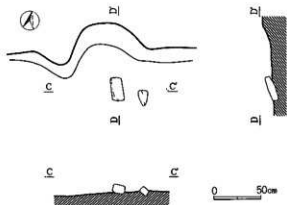
住居址覆土はI層のみで、細粒バミスや5mm程のバミスをよく含み、ローム粒子も若干混入する黒灰色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、すでに壊滅状態にあった。その構材に用いられていたと考えられる軽石二点が火床部に残っているのみであった。

遺物 第144・145図

本住居址から検出された遺物は、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕の器種がみられる。須恵器坏は7点図示したが、いずれも切り離し方法は回転ヘラキリによっている。このうち、1を除く2~7は、底部切り離しの後一部あるいは全面に手持ちヘラケズリがなされているのが特徴的である。

8・9は、ロクロ整形による土師器坏で、内面黒色研磨のなされているものである。両者の底部は全面に手持ちヘラケズリがなされており、その切り離し方法は不明である。その他、図示し

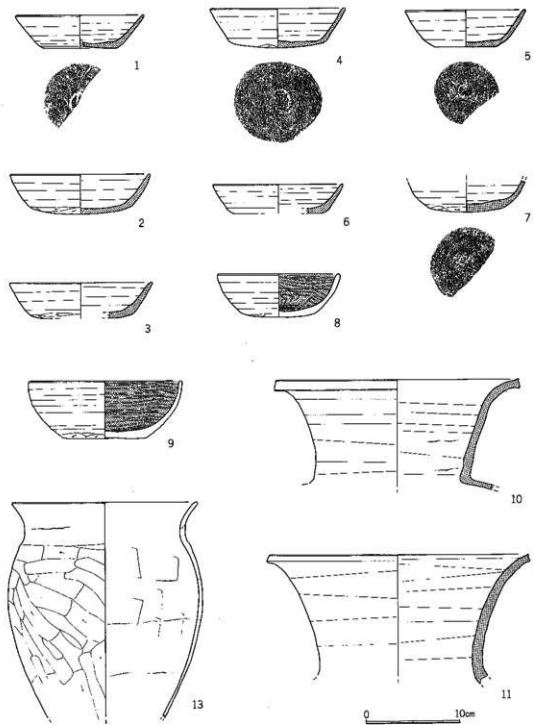


第143図 H-48号住居址カマド実測図(1:40)

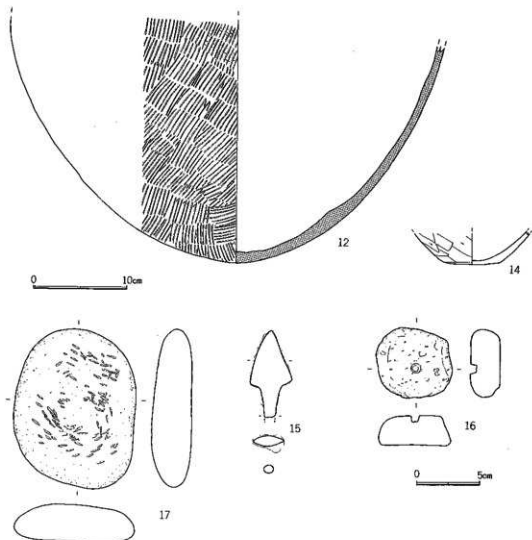
第64表 H-48号住居址出土遺物一覧表〈金属器・石器〉

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
15	鉄 鏝	鉄	(長0)	3.3	(0.0)	(22)	
16	須恵器?	磁石	5.9	5.8	2.5	35	未成品
17	台石	軽石 安山岩	16.6	12.8	4.0	1455	

1 整穴住居址



第14图 H-48号住居址出土遗物 (1:4)



第15図 H-48号住居址出土遺物 (15・16は1:3, 他は1:4)

得なかったが、内面体部に放射状暗文底部にラセン状暗文の施された土師器環の破片がみられた。

10・11は、須恵器甕の完存する口縁部で、カマドの東脇に並べて残置されていたものである。胴部以下を失って後、あるいは何らかの二次的機能を担っていたのかもしれない。

12は、外面に叩き目のみられる須恵器大甕の胴下半部である。底部丸底の球状のプロポーシオンを尾する。上半部を失って後も貯蔵器としての機能の一部を満たしていたのであろう。

13は、口縁部が僅か「コ」の字状に外反する土師器長胴甕である。その他、「く」の字状に外反する土師器甕口縁部もみられた。

鉄製品としては、カマド部分より15の鉄鏃が検出された。15は、その基部を欠失する。

第65表 H-48号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 査	備 考
1 (回)	坏 (環)	(13.7) 3.5 (7.8)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰色 (N6/0) 焼成良好
2 (先)	坏 (環)	14.9 4.2 10.8	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。 完形	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラケリの後全 面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を 多く含む灰白色 (5Y7/2)。内 面に「10」の浅 彫。胎土は中砂粒を 多く含む灰オリ ープ色 (5Y6/2) 胎土は2と類似する
3 (回)	坏 (環)	(15.2) — (10.9)	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラケリの後全 面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を 多く含む灰オリ ープ色 (5Y6/2) 胎土は2と類似する
4 (回)	坏 (環)	(14.4) 4.2 9.6	体部は外反し、底部はやや丸味をおびた 平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラケリの後全 面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色 (7.5Y 6/1) 焼成良好
5 (回)	坏 (環)	(12.8) 3.9 (8.5)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラケリの後一 面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み青灰色 (5B 5/1) 底部に 「X」のヘラ記号
6 (回)	坏 (環)	(13.7) — (9.5)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラケリの後全 面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 みオリープ灰色 (5GY5/1)
7 (回)	坏 (環)	— (8.3)	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラケリの後者 の手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 みオリープ灰色 (5GY5/1)
8 (回)	坏 (環)	(13.0) 4.6 (7.7)	体部は丸味をおびて外反し、底部は丸味 をおびた平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部の切り離し方法不明 内面 黒色研磨 (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色 (7.5YR7/6)
9 (先)	坏	(16.3) 6.1 8.9	体部はゆるく外反したのちやや内湾する。 底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部の切り離し方法不明 内面 黒色研磨 (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み明赤褐色 (5YR5/8)
10 (先)	甕 (環)	26.8 —	口縁部はラッパ状に外反する。	外面 ロクロコナデ 内面 ロクロコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含 み灰色 (N6/0) 焼成良好
11 (先)	甕 (環)	27.5 —	口縁部はラッパ状に外反する。	外面 ロクロコナデ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み黄灰色 (5P 5/1) 胎土同様な 彫形を呈する
12 (先)	甕 (環)	— —	胴下半部から底部にかけて大形球状のブ ロポジションを呈する。大形。	外面 全面に叩きが揃えられる。 内面 ナデ	胎土は砂粒を含 み暗赤灰色 (5 P4/1) を呈する
13 (回)	甕	(19.7) —	口縁部は横かに「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は褐色 (7.5YR7/6)
14 (回)	甕	— (6.0)	底部はわずかに丸味をおびた平底。	外面 胴下半部および底部ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	胎土は明赤褐色 (5YR5/8)

石器では、16の紡錘車未成品と17の台石が出土している。

16は、紡錘車未成品で、表裏両面を削られ偏平になった軽石の片面に穿孔がなされはじめている。ただし孔は貫通していない。

17は、偏平な河床礫の台石で、片面には非常に顕著に所謂「鼠歯状痕」的な使用痕が認められる。

時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

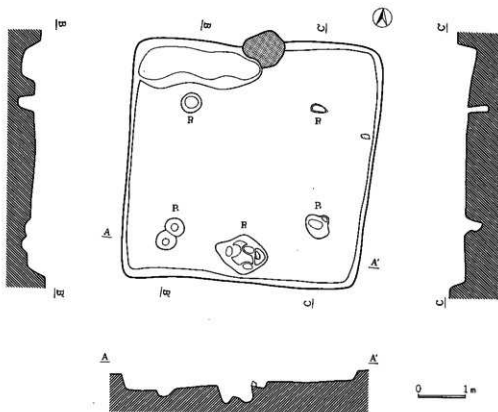
(49) H-49号住居址

遺構 第146・147図

H-49号住居址は、第1区ター39グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北5.2m東西5.3mの隅丸方形を呈し、床面積23.9㎡を測り、棟方向N-4°-Wを指す。壁高は20~40cmを測り、周溝は認められない。支柱穴は、P₁~P₄の4個が検出された。P₁は30cm×15cmの小さいビットで深さ45cmを測り、P₂は45cm×40cm深さ30cmを測る。P₃は浅い2個のビットが接した状態を呈しており、一方は35cm×43cm深さ10cm、もう一方は40cm×40cm深さ10cmを測る。P₄は55cm×50cm深さ35cmを測る。また、南壁際中央にはP₅があり、115cm×85cm深さ40cmを測りその断面はW字状を呈している。なお、北壁際の西半分は船底状に掘り込まれており、250cm×90cm深さ30cm程度を測る。

覆土はI層のみで、ロームが多く混入する黒褐色土層であった。



第146図 H-49号住居址実測図 (1:80)

1 竪穴住居址

遺物はいずれも覆土中より出土している。
 カマドは、北壁中央に位置するが、壊滅
 状態にあり、その構材であったと考えられ
 る面取り軽石が散乱していた。焼土の部厚
 い堆積もみられた（網点）。

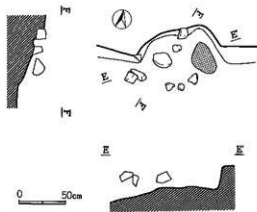
遺物 第148図

本住居址から検出された遺物は、須恵器
 では蓋・坏・長頸瓶・甕が、土師器では坏・
 甕がある。

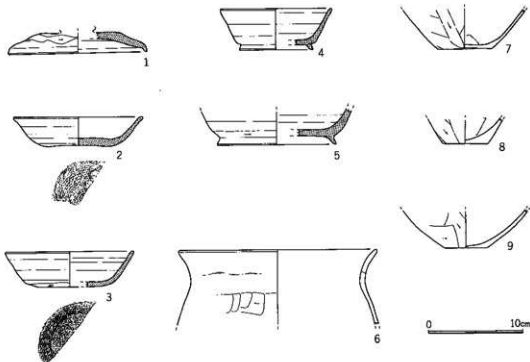
1は須恵器蓋で、つまみ部の形状は不明
 である。

須恵器坏には、2の回転糸切りによる底部をみせるものと、3・4の回転ヘラケズリによる底
 部をみせるものがある。5は長頸瓶の底部と考えられるもので、回転糸切りによる底部をみせて
 いる。

土師器坏は、図示し得るだけのものがなかったが、内面黒色研磨のなされた破片がみられた。



第147図 H-49号住居址カマド実測図 (1:40)



第148図 H-49号住居址出土遺物 (1:4)

第66表 H-49号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

図号 番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (回)	蓋 (甕)	— 14.7	つまみ部の形状は不明	外面 ロクロコナダの後、天井部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色(10 Y 7/1)焼成不勻 H-53・2と接合
2 (回)	杯 (甕)	<13.7> 3.0 <7.0>	体部は比較的大きく外反し、底部平底。	外面 体部にロクロコナダ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色 (10 Y 6/1)
3 (回)	杯 (甕)	<13.0> 3.8 <9.0>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナダ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色 (5 Y 6/1)
4 (回)	杯 (甕)	<12.0> 4.4 <8.0>	体部は直線的に外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロコナダ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (10 Y 6/1)
5 (回)	長頸瓶 (甕)	— (12.7)	底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロコナダ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰褐色 (10 Y R 5/1)
6 (回)	甕	(21.1) —	口縁部は「く」の字状にゆるく外反する。	外面 口縁部コナダの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナダ、 胴部ヘラケズリ	胎土は濃い赤褐色 (5 Y R 5/4)
7 (回)	甕	— (5.7)	底部平底。	外面 胴下部ヘラケズリ 底部ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	胎土は暗赤褐色 (5 Y R 3/6)
8 (回)	甕	— (4.7)	底部平底。	外面 胴下部ヘラケズリ 底部ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	胎土は濃い赤褐色 (5 Y R 5/4)
9 (回)	甕	— (4.5)	底部平底。	外面 胴下部ヘラケズリ 底部ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	胎土は赤褐色 (5 Y R 4/8)

土師器甕では、6の「く」の字状に外反する口縁をみせるものがある。

この他、石器・鉄製品類は認められなかった。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

(50) H-50号住居址

遺 構 第149図

H-50号住居址は、第I区ター-38グリッドにおいて検出された。その西側半分は、現在の水田造成時に削平されてしまっている。

本住居址は、南北3.9m東西の残っている部分2.8mを測り、隅丸方形を呈するものと思われるがその南壁の中央は弓なりに突出する。棟方向はN-7°-Wを指す。壁高は10~25cmを測り、周溝は認められない。ピットは北壁際にP₁が検出された以外は認められなかった。P₁は40cm×30cm深さ20cmを測る。

覆土はI層のみで、バミス等をほとんど含まない黒色土層であった。

カマドは、おそらく最も存在の可能性のありそうな北壁中央付近においてもその痕跡すら窺えなかった。水田造成時に削平されているということも考えられようが、あるいはなかったのかもしれない。

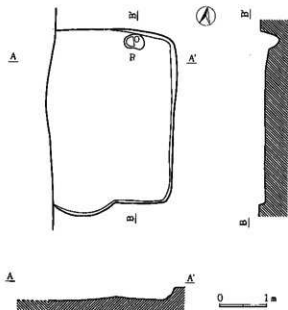
遺物

本住居址からは1点の遺物も検出されなかった。

時期

本住居址は遺物がみられないためその時期決定が困難であるが、住居址の規模・構造よりおよそ前田VII期の所産とみて大過あるまい。

1 壁穴住居址



第148図 H-50号住居址実測図 (1:80)

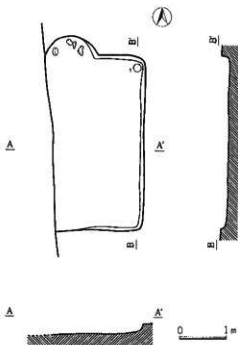
(51) H-51号住居址

遺構 第150図

H-51号住居址は、第I区ター38グリッドにおいて検出された。その西側半分は、現在の水田造成時に削平されてしまっている。

本住居址は、南北3.7m、東西の残存部分2.1mを測り、隅丸方形のプランをとるものと思われる。棟方向はN-7°-Wを指す。残存する壁の壁高は15cm前後を測り、周溝は認められない。ピットはまったく認められず、おそらくは柱穴をもたないタイプの住居址と考えられる。

遺物は、北東コーナーより1の



第150図 H-51号住居址実測図 (1:80)

第67表 H-51号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標頭 番号	器種	法線	器 形 の 特 徴	面	壁	備 考
1 (完)	甕	13.8 —	「コ」の字状の口縁部を呈する。	外面 口縁部ヨコナゲの線、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナゲ、胴部ヘラナゲ		胎土は明赤褐色 (5YR 5/8)

小形甕口縁部が正常位で検出されたのみであった。

覆土は、パミスをよく含み、ローム粒子の混入する茶褐色土層であった。

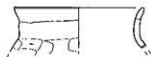
カマドは、北壁中央に位置するが、すでに壊滅状態にある。その掘り方は、半円状に住居址外に張り出しており、構材であったと考えられる軽石4点が散在している状況であった。

遺 物 151図

本住居址より検出された遺物は、1の「コ」の字状口縁をみせる小師器小形甕1点のみであった。

時 期

本住居址は、時期決定が困難であるが、その規模・構造と1の甕より、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けておこう。



0 10cm

第151図 H-51号住居址
出土遺物 (1:4)

(52) H-52号住居址

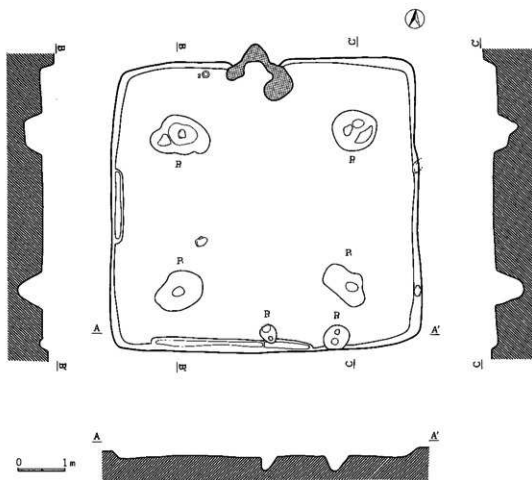
遺 構 第152・153図

H-52号住居址は、第1区ター36グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北6.15m東西6.55mの隅丸方形を呈し、床面積36.7㎡を測り、棟方向はN-3'-Wを指す。壁高は20~30cm前後を測る。周溝は、深さ5cm程度のものが西壁中央と南壁の一部に認められる。主柱穴と考えられるものは、P₁~P₄の4個が検出された。P₁は85cm×95cm深さ50cm、P₂は130cm×80cm深さ35cmを測る歪んだビットで内部には礎がみられた。P₃は110cm×80cm深さ50cm、P₄は105cm×65cm深さ60cmを測る。これらのビットの他、南壁際にP₅・P₆の2個が並んで検出された。P₅は40cm×30cm深さ30cm、P₆は60cm×50cm深さ35cmを測る。

遺物は、カマド西脇より2の完形の坏が正常位で出土した。また、カマド中より7の土師器甕の大形破片が検出された。これ以外は、いずれも覆土中からの出土である。

カマドは、北壁中央に存在するが、壁外に楕円形に抜ける煙道部と、東側の袖の一部がその痕跡をとどめているにすぎなかった。煙道部の天井および袖には赤味がかかった粘土層 (IV層) が構



第152図 H-52号住居址実測図 (1 : 80)

材として用いられていた。西袖部分には礫1点が残っていた。カマドの覆土は、3層に分層された。I層が少量のカーボンを含む黒灰色土層、II層が多量の焼土・灰を含む褐色土層、III層が大量の焼土を含む赤褐色土層であった。なお、火床部の奥からは7の土師器甕の大形破片が検出されている。

遺物 第154図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕がある。

1～5は須恵器坏であるが、それらの底部のあり方にはいくつかのパラエティが認められる。1は、回転ヘラケズリのなされた底部をみせるものであるが、底部の切り離し方法は不明である。2は、回転ヘラケリによる底部をみせる坏である。3・4・5は、いずれも底部に手持ちヘラケズリのなされる例であるが、4は回転ヘラケリによるものであることが窺えた。

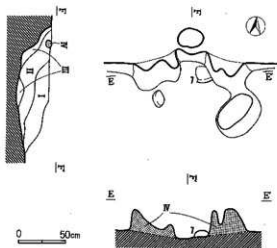
IV 遺構と遺物

土師器坏では、内面黒色研磨のなされた破片が認められた。

須恵器甕では、いずれも破片のみで大方の器形の復元できるものはなかった。

土師器甕では、6にみる胎土が精選されずやや肉厚な小形甕と、7~10の「く」の字状に外反する口縁部をみせる薄手の長胴甕が検出されている。

なお、本住居址において石器・鉄製品類は認められなかった。

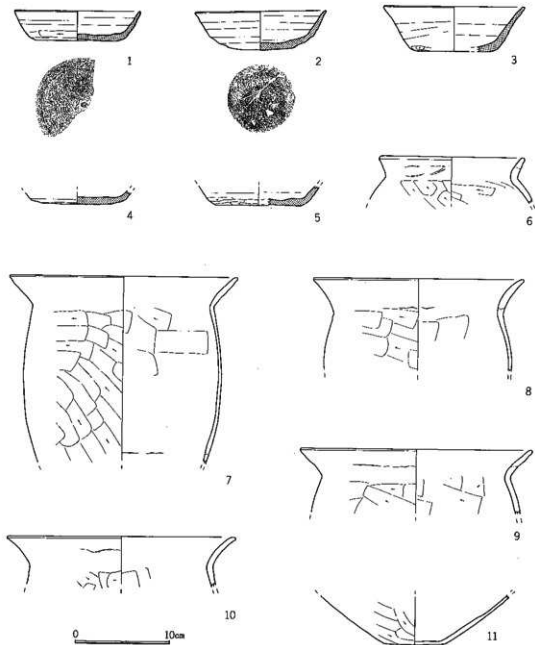


第153図 H-52号住居址カマド実測図(1:40)

第68表 H-52号住居址出土遺物一覽表(土器)

標本番号	器種	法量	器形の特徴	調	型	備考
1 (回)	坏 (環)	(13.4) 3.2 (8.7)	体部は外反し、底部平底の浅い器形。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ、底部切り離しの後、回転ヘラケズリ ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は若干砂粒を含む灰色(N5/0) 焼成良好
2 (完)	坏 (環)	14.0 4.1 7.4	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底	外面 内面	体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにくい褐色(5YR5/4) 底部に5YR6/4残存
3 (碎)	坏 (環)	(15.0) — (8.2)	体部は外反し、底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ、底部切り離しの後、手持ちヘラケズリ コクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む灰白色(10Y8/1)
4 (完)	坏 (環)	— — 10.0	底部平底	外面 内面	体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリの後、手持ちヘラケズリ ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む灰白色(5Y7/1)
5 (回)	坏 (環)	— — (9.2)	体部は外反するものと思われ、底部平底	外面 内面	体部ロクロヨコナデ、体部下半~底部手持ちヘラケズリ ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され明褐色(7.5YR5/8)
6 (回)	甕	(15.5) — —	口縁部は短く「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈するものと思われる小形の器形	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は砂粒を多く含む褐色(7.5YR6/6)
7 (回)	甕	(24.3) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部の変換点はシャープである。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は明褐色(7.5YR5/6)を呈する
8 (回)	甕	(22.4) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は暗褐色(7.5YR3/4)を呈する
9 (回)	甕	(24.6) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は明赤褐色(5YR5/6)を呈する
10 (回)	甕	(24.3) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は明赤褐色(5YR6/6)を呈する
11 (回)	甕	— — (6.5)	胴下半部は大きく外反し、底部平底。	外面 内面	胴部および底部ヘラケズリ ヘラケズリ	胎土は褐色(7.5YR7/6)を呈する

1 整穴住居址



第154図 H-52号住居址出土遺物 (1:4)

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

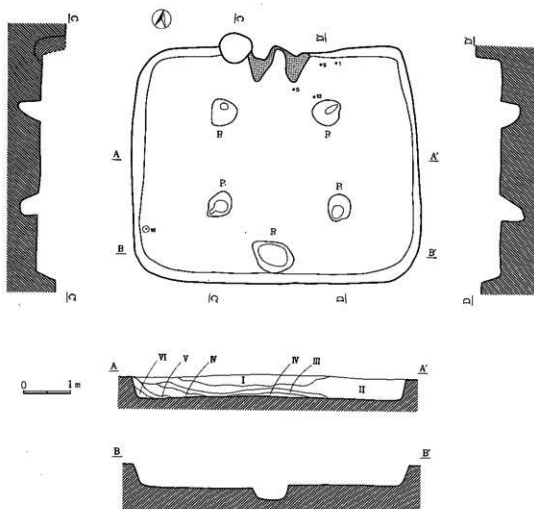
(53) H-53号住居址

遺構 第155・156図

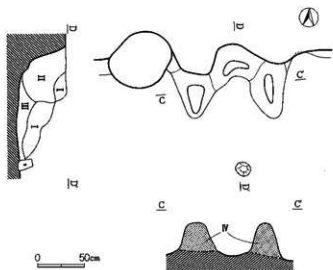
H-53号住居址は、第I区ター37グリッドにおいて検出された。そのカマドの西脇は、ピットによって切られている。

本住居址は、南北4.9m東西6.1mの隅丸方形を呈し、床面積25.4㎡を測り、主軸方向N-8°-Wを指す。壁高は40cm前後を測り、壁溝は認められない。支柱穴はP₁-P₄の4個が検出された。P₁は60cm×55cm深さ40cm、P₂は60cm×55cm深さ50cm、P₃は65cm×50cm深さ40cm、P₄は60cm×45cm深さ50cmを測った。また、南壁際中央からは、95cm×65cm深さ30cmを測るP₅が検出された。

遺物は、依存度の高いものは主にカマド東脇より検出された。それらは、蓋(1)環(3・5)



第155図 H-53号住居址実測図(1:80)



第156図 H-53号住居址カマド実測図 (1:40)

横瓶(13)と土師器甕である。また、14の紡錘車は西壁際の床面直上より出土している。その他の遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は6層に分層された。I層がパミスを含む黒色土層、II層がパミスをよく含み・スコリアを若干含む黒褐色土層、III層は多量のローム粒子が混入する黄褐色土層、IV層は黒褐色土層、V層が黒色土層、VI層がローム層の再地積である黄褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置し、左右両袖の一部が残存していた。その構材には粘土(IV層)が用いられていた。また、カマドの前方部には角柱状に面取りされた軽石の支脚が立っていたが、やや前方にありすぎるため原位置を遊離しているかもしれない。カマド覆土は3層に分層された。I層が多量の灰を含む黒灰色土層、II層が灰・焼土等を含まない黒色土層、III層は少量の灰を含む黒褐色土層であった。

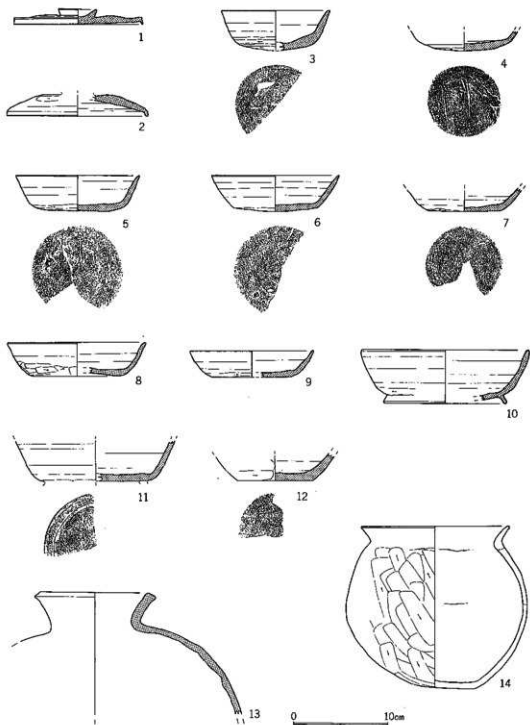
遺物 第157・158図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では蓋・坏・横瓶・甕、土師器では坏・甕がある。

1の須恵器蓋は扁平な盤状を呈するもので、つまみ部は皿状にくぼむものである。2の蓋は、つまみ部の形状が不明なもので、H-49出土の1の蓋と接合をみた。

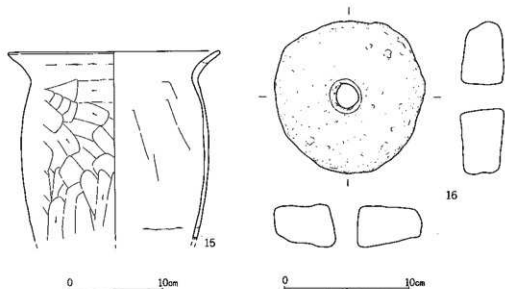
須恵器坏は、9点図示した(3~11)。このうち3~8は回転ヘラケリによる底部をみせており、その後、3には回転ヘラケズリが、5~8には手持ちヘラケズリが加えられている。また、9~11は切り離し方法は不明であるが回転ヘラケズリによる底部をみせる坏である。なお、10・11は高台付坏である。

IV 遺構と遺物



第157図 H-53号住居址出土遺物 (1:4)

1 整穴住居址



第158図 H-53号住居址出土遺物 (15=1:4, 16=1:3)

第69表 H-53号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

発出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備	考
15	紡錘車	軽石	12.1	11.9	3.4	185		

13は、須恵器の横瓶で、口縁部を残し胴部大半を失っている。

14は、小形球状を呈する土師器甕で、焼成が不良で脆いものである。

15は、「く」の字状に外反する口縁部をみせる土師器甕である。

この他、土師器では図示し得るものがなかったが、内面黒色研磨のなされたものの破片が認められた。

石器では、16の紡錘車が検出された。軽石を偏平に面取りしたもので、直径12.1cmを測る大形品で、内孔の径は2cmを測った。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

(54) H-54号住居址

遺構 第159・160図

H-54号住居址は、第I区ター-36グリッドにおいて検出された。

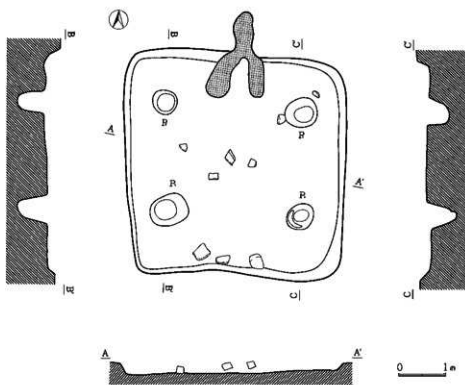
第70表 H-53号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

発掘 番号	器種	数量	器 形 の 特 徴	測 量	備 考
1 (完)	蓋 (皿)	4.0 1.7 13.8	器形は天井部であり高まらず、扁平な 盤状を呈する。 つまみ部は、中央が皿状にぼんだ形態 をとる。	外面 ロクロコナダの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く 含む灰色(N 4/D) 焼成良好
2 (皿)	蓋 (皿)	— — (15.1)		外面 ロクロコナダの後、天井部(回転?)ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く 含む灰白色 (10Y7/1) 耳縁・上縁は 粘土は比較的 精選され灰白色 (7.5Y7/1) を呈する焼成良好
3 (皿)	杯 (皿)	(11.6) — (7.0)	底部は丸縁をおびた平底を呈し、全体的 に肉厚で小形な器形	外面 底部ロクロコナダ 底部回転ヘラケリの後、回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 く含む赤褐色 (5YR4/8) を呈する
4 (皿)	杯 (皿)	— — (7.3)	底部は丸縁をおびた平底	外面 底部ロクロコナダ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 く含む赤褐色 (5YR4/8) を呈する
5 (完)	杯 (皿)	13.2 3.8 10.0	底部は丸縁をおびた平底	外面 底部ロクロコナダ 底部回転ヘラケリの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 く含む灰白色 (10Y 7/1) 底部に「く」 の字状記号あり
6 (皿)	杯 (皿)	(13.6) 3.8 8.9	底部は丸縁をおびた平底	外面 底部ロクロコナダ、底部回転ヘラケリの後、 全面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 く含む灰白色 (7.0Y4/1)
7 (皿)	杯 (皿)	— — (7.6)	底部は丸縁をおびた平底	外面 底部ロクロコナダ、底部回転ヘラケリの後、 全面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 く含む灰白色 (7.5Y7/1)
8 (皿)	杯 (皿)	(14.8) 3.6 (9.8)	底部は丸縁をおびた平底	外面 底部ロクロコナダの後、下部手持ちヘラケズ リ、底部回転ヘラケリの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰白色(5Y7 /1)を呈する。 焼成良好
9 (皿)	杯 (皿)	(13.2) 2.8 (8.4)	底部は丸縁をおびた平底	外面 底部ロクロコナダ 底部切り離しの後、回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み赤褐色(5YR 6/D) 焼成良好
10 (皿)	杯 (皿)	(17.9) 5.7 (13.1)	底部は丸縁をおびた平底	外面 底部ロクロコナダ 底部回転ヘラケズリの後、高台が貼り付けら れる。 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰白色を呈する。 (7.5Y5/1) 焼成良好
11 (皿)	杯 (皿)	— — (12.0)	底部は丸縁をおびた平底	外面 底部ロクロコナダ、底部回転ヘラケズリの後 高台を貼り付ける。 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み赤褐色を呈 する(5YR4/6)
12 (皿)	不明 (皿)	— — (8.0)	底部は丸縁をおびた平底	外面 胴下半部ロクロコナダ、底部切り離しの後、 手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰白色 (8Y7/0)
13 (完)	横腹 (皿)	12.9 — —	口縁部はラッパ状にひろく。	外面 口縁部コナダ 胴部切きの後、ヘラナダ(ヘラケズリ?) 内面 口縁部コナダ 胴部未調整(泡肌が残る)	胎土は砂粒を含 み灰色(N6/0) 口縁部に粘土巻 上層が残る
14 (皿)	小形盤	15.7 17.2 6.0	口縁部は短く「く」の字状に外反し、胴 部は球状を呈する。 底部はややゆがんだ平底。	外面 口縁部コナダ 胴部傾一斜位のヘラケズリ 内面 口縁部コナダ、胴部ヘラナダ	胎土は砂粒を多 く含む褐色 (7.5YR4/4)
15 (皿)	蓋	(22.5) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部コナダの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナダ 胴部ヘラナダ	胎土は明赤褐色 (5YR5/8)

本住居址は、南北4.7m東西4.7mの隅丸方形を呈し、床面積18.8㎡を測り、主軸方向はN-4°-Wを指す。壁高は15~25cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P₁~P₄の4個が検出された。P₁は70cm×60cm深さ45cm、P₂は55cm×50cm深さ60cm、P₃は80cm×60cm深さ65cm、P₄は60cm×50cm深さ60cmを測る。

覆土はI層のみで、小粒バミス・スコリアを若干含む粘性のある黒色土層であった。

1 竪穴住居址



第158図 H-54号住居址実測図 (1:80)

遺物は、いずれも覆土中からの出土で、良好な出土状態を示すものは認められなかった。

カマドは、北壁中央に位置するが、半壊状態にあり、その構材であった軽石の一部は住居の床面上に散乱していた。ただし、両袖石のいくつかは残存していた。A-A'の断面にかかる両袖石は、面取りされた軽石であり、その東袖石外面には貼られた粘土 (IV層) の一部が残っていた。またB-B'の断面にかかる袖石も面取り軽石であるが、特に西側のものは「J」状に削られていることが注意される。B-B'の断面の前方に残るピットは、袖石の抜き取り痕と考えられる。煙道部は90cm前後と他に較べると比較的長く壁外へ延びている。その中央はピット状に若干掘り込まれている。カマド覆土は5層に分層された。I層はローム粒子が多く混入する黄褐色土層、II層は若干の焼土粒子を含む黒色土層、III層は若干の灰を含む黒色土層、IV層が若干の灰を含む黒褐色土層、V層は焼土粒子をよく含む暗褐色土層であった。

遺物 第161・162図

遺物は、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕の各機種がみられた。

1は、回転糸切りのなされた底部をみせる小形の須恵器坏であるがおそらく混入品と考えられる。2は、盤状の形態を呈する須恵器高台付坏で、底部は回転ヘラケズリがなされている。

3は、体部に放射状暗文が施される土師器坏で、見込み部は風化が激しいためわからないが、ラセン状暗文が施されていた可能性もある。

4は、完全な還元炎焼成となっていない須恵器甕である。外面には叩き目がみられる。

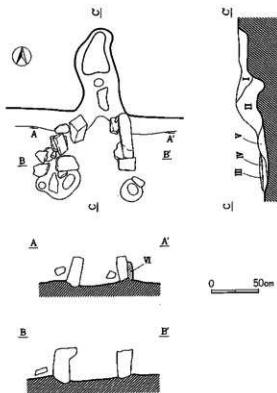
5～8は、「く」の字状に外反する口縁部をみせる薄手の土師器甕類である。

10は、軽石の紡錘車で、表裏両面が平に面取りされているが、比較的部厚いものといえる。

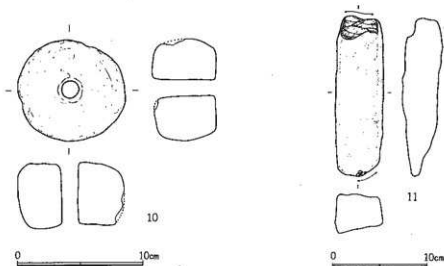
11は、河床礫を用いた絞石で、両端が敲打に供されている。その一端は嘴状に尖っている。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

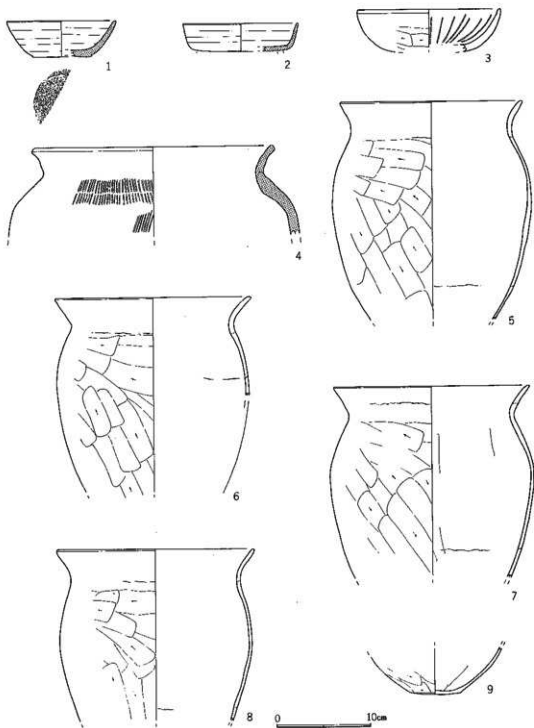


第160図 H-54号住居址カマド実測図(1:40)



第161図 H-54号住居址出土遺物(10は1:3, 11は1:4)

1 竖穴住居址



第162图 H-54号住居址出土遗物(1:4)

IV 遺構と遺物

第71表 H-54号住居址出土遺物一覧表(土器)

検出番号	器種	注量	器形の特徴	調 査	備 考
1 (図)	坏 (須)	(11.6) 3.8 (6.4)	体部は外反し、底部平直の小形の器形	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み青灰色 (5PB6/1)
2 (回)	坏 (須)	(12.2) —	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられるものと考えられる、斜平な盤状の器形	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選され暗赤灰色 (5R3/1) 焼成良好
3 (回)	坏	(15.1) —	体部は丸味をおびて外反し、内面の口唇は曲かにくびれる。	外面 体部ヨコナデ、体部下半〜底部手持ちヘラケズリ 内面 体部はヨコナデの後、放射状横文を施す。底底は風化が激しく調査不明	胎土は中砂粒を含み褐色を呈する (75YR6/6)全体に褐色を染み、胎土は比較的薄い
4 (図)	甕 (須)	(25.0) —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部叩き 内面 斜角が激しく、調査不明	胎土は比較的暗褐色(75YR6/4)を呈する。完全な還元状態となっており、
5 (回)	甕	(20.8) —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は赤褐色の中粒子を多く含み、暗赤褐色 (2.5YR3/4)
6 (完)	甕	20.8 —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は濃い褐色(75YR5/4)
7 (回)	甕	20.8 —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は明赤褐色(2.5YR5/6)
8 (回)	甕	(20.9) —	口縁部は「く」の字状にゆるく外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土は濃い褐色(75YR5/4)
9 (完)	甕	— (5.3)	胴下半部は縁状を呈し、底部平直。	外面 胴下半部および底部ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	胎土は濃い褐色(75YR5/3)を呈する。

(55) H-55号住居址

遺 構 第163・164図

H-55号住居址は、第I区ター36グリッドにおいて検出された。

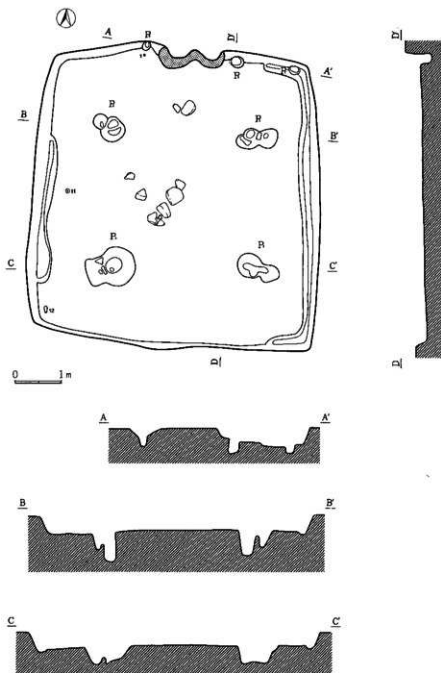
本住居址は、南北6.5m東西6.2mの隅丸方形を呈し、床面積33.3m²を測り、主軸方向はN-4°-Wを指す。壁高は25~35cmを測る。壁溝は、北東コーナーから東壁・南東コーナーにかけてと、西壁の一部において認められる。主柱穴と考えられるものは、P₁~P₄の4個が検出された。P₁は55cm×40cm深さ55cmを測るもので、その東脇には補助柱穴かとも考えられる45cm×40cm深さ40cmほどのピットが付随している。P₂は、55cm×55cm深さ60cmを測り、P₁と同様35cm×30cm深さ35cmの補助柱穴的なピットが付随する。P₃は105cm×85cm深さ35cm、P₄は90cm×50cm深さ35cmを測るが、その平面形や断面形からP₁・P₂にみる補助柱的なものをもっていと解される。また、北壁際には、P₅・P₆・P₇が存在するが、これも補助柱の柱穴かと考えられる。P₅は20cm×15cm深さ20cm、P₆は25cm×25cm深さ30cm、P₇は25cm×15cm深さ15cmを測る。

遺物は、カマドの西脇より正常位で1の坏が、西壁際の床面直上より11の紡錘車が、南西コー

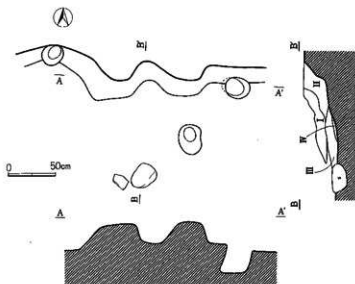
第72表 H-54号住居址出土遺物一覧表(石器)

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
10	紡錘車	磁石	8.0	8.4	5.3	185	
11	敷石	玄武岩 安山岩	18.8	5.0	4.1	585	

1 整穴住居址



第183图 H-55号住居址实测图 (1:80)



第164図 H-55号住居址カマド実測図(1:40)

ナーの床面直上より13の敲石がそれぞれ検出されている。この他は、いずれも覆土中からの出土であった。

覆土はI層のみで、小粒バミスを含みローム粒子が若干混入する黒色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、すでに壊滅状態にあり、その構材であった礫は住居中央に散乱していた。図のA-A'の断面からは、ローム部分が袖状に僅かに削り出されていたことが窺える。カマドはすでに破壊されているため、その部分の覆土はプライマリーな堆積とはみられないが、一応4層に分層された。I層が若干の焼土・カーボンを含む灰層、II層が焼土をブロック状に含む黒褐色土層、III層が焼土及び灰から構成される灰褐色土層、IV層が焼土層である赤褐色土層であった。

遺物 第165・166・167図

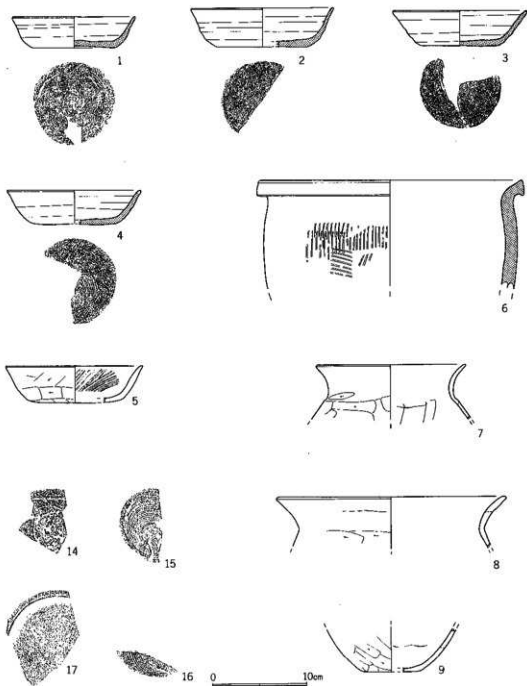
本住居址より検出された遺物は、須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕が、土師器では坏・甕がみられた。

須恵器蓋は、図示しなかったが、内面にかえりを有さないものであった。

須恵器坏は1～4の4点を図示したが、いずれも底部切り離しの後持ちへラケズリのなされるものであった。その切り離し方法は、1は回転へラキリ、3・4は回転糸切りにより、2は不明である。

5は、内面体部に放射状暗文の施される土師器坏で、見込み部は風化が激しくわからないがあ

1 整穴住居址



第185图 H-55号住居址出土遺物 (1:4)

第73表 H-55号住居址出土遺物一覽表 (土器)

標記 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	環 (環)	(12.5) 3.3 8.6	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリの後、 全面手持ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色(5Y5/1) 内面に火障あり
2 (回)	環 (環)	(14.0) 4.0 (8.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部切り離しの後、全面 手持ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色(7.5Y 5 /1) 内外面に [N]の火障
3 (回)	環 (環)	(14.2) 3.7 (8.2)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切りの後、周 圍手持ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 く含み灰色 (N5/0)
4 (回)	環 (環)	(14.2) 3.6 (8.9)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切りの後、周 圍手持ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 く含み緑灰色 (10GY5/1)
5 (回)	環	(14.5) (3.9) (10.2)	体部は外反し、底部は平底になるものと 思われる。	外面 口縁部ヨコナデ、 体部～底部手持ヘラケズリ 内面 体部ヨコナデの後、放射状暗文が施される。 底面遺痕不明	胎土は中砂粒を 多く含み褐色 (7.5YR6/6)
6 (回)	壺 (壺)	(28.5) —	胴上部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁 部は折り返しは無い。	外面 胴部引きの後、口縁部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ 胴部縦位のナデ	胎土は砂粒を含 み赤褐色 (2.5YR 8/3) 焼成良好
7 (回)	甕	(18.0) —	口縁部は「く」の字状に外反する。 口底は比較的小さい。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケナデ	胎土はにがい橙 色 (7.5YR6/4)
8 (回)	甕	(24.4) —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケナデ	胎土はにがい橙 色 (7.5YR6/4)
9 (回)	甕	— (6.0)	底部平底。	外面 胴下半～底部ヘラケズリ 内面 ヘラケナデ	胎土はにがい橙 色 (7.5YR5/3)

るいはラセン状暗文がなされて
いたものと思われる。また、内
面の口唇部はあたかも一本の沈
線が巡ったように僅かにくびれ
ていることが注意される。

6は、胴上半がほぼ直立し口
縁部が短く強く折れ曲る須恵
器甕である。

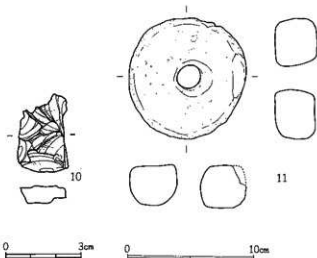
7・8は、「く」の字状に外反
する口縁をみせる土器器甕であ
る。

本住居址より検出された石器

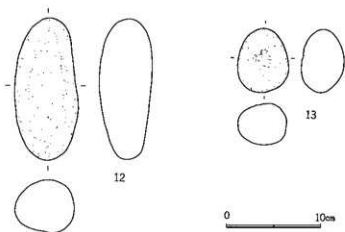
には、10～13がある。

10は、黒曜石の両面加工品で、石楯等の素材となるものであろうか。

11は、軽石が円盤状に面取りされその中央に穿孔がなされた紡錘車である。



第106図 H-55号住居址出土遺物 (10=2:3, 11=1:3)



第167図 H-55号住居址出土遺物(1:4)

12は、細長い河原石を用いた敲石と考えられるが、顕著な敲打痕は観察されない。

13は、卵形を呈する河床礫で、磨石として用いられたのであろうか。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

第74表 H-55号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

博物館号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
10	不明	黒曜石	3.0	2.0	0.8	5	
11	紡錘車	砥石	9.6	9.2	3.4	140	
12	敲石	安山岩	15.0	6.7	5.7	770	
13	磨石?	輝石 安山岩	6.8	5.4	4.5	210	

(56) H-56号住居址

遺構 第168・169図

H-56号住居址は、第I区ター36グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.2m東西3.6mの隅丸方形を呈し、床面積10.9㎡を測り、主軸方向はN-15°-Wを指す。壁高は40cm前後を測り、壁溝は認められない。また、支柱穴等ピットもまったく存在していなかった。

遺物は、カマド中に土師器小形壺の完存品が認められたが、盗難にあい紛失してしまった。これ以外の遺物は、いずれも住居址覆土中より出土している。

住居址覆土は、3層に分層された。I層は河川による砂利の堆積した灰色土層、II層がパミスを若干含み若干のローム粒子が混入する黒褐色土層、III層は多量のローム粒子が混入する黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、支脚石と天井石の一部をとどめているのみであった。その

掘り方は壁外に大きく突出しており、その主体部はおそらく奥まった部分にあったものと考えられる。したがって、住居内に張り出す軸は持たないものとみられる。図のaは、焚口部の天井に渡された面取り軽石ですすでに焚口部に崩落してしまったものである。またbは、軽石の支脚石である。

遺物 第170図

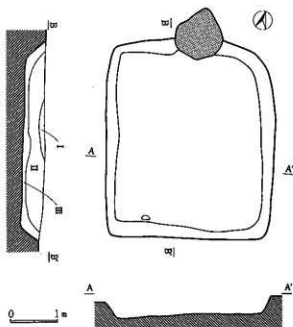
本住居址から検出された遺物には、須恵器坏・甕、土師器甕の破片がみられた。

1は、回転ヘラケズリのなされた須恵器坏の底部である。その切り離し方法は不明。

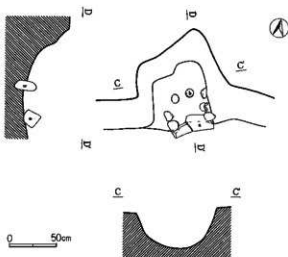
2は、「く」の字状に外反する土師器甕の口縁部である。

時期

本住居址は、時期決定の手掛りとなる遺物が少ないためその所産期の推定が難しい。



第168図 H-56号住居址実測図(1:80)



第169図 H-56号住居址カマド実測図(1:40)

(57) H-57号住居址

遺構 第171・173図

H-57号住居址は、第II区シー23グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北5.1m東西4.7

mの隅丸方形を呈し、床面積19.4㎡を測り、主軸方向N-0°-Wを指す。壁高は15~20cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴と考えられるものは、P₁・P₂の2個が検出された。P₁は40cm×40cm深さ45cm、P₂は40cm×30cm深さ45cmを測る。また、P₃・P₇・P₈は補助柱の柱穴かと考えら

第75表 H-56号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

図号 番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (充)	坏 (須)	— — (19.6)	胴部は外反し、底部平底。	外面 体部ロコココナダ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロコココナダ (ロココ回転)	胎土は精選され 灰色 (N5/1) 鉄或良好
2 (四)	甕	(19.7) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ロコココナダの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ロココナダ 胴部ヘラケズリ	胎土は赤褐色を 帯する。 (5YR4/6)

れるもので、P₅は40cm×35cm深さ20cm、P₇が55cm×30cm深さ25cm、P₈は40cm×35cm深さ20cmを測る。P₅・P₈は柱穴とは考えられない浅いビットで、P₆が60cm×55cm、P₉が85cm×75cmを測る。P₄は、カマド西脇にあるビットで、その中には多量の灰が詰まっており、「灰落とし」と言われるようなカマドの灰を一時的に溜めておく施設とも考えられようか。

遺物は、いずれも覆土中からの出土であった。

覆土はI層のみで、小粒バミスを若干含む黒色土層であった。

カマドは、北壁中央よりやや東寄りに存在するもので、東西二対の袖石が残っていた。その構材には、安山岩 (a) と面取り軽石 (b) が用いられ、それらにさらに粘土 (V層) が貼られる様相を呈していた。カ

マド覆土は、4層に分層された。I層が灰の堆積層、II層は灰・焼土をよく含む灰褐色土層、III層は赤褐色の焼土層、IV層は、灰・焼土をまったく含まない黒褐色土層であった。

遺物 第172図

本住居址からは、須恵器では坏・甕、土師器では甕の各器種がみられた。

1・2は、回転糸切りによる底部をみせる須恵器坏である。

3は土師器の小形甕で、球状の胴部を呈している。

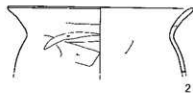
この他、石器・鉄製品類は本住居址においては認められなかった。

時 期

本住居址は、奈良・平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。



1

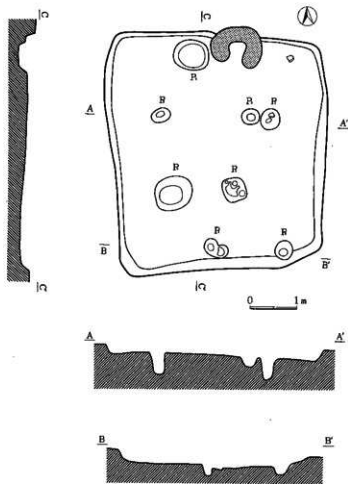


2

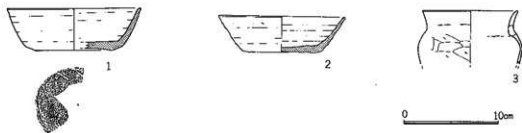
0 10cm

第172図 H-56号住居址出土遺物 (1:4)

IV 遺構と遺物



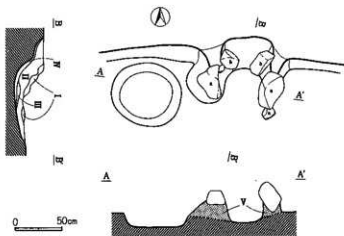
第171図 H-57号住居址実測図 (1:80)



第172図 H-57号住居址出土遺物 (1:4)

第76表 H-57号住居址出土遺物一覧表(土器)

発掘 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (Ⅲ)	杯 (瓊)	(14.1) 4.4 (8.2)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(10Y4/1)内外面に 水層あり
2 (Ⅲ)	杯 (瓊)	(13.4) 3.8 (8.2)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰白色(7.5Y7/1)
3 (Ⅲ)	甕	(10.1) —	口縁部はやや外反し、胴部は球状を呈する、小形の器形	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	胎土は黒色を呈する (10YR 2/1)



第173図 H-57号住居址カマド実測図(1:40)

(58) H-58号住居址

遺 構 第174・175図

H-58号住居址は、第Ⅱ区シー24グリッドにおいて検出された。

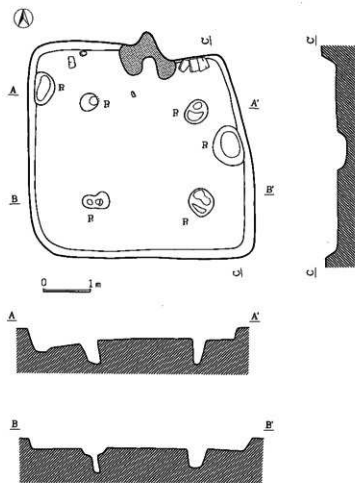
本住居址は、南北4.6m東西4.75mを測り、北東コーナーの歪んだ隅丸方形を呈し、床面積17.5㎡を測り、主軸方向はN-0°-Wを指す。壁高は25~45cmを測り、壁溝は認められない。支柱穴は、P₁~P₄の4個が検出された。P₁は55cm×40cm深さ50cm、P₂は40cm×35cm深さ50cm、P₃は60cm×35cm深さ55cmを測り二段の掘り方をみせている。P₄は60cm×55cm深さ40cmを測る。また、東壁際には、P₅が、西壁際にはP₆があり、P₅は85cm×60cm深さ20cm、P₆は60cm×40cm深さ10cmを測る。

覆土はI層のみで、若干の小粒バミスを含む黒色土層であった。

遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

カマドは、北壁中央よりやや東寄り存在するが、その前方部はすでに取り壊された状態にあ

IV 遺構と遺物



第174図 H-58号住居址実測図 (1:80)

り、その構材である面取り軽石3個はカマドの東脇に並べて置かれていた。また、A・B・Cの各断面にみる生きている袖石もすべて面取り軽石であり、とりわけC断面の東側の袖石が「T」状に面取りされていることは注意される。これらの袖口に粘土(VI層)が貼られ、袖となっている。カマド覆土は、5層に分層された。I層は多量の灰を含む黒灰色土層、II層は多量の焼土を含む黒褐色土層、III層は灰を含む黒灰色土層、IV層は若干の灰を含む黒褐色土層、V層は灰・焼土は含まない黒褐色土層であった。

遺物 第176図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では蓋・坏・甕・土師器では甕の破片がみられた。

1・2は、いずれも回転糸切りによる底部をみせる坏で、2には高台が貼り付けられている。

1 壺穴住居址

須恵器甕は、いずれも破片ばかりで器形を知り得るものがなかった。

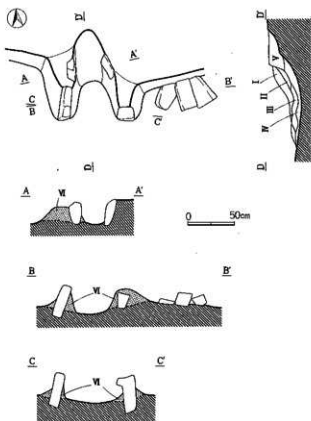
土師器甕も図示し得るものがなかったが、「く」の字状を呈する口縁部破片がみられた。

3は、砂岩製の砥石である。その表面は五面からなるがいずれも研砥に供されている。そのうち二面には線状の研砥痕が残る。器体の半分を欠損する。

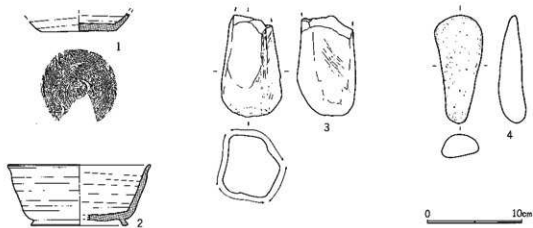
4は、楕形の敲石である。

時 期

本住居址は、奈良・平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。



第175図 H-58号住居址カマド実測図 (1:40)



第176図 H-58号住居址出土遺物 (1:4)

第77表 H-58号住居址出土遺物一覧表(土器)

図号	器種	注記	器形の特徴	説	備考
1 (完)	坏 (須)	- (8.0)	体部はやや外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナダ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナダ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (7.6 Y 4 / 1)
2 (破)	坏 (須)	<15.2> 6.4 10.3	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロコナダ、底部回転糸切りの後、周 辺回転ヘラズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は暗灰色を呈する (N 3 / 0)

(59) H-59号住居址

遺構 第177・178図

H-59号住居址は、第II区シー24グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.7m東西3.6mの隅丸方形を呈し、床面積は18.7㎡を測り、主軸方向N-2°-Wを指す。壁高は20~40cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴と考えられるものはP₁~P₃の3個が検出された。それぞれ3カ所のコーナーに配されるが、南東コーナーにおいては検出されなかった。P₁が80cm×65cm深さ20cm、P₂が50cm×40cm深さ10cm、P₃が50cm×40cm深さ15cmを測るが、いずれも柱穴にしては浅いものといえる。また、住居中央においては85cm×75cm深さ10cmを測るP₄が検出された。

遺物は、南壁寄りの床面直上より1の須恵器坏の底部が検出された。この他は、いずれも覆土中からの出土である。

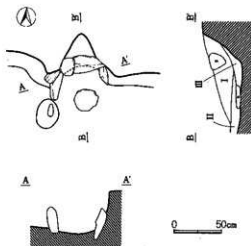
住居址覆土は、3層に分層された。I・III層はバミスをよく含みローム粒子が混入する黒褐色土層、II層も同様にバミスをよく含みスーム粒子が混入する暗褐色土層であった。

カマドは、北壁中央よりやや東寄りに存在し、その前方部はすでに破壊されていたが、その後方部は比較的良好に残っていた。図のA-A'の断面では、西側に偏

平な面取り軽石の袖(a)が配され、東側には偏平な安山岩礫(b)が配されていることがわかる。aの手前のピットは、袖石の抜き取り痕である。また、B-B'の断面をみると、煙道部天井には角柱状の面取り軽石(c)が渡され、また火床部にはカマドの構材を用いられていたと考え

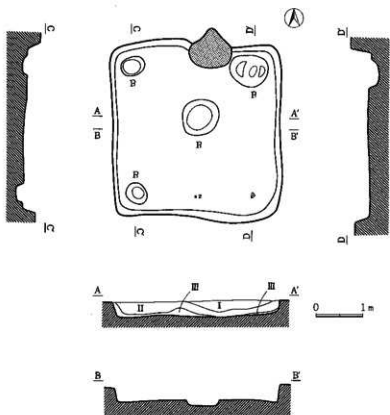
第78表 H-58号住居址出土遺物一覧表(石器)

図号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
3	砥石	砂岩	<10.5>	6.3	6.3	(585)	
4	砥石	角閃岩 安山岩	11.3	5.0	2.6	140	

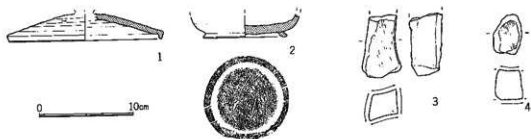


第177図 H-59号住居址カマド実測図(1:40)

1 整穴住居址



第178図 H-59号住居址実測図 (1:80)



第179図 H-59号住居址出土遺物 (1:4)

られる偏平面取り軽石 (d) が残置されていた。カマドの覆土は、3層に分層された。I層は若干のカーボンを含む茶褐色土層、II層はカーボン・焼土・灰をよく含む黒灰色土層、III層は赤褐色の焼土層であった。

遺物 第179図

本住居址より検出された遺物には、須恵器では壺・坏が、土師器では甕がある。

第79表 H-59号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出番号	器種	数量	器形の特徴	調査	備考
1 (回)	蓋 (須)	— (16.1)	つまみ部の形状は不明	外面 ロクロコナダの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (10Y 6 / 1)
2 (完)	坏 (須)	— 8.9	体部は外反し、底部には高合が貼り付けられる。	外面 体部ロクロコナダ、底部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (5Y 5 / 1)

1は須恵器蓋で、つまみ部は欠失するがおそらく宝珠形を呈するものと思われる。

2は須恵器の高台付坏で、底部は切り離されて後手持ちヘラケズリがなされている。

土師器甕は、図示し得るものがなかったが、「く」の字状に外反する口縁部破片がみられた。

3は、砂岩製の砥石である。その表面は4面から構成されるが、4面とも研砥に供されている器体の半分を欠損する。

4も、砂岩製の流紋岩の断片である。相対する二面が研砥に供されていることがわかる。

時期

本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。

(60) H-60号住居址

遺構 第180図

H-60号住居址は、第II区シー24グリッドにおいて検出された。本住居址は、D-16・D-19号土壇と重複するが、一応これらより新しいものと捉えられた。

本住居址は、南北4.8m東西4.7mの隅丸方形を呈し、床面積18.7㎡を測り、南北軸方向はN-19°-Wを指す。壁高は15cm前後を測り、壁溝は認められない。ピットは、南西コーナーよりP₁が、南壁中よりP₂が検出された。P₁は60×40cm深さ25cm、P₂は75cm×65cm深さ45cmを測る。

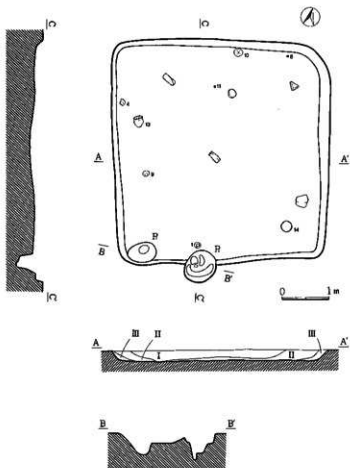
遺物は、住居址の中央には分布せず壁際に寄って分布する傾向がみられた。図中にナンバーで示したのは遺存度の高い遺物である。1の竈はP₂付近の床面より5cm程上から正常位で、9の埴は西壁寄りの床面上より正常位で、12の甕は西壁寄りの床面上より横倒しの状態で検出されている。その他、ナンバーで示さなかった遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

住居址覆土は3層に分層された。I層が黒色土層、II層が黒褐色土層、III層が茶褐色土層であった。

第80表 H-59号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
3	砥石	砂岩	(6.5)	4.0	3.2	(100)	
4	砥石	砂岩	(4.2)	(3.1)	3.2	(50)	

1 竪穴住居址



第184図 H-60号住居址実測図 (1:80)

なお、本住居址においては炉は認められなかった。

遺物 第181・182図

本住居址より検出された遺物は、器種的には甕・手捏・坏・器台・甌・甕の各種がみられた。

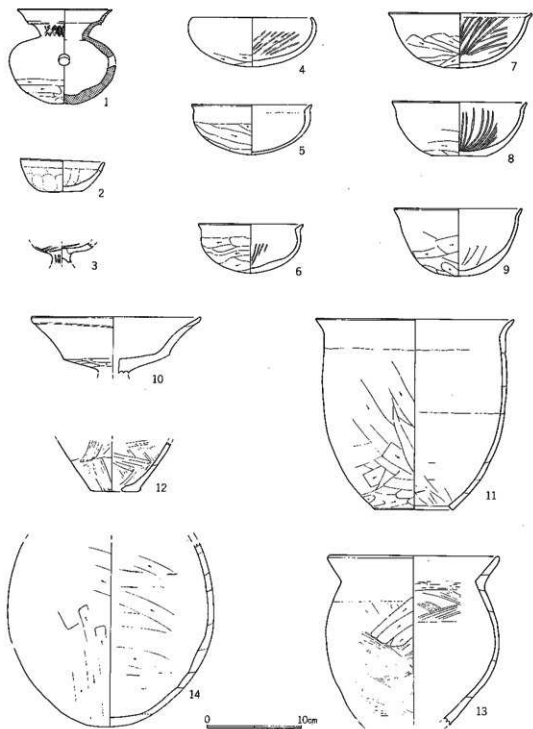
1は甕で、本住居址出土の唯一の須恵器である。ラッパ状に開く口縁部とややつぶれた球状の胴部からなるもので、頸部には16単位の波状文が施こされている。焼成良好な優品である。

2・3は所謂手捏土器で、2は坏形態、3は高坏形態を呈する小形品である。

4～8は土師器坏で、4は素口縁で体部から口唇部にかけて内湾するもので、5～8は短く外反する口縁部をもつものである。6～8には内面に放射状の暗文が施こされている。また、9の塊もやや深み加わりますが大方のプロポーションとしては5～8の坏と同様なものと考えられる。

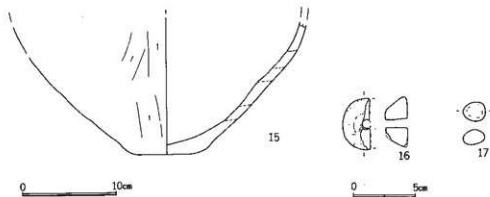
10は、脚部を失うものの高坏と同様なプロポーションを呈すると考えられるもので、内面の焼

IV 遺構と遺物



第14図 H-60号住居址出土遺物 (1:4)

1 聖穴住居址



第182図 H-60号住居址出土遺物 (15=1:4, 16・17=1:3)

成前の穿孔から機種のには器台と考えられる。

甑は、いずれも単孔のものであるが、その径の大きい11と小さい12とが認められた。

第81表 H-60号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

図説番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
16	紡錘車	滑石	4.1	(2.2)	1.8	(20)	
17	玉石	滑石	1.6	1.7	1.2	5	

土師器甕は、13~15を図示した。13は底部を除きほぼ完存するもので、「く」の字に外反する口縁部とややふくらんだ胴部をみせている。また、14は球胴で丸底の、15は平底の甕である。

石器では、16の滑石の紡錘車の半欠品が検出されている。H-53・54・55等でみた軽石の紡錘車と比べると小形品といえる。

石製品では、17の玉石がある。おそらく祭祀的・装飾的な意味をもつものであろう。

時期

本住居址は、古墳時代中期、前田遺跡第I期に位置付けられよう。

(61) H-61号住居址

遺構 第183・184図

H-61号住居址は、第II区シー-25グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北8.1m東西8.3mを測る隅丸方形の大形住居址で、床面積64.7㎡を測り、南北軸はN-7-Wを指す。壁高は20cm前後を測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P₁~P₄の4個がそれぞれ4ヶ所の各コーナーに配されていた。P₁は90cm×85cm深さ30cm、P₂は85cm×60cm深さ20cm、P₃は75cm×60cm深さ30cm、P₄は40×35cm深さ20cmを測った。また、柱穴かどうかわからないが、南東コーナー寄りからP₅が検出された。P₅は55cm×50cm深さ20cmを測る。

IV 遺構と遺物

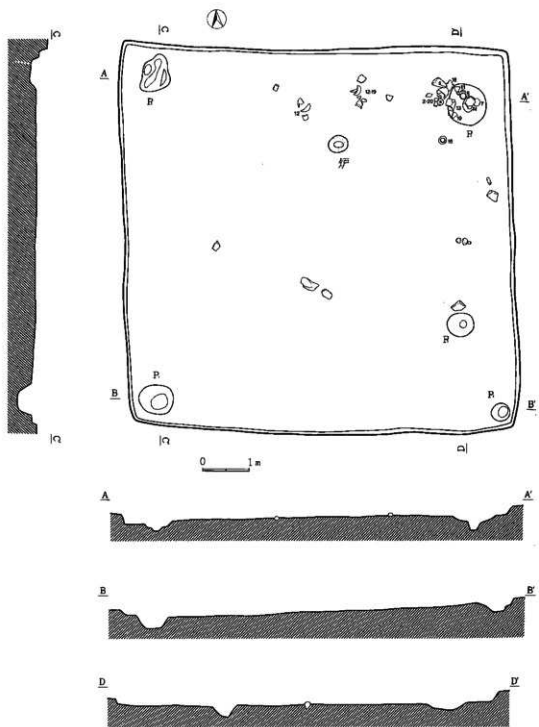
第82表 H-60号住居址出土遺物一覧表(土器)

神田番号	器種	法量	器形の特徴	調査箇所	備考
1 (完)	脚 (須)	9.9 9.8 —	口縁部はラッパ状にひろきその中央部にあまりシャープでない縁を有する。底部はやや扁平な丸底。胴部は中央よりやや上に最大径をもち内孔が外側より登られる。	外面 胴下半部は低い傾位のヘラケズリ。上半部はヨコナデ。胴部には15単位の波状文が施される。 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ナデ	粘土は砂粒を多く含む褐色(7.5 YR 5/6)を呈する。内面に施された波状文は外側面から内側面までほぼ均等に分布している。
2 (破)	手摺	(9.0) 3.4 (4.5)	小形で底部は平底を呈する。胴面には指輪による若干の凹凸あり球形部	外面 底部へ体部ナデ。口唇部ヨコナデ。 内面 底面中心より体部に向け放射状にナデ。口唇部ヨコナデ 粘土塊より直接成形	粘土は砂粒を多く含む褐色(7.5 YR 6/6) 焼成は良好ではない。
3 (破)	手摺	—	高球形部	外面 体部傾位のヘラミガキ 脚部傾位のヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	粘土は砂粒を含み灰黄褐色(10 YR 8/2)
4 (破)	杯	(12.8) 5.2 —	体部は口縁にかけて内湾し、底部は丸底を呈する。	外面 口縁部ヨコナデ 体部から底部はヘラケズリ 内面 放射状の暗文	粘土は砂粒を多く含む褐色(7.5 YR 6/6) 焼成は良好でなく全体に風化が激しい。
5 (破)	杯	12.8 5.3 —	口縁部はやや内湾したのち、口唇部にかけて短く外反する。底部平底。	外面 口縁部ヨコナデの後、体部へ底部にかけてヘラケズリ 内面 ヨコナデ	粘土は砂粒を多く含む褐色(2.5 YR 4/8)
6 (破)	杯	(11.2) 5.3 —	体部はやや内湾した後、口唇部が短く外反する。底部丸底、小形な器形。	外面 口縁部ヨコナデの後、体部へ底部にかけてヘラケズリ 内面 ヨコナデの後、放射状の暗文が施される。	粘土は精選されず明赤褐色を呈する(2.5 YR 5/6)
7 (完)	杯	15.2 5.8 —	体部は丸縁をおびて外反し、口唇部で短く外反する。口縁部内面は僅かにかえりをもつ。底部丸底。	外面 口縁部ヨコナデの後、体部へ底部にかけてヘラケズリ 内面 放射状の暗文が施される。	粘土は砂粒を含み褐色(5 YR 6/8)
8 (破)	杯	(14.2) 5.7 (6.0)	口縁部は丸縁をおびてやや内湾した後、口唇部で短く外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、体部下半へヘラケズリ、底部ヘラケズリ 内面 口唇部ヨコナデ、体部放射状の暗文が施される。	粘土は砂粒を含み明赤褐色(5 YR 6/8)
9 (完)	罎	13.6 7.1 —	体部は丸縁をおびて外反し、口唇部で短く外反する。ほぼ完形。	外面 口縁部ヨコナデの後、体部下半へ底部にかけてヘラケズリ 内面 口唇部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	粘土は砂粒を含み褐色(7.5 YR 7/4)
10 (完)	罎台	17.9 — —	杯部は下半に腰をもって外反し、口唇部外面には一面の比喩が認められる。杯部中央には鑿成前の穿孔がありここにホゾはされていない。これより罎台と考えたい。	外面 杯底部ヘラケズリ。体部ヨコナデ 内面 ヨコナデ	粘土は砂粒を多く含む褐色(5 YR 5/8)を呈する。
11 (破)	甗	(21.0) 20.2 (8.4)	口縁部は外反し、胴部上半は直線的に胴部下半にかけてややすぼまる器形。底部は径の大きい卑孔。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ。胴部刺毛目状調整。最下部ヘラナデ	粘土は砂粒を含み明赤褐色(5 YR 5/6)
12 (完)	甗	— 5.8 —	底部は平底で、径の小さい卑孔が穿たれる。	外面 胴部下、あるいは刺毛目状調整 内面 刺毛目状調整	粘土は砂粒を多く含む褐色(7.5 YR 4/6)を呈する。
13 (完)	甗	18.2 — —	口縁は「く」の字状に外反し、胴部はややふくらみをもつ。底部は欠損する。	外面 口縁部ヨコナデ。胴部刺毛目状調整。 内面 口縁部ヨコナデ。胴部上半部刺毛目状調整。 胴下半部ヘラケズリ	粘土は砂粒を多く含む明赤褐色を呈する。(7.5 YR 5/6)
14 (完)	甗	— — —	胴部は球状を呈し、底部は僅かに扁平となる丸底。	外面 胴上半部傾位のヘラケズリ 胴下半部傾位のヘラケズリ 内面 傾位へのヘラケズリ	粘土は砂粒を多く含む褐色(7.5 YR 5/4)内面は粘着が強い。
15 (完)	甗	— 9.0 —	底部は径の小さい平底を呈し、胴下半部は大きく外反する。	外面 胴下半部傾位へのヘラケズリ 内面 ヨコナデ	粘土は砂粒を含み褐色(5 YR 6/4)内面は粘着が強い。

覆土は、2層に分層された。I層が黒色土層、II層が黒褐色土層で、基本的にはH-60と同様な堆積であった。

遺物は、住居址I区の北半分に集中して分布した。わけても炉の北側とP₁の内外からの出土が目立った。図中にナンバーで示したのは、遺存率の高い個体である。まず、炉の北側からは12の壺19の號の破片がまとまって出土し、P₁の南からは壺16の口縁部が出土している。P₁中からその

1 雙穴住居址



第183圖 H-61号住居址実測圖 (1:80)

西外にかけては、2・7・10・11・13・14・18・20の各個体の破片が一括出土している（図版参照）。

炉は、北壁寄りの中央に存在した。43cm×36cm深さ10cmを測る地床炉で、赤褐色の焼土（I層）の堆積がみられた。

遺物 第185・186・187図

本住居址からは、比較的大量に遺物が検出され、さまざまな器種の土器がみられた。

1・2は、須恵器の壺である。口縁部はラッパ状に開き、胴部はやや潰れた球体を呈する。大観するなら、波状文が施されない事を除けばH-60の壺と同様な形態を呈するものとみなし得る。双方とも均一な器形を呈し、焼成良好な優品といえよう。

土師器環には、体部が丸味をおびて内湾し素口縁の3と、体部が丸味をおび口縁部が短く外反する4・5がある。

6～9は土師器壺で、体部が丸味をおび口縁部が短く外反するものである。ただし、9については17と同様な小形甕の範疇で理解したほうがよいかもしれない。

10は、高坏と同様なプロポーションを呈するが、坏部の底に焼成前の穿孔があり、器台としての機能を果たしていたことが窺える。その坏部体の中央には鈍い稜が巡っている。

11は、土師器の高坏である。10とほぼ同様なプロポーションを呈しているが、坏部体の中央に稜は巡らない。

12は土師器壺である。胴部は球状を呈し、その下部において鈍い変換点をもって底部に至るものである。また、13・14は、接合はみななかったが同一個体の胴部上半と下半のそれぞれと考えられる。胴部全体の器形は、やや下ぶくれの球状を呈している。16も、壺の口縁部と考えられるがその口縁部の中央に鈍い稜が巡る点他と異なっている。

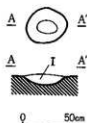
17～19は、土師器の小形丸底甕である。わけても、17は、小形品である。また、18の口縁部には16と同様退化した稜が巡っている。なお、19の底部付近には、須恵器にみられる叩き目状の調整痕が残っており興味深い。

20は、土師器甕で、内外面には刷毛目状調整が残っている。焼成はあまり良好でない。この他21～23も甕の胴下半部以下である。

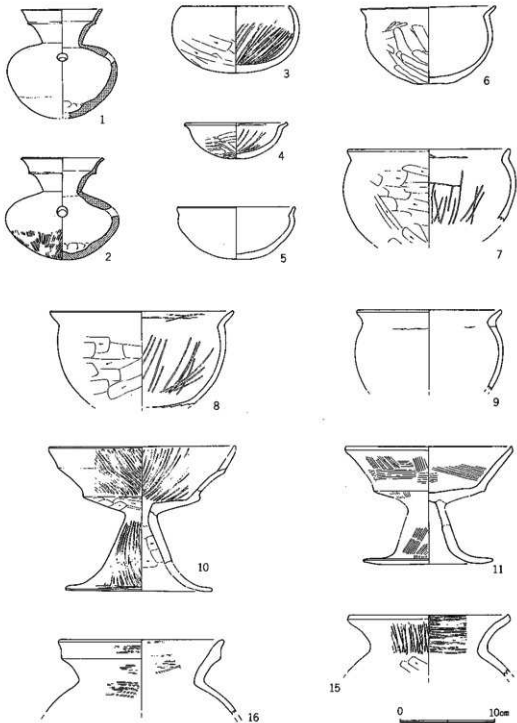
石製品としては、24～26が検出された。

24・25は、滑石の有孔円盤である。24は円形・25は楕円形を呈し、相対する部分に孔が穿たれている。双方の表裏両面には、研磨時の線状痕が残る。

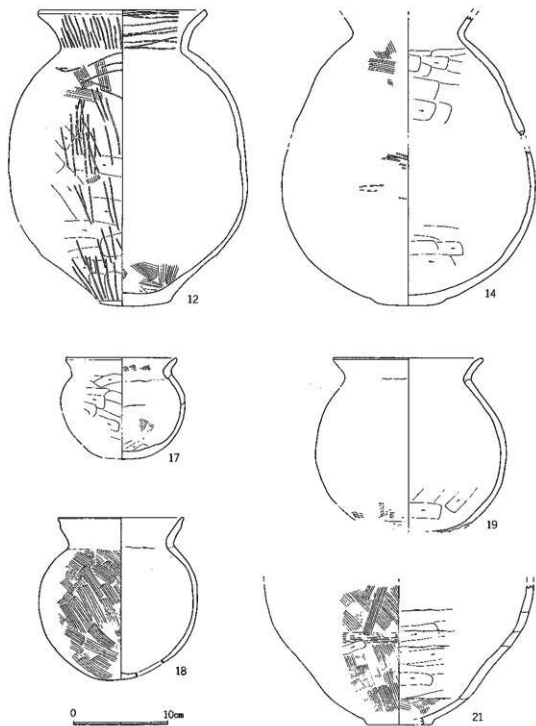
26は、粘板岩が偏平に研磨された石製品である。一端を欠損するが、あるいは有孔円盤の未成



第184図 H-61号住居址炉（1：40）

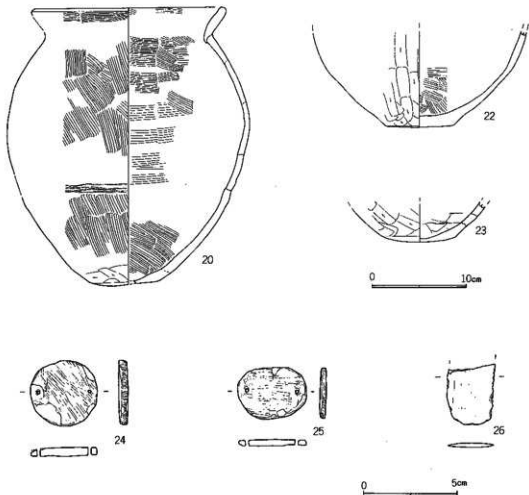


第185图 H-61号住居址出土遗物(1:4)



第18図 H-61号住居址出土遺物 (1:4)

1 整穴住居址



第177図 H-61号住居址出土遺物 (20~23=1:4, 24~26=1:2)

品とも考えられる。

時期

本住居址は、古墳時代中期、前田遺跡第I期に位置付けられよう。

第83表 H-61号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

図録番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
24	有孔円盤	滑石	3.4	3.5	0.5	1.0	
25	有孔円盤	滑石	2.7	3.6	0.4	6	
26	不明	粘板岩	(3.0)	2.5	0.2	3	有孔円盤未成品?

第84表 H-61号住居址出土遺物—一覧表(土器)

標記番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (完)	皿 (皿)	(8.6) (11.5) —	口縁部はラップ状に開き、その中央には鋭い稜がめぐれる。胴部は球状を呈し、その最大径は中や上方にあり肩のあった形状となる。垂みの少ない均一な器形。	外面 ヨコナデ、胴部上半に自然釉が付着する。 内面 ヨコナデ、口縁部に自然釉が付着する。	胎土は焼造され褐色を呈する(7.5 YR 4/1) 焼成良好
2 (完)	皿 (皿)	(8.8) (10.8) —	口縁部はラップ状に開き、その中央には鋭い稜がめぐれる。胴部はつぶれた形状を呈し、その中央にその最大径がくる。垂みの少ない均一な器形。	外面 胴部上半へ口縁部にかけては横ナデがなされる自然釉が付着する。 内面 ヨコナデ、口縁部に自然釉が付着する。	胎土は若干の白色砂粒を含むが精選される。灰色(N5/0)焼成良好
3 (完)	杯	11.5 7.1 —	体部は丸味をおびて内周し、底部はやや扁平な丸底。	外面 口縁部ヨコナデ、胴下半へ底部ヘラミガキ 内面 ヨコナデの後、放射状増文が施される。	胎土は砂粒を多く含む赤褐色(5 YR 5/0)焼成は良好でない。
4 (回)	杯	(10.7) 3.8 —	体部は丸味をおびて外反し、口縁部は短く外反する。底部丸底。	外面 口縁部ヨコナデ、体部へ底部ヘラミガキ 内面 ヨコナデの後、放射状の増文が施される。	胎土は砂粒を含み赤褐色(2.5 YR 4/0)焼成は良好でなくもよい。
5 (完)	杯	12.5 5.5 —	体部は丸味をおびて内周し、口縁部で短く外反する。	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含む赤褐色(2.5 YR 4/0)を呈する。
6 (完)	碗	14.3 8.1 —	体部は丸味をおびて内周し、口縁部は短く外反する。底部丸底。完形品。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部へ底部ヘラミガキ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含む赤褐色(5 YR 5/0)を呈する。
7 (完)	碗	17.2 — —	体部は丸味をおびて内周し、口縁部は短く外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ 内面 口縁部ヨコナデ、体部には増文が施される。	胎土は砂粒を多く含む赤褐色(5 YR 5/0)を呈する。
8 (回)	碗	(18.5) — —	体部は丸味をおび、口縁部で外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデの後、放射状増文が施される。	胎土は砂粒を多く含む褐色を呈する。
9 (回)	碗	(15.3) — —	体部はややふくらみ、口縁部で短く外反する。あるいはラップと同様に小形器と考えたほうがよいかもしい。	外面 口縁部ヨコナデ。体部調査不明 内面 口縁部および体部ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含む赤褐色を呈する。
10 (完)	盃 合	(19.9) 15.3 15.6	杯部は2回の稜をもって外反し、脚部はラップ状にひろく。杯部底には焼成前の穿孔があり機軸的には台となる。	外面 杯部体部はヘラミガキ、杯部底はヘラミガキ。 内面 杯部ヘラミガキ、胴部横位のヘラミガキ	胎土は砂粒を多く含む赤褐色(5 YR 5/0)を呈する。
11 (完)	高 杯	17.7 12.4 13.8	杯部は一回の稜をもって外反し、脚部はラップ状に広がる。	外面 杯部・胴部ともに胴毛目状調整 杯部口縁ヨコナデ 内面 杯部口縁ヨコナデ。体部胴毛目状調整	胎土は赤褐色を呈する。
12 (完)	盃	18.0 31.4 7.6	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状にふくらみ、下半で僅かに変換点をもって逆「八」の字状にすぼまり、平底の底部に至る。	外面 胴部ヘラミガキの後、若干の胴毛目状調整とヘラミガキ。口縁部は縦方向のヘラミガキ 内面 口縁部横位のヘラミガキ、胴部ヘラミガキ。底部若干の胴毛目状調整	胎土は砂粒を多く含む赤褐色(5 YR 5/0)を呈する。
13 (回)	盃	— — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 全体に割落が激しいが、僅かに胴毛目状調整が認められる。 内面 胴部ヘラミガキ	胎土は砂粒を多量に含む赤褐色(7.5 YR 6/4) 14と同程度か?
14 (回)	盃	— — 7.0	胴部は下ぶくれの球状を呈し、底部平底。	外面 全体に割落が激しいが、胴部に僅かにヘラミガキが認められる。 内面 ヘラミガキ	胎土は砂粒を多量に含む赤褐色(7.5 YR 6/4) 13と同程度か?
15 (回)	盃	(17.2) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部横位のヘラミガキ 内面 口縁部横位のヘラミガキ	胎土は砂粒を含み赤褐色(5 YR 5/0)を呈する。
16 (回)	盃	17.6 — —	口縁部は中央に稜を有し外反する。	外面 口縁部は割落が激しいが、僅かに横のヘラミガキが認められる。 内面 口縁部には僅かに横方向のヘラミガキが認められる。	胎土は砂粒を多く含む赤褐色(5 YR 5/0)を呈する。
17 (完)	碗	14.3 8.1 —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。底部丸底の小形の器形。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラミガキ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部と口縁部は僅かに胴毛目状調整が認められる。	胎土は砂粒を多く含む赤褐色(2.5 YR 5/0)を呈する。
18 (完)	盃	13.3 17.2 —	口縁部は「く」の字状に外反し、その中央部より中や上方に鋭い稜を有する。胴部は球状を呈し、丸底の底部に至る。小形の器形。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部は顕著な胴毛目状調整が認められる。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ。	胎土は比較的精選される。赤褐色を呈する。
19 (完)	碗	(15.9) — —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈し、中や丸味をおびた平底に至る。小形の器形。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。 内面 胴部下半には彫き目状の調整痕あり。口縁部ヨコナデ、胴上半部ヘラミガキ。胴下半部ヘラミガキ。	胎土は砂粒を含み褐色(2.5 YR 6/6)を呈する。

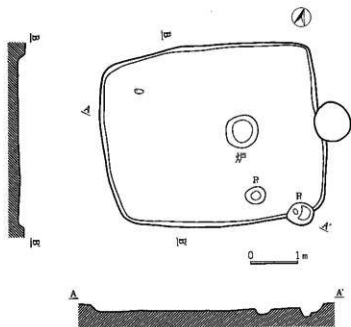
20 (元)	壁	20.7 29.3 7.2	口縁は「く」の字状に外反し、胴部はやや細長くふくらんだ形状を呈する。底部平直。	外面 内面	口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目状調整。 胴部刷毛目状調整 口縁部刷毛目状調整の後、ヨコナデ	粘土は砂粒を多く含む明黄褐色(5YR5/6) 胴部には砂粒の粗さが増す。
21 (回)	壁	— 7.0	胴部下半は逆「八」の字状にすぼまり、平底の底縁に至る。	外面 内面	胴下半部は全体的に刷毛目状調整がなされる。 胴下半部後位のヘラケズリ。 底縁若干の刷毛目状調整	粘土は砂粒を多く含む明黄褐色(10YR6/6)を呈する。
22 (回)	壁	— (7.1)	底縁平直。	外面 内面	胴下半部後位のヘラミガキ。底縁ヘラケズリ。 刷毛目状調整	粘土は砂粒を含む褐色(5YR6/6)を呈する。
24 (元)	壁	— 7.9	底縁はやや丸味をおいた平直。	外面 内面	胴下半部および底縁ヘラケズリ。 ヘラナデ。	粘土は砂粒を含むに赤褐色(5YR5/3)

(62) H-62号住居址

遺物 第188・189図

H-62号住居址は、第II区ス-24グリッドにおいて検出された。その東壁はピットに切られ、またD-15号土塀を切って存在する。

本住居址は、南北3.8m東西4.7mの隅丸方形を呈し、南北軸の方向はN-23°-Wを指し、床面積15.3㎡を測る。壁高は10~15cmを測り、壁溝は認められない。ピットは、南東コーナー寄りに



第188図 H-62号住居址実測図(1:80)

IV 遺構と遺物

P₁が南東コーナー壁中にP₂が検出されたが、柱穴かどうかはわからない。P₁は45cm×35cm深さ10cm、P₂は55cm×48cm深さ20cmを測る。

覆土はI層のみで、小粒バミスを含む黒色土層であった。遺物はいずれも覆土中より出土している。

炉は、住居中央よりやや東寄りに位置する。70cm×70cm深さ10cmのほぼ円形を呈する地床炉で、その覆土は3層に分層された。I層は焼土を含む黒褐色土層、II層は赤褐色の焼土層、III層は焼土を含まない黄褐色土層であった。

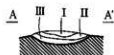
遺物 第190図

本住居址より検出された土器は、いずれも土師器のみである。

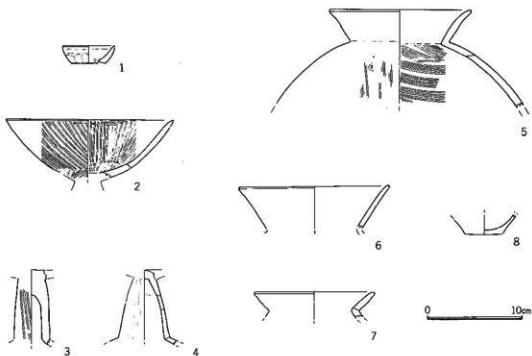
1は、坏形態を呈する小形の手捏土器である。

2は、内外面にミガキのなされた高環の坏部である。3は、円筒状を呈する高環の脚部で、4も高環脚部であるがその外面には赤色塗彩がなされている。

5～7は、土師器壺の頸部～口縁部である。



第188図 H-62号住居址炉 (1:40)



第190図 H-62号住居址出土遺物 (1:4)

第85表 H-62号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

図号 番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (回)	手捏	5.5 1.8 3.6	底部は外反し、底部平底の球形を呈する。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(10YR5/6)を呈する。 胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(10YR7/4)を呈する。 胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(10YR7/4)を呈する。
2 (完)	高環	17.8 —	環部はややふくらんで外反する。脚部は欠損する。	外面 斜位のヘラミガキ 内面 縦位のヘラミガキ	胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(10YR7/4)を呈する。 胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(10YR7/4)を呈する。
3 (完)	高環	— —	脚部は筒状を呈する。	外面 縦位のヘラミガキ 内面 ナデ	胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(10YR7/4)を呈する。 胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(10YR7/4)を呈する。
4 (完)	高環	— —	脚部は、円錐状に下降した後、変換点をもって強く外反する。	外面 縦位のヘラミガキの後、赤色塗彩が施こされる。 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(10YR6/4)を呈する。 胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(10YR6/4)を呈する。
5 (回)	壺	(15.1) —	口縁部は「J」の字状に強く外反する。胴部は球状を呈するものと認められる。	外面 口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目状調整の後、ヘラミガキ。 内面 口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目状調整	胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(10YR5/6)を呈する。 胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(10YR5/6)を呈する。
6 (回)	壺	(16.2) —	口縁部はほぼ直線的に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(10YR6/6)を呈する。 胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(10YR6/6)を呈する。
7 (回)	壺	(12.9) —	口縁部の外反する小形の器形を呈する。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(10YR7/6)を呈する。 胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(10YR7/6)を呈する。
8 (完)	—	— 3.0	底部平底の小形な器形を呈する。	外面 磨滅が激しく調整不明 内面 磨滅が激しく調整不明	胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(10YR7/6)を呈する。 胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(10YR7/6)を呈する。

この他、住居址内からは土師器壺・甕の破片が大量に出土している。

時期

本住居址は、古墳時代中期、前田遺跡第I期に位置付けられよう。

(63) H-63号住居址

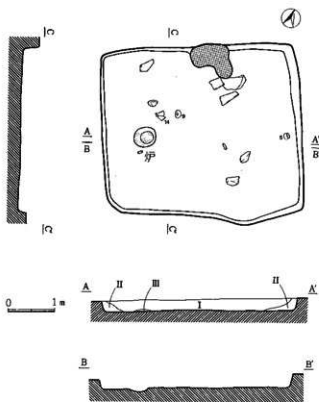
遺構 第191・192・193図

H-63号住居址は、第II区スー25グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.85m東西4.25mを測り、南壁のやや歪んだ隅丸方形を呈し、床面積13.5㎡を測り、主軸方向はN-28°-Wを指す。壁高は20cm前後を測り、壁溝は認められない。また、柱穴等ビットは、まったく認められなかった。

遺物は、良好な状態で出土したものには、東壁中央寄りに検出された5の塚と、炉の付近から検出された9の坩がある。また14の壺底部も炉の付近から検出された。8の手捏の鉢は、カマド中からの出土である。この他の遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

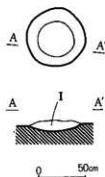
住居址覆土は、3層に分層された。I層が黒色土層、II層が黒褐色土層で、III層は炉上にみられる赤褐色の焼土層であった。



第191図 H-63号住居址実測図(1:80)

本住居址においては、カマドと炉の両者がみられるのが非常に特異であった。カマドは北壁中央に存在し、炉は西壁寄りの住居中央に存在していた。

カマドは、すでにその一部を取り壊されていたが、両袖の一部と支脚が残っていた。その構材にはすべて偏平な安山岩礫を用いており、面取り軽石を多用する本遺跡の奈良・平安期のカマドとは異なり興味深い。さて、図のA-A'の断面をみると、東西両袖ともに偏平な安山岩礫が芯に据えられ、さらに粘土(III層)が貼られて袖部となっていることが窺える。これはB-B'の断面においてもそうであるが、ここでは円筒状の支脚石(b)かやや動いてしまった天井石(a)もみられる。また、C-C'の断面の礫二枚もカマド構材であるが、すでに抜き取られて東袖の手前に残置されたものであり、その手前の礫も同様なものであろう。カマド覆土は、2層に分層された。I層が焼土層である赤褐色土層、II層が若干の焼土を含む黒褐色土層であった。なお、カマド中からは、8の手掘



第192図 H-63号住居址炉(1:40)

1 竪穴住居址

の鉢が検出されている。

炉は、48cm×42cm深さ8cmを測るもので、一面に赤褐色の焼土(I層)の堆積がみられた。

遺物 第194・195図

本住居址より検出された土器は、いずれも土師器ばかりである。

1は、環形態を呈する手捏土器で、体部には一孔が穿たれている。

2・3は口縁部が短く外反する丸底の坏である。3には内面黒色研磨がなされている。4～6は小形の坏で、4には内面黒色研磨がなされている。7も、6と相似するところからとりあえず坏と分類したが、小形甕と理解したほうがよいかもしれない。

8は手捏の片口鉢で、内部体部には輪積み痕を顕著に残し、焼成は良好でない。

9・10の甕は、やや潰れた球状の胴部に外反する口縁部を見せるものである。

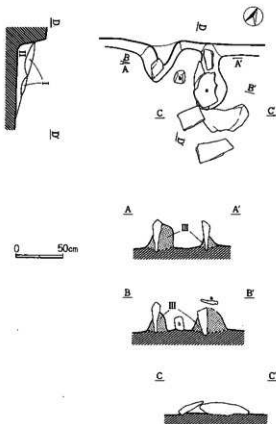
11・12は、短く直立する口縁部をみせる短頸壺である。また、13の壺は、底部と胴部上半以上が接合をみななかったが、胴部下半において変換点をもって底部に至るものと考えられる。

15は甕の胴下半以下で、上半部の形状は不明である。

石器は、敲石2点が検出されている。16は両端が敲打に供されたもので、全体に火熱を被っている。17は一端が敲打に供されている。双方とも河床礫が用いられたものである。

時期

本住居址は、古墳時代中期、前田遺跡第II期に位置付けられよう。

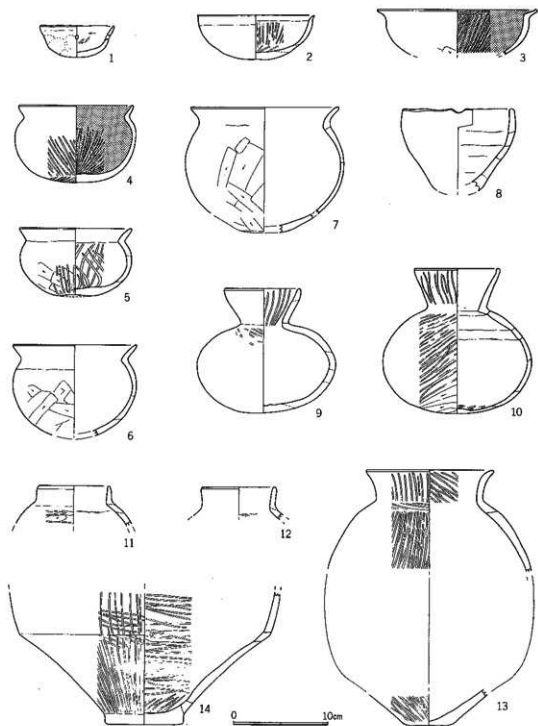


第193図 H-63号住居址カマド実測図(1:40)

第86表 H-63号住居址出土遺物一覽表(石器)

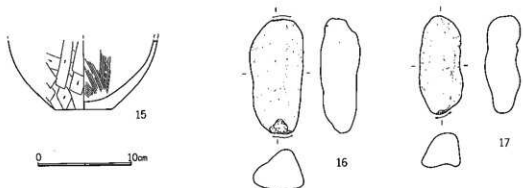
検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
16	敲石	安山岩	12.1	5.6	4.5	380	
17	敲石	安山岩	10.4	4.6	3.7	220	

IV 遺構と遺物



第194圖 H-63号住居址出土遺物 (1:4)

1 墓穴住居址



第16図 H-63号住居址出土遺物(1:4)

第87表 H-63号住居址出土遺物一覧表(土器)

標記番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (回)	手摺	(8.0) —	体部は外反し、底部は扁平な丸底の杯形器。体部に穿孔が一つあり。	外面 内面	胎土は磚灰黄色(2.5 YR 5/2)を呈し、焼成不良。
2 (完)	杯	12.4 4.7	体部は丸味をおびて外反し、口唇部に至って短くさらに外反する。底部平底。	外面 内面	胎土は精選され褐色(5 YR 6/5)を呈する。
3 (回)	杯	(17.0) —	体部は丸味をおびて外反し、口唇部に至って短くさらに外反。口唇部で緩かに立ち上がる。	外面 内面	胎土は砂粒を含み褐色を呈する(7.5 YR 6/6)
4 (完)	埴	12.2 8.2	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部はふくらむ。底部は扁平な丸底を呈する。	外面 内面	胎土は砂粒を多く含む褐色を呈する(7.5 YR 4/3)
5 (完)	埴	12.0 7.2	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。底部は扁平な丸底を呈する。完形。	外面 内面	胎土は砂粒を含み明赤褐色(5 YR 5/8)
6 (回)	埴	(13.2) —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。あるいは隆か。	外面 内面	胎土の一部は赤褐色(5 YR 4/8)を呈する。焼成はあまり均一でない。
7 (回)	埴	15.8 (13.4) —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。底部は扁平な丸底。あるいは隆か。	外面 内面	胎土は黄褐色(5Y7/3)を呈する。焼成はあまり均一でない。
8 (回)	鉢	11.8 —	逆「八」の字状の形部を呈する片口の鉢。底部は丸味をおびた平底を呈するものと思われる。手摺土器の範疇に入るものであろう。	外面 内面	胎土は黄褐色(5Y7/3)を呈し、焼成はきわめて悪くもない。
9 (完)	埴	8.2 13.3	体部はつぶれた球状を呈し、口縁部は若干外反しながら立ち上がる。底部は扁平な丸底。	外面 内面	胎土は砂粒を多く含む褐色(7.5 YR 5/4)を呈する。
10 (回)	埴	(9.1) 15.4 —	体部はややつぶれた球状を呈し、口縁部は若干外反しながら立ち上がった後、口唇部が僅かに内側に突出する。底部は扁平な丸底。	外面 内面	胎土は砂粒を多く含む褐色(5 YR 6/6)。焼成はあまり均一でない。
11 (回)	短頸壺	(8.0) —	口縁部は短く直線的に立ち上がる。小形な器形。	外面 内面	胎土は砂粒を多く含む褐色(5 YR 6/6)
12 (回)	短頸壺	(8.0) —	口縁部は短く直線的に立ち上がる。小形な器形。	外面 内面	胎土は砂粒を多く含む褐色(5 YR 6/6)
13 (回)	壺	(13.5) (5.0)	口縁部は逆「八」の字状に外反し、胴部はふくらむ。底部は後の小さい平底。	外面 内面	胎土は砂粒を多く含む明赤褐色(5 YR 5/8)

14 (94)	遺	- (8.4)	底部より胴下半部にかけては建「八」の字状を呈し、変換点をもって胴部上半に至る。底部平底。	外面 内面	胴下半部～底部ヘラミガキ ヘラミガキ	胎土は白色の砂粒を多く含む。におい・滑らかさ・粘り・強度はあまり良好でない。
15 (回)	遺	- (6.2)	底部平底。	外面 内面	胴下半部および底部ヘラケズリ 刷毛目状調整	胎土は砂粒を多く含む浅黄褐色(10YR 8/4)

(64) H-64号住居址

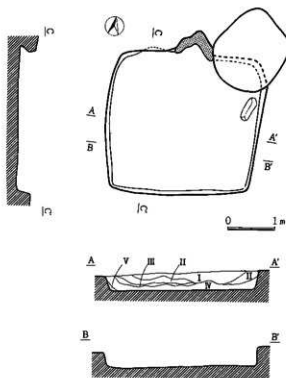
遺構 第196・197図

H-64号住居址は、第II区スー-25グリッドにおいて検出された。その北東コーナーは、風倒木により攪乱されていた。

本住居址は、南北3.05m東西3.3mの隅丸方形を呈し、床面積8.4㎡を測り、主軸方向N-13°-Wを指す。壁高は30~40cmを測り、壁溝は認められない。また、柱穴等のピットもまったく認められなかった。

覆土は、5層に分層された。I層が多量のロームが混入する混色土層、II層は少量のロームが混入する黒褐色土層、III・V層が黒色土層、IV層はロームがよく混じる黒褐色土層であった。遺物はいずれもこの覆土中より検出された。

カマドは、北壁中央に位置するが、すでに壊滅状態にあった。図にはその掘り方を示したが、東側の袖部分にあたるローム層が若干削り出されていることが窺える。また、その構材であったと考えられる面取り軽石が、東壁際に残置されていた。カマド覆土は、4層に分層された。I層が焼土を多く含む灰褐色土層、II層が焼土・灰を多く含む灰褐色土層、III層は若干の焼土を含む黒色土層、IV層が焼土・灰を多く含む灰褐色土層であった。なお、本カマドの構材に用いられていたと考えられる粘土や石材の大部分は住居外に廃棄さ



第196図 H-64号住居址実測図(1:80)

1 墓穴住居址

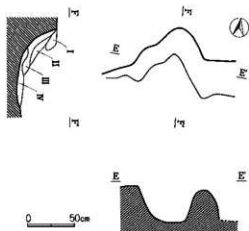
れたものと考えられよう。

遺物 第198図

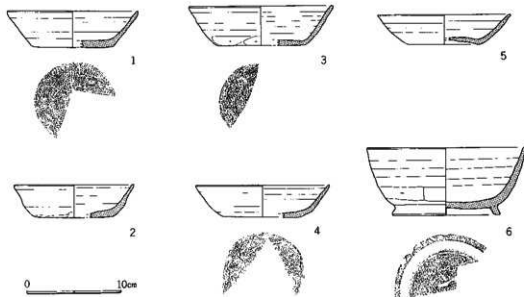
本住居址より検出された遺物には、須恵器では坏・甕、土師器では甕の破片がある。

須恵器坏は、1～6を图示した。1は回転ヘラキリによる底部をみせている。2～4は、底部切り離しの後手持ちヘラケズリのなされたもので、その切り離し方法は捉えられなかった。5は回転糸切りの後、手持ちヘラケズリのなされた底部をみせている。6は、底部切り離しの後、回転ヘラケズリのなされたもので、高台付坏である。

須恵器甕は、いずれも破片ばかりで图示しなかった。



第197図 H-64号住居址カマド実測図 (1:40)



第198図 H-64号住居址出土遺物 (1:4)

第88表 H-64号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	坏 (甗)	(13.9) 3.9 8.6	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラケリ。 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰白色(N7/0) を呈する。 焼成良好
2 (回)	坏 (甗)	(12.8) 3.5 (8.1)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。底部切り離しの後、手持 ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰色(7.5Y6/1) を呈する。
3 (回)	坏 (甗)	(15.3) 4.2 (9.2)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。底部切り離しの後、手持 ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色(5Y6/1) を呈する。
4 (回)	坏 (甗)	(14.2) 3.4 (8.3)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。底部切り離しの後、手持 ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色(5Y5/1) を呈する。内面に 穴跡あり。
5 (回)	坏 (甗)	(15.3) 3.2 (8.6)	体部は外反し、底部はややゆがんだ平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切りの後、手 持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を多 く含む灰色(N6 /0)。外面に火 跡あり。
6 (回)	坏 (甗)	(16.9) 7.1 (9.1)	体部はやや直立気味に外反し、底部には 高倉が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ。体部下半部回転ヘラケズ リ。底部切り離しの後、回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 く含む灰色(N 5/0)を呈する。

土師器甕も図示し得なかったが、「く」の字状に外反する口縁部破片もみられた。

なお、本住居址において石器・鉄器等は検出されなかった。

時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

(65) H-65号住居址

遺 構 第199・200図

H-65号住居址は、第II区スー26グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.1m東西3.5mの隅丸方形を呈し、床面積11.7㎡を測り、南北軸方向N-20°-Wを指す。壁高は20cm前後を測り、壁溝は認められない。また、柱穴等のピットもまったく検出されなかった。床面は貼り床ではなく、フラットに削平されたローム面がそのまま床となる。

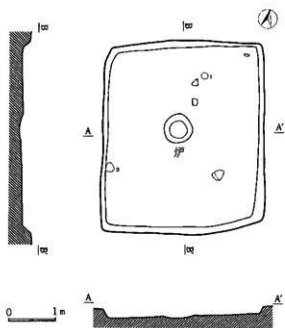
覆土はI層のみで、小礫を多量に含んだ黒色土層であった。

遺物は、北壁寄りに1の須恵器蓋が潰れた状態で検出されており、西壁際からは3の甎の破片が出土している。この他の遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

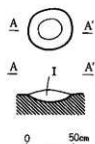
炉は、住居址のほぼ中央部に存在していた。60cm×60cm深さ5cmを測る地床炉で、その内部には赤褐色の焼土(I層)堆積がみられた。

遺 物 第201図

本住居址より検出された遺物は少なく、図示し得たのは1-4のみであった。



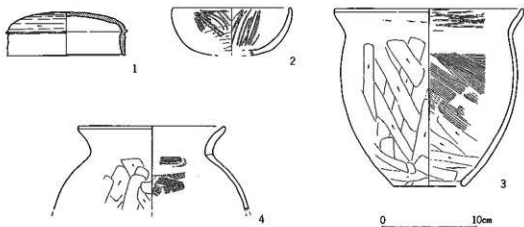
第199図 H-65号住居址実測図 (1:80)



第200図 H-65号住居址炉 (1:40)

1は、ほぼ完形に復原された須恵器蓋である。その天井部は丸味をおびるものの偏平で、鋭い稜をもった後、直降する体部へと続き、平坦に面をなした口唇部となるプロポーションを見せている。均一な器形で、胎土が精選され、焼成良好な優品である。

2は土師器環で、湾曲する体部をみせ、底部は丸底となると考えられるもので、外面の一部と内面にはヘラミガキがなされている。



第201図 H-65号住居址出土遺物 (1:4)

3は、径の大きい単孔の甌で、外反する口縁部とやや膨らむ胴部を見せている。

4は、土師器壺の口縁部付近である。

時期

本住居址は、古墳時代中期、前田遺跡第I期に位置付けられよう。

第89表 H-65号住居址出土遺物一覧表(土器)

器物番号	器種	法量	器形の特徵	調査	備考
1 (9B)	甌 (項)	— 4.5 12.5	天井部は丸縁をおびているが扁平で、縁以下が長く直降し、口唇部は面をなして平坦に仕上げられる。縁は突出度が高くするどい。ほぼ完形。	外面 天井部同軸ヘラケズリ(縁の付近までおよび) 体部ロクロコナテ 内面 ロクロコナテ (ロクロ左回転)	胎土は緑褐色の断面は紫灰色(SP6/1)を呈する焼成良好
2 (9B)	坏	(12.5) —	体部は丸縁をおびて外反し、口唇部でやや内側に突出する。	外面 体部ヘラケズリの後、体部上半ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	胎土は砂粒を多く含みぶい質褐色(10YR7/3)
3 (9B)	甌	(20.2) 18.8 7.4	口縁部はゆるく「く」の字状に外反し、胴部は均なりに内側へすぼまる。単孔。	外面 口縁部コナテ、胴部ヘラケズリ。 内面 口唇部ヘラミガキ、胴部上半剛毛目状調整 胴部下半ヘラケズリ	胎土は砂粒を含み黄褐色(10YR8/3)
4 (9B)	壺	15.7 —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。	外面 口縁部コナテ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナテ 胴部剛毛目状調整	胎土は砂粒を含み褐色(7.5 YR8/6)

(66) H-66号住居址

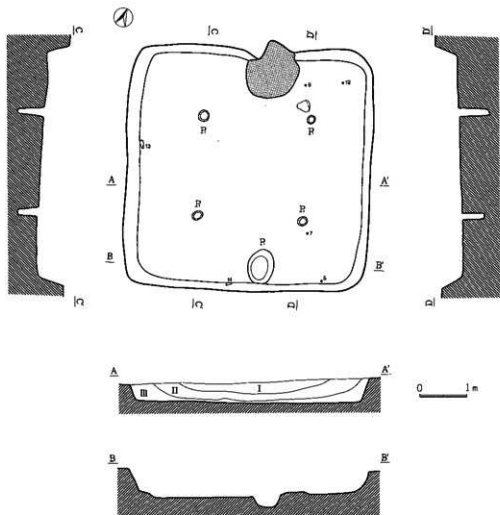
遺構 第202・203図

H-66号住居址は、第II区スー24グリッドにおいて検出された。本住居址は、南北5.15m東西5.2mの隅丸方形を呈し、床面積22.2㎡を測り、主軸方向はN-17°-Wを指す。壁高は30~50cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P₁~P₄の4個が検出されたが、いずれもその径が小さいことが特徴的である。P₁は18cm×15cm深さ55cm、P₂は25cm×20cm深さ55cm、P₃は25cm×20cm深さ45cm、P₄は20cm×20cm深さ50cmをはかる。また、南壁際中央には70cm×55cm深さ20cmを測るP₅が検出された。

遺物は、北東コーナーの床面より25cm浮いた状態で12の曲玉が、カマド東袖脇の床面上より6の壺1個体分の破片が、P₄の南の床面より20cm浮いて7の壺が、南東コーナー付近の床面上からは5の埴の破片1個体分が、南壁際の床面上からは14の敲石が、西壁際の床面上からは13の敲石が、それぞれ検出されている。これ以外の遺物は覆土中からの出土である。なお、P₃の北東には馬一頭分の馬歯が検出されたが、河川堆積による覆土I層中からの出土である為混入品と考えられる。

住居址覆土は、3層に分層できた。I層は後世の河川堆積物で砂利・粘質土ブロックを含む暗茶褐色土層、II層が黒色土層、III層が黒褐色土層であった。

1 竪穴住居址

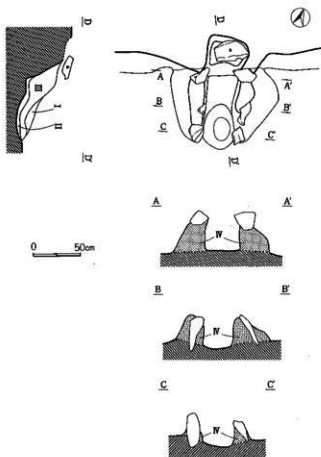


第22図 H-66号住居址実測図 (1:80)

カマドは、北壁中央よりやや東寄りに存在し、その天井部と袖部前方は破壊されているものの比較的よく原形をとどめていた。その構材には面取り軽石と安山岩礫が用いられ、それらが粘土 (IV層) で固められたものであった。図中aは、偏平な安山岩で煙道部天井と考えられる。またB-B'の両袖の断面にみる石材も偏平な安山岩で、H-63号住居址のカマドに用いられた石材と同様なものと言える。C-C'の両袖の断面には面取り軽石がみられる。火床部は浅く窪んでいる。カマド覆土は、3層に分層された。I層は焼土を含まないロームのブロック状堆積である黄色土層、II層は焼土をよく含む黒褐色土層、III層は焼土をほとんど含まない黒褐色土層であった。

遺物 第204・205図

IV 遺構と遺物



第200図 H-66号住居址カマド実測図(1:40)

本住居址より検出された土器は、いずれも土師器ばかりである。

1は口縁部が短く外反する坏で、底部は丸底を呈するものと思われる。

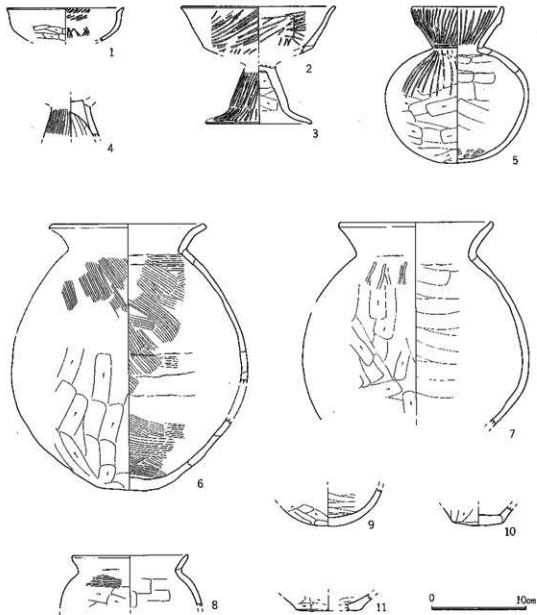
2～4は高坏の各部位で、このうち2・3は接合はみれなかったが、同一個体の坏部と脚部であると考えられる。

5は、球状の胴部と外反する口縁部をみせる罎で、その口縁中央には鈍い稜が巡っている。口縁部内外面と、外面胴部上半には縦方向のヘラミガキがなされている。

6・7はほぼ同様なプロポーションを呈するもので、頸部のすばまり具合等プロポーションから一応壺と認識したが、特に6などは調整レベルから甕と認識することもできよう。しかしいずれにしても、機能的裏付けがないかぎり厳密な器種認定は不可能といえる。

この他甕類には、8の小形甕の口縁部、9の小形甕の丸底、10・11の平底となるものがみられ

1 堀穴住居址

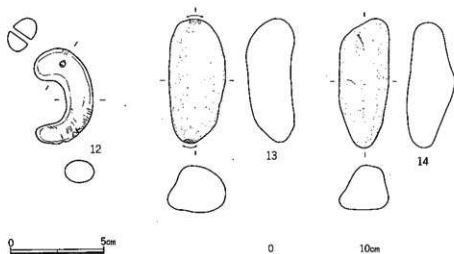


第204図 H-66号住居址出土遺物(1:4)

た。

石製品では、12の滑石製の曲玉が検出されている。尾部に多く傷跡を残すが、全体によく研磨され、整った形状を呈している。穿孔は一つで、表裏両面から穿たれ貫通している。全長5cmを測る。

IV 遺構と遺物



第26図 H-66号住居址出土遺物 (12=1:2, 13・14=1:4)

第90表 H-66号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

標頭 番号	器種	法量	器形の特 徴	調 整	備 考
1 (回)	環	(12.5) —	体部は弓なりに外反し、さらに口唇部で短く外反する。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 体部下平ヘラケズリ ヘラミガキ	胎土は砂粒を含みにぶい褐色(7.5YR7/4)を呈する。
2 (完)	高環	(16.4) —	体部は横をもって外反する。	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	胎土は砂粒を含み褐色(5YR6/5)3と同一段紋。
3 (完)	高環	— 11.2	脚部はラッパ状に広がる。	外面 ヘラミガキ 内面 体部ヘラケズリ 脚部ヨコナデ	胎土は砂粒を含み褐色(5YR6/6)2と同一段紋。H-75・12と類似。
4 (回)	高環	— —		外面 横位のヘラミガキ 内面 ヘラナデ	胎土は砂粒を含み褐色(2.5YR6/6)
5 (完)	埴	(9.8) 16.5 —	口縁部は鈍い稜をもって外反し、胴部は球状を呈する。底部丸底。	外面 口縁部へ胴上半部縦位のミガキ 胴下半部ヘラケズリ 内面 口縁部縦位のヘラミガキ、胴部ヘラナデ 底部君子の刷毛目状調整	胎土は比較的精選されにぶい褐色を呈する。(7.5YR7/4)
6 (完)	壺	(16.7) 28.2 (6.0)	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈し、底部平底。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部上半部目状調整 胴部下半部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目状調整	胎土は砂粒を多く含む褐色(7.5YR7/6)焼成はあまり良好でない。
7 (完)	壺	16.5 —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を多く含むにぶい褐色(7.5YR5/4)
8 (回)	壺	(12.3) —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する小形の器形。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部上半部刷毛目状調整 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を多く含む赤褐色(5YR4/8)内面褐色。
9 (完)	壺	— —	底部丸底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ?	胎土は砂粒を多く含む赤褐色(5YR5/6)焼成不良。
10 (回)	—	— (5.6)	底部平底。壺あるいは壺の底部。	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	胎土は砂粒を多く含む褐色(7.5YR7/6)
11 (回)	—	— (6.9)	底部平底。壺あるいは壺の底部。	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	胎土は砂粒を多く含む褐色(7.5YR4/4)焼成不良。

1 壑穴住居址

13・14は、河床礫を用いた敲石である。13はその両端に顕著に敲打痕が残る。14にはほとんど敲打痕がみられないが、一応敲石と考えた。

第91表 H-66号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

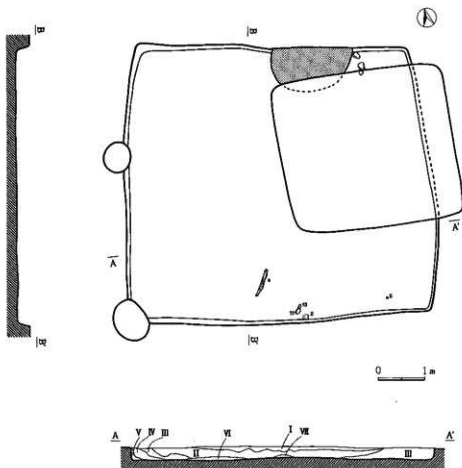
発掘番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備	考
12	曲玉	滑石	6.0	1.5	1.3	22		
13	敲石	安山岩	13.2	6.0	5.0	520		
14	敲石	安山岩	13.5	5.2	4.9	460		

時期

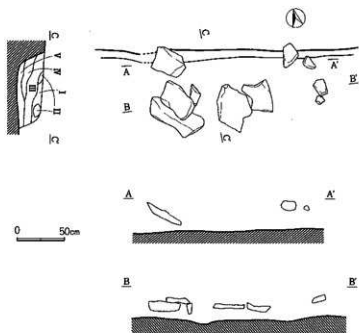
本住居址は、古墳時代中期、前田遺跡第II期に位置付けられよう。

(67) H-67号住居址

遺構 第206・207図



第206図 H-67号住居址実測図 (1:80)



第77図 H-67号住居址カマド実測図 (1:40)

H-67号住居址は、第II区ス・セー25グリッドにおいて検出された。本住居址は、その南西コーナーをF-64号獨立柱建物址に、I区をH-68号住居址に切られている。

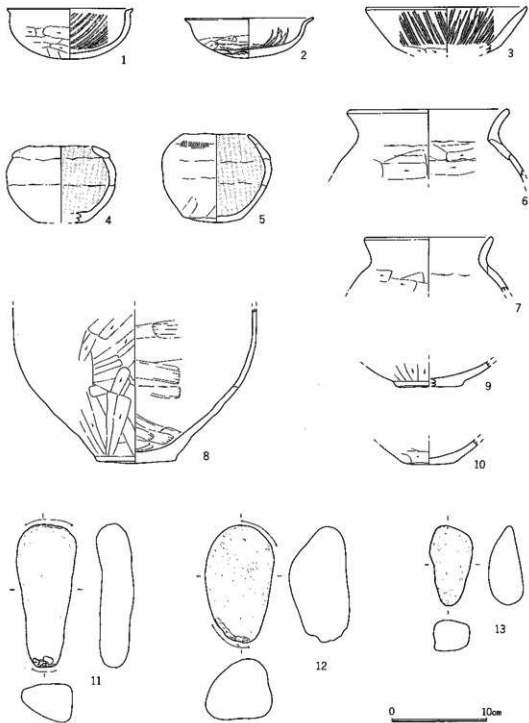
本住居址は、南北5.95m東西6.6mを測る隅丸方形を呈し、床面積35㎡を測り、主軸方向はN-7°-Eを指す。壁高は25-30cmを測り、壁溝は認められない。また、柱穴等のピットもまったく検出されなかった。

遺物は、南壁際中央の床面直上から2の坏と12の敲石・13の石錘が、また、南東コーナー付近の床面上からは5の無頸壺1個体分の破片が検出されている。これ以外は、いずれも覆土中からの出土である。なお、住居址の南壁寄りからは炭化材(a)が検出されている。

覆土は、7層に分層された。I層が茶灰色土層、II層が黒色土層、III・V層が暗褐色土層、IV層が黒褐色土層、VI層は砂層である灰色土層で、VII層は赤褐色の焼土層であった。ことにVII層の焼土層は住居址全体に分布するものではないが、床面に密着しており、またaの炭化材の出土も考え合わせると、本住居址の一部が火災に遭遇していることを想定できよう。

カマドは、北壁中央よりやや東寄りに存在するが、すでに破壊されており、その構材である偏平な安山岩は原位置を失っていた。なお、本カマドはその構材に偏平な安山岩を用いている点においてH-63と共通する。カマド覆土は、5層に分層された。I層が焼土・灰等を含まない茶灰

1 竖穴住居址



第28图 H-67号住居址出土遺物 (1:4)

1・2は、偏平な丸底から湾曲する体部、短く外反する口縁部をみせる土師器坏である。

3は、内外面に縦位のヘラミガキのなされた高坏の坏体部である。

4・5は、手捏ねの無頸壺で、内外面に輪積み痕が窺える。双方ともに焼成不良で風化が激しいが、内面に赤色塗彩のなされているのが特徴的である。

6・7は、壺の口縁部付近で、8は壺の胴下半部以下である。9・10は、平底の壺あるいは甕の底部であろう。

石器では、11・12の敲石と13~15の石錘?が検出されている。

11・12は、両端に顕著な敲打痕が認められる敲石で、河床礫を用いたものである。

13~15は、河床礫で、端部に特に敲打痕も認められないため敲石とは認めがたい。民俗事例において蓆などを編む際、石のおもりを使用するが、そのような石錘とも考えられようか。

時期

本住居址は、古墳時代中期、前田遺跡第II期に位置付けられよう。

(68) H-68号住居址

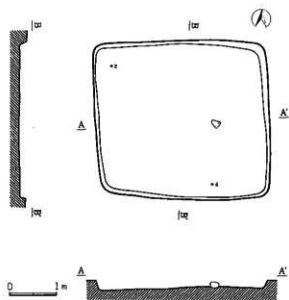
遺構 第210図

H-68号住居址は、第II区セ-25グリッドにおいて検出された。H-67号住居址と重複関係を持つが、本住居址のほうが新しいものである。

本住居址は、南北3.3m東西3.7mの隅丸方形を呈し、床面積10.9㎡を測り、南北軸方向はN-13°-Wを指す。壁高は15~20cmを測り、壁溝は認められない。また、柱穴等のピットも認められなかった。

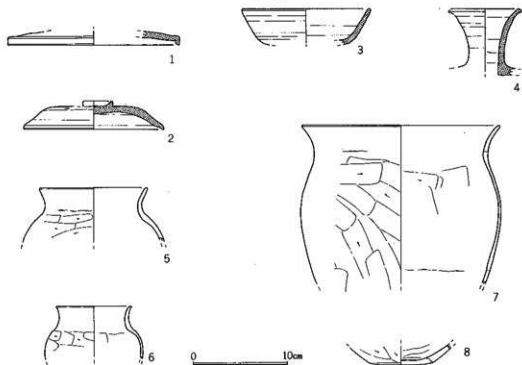
覆土はI層のみで、小粒バミスを含む黒色土層であった。

遺物は、北西コーナー付近の床面上から2の蓋が、南壁際の床面上からは4の長頸瓶の頸部が検出されている。それ以外の遺物は、いずれも覆土中から出土したもの



第210図 H-68号住居址実測図(1:80)

IV 遺構と遺物



第211図 H-68号住居址出土遺物 (1:4)

である。

なお、本住居址においてカマドは認められなかった。

遺物 第211・212図

本住居址より検出された遺物は総じて少ないが、須恵器では蓋・坏・長頸瓶、土師器では甕の各機種がみられた。

1・2は須恵器の蓋である。2は、中央が皿状に窪んだつまみ部を有している。

3の坏は、体部破片で、底部の調整痕は明瞭に認め難いが周辺部に手持ちヘラケズリがなされていることが僅かに窺えた。切り離し方法は不明であるが、回転糸切りによるものかと思われた。

4は須恵器長頸瓶の頸部で、比較的小形品である。

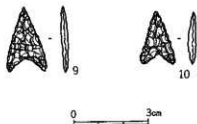
5～8は、土師器甕の各部位である。5・6は小形甕の口縁部で、7はゆるく外反する口縁部をみせる長胴甕の破片である。

石器では、両面調整の石鏃9・10が検出されている。9はチャート製、10は黒曜石製である。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

1 壺穴住居址



第212図 H-68号住居址出土遺物(2:3)

第94表 H-68号住居址出土遺物一覽表〈石器〉

標記番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
9	石器	チャート	2.5	1.6	0.3	0.7	
10	石器	黒曜石	2.1	1.4	0.3	0.6	

第95表 H-68号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

標記番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (回)	蓋 (項)	— (18.1)		外面 ロクヨコナデ 内面 ロクヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み暗赤褐色(5YR3/4)
2 (回)	蓋 (項)	3.1 3 (14.9)	つまみ部は加状にくぼんだ形状を呈し、底部末端は強く屈曲しない。	外面 ロクヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色00Y/1内面に尖が付着
3 (回)	杯 (項)	(13.6) (9.1)	杯部は外反し、底部は平底を呈するものと推される。	外面 杯部ロクヨコナデ、底部切り離しの後、手持ちヘラケズリ? 内面 ロクヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み暗緑灰色(10GY4/1)を呈する。
4 (完)	瓦椀底	(7.9) —	頸部はラップ状に外反する。	外面 ロクヨコナデ 内面 ロクヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰色00G/1内外面に自然釉付着
5 (回)	壺	(11.4) —	口縁部は弓なりに外反し、胴部は球状を呈する小形の器形	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	
6 (回)	壺	(8.0) —	口縁部は弓なりに立ち上がり、胴部は球状を呈する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は暗褐色(7.5YR3/3)
7 (回)	甕	(20.9) —	口縁部はゆるく弓なりに外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は褐色(5YR6/6)
8 (回)	壺	— (6.8)	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	胎土は明赤褐色(5YR5/8)

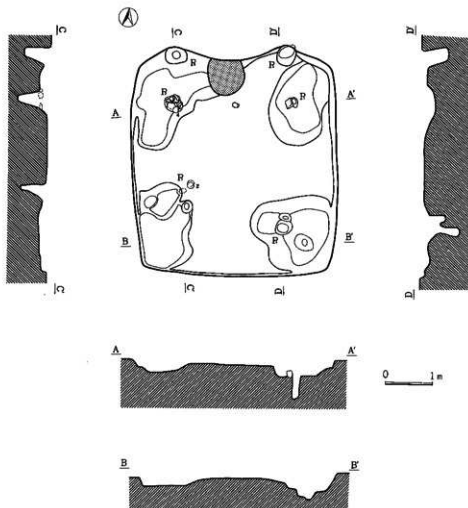
(69) H-69号住居址

遺構 第213・214図

H-69号住居址は、第II区セー24・25グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.8m東西4.35mを測り、カマド両脇の北壁が山なりに突出するが全体的には隅丸方形を呈する。床面積17.9㎡を測り、主軸方向はN-9°-Wを指す。壁高は10~20cmを測り、壁溝は認められない。支柱穴は、P₁~P₄の4個が検出された。また、北壁のカマド両脇からも支柱穴と考えられるP₅・P₆が検出されている。P₁は20cm×10cm深さ50cmで、その上面には礎が

IV 遺構と遺物



第73図 H-69号住居址実測図 (1:80)

みられた。P₂は40cm×30cm深さ50cmを測り、上面には礫7個がみられた。この礫は柱のまわりに配されていたものであろうか。P₃は20cm×15cm深さ55cm、P₄は40cm×35cm深さ70cmを測りその脇には深さ45cmの補助柱穴的なビットもみられた。また、P₅はやや斜めに開くもので45cm×45cm深さ45cm、P₆は50cm×35cm深さ40cmを測った。

住居址平面図には、その掘り方を加えておいたが、それによると住居址の中央床面は予め平らに掘り込まれ、支柱穴付近からコーナーにかけてが掘り鉢状に大きく掘り込まれていることが理解された。

遺物は、P₂の上面から4の長頸瓶底部が、P₃の床面上から2の坏が検出されている。その他の遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土はI層のみで、若干のバミスを含む黒色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、すでに破壊されており、その構材であった面取り軽石敷点が散在している状態にあった。その覆土は3層に分層された。I層が焼土を若干含む黒褐色土層、II層が赤褐色の焼土層、III層は焼土を含まない黒色土層である。また、IV層は火床部を構成する埋土である。

遺物 第215図

本住居址より検出された遺物は少ないが、須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕、土師器では甕の各器種がみられた。

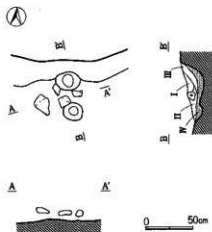
1は、盤状で中央の突出するつまみ部を有する須恵器蓋である。

2・3は須恵器坏で、いずれも回転糸切りによるものであるが、3の底部周囲には手持ちへラケズリがなされている。また、4の長頸瓶底部も回転糸切りによるものである。

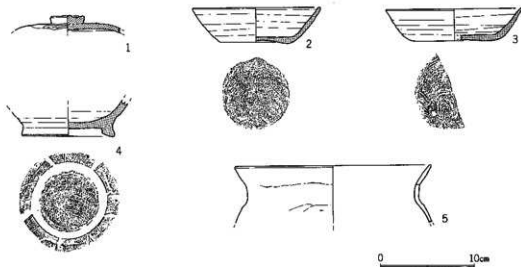
5は、ゆるく外反する口縁をみせる土師器甕である。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。



第214図 H-69号住居址カマド
実測図(1:40)



第215図 H-69号住居址出土遺物(1:4)

第96表 H-69号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

補充番号	器種	法量	器形の特徵	調 整	備 考
1 (回)	蓋 (項)	3.5 —	つまみ部は蟹状を呈するが、中央部がやや突出する。	外面 ロクロコナダの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む灰色(N5/0)を呈する。
2 (完)	環 (項)	13.6 3.8 7.3	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナダ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含む灰色(076/1)内外面に火傷あり。
3 (回)	環 (項)	(14.5) 3.4 (9.4)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナダ、底部回転糸切りの後、両面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含む灰色(076/1)内外面に火傷あり。
4 (完)	長頸瓶 (項)	— 9.7	底部には高台が貼り付けられる。	外面 ロクロコナダ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナダ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含む灰色(N6/0)内外面に自然焼付着。
5 (回)	蓋	(20.8) —	口縁部はゆるく外反する。	外面 口縁部コナダの後、網部ヘラケズリ 内面 口縁部コナダ	胎土は明赤褐色(5YR5/8)

(70) H-70号住居址

遺 構 第216・217図

H-70号住居址は、第II区セー25グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.7m東西3.45mの隅丸方形を呈し、床面積11.0㎡を測り、主軸方向N-9°-Wを指す。壁高は10~15cmを測り、

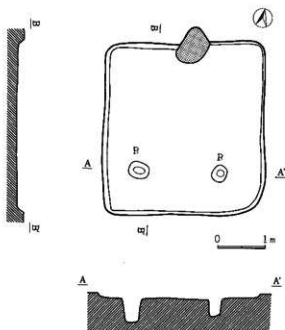
壁溝は認められない。主柱穴は南壁寄りにP₁・P₂の2個が検出された。P₁は35cm×35cm深さ35cm、P₂は43cm×35cm深さ50cmを測る。

覆土は、黒褐色土層I層のみである。遺物はいずれもこの覆土中からの出土で、床面に密着した良好な出土状態を示すものはなかった。

カマドは、北壁中央に位置するが、すでに壊滅状態にあり、その構材であった面取り軽石6点が認められたにすぎなかった。

遺 物 第218図

遺物の出土量はきわめて少ない



第216図 H-70号住居址実測図(1:80)

1 聖穴住居址

が、土師器の環・甕の破片がみられた。

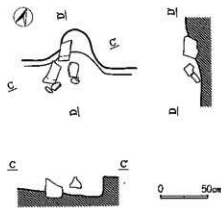
土師器環は図示し得なかったが、外面体部～底部にヘラケズリが施され、内面体部には放射状暗文がみられるものであった。見込み部のラセン状暗文の有無は不明である。

1は、僅か「コ」の字状に外反する口縁部をみせる土師器甕である。また、2も、口縁部がゆるく外反する土師器甕である。

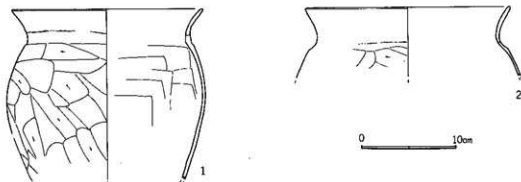
なお、この他須恵器環等はまったく検出されなかった。

時期

本住居址は、時期決定の根拠となり得る遺物が少ないが、奈良～平安時代、前田遺跡第Ⅷ期の所産と捉えておこう。



第218図 H-70号住居址カマド実測図(1:40)



第218図 H-70号住居址出土遺物(1:4)

第97表 H-70号住居址出土遺物一覽表<土器>

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (元)	甕	20.2 —	口縁部は僅か「コ」の字状に外反する	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は褐色 (7.5 YR 6/6)
2 (回)	甕	(21.7) —	口縁部は弓なりにゆるく外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土は褐色 (7.5 YR 6/6)

(71) H-71号住居址

遺構 第219図

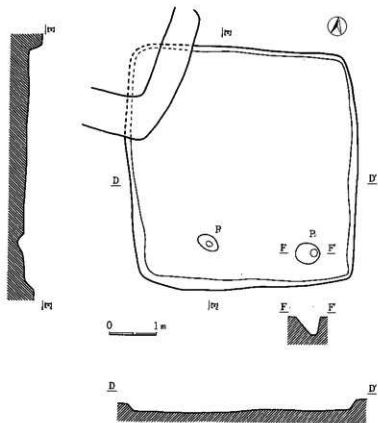
H-71号住居址は、第II区シ-25グリッドにおいて検出された。その北西コーナー部をH-90・H-72の両住居址に切られている。

本住居址は、南北5.2m東西4.9mの隅丸方形を呈し、床面積21.3㎡を測り、南北軸方向はN-18°-Wを指す。壁高は15~25cmを測り、壁溝は認められない。ピットは、柱穴となるかどうか分からないが南東コーナー寄りにP₂が検出された。また、南壁寄りに検出されたP₁は、ピットと呼ぶにはやや貧弱かもしれない。P₁が50cm×30cm深さ10cm、P₂が50cm×45cm深さ37cmを測る。

住居址覆土はI層のみで、バミスを多く含む黒褐色土層であった。10数点のみ検出された遺物は、いずれも覆土中からの出土であった。

なお、本住居址においてカマド・炉等は認められなかった。

遺物



第219図 H-71号住居址実測図 (1:80)

本住居址から検出された遺物は、土師器片10数点と須恵器片2点にすぎない。土師器には、壺の口縁部破片がみられた。

時期

本住居址においては、遺物が皆無に等しいため、その時期決定が困難であるが、H-90・H-72との切り合い関係、カマド等を有さず、また柱穴等をもたない住居構造、壺の口縁部破片等の出土から、H-60・H-61号住居址と同時期、すなわち古墳時代中期、前田遺跡第I期のものと捉えておこう。

(72) H-72号住居址

遺構 第220・221図

H-72号住居址は、第II区シ-25グリッドにおいて検出された。本住居址は、H-90号住居址の大部分とH-71号住居址を切って存在する。

本住居址は、南北3.1m東西3.2mの隅丸方形を呈し、床面積7.9㎡を測り、主軸方向N-8°-Wを指す。壁高は40~50cmを測り、壁溝は認められない。また、柱穴等ピットもまったく認められなかった。

遺物は、6の小形甕の破片がカマド西脇の床面上より、また7の甕の破片がI区床面上より検出された。それ以外の遺物は覆土中よりの出土である。

住居址覆土はI層のみで、小石・パミスを含む黒褐色土層であった。

カマドは、住居址中央よりやや東寄りに検出された。すでに半壊状態にあったが、両袖の一部がかろうじて残っていた。その構材には、主に面取り軽石が用いられ、2点ほど安山岩礫もみられた。これらの袖石に粘土層（I層）が貼られ袖部となっている。

遺物 第222図

本住居址より検出された遺物には、須恵器では蓋・坏、土師器では坏・甕がある。

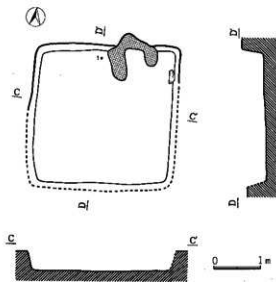
1~3は、須恵器蓋である。このうち2・3のつまみ部の形状に不明である。

4は須恵器坏で、回転糸切りの後周囲手持ちヘラケズリのなされた底部をみせるものである。また、5は土師坏で、全面手持ちヘラケズリのなされた底部をみせるものである。ロクロ整形によるものと思われるが、底部の切り離し方法は不明である。

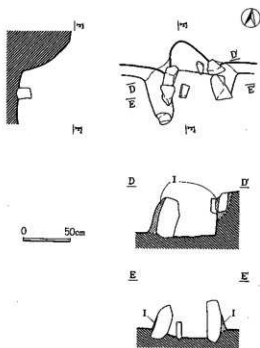
6は、土師器小形甕で、丸味をおびた平底の底部と球状の胴部を呈するものである。

7・8は、口縁部から底部にかけてのほぼ全体の器形を知り得ることのできる、遺存率の高い土師器甕である。口縁部はゆるく「く」の字状に外反し、底部は径4cmの狭い平底を呈する。双方とも法量はほとんど一致する。また、9・10も土師器甕の「く」の字状を呈する口縁部である。

IV 遺構と遺物

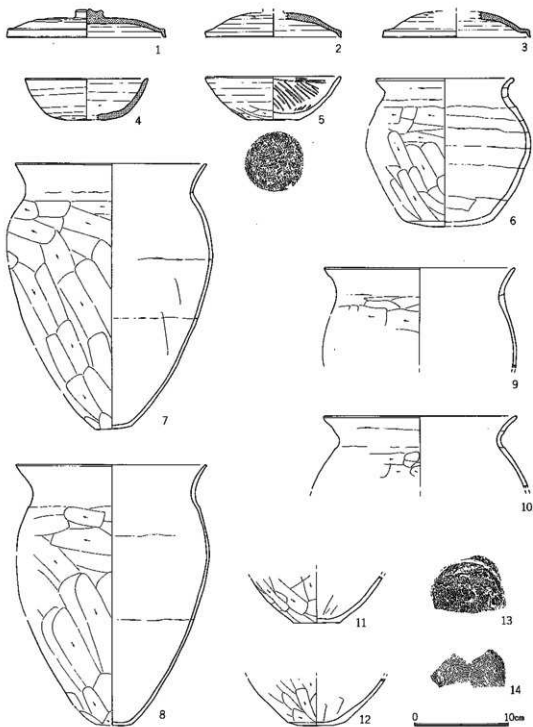


第20図 H-72号住居址実測図 (1 : 80)



第21図 H-72号住居址カマド実測図 (1 : 40)

1 墜穴住居址



第222圖 H-72号住居址出土遺物 (1:4)

第98表 H-72号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標号 番号	器種	法数	器形の特 徴	面 整	備 考
1 (回)	蓋 (項)	2.9 3.0 (17.0)	つまみ部は、輪部と中央部がやや突出した形状を呈する。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(0N4/0)
2 (回)	蓋 (項)	— (14.4)		外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(0Y75/1)
3 (回)	蓋 (項)	— (15.7)		外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く 含む灰白色 (7.5 Y 7 / 1)
4 (回)	環 (項)	(13.1) 4.4 (7.6)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転系切りの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を多く 含むオリーブ 灰色(5GY6/1)
5 (回)	環 (項)	(14.3) 4.6 5.4	体部は外反し、底部平底。	外面 体部下半ヘラケズリ、底部手持ちヘラケズリ 内面 ヘラミガキ (ロクロ整形)	胎土は砂粒を含み 褐色を呈する。 (5 Y R 6 / 6)
6 (完)	甕	14.7 15.6 9.3	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状にふくらみ、底部はやや丸味をおびた平底の小形の器形。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部～底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は精選されず 砂粒を多く含みに ふい、黄褐色(0YR 6/4)を呈する。
7 (完)	甕	20.3 28.0 4.0	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は上半部にかけて最大径をもったあとすぼまり、平底の底面に至る。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部～底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色 (5 Y R 4 / 8)
8 (完)	甕	20.2 27.5 4.0	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は上半部にかけて最大径をもったあとすぼまり、平底の底面に至る。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部～底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色 (5 Y R 4 / 8) を呈する。
9 (完)	甕	20.3 —	口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はふい 褐色(7.5 Y R 6 / 4) を呈する。
10 (回)	甕	(20.5) —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部はややふくらむ。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土は褐色を呈 する(5YR6/6)
11 (回)	甕	— 5.0	底部平底。	外面 胴部および底部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は残黄褐色 (0YR 8 / 4) を呈する。
12 (回)	甕	— (6.0)	底部平底。	外面 胴部および底部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は褐色 (5 Y R 6 / 8)を呈する

11・12は土師器甕の平底を呈する底部である。

時 期

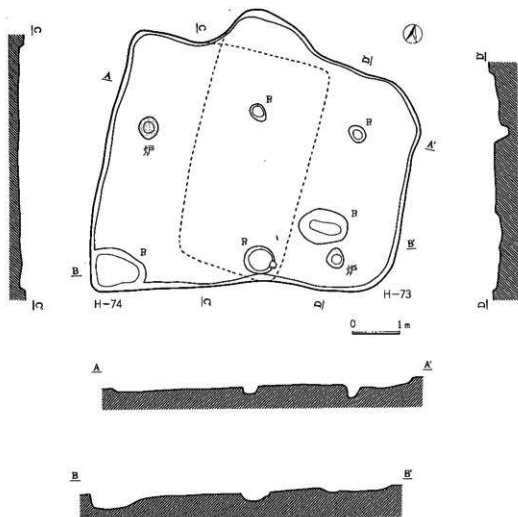
本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

(73・74) H-73・H-74号住居址

遺 構 第223図

H-73・H-74号住居址は、第II区セー26グリッドにおいて検出された。両住居址は重複関係をもつものであるが、両者がきわめて浅い遺構であることと、覆土の差異がほとんど認められないことから、その新旧の把握が困難であった。

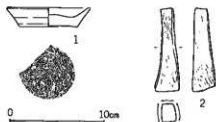
1 竪穴住居址



第23図 H-73・H-74号住居址実測図 (1:80)

H-73号住居址は、南北4.8mを測るもので、図に示した隅丸方形のプランを想定してよいであろう。推定床面積20.5㎡を測る。その南北軸方向はN-7°-Wを指す。壁高は10cm前後を測るのみである。ピットは、主柱穴としてP₁・P₂が検出され、また楕円形の浅い掘り込みであるP₃が南東コーナー寄りにみられた。P₁は40cm×30cm深さ30cm、P₂は40cm×30cm深さ15cm、P₃は100cm×75cm深さ7cmを測る。炉は、42cm×35cm深さ5cm不正円形を呈するもので、南東コーナー寄りに検出された。内部には赤褐色の焼土堆積がみられた。

H-74号住居址は、南北5.5mを測るもので、歪んだ隅丸方形のプランを想定でき、推定床面積19.8㎡を測る。南北軸方向はN-8°-Wを指し、壁高は10cm程度を測るのみである。ピットとし



第224図 H-73・H-74号住居址
出土遺物(1:4)

第99表 H-73・H-74号住居址出土遺物
一覧表〈石器〉

標記番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
2	砥石	流紋岩 風化物	8.8	2.6	2.4	60	

第104表 H-73・H-74号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標記 番号	器種	法量	器形の特 徴	調 査	備 考
1 (B)	皿	(8.9) 2.1 6.1	小形で扁平な盤状の形態を呈する。 底部平底。かわらけ	外面 ロクロコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選されず 砂粒を多く含み、 よい滑潤性を呈す る。GYR5/3

ては、南東コーナーにP₄、南西コーナーにP₅が検出された。P₄は60cm×57cm深さ20cmを測る円形のピットで、内部からは多量の炭化材が検出された。P₅は110cm×85cm深さ20cmを測る。炉は西壁寄りに検出されており50cm×40cm深さ5cmを測るものである。

なお、これまでH-73・H-74号住居址の二軒ということで述べてきたが、この遺構が不規則な形状を呈し二ヶ所に炉を有する一軒の住居址である可能性も残ることも指摘しておく。

遺物 第224図

検出された遺物のごく少量で、図示した1・2の他には須恵器片と土師器片数片がみられるのみである。これらの遺物はH-73・H-74のどちらかに伴うものなのかどうか判断できなかった。

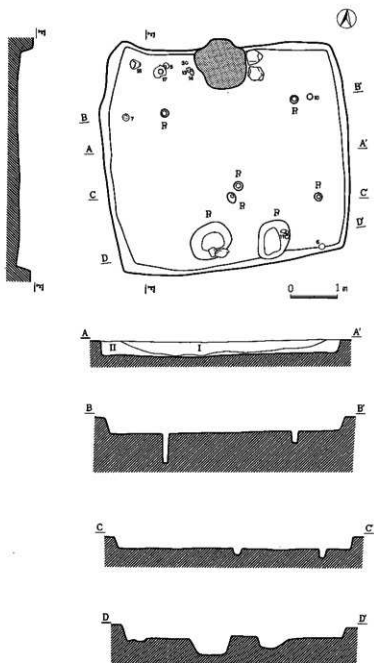
1は、いわゆる「かわらけ」である。その胎土は精選されず焼成も良好でない。ロクロ整形により、回転糸切りによる底部を見せている。

2は、流紋岩の砥石である。縦身で、4面が研砥に供されている。

時期

H-73・H-74号住居址は、その切り合いによる新旧関係は明確でなく、出土遺物も少ないため時期決定が困難であるが、1のかわらけからするとどちらかは古代末期から中世に位置付けられることになろうか。屋内の火焚についても、古墳時代中期以降からはカマドが採用されるが再び古代末期になると炉が採用される傾向がある。両住居址の構造も古代末期から中世の住居形態にあてはまらないものではないといえる。

1 墓穴住居址



第25图 H-75号住居址实测图 (1:80)

(75) H-75号住居址

IV 遺構と遺物

遺構 第225・226図

本住居址は、第II区セ-24グリッドにおいて検出された。

H-75号住居址は、南北4.75m東西5.2mの隅丸方形を呈し、床面積19.8㎡を測り、主軸方向N-17°-Wを指す。壁高は25~30cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴と考えられるピットは、P₁~P₄の4コーナーが検出された。これらのうちP₁はI区中央、P₂はII区中央、P₃・P₄はIV区のとやや端に寄った位置にある。また、P₄の横にあるP₅も柱穴となるのかもしれない。P₁は15cm×15cm深さ

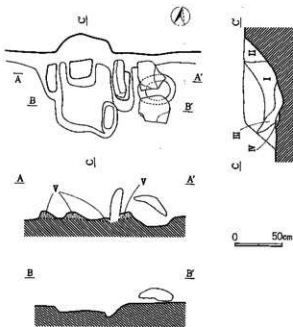
25cm、P₂は18cm×17cm深さ60cm、P₃は16cm×16cm深さ20cm、P₄は18cm×18cm深さ15cm、P₅は24cm×17cm深さ5cmを測る。また、南壁際にはP₆・P₇が並んで検出された。P₆は90cm×70cm深さ40cm、P₇は90cm×70cm深さ22cmを測る。

覆土は、2層に分層された。I層が黒色土層・II層が黒褐色土層で、土層構成はH-66号住居址と同様であった。

遺物は、カマド西脇の床面上より13・14の高坏脚部・3の手捏・17の甕・5の無頸壺・16の甔の各器種が並んで検出された。また、西壁際の床面上からは7の坏が、P₁の東脇床面上からは10の高坏坏部が検出された。またP₇中からは11の器台が潰れた状態で、南東コーナーの床面上からは6の蓋が検出された。これ以外の遺物はいずれも覆土中から検出されたものであった。

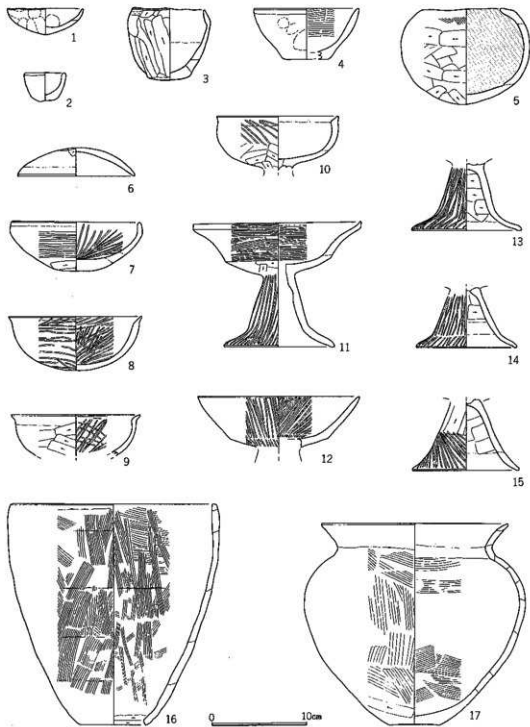
カマドは、北壁中央より検出された。僅か東袖の一部を残すのみで、その大半は破壊された状態にあった。残された東袖は、偏平な安山岩礫が据えられ粘土（V層）で固められた状態であった。また、カマドの東脇には2枚の偏平な安山岩礫がみられたが、これもカマドの構材として用いられていたものと考えられる。この礫の下位には、40cm×32cm深さ8cmの楕円形のピットが認められた。カマド覆土は4層に分層された。I層は焼土をよく含む黒褐色土層、II層は焼土を多く含む黒褐色土層、III層は焼土を若干含む黒褐色土層、IV層は赤褐色の焼土層であった。

遺物 第227・228図



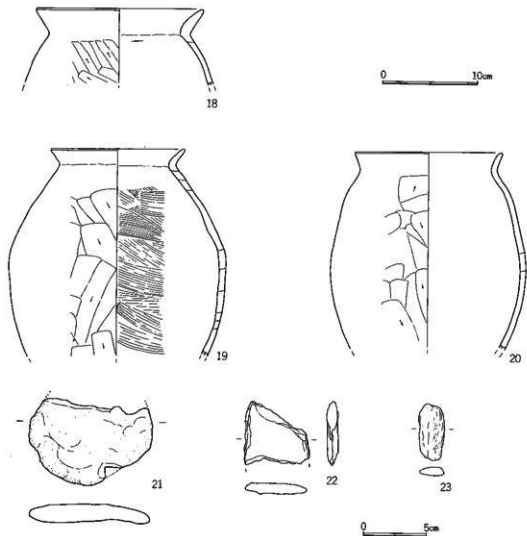
第226図 H-75号住居址カマド実測図 (1:40)

1 整穴住居址



第27图 H-75号住居址出土遗物(1:4)

IV 遺構と遺物



第22図 H-75号住居址出土遺物 (18・19・20=1:4, 21・22・23=1:3)

本住居址から検出された土師器は、手捏・無頸壺・蓋・坏・高坏・器台・甌・甕と多器種に及んでいる。

手捏土器が数多く検出されているのが本住居址の特徴といえる。図示した1～4の他、4個体分の手捏土器破片がみられた。

5の無頸壺は、内面に赤色塗彩の施こされたもので、焼成のあまいものである。本例と同様な無頸壺に、H-67号住居址出土の4・5の2個態がある。

6は土師器蓋で、焼成良好な優品である。

7～9は土師器坏で、7は素口縁部縁を呈するもの、8・9は短く外反する口縁部をみせる坏

第101表 H-75号住居址出土遺物一覧表(土器)

標記番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (出)	手捏	(8.1) 2.8	環形壁を呈した小形の手捏土器。	外面 ナデ 内面 ナデ	胎土は精選されず灰黄褐色(10YR5/2)を呈する。
2 (出)	手捏	4.5 - 2.8	断面が「U」字状を呈し、底部は丸味をおびた平底の小形の手捏土器。	外面 ナデ 内面 ナデ	胎土は精選されず灰褐色(7.5YR7/4)を呈する。
3 (完)	手捏	7.7 7.6 4.6	口縁部は内高し、底部は丸味をおびた平底をとり、小形の手捏土器。鉢形壁を呈する。	外面 口縁部ヨコナデの後、体部横位のヘラケズリ(光沢をもつ) 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	胎土は精選されず赤褐色(5YR4/6)を呈する。焼成不良。
4 (出)	手捏	(11.2) (5.4) (5.0)	逆「八」字状を呈する手捏土器。底部平底。	外面 全体に指面によるナデ、口唇部ヨコナデ 内面 刷毛目状調整	胎土は精選されず明褐色(7.5YR5/3)で、焼成不良。
5 (完)	無頸壺	8.3 10.1	器形は球体を呈し、口縁部は内湾する。底部丸底。完形品。	外面 体部全体に横位のヘラケズリがなされ、若干の刷毛目状調整が認められる。 内面 口唇部ヨコナデ、ヨコナデの後、赤色地肌。	胎土は褐色(7.5YR6/6)で精選されず焼成不良。表面の磨損による胎土は灰黄褐色を呈する(5YR7/4)焼成良好。
6 (完)	蓋	- 3.0 12.6	扁平な半球状を呈する。あるいは環としてとらえられるか。完形品。	外面 ヘラケズリの後、体部ナデ、底部ヨコナデ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含み褐色(7.5YR6/6)を呈する。
7 (完)	杯	13.8 5.2	底部は丸味をおびて外反したのち、口唇部でやや内湾する。底部丸底。ほぼ完形。	外面 口唇部ヨコナデ、体部横位のヘラミガキ 内面 口唇部ヨコナデの後、全体に放射状地肌が施される。	胎土は砂粒を含み褐色(7.5YR6/6)を呈する。
8 (出)	杯	14.2 5.7	底部から体部にかけては半球状の器形を呈し、口唇部は短く外反する。	外面 体部ヘラケズリ、口唇部ヨコナデの後全体に横位のヘラミガキ 内面 全体に放射状のヘラミガキ	胎土は砂粒を含み褐色(2.5YR6/8)を呈する。
9 (出)	杯	(13.8) -	体部は球状を呈し、口唇部は短く外反する。底部は丸底になるものと思われる。	外面 口縁部ヨコナデの後、体部横位のヘラケズリ 内面 ナデの後、放射状の地肌が施される。	胎土は砂粒を含み褐色(7.5YR6/8)を呈する。
10 (完)	高杯	12.9 -	杯部は球状を呈し、口唇部は短く外反する。胴部の形状は不明。	外面 体部下半はヘラケズリ、上半はヨコナデの後ヘラミガキ 内面 口唇部ヨコナデ、他は全体に刺刺状地肌を呈し、調整不良。	胎土は精選されず灰褐色(7.5YR6/6)を呈する。
11 (完)	盥台	17.8 13.1 11.7	器部は横をもって外反し、胴部はラップ状に外反する。杯部底には焼成前の穿孔があり、これにより機能的には盥台となる。ほぼ完形。	外面 杯部底は横位の刷毛目状調整、胴部はヨコナデ 内面 杯部はヨコの刷毛目状調整、胴部はヨコナデ	胎土は砂粒を含み褐色(7.5YR6/6)を呈する。
12 (出)	高杯	(17.2) -	杯部は横をもって外反する。	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	胎土は比較的精製され褐色(2.5YR6/8)を呈するH-66の4と類似。
13 (完)	高杯	- 11.6	胴部は下位で大きく広がるラップ状を呈する。	外面 胴部分ヨコナデの後、全体に横位のヘラミガキ 内面 体部横位のヘラケズリ、胴部分ヨコナデ	胎土は砂粒を含み褐色(5YR6/8)を呈する。
14 (出)	高杯	- (10.8)	胴部は下位で大きく広がるラップ状を呈する。	外面 胴部分ヨコナデの後、全体に横位のヘラミガキ 内面 上半部横位のヘラケズリ、下半部ヨコナデ	胎土は砂粒を含み褐色(5YR6/6)を呈する。
15 (完)	高杯	- 11.4	胴部はラップ状にひろがる。	外面 上半部横位のヘラケズリ、下半部ヘラミガキ 内面 横位のヘラケズリ、胴部ヨコナデ	胎土は砂粒を含み褐色(2.5YR6/6)を呈する。
16 (出)	蓋	(22.0) 23.3 7.0	器形は全体的にゆるく筒筒し、底部は花の大きい穿孔となる。	外面 ヘラケズリの後、刷毛目状調整	胎土は砂粒を含み褐色(7.5YR6/6)を呈する。
17 (出)	甕	(20.0) 21.2 5.3	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状によく丸む。底部は逆の小さい平底を呈する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目状調整 内面 底部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目状調整	胎土は砂粒を多く含む褐色(7.5YR4/3)を呈する。焼成不良。
18 (出)	甕	(17.9) -	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	胎土は砂粒を多く含む褐色(7.5YR7/6)を呈する。
19 (出)	甕	(14.4) -	口縁部は短く「く」の字状に外反する。胴部はややふくらみをおびた長胴を呈する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目状調整	胎土は砂粒を多く含む褐色(7.5YR6/6)を呈する。

IV 遺構と遺物

20 (個)	甕	(15, 7) —	口縁部は短く深く外反する。 胴部はふくらみをおびた長胴を呈する。	外面 口縁部ココナダ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ココナダ、胴部ナダ	胎土は砂粒を多く 含む褐色を呈する (5YR6/6)
-----------	---	--------------	-------------------------------------	---	----------------------------------

である。10は高坏であるがその坏部は8・9と同様な形態を呈している。

11は器台である。高坏は同様な器形を呈するが、その坏部底には焼成前の穿孔がみられる。

12～15は高坏の坏部あるいは脚部である。このうち12の坏部は、H-66出土の脚部4との接合をみた。

16は甌である。底部は径7cmを測る単孔となっている。

17～20は甕である。このうち17は胴部が球状を呈するものであり、19・20は口縁部が短く外反する長胴甕である。

土製品としては、21の土版が検出されている。不正楕円形を呈する扁平な焼き物で、手掘土器と同様胎土は精選されず焼成も良好でない。片面には全面にわたって指痕および指紋がみられる。本遺物は祭祀的な性格を有するものであろうか。

石製品としては、粘板岩の剥片2点が出土している。このうち22の片面は研磨されている。これらは、実用的な石器の素材とは考えられないものであり、21と同様祭祀的な性格を有する遺物といえようか。

時期

本住居址は、古墳時代中期、前田遺跡第II期に位置付けられよう。

(76) H-76号住居址

遺 構 第229・230図

H-76号住居址は、第II区セ-23グリッドにおいて検出された。

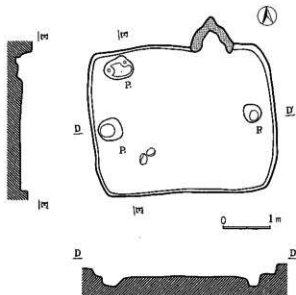
本住居址は、南北3.15m東西3.87mの隅丸方形を呈し、床面積10.7㎡を測り、主軸方向はN-11'-Wを指す。壁高は20cm前後を測り、壁溝は認められない。ピットは、東西両壁に沿って主柱穴であるP₁・P₂の2個が認められ、北西コーナーにはP₃が認められた。P₁は40cm×35cm深さ20cm、P₂は50cm×50cm深さ20cm、P₃は63cm×50cm深さ15cmを測る。

覆土はI層のみで、バミスをよく含む黒色土層であった。遺物はいずれも覆土中から出土している。

第102表 H-75号住居址出土遺物一覧表〈土製品・石器〉

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
21	土 版	土製品	(6.4)	9.8	1.5	(80)	
22	不 明	粘板岩	(5.0)	5.2	0.9	(28)	
23	不 明	粘板岩	4.5	2.0	0.7	9	

1 懸穴住居址

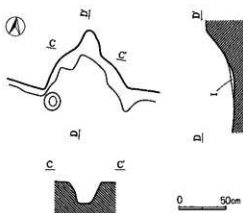


第229図 H-76号住居址実測図 (1:80)

カマドは、北壁中央よりやや東寄りに位置するが、すでに壊滅状態にあった。図にはその掘り方を示したが、プランは乳頭状に壁外に突出する。また、西側にみられるピットは袖石の抜き取り痕と考えられる。カマド使用にかかわると考えられる土層堆積はI層のみで、焼土を含む黒褐色土層である。

遺物 第231図

本住居址より検出された遺物はきわめて少ないが、須恵器では坏・長頸瓶、土師器では甕の各器種がみられた。

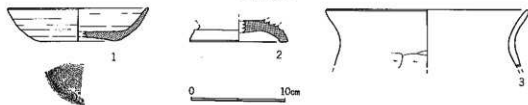


第230図 H-76号住居址カマド実測図 (1:40)

- 1は須恵器坏で、回転糸切りによる底部を見せている。
 - 2は、須恵器長頸瓶底部と考えられるもので、高台付のものである。
 - 3は、土師器甕のゆるく「く」の字状に外反する口縁部である。
- この他、鉄鏝の基部?が1点検出されている(4)。

時期

IV 遺構と遺物



第210図 H-76号住居址出土遺物(1:4)

第103表 H-76号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標記番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (副)	平 (皿)	(15.0) 3.5 9.1	体部は丸味をもって外反し、底部平底。	外面 ロクロコナデ、底部回転承切り 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は灰色を呈する(Q17/1)
2 (副)	高台 (皿)	— (10.5)	高台部。	外面 ロクロコナデ、底部に自然釉付着 内面 (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を多く含む灰白色を呈する(Q17/0)
3 (副)	鉢	(21.5) —	口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土は褐色を呈する。 (5YR6/6)



第104表 H-76号住居址出土遺物一覧表〈金属器〉

標記番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
4	鉄 釧	鉄	—	—	—	(5)	

第211図 H-76号住居址
出土遺物(1:3)

本住居址は、奈良・平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。

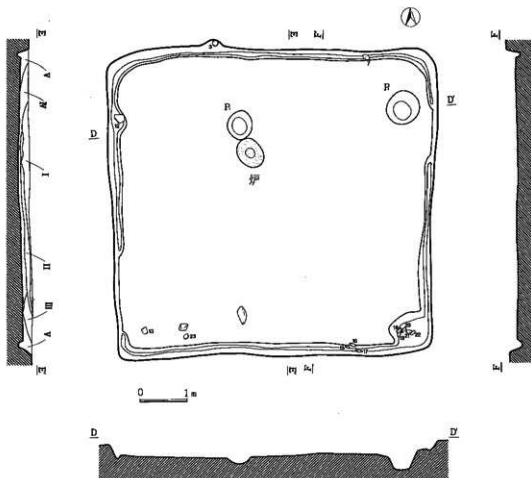
(77) H-77号住居址

遺 構 第233・234図

H-77号住居址は、第II区セ-23グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北6.6m東西7.0mの大形隅丸方形を呈し、床面積41.6㎡を測り、南北軸方向はN-7-Wを指す。壁高は20前後を測る。壁溝は、東壁の一部と西壁の一部を除きほぼ全周している。ピットは、北東コーナー寄りからP₁が、炉の北隣りからP₂が検出されたのみである。P₁

1 竪穴住居址



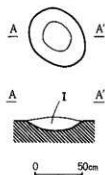
第233図 H-77号住居址実測図 (1 : 80)

は70cm×70cm深さ30cm、P₂は60cm×55cm深さ10cmを測る。

遺物は、南東コーナーの床面上よりまとめて15~22の石鏝が、南西コーナー付近の床面上からは23の磨石と13の底部が、西北コーナーの壁溝中からは12が、北壁上からは3の環が、北壁壁溝中からは7の高環環部がそれぞれ検出されている。これ以外の遺物は、いずれも覆土中から出土したものである。

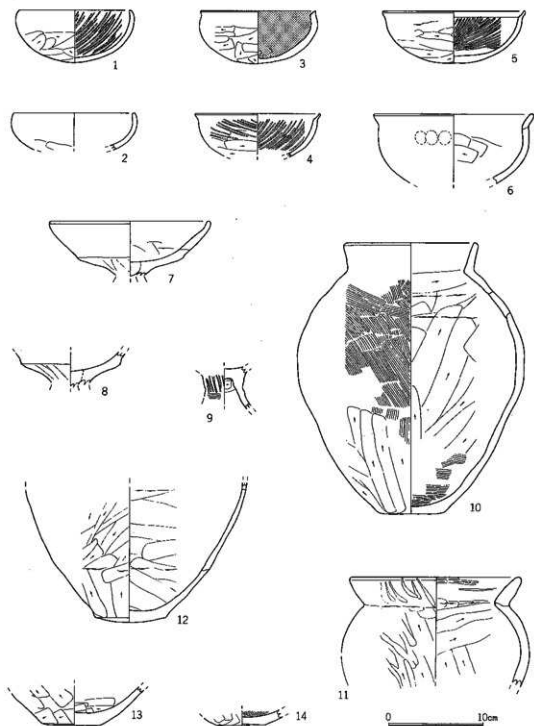
住居址覆土は、5層に分層された。I・III層が黒褐色土層、II層が茶褐色の砂層、IV層は黒色土層、V層は暗褐色土層で若干のロームが混入するものであった。

炉は、北壁寄りの中央より検出された。65cm×50cmの楕円形を呈



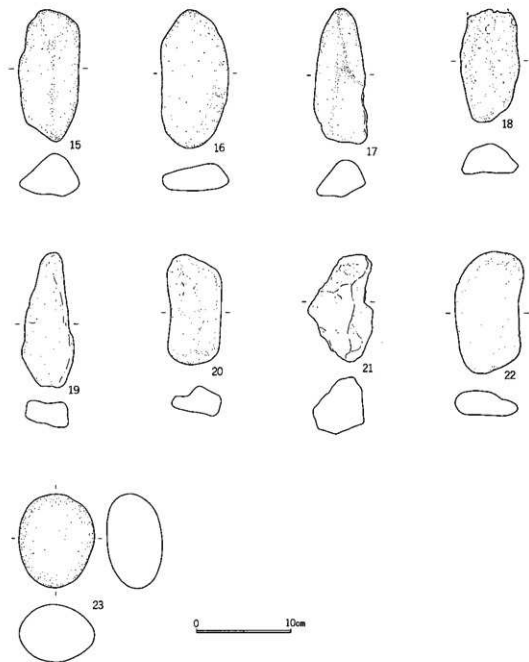
第234図 H-77号住居址炉 (1 : 40)

IV 透網と遺物



第286図 H-77号住居址出土遺物 (1:4)

1 竪穴住居址



第236図 H-77号住居址出土遺物 (1:4)

するもので、褐色の焼土堆積が5cmほどみられた。

遺物 第235・236図

第16表 H-77号住居址出土遺物一覧表(土器)

標頭 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (Ⅲ)	坏	(11.7) 5.5 —	底部から体部にかけて球状の器形を呈し、口唇部はやや内湾する。	外面 体部上半はヨコナデ 内面 体部下半～底部はヘラケズリ 体部上半ヨコナデの後、全体に放射状織文を施す。	胎土は砂粒を多く含み、深い褐色を呈する。 (5.YR 6/4)
2 (Ⅲ)	坏	(12.8) — —	体部は球状を呈するもので、口唇部はやや内湾する。	外面 体部上半はヨコナデ 内面 体部下半はヘラケズリ ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含み、深い褐色を呈する。 (7.5YR 6/4)
3 (Ⅲ)	坏	12.3 5.6 —	底部から体部にかけては球状の器形を呈し、口唇部で鋭かに外反する。完形。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 体部下半～底部ヘラケズリ ヨコナデ(ヘラ?)の後、黒色研磨	胎土は砂粒を含み、黄褐色を呈する。 (10YR 5/4)
4 (Ⅲ)	坏	(13.4) — —	体部は球状を呈し、口縁部で短く外反したのち口縁部は内側へ突出する。	外面 口縁部ヨコナデ、体部はヘラケズリの後、若干のミガキが施こされる。 内面 ラコナデの後、放射状にヘラミガキが施こされる。	胎土は砂粒を含み、褐色(5YR 6/6)を呈する。
5 (Ⅲ)	坏	(15.2) 5.5 —	底部から体部は球状を呈し、口縁部で短く外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、体部から底部にかけてヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデの後、体部ヘラミガキ	胎土は砂粒を含み、褐色(5YR 6/6)
6 (Ⅲ)	甕	(16.9) — —	体部は球状を呈し、口縁部は短く外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	胎土は精選されず、褐色(7.5YR 7/6)を呈する。焼成不良。
7 (Ⅳ)	高 坏	(17.1) — —	坏部は腰をもって外反する。	外面 体部上半ヨコナデ、体部下半ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は精選されず、深い褐色(5YR 6/4)を呈する。焼成はあまり良好でない。
8 (Ⅳ)	高 坏	— — —	坏部は腰をもって外反する。	外面 体部下半ヘラナデ 内面 ナデ	胎土は精選されず、深い褐色(7.5YR 7/4)を呈する。焼成はあまり良好でない。
9 (Ⅳ)	高 坏	— — —	—	外面 ミガキと若干の刷毛目状調整 内面 一部ヘラケズリ	胎土は精選されず、砂粒を多く含み、黄褐色(10YR 7/4)を呈する。焼成不良。
10 (Ⅳ)	甕	(14.3) 28.6 7.6	口縁部は直立気味に外反し、胴部はふくらんだ長胴となる。あるいは壺か。	外面 胴部刷毛目状調整の後、胴下半部ヘラケズリ、 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、 胴下半部刷毛目状調整	胎土は精選されず、砂粒を多く含み、深い黄褐色(10YR 7/4)を呈する。焼成はあまり良好でない。
11 (Ⅳ)	甕	(18.2) — —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。器内は全体に厚い。	外面 口縁部ヨコナデの後、若干のヘラナデ 胴部ヘラナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は精選されず、深い褐色(5YR 6/4)を呈する。
12 (Ⅳ)	—	— 7.3	壺あるいは甕の下半部。底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ(刷毛目状調整)	胎土は砂粒を含み、褐色(7.5YR 6/6)
13 (Ⅳ)	—	— 6.4	壺あるいは甕の底部。平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は砂粒を多く含み、明褐色(5YR 5/6)
14 (Ⅳ)	—	— 5.0	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 刷毛目状調整	胎土は精選されず、砂粒を多く含み、深い褐色(5YR 4/3)

本住居址からは、土師器の坏・坏・高坏・壺・甕が検出されている。

1～5は坏で、いずれも半球状のプロポーションを呈するが、素口縁の1・2と、口縁部が短く外反する3～5とがみられる。3は内面黒色研磨がなされている。

6は甕で、基本的には3～5の坏と同様な形状を呈している。

7・8は坏の坏部、9は脚部である。

10は、膨らんだ長胴を呈し口縁部が直立気味に外反する壺である。

11は、口縁部が外反し胴部が球状を呈するやや肉厚な甕である。

12~14は、壺あるいは甕の胴部下半~底部である。

石器では、15~22の石錘と、23の磨石が検出された。

15~22は、蓆などを編む際のおもりなどとして使用された石錘と考えられようか。

23は、楕円形の河床礫を用いた磨石で、全体に磨痕が認められる。

この他、図示しなかったが、H-75にみられたような粘板岩の剥片が3点みられた。H-75のものと同様祭祀的な性格を帯びるものであろうか。

時期

本住居址は、古墳時代中期、前田遺跡第II期に位置付けられよう。

(78) H-78号住居址

遺構 第237・238図

H-78号住居址は、第II区セ-23グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.8m東西4.4mの隅丸方形を呈し、床面積15.5m²を測り、主軸方向はN-10°-Wを指す。壁高は10~20cmを測り、壁溝は認められない。支柱穴は、P₁~P₄の4個が検出された。P₁は中段にテラスをもち60cm×40cm深さ40cm、P₂は40cm×35cm深さ45cm、P₃は60cm×45cm深さ65cm、P₄は45cm×40cm深さ40cmを測る。

覆土はI層のみで、バミス・ローム粒子をよく含む黒褐色土層であった。遺物はいずれも覆土中からの出土で、床面に密着した状態のものは認められなかった。

カマドは、北壁中央に存在するが、粘土(II層)からなる東西両袖の一部をとどめるのみであった。カマド覆土は6層に分層された。I層は黒色土層、II層は灰色粘土層で天井部を構成していたものと考えられる。III層はカーボンの堆積層で、IV層は若干の焼土を含む黒褐色土層、V層は赤褐色の焼土層、VI層は焼土・カーボン等をまったく含まない暗褐色土層であった。

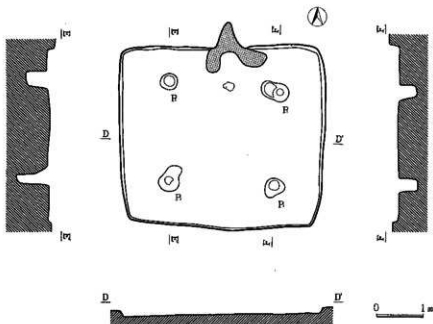
遺物

本住居址より検出された遺物は、ごく僅かで、薄手の土師器甕の破片のみであった。中には、「く」の字状に外反する口縁部破片もみられたが、図示し得るものはなかった。

第16表 H-77号住居址出土遺物一覧表(石器)

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
15	石錘	安山岩	13.8	6.4	4.5	525	
16	石錘	安山岩	14.7	7.1	2.8	425	
17	石錘	安山岩	14.1	5.4	3.9	370	
18	石錘	安山岩	(11.9)	6.2	3.3	(315)	
19	石錘	安山岩	14.2	5.5	2.7	285	
20	石錘	安山岩	11.4	5.7	3.3	295	
21	石錘	安山岩	11.2	7.0	6.0	450	
22	石錘	安山岩	12.7	6.7	2.8	345	
23	磨石	安山岩	9.9	8.0	6.0	695	

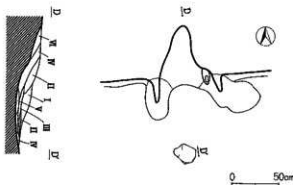
IV 遺構と遺物



第37図 H-78号住居実測図 (1:40)

時期

本住居は、出土遺物が土師器
甕のみであるので、時期決定が困
難であるが、その構造や周囲の住
居址の位置付けを考え合わせ、奈
良時代、前田遺跡第V期のもの
と想定しておこう。



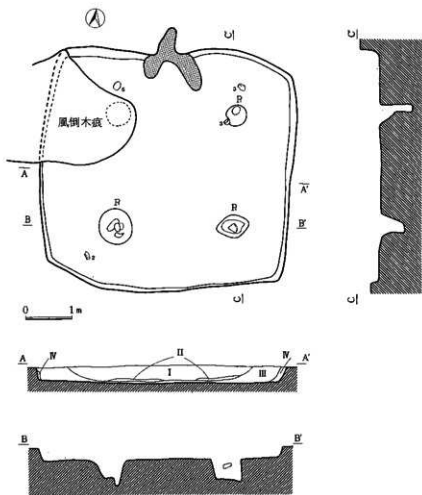
(79) H-79号住居址

遺構 第239・240図

第38図 H-78号住居址カマド実測図 (1:40)

H-79号住居址は、第II区ス・セ-24グリッドにおいて検出された。その西壁側の北半分は、
風倒木によって攪乱を受けている。

本住居址は、南北5.1m東西5.4mの隅丸方形を呈し、床面積23.8㎡を測り、主軸方向はN-18'-
Wを指す。壁高は20~30cmを測り、壁溝は認められない。支柱穴は、P₁・P₂・P₄の3個が確認
されたが、おそらく風倒木による攪乱を受ける以前はII区においてP₂が存在していたものと考え



第289図 H-79号住居址実測図 (1:80)

られる。P₁は45cm×40cm深さ70cm、P₂は75cm×70cm深さ55cmを測りテラスをもつものである。P₃はその上部に偏平な礎がみられ、70cm×50cm深さ50cmを測る。

遺物は、南西コーナー部より2の環が、P₁付近の床面上より3の須恵器が、カマド西側の床面上より5の甕の底部がそれぞれ検出された。それ以外はいずれも覆土中からの出土である。

覆土は、4層に分層された。I層が小軽石を含む黒褐色土層、II層はローム粒子小軽石を含む明黄褐色土層、III層は小軽石を含む黒色土層、IV層はローム粒子を多量に含む黄褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに半壊状態にあった。その両袖は粘土層(VI層)からなり、火床部は一旦浅く掘り込まれた後ロームを含むV層で埋め戻されたものであった。カマド

IV 遺構と遺物

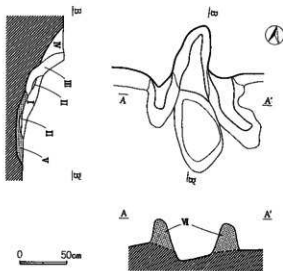
覆土は4層に分層された。I層が多量の焼土・灰を含む黄灰色土層、II層が赤褐色の焼土層、III層が若干の焼土・カーボンを含む黒褐色土層、IV層が焼土・カーボンを含まない黄褐色土層であった。

遺物 第241・242図

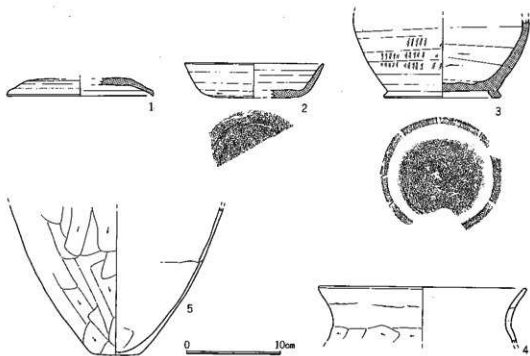
本住居址から検出された遺物には、須恵器では蓋・坏・長頸瓶、土師器では甕がある。

1は須恵器壺で、つまみ部の形状は不明である。

2は須恵器坏で、回転ヘラケズ

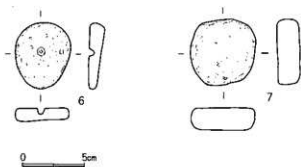


第240図 H-79号住居址カマド実測図(1:40)



第241図 H-79号住居址出土遺物(1:4)

1 墓穴住居址



第242図 H-79号住居址出土遺物(1:3)

りのなされた底部をみせている。
この他、回転ヘラキリによる底部破片が一片みられた。

3は須恵器長頸瓶あるいは短頸壺の胴下半部で、高台付のものである。底部には回転ヘラケズリがなされており、切り離し方法は不明である。

4は「く」の字状に外反する土

師器甕の口縁部で、5は土師器甕の胴下半部である。

6・7は、偏平に面取りされた軽石で、紡錘車の未成品と考えられる。6には片面側に穿孔がなされ始めているが、7にはまだ穿孔はみられない。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

第101表 H-79号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (回)	蓋 (項)	— (15.5)	つまみ部の形状不明	外面 ロクロヨコナデの後、天井扉回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰白色(5YR/1) を呈する。
2 (回)	坏 (項)	(14.8) 3.7 (9.8)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され ず砂物を多く含 み灰白色 (7.5Y8/1)
3 (完)	— (項)	— 12.4	器壁は短頸壺か長頸壺になるものと考えられる。 高台が貼り付けられる。	外面 体部は引きの後ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラケズリの後、高台を付す。 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され、 灰褐色(5YR 4/2)を呈する。 焼成良好。
4 (回)	甕	(22.1) — —	口縁部は「く」の字状にゆるく外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土はにぶい褐色を呈する (7.5YR5/4)
5 (回)	甕	— — 5.0	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	胎土は明赤褐色を呈する。 (5YR5/6)

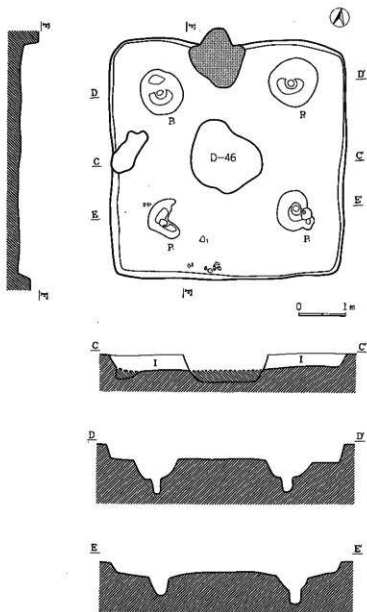
第102表 H-79号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
6	紡錘車?	軽石	5.2	4.4	1.2	10	未成品
7	紡錘車?	軽石	5.2	5.1	1.8	25	未成品

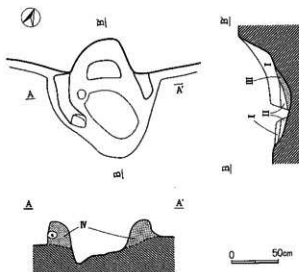
(80) H-80号住居址

遺構 第243・244図

H-80号住居址は、第II区セ-24グリッドにおいて検出された。その中央部にはD-46が本住



第243図 H-80号住居址実測図 (1:80)



第244図 H-80号住居址カマド実測図(1:40)

居址を切って存在し、また西壁際には攪乱がみられた。

本住居址は、南北5.1m東西5.0mの隅丸方形を呈し、床面積22.9m²を測り、主軸方向はN-14°-Wを指す。壁高は20~40cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P₁~P₄の4個が検出された。P₁は100cm×105cm深さ65cm、P₂は100cm×90cm深さ70cm、P₃は不規則な形状を呈し90cm×40cm深さ40cm、P₄は85cm×65cm深さ60cmを測る。

遺物は、南壁際より1の蓋・4・6の環が、西壁寄りに2の蓋が検出された。それ以外の遺物はいずれも覆土中からの出土である。

覆土はI層のみで、バミスを若干含む粘性のある黒色土層であった。

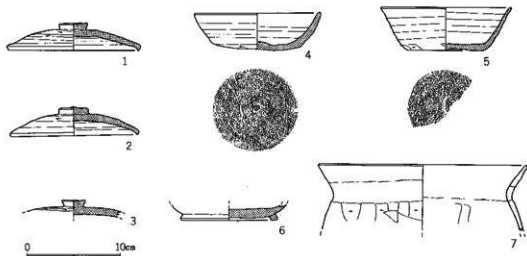
カマドは、北壁中央に検出されたが、東西両袖の一部を除いてほぼ壊滅状態にあった。残っていた袖部は粘土(IV層)で構築されているものであった。その火床部は一旦掘り込まれた後、僅かに黒色土(III層)で埋め戻されたもので、浅い窪みとなっていた。カマドの使用に伴うと考えられる覆土は2層で、I層が若干の焼土を含む暗褐色土層、II層は赤褐色の焼土層であった。覆土堆積の中央には支脚石の抜き痕がみられた。

遺物 第245図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では蓋・環・甕、土師器では甕がある。

1~3は須恵器蓋で、つまみ部が偏平な盤状を呈するものである。このうち2の内面は光沢をもちかなりつるつるしており、研磨の客体となったことを窺わせる。あるいは転用甕等となったのであろう。ただし墨の付着等は認められない。

IV 遺構と遺物



第26図 H-80号住居址出土遺物(1:4)

第80表 H-80号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

図号 番号	器種	法量	器形の特徴	面	整	備考
1 (完)	蓋 (項)	3.0 2.9 13.8	つまみ部は中央部のややくぼんだ盤状を呈する。	外面 ロクロヨコナゲの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ右回転)		胎土は精選されず砂粒を多く含む暗青灰色 (5B G4/1)
2 (面)	蓋 (項)	3.1 3.1 (13.4)	つまみ部は中央部はやや突出するが、全体に盤状を呈する。	外面 ロクロヨコナゲの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナゲ、全体につるつとしており 転用痕等となったか(ただし墨の付着はなし) (ロクロ左回転)		胎土は精選されず砂粒を多く含む暗青灰色00B (G4/1)を呈する。
3 (面)	蓋 (項)	(2.5) —	つまみ部は下にややすぼんだ盤状を呈する。	外面 ロクロヨコナゲの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ右回転)		胎土は細砂粒を含み灰白色 (0Y7/1)
4 (完)	杯 (項)	13.6 3.8 9.2	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナゲ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ右回転)		胎土は細砂粒を含み灰色 (N6/0)
5 (面)	杯 (項)	(13.8) 4.6 (8.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナゲ、底部切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ左回転)		胎土は砂粒を含み灰白色 (0Y7/1)
6 (面)	杯 (項)	— 10.2	底部には高台が貼り付けられる。	外面 底部回転ヘラケズリの後、高台貼り付ける。 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ右回転)		胎土は砂粒を多く含む暗灰色 (0G Y6/2)を呈する。
7 (面)	蓋	(22.1) —	口縁部は「く」の字状にゆるく外反する。	外面 口縁部ヨコナゲの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナゲ、胴部ヘラケリ		胎土は明赤褐色 (5YR5/8)を呈する。

4～6は、須恵器杯で、6は高台付のものである。4は回転ヘラケリ、5はおそらく回転糸切りの後全面手持ちヘラケズリ、6は回転ヘラケズリによる底部を見せている。

7は、「く」の字状にゆるく外反する土師器甕の口縁部である。

時期

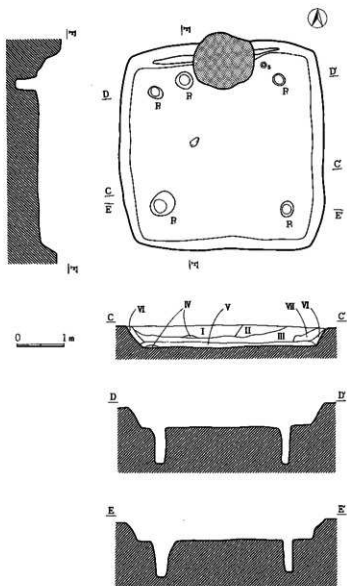
本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

(81) H-81号住居址

遺構 第246・247図

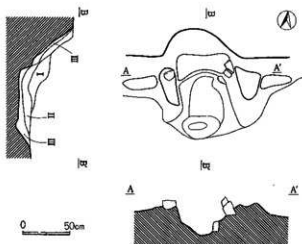
H-81号住居址は、第II区ス・セ-23グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.4m東西4.3mの隅丸方形を呈し、床面積14.6㎡を測り、主軸方向はN-10-Wを指す。壁片は40~50cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴としては、P₁~P₄の4個がみら



第246図 H-81号住居址実測図 (1:80)

IV 遺構と遺物



第247図 H-81号住居址カマド実測図 (1:40)

れ、また補助柱穴的なP₅もみられた。P₁は25cm×25cm深さ80cm、P₂は30cm×25cm深さ75cm、P₃は55cm×48cm深さ75cm、P₄は35cm×27cm深さ70cm、P₅は35cm×35cm深さ45cmを測る。

遺物は、カマドの東脇の床面上より5の小形甕が検出された以外は、いずれも覆土中からの出土であった。

覆土は7層に分層された。I層は黒褐色土、II層は茶褐色土層、III層が暗茶褐色土層で、これら3層はいずれも小軽石を含み粘性の少ない層であった。IV層は黒褐色土層、V層はロームの二次堆積である黄褐色土層、VI層は黒色土層でいずれも小軽石を含まない粘性のない層である。VII層は小軽石を含む茶褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに半壊状態にあった。僅かに残る両袖は、面取り軽石が据えられているものであった。火床部は、掘り方の段階ではやや掘り窪められていた。カマド使用に関連すると考えられる覆土は、3層に分層された。I層は灰層で若干のカーボンを含むものであった。II層は灰褐色土層で灰・焼土・カーボンを含み、III層は多量のカーボンを含む黒色土層である。

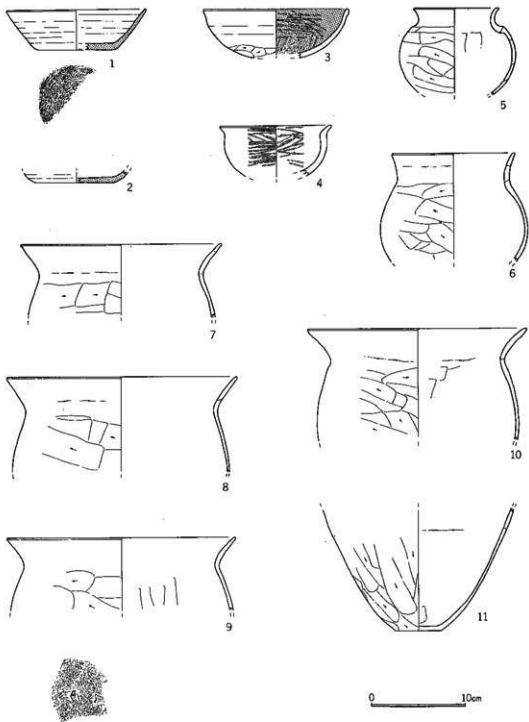
遺物 第248・249図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では坏、土師器では坏・甕がある。

1・2は須恵器坏である。1は回転ヘラキリ、2は回転ヘラケズリの底部をみせている。この他、回転ヘラキリによる須恵器底部破片が1片みられた。

3・4は土師器坏である。3はロクロ整形によるもので内面黒色研磨のなされた坏である。4は口縁部が短く外反するもので、おそらく古墳時代中・後期の遺物で、混入品であろう。

1 整穴住居址



第245图 H-81号住居址出土遗物(1:4)

第III表 H-81号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

押出番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (回)	坏 (甕)	(14.9) 4.2 (R.4)	体部は外反し、底部平底。	外面 内面	体部ロクロコナデ、底部回転ヘラナリ ロクロコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (10Y7/1)
2 (回)	坏 (甕)	— — (R.1)	底部平底。	外面 内面	体部ロクロコナデ、底部回転ヘラケズリ ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(10Y6/1)を呈する。
3 (回)	坏	(15.5) —	体部は弓なりに外反する。底部は丸底となるものと思われる。	外面 内面	体部ロクロコナデ、底部ヘラケズリ 黒色研磨 (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(10Y7/4)を呈する。
4 (回)	坏	(11.9) —	体部は球状を呈し、口縁部で短く外反する。	外面 内面	ヨコのヘラミガキ 口縁部ヨコナデの後、全体にヘラミガキ	胎土は精選され褐色(5YR6/6)を呈する。混入品であらう。
5 (甕)	甕	9.0 —	体部は球状を呈し、口縁部は弓なりに外反する小形の器形	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ	胎土は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。
6 (回)	甕	(13.0) —	口縁部は直立気味に外反し、胴部のふくらむ小形の器形。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は褐色を呈する(5YR6/6)
7 (回)	甕	(21.3) —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は褐色を呈する(7.5YR5/6)
8 (回)	甕	(24.5) —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラナデ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は褐色を呈する(7.5YR6/6)
9 (回)	甕	(24.2) —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラナデ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ (全体に割傷が激しい)	胎土は明赤褐色を呈する。 (5YR5/6)
10 (回)	甕	(23.3) —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラナデ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は褐色(5YR6/6)を呈する。
11 (回)	甕	— (4.8)	底部平底。	外面 内面	胴部ヘラケズリ 胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色(5YR4/6)を呈する。



第249図 H-81号住居址出土遺物(2:3)

第III表 H-81号住居址出土遺物一覽表〈石器〉

押出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
12	石器	黒曜石	1.8	1.7	0.3	0.4	

5は土師器の小形甕で、球胴を呈するものである。6も小形甕で直立気味に外反する口縁部をみせている。

7~10は「く」の字状に外反する口縁部をみせる土師器甕である。11は、土師器甕の胴部下半である。

石器では、II区より黒曜石の両面調整の石鏃(12)が検出されている。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

(82) H-82号住居址

遺構 第250図

H-82号住居址は、第II区セ・ソ24グリッドにおいて検出された。その北側は、D-45号土壌によって切られている。

本住居址は、南北2.93m東西3.5mの隅丸方形を呈し、床面積9.0㎡を測り、南北軸方向N-18°-Wを指す。壁高は5cm前後を測るのみで、壁溝は認められない。ピットは、西壁コーナー寄りに55cm×50cm深さ10cmの円形を呈するP₁が検出されたのみである。

遺物は、1の須恵器甕底部が南東コーナーの床面直上より正常位で検出された。この他は、いずれも覆土中からの出土であった。

カマドは、現状においては存在しなかったが、あるいはD-45によって破壊され北壁中央付近に存在した可能性も残る。

遺物 第252図

本住居址より検出された遺物は、1の須恵器底部と、その他土師器甕破片数片のみであった。

1の須恵器甕は、外面に叩き目のみられるものであった。

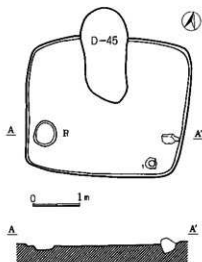
土師器甕破片は、いずれも薄手の胴部破片ばかりである。

時期

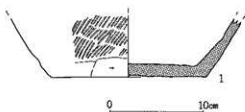
本住居址は、時期決定の手がかりとなる遺物がごく僅かであるため、その位置付けに支障をきたすが、とりあえずは奈良・平安時代、前田遺跡第VII期のものとして捉えておこう。

第112表 H-82号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (完)	甕 (頸)	— 16.6	底部平底。	外面 胴部叩き、底部ヘラケズリ 内面 ナデ	筋土は砂粒を含み黄灰色 (土質Y5/1)を呈する。



第250図 H-82号住居址実測図 (1:80)



第252図 H-82号住居址出土遺物 (1:4)

(83) H-83号住居址

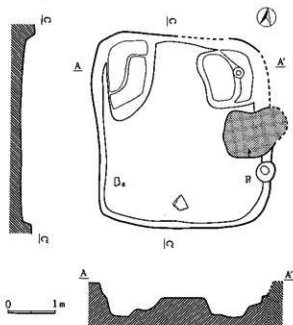
遺構 第252・253区

H-83号住居址は、第II区セ・ソー23グリッドにおいて検出された。その北東コーナー部は、溝によって破壊されている。

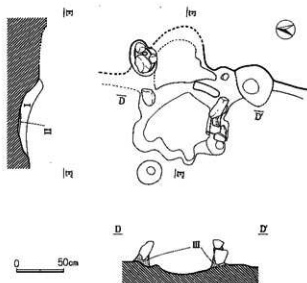
本住居址は、南北4.1m東西3.8mの隅丸方形を呈し、床面積11.9㎡を測り、主軸方向はN-82°-Eを指す。壁高は20cm前後を測り、壁溝は認められない。ピットは、カマド南脇の壁中よりP₁が検出されたのみであった。P₁は40cm×40cmを測る円形のピットであった。住居の北東コーナー・北西コーナーには床面が確認されず、図のような掘り方となったが、あるいは軟らかい床面が存在したのかもしれない。北東コーナー側の掘り方はテラスをもち深さ40cmを測る。北西コーナー側もテラスを有し40cm程の深さとなっている。

覆土は黒褐色土層I層のみで、遺物はいずれもこの覆土中からの出土であった。

カマドは、東壁中央より検出された。本遺跡における大部分のカマドが、北壁中央に存在することからすると本例は注意さ

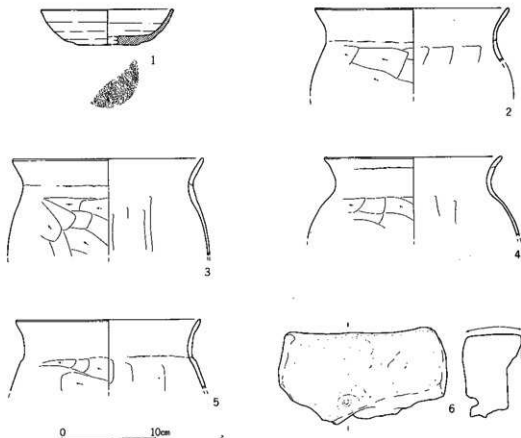


第252図 H-83号住居址実測図(1:80)



第253図 H-83号住居址カマド実測図(1:40)

1 既穴住居址



第24図 H-83号住居址出土遺物(1:4)

第113表 H-83号住居址出土遺物一覧表(土器)

標記 番号	器種	法量	器形の特 徴	測 量	備 考
1 (回)	環	14.0 3.8 (6.6)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転承切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (N6/0)
2 (片)	甕	20.7 -	口縁部はゆるく「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色を呈する。 (5YR5/6)
3 (片)	甕	20.4 -	口縁部はゆるく「ク」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は褐色を呈する。 (5YR6/8)
4 (回)	甕	19.0 -	口縁部はゆるく「ク」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は褐色を呈する。 (5YR5/6)
5 (片)	甕	19.7 -	口縁部はゆるく「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色を呈する。 (5YR5/8)

れる。カマド本体は、大部分破壊されているが、北側の袖石と南側の袖石数点をとどめていた。それらの袖石はさらに粘土(III層)で固められ、袖部を構成している。袖石には軽石・安山岩等

が用いられていた。カマド使用に関する堆積は、2層認められた。I層が若干の焼土・灰を含む黒褐色土層、II層が赤褐色の焼土層であった。なお、本カマドの北袖の粘土中から石英の破片が検出された。何か祭祀的な意味があって封じ込められたものなのだろうか。

遺物 第254図

本住居址より検出された遺物は少ないが、須恵器では坏・甕、土師器では甕がみられた。

1は須恵器坏で、回転糸切りによる底部をみせるものである。

須恵器甕は、口縁部と胴部破片が各1片ずつ認められたにすぎない。

土師器甕には、2の僅か「コ」の字状に外反する口縁部を見せるものや、3～5の「く」の字状に外反する口縁部をみせるものがみられた。

石製品では、3.5cm×2.4cm×2.2cmを測る石英塊が検出された。在地にはみられない石材であり、しかも袖の粘土中に込められていたとすると、何か祭祀的な性格をおびるのであろうか。

6は、砂岩の砥石である。研砥は1面においてなされているにすぎず、しかもあまり顕著な砥痕をみられない。一部には穿孔がみられた。

時期

本住居址は、奈良・平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。

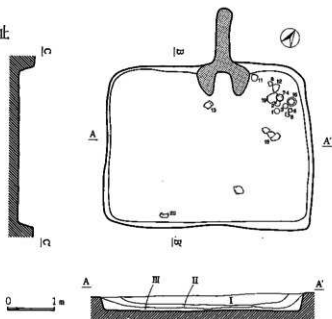
(84) H-84号住居址

遺構 第255・256図

H-84号住居址は、第II区スー23グリッドにおいて検出された。

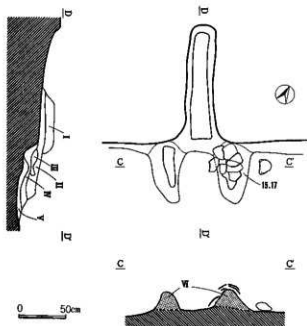
本住居址は、南北3.5m東西4.4mの隅丸方形を呈し、床面積13.1㎡を測り、主軸方向はN-45°-Wを指す。壁高は25~30cmを測り、壁溝は認められない。また、柱穴等のピットは検出されなかった。

住居址覆土は、3層に分層された。I層が黒褐色土層、II層がローム粒子を少量含む黒色土層、III



第255図 H-84号住居址実測図 (1:80)

1 竪穴住居址



第256図 H-84号住居址カマド実測図 (1:40)

層はローム粒子を多量に含む黒褐色土層であった。

遺物は、カマド東脇・北東コーナーの床面上から遺存率の高いものが10個近く一括して出土している(巻頭図版、図版参照)。1～8の土師器環、11の須恵器短頸壺、12の甌、16の甕等で多くは正常位で出土した。また、カマド西袖の手前からは13の小形甕が、南壁際からは20の磁石も検出されている。この他の遺物はいずれも覆土中から検出されたものである。

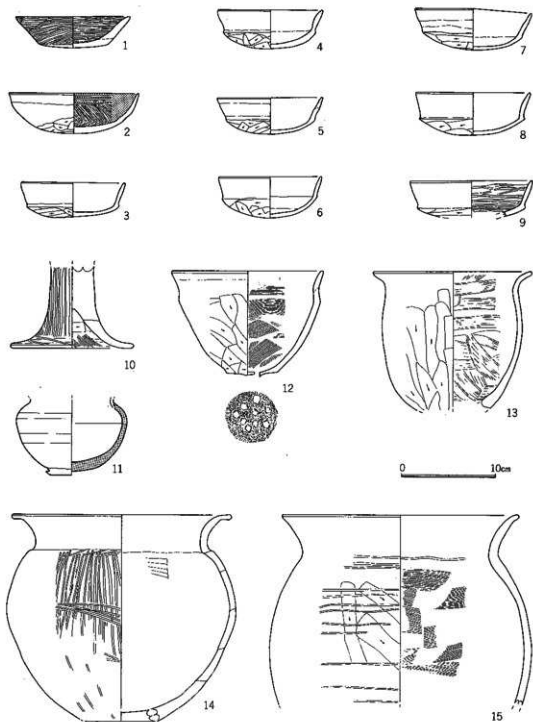
カマドは、北壁中央に位置し、比較的よく旧状をとどめているものと考えられる。東西両袖は赤みがかった粘土を構材としており、その芯に石材は用いられていなかった。また、東袖の上部には15・17の甕の大きな破片が乗っていた。煙道部は、本遺跡の他のカマドの煙道部と比較してかなり長く屋外に延び、およそ125cmを測った。カマドの使用に伴うと考えられる土層地積は5層みられた。I層は焼土・灰をよく含む灰褐色土層、II層はカーボン・灰をよく含む黒灰色土層、III層は黄灰色の灰層、IV層は焼土を多量に含む茶褐色土層、V層は褐色の焼土層であった。

遺物 第257・258図

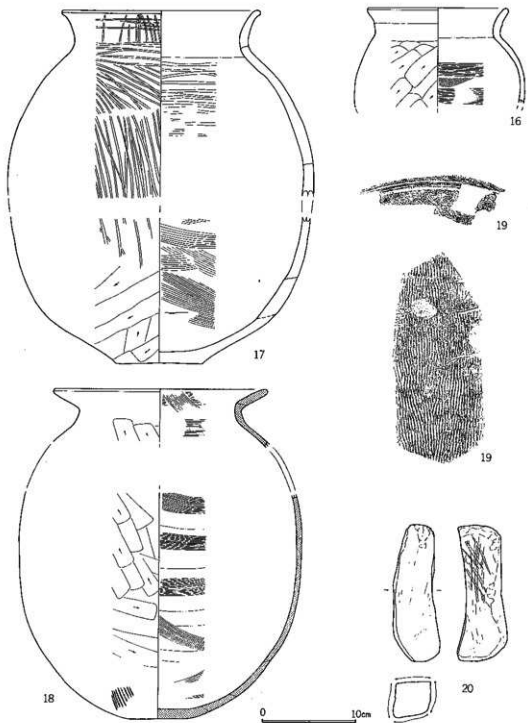
遺物は、前述したように遺存率の高いものが多く、土師器では環・高環・甌・甕が、須恵器では短頸壺・甕がみられた。

土師器環には、9点を図示したが、1の底部平底で体部が直線的に強く外反するもの、2の半球状の器形を呈するもの、3～9の底部丸底で体部との境に稜を有し直線に外反する体部をみせ

IV 遺構と遺物



第25図 H-84号住居址出土遺物(1:4)



第258图 H-84号住居址出土遗物(1:4)

IV 遺構と遺物

第115表 H-84号住居址出土遺物一覧表(土器)

検出 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 査 要 素	備 考
1 (完)	坏	12.2 3.3 7.3	胴部は外反し、底部平底。	外面 入念なヘラミガキ 内面 入念なヘラミガキ	胎土はぶい褐色(7.5YR 6/4)を呈する。 焼成良好。
2 (完)	坏	13.9 4.3 —	胴部は腰部にかけて半球状の形態を呈する。 完形	外面 口縁部ヨコナデ、腰部-底部ヘラケズリ 内面 灰色研削	胎土は砂粒を含み明黄褐色を呈する。
3 (完)	坏	11.2 3.7 9.9	底部は扁平な丸底を呈し、腰をもった後直線的に外反する口縁部へと続く。	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面	胎土は砂粒を含み褐色(5YR 7/6)を呈する。 焼成はあまり。
4 (完)	坏	11.2 4.1 9.9	底部はやや扁平な丸底を呈し、腰をもつて外反する口縁部へと続く。 完形	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含み褐色(5YR 7/6)を呈する。 焼成はあまり。
5 (完)	坏	11.9 3.9 9.4	底部はやや扁平な丸底を呈し、腰をもつて外反する口縁部へと続く。	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含み褐色(5YR 7/6)を呈する。 焼成はあまり。
6 (完)	坏	11.0 4.4 10.1	底部はやや扁平な丸底を呈し、腰をもつて後直線的に外反する口縁部へと続く。	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含み褐色(5YR 7/6)を呈する。 焼成はあまり。
7 (完)	坏	12.5 4.4 10.6	底部は扁平な丸底を呈し、腰をもった後外反する口縁部となる。 ほぼ完形。彫刻のゆがみが顕著	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含み褐色(5YR 7/6)を呈する。 焼成はあまり。
8 (完)	坏	12.2 4.5 11.2	胴部と口縁部の境に明瞭な線を有し、口縁部はほぼ直線的に外反する。 底部は扁平な丸底となる。 完形	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含み褐色(5YR 7/6)を呈する。 焼成はあまり。
9 (出)	坏	< 13.1 > — < 11.5 >	胴部と口縁部の境に明瞭な線を有し、口縁部はほぼ直線的に外反する。 底部は扁平な丸底を呈するものと考えられる。	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 ヨコのヘラミガキ	胎土は砂粒を含み褐色(7.5YR 6/4)を呈する。 焼成はあまり。
10 (出)	高坏	— — < 13.1 >	胴部は直線的に下降した後、大きく広がる。	外面 胴体部は縦位のヘラミガキ 内面 胴部はヨコナデの後、若干のヨコヘラミガキ 底部は縦位のヘラケズリ 胴部は刷毛目状調整	胎土は砂粒を含み褐色(7.5YR 7/6)を呈する。
11 (出)	短頸壺 (須)	— — —	胴部は球状を呈し、底部は丸底を呈するものと思われるが、焼成時の扁平な境がつかいがあっている。小形の器形。 蓋部には短頸壺となるか。	外面 ココロヨコナデ、自然釉付着 内面 ココロヨコナデ、自然釉付着	胎土は精選されず砂粒を多く含む褐色(5Y 5/4)を呈する。
12 (完)	甌	16.2 11.2 5.5	器形は短頸壺を呈し、胴部が若干くびれる。9孔を有する底部は平底。 完形	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部および底部ヘラケズリ 内面 ナナメ・ヨコの刷毛目状調整	胎土は精選されず砂粒を多く含む褐色(5Y 4/5)を呈する。
13 (完)	甌	16.8 — —	胴部は短頸壺を呈し、口縁部は外反する。底部は焼成後の大きな穴がありあるいは底として用いられたか。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部縦位のヘラケズリ 内面 ヘラナデ(刷毛目状)	胎土は砂粒を多く含む褐色(7.5YR 7/6)を呈する。
14 (出)	甌	< 23.3 > < 21.9 > < 7.8 >	口縁部は弓なりに外反し、胴部はふくらむ。底部平底。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部は縦位のヘラミガキに若干のヨコヘラミガキ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目状調整	胎土は砂粒を多く含むぶい褐色(5YR 5/4)を呈する。
15 (出)	甌	< 25.2 > — —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部はふくらむ。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部は縦位のヘラケズリの後、まばらなヘラミガキ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヨコの刷毛目状調整	胎土は砂粒を含み褐色(7.5YR 7/6)を呈する。
16 (完)	甌	15.0 — —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目状調整	胎土は砂粒を多く含む褐色(5YR 7/4)を呈する。 焼成は良好ではない。
17 (出)	甌	(21.2) — 9.2	口縁部はゆるく外反し、胴部は球状を呈する。底部平底。	外面 口縁部および胴上半部ヘラミガキ 内面 胴下部ヘラケズリ 胴下部ヨコナデ、胴上半部ヨコヘラミガキ 胴下部刷毛目状調整	胎土は砂粒を含み明黄褐色を呈する。 (10YR 7/3)
18 (出)	甌 (須)	(22.8) — —	口縁部は強く外反し、胴部は球状を呈する。底部はやや扁平な丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴-底部ヘラケズリ 内面 胴部下に叩き目状の調整あり。 全体に細かな刷毛目状調整がなされる。	胎土は砂粒を含み灰白色(5Y 7/1)完全な産地不明の焼成となっていない。
19 (出)	甌 (須)	— — —	口縁部はゆるく外反する。	外面 口縁部には波状文が推され、胴部には叩き目があられる。 内面 当て其痕(平行文)が残る。	

るものの三者が認められた。

10は高環脚部で、坏部の形状は不明である。

11は、小形の須恵器短頸壺と考えられ、その底部には偏平な焼けつきがみられた。

12は甗で、底部には径5mm程度の穿孔が9個みられた。13は底の抜けた小形甗で、甗として再利用されたものかもしれない。

13~17は土師甗である。いずれも球胴を呈するもので、16は小形、15・17は大形で、14はそれらのほぼ中間の器形を呈している。

18は、完全な還元炎焼成となっていない土師質の須恵器甗で、外反する口縁部と球状の胴部をみせている。底部近くには叩き目も観察される。

この他、口縁部に波状文が施こされ胴部に叩き目がみられる須恵器甗がある(19)。

20は、流紋岩の砥石で、四面とも研砥に供されているものである。このうち二面には線状の研砥痕も顕著に観察される。なお、本石器は火熱を被って、一部黒色化している。

時期

本住居址は、古墳時代後期、前田遺跡第III期に位置付けられよう。

(85) H-85号住居址

遺構 第259図

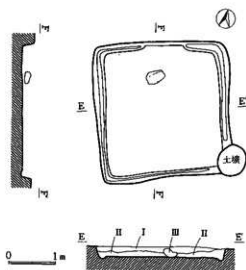
H-85号住居址は、第II区シー-23グリッドにおいて検出された。その南東コーナーはD-18号土壌によって切られる。

本住居址は、南北2.9m東西2.9mの小形の隅丸方形を呈し、床面積7.3m²を測り、南北軸方向はN-19°-Wを指す。壁高は20~25cmを測る。壁溝は深さ5cm程度のものが、北壁中央を除いてほぼ全周する。柱穴等ピットはまったく検出されなかった。

住居址覆土は3層に分層された。I層はバミスをよく含みローム粒子を少量含む黒褐色土層、II層はバミスを少量含む黒色土

第116表 H-84号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

図番	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
20	砥石	砂岩	14.5	4.7	5.1	460	



第259図 H-85号住居址実測図(1:80)

第II表 H-85号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 査 整	備 考
1 (完)	甕	21.5 — —	口縁部は弱く「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナゲの後、側部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナゲ、側部ヘラナゲ	胎土はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。

層、Ⅲ層はカマドより流出したと考えられる灰層であった。遺物はいずれも覆土中から検出されている。

カマドは、その痕跡をとどめなかったが、おそらく北壁中央に存在していたものと考えられる。

北壁寄りに礫がみられる事、覆土中に灰の堆積がみられる事、北壁中央のみにおいて壁溝が切れる事などもカマドの存在を傍証している。



0 10cm

第260図 H-85号住居址出土遺物(1:4)

遺物 第260図

本住居址より検出された遺物はきわめて少なく、須恵器数片と土師器甕のみであった。須恵器片には、蓋・坏・甕の各器種がみられたがいずれも図示するには至らなかった。

1は土師器甕で、「コ」の字状に外反する口縁部をみせている。

時期

本住居址は、その規模・構造、僅かな出土遺物、他の住居址との関連性等から、奈良・平安時代、前田遺跡第七期に位置付けられようか。

(86) H-86号住居址

遺構 第261・262図

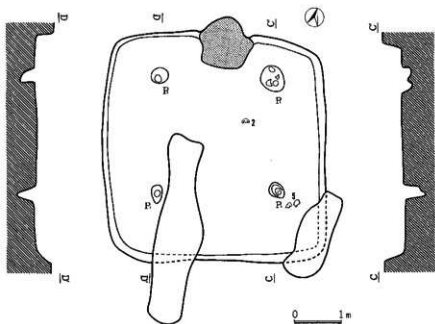
H-86号住居址は、第II区ソ-23グリッドにおいて検出された。その一部は、溝状遺構とD-47号土壌とによって攪乱を受けている。

本住居址は、南北4.9m東西4.75mの隅丸方形を呈し、床面積7.3㎡を測り、主軸方向N-25°-Wを指す。壁高は30~45cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P₁~P₄の4個が検出された。P₁は60cm×50cm深さ20cm、P₂は40cm×30cm深さ30cm、P₃は40cm×25cm深さ40cm、P₄は35cm×30cm深さ40cmを測るものであった。いずれのピットも比較的浅いものといえる。

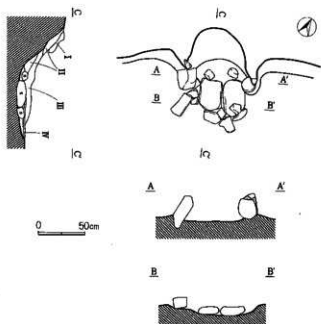
遺物は、2の須恵器坏が床面より20cm浮いて、5の坏の破片がP₄の脇の床面上より検出されている。この他は、いずれも覆土中からの出土遺物である。

覆土はI層のみで、バミス・ローム粒子をよく含む黒褐色土層であった。

1 竪穴住居址



第25図 H-86号住居址実測図 (1:80)



第26図 H-86号住居址カマド実測図 (1:40)

カマドは、北壁中央に存在している。東西両袖の奥の部分はそのまゝ残るものの、それ以外の部分はずでに破壊され、その構材であった面取り軽石は整然と火床部に置かれていた。なお、本カマドの石材にはすべて面取り軽石が用いられていた。プライマリーな地積ではないが、カマド使用に関連すると考えられる土層地積は4層に分層された。I層は多量の灰と若干の焼土を含む黄褐色土層、II層は多量の焼土・カーボンを含む黒褐色土層、III層は若干の焼土・カーボンを含む灰層、IV層は多量のカーボンを含む黒色土層であった。

遺物 第263図

本住居址より検出された遺物には、手捏土器、須恵器環、土師器皿・甕がある。

1は手捏土器の底部で、カマド中から出土したものである。

2～4は須恵器環で、2は回転ヘラケズリ、3・4は手持ちヘラケズリによる底部をみせている。三者とも切り離し方法は判明しなかった。

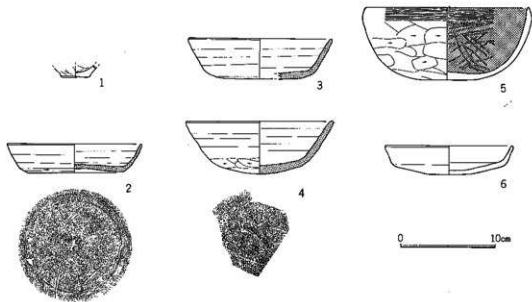
5は、半球状を呈する土師器環で内面黒色研磨のなされるものである。

6は、偏平な土師器の皿である。

この他、図示し得なかったが「く」の字状に外反する口縁部をみせる土師器甕破片が検出されている。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。



第263図 H-86号住居址出土遺物(1:4)

第111表 H-86号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

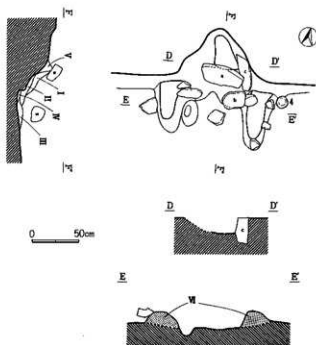
発掘番号	器種	数量	器形の特徴	調査	備考
1 (完)	手捏	— — 3.1	手捏土器	外面 ナデ 内面 ナデ	胎土はぶい黄褐色(0YR7/3)を呈する。
2 (完)	杯 (須)	14.4 3.1 10.2	底の浅い碗状の器形を呈する。 ほぼ完形。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ、若干自然動付着 (ロクロ石回転)	胎土は砂粒を含み灰色(N6/0)を呈する。
3 (碎)	杯 (須)	15.4 4.3 8.0	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ 内面 底部は切り廻しの後、手持ちヘラケズリ (ロクロ石回転)	胎土は砂粒を含み灰色を呈する。 (10Y5/1) H-87・3と類似
4 (回)	杯 (須)	15.7 5.6 8.5	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナデ 内面 底部は切り廻しの後、手持ちヘラケズリ (ロクロ石回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色(5Y8/2)
5 (完)	埴	17.4 7.7 —	体部は丸味をおびて外湾したのち、口唇部でやや内湾する。底部は扁平な丸底。	外面 口縁部ヘラミガキ、底部~体部ヘラケズリ 内面 黒色研削	胎土は砂粒を含み淡黄色(2.5Y8/4)を呈する。
6 (回)	皿	14.4 3.1 10.2	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 口縁部ヨコナデ、底部は割落が激しく調査不明 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含みぶい黄褐色(0YR7/4)焼成は良好でない。

(87) H-87号住居址

遺物 第264・265図

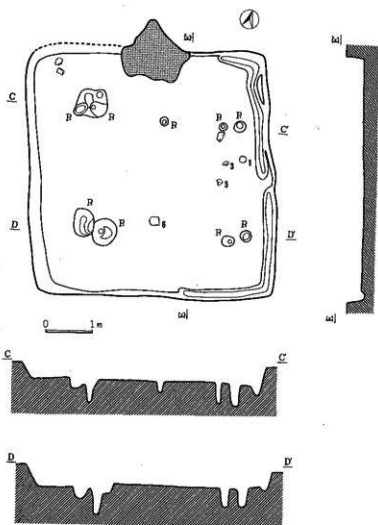
H-87号住居址は、第II区タ-23グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北5.3m東西5.2mの隅丸方形を呈し、床面積24.3m²を測り、主軸方向はN-28°-Wを指す。壁高は30~50cmを測る。壁溝は北東コーナーより東壁・南東コーナーへと回っている。柱穴は、P₁~P₄の8個が検出されている。それぞれ各区に2個づつが並んで配されている。また、P₅も柱穴と考えられるが



第264図 H-87号住居址カマド突測図(1:40)

IV 遺構と遺物



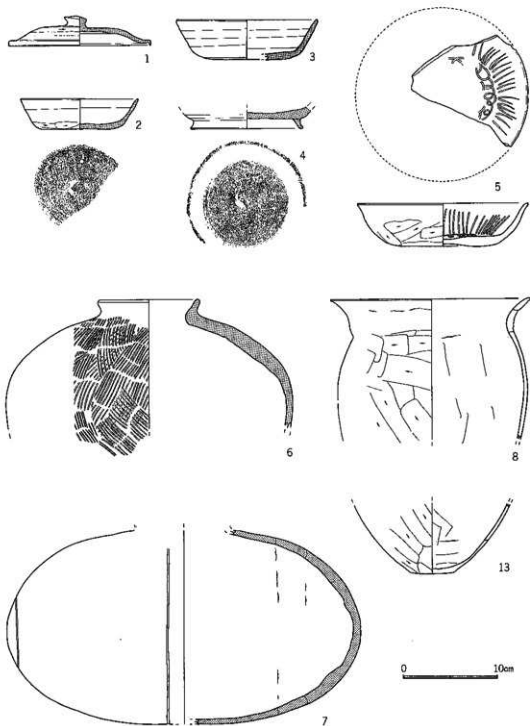
第266図 H-87号住居址実測図 (1:80)

もしれない。P₁は25cm×22cm深さ45cm、P₂は28cm×17cm深さ40cm、P₃は65cm×50cm深さ48cm、P₄は32cm×22cm深さ20cm、P₅は60cm×50cm深さ68cm、P₆は60cm×40cm深さ25cm、P₇は30cm×23cm深さ40cm、P₈は25cm×23cm深さ40cmを測る。このうち、P₄・P₆は他に比べやや浅いピットといえる。また、P₈は20cm×18cm深さ22cmを測る。

住居址覆土はI層のみで、バミス・ローム粒子をよく含む黒褐色土層であった。

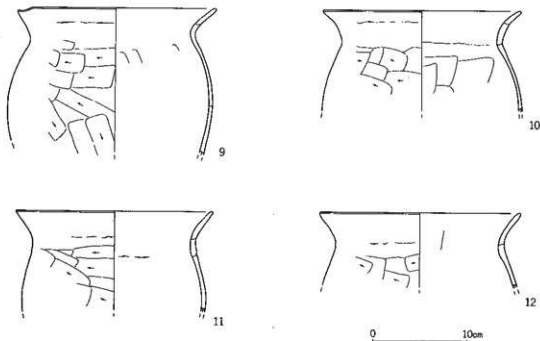
遺物は、1の蓋・3・4の環が東壁際の床面上よりまとまって検出され、6の横瓶は住居中央の床面上10cmの位置から検出された。また、4の環はカマド東袖脇からの出土である。これ以外

1 野穴住居址



第266图 H-87号住居址出土遺物(1:4)

IV 遺構と遺物



第25図 H-87号住居址出土遺物 (1:4)

の遺物は、いずれも覆土中から検出されている。

カマドは、北壁中央に存在し、すでに半壊状態にあったが、天井石の一部と両側の袖の一部をとどめておいた。天井石と考えられるものは図中 a・b で、面取りされた軽石である。また、b も面取りされた軽石の袖石である。袖部はこうした石材の他、赤褐色粘土 (IV層) 等も用いて構築されている。カマド使用にかかわると考えられる堆積は5層認められた。I層は焼土粒子を含む暗褐色土層、II層は若干の焼土粒子を含む黒褐色土層、三層が赤褐色の焼土層、IV層はカーボンを含む暗黄色土層、V層は黄色土層であった。

遺物 第266・267図

本住居址から検出された遺物には、須恵器では蓋・坏・横瓶、土師器では坏・甕がある。

1は完形の須恵器蓋で、ボタン状のつまみ部を有している。

2・3は須恵器坏で、回転ヘラキリの後手持ちヘラケズリのなされる底部をみせるものである。

また、4は高台付坏で、回転ヘラケズリによる底部をみせている。

5は、土師器坏で内面体部に放射状暗文、見込み部にラセン状暗文が施こされている。

6・7は須恵器の横瓶である。6は短く外反する口縁部をみせ、7は口縁部を失う。6は胴部に叩き目がみられるが、7はロクロヨコナデのまま未調整である。

8～12は、「く」の字状に外反する口縁部をみせる土師器甕で、13はその底部と考えられる。

1 堅穴住居址

第119表 H-87号住居址出土遺物一覽表(土器)

検出 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	甕 (瓿)	2.4 3.1 15.1	つまみ部はやや歪んだボタン状を呈する。 完形	外面 ロクロココナデの後、胴部回転ヘラケズリ 内面 ロクロココナデ (ロクロ石回転)	胎土は砂粒を含み 灰色を呈する。 (10Y5/1)
2 (完)	杯 (瓿)	(12.0) 3.2 8.6	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロココナデ、 底部回転ヘラケズリの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロココナデ (ロクロ石回転)	胎土は砂粒を含み 灰白色 (5Y7/2) を呈する。
3 (同)	杯 (瓿)	(15.4) 4.3 (8.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロココナデ、 底部回転ヘラケズリの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロココナデ (ロクロ石回転)	胎土は砂粒を含み 灰白色 (10Y5/1)を呈する。 H-85-3と接合
4 (完)	杯 (瓿)	- 12.0	底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロココナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロココナデ (ロクロ石回転)	胎土は砂粒を含み 灰白色 (N7/0) を呈する。
5 (同)	杯	(18.1) 4.0 (12.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 口縁部ココナデ、体部～底部ヘラケズリ 内面 体部はココナデの後、放射状増文が施される。 底部はラモン状の増文が施される。	胎土は赤褐色の 粒子を特徴的に 含み褐色 (7.5YR7/6)
6 (同)	横瓶 (瓿)	(10.8) -	胴部はつぶれた球状にふくらみ、口縁部 は短く外反する。	外面 口縁部ココナデ、胴部には明きがなされる。 内面 一部ココナデ、当て具痕が一部みられる。	胎土は緑灰色を 呈する。 (10Y6/1)
7 (同)	横瓶 (瓿)	-	胴部はカエル形を呈する。	外面 ココナデの後、胴位の沈線が二条施される。 内面 ココナデ	胎土は砂粒を含み 灰白色 (N7/0)を呈する。
8 (完)	甕	21.2 -	口縁部は深く「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ココナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ココナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は濃い褐色 (10YR7/4)を 呈する。
9 (完)	甕	(21.1) -	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は ややふくらむ。	外面 口縁部ココナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ココナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は褐色を呈 する。 (7.5YR6/6)
10 (同)	甕	(21.0) -	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ココナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ココナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は暗赤褐色 を呈する。 (5YR3/4)
11 (同)	甕	(20.9) -	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ココナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ココナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は明赤褐色 (5YR5/6) を呈する。
12 (同)	甕	(21.3) -	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ココナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ココナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は濃い褐色 を呈する。 (7.5YR6/4)
13 (同)	甕	- 4.8	底部平底。	外面 胴部ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	胎土は濃い褐色 を呈する。 (7.5YR7/4)

なお、本住居址において石器・鉄器等は認められなかった。

時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

(88) H-88号住居址

遺 構 第268・269図

H-88号住居址は、第II区ター23グリッドにおいて検出された。

IV 遺構と遺物

本住居址は、南北2.8m東西3.6mの隅丸方形を呈し、床面積7.7㎡を測り、主軸方向はN-20°-Wを指す。壁高は20~30cmを測り、壁溝は認められない。ピットは、主柱穴は認められず、南壁際にテラスを有するP₁がみられるのみであった。P₁は75cm×30cm深さ40cmを測る。

覆土はI層のみで、バミス・ローム粒子をよく含む黒褐色土層であった。

遺物は、1の環がカマド中より検出された以外は、いずれも覆土中からの出土であった。

カマドは、北壁中央において検出されたが、すでに壊滅状態にあった。その軸にあたる部分には袖石の抜き取り痕と考えられるピットが東西各1個ずつ検出されている。カマド使用に関連すると考えられる土層堆積は2層認められた。I層が多量の灰と若干の焼土・カーボンを含む灰色土層、II層は赤褐色の焼土層であった。

遺物 第270図

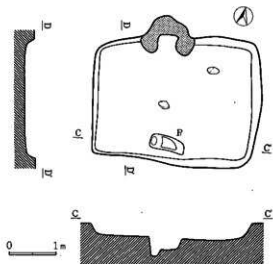
本住居址より検出された遺物は、須恵器環1点と土師器甕破片8点のみであった。

1は須恵器環で、底部は切り離しの後全面に手持ちヘラケズリがなされている。

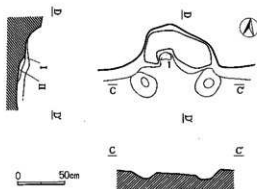
土師器甕破片は図示し得なかったが、「く」の字状に外反する口縁部破片が認められた。

時期

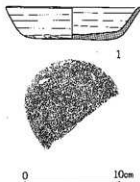
本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。



第268図 H-88号住居址実測図 (1:80)



第269図 H-88号住居址カマド実測図 (1:40)



第270図 H-88号住居址出土遺物 (1:4)

第126表 H-88号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

発見 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	環 (須)	(14.3) 3.4 (10.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ 底部廻転ヘラネリの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右廻転)	胎土は砂粒を含み 灰色(5% \sim 1%) を呈する。内外 面に火跡あり。

(89) H-89号住居址

遺 構 第271・272図

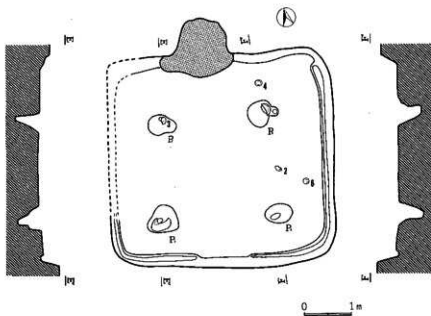
H-89号住居址は、第II区タ-23グリッドにおいて検出された。その西壁の大部分は小河川によって攪乱されている。

本住居址は、南北4.55m東西4.8mの隅丸方形を呈し、推定床面積18.5 m^2 を測り、主軸方向N-15°-Eを指す。壁高は20-40cmを測る。壁溝は、北壁・南壁中央・西壁の攪乱部分を除き認められる。主柱穴は、P₁~P₄の4個が認められた。P₁は55cm×50cm深さ50cm、P₂は60cm×45cm深さ50cm、P₃は70cm×60cm深さ45cm、P₄は60cm×40cm深さ50cmを測る。

住居址覆土は1層のみで、小粒バミス・ローム粒子をよく含む黒色土層であった。

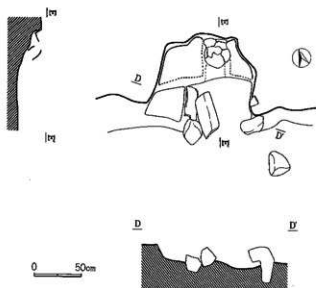
遺物は、4の環がP₁北の床面直上より正常位で、3の環がP₂中より、2・6の環が東壁際の床面より15cmほど浮いて検出された。これ以外はいずれも覆土中からの出土である。

カマドは、北壁中央において検出されたが、すでに破壊されているものであった。西袖は畳ま



第271図 H-89号住居址実測図(1:80)

IV 遺構と遺物



第77図 H-89号住居址カマド実測図 (1:40)

れその構材である面取り軽石3個はその場に置かれていた。東側の袖石1個は据えられたままで、「」状に面取りされた軽石であった。煙道部には、底の抜かれた土師器甕が煙筒として用いられており興味深い事例といえる。

遺物 第273図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では蓋・環、土師器では甕がある。

1は非常に小形の須恵器蓋で、つまみ部は宝珠形を呈している。

2～4は須恵器環で、2は回転ヘラキリ・3は回転糸切り・4は回転糸切りの後回転ヘラケズリのなされた底部をみせている。4は高台付環である。

5・6は、ロク口整形による土師器環で、内面黒色研磨のなされたものである。5は底部の調整不明、6は底部全面に手持ちヘラケズリがなされており、切り磨し方法は不明である。

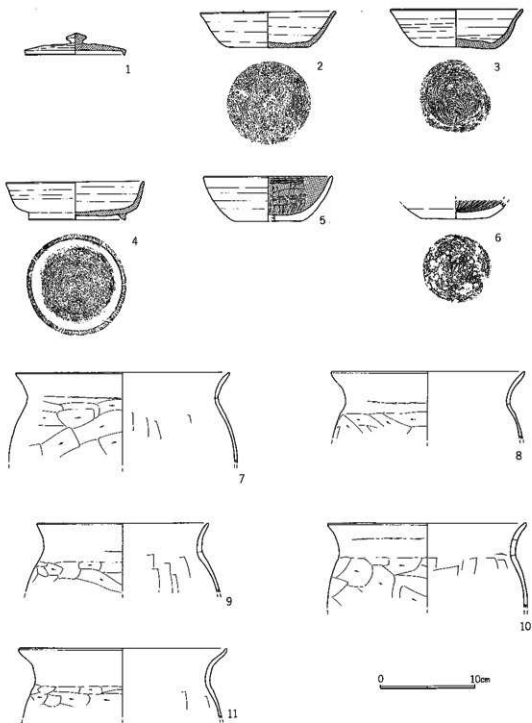
7～11は土師器甕で、7は「く」の字状、8～11は弱く「コ」の字状に外反する口縁部をみせるものである。

この他石器・鉄器類は検出されていない。

時期

本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。

1 觀穴住居址



第273圖 H-89号住居址出土遺物 (1:4)

第121表 H-89号住居址出土遺物一覧表(土器)

発掘番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 査	備 考
1 (回)	蓋 (須)	2.1 2.3 (10.7)	つまみ部が宝珠形を呈する小形の器形	外面 ロクロコナダの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(N5/0)を呈する。
2 (完)	杯 (須)	14.5 3.8 9.0	体部は外反し、底部平底。 ほぼ完形	外面 体部ロクロコナダ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み 灰褐色(7.0YR 5/6)を呈する。 内面に火傷きあり。
3 (完)	杯 (須)	14.1 4.0 8.0	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナダ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は粘質を多く含み 砂粒を多く含み、灰白色(5Y7/2)を呈する。
4 (完)	杯 (須)	(14.7) 4.0 10.4	底部には高合が貼り付けられる。	外面 体部ロクロコナダ、底部回転糸切りの後、回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は粘質を多く含み 灰色(7.5YR 6/4)を呈する。
5 (回)	杯	(13.8) 4.8 (7.2)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナダ、底部調整不明 内面 黒色硬磨 (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み 灰色(7.0YR 6/3)を呈する。
6 (完)	杯	- 7.2	底部平底。	外面 体部ロクロコナダ、底部は切り履しの後、手持ちヘラケズリ 内面 黒色硬磨 (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を多く含み 灰色(7.5YR 7/3)を呈する。
7 (回)	甕	(22.7) -	口縁は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部コナダの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナダ、胴部ヘラケズリ	胎土は明赤褐色を呈する(5YR 5/6)上 外縁にはすずか職書に付着する。
8 (回)	甕	(20.5) -	口縁部は弱く「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部コナダの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナダ、胴部ヘラケズリ	胎土は赤褐色を呈する。 (5YR 4/6)
9 (回)	甕	(18.2) -	口縁部は弱く「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部コナダの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナダ、胴部ヘラケズリ	胎土は明赤褐色を呈する。 (5YR 5/6)
10 (回)	甕	(21.1) -	口縁部は弱く「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部コナダの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナダ、胴部ヘラケズリ	胎土は褐色を呈する。 (5YR 6/6)
11 (回)	甕	(22.1) -	口縁部は弱く「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部コナダの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナダ、胴部ヘラケズリ	胎土は褐色を呈する。 (5YR 6/6)

(90) H-90号住居址

遺 構 第274図

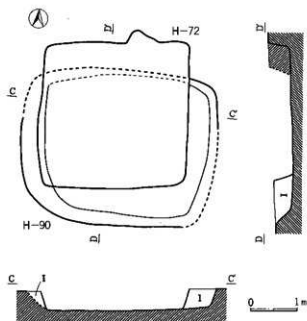
H-90号住居址は、第II区シー-25グリッドにおいて検出された。その大部分はH-72号住居址に切られ、またH-71号住居址を切って存在している。

本住居址の推定される規模は、南北3.1m東西4.1mで、床面積9.4㎡となろう。南北軸方向はN-8°-Wを指す。生きている部分の壁高は40cmを測り、壁溝は持たないものと考えられる。また、柱穴等のピットは認められなかった。

残存する住居址覆土は、小石・バミスを含む黒褐色土層I層のみであった。

カマドの存否は、大方のカマドの位置である北壁中央部が、H-72号住居址によって破壊されているため確認できなかった。

遺 物



第74図 H-90号住居址実測図 (1:80)

本住居址は残っている部分が僅かなため、遺物はまったく検出されなかった。

時期

本住居址は、遺物がまったくみられないため、その規模・構造と切り合い関係、他との関連分から時期を求める他はない。とりあえずは、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けておくのが、妥当といえよう。

(91) H-91号住居址

遺構 第275・276図

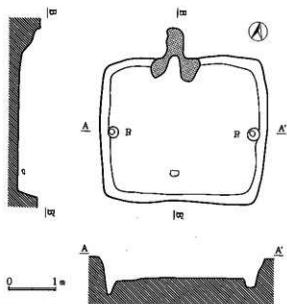
H-91号住居址は、第II区セー25グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.15m東西3.6mの隅丸方形を呈し、床面積8.3㎡を測り、主軸方向N-17°-Wを指す。壁高は40~50cmを測り、壁溝は認められない。支柱穴は、東西両壁の中央に各1個ずつ配されている(P₁・P₂)。P₁は25cm×25cm深さ20cm、P₂は25cm×25cm深さ30cmを測る。

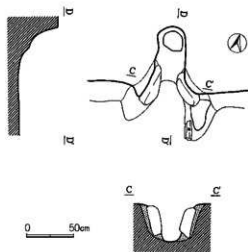
覆土はI層のみで、バミス・ローム粒子をよく含む黒褐色土層であった。遺物はいずれも覆土中から出土している。

カマドは、北壁中央に位置するが、すでに壊滅状態にあり、本体奥部の東西両壁の面取り軽石

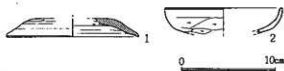
IV 遺構と遺物



第275図 H-91号住居址実測図 (1:80)



第276図 H-91号住居址カマド実測図 (1:40)



第277図 H-91号住居址出土遺物 (1:4)

第172表 H-91号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出番号	器種	法線	器形の特徵	調査	備考
1 (四)	甕 (須)	— (14.0)		外面 ロクロヨコナデの後、天井側回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色 (7.5Y7/1)
2 (皿)	杯	(12.5) —	体部は丸味をおびて外反する。	外面 L線部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含み褐色(5YR6/5)を呈する。

と、暗褐色の粘土を構材とした東側の袖のごく一部をとどめるにすぎなかった。また、東側の袖部分には角柱状に面取りされた軽石の支脚(a)が放置されていた。煙道は細長く60cm程度外へ延びていた。

遺物 第277図

本住居址より検出された遺物はごく僅かで、須恵器蓋、土師器杯・甕の破片のみであった。

1は須恵器蓋で、つまみ部の形状は不明である。

2は体部が丸味を帯びて外反する土師器杯である。

この他、図示し得なかったが、口縁部が弱く「コ」の字状に外反する土師器甕破片もみられた。なお、本住居の構造や土師器の「コ」の字状口縁の甕の出土からいって、2の杯の形態はやや古く、これは本住居址に伴う遺物ではないかもしれない。

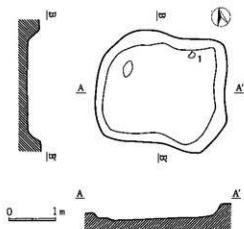
時期

本住居址は、伴出遺物が少ないため時期決定が困難であるが、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期の所産と考えておきたい。

(92) H-92号住居址

遺構 第278図

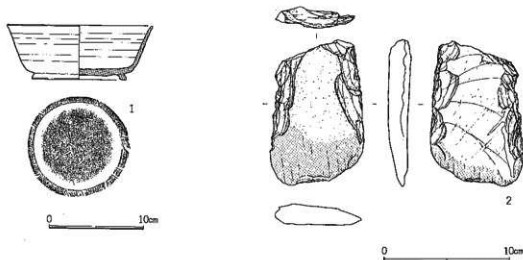
H-92号住居址は、第II区ター23グリッドにおいて検出された。本址がカマドをもたない小形の竪穴であることから、その性格がまず住居址であるかどうか問題となろうが、消費生活の単位といわれているカマドをもつ住居址自体でも本例と変わらない小形なものも存在するため、ここでは一律に住居址という名称を用いることにした。



第278図 H-92号住居址実測図(1:80)

第123表 H-92号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

発見番号	器種	法庫	器形の特徴	調 整	備 考
1 (個)	坏 (須)	<16.5> 5.8 10.1	高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切りの後、回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み、みぶい赤褐色を呈する。 (5 Y R 6 / 3)



第279図 H-92号住居址出土遺物 (1 = 1 : 4, 2 = 1 : 3)

その機能的な問題については、後に言及することにしたい。

本址は、南北2.4m東西2.8mのやや歪

んだ隅丸方形を呈し、床面積4.2㎡を測り、南北軸方向はN-15°-Eを指す。壁高は15~30cmを測り、壁溝は認められない。また柱穴等のピットも認められなかった。

カマドは認められなかったが、北西コーナーより灰のブロックが検出されている(網点)。

遺物は、北東コーナーの床面上より1の坏が正常位で検出されている。それ以外の遺物は、いずれも覆土中より検出されたものである。

遺物 第279図

本住居址より検出された遺物は僅かで、須恵器坏、土師器甕の破片のみみられるのみであった。

1は須恵器高台付坏で、回転糸切りの後回転ヘラケズリのなされた底部をみせている。

土師器甕は図示し得なかったが、僅か「コ」の字状に外反する口縁部破片も見出せた。

石器では2の打製石斧が検出されている。玄武岩質安山岩の板状礫の両側縁を加工したもので、先端部両面には顕著な磨耗が認められる。基部を古く欠損する。

時期

第124表 H-92号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

発見番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
2	打製石斧	玄武岩質安山岩	10.6	7.5	1.6	(180)	

本住居址は、僅かな出土遺物の特徴・その構造等より、奈良・平安時代、前田遺跡第Ⅶ期の所産と捉えておこう。

(93) H-93号住居址

遺構 第280・281図

H-93号住居址は、第Ⅱ区ター22グリッドにおいて検出された。その南東コーナーは、H-94号住居址の北西コーナーを切つて存在する。また、その西壁の一部は擾乱を受けている。

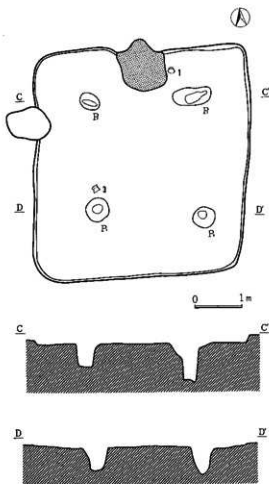
本住居址は、南北4.9m東西4.5mの隅丸方形を呈し、床面積20.5㎡を測り、主軸方向はN-6°-Wを指す。壁高は10-20cmを測るのみで、壁溝は認められない。主柱穴は、P₁~P₄の4個が検出された。P₁は80cm×40cm深さ80cm、P₂は45cm×30cm深さ50cm、P₃は50cm×50cm深さ50cm、P₄は50cm×45cm深さ55cmを測る。

住居址覆土はⅠ層のみで、バミスを若干含む黒色土層であった。

遺物は、P₃の脇より3の土師器甕の破片が、カマド東脇の床面上より1の土師器坏が正常位で検出されている。これ以外は、いずれも覆土中から検出されたものである。

カマドは、北壁中央に存在するが、その大半は破壊されており、僅かに東西両袖の一部をとどめているにすぎなかった。その火床部は一旦掘り込まれた後、ロームを含む黒色土層(Ⅲ層)で埋め戻されていた。カマド覆土は、2層に分層された。Ⅰ層は灰ブロック・若干のカーボンを含む黒色土層、Ⅱ層は多量の焼土・若干の灰・カーボンを含む褐色土層であった。

遺物 第282図



第280図 H-93号住居址実測図(1:80)

IV 遺構と遺物

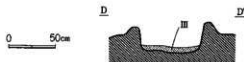
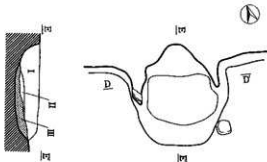
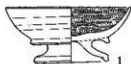
本住居址より検出された遺物は、土師器のみであった。

1は、内面黒色研磨のなされた土師器高坏で、坏部に高台が付された後脚台部が貼り付けられるという特異な器形を呈している。本例と同様な器種は、須恵器ではあるが千葉県山田水呑遺跡（山田水呑遺跡発掘調査団 1977）の79号住居址出土遺物等に散見される。仏具等の模倣形態であろうか。

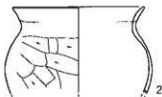
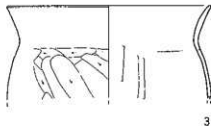
2・3は土師器甕で、2は小形で胴部が珠状を呈するもの、3は「く」の字状に外反する口縁部をみせるものである。

この他、石器・鉄器類は本住居址より検出されていない。

時期



第281図 H-93号住居址カマド実測図 (1 : 40)



第282図 H-93号住居址出土遺物 (1 : 4)

第283表 H-93号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (完)	高坏	13.3 5.9 7.8	底部には高台が貼り付けられた後さらに「八」の字状の脚部が付けられる。特殊な器形。	外面 ロクロヨコナデ 内面 黒色研磨 (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み黄褐色 (10YR5/4) を呈する。
2 (画)	甕	(13.9) —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部はやや丸腰をおびる。小形の器形	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色 (5YR4/6) を呈する。
3 (画)	甕	(26.1) —	口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は濃い黄色を呈する。 (7.5YR7/4)

本住居址においては時期決定の積極的根拠となる遺物はみられないが、奈良時代、前田遺跡第VI期の所産と考えておきたい。

(94) H-94号住居址

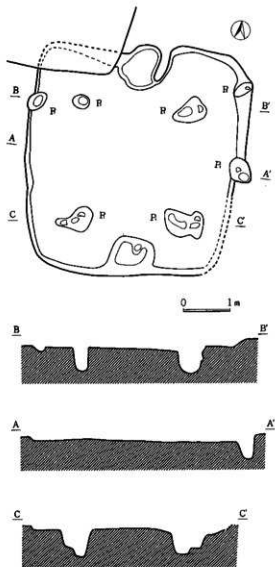
遺構 第283図

H-94号住居址は、第II区ター-22グリッドにおいて検出された。その北西コーナーとカマドの一部は、H-93号住居址によって破壊されている。

本住居址は、南北4.9m東西4.7mの隅丸方形を呈し、床面積20.5㎡を測り、主軸方向はN-11°-Wを指す。壁高は2~12cmを測るのみで、特に西壁部分はほとんど残っていない。また、壁溝は認められなかった。主柱穴は、P₁~P₄の4個が認められた。この他、壁中にP₅~P₇の3個が認められた。また、南壁際中央は95cm×70cmの楕円形の浅い掘り込みとなっていた。P₁は75cm×50cm深さ60cm、P₂は35cm×30cm深さ50cm、P₃は80cm×45cm深さ60cm、P₄は80cm×55cm深さ45cm、P₅は60cm×45cm深さ45cm、P₆は45cm×20cm、P₇は48cm×30cm深さ10cmを測る。

覆土はI層のみで、バミス・ローム粒子を若干含む黒色土層であった。遺物はいずれも覆土中から出土したものである。

カマドは、北壁中央にみられたが、すでに壊滅しており、僅かに

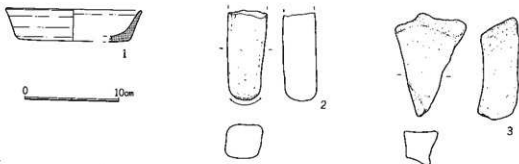


第283図 H-94号住居址実測図(1:80)

IV 遺構と遺物

第176表 H-94号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出番号	器種	注量	器形の特徴	調査	備考
1 (出)	坏 (須)	<14.6> 3.4 <12.3>	体部は外反し、底部平截。	外面 体部ロクヨコナデ、底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクヨコナデ (ロクヨコナデ)	粘土は砂粒を含み灰色 (N6/0)



第284図 H-94号住居址出土遺物 (1:4)

東袖部分に相当すると考えられる部分のローム(地山)の盛り上がり認められたにすぎなかった。

遺物 第284図

遺物は、土師器坏・甕の破片若干と、須恵器坏の破片二点が検出されたにすぎなかった。

1は須恵器坏で、手持ちヘラケズリの底部をみせるものである。おそらく、その形態から切り離し法は回転ヘラケリによるものと思われる。

土師器坏では、内面黒色研磨のなされた破片がみられた。また、土師器甕では器形を知り得る破片はみられなかった。

石器は、半欠する敲石(2)と、三角形を呈する自然礫の先端部を用いた敲石(3)の二点が検出された。

時期

本住居址は、僅かな出土遺物とその規模・構造、切り合い関係等から、奈良時代、前田遺跡第IV期の所産と考えておこう。

第177表 H-94号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
2	敲石	紫山岩	9.5	4.1	3.6	(205)	
3	〃	〃	10.9	7.4	4.0	295	

(95) H-95号住居址

遺構 第285図

H-95号住居址は、第II区ター21グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.2m東西3.1mの隅丸方形を呈し、床面積8.3㎡を測り、南北軸方向N-20°-Wを指す。壁高は20-30cmを測り、壁溝は認められない。ピットは、北壁寄りに18cm×16cm深さ15cmの小形なP₁のみみられたのみであった。

住居址覆土はI層のみで、若干のパミスとローム粒子を含む黒色土層であった。遺物はいずれも覆土中から出土している。

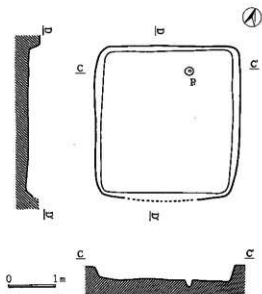
なお、本住居址においてカマドは存在していなかった。

遺物

本住居址からは、土師器甕の胴部破片8片が検出されたのみであり、これらは図示し得るに至らなかった。

時期

本住居址においては遺物が皆無に等しいため、その時期決定が困難である。しかし、他の住居址の位置付けから類推して、奈良-平安時代、前田遺跡第VII期の所産と考えて大過あるまい。



第285図 H-95号住居址実測図 (1:80)

(96) H-96号住居址

遺構 第286図

H-96号住居址は、第II区チ-21グリッドにおいて検出された。その上面の大部分は削平されており、北側のプランは捉えられなかった。

本住居址の推定規模は、南北3.9m東西4.1mの隅丸方形を呈し、床面積15.2㎡程度を測る。南北軸方向は、N-44°-Wを指す。ピットは、南東コーナーにP₁が、南西コーナー寄りにP₂・P₃の二個が認められた。P₁は40cm×40cm深さ38cm、P₂は40cm×40cm深さ20cm、P₃は50cm×40cm深さ17cmを測る。

住居址覆土はI層のみで、小粒パミスを若干含む黒色土層であった。

住居址中央には、60cm×50cmの卵形を呈する炉がみられ、薄く焼土の堆積が認められた。

遺物

本住居址においては、遺物はまったく検出されなかった。

時期

本住居址は出土遺物がないため時期決定が困難であるが、炉を有するその構造からすると、本遺跡においては古墳時代中期～後期か、あるいは古代末期から中世のいずれかの時期に位置づけられることになろうか。

(97) H-97号住居址

遺構 第287・288図

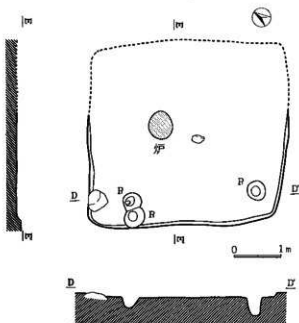
H-97号住居址は、第三区テ-24グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北5.0m東西

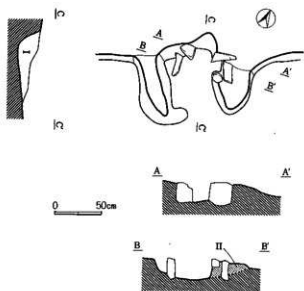
3.95mの隅丸方形を呈し、床面積15.2㎡を測り、主軸方向はN-36°-Wを指す。壁高は10~20cmを測るのみで、壁溝は認められない。なお、南壁東半分と南西コーナー部には、土中より巨大な自然礫が突出していた。これらは、当然住居使用時においても屋内にあったことになり、不都合さは感じられなかったであろうか。

本住居址においては、主柱穴はP₁~P₄の4個が認められた。P₁は55cm×45cm深さ30cm、P₂は70cm×60cm深さ35cm、P₃は50cm×45cm深さ35cm、P₄は55cm×55cm深さ30cmを測るものである。

住居址覆土は、1層のみで、パミス・小石をよく含む黒色土層であった。

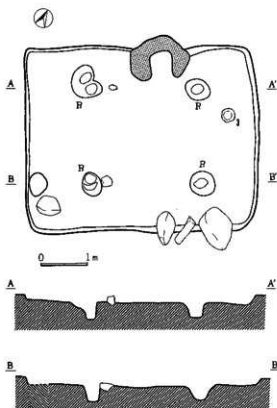


第286図 H-96号住居址実測図 (1:80)



第287図 H-97号住居址カマド実測図 (1:40)

1 壑穴住居址



第289図 H-97号住居址実測図 (1:80)

遺物は、P₁の胎の床面上に3の土師器甕の胴部上半以上が伏せられた状態で出土した。これ以外の遺物は、いずれも覆土中から出土したものである。

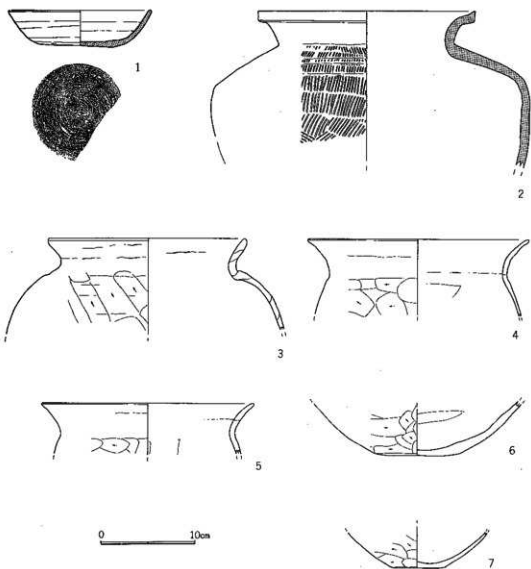
カマドは、北壁中央に存在するが、すでに半壊状態にあり、僅かに袖の一部と袖石をとどめるにすぎなかった。A-A'・B-B'の断面でみるように、袖石には面取り軽石が用いられ、さらにそれらに赤褐色の粘土層(II層)が貼られていた。カマド中の堆積土は、若干のカーボンを含む黒色土層であった。

遺物 第289図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では坏・甕・土師器では甕がある。

- 1は、回転ヘラケズリのなされた底部をみせる須恵器坏であるが、その切り離し方法は不明。
- 2は、肩の張る須恵器甕で、口唇部は帯状を呈している。
- 3は、土師器の球胴を呈する甕で、6がその底部になるものと思われる。胎土が精選されず、焼成もあまり良好でない。
- 4・5は土師器甕で、4は僅か「コ」の字状に外反する口縁部、5は「く」の字状に外反する

IV 遺構と遺物



第288図 H-97号住居址出土遺物 (1:4)

口縁部である。

この他、石器・鉄器類は検出されなかった。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

第128表 H-97号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

図号 番号	器種	法量	器形の特長	調 整	備 考
1 (完)	環 (須)	(15.7) 3.8 (8.2)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は切り履しの後、回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	粘土は砂粒を含み 灰白色(0Y7/1) を呈する。
2 (完)	甕 (須)	(23.1) — —	甕形は肩が張り、口縁部が帯状を呈する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部は叩きながされる。 内面 ヨコナデ	粘土は砂粒を含み 灰白色(0Y7/1) を呈する。
3 (完)	甕	(21.1) — —	口縁部は外反し、胴部は球胴を呈する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	粘土は精選されず 砂粒を多く含み、 褐色(7.5YR7/6) を呈する。 焼色は赤黒い。
4 (破)	甕	(23.4) — —	口縁部は僅か「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	粘土は淡黄色を 呈する。 (10YR 8/4)
5 (破)	甕	(23.1) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	粘土はにがい赤 褐色を呈する。 (5YR 5/4)
6 (破)	甕	— — (8.9)	底部平底。3と同一器体の底部と考えられる。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ、皮葉が付着する。	粘土は精選されず 砂粒を多く含み、 褐色を呈する (7.5YR 7/6) 焼色は赤黒い。
7 (破)	甕	(21.1) — —	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	粘土はにがい黄 色を呈する。 (5YR 6/4)

(98) H-98号住居址

遺 構 第290・291区

H-98号住居址は、第三区テ-24グリッドにおいて検出された。

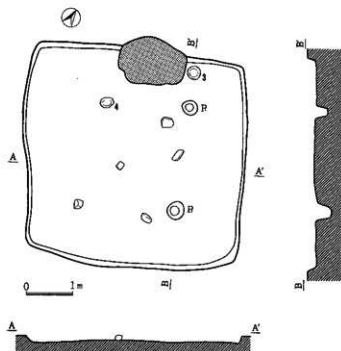
本住居址は、南北4.7m東西4.8mの隅丸方形を呈し、床面積17.6㎡を測り、主軸方向N-39°-Wを指す。壁高は15~20cmを測るのみで、壁構は認められない。主柱穴は、I区中央にP₁、IV区中央にP₂が検出され、当然これに対応するピットがII区・III区に存在すると考えられたが、床面は丹念に精査したにもかかわらず相当のピットは検出されなかった。P₁は35cm×30cm深さ25cm、P₂は40cm×35cm深さ30cmを測る。

住居址覆土は、I層のみで、小石・パミスをよく含む黒色土層であった。

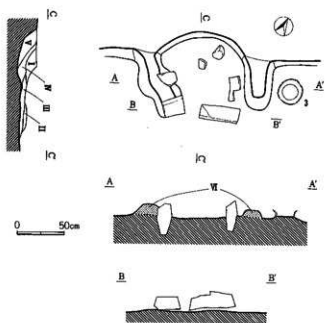
遺物は、H-48と同様須器大甕の口縁部3がカマドの東脇に残置されていた。また、4の土器甕口縁部がII区の床面上より検出された。これ以外の遺物はいずれも覆土中より検出されたものである。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに半壊状態にあり、袖の一部をとどめるのみであった。断面図をみると、A-A'では両袖に面取軽石と粘土(IV層)が用いられていることがわかる。また、B-B'の断面にみられる直方体の面取軽石二点は、焚口部の天井石であろうか。カマド使用に係る土層堆積は、5層に分層された。I層は多量の灰と若干の焼土を含む灰褐色土層、II層は多量の灰を含む灰色土層、III層は若干のカーボンを含む黒色土層、IV層は褐色の焼土層、V層は多量の焼土と若干のカーボンを含む褐色土層であった。

IV 遺構と遺物



第280図 H-98号住居址実測図 (1 : 80)



第281図 H-98号住居址カマド実測図 (1 : 40)

遺物 第292図

本住居址より検出された遺物は、須恵器には坏・甕、土師器には高坏・甕がある。

1は須恵器坏で、回転ヘラキリの後若干の手持ちヘラケズリのなされた底部をみせている。

2は、ロクロ整形による土師器で、大方の器形は知り得ないが、本例と同様なものは第Ⅰ区H-19号住居址にみられる。

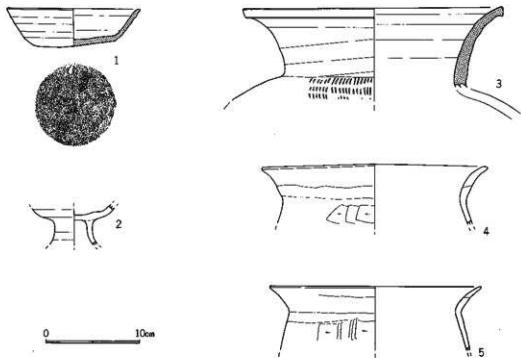
3は、須恵器甕の口縁部で、胴部以下の破片は住居址内にみられなかった。

4・5は土師器甕で、4は僅か「コ」の字状に外反する口縁部、5は「く」の字状に外反する口縁部である。

なお、本住居址において石器・鉄器等は検出されなかった。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第Ⅳ期の所産と考えておこう。



第292図 H-98号住居址出土遺物(1:4)

第194表 H-98号住居址出土遺物一覽表(土器)

標図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	圖 型	備 考
1 (完)	坏 (頂)	14.2 4.0 8.2	体部は外反し、底部平底。 完形、器形は歪む。	外面 体部ロクロコナデ、底部は回転ヘラケリの後、 若干の手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され ず砂粒を多く含 み明赤褐色 (5YR5/6)
2 (固)	高坏 —	— —	—	外面 ロクロコナデ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され ず砂粒を多く含 みにぶい黄褐色 07YR7/4を呈する。
3 (完)	壺 (頂)	27.8 —	口縁部は「八」の字状に外反し、口頸 部は帯状となる。	外面 ロクロコナデ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色 (10Y5/1)
4 (固)	壺 —	(24.1) —	口縁部は横か「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部コナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナデ、胴部ヘラケナデ	胎土はぶい黄 褐色を呈する。 (10YR7/4)
5 (固)	壺 —	(22.6) —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部コナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナデ、胴部ヘラケナデ	胎土は淡黄褐色 を呈する。 (10YR8/3)

(99) H-99号住居址

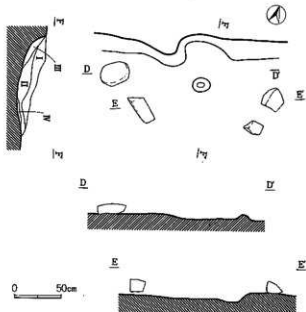
遺 構 第293・294図

H-99号住居址は、第Ⅲ区テ-24グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北5.4m東西5.4mの隅丸方形を呈し、床面積26.4㎡を測り、主軸方向はN-25°-Wを指す。壁高は15~25cmを測り、壁溝はP₆は部分を除きほぼ全周していた。主柱穴と考えられるビットは、P₁~P₄の4個が検出された。P₁は75cm×50cm深さ35cm、P₂は55cm×55cm深さ38cm、P₃は53cm×48cm深さ55cm、P₄は50cm×35cm深さ50cmを測る。また、南壁より中央からはP₅・P₆が検出されたが、P₆付近の壁はやや突出していた。P₅は40cm×35cm、P₆は14cm×12cmを測った。

住居址覆土はI層のみで、小石・パミスをよく含む黒色土層であった。遺物はいずれも覆土中より出土している。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに壊滅状態にあった。カマド付近には、その構材に用いられていたと考えられる石材がみられた。その西側には面取り軽石二点がその東側には安山岩礫二点がみられた。カマド使用の関連すると考えられる堆積は、プライマリーではないが4



第293図 H-99号住居址カマド実測図(1:40)

層に分層された。I層が灰と若干カーボン・焼土を含む灰色土層、II層が多量の炭化物を含む黒色土層、III層が若干の焼土を含む茶褐色土層、IV層は多量の灰と少量のカーボンを含む灰褐色土層であった。

遺物 第295図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では坏・甕、土師器では甕がある。

1・2は、回転ヘラケリの後若干の手持ちヘラケズリがなされた底部をみせるもので、1は須恵器坏、2は須恵器で器種は坏となるかどうかかわからない。

3は土師器小形丸底甕で、胎土は精選されず肉厚なものである。外面には息の長い縦長のヘラケズリが、内面には細かなミガキ状のヘラナデが観察される。

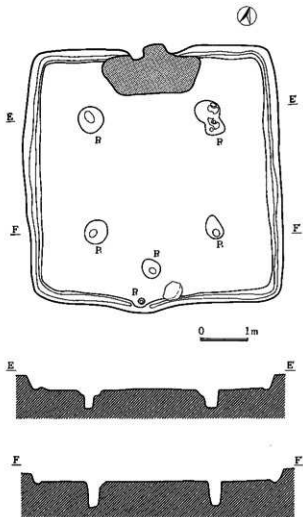
4・5は口縁部が「く」の字状に外反する薄手の土師器甕である。また、7は小形な土師器甕底部で、内面には細かな刷毛目状調整が観察される。

8と、土師器大甕で、須恵器の横放形態と考えられる。帯状の口唇から口縁部、ふくらみを持つ胴部へと続き、丸底と考えられる底部へと至る器形を呈する。

なお、本住居址においては、石器・鉄器等は検出されなかった。

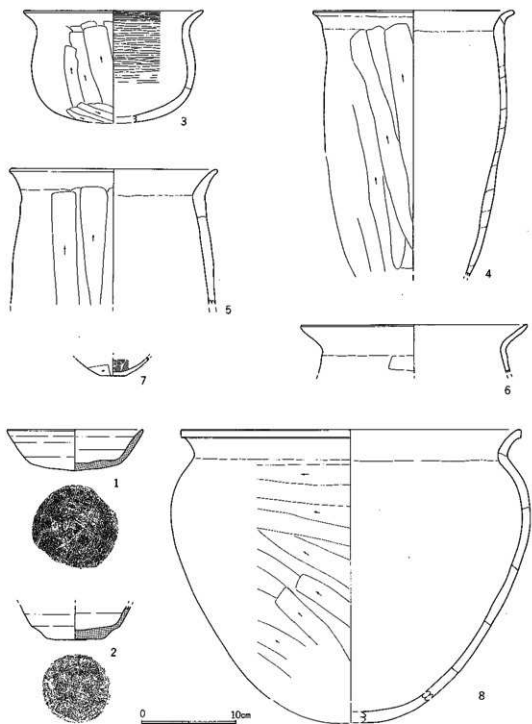
時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。



第294図 H-99号住居址実測図(1:80)

IV 遺構と遺物



第28図 H-99号住居址出土遺物 (1:4)

第130表 H-99号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	面 整	備 考
1 (回)	坏 (須)	(14.6) 4.4 9.6	体部は外反し、底面はやや丸味をおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリの後、 若干手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	粘土は砂粒を含みによい褐色(7.5YR5/4)を呈する。
2 (回)	坏? (須)	- 5.0	底部平底。 あるいは坏とは異なる器種かもしれない。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラケリの後、 若干の手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	粘土は砂粒を含み灰白色(2.5Y7/1)を呈する。
3 (回)	甕	(19.1) (12.0) -	小形で丸底の器形を呈し、口縁部は外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 細い単位のヨコヘラナデ(ヘラミガキ状)	粘土は精選されず砂粒を多く含み、灰白色(7.5YR5/4)を呈する。 粘土は精選されずによい褐色を呈する。 (7.5YR7/4)
4 (完)	甕	21.3 -	口縁部は短く外反し、胴部は長く直線的に下降する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部縦位のヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	粘土は褐色を呈する。 (7.5YR7/4)
5 (回)	甕	(22.1) -	口縁部は外反し、胴部は直線的に下降する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部縦位のヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	粘土は精選されず砂粒を多く含み、灰白色(7.5YR5/4)を呈する。焼成は不図である。
6 (回)	甕	(24.1) -	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	粘土は褐色を呈する。 (5YR6/6)
7 (回)	甕	- (2.5)	底部平底の小形な器形	外面 ヘラケズリ 内面 細かな駒毛目状調整	粘土は精選されず砂粒を多く含み、灰白色(7.5YR5/4)を呈する。焼成不図。
8 (回)	甕	(38.2) (36.4) -	口縁部は外反し、胴部はふくらみもち丸底と考えられる底部に至る。 器形は須磨産大甕の模倣によるものと思われる。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	粘土はよい褐色(7.5YR7/4)を呈する。

(100) H-100号住居址

遺 構 第296・297図

H-100号住居址は、第Ⅲ区テ-24・25グリッドにおいて検出されたが、その床面近くが確認されたにすぎない。

本住居址の推定プランは、南北3.4m東西3.2mの隅九方形を呈し、床面積は10.8㎡程度を測るものと考えられる。主軸方向は、N-27°-Wを指す。柱穴等を含むピットは、一切認められない。

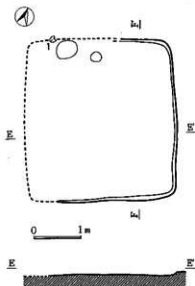
カマドは、北壁中央に存在したものと考えられ、カマド部分には、焼土と灰の分布が認められた。また、この部分からは1の須恵器坏が検出されている。

本住居址から検出された遺物は、1の須恵器のみで、回転ヘラケリの後手持ちヘラケズリになされた底部をみせるものである。

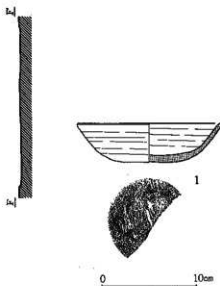
時 期

本住居址の位置づけについては、手掛かりとなる遺物は1の坏のみであるが、とりえず奈良時代、前田遺跡第Ⅳ期の所産として捉えておきたい。

IV 遺構と遺物



第296図 H-100号住居址実測図 (1:80)



第297図 H-100号住居址出土遺物 (1:4)

第131表 H-100号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

発掘 番号	器種	法量	器形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	鉢 (項)	(15.4) 4.1 (7.3)	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底	外面 底部ロクロコナデ、底部は回転ヘラネリの後、 手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ回転)	胎土は砂粒を含 みにふい青褐色 (0.5%程度)を呈する 焼成はあまい。

(101) H-101号住居址

遺 構 第298・299図

H-101号住居址は、第III区テ-24グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.5m東西4.0mの隅丸方形を呈し、床面積12.5㎡を測り、主軸方向はN-22°-Wを指す。壁高は20cm前後を測り、壁溝は認められない。主柱穴と考えられるピットは、それぞれ4カ所のコーナー寄りにP₁~P₄の4個が検出された。P₁は60cm×60cm深さ15cm、P₂は60cm×50cm深さ25cm、P₃は50cm×45cm深さ10cm、P₄は40cm×40cm深さ20cmを測る。また、P₂とP₄の中間にP₅が検出された。P₅は55cm×40cm深さ15cmを測る。いずれも浅いピットといえる。

住居址覆土はI層のみで、小石・バミスをよく含む黒色土層であった。

遺物は、P₁の北の床面上から1の壺が、カマドの西側からは2の坏と4の甕が検出された。これ以外の遺物はいずれも覆土中から出土したものである。

カマドは、北壁中央より検出されていたが、ほぼ壊滅状態にあり、粘土(V層)によって構成

される東西両袖の一部が僅かに残っているにすぎない。また、東側の袖の前方部には土中より大きな自然礫が突出しており、これを抜くように構築されていたものと考えられる。この礫は、袖石の代用的なものとしてかえて好都合だったのであろうか。

カマドの使用にかかわる土層地横は、3層に分層された。I層は多量のカーボンを含む黒色土層、II層は灰・焼土を含む灰褐色土層、III層は灰・カーボンを含む灰褐色土層であった。また、火床部は僅かに掘り込まれた後、黒色土（IV層）で埋め戻されていた。

遺物 第300図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では蓋・環、土師器では環・甕がみられた。

1は須恵器蓋で、つまみ部は中央部の窪む円形を呈している。

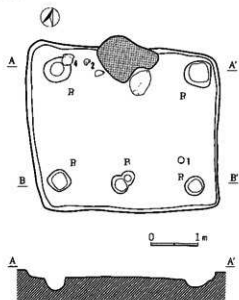
2は須恵器環で、回転ヘラキリの後回転ヘラズリのなされた底部をみせる。

3は土師器環で、全体に風化が激しいが内面体部に僅かに放射状暗文が観察される。見込み部の調整は不明である。

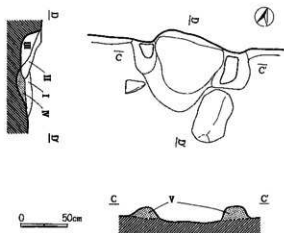
4は、口縁部が「く」の字状に外反する土師器甕である。

6は器種不明の底部で、手持ちヘラズリがなされている。環と考えるのが無難であろうか。

この他、石器・鉄器類は本住居址からは検出されなかった。

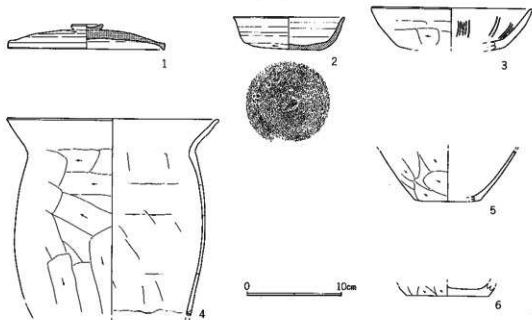


第298図 H-10号住居址実測図（1：80）



第299図 H-10号住居址カマド実測図（1：40）

IV 遺構と遺物



第300図 H-101号住居址出土遺物実測図(1:4)

第301表 H-101号住居址出土遺物一覽表(土器)

発掘 番号	器種	法量	器形の特 徴	調 査	備 考
1 (完)	蓋 (環)	3.3 2.6 16.6	つまみ部は中央部のくぼむ円形を呈する。 ほぼ完形	外面 ロクロコナダの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 く含む灰色 赤心(心)を呈する。 焼成良好
2 (完)	坏 (甗)	11.8 3.4 7.1	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナダ、底部は回転ヘラケズリの後、 回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色を呈す る。(N7/0)
3 (中)	坏	(17.1) —	体部は外反し、底部平底。	外面 口縁部ヨコナダ、体部～底部ヘラケズリ 内面 体部はヨコナダの後、放射状刺文が施される。	胎土は砂粒を多 く含む褐色を呈 する。(7.5YR7/6)
4 (完)	甗	22.6 —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナダの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナダ、胴部ヘラケズリ	胎土はにぶい機 色を呈する。 (7.5YR6/4)
5 (中)	甗	— 7.0	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	胎土は褐色を呈 する。 (7.5YR6/6)
6 (完)		— 8.7	底部平底、器種は坏となるか。	外面 底面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナダ	胎土は砂粒を含み 褐色(7.5YR6/6) 焼成不良。

時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

(102) H-102号住居址

遺構 第301・302図

H-102号住居址は、第IV区ニ-32グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.6m東西4.5mの隅丸方形を呈し、床面積17.1㎡を測り、主軸方向はN-3°-Wを指す。壁高は20cm前後を測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P₁~P₄の4個が検出された。P₁は55cm×40cm深さ35cm、P₂は45cm×40cm深さ30cm、P₃は50cm×40cm深さ25cm、P₄は40cm×40cm深さ30cmを測る。

住居址覆土はI層のみで、若干のバミス・スコリアを含む黒色土層であった。遺物は、良好な出土状態を示すものはなく、いずれも覆土中から出土している。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに破壊されており、その構材であった面取り軽石7点と安山岩礫1点がまとめて整然と置かれていた状態であった。

遺物 第303図

本住居址より検出された遺物には、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕がみられた。

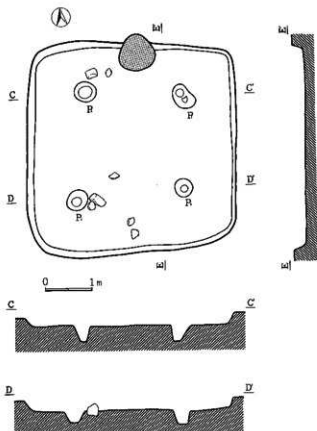
須恵器坏は、図示し得るものがなかったが、全面手持ちヘラケズリになされた底部破片が認められた。また、須恵器甕も胴部破片のみで全体の器形を知り得るものがなかった。

1は、胎土が精選されず焼成も良好でない土師器坏の破片で、体部に放射状暗文、見込み部にラセン状暗文が施こされている。

2・3は、口縁部が「く」の字状に外反する土師器甕である。

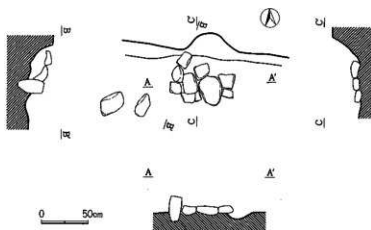
時期

本住居址は、僅かな出土遺物を手掛かりに、奈良時代、前田遺跡第V期の所産と考えておこう。

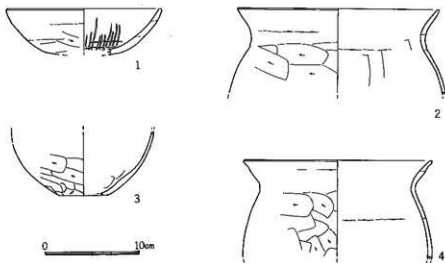


第301図 H-102号住居址実測図(1:80)

IV 遺構と遺物



第29図 H-102号住居址カマド実測図 (1:40)



第30図 H-102号住居址出土遺物 (1:4)

第133表 H-102号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

神田番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (10)	坏	(16.5) —	体部は外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面 体部放射状鴨文が施される 底部ラン状増文が施される。	胎土は黄褐色を呈する。底面は赤褐色を呈する。胎土層がみとめられる。
2 (1)	甕	(21.4) —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は淡黄褐色を呈する。 (10YR8/3)
3 (9)	甕	(19.9) —	口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は濃い褐色を呈する。 (7.5YR6/4)
4 (完)	甕	— (5.1)	底部は平底を呈し、胴下半部は球状を呈する。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は濃い褐色を呈する。 (7.5YR6/4)

(103) H-103号住居址

遺構 第304・305図

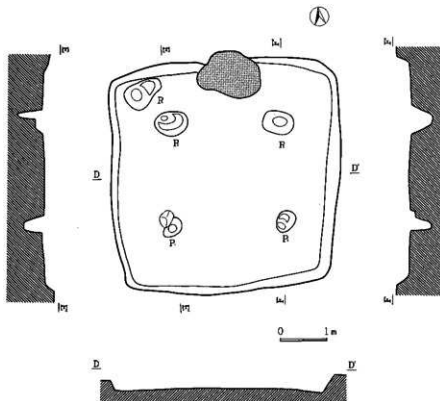
H-103号住居址は、第IV区ニ-32グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.9m東西4.9mの隅丸方形を呈し、床面積19.5㎡を測り、主軸方向はN-3°-Eを指す。壁高は20~40cmを測り、壁溝は認められない。支柱穴は、P₁~P₄の4個が検出された。また、北西コーナーにはP₅が認められた。P₁は65cm×50cm深さ45cm、P₂は70cm×50cm深さ50cm、P₃は45cm×35cm深さ40cm、P₄は48cm×38cm深さ45cm、P₅は84cm×55cm深さ23cmを測る。

住居址覆土はI層のみで、若干のバミス・スコリアを含む黒色土層であった。遺物は、良好な出土状態を示すものはなく、いずれも覆土中から出土している。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに破壊されており、その構材であった面取り軽石はまとめて整然と火床部に置かれていた。また、火床部は円形に一旦掘り込まれた後、黒色土層（I層）で埋め戻され、火床面となっている。

遺物 第306図



第304図 H-103号住居址実測図 (1:80)

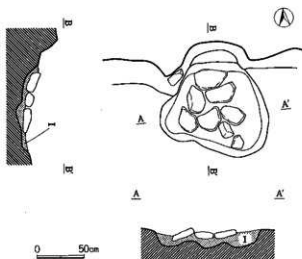
本住居址より検出された遺物には、須恵器では蓋・環・甕、土師器には環・甕がある。

1は、須恵器蓋で、つまみ部の形状は不明である。

2～5は須恵器環で、2は回転ヘラケリ、3～5は全面手持ちヘラケズリの底部をみせている。なお、3～5の環の底部切り離し方法については不明である。

土師器環の破片は図示し得なかったが、内面体部に放射状暗文が施され、外面体部は口唇部近くまで横位のヘラケズリがなされるものであった。

6の須恵器甕は、外面に格子目叩きのなされる胴部下半以下の破片である。

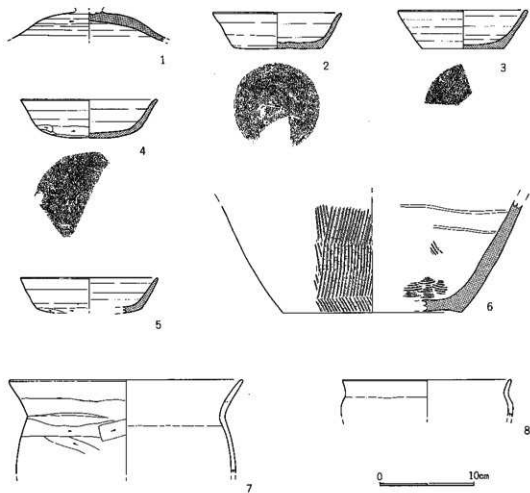


第306図 H-103号住居址カマド実測図(1:40)

第104表 H-103号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標記番号	器種	注量	器形の特徴	調査	備考
1 (回)	蓋 (項)	— —	つまみ部の形状は不明	外面 ロクロヨコナゲの後、天井部ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を富みオリーブ灰色を呈する。 (2.5GY6/1)
2 (完)	環 (項)	13.8 3.9 9.7	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナゲ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰色(5Y6/1)を呈する。
3 (部)	環 (項)	<13.9> 4.1 <8.6>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナゲ、底部切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰色(10Y6/1)を呈する。
4 (回)	環 (項)	<13.9> 4.1 <9.0>	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナゲ、底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(10Y7/1)を呈する。4と同一體か。
5 (回)	環 (項)	<14.6> — <11.2>	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナゲ、底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナゲ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(10Y7/1)を呈する。4と同一體か。
6 (回)	甕 (項)	— <19.0>	底部平底。	外面 胴部下半には叩きが施される。 内面 一部には当て貝殻が残る。	胎土は砂粒を富みにぶい赤褐色を呈する。 (5YR5/3)
7 (回)	甕	<25.0> —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナゲの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナゲ、胴部ヘラケズリ	胎土は褐色を呈する。 (7.5YR6/8)
8 (回)	甕	<18.0> —	口縁部は僅かに外反し、胴部のくびれは強くない。	外面 口縁部ヨコナゲ 内面 口縁部ヨコナゲ	胎土はぶい黄褐色を呈する。 (10YR7/4)

1 壺穴住居址



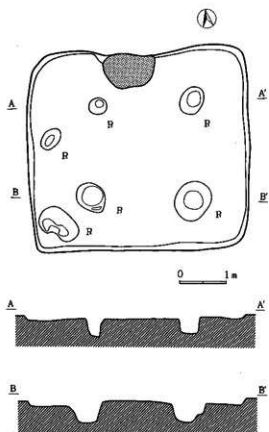
第305図 H-110号住居址出土遺物 (1:4)

7, 8は土師器甕で、7は「く」の字状に外反する口縁部付近の破片、8は直立気味に外反する口縁部破片である。

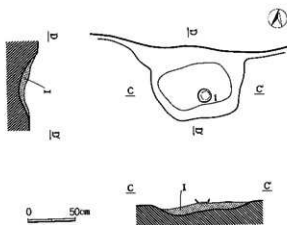
なお、本住居址においては、石器・鉄器類は検出されなかった。

時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。



第37図 H-104号住居址実測図 (1:80)



第38図 H-104号住居址カマド実測図 (1:40)

(104) H-104号住居址

遺構 第307・308図

H-104号住居址は、第IV区ニ-32グリッドにおいて検出された。

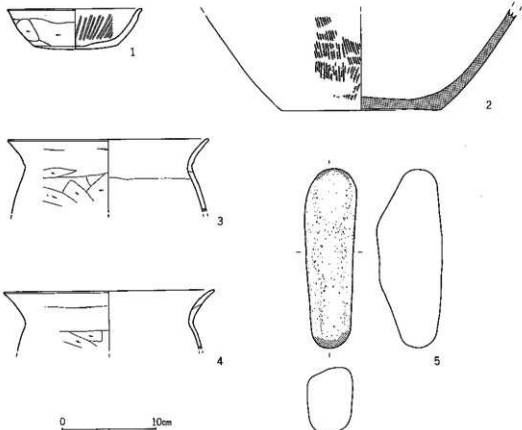
本住居址は、南北4.35m東西4.6mの隅丸方形を呈し、床面積17.8m²を測り、主軸方向はN-2°-Wを指す。壁高は10~15cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P₁~P₆の4個が検出された。また、性格はわからないが、P₅・P₆が西壁寄りに検出された。P₁は60cm×50cm深さ35cm、P₂は40cm×35cm深さ40cm、P₃は70cm×55cm深さ50cm、P₄は85cm×70cm深さ40cm、P₅は50cm×35cm、P₆は90cm×60cmを測る。

住居址覆土はI層のみで、若干のバミス・スコリアを含む黒色土層であった。

遺物は、1の完形の環がカマド部分より正常位で検出された。それ以外は、良好な出土状態を示すものではなく、いずれも覆土中から出土したものであった。

カマドは、北壁中央において検出されたが、完全に破壊されており、本体の痕跡をとどめなかった。破壊後のカマド部分には、1の土師器環が正常位で置かれていた。また、カマド火床部は一旦掘り込まれた後、黒色土層 (I層) で埋め戻されたものであった。

1 竪穴住居址



第109図 H-104号住居址出土遺物(1:4)

第105表 H-104号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

押込番号	器種	法量	器形の特徴	面	整	備考
1 (完)	坏	14.5 4.3 8.8	体部は外反し、底部平底。	外面 内面	口縁部ヨコナデ、体部および底部ヘラケズリ 体部には放射状の暗文が施される。 見込み部にはラモン状暗文が僅かに施される。	胎土は砂粒を多く 含む褐色を呈する。 (7.5YR7/6)
2 (回)	甕 (頸)	- (16.8)	底部平底	外面 内面	胴部には叩きがなされる。 ナデ	胎土は砂粒を含み 灰白色を呈する。 (5Y7/1)
3 (回)	甕	<21.4> -	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は褐色を呈 する。 (7.5YR6/6)
4 (回)	甕	<22.5> -	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ	胎土は濃い黄 褐色を呈する。 (10YR6/4)

第106表 H-104号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

押込番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
5	磨石	輝石 安山岩	19.0	5.4	7.1	1.196	

遺物 第309図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では甕、土師器では坏・甕がみられた。

1は完形の土師器坏で、外面の体部～底部には手持ちへラケズリがなされ、内面体部には放射状暗文が施されている。見込み部は剥落が激しいが、僅かにラセン状暗文が観察される。

2は、須恵器甕の胴部下半以下で、外面には叩き目が窺える。

3・4は、「く」の字状に外反する土師器甕の口縁部である。

この他、河床礫を用い一他を敲打に供した敲石（5）が1点検出されている。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

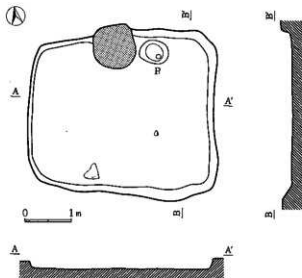
(105) H-105号住居址

遺構 第310・311図

H-105号住居址は、第IV区ニ-32グリッドにおいて検出された。

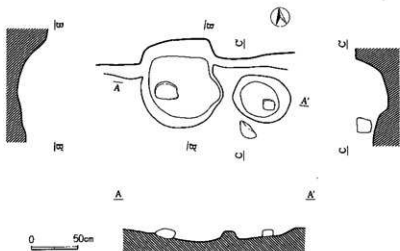
本住居址は、南北3.6m東西4.0mの隅丸方形を呈し、床面積11.2㎡を測り、主軸方向はN-0°-Wを指す。壁高は15-20cmを測り、壁溝は認められない。柱穴は認められず、ピットはカマド東脇にP₁が認められたのみであった。P₁は60cm×50cm深さ10cmを測る。

住居址覆土はI層のみで、若干のバミス・スコリアを含む黒色土層であった。遺物は、良好な

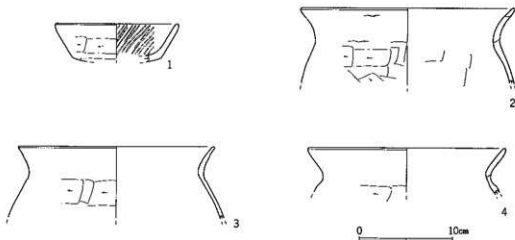


第310図 H-105号住居址実測図 (1:80)

1 聖穴住居址



第311図 H-186号住居址カマド実測図(1:40)



第312図 H-186号住居址出土遺物(1:4)

出土状態を示すものはなく、いずれも覆土中から出土したものであった。

カマドは、北壁中央に検出されたが、すでに壊滅状態にあり、円形の火床部の掘り方のみが捉えられたにすぎなかった。

遺物 第312図

本住居址より検出された遺物には、須恵器では蓋・坏・土師器では坏・甕の破片がある。

須恵器蓋・坏は、いずれも小破片で図示するに至らなかった。

1は土師器坏で、内面体部には放射状暗文が施されているのが特徴的である。見込み部の調整は不明。

第137表 H-106号住居址出土遺物一覧表(土器)

標本 番号	器種	注量	器 形 の 特 徴	裏 面	備 考
1 (回)	坏	(13.3) — (9.4)	体部は外反し、底部平底。	外面 口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ 内面 体部はヨコナデの後、放射状の筋文が施される。	胎土は粘重な赤褐色を呈する。胎土は多く含む。胎土は赤褐色を呈する。(13.3YR7/4) 断面は厚さで2.0cm。
2 (回)	甕	(22.9) —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土はにぶい黄褐色を呈する。(10YR7/3)
3 (回)	甕	(21.0) —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土はにぶい黄褐色を呈する。(10YR7/3)
4 (回)	甕	(21.2) —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土はにぶい黄褐色を呈する。(10YR7/4)

2~4は土師器甕で、「く」の字状に外反する口縁部である。

時 期

本住居址は、僅かな出土遺物等より、奈良時代、前田遺跡第V期の所産と考えておこう。

(106) H-106号住居址

遺 構 第313・314図

H-106号住居址は、第IV区ナー32グリッドにおいて検出された。

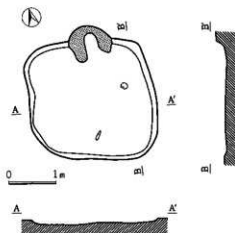
本住居址は、南北3.2m東西3.3mの歪んだ小形の隅丸方形を呈し、床面積5.4㎡を測り、主軸方向はN-0°-Wを指す。壁高は10~20cmを測るのみで、壁溝は認められない。また、柱穴等のピットは一切認められない。

住居址覆土は一層のみで、バミスを少量含む黒色土層であった。

遺物は、1の土師器甕がカマド中より検出されたのみである。

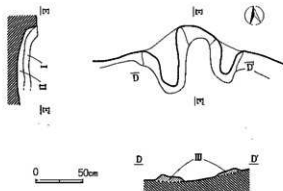
カマドは、北壁中央に存在するが、赤褐色の粘土(Ⅲ層)を用いた東西両袖が僅かに残っているにすぎなかった。また、カマド覆土は、2層に分層された。I層は焼土を多く含む茶褐色土層、II層は焼土をまったく含まない黒色土層であった。

遺 物 第315図

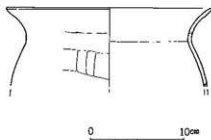


第313図 H-106号住居址実測図(1:80)

1 壺穴住居址



第314図 H-106号住居址カマド突測図 (1:40)



第315図 H-106号住居址出土遺物 (1:4)

第131表 H-106号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

図号 番号	器種	法量	器形の特徴	調査 箇所	備考
1 (回)	甕	(21.8) — —	口縁部は僅か「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	粘土はにぶい 藍色を呈する。 (5YR6/4)

遺物は、1の僅か「コ」の字状に外反する土師器製の口縁部が検出されたのみであった。

時期

本住居址は、検出された遺物が1のみであるため、その位置付けは困難である。ただし、他との比較検討から、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期の所産と考えるのが妥当であろう。

(107) H-107号住居址

遺構 第316・317図

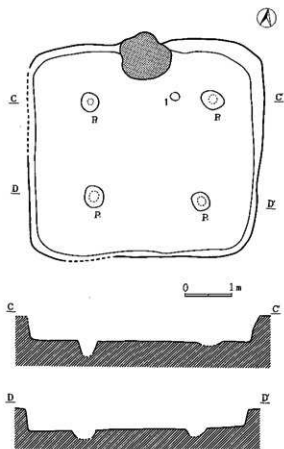
H-107号住居址は、第V区ニ-36・37グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.65m東西5.0mの隅丸方形を呈し、床面積19.1㎡を測り、主軸方向はN-6°-Wを指す。壁高は35～60cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P₁～P₄の4個が検出された。P₁は50cm×40cm、P₂は40cm×40cm、P₃は50cm×40cm、P₄は40cm×35cmを測った。なお、これらのピットの底面は湧水が激しく確認できず、したがってその深さもよくわからなかった。

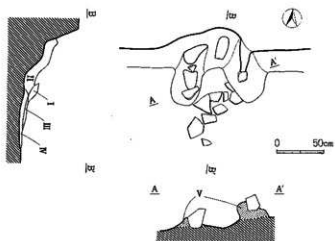
住居址覆土はI層のみで、バミスを多量に含み、ロームがブロック状に混入する黒色土層であった。

遺物は、1の完形の須恵器蓋がP₁の西の床面上より検出された以外は、いずれも覆土中から出

IV 遺構と遺物

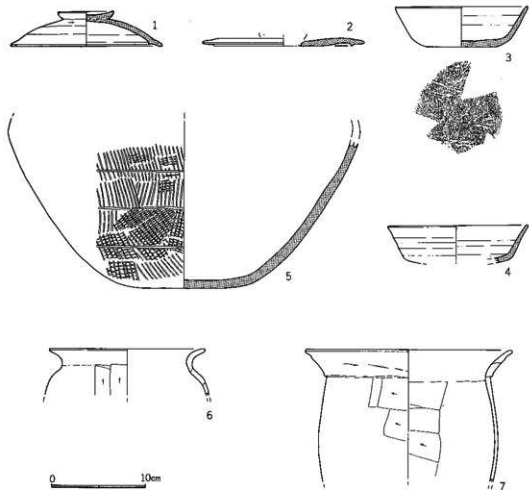


第316図 H-107号住居址実測図 (1 : 80)



第317図 H-107号住居址カマド実測図 (1 : 40)

1 藪穴住居址



第318図 H-107号住居址出土遺物（1：4）

土している。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに半壊状態にあった。僅かに残された両袖の断面A-A'をみると、面取り軽石と粘土（V層）によって構成されていた。また、火床部には須恵器製の大型破片が9点みられた。カマド使用に係ると考えられる土層堆積は、4層に分層された。I層は多量の灰と若干の焼土を含む灰色土層、II層は若干の焼土・カーボンを含む黒色土層、III層は赤褐色の焼土層、IV層は多量のカーボンを含む黒色土層であった。

遺物 第318図

本住居址から検出された遺物には、須恵器では蓋・坏・甕が、土師器では甕がある。

1・2は、内面にかえりを有する須恵器蓋である。1は完形で、つまみ部は中央の窪んだ円形

IV 遺構と遺物

第133表 H-107号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

押印番号	器種	数量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (完)	蓋 (須)	5.9 3.7 16.1	つまみ部は径の大きい皿状の形状を呈し、内面にはかえりを有する。 外形	外面 ロクロコナダの後、天井回転ヘラケズリ 自然軸が全体にかかる。 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は磨滅され 灰白色を呈する。 (N7/0)
2 (回)	蓋 (須)	— (17.4)	体部は中央部の高まらない扁平な形状を呈する。内面にはかえりを有する。	外面 ロクロコナダの後、中央部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色(N6/0) を呈する。
3 (回)	坏 (須)	(14.1) 4.2 (10.4)	体部は外反し、底部平底。	外面 全庄に刺溝が激しいが、体部はロクロコナダ 底部は回転ヘラケリ 内面 ロクロコナダ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色を呈する。 (5Y5/1)
4 (回)	坏 (須)	(15.1) — (11.5)	体部は外反し、底部平底になるものと推 われる。	外面 体部ロクロコナダ、底部は回転ヘラケリによ るものと推われる。 内面 ロクロコナダ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含 み灰色を呈する。 (5Y5/1)
5 (回)	甕 (須)	— (14.6)	底部平底。	外面 胴部には叩き目がなされ、平行するヘラ掻き沈積 が数層走る。 内面 当て貝痕が若干観察できる。	胎土は磨滅されず に濃い褐色 (5.5YR7/4)を呈する。 完全な障光沢或 とはなっていない。
6 (回)	甕	(16.6) —	口縁部は弓なりに外反する。	外面 口縁部コナダの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナダ、胴部ヘラケナダ	胎土は暗褐色石 砂粒を多く含み 5A 明褐色を呈す る。(2.5YR5/4)
7 (回)	甕	(22.2) —	口縁部は比較的強く「く」の字状に外反 する。	外面 口縁部コナダの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナダ、胴部ヘラケナダ	胎土は濃い褐 色を呈する。 (7.5YR5/4)

を呈している。2は、1に比べ天井部の高まらない扁平なもので、つまみ部を欠失する。

3・4は須恵器坏で、いずれも回転ヘラケリによるものと考えられるが、3はその後底部に手持ちヘラケズリがなされている。

5は、外面に叩き目がみられる須恵器甕の胴下半部である。

6は小形の土師器甕の口縁部である。また、7は口縁部が「く」の字状に外反する土師器甕の胴上半部である。

この他本住居址においては、石器・鉄器類は認められなかった。

時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

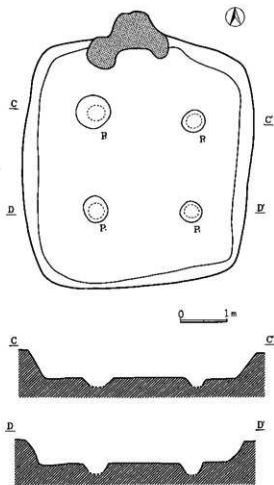
(108) H-108号住居址

遺 構 第319・320図

H-108号住居址は、第V区ニ-37グリッドにおいて検出された。本住居址は、H-109号住居址を切って存在している。また、F-73と重複するが、新旧関係は不明である。

本住居址は、南北5.3m東西4.9mの隅丸方形を呈し、床面積19.2㎡を測り、主軸方向はN-7°-Wを指す。壁高は50~60cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴はP₁~P₄の4個が検出された。P₁は50cm×45cm、P₂は75cm×70cm、P₃は55cm×50cm、P₄は50cm×45cmを測る。なお、本住居址

1 壺穴住居址



第319図 H-108号住居址実測図 (1:80)

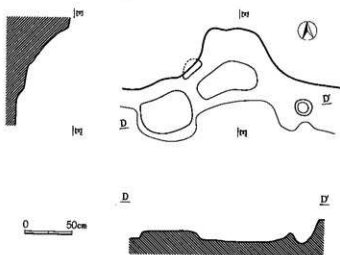
は床面近くからの湧水が激しく、ピットの深さが確認できなかった。

住居址覆土はI層のみで、多量のバミスと少量のローム粒子を含む黒色土層であった。遺物は、良好な出土状態を示すものはなく、いずれも覆土中より出土している。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに壊滅状態にあり、図にはその掘り方を示した。図の東側にはピットがみられるが、袖石の抜き取り痕かと考えられる。また、西側のロームは若干テラス状に削り出されていた。

遺物 第321・322・323図

本住居址からは比較的少量に土器が検出された。そのうち須恵器では円面碗・蓋・坏・甕・長頸瓶・短頸・壺、土師器では坏・甕の各器種が認められた。



第320図 H-100号住居址カマド実測図(1:40)

1は、小破片であるが、須恵器円面硯と考えられる。硯面部には特に墨磨による研滅や墨の付着は認められなかった。本例と同様な円面硯には、本遺跡佐久市分のH-3・H-5号住居址出土の2例があり、それらから類推すると本例の脚台部は透しをもたないものと考えられる。

2は須恵器壺であるが、つまみ部の形状は不明である。

須恵器環は、3～6の4点を図示した。そのうち、3・4は回転ヘラキリ、5は回転ヘラケズリ、6は回転糸切りによる底部をみせている。また、9の長頸瓶の底部かと考えられるものも回転糸切りによっている。

7・8は土師器環である。7はロクロ整形による比較的小形品で、内面は丹念にヘラミガキがなされている。8は、7に比べると大ぶりで内面黒色研磨のなされた環である。

10は、小形の須恵器短頸壺である。

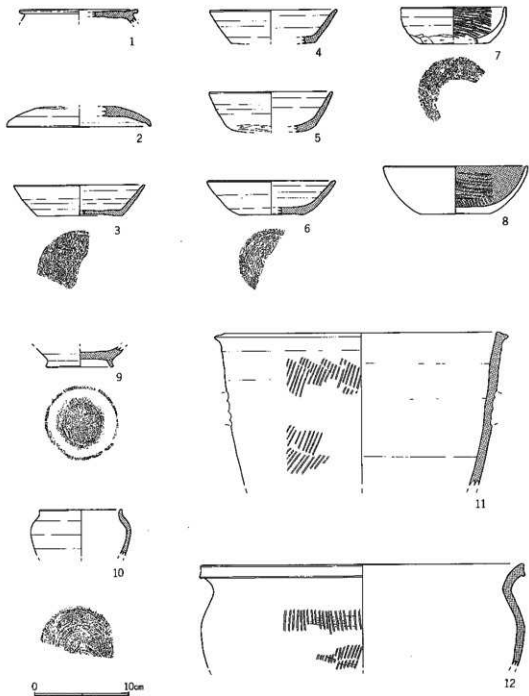
11は、須恵器鉢と考えられるもので、把手の貼り付けられていた痕跡が残る。

12～15は須恵器甕で、12・13は口縁部付近、14・15は底部付近である。

16～18は土師器甕で、16は「く」の字状に外反する口縁部破片、18は台付甕の一部である。鉄器としては、19の撻鉄かと考えられるものが出土している。一边はW字状もう一边は弓状のラインを示す偏平な製品である。

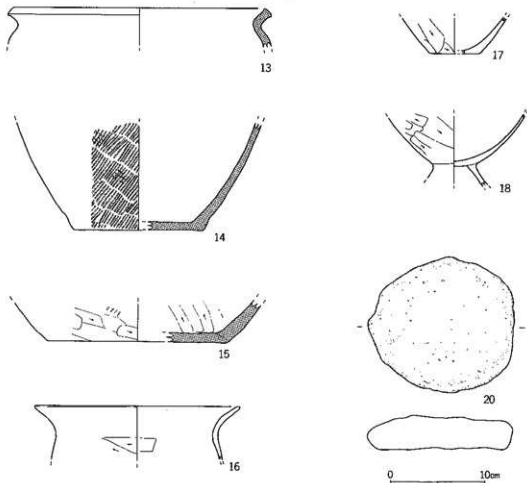
その他、石器としては、偏平な円礫である20が検出されている。あるいは台石等として用いられたのであろうか。

1 墓穴住居址

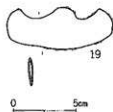


第21图 H-100号住居址出土遗物(1:4)

IV 遺構と遺物



第32図 H-108号住居址出土遺物 (1:4)

第33図 H-108号住居址出土
遺物 (1:3)

第140表 H-108号住居址出土遺物一覧表〈金属器・石器〉

図番	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
19	鏃	鉄	8.4	3.2	0.3	(22)	
20	台石?	安山岩	15.4	14.3	3.8	1,115	

時期

本住居址は、奈良・平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。

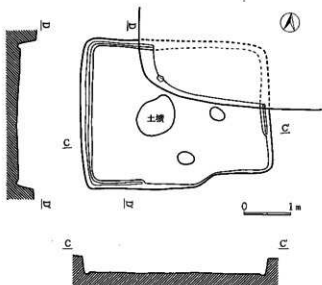
第14表 H-100号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標識 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	測 量	備 考
1 (回)	円面碗 (須)	<12.8> —	復面部は内提を持たず縁のみとなる。 脚台部の形状は不明	外面 復面部には全体に自然胎が付着し、墨野による 磨滅は認められない。 内面 ロクロヨコナデ	胎土は砂粒を含み 灰色(10Y6/1) を呈する。
2 (回)	壺 (須)	— <15.3>	—	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(10Y6/1) を呈する。
3 (回)	杯 (須)	<13.0> 3.3 <9.0>	底部は外反し、底部平底。	外面 底部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選され 灰褐色(5Y4/2) を呈する。
4 (回)	杯 (須)	<13.6> — <9.0>	底部は外反し、底部平底。	外面 底部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選され 灰白色を呈する。 (5Y7/1)
5 (回)	杯 (須)	<13.2> —	底部は外反し、底部平底。	外面 底部ロクロヨコナデ、底部切り履しの後、回転 ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(5N6/0) を呈する。
6 (回)	杯 (須)	<13.7> 3.6 <7.0>	底部は外反し、底部平底。	外面 底部ロクロヨコナデ、底部回転承切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(5N6/0) を呈する。
7 (回)	杯	<11.2> — <7.6>	底部は弓なりに外反し、底部平底。	外面 底部ロクロヨコナデ、底部下半〜底部ヘラケズリ 内面 ヨコヘラヒガキ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み にぶい褐色を 呈する。 (5YR6/4)
8 (回)	杯	<15.4> 5.1 7.3	底部は弓なりに外反し、底部平底。	外面 全体に剥落が激しく調査不明 内面 黒色磨滅	胎土は砂粒を含み にぶい褐色を呈 する。(7.5YR6/4)
9 (完)	(須)	— 7.2	底部には高台が貼り付けられる。 長頸部の底部となるか。	外面 底部回転承切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色を呈する。 (10Y6/1)
10	短頸壺 (須)	<8.8> —	口縁部の短く直立する小形の器形	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(10Y6/1) を呈する。
11 (回)	鉢 (須)	<31.3> —	底部は蓋的的に外傾し、外縁部は外側へ つまみ出される。把手が行されるものと 考える。	外面 叩きかなされたのち、ロクロヨコナデがなされる 内面 ロクロヨコナデ	胎土は砂粒を多く 含み灰白色を呈す る。(2.5Y7/1)
12 (回)	壺 (須)	<34.7> —	口縁部はゆるく外反し、口縁部は帯状を 呈する。	外面 脚部に叩きかなされた後、全体にロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土は砂粒を含み 灰色を呈する。 (10Y5/1)
13 (回)	壺 (須)	— <5.3>	口縁部はゆるく外反し、口縁部は帯状を 呈する。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土は砂粒を含み 灰白色(10Y7/1) を呈する。
14 (回)	壺 (須)	— <13.8>	底部平底。	外面 脚部には叩きかなされる。 内面 ナデ	胎土は灰褐色を 呈する。 (5YR4/2)
15 (回)	壺 (須)	— <19.3>	底部平底。	外面 叩きとヘラケズリがなされる。 内面 脚部下半ヘラケズリ、底部刷毛目状磨滅	胎土は砂粒を含み 黄灰色(2.5Y5/1) を呈する。
16 (回)	壺	<22.0> —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、脚部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、脚部ヘラケズリ	胎土はにぶい 褐色を呈する。 (7.5YR6/4)
17 (回)	壺	— <5.3>	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	胎土はにぶい 褐色を呈する。 (5YR6/4)
18 (完)	台付壺	—	底部には脚台部が貼り付けられる。	外面 脚部ヘラケズリ、脚台部ヨコナデ 内面 脚部ヘラケズリ、脚台部ヘラケズリ	胎土はにぶい 褐色を呈する。 (5YR6/4)

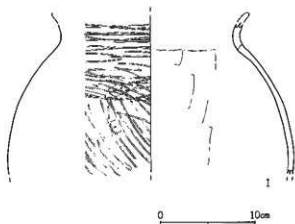
(109) H-109号住居址

遺構 第324・325図

H-109号住居址は、第V区ナ・ニ-37グリッドにおいて検出された。本住居址は、I区をH-



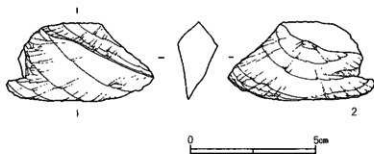
第324図 H-109号住居址実測図 (1:80)



第325図 H-109号住居址出土遺物

第142表 H-108号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

検出番号	器種	法輪	器形の特徴	調査	備考
1 (個)	壺	- -	口縁部は「く」の状に外反し、胴部は球状を呈する。	外面 内面	結土は砂粒を含みにくい黄褐色を呈する。 (10YR7/2)



第326図 H-108号住居址出土遺物(2:3)

第143表 H-108号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

検出器号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
2	切片	玄武岩	5.8	3.2	1.8	19	

108号住居址に切られ、また、一部をF-73号掘立柱建物址に、中央を土壌に切られている。

本住居址は、南北3.2m東西4.0mを測り、南壁のプランがやや乱れるものの全体的には隅丸方形のプランを呈するものと考えられる。推定床面積は10.8㎡を測り、南北軸方向はN-12°-Wを指す。壁高は30cm前後を測った。壁溝は、H-108に破壊された部分は不明であるが、南壁と東壁の一部を除いて認められる。なお、本住居址に伴うと考えられるピットは存在しなかった。

住居址覆土はI層のみで、若干のバミスを含み、ローム粒子の混入する黒褐色土層であった。遺物は、良好な出土状態を示すものはなく、覆土中から出土している。

カマドは、大方がそうであるように北壁中央に存在していたとすれば、すでにH-108号住居址の構築時に破壊されてしまっていることになる。

遺物 第325・326図

本住居址から検出された土器は、1の壺1個分の破片のみであった。

1の土器器壺は、外面口縁部および胴部、内面口縁部にヘラミガキのなされたものである。

その他、石器では2の玄武岩の切片1点が検出されている。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期の所産と考えておこう。

(110) H-110号住居址

遺構 第327・328図

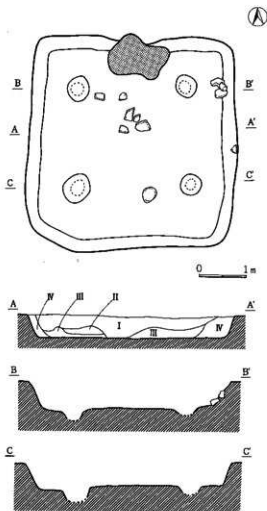
H-110号住居址は、第V区ト・ナー37グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.6m東西4.4mの隅丸方形を呈し、床面積14.9㎡を測り、主軸方向はN-5°-Wを指す。壁高は、40~60cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P₁~P₄の4個が検出されている。P₁は50cm×45cm、P₂は55cm×45cm、P₃は65cm×60cm、P₄は45cm×45cmを測る。なお、床面以下は湧水が激しく、それぞれのピットの深さを確認することはできなかった。

住居址覆土は4層に分層された。I層は僅かにバミスを含む黒色土層、II層は多量のロームを含む黄褐色土層、III層は若干ローム粒子を含む黒褐色I層、IV層はローム粒子を含まない黒褐色土層であった。

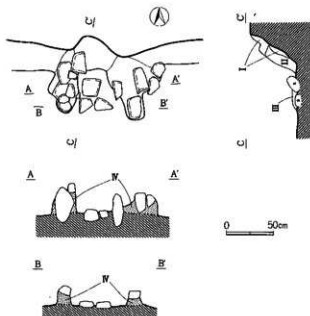
遺物は、良好な出土状態を示すものはなく、いずれも覆土中から出土したものであった。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに半壊状態にあり、その構材の一部である面取り軽石3点と安山岩礫3点は、II区の床面上に散乱していた。図の断面A-A'・B-B'をみると、両袖部は袖石と粘土(IV層)によって構築されていることがわかる。また、火床部には3点の礫がみられた。カマド使用に係ると考えられる堆積は、3層認められた。I層が多量の灰と若干の焼土を含む灰褐色土

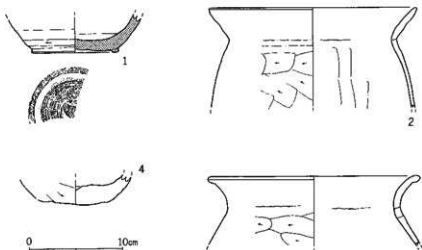


第327図 H-110号住居址実測図(1:80)

1 竪穴住居址



第326図 H-110号住居址カマド実測図(1:40)



第329図 H-110号住居址出土遺物(1:4)

層、II層が若干のカーボン焼土を含む黒褐色土層、III層が多量のカーボンを含む黒色土層であった。

遺物 第329図

本住居址より検出された遺物は、須恵器は長頸瓶・甕、土師器では甕がある。

1は、須恵器長頸瓶と考えられるものの底部で、回転ヘラケズリの後、高台が付されている。

第144表 H-110号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

発掘 番号	器種	法量	器形の特 徴	調 査	備 考
1 (回)	丸胴瓶 (頸)	— (9.4)	底面には高台が貼り付けられる。	外面 ロクロヨコナデ、底面回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(10Y 6/1) 焼成良好
2 (回)	甕	(22.0) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は赤褐色を 呈する。 (5YR 4/6)
3 (回)	甕	(22.7) — —	口縁部は外反し、口唇部はさらに外側に やや巻き込まれる。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土は精選されず 砂粒を多く含む 褐色(5YR 6/8) を呈する。
4 (完)	甕	— 8.1	底面は頗厚い丸味をおびた平底。	外面 ヘラケズリ 内面 制落が激しく調整不明	胎土は精選されず 砂粒を多量に含 み赤褐色を呈 する。(5YR 5/4)

2は、「く」の字状に外反する口縁部をみせる土師器甕である。3も土師器甕であるが、2に比べやや肉厚で胎土も精選されていない。4も3と同様胎土の精選されない分厚い土師器甕底部である。

なお、本住居址において石器・鉄器類は認められなかった。

時 期

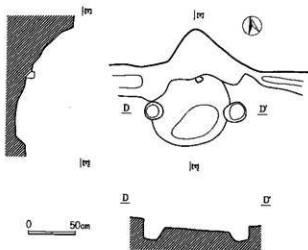
本住居址は、僅かな出土遺物を手掛りに、奈良時代、前田遺跡第IV期の所産とみなし得よう。

(111) H-111号住居址

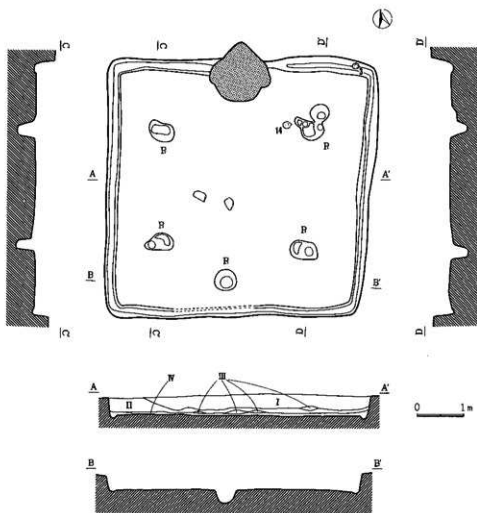
遺 構 第330・331図

H-111号住居址は、第V区ナ-38グリッドにおいて検出され、M-1号溝状遺構を切って存在している。

本住居址は、南北5.5m東西5.8mの隅丸方形を呈し、床面積28.4㎡を測り、主軸方形はN-9°-Eを指す。壁高は30~40cmを測り、壁溝は全周に認められる。主柱穴は、P₁~P₄の4個が検出された。P₁は不規則なテラスをもつもので80cm×50cm、P₂は60cm×40cm深さ40cm、P₃は60



第330図 H-111号住居址カマド実測図(1:40)



第33図 H-III号住居址実測図(1:80)

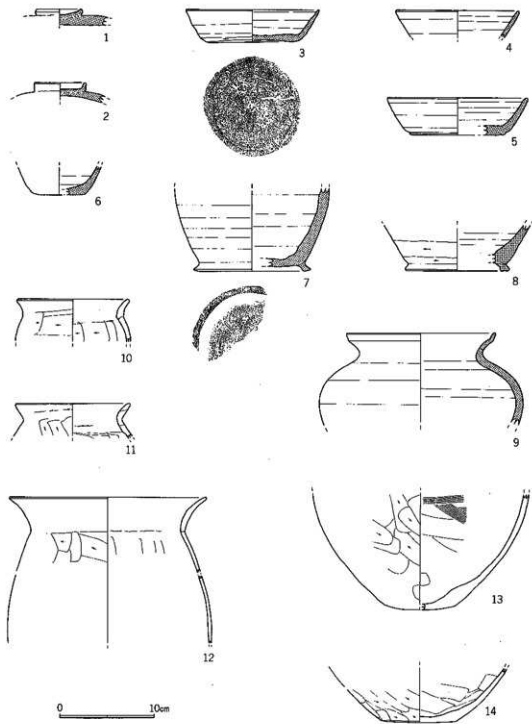
cm×35cm深さ30cm、P₄は60cm×35cm深さ35cmを測る。また、南壁寄りの中央には50cm×45cm深さ28cmを測るP₅が検出された。

住居址覆土は、4層に分層された。I層はパミス・スコリアをよく含む黒褐色土層、II層はパミス・スコリアをよく含む若干のカーボン・灰を含む黒色土層、III層は黄色ロームのブロック状堆積、IV層は黒色土層であった。

遺物は、3の須恵器環が北東コーナーの壁上より、14の土師器甕底部がP₄西の床面直上より検出されている。これ以外の遺物は、いずれも覆土中より出土したものである。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに壊滅状態にあり、図にはその掘り方を示した。それ

IV 通罅と遺物



第322図 H-III号住居址出土遺物 (1:4)

第16表 H-III号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

押印番号	器種	法量	器形の特徴	備 考	備 考
1 (泥)	蓋 (須)	4.7 — —	つまみ部は中央が皿状にくぼんだ形態を呈する。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロク右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色を呈する。(7.5Y8/1)
2 (同)	蓋 (須)	(5.5) — —	つまみ部は環状の帯が高らされた形状を呈する。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロク右回転)	胎土は精選され灰白色を呈する。(10Y8/1)
3 (泥)	杯 (須)	14.2 3.5 8.9	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後、胴部ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロク右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色を呈する。(N6/0)
4 (同)	杯 (須)	(13.1) — —	体部は外反し、底部は平底になるものと考えられる。	外面 体部ロクロヨコナデ 内面 体部ロクロヨコナデ (ロク右回転)	胎土は精選され灰色を呈する。(N6/0)
5 (同)	杯 (須)	(14.9) — —	体部は外反し、底部は高台が削り出される。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は高台を削り出したヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロク左回転)	胎土は砂粒を含み灰色を呈する。(7.5Y6/1)
6 (同)	長頸瓶 (須)	— (5.4)	底部平底。	外面 ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後、手持りヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色を呈する。N5/0の内面に片足跡が遺る。
7 (同)	長頸瓶 (須)	— (12.5)	底部には高台が貼り付けられる。全体に焼成時の火ぶくれが激しい。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロク右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(N5/0)を呈する。
8 (同)	長頸瓶 (須)	— (11.2)	底部には高台が貼り付けられる。	外面 胴部下半回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロク左回転)	胎土は精選されず砂粒を含み灰色(N5/0)を呈する。
9 (同)	壺 (須)	(15.8) — —	口縁部は外反し、さらに垂れ点をもって口縁部で、短く立ち上がる。胴部は球状を呈する。	外面 口縁部および胴部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロク右回転)	胎土は精選され灰色を呈する。(7.5Y8/2)
10 (同)	壺	(11.9) — —	口縁部がゆるく外反するやや肉厚で小形な器形	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は砂粒を多く含み赤褐色を呈する。(2.5Y84/6)
11 (同)	壺	(12.2) — —	口縁部の外反するやや肉厚で小形な器形	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は砂粒を含み幅広い褐色を呈する。(7.5Y8/4)
12 (同)	壺	(20.9) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は褐色を呈する。(5Y8/6)
13 (同)	甕	— (7.4)	底部は丸味をおびた平底を呈し、胴下半部は球状を呈する。	外面 胴下半部および底部ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ。一部には胸毛目状の調整痕がうかがえる。	胎土は砂粒を含み幅広い褐色を呈する。(7.5Y8/4)
14 (泥)	甕	— 7.9	底部平底。	外面 胴部および底部ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	胎土は赤褐色を呈する。(5Y8/6)



第333図 H-III号住居址出土遺物(2:3)

第16表 H-III号住居址出土遺物一覧表〈土製品〉

押印番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
15	炊飯器?	土器器	3.7	2.7	0.4	4	

によると、火床部は浅く掘り込まれていることがわかる。また、東西両袖の抜き取り痕と考えられるピットが各1個ずつみられた。なお、原位置をとどめているとは思われないが、角柱状に面取りされた軽石の支脚石が壁際より検出された。なお、カマド使用に係る焼土等のプライマリーな堆積は認められなかった。

遺物 第332・333図

本住居址より検出された遺物には、須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕・壺、土師器では甕がみられた。

1・2は須恵器蓋の環状を呈するつまみ部である。

3・4は、須恵器坏で、3は回転ヘラケズリによる底部をみせている。

5は、高台付坏であるが、高台部は削り出しによる特異な例である。

6～8は、須恵器長頸瓶の下半部～底部で、6は無高台、7・8は高台付のものである。6は手持ちヘラケズリ、7・8は回転ヘラケズリによる底部をみせており、いずれも切り離し方法は不明である。

9は、須恵器壺で、二段に外反する口縁部と球状の胴部をみせている。

10・11は、土師器小形甕で、胎土が精選されずやや肉厚なものである。

12は、「く」の字状に外反する口縁部をみせる土師器甕である。

なお、15は薄手の土師器甕破片に、穿孔がなされたものであり、一種の装飾品であろうか。穿孔は表裏両面からなされ、貫通している。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

(112) H-112号住居址

遺構 第334図

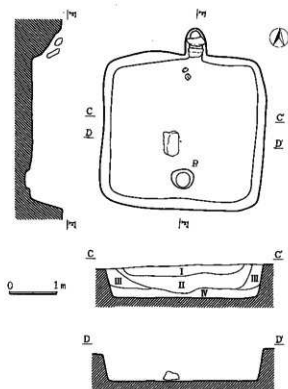
H-112号住居址は、第V区ナ-38・39グリッドにおいて検出された

本住居址は、南北3.3m東西3.5mの隅丸方形を呈し、床面積8.8㎡を測り、主軸方向はN-5°-Wを指す。壁高は70cm前後を測り、壁溝は認められない。また、柱穴は認められず、ピットは南壁寄り中央に50cm×45cm深さ10cmを測るP₁が検出されたのみであった。

住居址覆土は、4層に分層された。位置層がロームが多く混じる黒褐色土層、II層はロームが混じる黒色土層、III層はロームが大量に混入する黄褐色土層で、IV層はロームが多く混じる暗褐色土層である。

遺物は、良好な出土状態を示すものはなく、いずれも覆土中から出土している。

1 墓穴住居址



第34図 H-112号住居址実測図 (1:80)

カマドは、北壁中央の存在するが、煙道部を除き完全に破壊されていた。煙道部は細長く55cm程壁外にのびるもので、その天井部には二点の面取り軽石が乗せられていた。

遺物 第335図

本住居址より検出された土器は少ないが、須恵器では蓋・長頸瓶・甕、土師器では甕の各器種がみられた。

須恵器蓋は、図示し得なかったが、かえりを有するものの破片2点がみられた。

1の須恵器坏は、底部全面に手持ちヘラケズリがなされたものである。

2は、須恵器甕口縁部の小破片である。

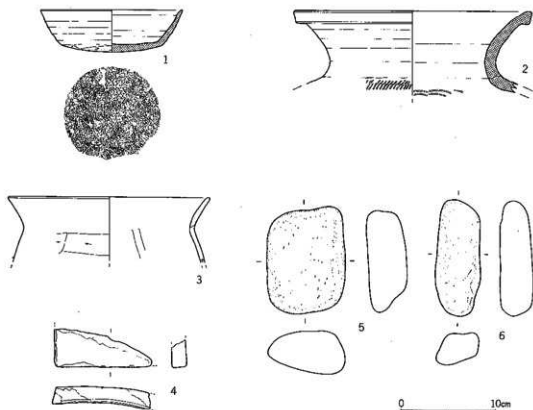
3は、「く」の字状に外反する土師器甕の口縁部である。

この他、瓦片も1点検出されている(14)。明褐色(7.5YR $\frac{1}{2}$)の色調を呈し、焼成良好なものである。5・6は、河床礫を用いた石鍾と考えられようか。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

IV 遺構と遺物



第35図 H-112号住居址出土遺物(1:4)

第147表 H-112号住居址出土遺物一覽表(土器)

押出番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (回)	杯 (須)	<15.1> 4.5 (10.6)	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 依羅ロコロコナデ、底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロコロコナデ (ロコロ右回転)	粘土は精選されず、砂粒を多く含む灰色(YR6/1)を呈する。外面に「+」の文飾あり。
2 (回)	瓶 (須)	<25.3> —	口縁部は外反し、口唇部は帯状を呈する。	外面 口縁部ロコロコナデ、胴部は叩きかなされる。 内面 口縁部ロコロコナデ、胴部には当て具痕が残る。	粘土は砂粒を含み灰白色を呈する。(10Y7/1)
3 (回)	甕	<21.4> —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	粘土は褐色を呈する。(7.5YR6/6)

第148表 H-112号住居址出土遺物一覽表

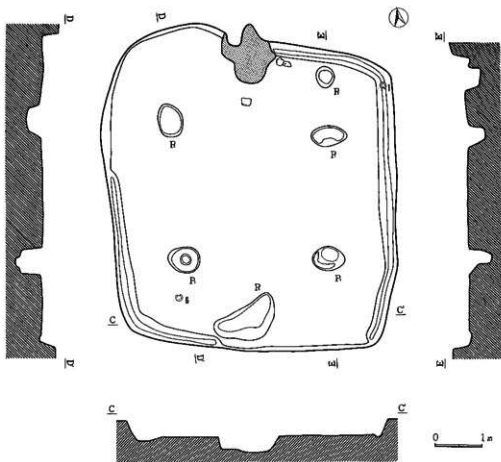
押出番号	器種	材質	長さ	幅	高さ	重量	備考
4	瓦		(30.3)	3.9	1.8	(70)	
5	石 錘	安山岩	10.9	8.4	4.6	670	
6	”	”	12.2	4.8	3.4	325	

(113) H-113号住居址

遺構 第336・337図

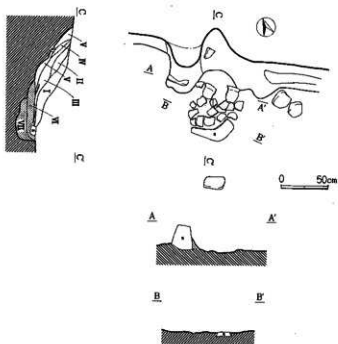
H-113号住居址は、第V区ト-38グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北6.8m東西6.3mやや歪んだ隅丸方形を呈し、床面積35.8㎡を測り、主軸方向はN-0°-Wを指す。壁高は30~35cmを測り、壁溝は南西コーナーから西壁と北東コーナーから東壁にかけて認められる。ピットは、主柱穴と考えられるP₁~P₄の4個と、P₁・P₄の延長線上の北壁際にP₅、南壁際中央に不整形なP₆がそれぞれ検出された。P₁は80cm×45cm深さ35cm、P₂は70cm×50cm深さ30cm、P₃は70cm×55cm深さ55cm、P₄は70cm×50cm深さ50cm、P₅は45cm×40cm深



第336図 H-113号住居址実測図 (1:80)

IV 遺構と遺物



第37図 H-113号住居址カマド実測図 (1:40)

さ30cm、 P_0 は140cm×75cm深さ30cmを測る。

住居址覆土はI層のみで、小粒バミスをよく含む黒褐色土層であった。

遺物は、1の環が北東コーナーの壁際より、6の環が南西コーナーの床面よりやや浮いた状態で検出されている。また、カマド火床部には、13の土師器甕破片と須恵器甕破片が敷かれていた。これ以外の遺物は、いずれも覆土中から検出されている。

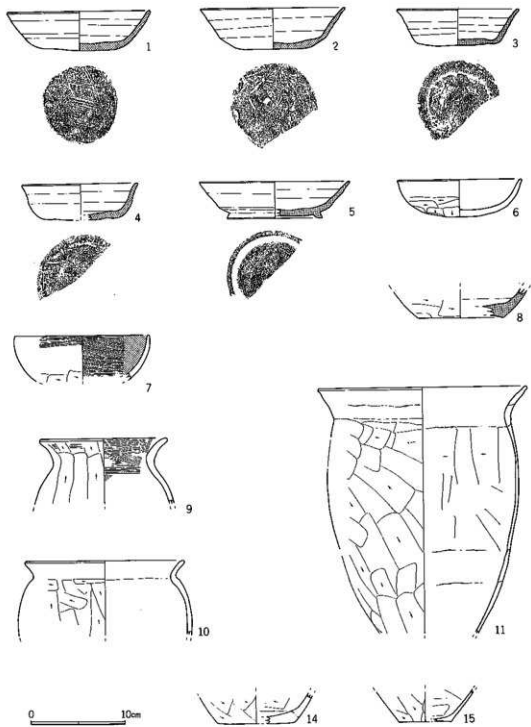
カマドは、北壁中央に存在するが、すでに壊滅していた。なお、その火床部は、一旦掘り込まれた後、黒褐色土層 (VII層) と黄褐色土層 (VI層) で埋め戻され、火床面には鉄平石 (a) と土師器甕・須恵器甕の破片が敷き詰められている状態を呈していた。また、カマド使用に係ると考えられる土層堆積は5層に分層された。I層は若干の焼土・灰を含む黒褐色土層、II層は多量の焼土・灰を含む若干のカーボンを含む暗褐色土層、III層は焼土・灰を含む黒褐色土層、IV層は灰層である黄灰色土層、V層は焼土・灰を含まない黒色土層であった。

遺物 第338・339図

本住居址より検出された遺物には、須恵器では坏・長頸瓶・甕、土師器では坏・甕の各器種がみられた。

1~4は、須恵器坏で、いずれも手持ちヘラケズリのなされた底部をみせている。このうち、

1 窑穴住居址



第338图 H-113号住居址出土遗物(1:4)

第14表 H-113号住居址出土遺物一覧表(土器)

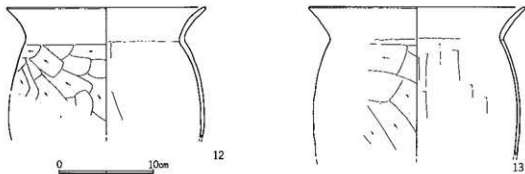
押出番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (完)	環 (須)	15.3 4.2 8.0	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	粘土は砂粒を含み灰白色を呈する。(10Y7/1)
2 (片)	環 (須)	<15.4 4.4 (8.4)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラケズリ後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	粘土は砂粒を含み灰白色を呈する。(5Y7/2)
3 (完)	環 (須)	13.0 3.9 8.7	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラケズリ後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ回転不明)	粘土は砂粒を含み灰褐色(7.5YR4/1)を呈する。
4 (片)	環 (須)	<12.4 — (8.4)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラケズリ後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	粘土は砂粒を含み灰白色(5Y7/1)を呈する。
5 (部)	環 (須)	<15.9 4.0 (10.1)	体部は外反し、底部には高合が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	粘土は砂粒を含み褐色(7.5YR7/6)完全な環元灰焼成となっていない。
6 (部)	環	13.3 3.9 —	体部は外反し、底部は扁平な丸底。	外面 口縁部ヨコナデ、体部へ底部ヘラケズリ 内面 風化が激しく調整不明	粘土は砂粒を多く含み褐色(7.5YR7/6)焼成はあまり良好でない。
7 (部)	環	<14.3 — —	体部は丸味をおびて外反する。	外面 口縁部ヘラミガキ、体部ロクロヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 黒色研磨	粘土は砂粒を含み褐色(7.5YR7/6)を呈する。
8 (部)	須	— — (9.0)	底部平底。 器種は長頸瓶となるか?	外面 ロクロヨコナデの後、ヘラケズリ、底部は回転 未切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	粘土は砂粒を含み灰白色を呈する。(10Y7/1)
9 (部)	甕	<13.7 — —	口縁部は「く」の字状に外反する小形の器形	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部傾位のヘラケズリ 内面 口縁部および胴部ヨコナデ	粘土は精選されず砂粒を含み灰褐色(7.5YR4/2)
10 (部)	甕	<17.0 — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部および胴部ヨコナデ	粘土は砂粒を含みふいば褐色を呈する。(7.5YR6/4)
11 (完)	甕	22.3 — —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は長頸を呈する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	粘土はふいば褐色を呈する。(7.5YR6/4)
12 (完)	甕	21.1 — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	粘土はふいば褐色(7.5YR6/4)を呈する。
13 (片)	甕	<23.0 — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	粘土はふいば褐色を呈する。(7.5YR6/4)
14 (部)	甕	— (8.4)	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	粘土は砂粒を含み灰褐色(7.5YR6/4)を呈する。
15 (部)	甕	— (5.6)	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	粘土は褐色を呈する。(7.5YR4/3)

2～4は回転ヘラケズリによる切り離しのなされたものであることが窺える。

5は、高台付円で、回転ヘラケズリのなされた底部をみせるものであった。一応須恵器と捉えられたが、色調は褐色を呈しており、完全な環元灰焼成となっていないものであった。

6は土師器環で、内面は風化が激しく調整は不明であるが、体部に放射状暗文・見込み部にラセン状暗文の施されるものであったと考えられる。

7は、内面黒色研磨のなされた土師器環である。



第338図 H-113号住居址出土遺物(1:4)

9・10は、土師器のやや肉厚な小形甕である。9の内面には刷毛状調整が観察される。

11~13は、「く」の字状に外反する口縁部をみせる土師器甕である。また、14・15は土師器甕の底部である。

なお、本住居址においては、石器・鉄器等は検出されていない。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

(114) H-114号住居址

遺構 第340図

H-114号住居址は、第V区ト-39グリッドにおいて検出された。その中央を南北に用水路によって破壊されている。

本住居址は、南北5.4m東西5.2mの隅丸方形を呈し、床面積25㎡を測り、南北軸方向はN-0°-Wを指す。壁高は20~40cmを測り、壁溝は認められない。支柱穴はP₁~P₄の4個が検出された。P₁は70cm×45cm深さ35cm、P₂は80cm×75cm深さ40cmを測り、その内部には大きな礫がみられた。P₃は75cm×70cm深さ50cm、P₄は65cm×50cm深さ45cmを測る。

住居址覆土はI層のみで、バミスを含む黒色土層であった。

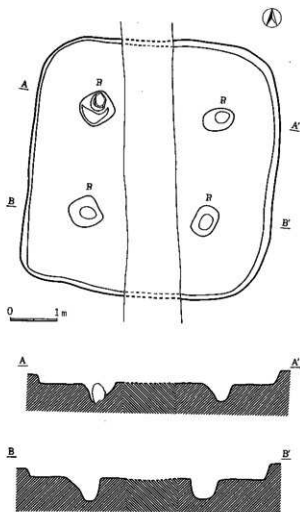
遺物は、良好な出土状態を示すものはなく、いずれも覆土中から出土している。

カマドは、北壁中央に存在したと考えられるが、肝心な部分を用水路によって破壊されており、その存在を確かめられなかった。

遺物 第341図

本住居址から検出された遺物には、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕がある。

1は須恵器坏で、回転ヘラキリの後若干の手持ちヘラケズリのなされた底部をみせている。



第30図 H-114号住居址実測図 (1:80)

- 2は、体部が弓なりに外反する土師器甕である。
 3は、須恵器蓋の底部である。
 4は、「く」の字状に外反する土師器甕の口縁部である。
 5は、やや肉厚な土師器甕の破片で、胴部には縦方向のヘラケズリが認められる。
 なお、本住居址においては、石器・鉄器類は検出されなかった。

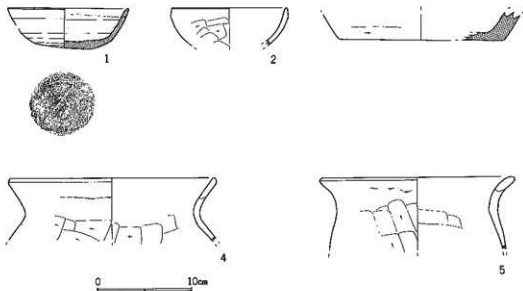
時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

1. 墓穴住居址

第150表 H-114号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

押込 番号	器種	注量	器形の特長	圖	整	備考
1 (壳)	杯 (須)	<13.0> 4.2 6.4	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面	体部ロクヨコナデ、底部回転ヘラケズリの後、若干の手持ちヘラケズリ	胎土は砂粒を含み灰色(10Y5/1)内面上部には粘土粒が一面残る。
2 (皿)	杯	<12.4> —	体部は丸味をおびて外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ ヨコナデ	胎土は砂粒を含み明褐色を呈する。(5YR5/6)
3 (皿)	壺 (須)	— <17.5>	底部平底。	外面 内面	胴部下部ヘラケズリ ヨコナデ	胎土は砂粒を含み灰白色を呈する。(10Y7/1)
4 (皿)	壺	<22.1> —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部はややふくらむものと思われる。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は褐色を呈する。(7.5YR7/8)
5 (皿)	壺	<20.7> —	口縁部は外反し、胴部は比較的直線的に下降するものと思われる。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部直線のヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を含みにくい黄褐色を呈する。(10YR6/3)



第151図 H-114号住居址出土遺物(1:4)

(115) H-115号住居址

遺構 第342・343図

H-115号住居址は、第V区テー38グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.0m東西3.2mの隅丸方形を呈し、床面積10.8㎡を測り、主軸方向はN-5°-Wを指す。壁高は10cm程度を測るのみである。壁溝は、住居のほぼ全周にみられる。また、柱穴等のピットはまったく検出されなかった。

IV 遺構と遺物

住居址覆土はI層のみで、バミス・ルーム粒子を若干含む黒色土層であった。

遺物は、東壁際より5の環が、西壁際の床面直上より2の環が検出された。また、カマド部分からは1の環が半割した状態で出土している。これ以外の遺物は、いずれも覆土中より出土している。

カマドは、北壁中央よりやや西寄りに存在するが、完全に破壊されており本体はまったく残っていないかった。カマド部分の覆土は、2層に分層された。I層は若干の焼土・カーボンを含む灰層、II層はカーボンを含む黒色土層であった。

遺物 第344図

本住居址より検出された遺物には、須恵器・土師器ともに環がある。

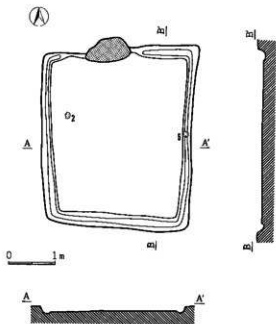
1～5は須恵器環である。このうち底部の残らない4を除くと、いずれも回転糸切りによる底部をみせており、その後1は

周囲に手持ちヘラケズリが、5は周囲に回転ヘラケズリがなされている。

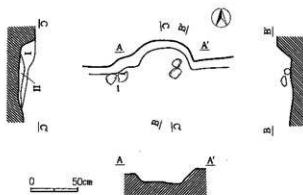
6は、土師器環の底部で、全面に手持ちヘラケズリがなされている。なお、本住居址において石器・鉄器類は検出されなかった。

時期

本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。



第342図 H-115号住居址実測図 (1:80)

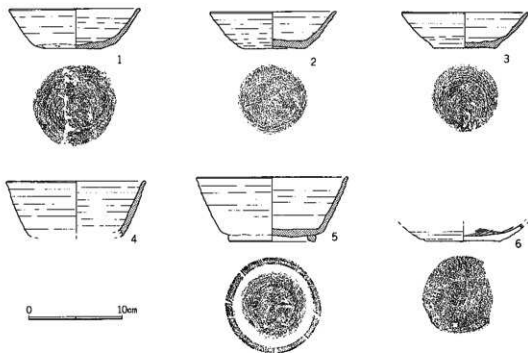


第343図 H-115号住居址カマド実測図 (1:40)

1 竈穴住居址

第151表 H-115号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

発掘番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (完)	坏 (環)	14.0 4.2 8.4	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部は回転糸切りの後、 高曲手持ちヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選されず 砂粒を多く含み灰 色(10Y6/4) 外周部に「K」の 文様あり。
2 (完)	坏 (環)	13.5 3.9 6.7	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切り ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 み灰色(10Y6/1) 内周に「+」の火 燒きあり。
3 (出)	坏 (環)	(13.5) 3.8 6.7	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され ず砂粒を多く含 み灰色 (10Y5/1)
4 (出)	坏 (環)	<14.9> — —	体部は直線的に外反する。 底部にはおそらく高台が 貼り付けられている ものと考えられる。	外面 ロクロコナデ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 み灰色を呈する。 (10Y6/1)
5 (出)	坏 (環)	<15.1> 6.9 9.1	体部は直線的に外反し、 底部には高台が 貼り付けられる。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切りの後、 高曲手持ちヘラケズリの高台が 貼り付け 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選されず 砂粒を多 み灰色(10Y6/4) 完全な灰土系陶器 とみてよい。
6 (出)	坏 (環)	— (7.9)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部切り磨しの後、全面 手持ちヘラケズリ 内面 ヘラミガキ (ロクロ右回転)	胎土はに み灰色を呈する。 (2.5 YR5/4)



第340図 H-115号住居址出土遺物(1:4)

(116) H-116号住居址

遺構 第345図

H-116は、第IV区ナ-33グリッドにおいて検出された。他の小形の竪穴遺構と同様その機能が住居かどうか問題となろうが、とえあえずここでは住居址と呼称しておく。

本址は、南北2.1m東西2.4mの隅丸方形を呈し、床面積3.8㎡を測り、南北軸方向はN-19°-Wを指す。壁高は20cm前後を測った。柱穴等のピットはまったく検出されず、また、カマドも認められなかった。

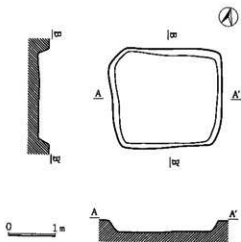
遺構覆土はI層のみで、若干のバミス・ローム粒子を含む黒色土層であった。

遺物

本遺構より検出された遺物は、叩き目のみられる須恵器甕の破片二点のみであった。

時期

本址は、奈良・平安時代の所産と考えることに大過なからうが、詳しい時期については遺物が皆無に等しいため決定できない。前田遺跡第VII期の所産とみなせようか。



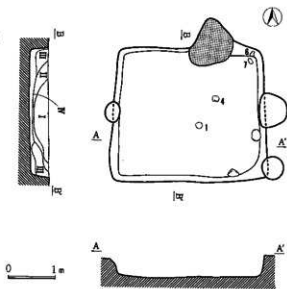
第36図 H-116号住居址実測図(1:80)

(117) H-117号住居址

遺構 第346・347図

H-117号住居址は、第I区ナ-36グリッドにおいて検出された。その東壁二カ所と西壁1カ所を後述するピットによって切られている。

本住居址は、南北2.8m東西3.3mの隅丸方形を呈し、床面積7.6㎡を測り、主軸方向はN-8°-Wを指す。壁高は40~50cmを測り、壁溝は認められない。また、柱穴等のピットも一切みられなかった。



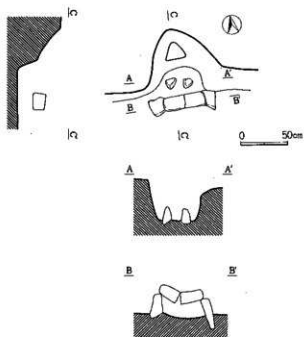
第36図 H-117号住居址実測図(1:80)

1 聖火住居址

住居址覆土は、4層に分層された。I層はロームを多量に含む黄褐色土層、II層は黒色土層、III層はロームを多量に含む暗褐色土層、IV層が黒色土層であった。

遺物は、1の蓋が住居中央の床面上より、4の環がI区床面上より、7の敲石が北東コーナーの床面上より、6の横瓶が北東コーナー一壁際より検出されている。この他の遺物は、いずれも覆土中より出土したものである。

カマドは、北壁中央に存在し、その石組の一部をとどめていた。図のA-A'の断面をみると、火床部には柱状の支脚石二個が据えられているのがわかる。また、B-B'の断面では、東西に面取り軽石が一個づつ配され、その上部に直方体状に面取りされた軽石が乗せられているのが窺えよう。この石組みに、さらに粘土が貼られ、カマド本体となっていたものと考えられる。



第307図 H-117号住居址カマド実測図(1:40)

るのわかる。また、B-B'の断面では、東西に面取り軽石が一個づつ配され、その上部に直方体状に面取りされた軽石が乗せられているのが窺えよう。この石組みに、さらに粘土が貼られ、カマド本体となっていたものと考えられる。

遺物 第348図

本住居址より検出された遺物には、須恵器では蓋・環・甕・横瓶、土師器には甕がある。

1は、完形の須恵器蓋で、つまみ部は潰れた宝珠形を呈している。

2～5は須恵器環で、2は回転ヘラギリ、3は回転糸切り、4・5は回転ヘラケズリによる底部をみせている。また、これ以外に全面手持ちヘラケズリのなされた底部破片も認められた。なお、4・5は高台付環である。

6は、須恵器横瓶で、胴部の一部を大きく欠損し、また、口縁部はゆがんでいる。胴部には叩き目がみられ、他の須恵器片の焼けつきもみられる。

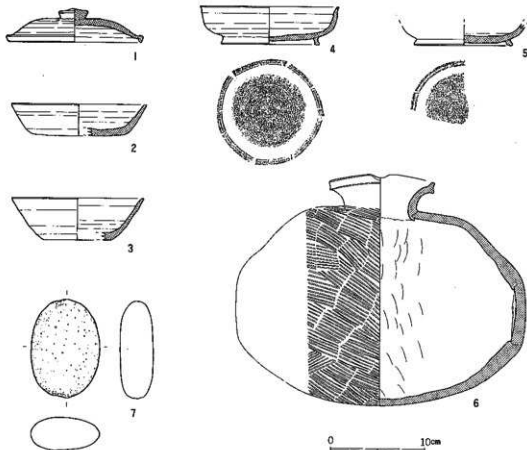
この他、土師器甕は胴部の小破片で、大形の器形を知り得なかった。

7は、偏平な楕円形の敲石で、両端に敲打痕が認められる。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

IV 遺構と遺物



第388図 H-117号住居址出土遺物(1:4)

第152表 H-117号住居址出土遺物一覽表(土器)

発見 番号	器種	法量	器形の特長	測 量	備 考
1 (完)	蓋 (須)	3.1 3.5 14.1	つまみ厚はつぶれた宝珠形を呈する。 突起	外面 ロクロコナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色を呈する。 (10Y5/1)
2 (四)	杯 (須)	<14.3> 3.4 <10.0>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は粉造され 灰白色を呈する。 (10Y6/1)
3 (四)	杯 (須)	<14.0> 4.5 <7.2>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色を呈する。 (N6/0)
4 (GE)	杯 (須)	14.7 4.1 10.5	体部は外反し、底部には高台が貼り付け られる。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色を呈する。 (7.5YR5/1) 要な腐食や変色 を呈していない。
5 (四)	杯 (須)	- <10.5>	底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色を呈する。 (7.5YR5/1)
6 (完)	壺腹 (須)	11.2 24.5 -	口縁部はラッパ状に外反し、口唇部は筒 状となり胴部は端の潰れた脚形を呈する。	外面 口縁部コナデ、胴部は叩きかなされる。 内面 当て貝痕がみられる。	胎土は砂粒を含み 灰色を呈する。一部に自然 解が付着する。 内面に灰の流痕がみ られる。

2 掘立柱建物址

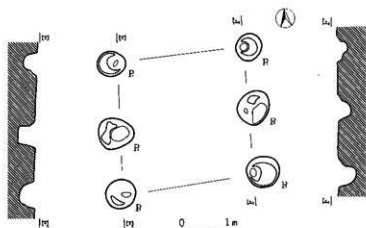
(1) F-1号掘立柱建物址 第349図

F-1号掘立柱建物址は、第I区シー44グリッドにおいて検出された。

F-1は、2間×1間(2.8m×2.8m)の掘立柱建物址で、柱間は東西列1.4m・南北列2.8mを測る。主軸方向はN-12°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈している。掘り方の埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。ただし、掘り方より、柱は西例では東側に、東例では西側に寄って存在したことが窺える。

本址からは、遺物は一点も検出されていない。



第349図 F-1号掘立柱建物址実測図(1:80)

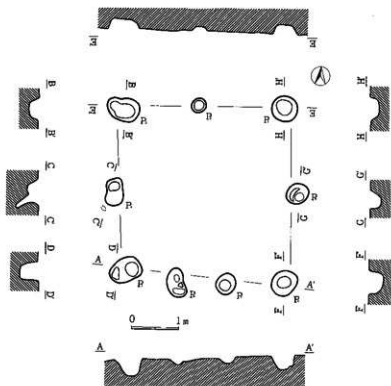
(2) F-2号掘立柱建物址 第350図

F-2号掘立柱建物址は、第I区シー43グリッドにおいて検出された。

F-2は、南列3間・北列2間×東・西列2間(3.5m×3.5m)の掘立柱建物址である。柱間は南列が1~1.2m、北・東・西列が1.6~1.9mを測る。主軸方向は、N-9°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、円形あるいは歪んだ楕円形を呈している。掘り方の埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは、遺物は一点も検出されなかった。



第350図 F-2号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(3) F-3号掘立柱建物址 第351図

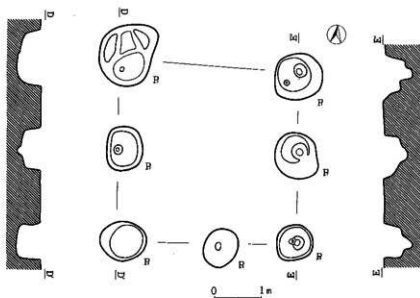
F-3号掘立柱建物址は、第I区シ、スー42グリッドにおいて検出された。

F-3は、東西2間×北列1間・南列2間(3.6m×3.8m)の掘立柱建物址で、柱間は、東西列で1.7~1.9m、南列で1.7~2.2m、北列で3.8mを測る。主軸方向はN-8°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、P₃が隅丸方形に近い平面プランを呈する以外は、いずれも円形である。掘り方の埋土は黒色土層1層のみで、その上面では埋土と柱底の区別がつかなかったが、その底面において柱底が確認されたピットがいくつかある(P₁・P₃・P₆・P₇)。確認された柱底は、およそ20cm前後を測るものであった。

遺物は、ピット埋土中より土師器片・須恵器片が検出されている。須恵器片には坏の底部が二点みられたが、一方は回転ヘラケズリ、一方は手持ちヘラケズリのなされたものであった。した

がって本址は、こうした底部調整手法のみられる時期とほぼ同時期か、あるいはそれに後出する時期の所産とみることができる。



第351図 F-3号掘立柱建物址実測図(1:80)

(4) F-4号掘立柱建物址

F-4号掘立柱建物址は、第I区スー42グリッドにおいて検出された。本址は、F-3号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-4は、東西南列2間・北列1間(3.4m×3.2m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-8°-Wを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈し、その埋土は黒色土1層のみで、柱底は認められなかった。

なお、本址からは遺物は検出されていない。

(5) F-5号掘立柱建物址 第352図

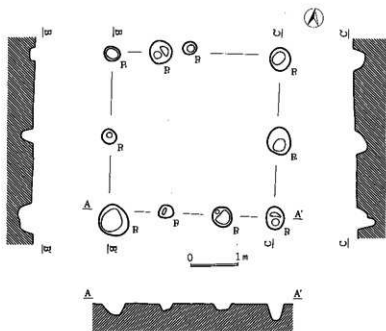
F-5号掘立柱建物址は、第I区スー43グリッドにおいて検出された。

F-5は、3間×2間(3.5m×3.5m)の掘立柱建物址である。柱穴の配置は、P₁が片寄った

位置にある他は規則正しいものであった。柱間は、南列で1.2m、西列で1.7m、 P_1 ・ P_2 間で1.9mを測る。主軸方向はN-14°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈している。掘り方の埋土は黒色土層1層のみで、そのなかにおいて柱痕は確認されなかった。

なお、本址において遺物は一点も検出されなかった。



第352図 F-5号掘立柱建物址実測図 (1:80)

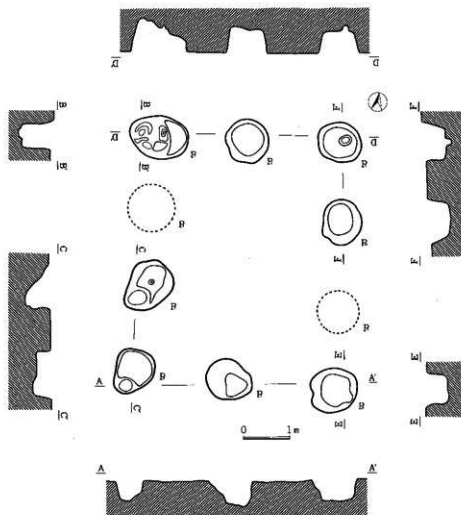
(6) F-6号掘立柱建物址 第353図

F-6号掘立柱建物址は、第I区ス-44グリッドにおいて検出された。そのうち、 P_4 は P_3 は水路によつて消滅していた。また、F-7と一部重複するが、新旧関係は捉えられない。

F-6は、3間×2間(5.3m×4.4m)の掘立柱建物址で、柱間は東西列で2.2m、南北列で1.9m程度を測る。主軸方向はN-14°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、円形ないし楕円形を呈するもので、その埋土はローム層混じりの黒色土であった。残念ながら埋土中において柱痕を確認できるものはなかったが、ピットの底面において柱痕の確認できたものがあった(P_1 ・ P_3)。

なお、F-6において遺物はまったく検出されなかった。



第353図 F-6号掘立柱建物址実測図(1:80)

(7) F-7号掘立柱建物址 第354図

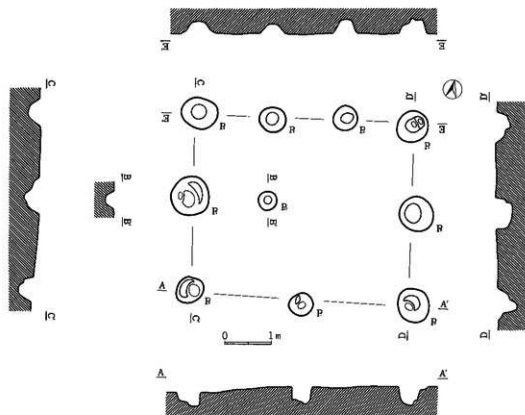
F-7号掘立柱建物址は、第I区ス-44グリッドにおいて検出された。F-6とは直接的な切り合い関係を持たないため新旧関係は不明であるが、その占地が一部重複する。

F-7は、北列3間・南列2間×東西列2間(4.6m×3.8m)の掘立柱建物址で、その建物内部(P₃・P₄の延長線上の交点)においてP₁₀の存在をみるものである。柱間は、因みに、P₁・P₂間では1.5m、P₄・P₅間で1.9m、P₆・P₇間で2.3m、P₈・P₉間で1.9mを測る。主軸方向はN-74°-Wを指す。

IV 遺構と遺物

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈するもので、その埋土は黒色土層1層のみである。埋土中において柱痕は確認されなかった。

なお、本址において遺物は検出されなかった。



第54図 F-7号掘立柱建物址実測図(1:80)

(8) F-8号掘立柱建物址

F-8号掘立柱建物址は、第I区ス-44グリッドにおいて検出された。本址は、F-25号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-8は、1間×1間(2.3m×1.5m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-10°-Wを指す。各ピットの掘り方はいずれも垂んだ楕円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は確認できなかった。

なお、本址からは遺物は検出されていない。

(9) F-9号掘立柱建物址

F-9号掘立柱建物址は、第I区セ-42グリッドにおいて検出された。F-9は、その東列をD-6号土壌によって切られている。

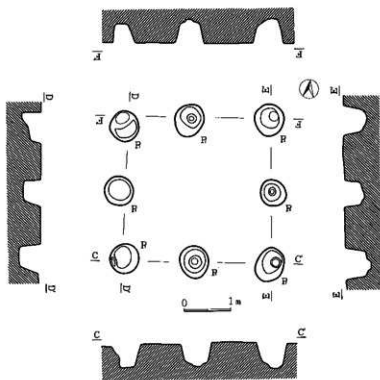
F-9は、2間×2間(3.4m×3.0m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-13°-Wを指す。各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

(10) F-10号掘立柱建物址 第355図

F-10号掘立柱建物址は、第I区ソ-40グリッドにおいて検出された。

F-10は、2間×2間(3.2m×3.1m)の掘立柱建物址で、柱間は南北列で1.6m東西列で1.5mを測る。主軸方向はN-8°-Wを指す。



第355図 F-10号掘立柱建物址実測図(1:80)

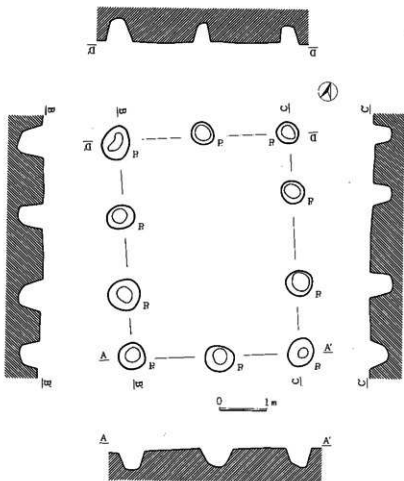
各ピットの掘り方は円形を呈し、その埋土は黒色土層1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認できなかったが、その底面において柱痕が確認されたものがある(P₂・P₆・P₇・P₈)。それらの柱痕はおよそ20cm前後を測るものであった。

なお、本F-10からは、遺物は検出されなかった。

(11) F-11号掘立柱建物址 第356図

F-11号掘立柱建物址は、第I区ゾ-39グリッドにおいて検出された。

F-11は、3間×2間(4.7m×3.6m)の掘立柱建物址で、柱間は、因みに、P₁・P₂間で1.8m、P₃・P₄間で1.5mを測る。主軸方向はN-25°-Wを指す。



第356図 F-11号掘立柱建物址実測図(1:80)

各ビットの掘り方は、いずれも円形を呈する。掘り方の埋土は、黒色土層1層のみで、埋土中において柱痕は確認されなかった。

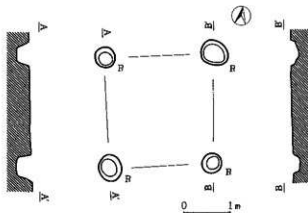
なお、本F-11からは遺物は検出されていない。

(12) F-12号掘立柱建物址 第357図

F-12号掘立柱建物址は、第1区セー41グリッドにおいて検出された。その西列は、H-23号住居址東壁と接するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-12は、1間×1間(2.4m×2.2m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-17°-Wを指す。

各ビットの掘り方は、いずれも円形を呈し、その埋土は黒色土層1層のみである。埋土中において柱痕は確認されなかった。



第357図 F-12号掘立柱建物址実測図(1:80)

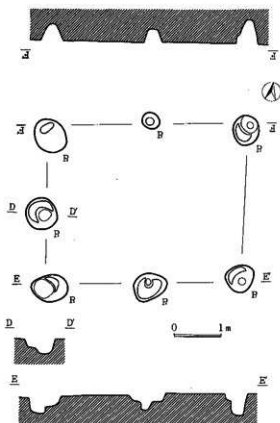
F-12においては、遺物はまったく検出されていない。

(13) F-13号掘立柱建物址 第358図

F-13掘立柱建物址は、第1区セー41グリッドにおいて検出された。本址は、F-14と隣接するが、両者は棟方向や柱の並びもそろっており、一連の建造物であった可能性も残る。

F-13は、南北列2間×西列2間・東列1間(4.2m×3.3m)の掘立柱建物址で、因みに柱間は、P₁・P₂間で2.0m、P₃・P₄間で1.8mを測る。主軸方向はN-67°-Eを指す。

各ビットの掘り方はいずれも円形を呈し、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中において



第358図 F-13号掘立柱建物址実測図 (1:80)

ては、柱痕は確認されなかった。

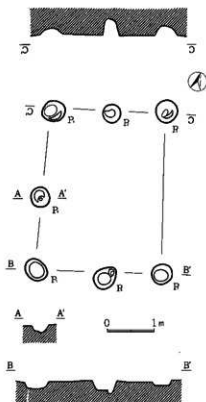
なお、本址のピット埋土中からは、回転ヘラケズリのなされた須恵器底部破片が検出されている。したがって本址は、この須恵器の調整手法が示す時期とほぼ同時期か、それに後出する時期の所産とみなすことができよう。

(14) F-14号掘立柱建物址 第359図

F-14号掘立柱建物址は、第I区セー42グリッドにおいて検出された。本址は、前述したように、隣接するF-13と棟方向や柱の並びもそろっており、一連の建造物であった可能性も残る。

F-14は、南北列2間×西列2間・東列1間(3.4m×2.7m)の掘立柱建物址で、因みに柱間隔は、 $P_1 \cdot P_2$ 間で1.2m、 $P_3 \cdot P_4$ 間で1.9mを測った。主軸方向はN-18°-Wを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈し、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中におい



第359図 F-14号掘立柱建物址実測図 (1:80)

ては柱痕は確認されなかった。

なお、本F-14において、遺物はまったく検出されなかった。

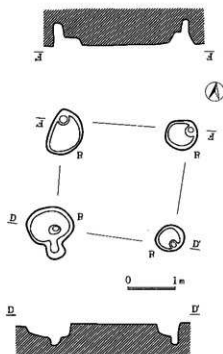
(15) F-15号掘立柱建物址 第360図

F-15号掘立柱建物址は、第I区セ-42グリッドにおいて検出された。

F-15は、1間×1間(2.7m×2.4m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-80°-Wを指す。

各ピットの掘り方は基本的には円形を呈し、その埋土は黒色土層I層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかったが、その底面に柱痕が確認された。それらは15~20cm程の径を測るものであった。

なお、本址においては、遺物は一点も検出されなかった。



第30図 F-15号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(16) F-16号掘立柱建物址 第361・362図

F-16号掘立柱建物址は、第I区セー42グリッドにおいて検出された。本址は、F-17号掘立柱建物址と直接的な切り合いをもたないが、両者の占地の大部分は重複している。

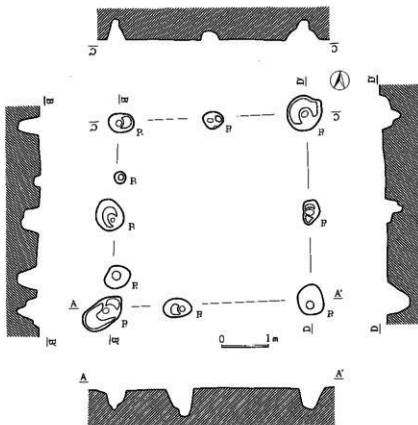
F-16は、西列4間・東列2間×南北列2間(4.0m×4.0m)の掘立柱建物址で、特に西列のP₄・P₆、南列のP₈は片寄った位置に存在する。因みに柱間は、P₁・P₂間で2.0m、P₆・P₉間で2.7mを測る。主軸方向はN-11'-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形ないしは長楕円形を呈しており、その埋土は黒色土層1層のみであった。埋土中において柱痕が確認できるものはなかったが、掘り方の底面において柱痕が確認されたものがいくつかある(P₁・P₂・P₇・P₈・P₁₀)。いずれの柱痕も15~20cm程度の径を測るものであった。

本址のピットの埋土中からは、須恵器片・土師器片が検出された。1の須恵器蓋の破片の他、回転ヘラケズリのなされた須恵器坏底部がみられた。本址の所産



第361図 F-16号掘立柱建物址出土遺物 (1:4)



第362図 F-16号掘立柱建物址実測図(1:80)

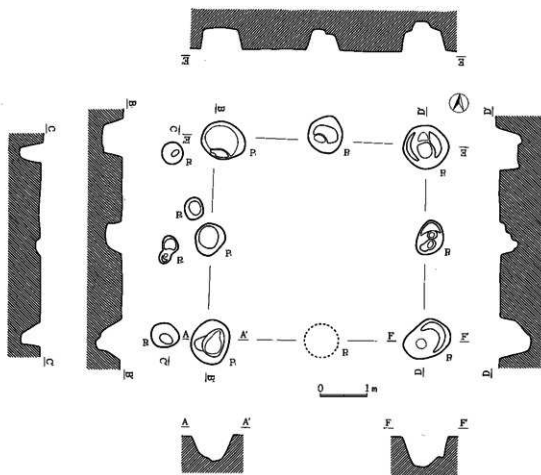
第153表 F-16号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉

標記 番号	器種	位置 (9.2)	器形の特 徴	調 査 整 理	備 考
1 (同)	蓋 (頂)	- (9.2)	つまみ部の形状不明	外面 全体ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	粘土は砂粒を多 く含み灰白色 (10Y7/1)

期は、これらの遺物の特徴が示す時期と同時期か、あるいは以降の時期とみられよう。

(17) F-17号掘立柱建物址 第363・364図

F-17号掘立柱建物址は、第I区セ-42グリッドにおいて検出された。本址は、F-16号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は復えられなかった。また、P_s・P₁間は攪乱を受けており、ピットの存在は確認できなかった。

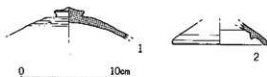


第363図 F-17号掘立柱建物址実測図 (1:80)

F-17は、2間×2間(4.3m×4.3m)の掘立柱建物址で、その西側には廂と考えられるピットが付属するものである(P₉~P₁₁)。因みに柱間は、P₁・P₂間で2.2m、P₉・P₁間で2.1mを測る。また、西列と廂の柱列との距離は0.9mを測る。主軸方向はN-79°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土層1層のみであった。埋土中においては柱底は確認されなかったが、その底面で柱痕が確認できるものがいくつかあった(P₁・P₂・P₉)。

本址のピット埋土中からは、須恵器片・土師器片・陶器?片が検出されている。



第364図 F-17号掘立柱建物址出土遺物 (1:4)

第154表 F-17号掘立柱建物址出土遺物一覧表(土器)

発掘 番号	器種	法量	器形の特徴	測 量	備 考
1 (附)	蓋 (須)	3.2 —	つまみ部は宝珠形を呈する。	外面 全体ロクロコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (7.5 Y4/1)
2 (附)	蓋 (須)	— (10.0)	内面にはかえりを有する。	外面 全体ロクロコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は黒褐色を呈し、 白色(10Y7/1)の 焼成痕あり。内外面 には褐色の砂が少 なり。(7.5 Y5/4)

1は、宝珠形つまみ部を有する須恵器蓋である。2は、内面にかえりを有する小形の蓋で、内外面に褐色に釉薬が掛かり陶器かと考えられるものである。つまみ部の形状は不明。

本址は、1、2の遺物が示す時期と同時期かそれに後出するものとして捉えられる。

(18) F-18号掘立柱建物址 第365・366図

F-18号掘立柱建物址は、第1区セ-42グリッドにおいて検出された。本址は、F-19と僅かに重複をみせるが、両者の新旧関係は不明である。

F-18は、3間×2間(5.0m×4.4m)の掘立柱建物址である。その内部には不規則な配列をみせるピットが5個(P₁₁~P₁₅)存在するが、本址に伴うものかどうかは不明と言わざるを得ない。因みに柱間距離は、P₅・P₆間で2.2m、P₇・P₈間で1.7mを測る。主軸方向は、N-76°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、円形かあるいは扇形で、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかったが、掘り方の底面において柱痕が確認されたものがある(P₅・P₇・P₈)。

本址のピットの埋土中からは、1の須恵器蓋の破片と、「く」の字状に外反する土師器甕の口縁部破片等が検出された。し

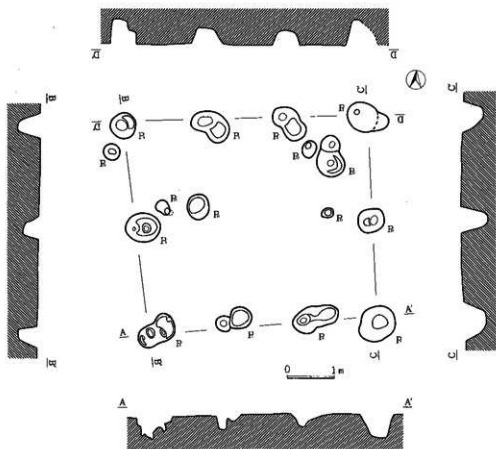
たがって本址は、これらの遺物が提示する時期とはほぼ同時期か、あるいはそれ以降の所産とみなし得よう。



第365図 F-18号掘立柱建物址
出土遺物(1:4)

第155表 F-18号掘立柱建物址出土遺物一覧表(土器)

発掘 番号	器種	法量	器形の特徴	測 量	備 考
1 (附)	蓋 (須)	— (17.7)	小破片、つまみ部の形状不明	外面 ロクロコナデ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み、 みにおい褐色 (7.5 Y5/4)



第36図 F-18号掘立柱建物址実測図(1:80)

(19) F-19号掘立柱建物址 第367・368図

F-19号掘立柱建物址は、第I区セ-42グリッドにおいて検出された。本址は、F-20号掘立柱建物址・F-18号掘立柱建物址と一部重複するが、これらとの新旧関係は捉えられなかった。

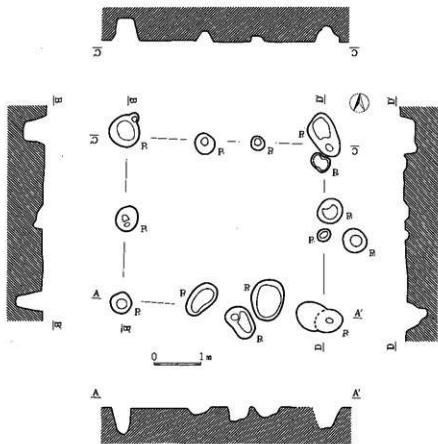
F-19は、3間×2間(4.3m×3.5m)の掘立柱建物址で、その柱列間には不規則なピットがいくつかみられるが(P₁₁~P₁₄)、本址に伴うものかどうかはわからない。ちなみに柱間は、P₁・P₂間で1.5m、P₂・P₃間で1.6mを測った。主軸方向はN-79°-Eを指す。

各ピットの掘り方は円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土は

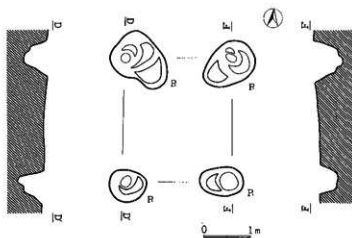


第367図 F-19号掘立柱建物址出土遺物(1:4)

2 獨立柱建物址



第368圖 F-19号獨立柱建物址实测图(1:80)



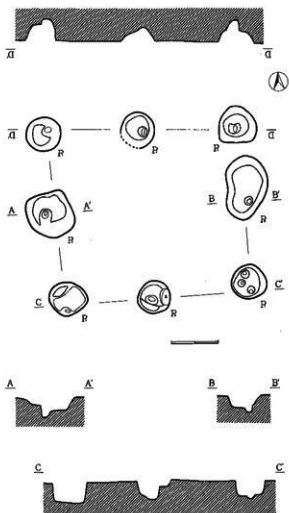
第369圖 F-20号獨立柱建物址实测图(1:80)

黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかった。

本址のピットの埋土中からは、回転ヘラキリによる須恵器環底部の破片1点が検出されている。したがって本址は、その調整手法が見出せる時期とほぼ同時期か、あるいはそれ以降の所産とみることができよう。

(20) F-20号掘立柱建物址 第369図

F-20号掘立柱建物址は、第I区セ・ソー42グリッドにおいて検出された。本址は、F-19号



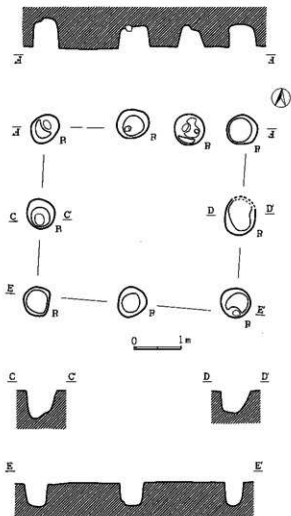
第370図 F-21号掘立柱建物址実測図 (1:80)

掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-20は、1間×1間(2.6m×2.4m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-12°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、円形ないしは歪んだ楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。その埋土中において柱痕を確認することはできなかったが、P₁・P₂・P₃の底面においては柱底を捉えることができた。それらの柱痕は、径15~20cm程度を測るものであった。

なお、本址のピットの埋土中からは、土師器甕破片1片と、縄文土器片2片が検出された。



第37図 F-22号掘立柱建物址実測図(1:80)

(21) F-21号掘立柱建物址 第370図

F-21号掘立柱建物址は、第I区セー43グリッドにおいて検出された。本址は、F-53号掘立柱建物址と重複するが、その新旧関係は不明である。

F-21は、2間×2間(4.0m×3.4m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で2.0m、 $P_3 \cdot P_4$ 間で1.7mを測る。主軸方向は、N-78°-Eを指す。

各ビットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認できなかったが、 P_3 を除く他のビットの掘り方の底面において柱痕が捉えられた。それらの柱痕はおおよそ15~20cm程度を測るものであった。

なお、本址においては遺物はまったく検出されなかった。

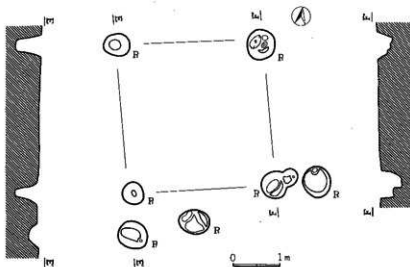
(22) F-22号掘立柱建物址 第371図

F-22号掘立柱建物址は、第I区セー43グリッドにおいて検出された。本址の P_3 は、F-53の P_3 と切り合うが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-22は、北列3間・南列2間×東西列2間(4.1m×3.9m)の掘立柱建物址で、柱間は、 $P_1 \cdot P_2$ 間で1.3m、 $P_4 \cdot P_5$ 間で2.0m、 $P_7 \cdot P_8$ 間で2.2mを測る。主軸方向はN-78°-Eを指す。

各ビットの掘り方は、いずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては、柱痕は確認されなかった。

なお、本址においては遺物はまったく検出されなかった。



第370図 F-23号掘立柱建物址実測図(1:80)

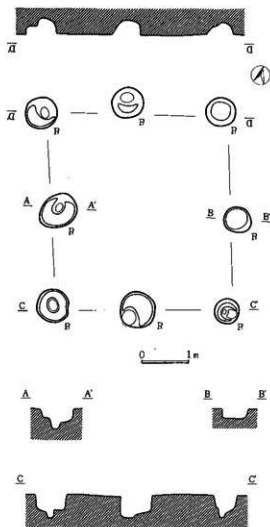
(23) F-23号掘立柱建物址 第372図

F-23号掘立柱建物址は、第I区スー41グリッドにおいて検出された。

F-23は、1間×1間(3.2m×3.1m)の掘立柱建物址で、柱間は、 $P_1 \cdot P_2$ 間で3.2m、 $P_4 \cdot P_5$ 間で3.0mを測る。主軸方向はN-27°-Wを指す。なお、 $P_1 \sim P_4$ の他に不規則な配列をみせる $P_5 \sim P_6$ がみられた。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては、柱痕は捉えられなかった。

本址においては、遺物はまったく検出されていない。



第370図 F-24号掘立柱建物址実測図(1:80)

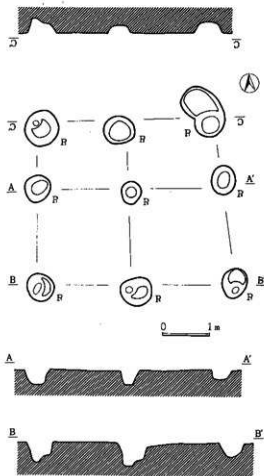
(24) F-24号掘立柱建物址 第373図

F-24号掘立柱建物址は、第I区スー41グリッドにおいて検出された。

F-24は、2間×2間(4.1m×3.8m)の掘立柱建物址で、柱間は、 $P_4 \cdot P_5$ 間で2.0m、 $P_5 \cdot P_6$ 間で1.7mを測る。主軸方向はN-28°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかったが、その掘り方の底面において柱痕が確認されたものが見つかった($P_4 \cdot P_5 \cdot P_7$)。それらの柱痕は、10~15cmを測っている。

なお、本址においては遺物はまったく検出されていない。



第374図 F-25号掘立柱建物址実測図(1:80)

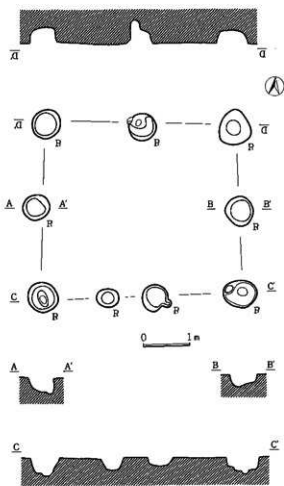
(25) F-25号掘立柱建物址 第374図

F-25号掘立柱建物址は、第I区ス-44グリッドにおいて検出された。その一部は、F-8号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-25は、2間×2間(4.1m×3.5m)の総柱の掘立柱建物址で、その柱列は、中央列がやや北列側に寄った位置にある。柱間は、 $P_1 \cdot P_2$ 間で2.0m、 $P_2 \cdot P_3$ 間で1.4m、 $P_3 \cdot P_4$ 間で2.0mを測る。主軸方向は、N-78°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形で、その埋土は1層のみであった。埋土中において柱痕を捉えることはできなかった。

なお、本址においては、遺物は1点も検出されていない。



第375図 F-26号掘立柱建物址実測図(1:80)

(26) F-26号掘立柱建物址 第375図

F-26号掘立柱建物址は、第I区セー43グリッドにおいて検出された。

F-26は、南列3間・北列2間×東西列2間(4.2m×3.5m)の掘立柱建物址で、柱間は、 $P_1 \cdot P_2$ 間は2.0m、 $P_3 \cdot P_4$ 間は1.8m、 $P_5 \cdot P_6$ 間1.4m、 $P_6 \cdot P_7$ 間は1.0mを測る。主軸方向はN-77°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかったが、その掘り方の底面において柱痕が捉えられたものがあった($P_2 \cdot P_5 \cdot P_6$)。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

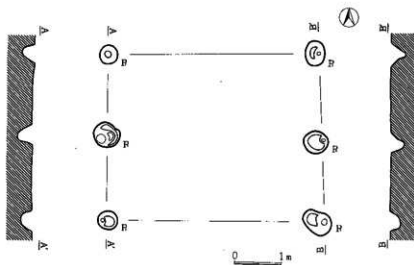
(27) F-27号掘立柱建物址 第376図

F-27号掘立柱建物址は、第I区セー44グリッドにおいて検出された。

F-27は、2間×1間(4.5m×3.5m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_2 \cdot P_3$ 間で1.7mを測る。主軸方向はN-83°-Eを指す。

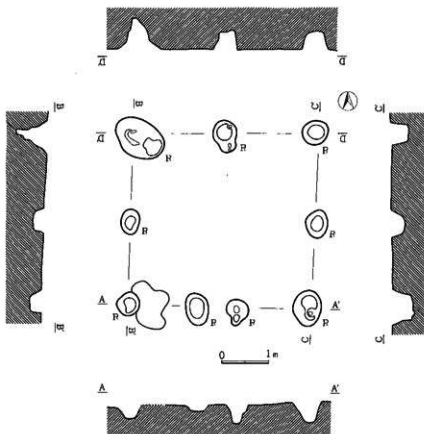
各ピットの掘り方は、いずれも小形な円形を呈しており、その埋土は黒色土I層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかった。

なお、本址からは遺物の出土が認められなかった。



第376図 F-27号掘立柱建物址実測図(1:80)

2 掘立柱建物址



第377図 F-28号掘立柱建物址実測図 (1:80)

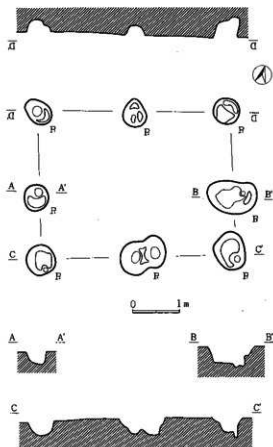
(28) F-28号掘立柱建物址 第377図

F-28号掘立柱建物址は、第I区セ-43・44グリッドにおいて検出された。

F-28は、南列3間・北列2間×東西列2間(3.8m×3.7m)の掘立柱建物址で、柱間は、 $P_1 \cdot P_2$ 間で1.8m、 $P_3 \cdot P_4$ 間で1.8m、 $P_5 \cdot P_6$ 間で1.5m、 $P_7 \cdot P_8$ 間で0.8mを測った。主軸方向はN-82°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、円形ないしは歪んだ楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱底は確認されなかったが、掘り方の底面において柱痕の捉えられたものがあった($P_3 \cdot P_7 \cdot P_8$)。ちなみに柱底は、 P_3 のもので10cmを測った。

なお、本址においては遺物はまったく検出されなかった。



第378図 F-29号掘立柱建物址実測図(1:80)

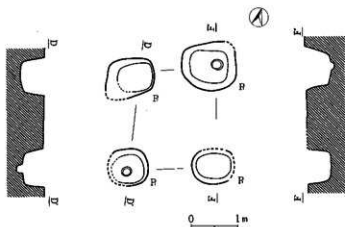
(29) F-29号掘立柱建物址 第378図

F-29号掘立柱建物址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。

F-29は、2間×2間(4.2m×3.2m)の掘立柱建物址で、柱間は、 $P_1 \cdot P_2$ 間で2.1m、 $P_3 \cdot P_4$ 間で1.7m、 $P_7 \cdot P_8$ 間で1.4mを測る。主軸方向はN-70°-Eを指す。

各掘り方は、円形ないしは歪んだ楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかったが、その掘り方の底面において柱痕を確認できるものがいくつかあった($P_1 \cdot P_7 \cdot P_8$)。また、 P_6 はW字状の断面を呈しており、2本の柱をもつものであったかもしれない。

なお、本址の掘り方の埋土中からは須恵器横瓶の破片1片が検出されている。



第379図 F-30号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(30) F-30号掘立柱建物址 第379図

F-30号掘立柱建物址は、第I区シ-42グリッドにおいて検出された。F-30は、F-31・F-33号掘立柱建物址と重複するが、三者の新旧関係は捉えられなかった。

F-30は、1間×1間(2.0m×1.8m)の掘立柱建物址で、その主軸方向はN-16°-Wを指す。

その各ピットの掘り方は、丸味を帯びた方形を呈するもので、掘り方の埋土はロームと黒色土が混じるものであった。埋土上面においては柱痕の検出ができなかったが、P₁・P₂については掘り方の底面において柱痕が確認された。両者の柱痕は、およそ20cm前後を測った。

なお、本址の掘り方の埋土中からは、叩き目のみれる須恵器甕の破片と、須恵器杯の破片数片が検出されている。

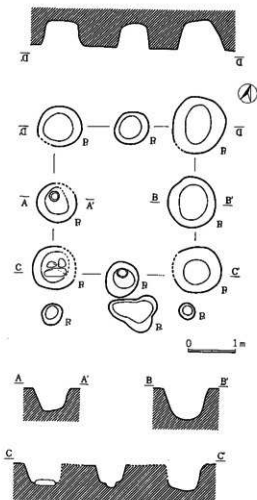
(31) F-31号掘立柱建物址 第380図

F-31号掘立柱建物址は、第I区シ-21グリッドにおいて検出された。F-31は、F-30・F-33号掘立柱建物址と重複するが、三者の新旧関係は捉えられなかった。

F-31は、2間×2間(3.0m×3.0m)の掘立柱建物址で、柱間はP₄・P₈間で1.5m、P₅・P₉間で1.5mを測る。本址の南列に平行してP₉～P₁₁がみられたが、これらは本址に付随する廂の柱穴かとも考えられる。主軸方向はN-16°-Wを指す。

F-31の各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈するもので、その埋土はロームと黒色土が混じるものであった。埋土上面においての柱痕の把握は困難であったが、その底面において柱痕が

IV 遺構と遺物



第380図 F-31号掘立柱建物址実測図 (1:80)

確認されたものがあつた。因みにその柱痕は20cm程度を測つた。なお、P₅の掘り方の底面にあつては、礎石と考えられる偏平な礎3点が据え置かれており注意される。

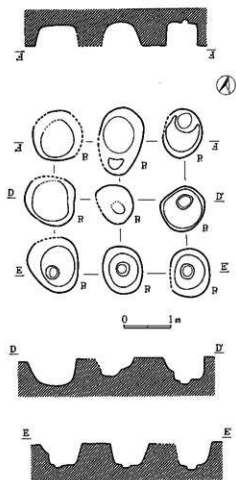
本址のピットの掘り方の埋土中からは、叩き目のみられる須恵器甕の破片1点が検出されている。

(32) F-32号掘立柱建物址 第381図

F-32号掘立柱建物址は、第I区シ-42グリッドにおいて検出された。F-32は、F-33・F-36号掘立柱建物址と重複関係にあるが、三者の新旧関係は捉えられなかつた。

F-32は、2間×2間(2.9m×2.9m)の総柱の掘立柱建物址で、柱間は、P₅・P₆間で1.5

2 掘立柱建物址

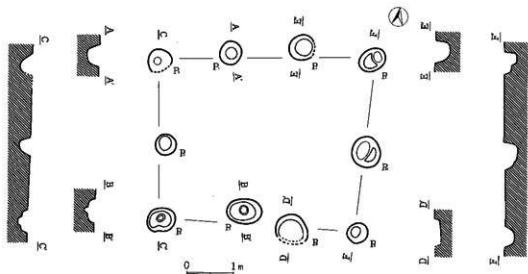


第30図 F-32号掘立柱建物址実測図 (1:80)

m、 $P_6 \cdot P_7$ 間で1.4m、 $P_7 \cdot P_8$ 間で1.5m、 $P_6 \cdot P_8$ 間で1.3mを測る。主軸方向はN-16'-Wを指す。

F-32の各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土はロームと黒色土が混じるものであった。埋土上面においての柱痕の把握は困難であったが、その底面において柱痕が確認されたものがいくつかあった ($P_6 \cdot P_6 \cdot P_7 \cdot P_8 \cdot P_8$)。ちなみにそれらの柱痕は、30cm程度を測る太いものであった。

なお、本址からは遺物は検出されていない。



第382図 F-33号掘立柱建物址実測図(1:80)

(33) F-33号掘立柱建物址 第382図

F-33号掘立柱建物址は、第I区シー42グリッドにおいて検出された。F-33は、F-30・F-31号掘立柱建物址と重複するが、三者の新旧関係は捉えられなかった。

F-33は、3間×2間(4.7m×3.3m)の掘立柱建物址であるが、P₇はややずれた配置をみせ、また南列は北列にくらべ柱間距離が短く、全体的にやや歪んだプランを見せている。因みに柱間は、P₃・P₄間で1.6m、P₄・P₅間で1.7m、P₅・P₆間で1.8mを測る。主軸方向はN-16°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土上面においては、柱底は捉えられなかった。

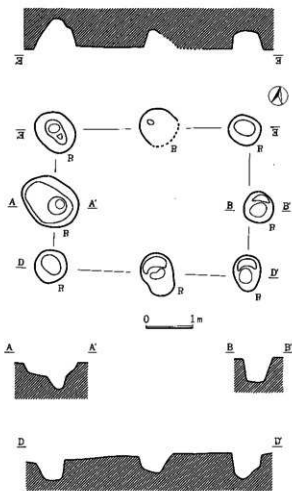
なお、本址においては遺物はまったく検出されなかった。

(34) F-34号掘立柱建物址 第383図

F-34号掘立柱建物址は、第I区セー40グリッドにおいて検出された。

F-34は、2間×2間(4.1m×2.9m)の掘立柱建物址で、柱間はP₁・P₄間で1.6m、P₃・P₆間で1.8mを測る。主軸方向はN-77°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土上面においては柱底は確認されなかったが、その掘り方の底面において柱底の



第383図 F-34号掘立柱建物址実測図 (1:80)

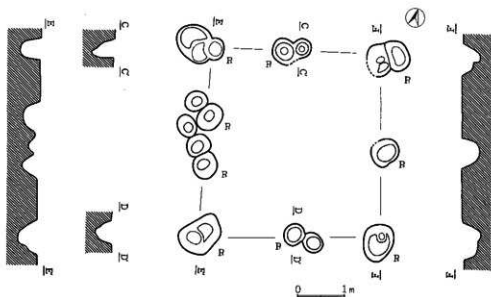
確認されたものがいくつかあった ($P_3 \cdot P_4$)。

なお、本址においては遺物はまったく検出されなかった。

(35) F-35号掘立柱建物址 第384図

F-35号掘立柱建物址は、第I区セー40グリッドにおいて検出された。F-35は、F-40号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-35は、基本的には西列3間・東列2間×南北列2間 (3.8m×3.8m)の掘立柱建物址であるが、 $P_2 \cdot P_3 \cdot P_4 \cdot P_5$ に近接して不規則にピットがみられる。柱間は、 $P_6 \cdot P_7$ 間で2.1m、 $P_8 \cdot P_9$ 間で1.8mを測る。主軸方向はN-19'-Wを指す。



第334図 F-35号掘立柱建物址実測図(1:80)

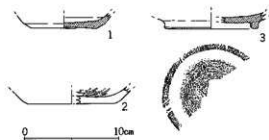
各ピットの掘り方は、おおよそ円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は捉えられなかった。

なお、本址ピットの掘り方の埋土中からは、須恵器甕の破片一点と土師器甕の破片数十点が出土している。

(36) F-36号掘立柱建物址 第385・386図

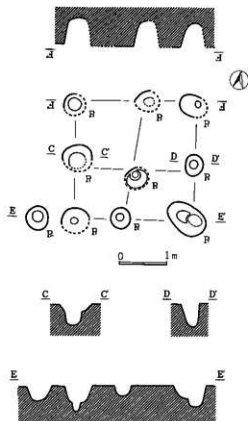
F-36号掘立柱建物址は、第I区シ-42グリッドにおいて検出された。F-36は、F-32・F-33号掘立柱建物址と重複するが、三者の新旧関係は捉えられなかった。

F-36は、2間×2間(2.5m×2.5m)の総柱の掘立柱建物址であるが、中央のピットP₉はややずれた位置にあり、また南列の延長線上にはP₁₀がみられるものである。因みに柱間は、P₁・P₂間で1.2m、P₃・P₄間で1.5mを測る。主軸方向はN-16°-Wを指す。



第386図 F-36号掘立柱建物址出土遺物(1:4)

2 掘立柱建物址



第36図 F-36号掘立柱建物址実測図 (1:80)

第36表 F-36号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉

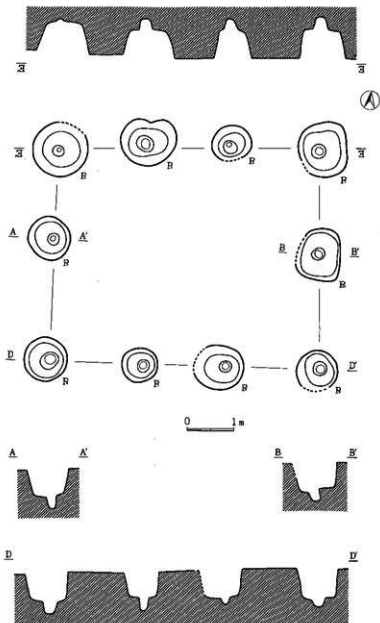
発掘 番号	器種	注量	器形の特長	測 定	備 考
1 (四)	杯 (須)	- (6.8)	縁部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクコロコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクコロコナデ (ロクコロ回転)	胎土は砂粒を含み 灰色 (N4/1)
2 (四)	杯	- (9.0)	縁部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクコロコナデ、底部切り離しの後、手持ちヘラズリ 内面 ヘラズリ (ロクコロ回転不明)	胎土は砂粒を含みに ふい黄褐色 (10YR7/3)
3 (四)	杯 (須)	- (10.0)	底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクコロコナデ、底部回転ヘラズリ 内面 ロクコロコナデ (ロクコロ回転)	胎土は精選されず 砂粒を多く含み 灰色 (10Y5/1)

各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中にあつては柱痕は捉えられなかったが、その底面において柱痕が確認されたものがあった(P₆)。

本址のピットの掘り方の埋土中からは、須恵器環・甕、土師器環、馬歯が検出されている。

1は須恵器環で、回転糸切りによる底部をみせるものである。また、2は土師器環の底部で切

IV 遺構と遺物



第37図 F-37号掘立柱建物址実測図 (1:80)

り離しの後全面に手持ちへラケズリがなされている。馬歯は1点のみの検出である。

なお、本址の時期は、1・2遺物が存在した時期と同時期かそれ以降と考えられる。また、馬歯は逆に、本址の存在した以前に生存していた馬のものともみることができる。

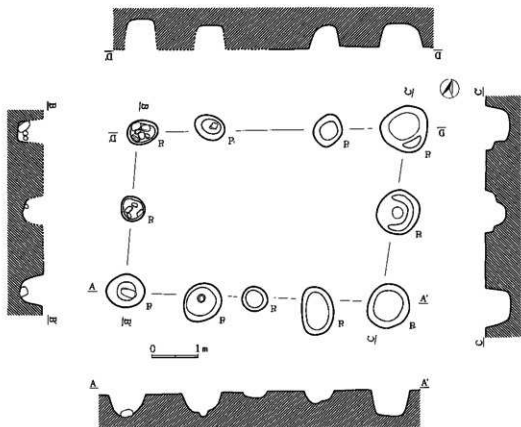
(37) F-37号掘立柱建物址 第387図

F-37号掘立柱建物址は、第I区セ-43グリッドにおいて検出された。F-37は、F-45・F-46号掘立柱建物址と重複するが、三者の新旧関係は捉えられなかった。

F-37は、3間×2間(5.6m×4.5m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で1.9m、 $P_4 \cdot P_5$ 間で1.9m、 $P_6 \cdot P_7$ 間で2.0mを測る。主軸方向は、N-79°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、 $P_1 \cdot P_{10}$ が丸味をおびた方形を呈し、それ以外はいずれも円形を呈するもので、その掘り方の埋土はロームと黒色土が混じるものであった。埋土中においては柱痕は確認できなかったが、掘り方の底面において各ピットとも柱痕が確認された。各柱痕は25~30cm程の径を測るもので、その並びは四方の列ともに直線的にそろっていた。

本址のピット埋土中からは、須恵器甕の破片2点と土師器甕の破片1点が検出されている。



第387図 F-37号掘立柱建物址実測図(1:80)

(38) F-38号掘立柱建物址 第388図

F-38号掘立柱建物址は、第I区スー42グリッドにおいて検出された。F-38は、H-11号住居址と重複するが、本址のほうが新しい時期の建物として捉えられた。また本址は、H-4号住居址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-38は、南列4間・北列3間×東西列2間(5.6m×3.4m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で1.6m、 $P_2 \cdot P_3$ 間で2.5m、 $P_4 \cdot P_5$ 間で1.6m、 $P_7 \cdot P_8$ 間で1.1mを測った。主軸方向は、 $N-70^\circ-E$ を指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱底は確認できなかったが、掘り方の底面において柱痕が確認されたものがある(P_7)。また、礎石と解してよいものかどうかかわからないが、 $P_3 \cdot P_4 \cdot P_5 \cdot P_6$ の底面には礎がみられた。 $P_3 \cdot P_5$ は各1個、 P_4 が6個、 P_5 は4個の礎が認められた。

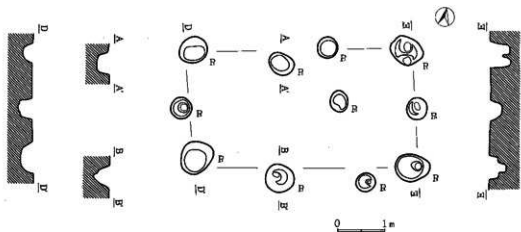
本址の P_7 は埋土中からは、叩き目のみられる須恵器片一片が出土している。

(39) F-39号掘立柱建物址 第389図

F-39号掘立柱建物址は、第I区スー42グリッドにおいて検出された。

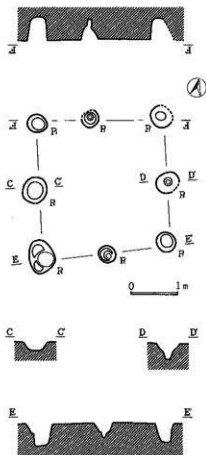
F-39は、3間×2間(4.8m×2.5m)の掘立柱建物址であるが、全体的に柱列のそろわないやや不規則ともいえるプランを呈している。因みに柱間は、 $P_1 \cdot P_2$ 間で1.7m、 $P_9 \cdot P_{10}$ 間で1.2mを測る。なお、プラン内にみられる P_{11} は、本址に伴うかどうかはわからなかった。本址の主軸方向は $N-76^\circ-E$ を指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中



第389図 F-39号掘立柱建物址実測図(1:80)

2 掘立柱建物址



第390図 F-40号掘立柱建物址実測図 (1:80)

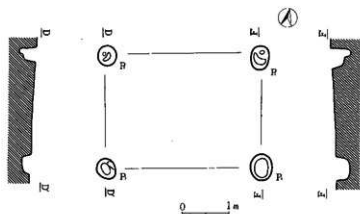
にあつては柱痕は捉えられなかったが、埋り方の底面において柱痕の捉えられたものがいくつかあった ($P_1 \cdot P_2 \cdot P_3$)。それらの柱痕は20cm前後を測るものであつた。

なお、本址においては遺物は検出されていない。

(40) F-40号掘立柱建物址 第390図

F-40号掘立柱建物址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。本址は、F-35号掘立柱建物址と重複するが両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-40は、2間×2間 (2.9m×2.7m) の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で1.5m、 $P_3 \cdot P_4$ 間で1.3m、 $P_5 \cdot P_6$ 間で1.3mを測つた。主軸方向は $N-19^\circ-W$ を指す。



第391図 F-41号掘立柱建物址実測図(1:80)

(41) F-41号掘立柱建物址 第391図

F-41号掘立柱建物址は、第I区セー41グリッドにおいて検出された。

F-41は、1間×1間(3.4m×2.5m)の掘立柱建物址として捉えられたが、あるいはその柱列が南にさらに1間延び2間×1間のプランとなることも想定できる。その主軸方向はN-73°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は捉えられなかったが、P₁・P₂はその底面に柱痕が残っていた。いずれも10~15cm程度の径を測るものであった。

なお、本址においては遺物はまったく検出されなかった。

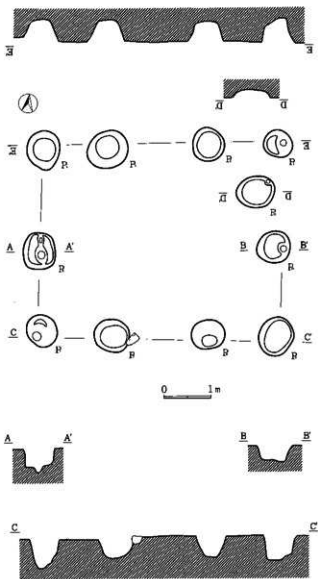
(42) F-42号掘立柱建物址 第392図

F-42号掘立柱建物址は、第I区セー40グリッドにおいて検出された。本址は、F-83・F-84号掘立柱建物址と付随するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-42は、3間×2間(5.2m×4.2m)の掘立柱建物址である。東列のP₁₁はややずれた位置にあり、本址に付随するものかどうかかわからない。柱間は、P₁・P₂間で1.6m、P₆・P₈間で1.7m、P₇・P₉間で2.1mを測る。主軸方向はN-72°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかったが、その掘り方の底面において柱痕が捉えられたものがあった。(P₂・P₆・P₈)。それらの柱痕は10~15cm程度の径を測った。

なお、本址においては遺物はまったく検出されていない。

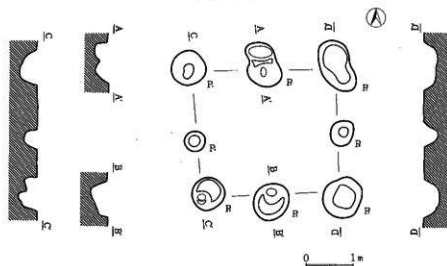


第39図 F-42号掘立柱建物址実測図 (1:80)

本址のピットの埋土中からは、内面黒色研磨のなされた土師器破片と土師器甕破片数点が出土している。

(43) F-43号掘立柱建物址 第393図

F-43号掘立柱建物址は、第I区チ-36グリッドにおいて検出された。



第339図 F-43号掘立柱建物址実測図 (1:80)

F-43は、2間×2間 (3.1m×2.6m) の掘立柱建物址で、柱間は $P_4 \cdot P_5$ 間で1.2m、 $P_8 \cdot P_9$ 間で1.5mを測る。主軸方向はN-12°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。その埋土中においては柱痕は捉えられなかった。

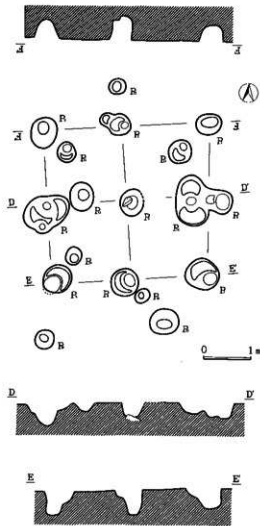
なお、本址のピット埋土中からは遺物は検出されなかった。

(44) F-44号掘立柱建物址 第394図

F-44は、2間×2間 (3.4m×3.3m) の総柱の掘立柱建物址で、さらにそのプラン内には $P_{10} \sim P_{14}$ 、プラン外には $P_{15} \sim P_{19}$ がみられるが、これらのすべてのピットが本址に付随するものかどうかはわからない。ただし、その配列性から $P_{10} \sim P_{15}$ のピットは伴うものと見てよいかもしれない。柱間は $P_2 \cdot P_3$ 間で1.7m、 $P_4 \cdot P_5$ 間で1.7m、 $P_8 \cdot P_9$ 間で1.6m、 $P_2 \cdot P_3$ 間で1.6mを測った。主軸方向はN-9°-Wを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形ないし楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。その埋土中にあつては柱痕は捉えられなかった。

なお、本址のピット埋土中からは須恵器のかえりのある蓋の破片が出土している。したがって本址の所産期は、かえりのある蓋のみられる時期と併行するかそれに後行する時期とみられる。



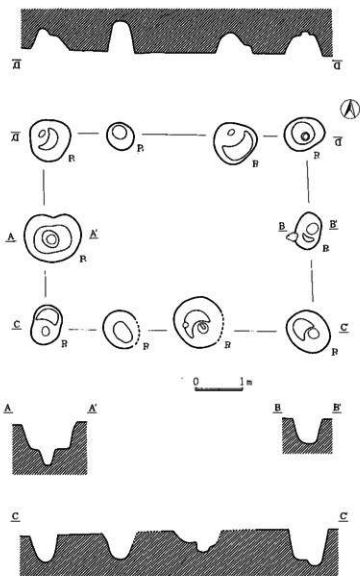
第394図 F-44号掘立柱建物址実測図(1:80)

(45) F-45号掘立柱建物址 第395図

F-45号掘立柱建物址は、第I区セ-43グリッドにおいて検出された。本址は、F-37号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-45は、3間×2間(5.6m×4.2m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で1.6m、 $P_2 \cdot P_3$ 間で2.4m、 $P_4 \cdot P_5$ 間で2.3m、 $P_6 \cdot P_7$ 間で2.3mを測る。主軸方向はN-78°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土はロームと黒色土が混じったものであった。その埋土中において柱痕は捉えられなかったが、いくつかはその底面において柱痕が確認できた。因みにその柱痕は15~30cm前後を測るものであった。

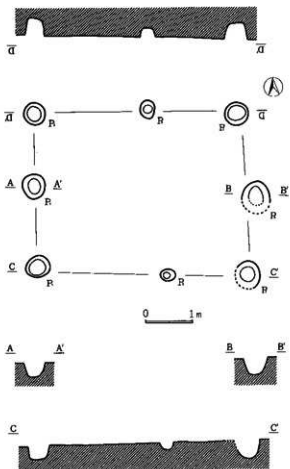


第395図 F-45号掘立柱建物址実測図(1:80)

なお、本址においては遺物は検出されなかった。

(46) F-46号掘立柱建物址 第396図

F-46号掘立柱建物址は、第I区セー43・44グリッドにおいて検出された。本址は、F-37号掘立柱建物址と重複するが、その新旧関係は把握できなかった。



第396図 F-46号掘立柱建物址実測図 (1:80)

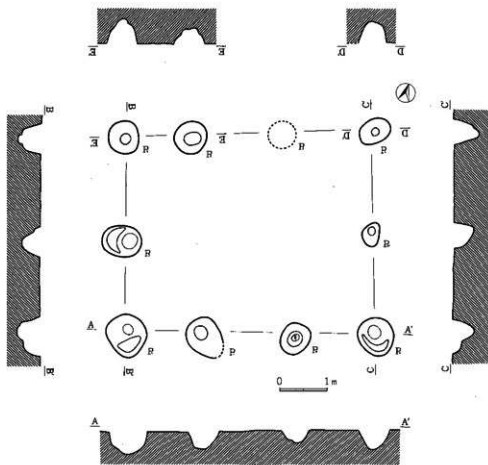
F-46は、2間×2間(4.3m×3.3m)の掘立柱建物址で、その柱間は、 $P_1 \cdot P_2$ 間で1.9m、 $P_2 \cdot P_3$ 間で2.4m、 $P_3 \cdot P_4$ 間で1.6mを測る。主軸方向は $N-90^\circ-E$ を指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈し、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

(47) F-47号掘立柱建物址 第397図

F-47号掘立柱建物址は、第I区ス-42グリッドにおいて検出された。F-47は、H-17号住居址と重複関係をもつが、H-17の床面下にその $P_1 \cdot P_{10}$ のプランがあり、本址がF-17に先行



第37図 F-47号掘立柱建物址実測図(1:80)

するものとして捉えられた。また、その南列はF-48号掘立柱建物址と重複するが両者の新旧関係は捉えられなかった。なお、本址のP₂は風倒木の擾乱により確認されなかった。

F-47は、3間×2間(5.3m×4.3m)の掘立柱建物址で、その柱間はP₃・P₄間で1.5m、P₄・P₅間で2.2m、P₇・P₈間で2.0mを測る。主軸方向はN-66°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土土中においては柱痕は捉えられなかったが、その底面において柱痕が確認されたのがいくつかある(P₁・P₄・P₆)。それらの柱痕は20cm弱を測るものであった。

なお、本址のピット掘り方の埋土中からは、須恵器甕の破片が出土している。これは詳しい時期を示す特徴的な遺物ではないが、本址の時期はこの遺物の所産期以降・H-17の所産期未満に限定されよう。

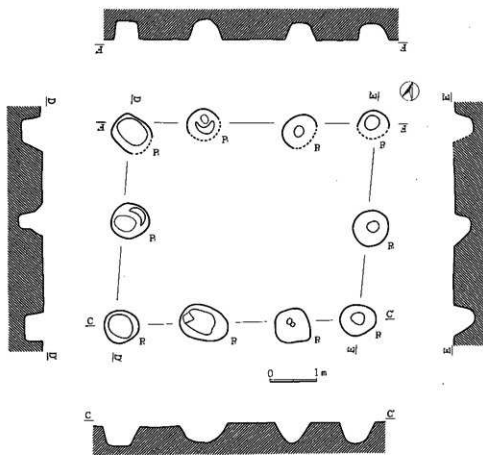
(48) F-48号住居址 第398・399図

F-48号掘立柱建物址は、第I区スー42グリッドにおいて検出された。F-48は、F-47・F-49号掘立柱建物址と重複関係にあるが、三者の新旧関係は捉えられなかった。

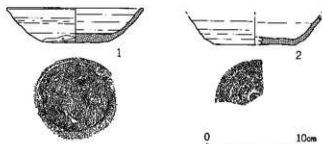
F-48は、3間×2間(5.2m×4.1m)の掘立柱建物址で、その柱間は $P_8 \cdot P_9$ 間で1.4m、 $P_8 \cdot P_6$ 間で2.3m、 $P_9 \cdot P_{10}$ 間で2.0mを測った。主軸方向は $N-69^\circ-E$ を指す。

各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は捉えられなかった。

なお、本址の P_1 の埋土中からは、図示した1・2の須恵器杯が検出されている。1は、回転糸切りの後中央を除き全面に手持ちヘラケズリのなされた底部をみせるもので、2は回転ヘラキリ



第398図 F-48号掘立柱建物址実測図(1:80)



第399図 F-48号掘立柱建物址実測図(1:4)

第157表 F-48号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉

図号 番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (回)	坏 (須)	(14.6) 3.7 6.8	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転糸切りの状、中央を除き全周手持ちヘラズリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ石回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (7.5 Y7/1)
2 (回)	坏 (須)	— (8.7)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラズリ 内面 体部ロクロコナデ (ロクロ石回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (7.5 Y7/1)

による底部をみせるものである。このなかで1の坏は器形の6割程度遺存しており、埋土中に紛れ込んだものというよりは、恣意的に埋め込まれたものかもしれない。

本址の所産期は少なくともこれらの遺物の特徴が見出せる時期以降とみなせよう。

(49) F-49号掘立柱建物址 第400・401図

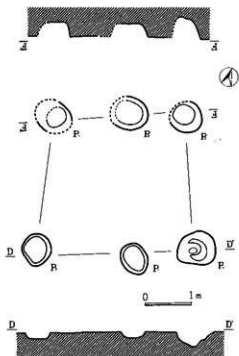
F-49号掘立柱建物址は、第I区ス-42グリッドにおいて検出された。F-49は、F-48号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-49は、2間×1間(3.3m×2.9m)の掘立柱建物址であるが、西列のP₃・P₄はややずれた配置をみせている。柱間はP₄・P₅間で1.9m、P₅・P₆間で1.4mを測る。主軸方向はN-69°-Eを指す。

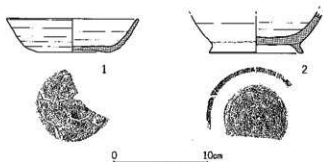
各ピットの掘り方は、概ね円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかった。

なお、本址のピット埋土中からは、1の回転糸切りによる底部をみせる須恵器坏、2の回転ヘラズリによる須恵器長頸瓶底部(高台付)、その他「く」の字状に外反する土師器甕口縁部破片等が出土している。殊に1・2は、比較的大きな破片であり埋土中に紛れ込んだものというより、恣意的に埋め込まれたものかもしれない。

2 獨立柱建物址



第400図 F-49号獨立柱建物址実測図 (1:80)



第401図 F-49号獨立柱建物址出土遺物 (1:4)

第194表 F-49号獨立柱建物址出土遺物一覽表 (土器)

発掘番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (32)	坏 (瑣)	14.0 3.5 7.5	胴部は外反し、底部平底。	外面 ロクロココナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロココナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色を呈する。 (10Y5/1)
2 (19)	長頸瓶 (瑣)	- (10.0)	底部には高台が貼り付けられる。	外面 胴部ロクロココナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロココナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色 (N5/0)

いずれにしても本址の所産期は、1・2のような遺物の特徴が見出せる時期以降と考えられよう。

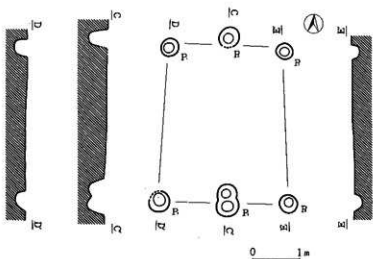
(50) F-50号掘立柱建物址 第402図

F-50号掘立柱建物址は、第I区セ-43グリッドにおいて検出された。本址は、F-53号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-50は、2間×1間(3.2m×2.7m)の掘立柱建物址で、その柱間は、 $P_4 \cdot P_5$ 間で1.4mを測る。主軸方向はN-13°-Wを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しているが、 P_5 のみ菊形を呈し主柱とそれに付随する柱の二者の存在を暗示させた。なお、掘り方の埋土はI層のみで、そのなかには柱痕は捉えられなかった。

本址においては、遺物は一点も検出されなかった。



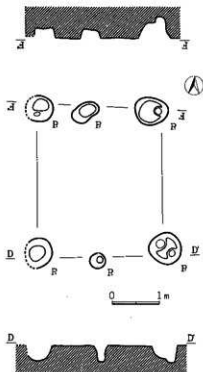
第402図 F-50号掘立柱建物址実測図(1:80)

(51) F-51号掘立柱建物址 第403図

F-51号掘立柱建物址は、第I区ス-42グリッドにおいて検出された。

F-51は、2間×1間(2.9m×2.6m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で1.5m、 $P_3 \cdot P_4$

2 掘立柱建物址



第四図 F-51号掘立柱建物址実測図 (1:80)

間で1.5mを測る。主軸方向はN-9°-Wを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、埋土中には柱痕は捉えられなかった。

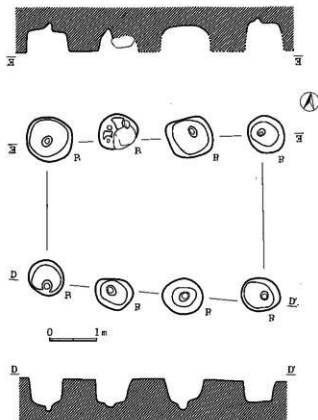
なお、本址のピット中からは遺物は検出されなかった。

(52) F-52号掘立柱建物址 第404図

F-52号掘立柱建物址は、第I区ソ-40グリッドにおいて検出された。本址は、H-43号住居址と重複関係にあり、両者の新旧関係は微妙であったが、一応本F-52がH-43に後出するものとして捉えられた。

F-52は、3間×1間の掘立柱建物址で、北列4.4m・南列4.6m・東列3.5m・西列3.1mと西列が東列に比べ0.4m程短く、やや歪んだプランを呈している。柱間はP₁・P₂間で1.5m、P₃・P₄間で1.4m、P₅・P₆間で1.7mを測る。主軸方向は、N-80°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈し、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中にあっ



第404図 F-52号掘立柱建物址実測図 (1:80)

ては柱痕は捉えられなかったが、いずれのピットもその底面において柱痕が確認できた。ちなみにP₁の柱痕は20cm前後を測った。

なお、本址のピット中からは遺物は検出されていない。

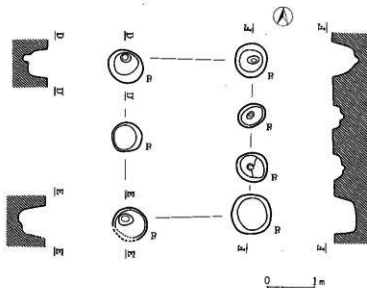
(53) F-53号掘立柱建物址 第405・406図

F-53号掘立柱建物址は、第1区セー43グリッドにおいて検出された。F-53は、F-21・F-22号掘立柱建物址と重複するが、三者の新旧関係は捉えられなかった。

F-53は、東列3間・西列2間×南北列1間(3.4m×2.7m)の掘立柱建物址



第405図 F-53号掘立柱建物址出土遺物 (1:4)



第406図 F-53号掘立柱建物址実測図 (1:80)

第159表 F-53号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉

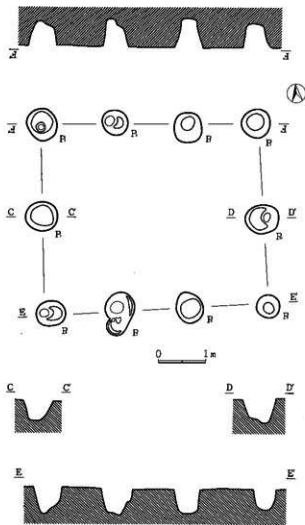
押出 番号	器種	注量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	環 (須)	- - (7.6)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナダ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナダ (ロクロ石筒転)	胎土は精選され ず灰色(N5/0) を呈する。
2	環	- -	体部は外反し、底部はやや丸味をおびた 平底になると思われる。	外面 底部手持ちヘラケズリ 内面 見込み部にラセン暗文が施される。	胎土は60粒を含み 褐色(7.5YR6/8) を呈する。

で、柱間は $P_1 \cdot P_7$ 間で1.2mを測る。主軸方向はいずれも円形を呈しており、その深さは四隅のビット($P_1 \cdot P_2 \cdot P_6 \cdot P_7$)が深く、その中間($P_3 \cdot P_4$)は浅いものであった。いずれのビットの埋土も黒色土I層のみで、そのなかにあつては柱痕は捉えられなかったが、掘り方の底面において柱痕が捉えられた($P_1 \cdot P_2 \cdot P_4 \cdot P_6 \cdot P_7$)。

本址のビット埋土中からは、須恵器環・甕、土師器環・甕の破片が検出されている。

1は回転糸切りによる須恵器環底部である。2は見込み部にラセン暗文のみえる土師器環底部である。この他図示しなかったが弱く「コ」の字状に外反する土師器甕の口縁部破片が検出されている。

本址の所産期は、これらの遺物の諸特徴がみられる時期以降と考えられよう。



第407図 F-54号掘立柱建物址実測図 (1:80)

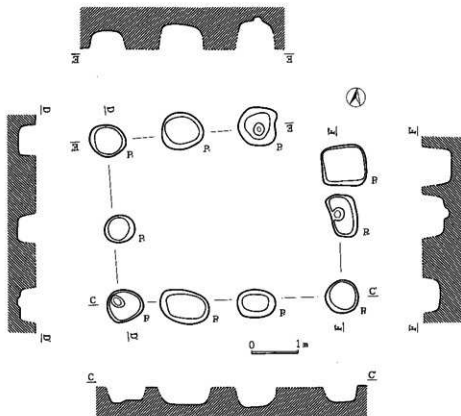
(54) F-54号掘立柱建物址 第407図

F-54号掘立柱建物址は、第I区ター37グリッドにおいて検出された。

F-54は、3間×2間(4.6m×3.9m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で1.4m、 $P_{10} \cdot P_1$ 間で2.0mを測る。主軸方向は $N-86^\circ-E$ を指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで柱痕は捉えられなかった。

なお、本址のピット中からは遺物は検出されていない。



第408図 F-55号掘立柱建物址実測図 (1:80)

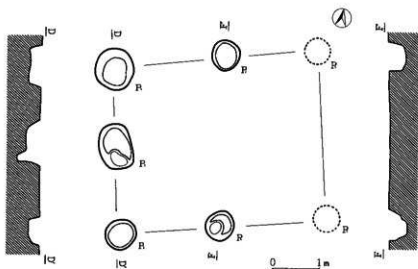
(55) F-55号掘立柱建物址 第408図

F-55号掘立柱建物址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。本F-55は、H-36・H-37号住居址と重複する。本址とH-37号住居址については本址が新しいものとして確認できたが、H-36との新旧関係は捉えられなかった。しかし本址はH-36に後出するものとしてみたほうが妥当であろう。したがってその順序は古いものよりH-37→H-36→F-55となろうか。

F-55は、3間×2間(4.7m×3.5m)の掘立柱建物址だが、P₁は北列よりややずれた位置に存在している。柱間はP₂・P₃間で1.7m、P₅・P₆間で1.5mを測る。主軸方向はN-78°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、P₁・P₇・P₁₀は方形が意図され、他は円形のプランを呈している。ピットの埋土は黒色土1層のみで柱底は捉えられなかったが、その底面において柱底が確認できたものがあつた(P₂・P₅・P₁₀)。それらの柱底は25cm程度を測るものであつた。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。



第409図 F-56号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(56) F-56号掘立柱建物址 第409図

F-56号は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。F-56は、H-34号住居址・F-83号掘立柱建物址と重複する。本址は、H-34より新しいものとして捉えられたが、F-83との新旧関係は把握できなかった。

F-56は、南北列2間×東列1間・西列2間(4.4m×3.5m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_2 \cdot P_3$ 間で2.4m、 $P_4 \cdot P_5$ 間は1.6mを測る。主軸方向は $N-70^\circ-E$ を指す。

各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中において柱痕が捉えられるものはなかったが、 P_4 はその底面に径20cm程度の柱痕が捉えられた。

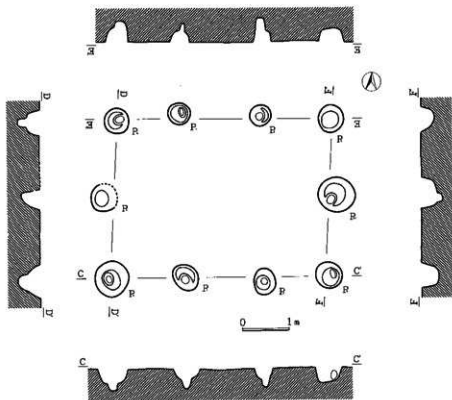
なお、本址においては遺物はまったく検出されなかった。

(57) F-57号掘立柱建物址 第410図

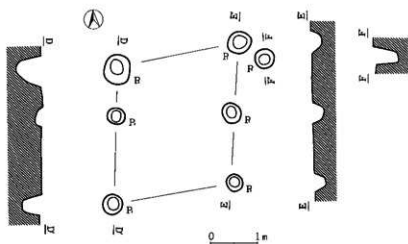
F-57号掘立柱建物址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。本址は、F-59号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-57は、3間×2間(4.6m×3.4m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_2 \cdot P_3$ 間で1.6m、 $P_9 \cdot P_{10}$ 間で1.7mを測る。主軸方向は $N-66^\circ-E$ を指す。

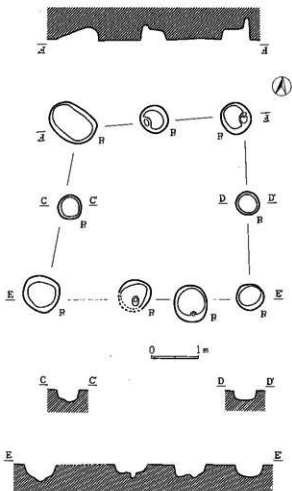
2 獨立柱建物址



第418圖 F-57号獨立柱建物址実測図 (1 : 80)



第419圖 F-58号獨立柱建物址実測図 (1 : 80)



第412図 F-59号掘立柱建物址実測図 (1:80)

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱底は捉えられなかったが、その底面に柱底の確認されたものがあった($P_2 \cdot P_3 \cdot P_4 \cdot P_6 \cdot P_7 \cdot P_8 \cdot P_{10}$)。それらの柱底の径は10~25cm程度を測った。

本址のピット埋土中からは、須恵器甕破片・土師器甕破片が検出されている。土師器甕は、弱く「コ」の字状に外反する口縁部破片であった。

(58) F-58号掘立柱建物址 第411図

F-58号掘立柱建物址は、第I区ター-37グリッドにおいて検出された。

2 掘立柱建物址

F-58は、2間×1間(2.9m×2.6m)の掘立柱建物址であるが、ピットの配置が全体的にややずれ、歪んだプランを呈している。柱間は、 $P_2 \cdot P_3$ 間で1.0m、 $P_5 \cdot P_6$ 間で1.5mを測る。主軸方向はN-6'-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで柱痕は捉えられなかった。

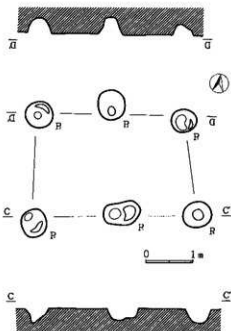
なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

(59) F-59号掘立柱建物址 第412図

F-59号掘立柱建物址は、第I区セ-40・41グリッドにおいて検出された。本址は、F-57号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係はつかめなかった。

F-59は、南列4間・北列3間×東西列2間(4.5m・3.9m×3.4m)の掘立柱建物址で、 P_6 がややずれた配置をみせている。柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で2.1m、 $P_3 \cdot P_4$ 間で1.9mを測る。主軸方向はN-72'-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中



第412図 F-60号掘立柱建物址実測図(1:80)

においては柱痕は捉えられなかったが、底面において柱痕が確認できたものがある (P_1 ・ P_2 ・ P_3)。ちなみにその柱痕の太さは、 P_1 で15cm、 P_2 で15cm、 P_3 で10cm程度を測る。

なお、本址においては遺物はまったく検出されなかった。

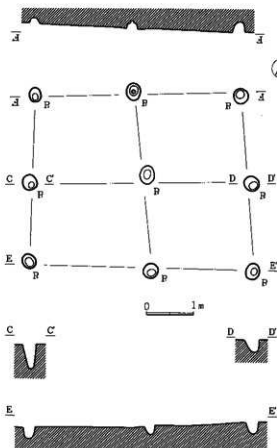
(60) F-60号掘立柱建物址 第413図

F-60号掘立柱建物址は、第I区ス-44グリッドにおいて検出された。

F-60は、2間×1間(3.5m×3.1m×2.1m)の掘立柱建物址で、柱間は P_2 ・ P_3 間で1.6m、 P_1 ・ P_2 間で1.8mを測る。主軸方向はN-77-Eを指す。

各ピットの掘り方はおおよそ円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。



第414図 F-61号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(61) F-61号掘立柱建物址 第414図

F-61号掘立柱建物址は、第II区ス-23グリッドにおいて検出された。

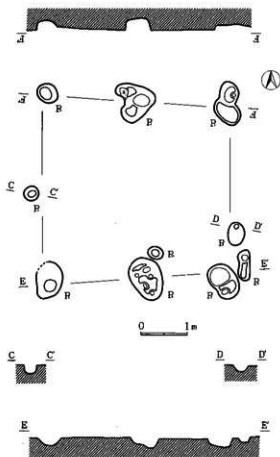
F-61は、2間×2間(4.8m×3.7m)の総柱の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で2.4m、 $P_3 \cdot P_4$ 間で2.0mを測る。主軸方向は $N-74^\circ-E$ を指す。

各ピットの掘り方はいずれも小形の円形を呈し、比較的浅いものであった。その埋土は黒色土1層のみである。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

(62) F-62号掘立柱建物址 第415図

F-62号掘立柱建物址は、第II区ス-24グリッドにおいて検出された。



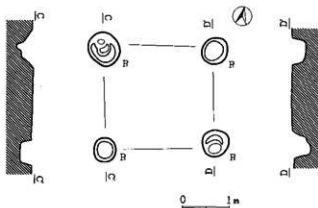
第415図 F-62号掘立柱建物址実測図(1:80)

IV 遺構と遺物

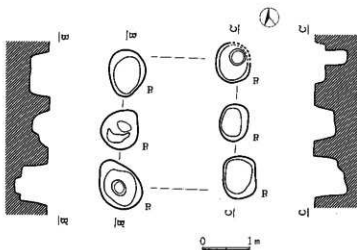
F-62は、2間×2間の掘立柱建物址であるが、やや歪んだ方形のプランを呈し、北列4.0m・南列3.8m・東列3.8m・西列4.0mを測る。柱間はP₃・P₄間で2.1m、P₅・P₆間で2.2mを測る。主軸方向はN-7°-Wを指す。

各ピットの掘り方は基本的に円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみで柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。



第416図 F-63号掘立柱建物址実測図(1:80)



第417図 F-64号掘立柱建物址実測図(1:80)

(63) F-63号掘立柱建物址 第416図

F-63号掘立柱建物址は、第II区ター23グリッドにおいて検出された。

F-63は、1間×1間(2.3m×2.3m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-13°-Wを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

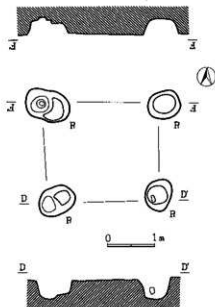
(64) F-64号掘立柱建物址 第417図

F-64号掘立柱建物址は、第II区スー25グリッドにおいて検出された。F-64は、H-67号住居址を切って存在している。

F-64は、2間×1間(2.8m×2.5m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で1.5m、 $P_3 \cdot P_4$ 間で1.3mを測る。主軸方向はN-8°-Wを指す。

各ピットの掘り方はいずれも楕円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみである。埋土中においては柱痕は捉えられなかったが、その底面において柱痕が確認されたものがあつた(P_1 、 P_4)。ちなみにそれらの柱痕は30cm程度を測った。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。



第418図 F-65号掘立柱建物址実測図(1:80)

(65) F-65号掘立柱建物址 第418図

F-65号掘立柱建物址は、第II区タ-22グリッドにおいて検出された。

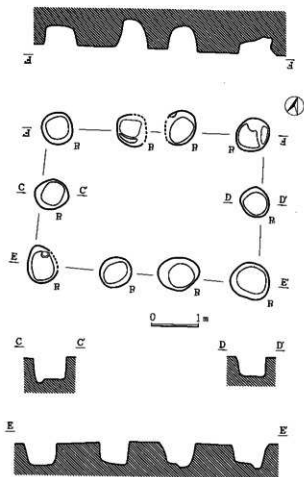
F-65は、1間×1間(2.4m×2.1m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-73°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも楕円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

(66) F-66号掘立柱建物址 第419図

F-66号掘立柱建物址は、第II区タ・チ-22・23グリッドにおいて検出された。



第419図 F-66号掘立柱建物址実測図(1:80)

F-66は、3間×2間(4.7m×3.2m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_0 \cdot P_0$ 間で1.5m、 $P_0 \cdot P_0$ 間で1.6mを測る。主軸方向はN-72°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は捉えられなかった。

本址のピット埋土中からは、須恵器蓋破片2点、須恵器甕破片1片が検出されている。蓋は縁部が短く下降するものである。

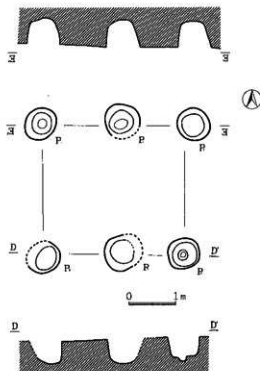
(67) F-67号掘立柱建物址 第420図

F-67号掘立柱建物址は、第II区チ-21グリッドにおいて検出された。

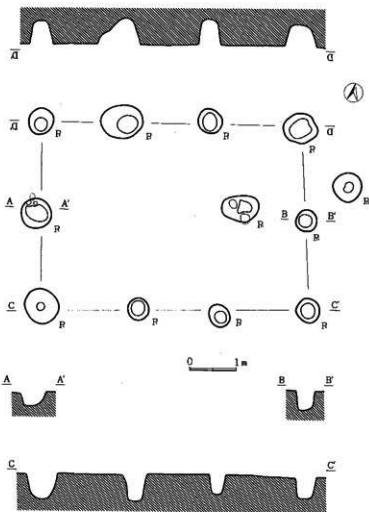
F-67は、2間×1間(2.9m×2.4m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で1.5mを測る。主軸方向はN-72°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認できなかった。

なお、本址においては遺物はまったく検出されなかった。



第420図 F-67号掘立柱建物址実測図(1:80)



第421図 F-68号掘立柱建物址実測図(1:80)

(68) F-68号掘立柱建物址 第421図

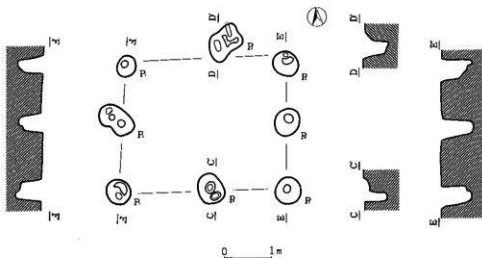
F-68号掘立柱建物址は、第Ⅲ区テ-25グリッドにおいて検出された。

F-68は、3間×2間(5.7m×3.9m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で2.0m、 $P_2 \cdot P_3$ 間で1.8m、 $P_9 \cdot P_{10}$ 間で1.9mを測る。なお、 $P_{11} \cdot P_{12}$ は本址に付随するものかどうかはわからない。主軸方向はN-72°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物は検出されていない。

2 掘立柱建物址



第42図 F-69号掘立柱建物址実測図 (1 : 80)

(69) F-69号掘立柱建物址 第422図

F-69掘立柱建物址は、第IV区ナ・ニ-32グリッドにおいて検出された。

F-69は、2間×2間 (3.6m×2.8m) の掘立柱建物址で、柱間は $P_3 \cdot P_4$ 間で1.3m、 $P_5 \cdot P_6$ 間で1.9m、 $P_7 \cdot P_8$ 間で1.5mを測る。主軸方向はN-86°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、基本的には円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中において柱痕が捉えられるものはなかったが、その底面において柱痕が残るものがいくつかあった ($P_1 \cdot P_2 \cdot P_4 \cdot P_5 \cdot P_6 \cdot P_7$)。それらの柱痕は10~20cmを測るものであった。

本址からは遺物はまったく検出されていない。

(70) F-70号掘立柱建物址 第423・424図

F-70号掘立柱建物址は、第IV区ナ-33グリッドにおいて検出された。

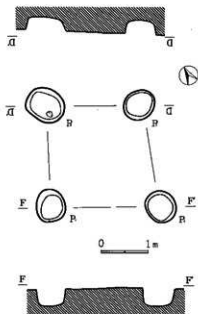
F-70は、1間×1間 (2.2m×2.2m) の掘立柱建物址で、主軸方向はN-13°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、埋土中においては柱痕は捉えられなかった。



第42図 F-70号掘立柱建物址出土遺物 (1 : 4)

IV 遺構と遺物



第424図 F-70号掘立柱建物址実測図 (1:80)

本址の埋土中からは、1の回転糸切りによる須恵器坏底部が検出されている。したがって本址の所産期も、回転糸切り手法のみられる時期以降とみることができよう。

(71) F-71号掘立柱建物址 第425図

F-71号掘立柱建物址は、第V区ナ-36グリッドにおいて検出された。

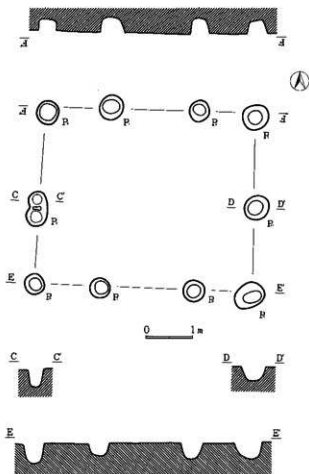
F-71は、3間×2間(4.6m×3.8m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で1.2m、 $P_2 \cdot P_3$ 間で1.9m、 $P_1 \cdot P_{10}$ 間で1.9mを測る。なお、 P_2 中には柱2本が立っていたものと思われる。主軸方向はN-84°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱底は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

(72) F-72号掘立柱建物址 第426図

F-72号掘立柱建物址は、第V区ニ-38グリッドにおいて検出された。本址は、F-77号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

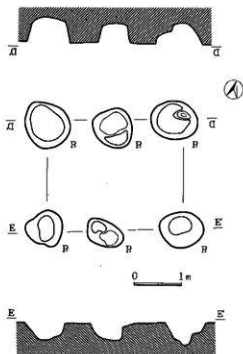


第425図 F-71号掘立柱建物址実測図 (1:80)

F-72は、2間×1間 (3.0m×2.7m) の掘立柱建物址で、柱間は $P_5 \cdot P_6$ 間で1.3m、 $P_2 \cdot P_3$ 間で1.7mを測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層みであった。埋土中においては柱痕は捉えられなかったが、 P_5 についてはピットの底面に径20cmを測る柱痕が確認された。

なお、本址のピット埋土中からは、須恵器燹破片・土師器燹破片の他、見込み部にラセン状暗文の施される土師器坏底部破片が検出されている。



第425図 F-72号掘立柱建物址実測図(1:80)

(73) F-73号掘立柱建物址 第427図

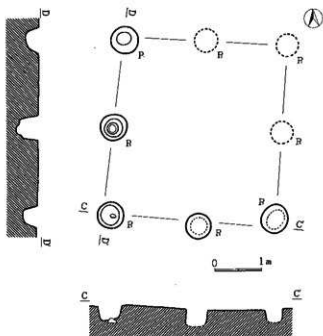
F-73号掘立柱建物址は、第V区ナ・ニー37グリッドにおいて検出された。本址は、H-109号住居址を切って存在しており、また、H-108号住居址と重複関係にあるがこれとの新旧関係は捉えられなかった。

F-73は、2間×2間(3.5m×3.7m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_3 \cdot P_4$ 間で1.9m、 $P_5 \cdot P_6$ 間で1.9mを測る。主軸方向はN-0°-Wを指す。

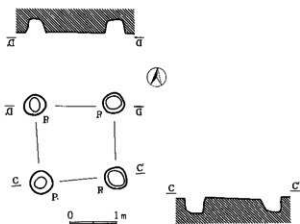
各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱底は捉えられなかったが、 P_4 はその底面において径23cm程を測る柱底が残っていた。

なお、本址からは遺物は検出されていない。

2 掘立柱建物址



第47図 F-73号掘立柱建物址実測図 (1:80)



第48図 F-74号掘立柱建物址実測図 (1:80)

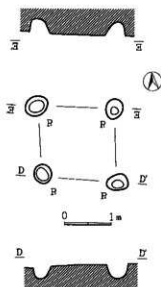
(74) F-74号掘立柱建物址 第428図

F-74号掘立柱建物址は、第V区ニー39グリッドにおいて検出された。

F-74は、1間×1間 (1.7m×1.7m) の掘立柱建物址で、主軸方向はN-7°-Wを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

IV 遺構と遺物



第429図 F-75号掘立柱建物址実測図
(1:80)

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

(75) F-75号掘立柱建物址 第429図

F-75号掘立柱建物址は、第V区ニ-38グリッドにおいて検出された。本址は、F-76号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-75は、1間×1間(1.7m×1.5m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-6°-Wを指す。各ピットの掘り方はいずれも小形な円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱底は捉えられなかった。

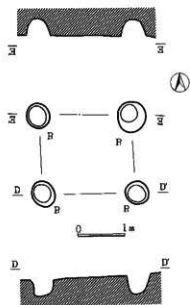
なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

(76) F-76号掘立柱建物址 第430図

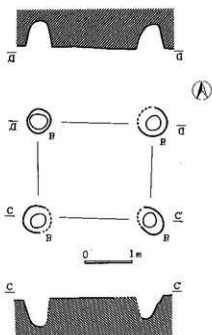
F-76号掘立柱建物址は、第V区ニ-38グリッドにおいて検出された。本址は、F-75号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-76は、1間×1間(2.0m×1.7m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-6°-Wを指す。各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱底は捉えられなかった。

2 獨立柱建物址



第430圖 F-76号獨立柱建物址實測圖
(1:80)



第431圖 F-77号獨立柱建物址實測圖
(1:80)

なお、本址においては遺物はまったく検出されていない。

(77) F-77号掘立柱建物址 第431図

F-77号掘立柱建物址は、第V区ニー38グリッドにおいて検出された。本址は、F-72号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-77は、1間×1間 (2.5m×2.0m) の掘立柱建物址で、主軸方向はN-0°-Wを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

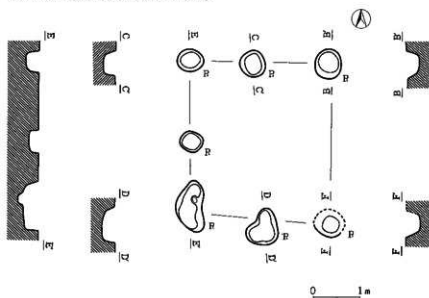
(78) F-78号掘立柱建物址 第432図

F-78号掘立柱建物址は、第V区ニー37グリッドにおいて検出された。本址は、F-81号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

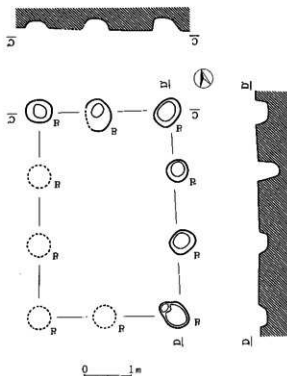
F-78は、南北列2間×東列1間・西列2間 (3.4m×3.0m) の掘立柱建物址で、柱間はP₁・P₂間で1.6m、P₃・P₄間で1.7mを測る。主軸方向はN-8°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、P₃・P₄が不整形である以外はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物は検出されていない。



第432図 F-78号掘立柱建物址実測図 (1:80)



第433図 F-79号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(79) F-79号掘立柱建物址 第433図

F-79号掘立柱建物址は、第V区ニ-37グリッドにおいて検出された。

F-79は、3間×2間(4.3m×2.7m)の掘立柱建物址となると考えられるが、その P_4 ~ P_7 相当のピットが存在すると考えられる部分は土山の下にあり調査が不可能であった。その柱間は、 P_1 ・ P_2 間で1.4m、 P_3 ・ P_6 間で1.7mを測り、主軸方向は $N-0^\circ-W$ を指す。

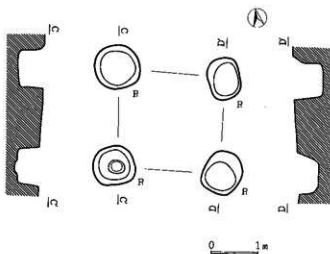
各ピットの掘り方は円形を呈し、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。なお、本址からは遺物は検出されていない。

(80) F-80号掘立柱建物址 第434図

F-80掘立柱建物址は、第V区ニ-38グリッドにおいて検出された。

本址は、1間×1間(2.3m×2.1m)の掘立柱建物址で、主軸方向は $N-0^\circ-W$ を指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中にある柱痕は捉えられなかったが、 P_3 はその底面において径30cm程を測る柱痕が確認されて



第44図 F-80号掘立柱建物址実測図 (1:80)

いる。

本址のピット埋土中からは、須恵器甕の小破片2片が出土している。

(81) F-81号掘立柱建物址

F-81号掘立柱建物址は、第V区ニ-37グリッドにおいて検出された。F-81は、F-78号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-81は南列3間・北列2間×東西列2間(5.2m×3.5m)の掘立柱建物址で、 P_2 ・ P_3 間、 P_7 ・ P_8 間の距離のあくピットの配置をみせている。主軸方向はN-86°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物は検出されていない。

(82) F-82号掘立柱建物址

F-82号掘立柱建物址は、第I区ス-42グリッドにおいて検出された。F-82は、F-4号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられない。

F-82は、北列3間(4.0m)×東列2間(3.0m)のみのピットの配置をみせるもので、隣接するF-3とは棟方向・柱の並び等が一致することから、F-3の付属的な建物であったとも推測

される。主軸方向はN-79°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

(83) F-83号掘立柱建物址

F-83号掘立柱建物址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。本址は、F-42・F-56・F-84号掘立柱建物址・H-35号住居址と重複関係にあるが、これらとの新旧関係は捉えられなかった。

F-83は、東西列2間×南列2間・北列1間(4.0m×3.6m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-19°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、P₄を除くといずれも円形ないしは楕円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられない。

なお、本址のピット中からは遺物は検出されていない。

(84) F-84号掘立柱建物址

F-84号掘立柱建物址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。

本址は、その東列3間と南北列1間のみ確認できたものであるが、3間×2間の掘立柱建物址と想定しておくことが妥当と考えられる。東列は5.0mを測り、南北軸方向はN-19°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物は検出されていない。

(85) F-85号掘立柱建物址

F-85号掘立柱建物址は、第II区ター-23グリッドにおいて検出された。

F-85は、2間×2間(4.9m×4.1m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-1°-Wを指す。

各ピットの掘り方は円形ないしは楕円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

本址からは、遺物は検出されていない。

(86) F-86号掘立柱建物址

F-86号掘立柱建物址は、第II区ター21グリッドにおいて検出された。

F-86は、南北列3間×東列1間・西列2間(4.5m×3.1m)の掘立柱建物址で、さらにその西列に平行して甍になるかとも考えられる2個のピットがみられる。主軸方向はN-71°-Eを指す。

各ピットの掘り方は円形ないしは楕円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

本址からは遺物は検出されていない。

(87) F-87号掘立柱建物址

F-87号掘立柱建物址は、第III区ツ・テ-25グリッドにおいて検出された。

F-87は、南列3間・北列2間×東西列2間(7.0m×5.0m)の掘立柱建物址と考えられるが、南西コーナーのピットは地区外に外れており検出できなかった。また、その内部にも5個程ピットが認められたが、本址に伴うものかどうかはわからなかった。主軸方向はN-67°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈しており、その埋土は黒色土のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物は検出されていない。

第106表 独立柱建物址ビット一覧表〈その1〉

	No	長径	短径	深さ		No	長径	短径	深さ		No	長径	短径	深さ
F-1	P ₁	60	58	22	F-6	P ₆	103	87	38	F-13	P ₁	62	53	50
	P ₂	62	54	29		P ₇	101	86	53		P ₂	38	32	28
	P ₃	77	65	35		P ₈	107	96	46		P ₃	76	61	34
	P ₄	65	64	33		P ₉	(90)	(90)	—		P ₄	68	67	31
	P ₅	72	65	37		P ₁₀	96	80	46		P ₅	77	58	34
	P ₆	74	64	27		F-7	P ₁	69	63		29	P ₆	72	55
F-2	P ₁	56	55	20	P ₂		52	51	29		P ₇	58	56	46
	P ₂	32	29	9	P ₃		57	52	19	F-14	P ₁	48	44	20
	P ₃	69	43	21	P ₄		78	65	25		P ₂	39	38	33
	P ₄	57	33	23	P ₅		85	81	31		P ₃	50	44	12
	P ₅	69	52	38	P ₆		62	52	28		P ₄	42	42	15
	P ₆	63	34	9	P ₇		53	47	36		P ₅	50	40	14
	P ₇	46	41	12	P ₈		75	65	39		P ₆	53	41	27
	P ₈	59	50	29	P ₉		73	69	34		P ₇	43	40	10
	P ₉	49	42	25	P ₁₀		38	35	19	F-15	P ₁	70	65	51
F-3	P ₁	108	98	58	F-10	P ₁	67	59	49		P ₂	93	68	48
	P ₂	142	28	48		P ₂	71	61	49		P ₃	100	80	43
	P ₃	93	80	49		P ₃	63	60	40		P ₄	62	55	44
	P ₄	99	88	51		P ₄	63	58	37	F-16	P ₁	80	71	42
	P ₅	82	71	—		P ₅	62	59	44		P ₂	42	36	19
	P ₆	81	71	60		P ₆	68	60	47		P ₃	60	39	44
	P ₇	103	93	48		P ₇	73	58	53		P ₄	25	25	14
F-5	P ₁	50	43	24		P ₈	57	52	41		P ₅	66	57	37
	P ₂	29	26	—	F-11	P ₁	46	44	35		P ₆	56	47	42
	P ₃	48	47	—		P ₂	49	44	40		P ₇	96	53	44
	P ₄	38	30	11		P ₃	72	56	52		P ₈	59	38	57
	P ₅	32	30	25		P ₄	58	49	51		P ₉	63	57	47
	P ₆	67	61	29		P ₅	68	64	38	P ₁₀	52	33	35	
	P ₇	31	27	14		P ₆	57	57	39	F-17	P ₁	96	92	63
	P ₈	44	41	13		P ₇	61	56	39		P ₂	71	68	43
	P ₉	48	37	35		P ₈	62	51	40		P ₃	94	80	45
	P ₁₀	58	49	22		P ₉	55	55	48		P ₄	68	63	32
F-6	P ₁	96	82	58		P ₁₀	49	45	38		P ₅	94	80	53
	P ₂	95	87	55	F-12	P ₁	59	52	17		P ₆	(70)	(70)	—
	P ₃	126	91	78		P ₂	45	42	26		P ₇	102	75	64
	P ₄	(100)	(100)	—		P ₃	56	48	32		P ₈	74	54	35
	P ₅	113	93	51		P ₄	43	41	13		P ₉	47	46	48

※単位はcm

第160表 掘立柱建物址ピット一覧表(その2)

	No.	長径	短径	深さ	
F-17	P ₁₀	38	33	10	
	P ₁₁	60	50	40	
	P ₁₂	48	40	—	
F-18	P ₁	68	58	53	
	P ₂	82	44	30	
	P ₃	83	50	33	
	P ₄	54	53	53	
	P ₅	73	61	33	
	P ₆	86	45	40	
	P ₇	51	47	13	
	P ₈	100	45	26	
	P ₉	82	69	49	
	P ₁₀	58	51	56	
	P ₁₁	27	20	—	
	P ₁₂	65	55	—	
	P ₁₃	36	30	—	
	P ₁₄	53	46	—	
	P ₁₅	33	23	—	
F-19	P ₁	96	53	32	
	P ₂	30	27	11	
	P ₃	45	40	21	
	P ₄	67	63	48	
	P ₅	54	45	19	
	P ₆	45	44	55	
	P ₇	80	45	15	
	P ₈	86	72	20	
	P ₉	60	48	45	
	P ₁₀	29	26	7	
	P ₁₁	68	56	30	
	P ₁₂	52	49	—	
	P ₁₃	53	52	10	
	P ₁₄	43	28	6	
	F-20	P ₁	118	84	59
P ₂		131	98	49	
P ₃		74	69	54	
P ₄		92	60	35	
F-21	P ₁	81	77	47	
F-21	P ₂	75	73	27	
	P ₃	75	70	45	
	P ₄	110	101	40	
	P ₅	82	72	41	
	P ₆	70	68	40	
	P ₇	74	74	37	
	P ₈	135	83	34	
	F-22	P ₁	66	62	48
		P ₂	64	54	45
P ₃		69	60	43	
P ₄		65	53	61	
P ₅		64	58	59	
P ₆		61	61	46	
P ₇		64	58	46	
P ₈		64	62	49	
P ₉		(82)	(62)	45	
F-23	P ₁	62	59	31	
	P ₂	56	47	54	
	P ₃	47	43	47	
	P ₄	56	53	43	
	P ₅	85	58	—	
	P ₆	65	51	—	
	P ₇	63	58	20	
F-24	P ₁	63	60	24	
	P ₂	66	64	29	
	P ₃	68	67	32	
	P ₄	84	67	42	
	P ₅	72	68	49	
	P ₆	77	77	45	
	P ₇	53	53	46	
	P ₈	60	54	20	
F-25	P ₁	114	64	21	
	P ₂	67	59	15	
	P ₃	76	69	30	
	P ₄	59	52	31	
	P ₅	60	54	41	
	P ₆	68	62	44	
F-25	P ₇	64	51	29	
	P ₈	61	50	20	
	P ₉	49	42	29	
F-26	P ₁	74	65	27	
	P ₂	57	57	50	
	P ₃	68	58	31	
	P ₄	57	52	32	
	P ₅	62	62	37	
	P ₆	47	39	24	
	P ₇	58	53	16	
	P ₈	72	57	35	
	P ₉	63	58	25	
F-27	P ₁	51	41	30	
	P ₂	41	38	26	
	P ₃	53	53	30	
	P ₄	42	40	22	
	P ₅	63	44	20	
	P ₆	52	47	25	
F-28	P ₁	55	49	43	
	P ₂	68	50	41	
	P ₃	111	78	66	
	P ₄	52	39	23	
	P ₅	50	48	25	
	P ₆	68	49	11	
	P ₇	55	47	40	
	P ₈	75	58	44	
	P ₉	59	48	27	
F-29	P ₁	57	55	42	
	P ₂	59	49	19	
	P ₃	63	44	25	
	P ₄	56	50	26	
	P ₅	65	61	29	
	P ₆	98	57	35	
	P ₇	80	65	40	
	P ₈	105	69	43	
F-30	P ₁	122	(119)	62	
	P ₂	(118)	85	50	

第99表 獨立柱建物址ビット一覧表 (その3)

	No	長径	短径	深さ	
F-30	P ₃	87	(87)	58	
	P ₄	90	(75)	48	
F-31	P ₁	122	110	62	
	P ₂	74	69	52	
	P ₃	93	85	51	
	P ₄	83	83	47	
	P ₅	96	(94)	40	
	P ₆	75	68	47	
	P ₇	103	96	55	
	P ₈	108	100	66	
	P ₉	47	40	—	
	P ₁₀	100	70	—	
	P ₁₁	35	33	—	
F-32	P ₁	103	80	54	
	P ₂	143	91	49	
	P ₃	111	105	44	
	P ₄	110	102	52	
	P ₅	122	104	49	
	P ₆	103	84	50	
	P ₇	102	(83)	56	
	P ₈	94	90	56	
	P ₉	86	75	37	
F-33	P ₁	59	44	24	
	P ₂	55	(53)	31	
	P ₃	50	48	25	
	P ₄	50	(46)	24	
	P ₅	44	43	22	
	P ₆	61	51	20	
	P ₇	75	53	22	
	P ₈	70	63	12	
	P ₉	43	43	20	
	P ₁₀	64	61	29	
F-34	P ₁	69	66	38	
	P ₂	82	79	37	
	P ₃	93	72	60	
	P ₄	124	100	54	
	P ₅	71	66	40	
F-34	P ₆	90	68	37	
	P ₇	74	56	53	
	P ₈	65	64	50	
F-35	P ₁	65	48	37	
	P ₂	84	50	48	
	P ₃	106	82	44	
	P ₄	60	46	35	
	P ₅	58	1	34	
	P ₆	95	66	40	
	P ₇	48	44	35	
	P ₈	78	64	35	
	P ₉	62	57	37	
F-36	P ₁	58	42	49	
	P ₂	53	44	57	
	P ₃	47	46	58	
	P ₄	64	55	44	
	P ₅	58	54	52	
	P ₆	44	40	21	
	P ₇	85	58	45	
	P ₈	44	38	48	
	P ₉	50	42	—	
	P ₁₀	50	47	30	
F-37	P ₁	120	110	89	
	P ₂	86	72	82	
	P ₃	120	95	79	
	P ₄	118	114	69	
	P ₅	92	89	83	
	P ₆	95	91	86	
	P ₇	76	70	80	
	P ₈	106	95	72	
	P ₉	88	85	80	
	P ₁₀	115	105	80	
F-38	P ₁	100	98	48	
	P ₂	70	60	45	
	P ₃	66	50	52	
	P ₄	66	50	64	
	P ₅	54	51	43	
F-38	P ₆	82	71	48	
	P ₇	87	76	49	
	P ₈	54	51	13	
	P ₉	100	67	26	
	P ₁₀	96	86	53	
	P ₁₁	94	92	43	
	F-39	P ₁	72	57	43
		P ₂	46	43	—
		P ₃	53	44	25
		P ₄	62	52	20
		P ₅	45	45	29
P ₆		74	64	25	
P ₇		62	57	33	
P ₈		42	40	—	
P ₉		74	69	35	
P ₁₀		47	42	24	
P ₁₁		46	38	—	
F-40	P ₁	50	47	46	
	P ₂	40	37	43	
	P ₃	43	38	48	
	P ₄	56	52	19	
	P ₅	71	57	47	
	P ₆	38	36	30	
F-41	P ₁	43	38	39	
	P ₂	49	43	33	
	P ₃	50	38	41	
	P ₄	51	46	28	
F-42	P ₁	50	38	41	
	P ₂	42	40	36	
	P ₃	45	39	18	
	P ₄	61	56	52	
	P ₅	72	67	41	
	P ₆	89	77	45	
	P ₇	86	70	42	
	P ₈	80	75	50	
F-42	P ₉	70	62	61	
	P ₁₀	75	68	40	
	P ₁₁	72	60	44	
	P ₁₂	72	60	44	

第160表 掘立柱遺物址ピット一覧表(その4)

	No.	長径	短径	深さ
F-42	P ₉	83	72	51
	P ₁₀	72	68	34
	P ₁₁	83	67	17
F-43	P ₁	115	62	28
	P ₂	98	65	28
	P ₃	74	73	36
	P ₄	43	43	27
	P ₅	70	70	40
	P ₆	82	72	34
	P ₇	87	80	32
	P ₈	58	48	29
F-44	P ₁	54	44	34
	P ₂	68	45	50
	P ₃	66	55	38
	P ₄	101	72	45
	P ₅	63	57	50
	P ₆	58	58	53
	P ₇	73	86	43
	P ₈	60	51	32
	P ₉	58	50	30
	P ₁₀	38	33	—
	P ₁₁	42	38	—
	P ₁₂	52	48	—
	P ₁₃	60	50	18
	P ₁₄	108	64	20
	P ₁₅	36	33	—
	P ₁₆	42	40	—
	P ₁₇	62	54	—
	P ₁₈	33	26	—
F-45	P ₁	85	69	49
	P ₂	92	86	44
	P ₃	59	52	65
	P ₄	87	82	42
	P ₅	120	95	89
	P ₆	85	58	56
	P ₇	84	71	55
	P ₈	109	101	44

	No.	長径	短径	深さ
F-45	P ₉	97	82	77
	P ₁₀	79	53	52
F-46	P ₁	49	48	34
	P ₂	39	30	18
	P ₃	47	45	36
	P ₄	52	47	29
	P ₅	51	44	28
	P ₆	32	25	15
	P ₇	59	52	40
	P ₈	68	59	34
F-47	P ₁	70	50	52
	P ₂	(60)	(60)	—
	P ₃	71	66	33
	P ₄	69	67	51
	P ₅	83	66	38
	P ₆	92	83	47
	P ₇	93	67	36
	P ₈	68	62	25
	P ₉	82	73	43
	P ₁₀	51	35	42
F-48	P ₁	67	58	35
	P ₂	76	62	35
	P ₃	70	67	43
	P ₄	86	68	39
	P ₅	81	74	50
	P ₆	73	70	40
	P ₇	104	72	39
	P ₈	84	76	44
	P ₉	76	64	45
	P ₁₀	77	73	33
F-49	P ₁	68	65	46
	P ₂	80	69	28
	P ₃	83	65	30
	P ₄	68	62	12
	P ₅	69	52	12
	P ₆	85	73	30
F-50	P ₁	36	33	16

	No.	長径	短径	深さ
F-50	P ₂	46	42	40
	P ₃	38	37	27
	P ₄	46	43	20
	P ₅	68	42	36
	P ₆	38	37	16
F-51	P ₁	70	58	45
	P ₂	61	36	19
	P ₃	59	56	19
	P ₄	65	58	34
	P ₅	32	32	33
F-52	P ₆	68	67	35
	P ₁	82	75	67
	P ₂	95	56	54
	P ₃	85	70	47
	P ₄	100	94	61
	P ₅	78	70	68
	P ₆	81	62	58
	P ₇	85	74	64
F-53	P ₈	84	69	43
	P ₁	72	67	55
	P ₂	72	67	50
	P ₃	64	64	—
	P ₄	74	70	56
	P ₅	88	88	45
	P ₆	69	64	22
F-54	P ₇	61	47	21
	P ₁	60	60	50
	P ₂	65	62	61
	P ₃	56	52	59
	P ₄	69	62	50
	P ₅	69	62	42
	P ₆	62	52	56
	P ₇	93	57	55
	P ₈	65	56	51
	P ₉	50	50	43
P ₁₀	71	60	50	
F-55	P ₁	106	102	63

第100表 掘立柱建物址ピット一覧表〈その5〉

	No	長径	短径	深さ
F-55	P ₂	88	87	67
	P ₃	88	80	53
	P ₄	79	67	37
	P ₅	63	58	37
	P ₆	76	66	37
	P ₇	105	70	36
	P ₈	82	57	40
	P ₉	70	70	34
	P ₁₀	95	61	56
	F-56	P ₁	(55)	(55)
P ₂		63	59	37
P ₃		85	84	27
P ₄		97	72	47
P ₅		65	64	24
P ₆		64	60	38
P ₇		(55)	(55)	—
F-57	P ₁	57	54	29
	P ₂	45	44	53
	P ₃	48	47	39
	P ₄	52	51	44
	P ₅	60	58	38
	P ₆	76	70	45
	P ₇	62	49	40
	P ₈	55	45	40
	P ₉	60	54	34
	P ₁₀	79	73	44
F-58	P ₁	52	45	24
	P ₂	62	53	53
	P ₃	38	34	14
	P ₄	42	42	38
	P ₅	36	34	23
	P ₆	42	39	23
	P ₇	42	41	49
F-59	P ₁	65	64	46
	P ₂	60	58	31
	P ₃	102	73	28
P ₄	52	48	25	
F-59	P ₅	79	77	35
	P ₆	73	65	29
	P ₇	78	71	27
	P ₈	57	54	25
	P ₉	50	48	19
F-60	P ₁	52	48	23
	P ₂	63	56	35
	P ₃	60	55	30
	P ₄	61	56	30
	P ₅	78	48	24
P ₆	60	55	29	
F-61	P ₁	30	30	21
	P ₂	36	29	16
	P ₃	30	22	11
	P ₄	32	31	50
	P ₅	30	27	28
	P ₆	30	30	16
	P ₇	34	28	24
	P ₈	34	30	25
	P ₉	(33)	(31)	(26)
F-62	P ₁	94	45	10
	P ₂	85	79	24
	P ₃	45	39	18
	P ₄	30	30	17
	P ₅	80	54	16
	P ₆	92	65	20
	P ₇	75	57	17
	P ₈	47	35	12
	P ₉	63	22	10
	P ₁₀	32	25	—
F-63	P ₁	57	54	28
	P ₂	72	65	33
	P ₃	51	50	23
	P ₄	57	54	35
F-64	P ₁	84	72	69
	P ₂	97	75	42
P ₃	87	78	34	
F-64	P ₄	112	82	68
	P ₅	89	68	67
	P ₆	77	60	43
F-65	P ₁	67	58	32
	P ₂	96	66	35
	P ₃	78	58	39
	P ₄	68	55	42
F-66	P ₁	74	65	37
	P ₂	75	65	50
	P ₃	72	65	59
	P ₄	69	68	40
	P ₅	72	64	52
	P ₆	80	62	45
	P ₇	67	64	48
	P ₈	86	70	50
	P ₉	84	74	52
	P ₁₀	64	58	39
F-67	P ₁	98	81	44
	P ₂	90	80	39
	P ₃	104	89	51
	P ₄	77	71	36
	P ₅	82	51	35
P ₆	94	77	47	
F-68	P ₁	73	61	45
	P ₂	52	50	54
	P ₃	90	70	55
	P ₄	54	50	49
	P ₅	65	63	28
	P ₆	74	65	54
	P ₇	47	45	56
	P ₈	50	42	41
	P ₉	52	47	43
	P ₁₀	46	45	41
	P ₁₁	77	54	—
P ₁₂	61	59	—	
F-69	P ₁	54	49	63
	P ₂	85	66	50

IV 遺構と遺物

第106表 掘立柱建物址ピット一覧表〈その6〉

	No.	長径	短径	深さ
F-69	P ₃	46	38	53
	P ₄	80	44	48
	P ₅	53	50	53
	P ₆	64	52	48
	P ₇	57	53	64
F-70	P ₈	60	53	65
	P ₁	69	60	39
	P ₂	82	70	27
	P ₃	70	67	36
F-71	P ₄	69	62	37
	P ₁	56	54	30
	P ₂	46	43	32
	P ₃	53	49	31
	P ₄	50	46	23
	P ₅	72	37	37
	P ₆	44	44	40
	P ₇	42	41	25
	P ₈	46	45	32
	P ₉	65	51	35
F-72	P ₁₀	55	50	29
	P ₁	72	67	55
	P ₂	75	73	57
	P ₃	72	63	55
	P ₄	72	64	47
	P ₅	86	78	51
F-73	P ₆	70	70	50
	P ₁	(45)	(45)	—
	P ₂	(50)	(50)	—
	P ₃	58	57	27
	P ₄	57	54	46
	P ₅	55	55	30
	P ₆	53	53	(37)
	P ₇	61	56	(28)
F-74	P ₈	(48)	(48)	—
	P ₁	46	44	29
	P ₂	47	42	29
	P ₃	49	49	32
F-74	P ₄	50	47	30
F-75	P ₁	42	34	29
	P ₂	50	40	28
	P ₃	40	37	22
	P ₄	45	33	28
F-76	P ₁	63	60	45
	P ₂	53	49	34
	P ₃	56	48	34
	P ₄	51	48	40
F-77	P ₁	60	60	50
	P ₂	51	50	54
	P ₃	59	59	58
	P ₄	62	45	45
F-78	P ₁	62	55	25
	P ₂	55	54	25
	P ₃	56	47	27
	P ₄	50	45	20
	P ₅	107	54	42
	P ₆	77	68	28
	P ₇	65	59	30
F-79	P ₁	61	47	26
	P ₂	66	55	24
	P ₃	54	48	14
	P ₄	(49)	(49)	—
	P ₅	(49)	(49)	—
	P ₆	(49)	(49)	—
	P ₇	(49)	(49)	—
	P ₈	70	50	15
	P ₉	56	50	17
	P ₁₀	48	44	44
F-80	P ₁	86	68	63
	P ₂	100	96	56
	P ₃	91	90	51
	P ₄	95	90	44

3 土 壤

土壌は、第Ⅰ区から第Ⅴ区において総数52基が検出された。

各区の内訳は、第Ⅰ区で29基、第Ⅱ区で19基、第Ⅲ区・第Ⅳ区はともに検出されず、第Ⅴ区において4基検出された。

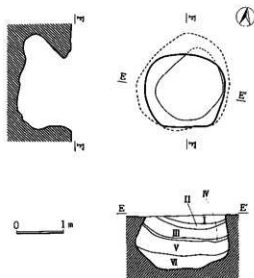
ここでは、検出された個々の土壌について取り上げるスペースがないため、そのうちの主なものについてふれておくことにする。

(1) D-1号土壌 第435図

D-1号土壌は、第Ⅰ区ター37グリッドにおいて検出された。

D-1は、その上面は1.6m×1.7mの円形を呈しているが、底面にかけてやや広がり、いわゆるフラスコ状の断面形態を呈しているものである。その土層堆積は、いずれも均等な堆積をみせる6層に分層された。Ⅰ層は若干のカーボンを含む黒褐色土層、Ⅱ層は多量のロームを含む灰褐色土層、Ⅲ層は若干のバミスを含む黒褐色土層、Ⅳ層は多量のロームを含む灰褐色土層、Ⅴ層はバミスを含む黒褐色土層、Ⅵ層はロームをよく含む茶褐色土層であった。

なお、本址の覆土中からは、1、2の底部回転ヘラケズリのなされた須恵器坏、3の土師器小



第435図 D-1号土壌実測図 (1:80)

形甕の他、須恵器蓋・甕破片、土師器甕破片等が検出されている。

(2) D-4号土壌 第436図

D-4号土壌は、第I区ター37グリッドにおいて検出された。

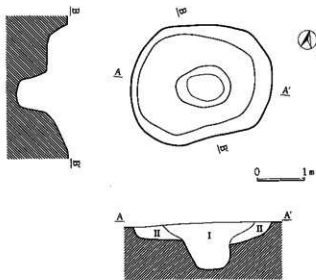
D-4は、平面形が楕円状を呈し断面形が逆凸状を呈する土壌で3.1m×2.5m深さ1.0mを測る。覆土は2層に分層された。I層はバミスを含む黒色土層、II層はバミスとローム粒子を含む黒褐色土層であった。

なお、本土壌中からは、1の回転ヘラキリのなされた須恵器坏底部の他、内面黒色研磨のなされた土師器坏破片、底部回転糸切りの後周囲手持ちヘラケズリのなされた須恵器坏破片、土師器甕・須恵器甕破片等が検出されている。

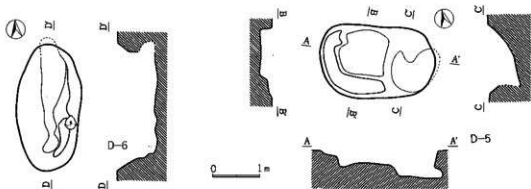
(3) D-6号土壌 第437図

D-6号土壌は、第I区セー42グリッドにおいて検出され、F-9号掘立柱建物址を切って存在している。

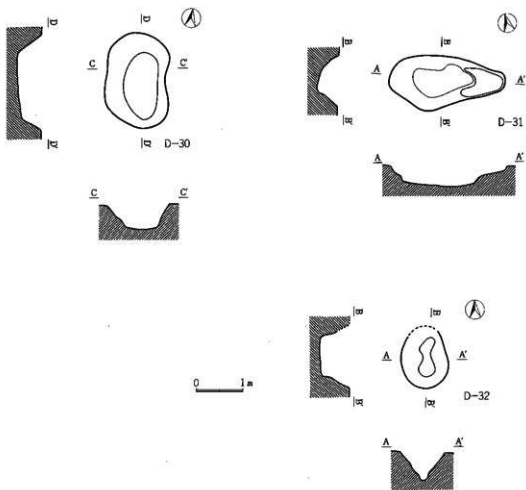
D-6は、2.6m×1.3mの長楕円形を呈する土壌で、深さ90cmを測る。なお、本土壌からは遺物はまったく遺物されていない。



第436図 D-4号土壌実測図 (1:80)



第437图 D-6, D-5号土壤实测图 (1:80)



第438图 D-30, D-31, D-32号土壤实测图 (1:80)

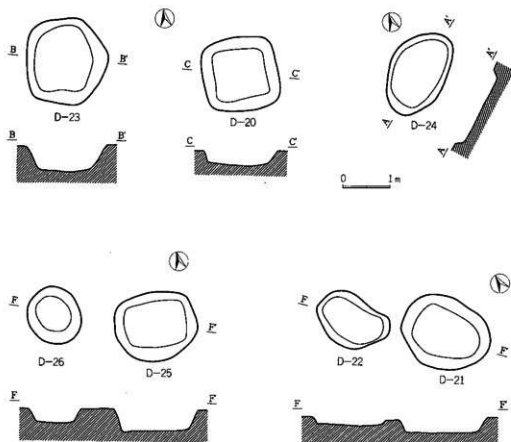
(4) 第I区シー41・42グリッドの土壌群 第438図

第I区シー41・42グリッドにかけては、D-2・D-3・D-9・D-29～D-36の12基の土壌が検出されたが、これらの各土壌はいずれもやや歪んだ小形の楕円形を呈しており、一連の土壌群として把握できよう。そして、これらは住居址・掘立柱建物址のいずれとも切り合わず、独自のまとまりを見せているため、前田遺跡のある時期を構成する集落に伴って形成されたものと考えられることもできる。

なお、これらの各土壌からは遺物はまったく検出されていない。

(5) 第I区ソー41グリッドの土壌群 第439図

第I区ソー41グリッドにおいては、D-20～D-26の7基の土壌が検出されている。これらの



第439図 D-23・20, D-24, D-26・25, D-22・21号 (1:80) 土壌実測図

土壌も、その形状・分布等のまとまりをみせており、一連の土壌群として捉えられよう。

これらのうち、D-21・D-22・D-24・D-26はやや歪んだ楕円形を呈しており、D-20・D-23・D-25は隅丸方形形状のプランをみせている。

なお、これらの土壌群も本遺跡のある時期の集落に付随するものと考えることができよう。

(6) 第Ⅱ区シ・ス-23・24・25グリッドの土壌群 第440・441図

第Ⅱ区シ・ス-23・24・25グリッドにおいて検出された土壌のうち、D-10～D-17号土壌はいずれも長楕円形を呈しその断面形も一致するもので、一連の土壌群として捕らえた。

これらの土壌からは遺物がまったく検出されていないため、その時期決定が難しいが、D-15はH-62号住居址に、D-16はH-60号住居址に切られており、この両住居址は古墳時代中期に位置付けられるものであるため、これらの土壌が同一期に所産であるとすればそれは古墳時代中期以前ということになろう。なお、各土壌の主軸方向はまちまちといえる。

以下、各土壌の覆土について説明する。

D-12号土壌覆土は、2層に分層された。I層は小バミスを含む黒褐色土層、II層がローム粒子を含む黄褐色土層で、ともに粘性のない土層であった。

D-13号土壌覆土は、2層に分層された。I層が黒褐色土層、II層が黒色土層で、ともにバミスを含まず粘性のない土層であった。

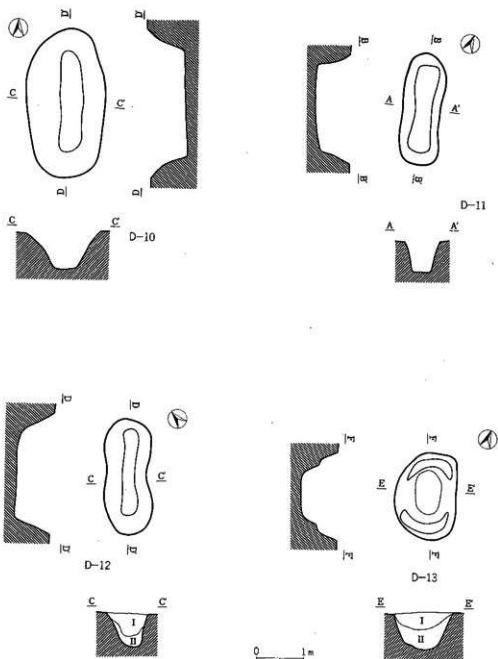
D-15号土壌覆土は、2層に分層された。I層は少量のバミスとローム粒子を含む黒色土層、II層は多量のロームを含みバミスをよく含む茶褐色土層であった。

D-16号土層覆土は、3層に分層された。I層が多量のローム粒子を含みバミスをよく含む茶褐色土層、II・III層が少量のロームとバミスを含む黒褐色土層であった。

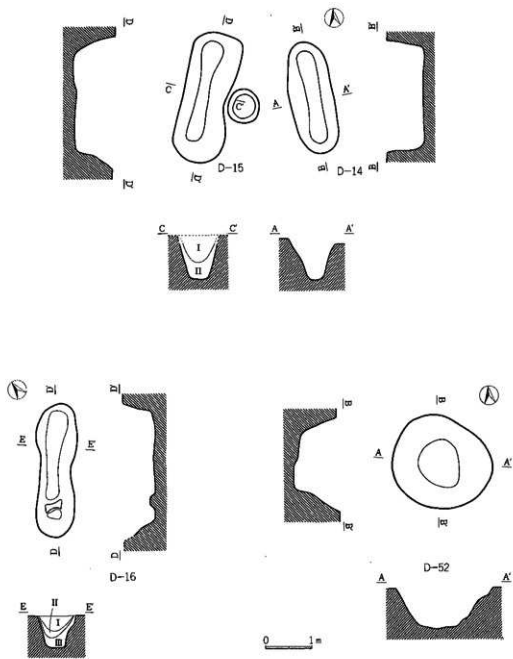
(7) D-52号土壌

D-52号土壌は、第Ⅴ区ニ-37グリッドにおいて検出された。

D-52は、2.1m×2.0mの円形を呈し、断面は深さ0.9mを測る逆台形状を呈する土壌である。本土壌からは、1・2の底部回転ヘラケズリのなされた須恵器坏の他、内面黒色研磨のなされた土師器坏破片、須恵器甕破片等が検出されている。

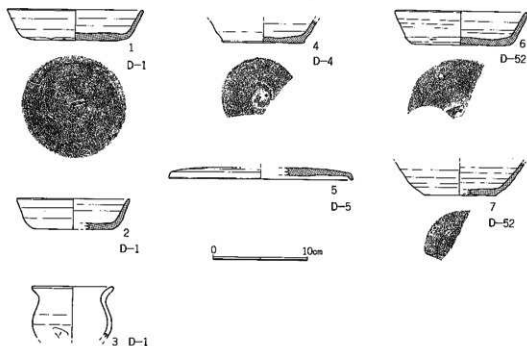


第400図 D-10, D-11, D-12, D-13号土坑実測図 (1:80)



第41图 D-15·14, D-16号土壤 D-52号土壤实测图 (1:80)

IV 遺構と遺物



第42図 土壌出土遺物 (1 : 4)

第61表 土壌出土遺物一覧表〈土器〉

種別 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	測 量	備 考
1 (画)	杯 (須)	14.5 3.3 11.0	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	D-1出土 胎土は比較的精選された灰白色 (10Y7/1)
2 (画)	杯 (須)	<12.0> 3.2 <8.4>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	D-1出土、胎土は砂粒を含み灰色(5Y5/D)内外面に自然附着
3 (画)	壺	(8.5) —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部のやや膨らむ小形の器形	外面 口縁部一側上半ロクロヨコナデ、胴部下半ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	D-1出土、胎土は比較的精選された灰色(7.5Y6/6)焼成良好
4 (画)	杯 (須)	— (8.8)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	D-4出土、胎土は砂粒を含み灰色(5Y6/D)内外面に自然附着
5 (画)	蓋 (須)	— (19.6)	天井部の高まらない扁平な形状を呈する。つまみ部形状不明	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	D-5出土 胎土は砂粒を含み灰白色 (7.5Y7/1)
6 (画)	杯 (須)	(14.0) 3.6 (10.3)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	D-52出土 胎土は砂粒を含み灰色(5Y4/1)焼成良好
7 (画)	杯 (須)	— (7.5)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	D-52出土 胎土は砂粒を含み灰白色 (10Y7/1)

4 溝状遺構

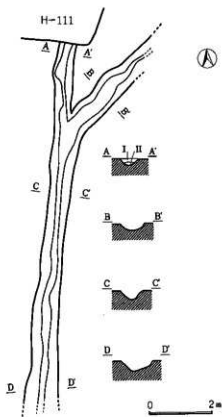
(1) M-1号溝状遺構 第443図

M-1号溝状遺構は、第V区ト・ナ-38グリッドにおいて検出された。

M-1は、38列を南北に延びる溝であり、図には示していないがニ-38グリッド・テ-38グリッドにおいてもそのプランは確認できた。なお、M-1はナ-38グリッドにおいてH-111号住居址に切られており、少なくともその所産期はH-111号住居址の所産期である前田遺跡第IV期以前と考えられる。

M-1は、その幅およそ60~100cm深さ30cm程を測るもので、その覆土は2層に分層された。I層は黒色土層、II層は黒灰色の砂層であった。II層の堆積により本溝遺構において水の流れがあったことを認めることができ、本遺構が水路としての機能を果たしていたことを想定させる。

なお、M-1からは須恵器甕の破片三片が検出されたのみである。



第443図 M-1号溝状遺構実測図 (1:120)

5 表面採集遺物 第444図

表面採集遺物は、およそテンバコ1箱分程あるが、そのうちの主なものを図示した。

- 1・2は須恵器環で、奈良時代の遺物と考えられる。2は、高台付環である。第I区表採品。
- 3は、土師器環で、古墳時代後期の所産かと考えられる。第I区表採品。
- 4、5は、土師器小形丸底甕である。奈良時代の遺物と考えられようか。第I区表採品。
- 6、7は、須恵器長頸瓶の頸部で、沈線が施こされたものである。6は第II区表採品。
- 8は、土製の紡錘車で、山口伸彦氏の採集品である。第V区付近のものと思われる。
- 9も、山口伸彦氏の採集品で、石臼の欠損品である。第III区付近採集。

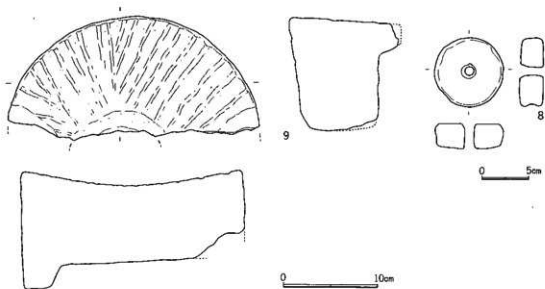
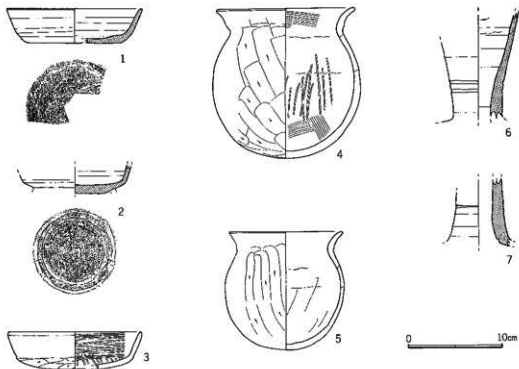
第162表 表面採集遺物一覧表〈土器〉

埋蔵番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (16)	環 (頸)	(14.4) 3.7 (10.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	第I区表面採集遺物 胎土は灰白色 (25YR8/2) 完全な焼成を成 せつつある。
2 (14)	環 (頸)	— —	体部には高台の貼り付けられた痕跡が残る。	外面 体部ロクロコナデ、底部切り廻しの後、 手持ちヘラケリ 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	第I区表面採集遺物 胎土は砂粒を 含む褐色 (10YR3/2)
3 (10)	環	(14.3) 4.0 —	底部は扁平な丸底を呈し、縁をもった後、 直線的に外反する口縁部となる。	外面 口縁部コナデの後、底部手持ちヘラケリ 内面 ヨコヘラミガキ	第I区表面採集遺物 胎土は砂粒を 多く含む褐色 (7.5YR6/6)
4 (完)	甕	14.8 15.8 —	口縁部は外反し、胴部球状を呈し、底部 丸底の小形の器形。完形	外面 口縁部コナデの後、胴部縦位のヘラケリ 内面 胴部コナデ、胴部ヘラケリ	第I区表面採集遺物 胎土は砂粒を 多く含む褐色 (7.5YR6/6)
5 (完)	甕	12.1 12.4 —	口縁部は外反し、胴部球状を呈し、底部 丸底の小形の器形。完形	外面 口縁部コナデの後、胴部縦位のヘラケリ 内面 口縁部コナデ、胴部ヘラケリ	第I区表面採集遺物 胎土は砂粒を 多く含む褐色 (7.5YR6/6)
6 (完)	長頸瓶 (頸)	— —	口縁部から頸部にゆくにつれてすぼまる 器形	外面 ロクロコナデ、二条の沈線が施される。 内面 ロクロコナデ (ロクロ右回転)	第I区表面採集 胎土は若干の砂 粒を含む灰白色 (7.5Y6/1)
7 (完)	長頸瓶 (頸)	— —	頸部は中位から下位につれて、太まる器 形を呈する。	外面 ロクロコナデ、頸部に一条の沈線が施される。 内面 ロクロコナデ (ロクロ回転不明)	胎土は稍濡れず 灰色(7.5Y6/1) 外面には自然釉 がけ付する。

第163表 表面採集遺物一覧表〈土製品・石器〉

埋蔵番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
8	紡錘車	土製品	7.3	7.3	2.7	175	
9	石臼	輝石 安山岩	<12.0	26.8	12.6	4,800	

5 表面採集遺物



第44図 表面採集遺物（8のみ1：3，他は1：4）

V 総 括

1 はじめに

最後に、鑄師屋遺跡群前田遺跡の発掘調査成果についての整理を試み、それに若干の考察を加え、総括としたい。

その手順としては、まず各時代毎の土器様相を把握し、その時期細分を試みる。次に、そこにおいて細分された時期別に集落様相を明らかにしよう。そして各期の集落がどのような変遷を辿るのかを捉えてみる。また、それと併行させ遺構の構造等にもふれてみることにしよう。

2 前田遺跡における古墳時代中・後期の土器様相

(1) 古墳時代中期(前田遺跡第Ⅰ期)

本遺跡の第Ⅱ区においては、古墳時代中期に比定できる住居址が5軒検出されている。すなわち、H-60・H-61・H-62・H-65・H-71の各住居址である。これらのうち、H-60・H-61号住居址の出土遺物は比較的充実したものであり、当該期の土器様相を知るうえでの格好な資料であるといえる。この2軒の住居址の資料を中心に本遺跡の古墳時代中期の土器様相についてふれてみることにする。

なお、当該期は前田遺跡において集落が形成される初源期であり、これをもって前田遺跡第Ⅰ期と位置付けよう。

1 各器種の特徴 第445図

本遺跡において古墳時代中期に位置付けることのできる土器には次の器種がみられる。須恵器では甕・蓋、土師器では手捏・坏・高坏・器台・埴・甑・壺・甕・小形甕の各器種である。

以下、各器種の個々について述べる。

須恵器

甕 甕はH-60で1点、H-61で2点検出されている。いずれもやや肩の張る球胴をみせ、頸部から口縁部にかけてシャープな稜を有し、均整のとれた器形を呈している。また、H-60・1は頸部に波状文が施されている。3個体とも外面に自然釉が認められるが、ことにH-61の1が顕著である。

蓋 蓋はH-65号住居址において1点検出されている。天井部は丸味をおびるものの偏平で、その端において鋭い稜をもった後、直降する体部へと続き、平坦な面をなした口唇部となるプロポーションを見せるものである。口唇部はヘラケズリによらない。内外面ともに自然釉は付着していない。

さて、これらの須恵器4点は、いわゆる「初期須恵器」と呼称されているものの範疇に入るものと思われる。「初期須恵器」は、これまで和泉陶器窯における一元的供給品と考えられていたが、近年愛知県東山218号窯(荒木他 1978)・宮城県大蓮寺窯(渡辺他 1976)等地方窯の存在が知られるようになり、多元的供給も想定されつつある。

このような問題も含めて、本4点の須恵器をめぐる論考を木下氏に寄稿していただき、付編として掲載することとした。したがってここでは、これ以上ふれないことにする。

また、本4点の須恵器についての原産地同定の手掛りを得るため、奈良教育大学三辻利一教授に胎土分析を依頼した。これについても付編として掲載するが、本稿の段階においては胎土分析の結果が得られていないため、その成果に対する見解は別の機会に提示しよう。

ところで、「初期須恵器」は、通常古墳の副葬品等としてみられ、一般集落からの出土はあまり認められない。須恵器が奈良時代以後にあって日常の食器等として用いられるようになるのとは異なり、「初期須恵器」が祭祀的な性格を色濃く帯びていることを示す証左であろう。

本遺跡においても、甕の検出されたH-61号住居址からは有孔円板2点が検出され、手捏土器などの存在もあって屋内祭祀が行われたことであろうことを窺わせている。これら4点の貴重な須恵器は、一般の日常雑器とは異なり祭器として用いられたものと想定しておこう。

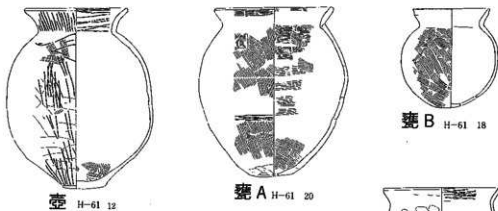
土師器

手捏 手捏土器は、坏形態のものが2点(H-60・2、H-62・1)、高坏形態のものが1点(H-61・1)みられた。

坏 坏には、A・Bがみられる。

A 素口縁・丸底・口縁部内湾の特徴をみせるもの。内面は放射状にヘラミガキがなされ、外面体部下半～底部にかけてはヘラケズリ、口縁部はヨコナデかヘラミガキがなされる。3個体認められた(H-60・4、H-61・3、H-65・2)。

B 体部が丸味を帯びて外湾し、口縁部で短く強く外反するもの。ほとんどが丸底となっているが、平底の例もある(H-60・8)。また、口縁部が僅かに立ち上がる特徴をみせるものもある(H-60・7、H-61・4)。器形の大きさにも大小バラエティをみせる。調整では、内面に放射状のヘラミガキ、口縁部ヨコナデ、外面体部下半～底部にヘラケズリのなされる場合が多い。6個体認められた(H-60・5・6・7・8、H-61・4・5)。



第45図 第1期土器分類図

堉 体部が湾曲し、口縁部で短く外反するもの。器形は坏Bと相似形をなすが、口径に対し器高の数値が高いものを堉として捉えた。底部は平底(H-61・6)丸底(H-60・9)の両者が認められる。調整は、口縁部はヨコナデ、外面体部～底部にはヘラケズリが一般的に認められ、内面にはヘラミガキのみられる場合もある。5個体認められた(H-60・9、H-61・6・7・8・9)。

高坏 4点(H-61・11、H-62・2・3・4)検出されているが、H-61・11を除くといずれも部分品である。H-61・11は坏部が稜を有し外反するが、H-62・2は坏部に稜を有さない。また、H-61・11においては刷毛目状調整がなされているが、他にはヘラミガキがなされている。H-61・4には赤色塗彩がなされている。

器台 器台は2点認められたが(H-60・10、H-61・10)、器形は高坏と何ら変わりのないものである。ただし双方とも坏部底において焼成前の穿孔が認められており、器台と認識した。H-61・10は、坏部底から体にかけて稜をもって変換し、さらに体部中央に鈍い稜を有する特徴的な器形をみせており、坏部内外面・脚部外面にはヘラミガキがなされている。

壺 壺と考えられるものは何個体か認められたが、いずれも部分であり、器形の全体を知り得るのはH-61・12のみであった。H-61・12は、外反する素口縁をみせ、胴部は球状を呈しその下位で鈍い稜をもって逆「八の字」状にすばまり、平底へと至る器形をみせている。口縁部および胴部外面にはヘラミガキがなされ、胴部内面には刷毛目状調整を窺える。なお、H-61・16の壺の口縁部には鈍い稜が巡っており、有段もしくは折り返し口縁の名残かと思われる。

甕 甕としたもののうち器形の大方を知り得たのは5個体ある(H-60・13、H-61・17・18・19・20)。このなかでも、口縁が「く」の字状に外反し膨らんだ長胴を呈し平底をみせるA(H-60・13、H-61・20)と、小形・球胴・丸底・「く」の字状口縁のB(H-61・17・18・19)とが認められた。調整は全般に刷毛目状調整が顕著にみられる。なお、H-61・18の口縁には僅かに鈍い稜が認められ注意される。

甌 甌は3点認められた(H-60・11・12、H-65・3)。このうちH-60・11、H-65・3は近似した器形をみせている。すなわち、口縁部がゆるく外反し、胴部がゆるやかにすばまり、径7～8cmを測る単孔の底部へと至る器形である。なお、他の1点、H-60・12は底部のみのため器形の全体を知り得ないが、底部の単孔の径が2cmと前二者に比べ小さいといえる。

2 前田遺跡第Ⅰ期土器群の編年的位置付け

編年的位置付け

これまで、前田遺跡の古墳時代中期に比定できうる土器群について、その器種構成と代表的な個体の把握につとめてきた。ここでは、その編年的位置付けについて考えてみよう。

さて、佐久平において古墳時代中期相当の土器群を伴出した遺跡には、佐久平市道遺跡（H-2・T-3）、同舞台場遺跡（H-25）、同中道遺跡、同西裏遺跡（T-1）、同北西久保遺跡、小諸市久保田遺跡等が散見される。このうち、良好な一括遺物が検出されすでに報告書の刊行をみたものは、市道遺跡（佐久市教育委員会 1976・西裏遺跡（佐久埋蔵文化財調査センター 1986）の二遺跡である。

まず、市道遺跡第2号住居址（H-2）・第3号竪穴状遺構（T-3）出土の土器群についてであるが、花岡氏によるとこの両者は「同時期の所産」として捉えられるという（花岡 1976）。そして、その器種構成は、高坏・埴・甕が主体的にみられ、僅かに坏・甌・須恵器蓋が伴うといったあり方をみせている。この器種構成は、坏・埴類が主体となる本土器群とは異なっており、両者の比較見当を困難なものにさせている。殊にメルクマールとなる土師器埴が、市道には多くみられるのに対し本群にはまったくみられないということがその決定的要因となっているものと思われる。

ところで、本土器群に後続して出現する前田遺跡第Ⅱ期の土器群中には埴3点が含まれている。これらの埴は、口縁部が短く、その最大径を胴部にもつものである。これに対し、市道遺跡の埴は、口縁部が長く、その最大径は口唇にあり、古式な要素をみせている。土師器埴における器形変化（口縁部の短縮化・最大径の口縁部から胴部への移動）を追ってみても、市道の埴から前田Ⅱ期への埴へという継続的な器形変化は追えそうにない。したがって、前田第Ⅱ期に前続する第Ⅰ期の土器群において、本来的には埴が存在していたとしても、それは市道遺跡における埴よりは新しい様相が見出せなければならないことになる。ここにおいて、きわめて消極的ではあるが、市道遺跡の土器群は、本Ⅰ期土器群に先行するものという捉えかたができる。また一方、市道遺跡においては、坏部底から体にかけてゆるやかな変換を呈する高坏が3点程見出せるが、これなども本Ⅰ期の稜の明瞭化した高坏等と比べ古い様相をみせているものと考えられよう。⁽¹⁾ いずれにしても本土器群は市道遺跡の古墳時代中期の土器群に後出するものとして捉えられようが、両者の関係が継続的であるのか、時間的間隙をもつのかという点については、今後佐久平の当該期資料の類例増加をまって論じられなければならない。

さて、次に西裏遺跡第1号特殊遺構出土遺物についてであるが、この中には壺・甕・坏・高坏などの器種がみられる。西裏の坏類は本群の坏類と形態的にはよく類似するようである。高坏は、

本群の高坏類に比べると坏体部の外頻度がゆるやかで口縁部にかけて丸味を帯びる特徴をみせており、本群よりやや新しい様相といえるかもしれない。また、西裏の土器様相は、後述する前田遺跡第Ⅱ期にあてはめてみても決しておかしいものではなく、西裏の土器群の位置付けの微妙さを露呈させている。このことは、西裏にみられる土師器器種の少なさにも起因しよう。したがって、ここではとりあえず、西裏の土器群が本Ⅰ期の土器群とほぼ同時期か、あるいはやや後出するものとして幅をもって捉えておきたい。

なお、千曲川水系においては、本Ⅰ期の土器群とほぼ同時期のものに、中野市新井大ロフ遺跡の一括資料（金井 1971 1982）、更埴市城内遺跡第Ⅲ期土器群（岩崎 1982）等があげられよう。また、長野市駒沢新町遺跡一号祭祀遺構一括資料（笹沢 1982）は、これらに先行するものとして捉えられようか。

時間的位置付け

さて、当該土器群の時間的位置付けにあたっては、伴出した4点の須恵器が有力な手掛かりとなり得る。これら4点の須恵器については、和泉陶器窯の製品であるかどうかの問題は別としても、いわゆる陶器編年との比較において時間的位置付けを行うことができる。

4点の須恵器の詳細については付編に譲るとして、これらは陶器のどの型式段階と対応するのであろうか。木下氏の御教示によれば、H-61・1の甕はTK-73、H-61・2の甕はTK-216、H-60・1の甕はTK-208、H-65・1の蓋はTK-216の各型式にそれぞれ対応させることができるという。すなわち、これら4点は陶器における最古型式であるTK-73からTK-216・TK-208の3段階の範囲に収まるものとみることができる。⁽²⁾

実年代でいえば、TK-73・TK-216は五世紀第Ⅲ四半紀、TK-208は五世紀第Ⅳ四半紀の年代が与えられる。ここにおいて、本須恵器4点も五世紀第Ⅲ四半紀から第Ⅳ四半紀にかけてのものであることが想定できよう。

したがって、これら4点の須恵器を伴出した前田遺跡第Ⅰ期の土器群については、やや時間幅をもたせたにしても、五世紀第Ⅳ四半紀を中心に展開したものであると考えることができる。

註

- (1) 佐久市教育委員会 1976 『市道』 P P 77、第43図1・2・3の高坏
- (2) これらの須恵器の型式段階の異なりをもって本期がさらに細分される可能性も考えられようが、これらに伴う土師器の様相は共通し、細分されるべき可能性をみせていない。また、H-61においては、比定される型式の異なる甕が実際に共存している。よって、これらを含む土器群は一時期のものとして一括して扱われるべきものとする。

(2) 古墳時代中期末(前田遺跡第Ⅱ期)

本遺跡第Ⅱ区においては、古墳時代中期末の集落が認められた。これは前田遺跡第Ⅰ期に継続して営まれるものであり、前田遺跡第Ⅱ期の集落として位置付けられる。

前田遺跡第Ⅱ期を構成する住居址は、H-63・H-66・H-67・H-75・H-77の5軒である。この5軒の住居址の出土土器について検討を加え、その土器様相を探ってみることにする。

I 各器種の特徴 第446図

古墳時代後期初頭前田遺跡第Ⅱ期の土器群中に認められる器種としては、手捏・蓋・坏・埴・高坏・器台・埴・甑・壺・甕・小形甕などがある。いずれも土師器のみで、須恵器は認められなかった。

以下、個々の器種について述べる。

手捏 手捏土器は9点図示したが、まず内面赤色塗彩の無頸壺が特徴的に存在する(H-67・4・5、H-75・5)。また、鉢形態のものも2例みられ(H-63・8、H-75・3)、その一方には片口が付されている。坏形態もみられるようである(H-75・1・2・4、H-63・1)。

蓋 蓋は1点みられたのみであった(H-75・6)。つまみ部をもたず、扁平な半球状の器形を呈するものであった。

坏 坏には、第Ⅰ期と同様な器形をみせるA・Bがある。

A 素口縁・丸底・口縁部内湾の特徴をみせるもの。2個体を図示した(H-75・7、H-77・1)。内面に放射状のヘラミガキ・外面口縁部ヨコナデ・体部下半～底部ヘラケズリ等の調整が認められる。

B 丸底で、体部が丸味をおびて外半し、口縁部で短く強く外半するもの。口唇部が僅かに立ち上がる特徴をみせるものもある。基本的には、内面に放射状のヘラミガキ・口縁部ヨコナデ・外面体部～底部ヘラケズリの調整がなされる場合が多い。また内面黒色研磨のなされるものも2例認められる(H-63・3、H-77・3)。図示し得たのは、10個体である(H-63・2・3、H-66・1、H-67・1・2、H-75・8・9、H-77・3・4・5)。

埴 体部が球状を呈し、口縁部が短く外半するもの。底部は扁平な丸底をとっている。3個体を図示した(H-63・4・5、H-77・6)。内外面に放射状のヘラミガキがなされたり、内面黒色研磨がなされるものがある(H-63・4)。

高坏 高坏は11点を図示したが(H-66・3・4、H-67・3、H-75・10・13・14・15、H-77・7・8・9)、いずれも坏部または脚部の部分品で、器形の全体を知り得るもの

V 陶 器



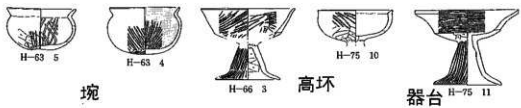
手捏



盖

坏A

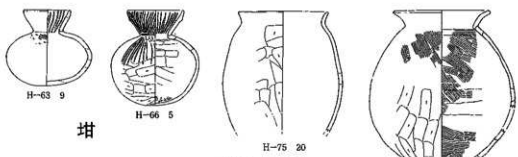
坏B



碗

高坏

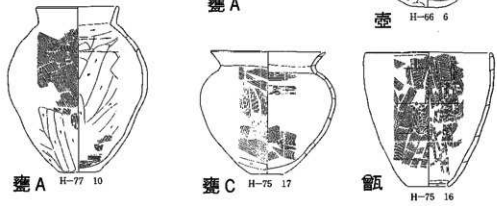
器台



罍

甗A

甗



甗A

甗C

甗

第46图 第II期土器分類图

ではない。脚部では「八」の字状に広がるものが多く、坏部では底部から体部にかけて稜をもって外半するものがほとんどであった。唯一例外として坏Bと同様な坏部をみせるものがある(H-75・10)。調整は全体的にヘラミガキが顕著といえる。

器台 器台は1点みられたのみで(H-75・11)、高坏の器形と同様なものであるが、坏底部に焼成前に穿孔がなされ器台となっている。坏部は稜をもって外反し、脚部はラッパ状に広がる。坏部内外面には刷毛目状調整、脚部外面にはヘラミガキがなされている。

埴 埴は3個体ある(H-63・9・10、H-66・5)。口縁部が外反し、胴部球状、底部平底を呈するもので、最大径が胴部中央にくるものである。このうち、H-66・5の口縁部には退化した稜がみられる。また、H-63・10はややなで肩となる胴部をみせている。調整は胴部内面以外にはヘラミガキが一般的に認められそうである。

壺 壺は、何個体か認められたが、H-66・6にみるように「く」の字状口縁を呈し胴部が下ぶくれの球状を呈する平底のものや、口縁部が直立する小形の短壺が2個体ほど検出された(H-63・11・12)。

甕 甕として捉えたものななかでも、口縁部を残すものは10個体認められた。それらは、A・B・Cの3者に分類された。

A 口縁部が短くあまり強くなく外反し、長胴を呈するもの。長胴化は、カマドの登場に伴う器形変化と考えられる。3個体がこれに相当した(H-75・19・20、H-77・10)。

B 小形・球胴・「く」の字状口縁を呈するもの。3個体認められた(H-63・6・7、H-66・8)。

C 「く」の字状口縁を呈し、胴部はやや膨らんだ後すばまり、底部平底となる器形をみせるもの。H-75・17に代表され、この他類例が4例認められた(H-67・6・7、H-75・18、H-77・11)。

甔 甔は1点検出されたのみである(H-75・16)。素口縁で、底部にゆくにつれてゆるやかにすばまる器形を呈している。底部は径の大きい単孔をとる。内外面には刷毛目状調整が顕著に認められた。

2 第Ⅰ期から第Ⅱ期にかかる土師器様相の同異について

第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけては、遺構においては、後述するように炉からカマドへというきわめて重大な火災の変容が窺えるのである。それでは土器様相にはどのようなありかたの違いが認められるのであろうか。それについて若干ふれてみよう。

① 手捏土器は、Ⅰ期・Ⅱ期を通じて認められる。小形の環形態は両時期に共通してみられる。

Ⅱ期には内面赤彩の無頸壺・鉢が顕在化する。

- ② 土師器蓋はⅡ期において1点のみ認められる。
- ③ 土師器坏A・Bの器形変化は、Ⅰ期・Ⅱ期を通じて認められない。内面放射状ヘラミガキ・口縁部ヨコナア・体部下半～底部ヘラケズリという調整手法も基本的には変化がみられない。ただし、Ⅱ期において内面黒色処理のなされるものが登場してくることは注意される。
- ④ 土師器埴では、Ⅱ期においてより頸部が縮まる器形をとることが窺える。また、坏と同様、Ⅱ期において内面黒色処理のなされたものがみられる。
- ⑤ 土師器高坏では、坏底部と体部との境に稜をもって外半するものについては、Ⅰ期・Ⅱ期を通じて変化は認められない。また、坏Bにみられる器形の坏部を有するものが、Ⅱ期には1点認められた(H-75・10)。
- ⑥ 土師器器台は、高坏と同様な器形を呈し底部に穿孔されたものが、Ⅰ期・Ⅱ期を通じて認められる。この中で、坏部体の中央に鈍い稜を有する器形は第Ⅰ期H-61に1点みられた。
- ⑦ 土師器増は、第Ⅱ期においてのみ認められたが、これは第Ⅰ期の本来的な土器組成中に増が存在しないということの意味するものではないであろう。
- ⑧ 土師器壺においては、Ⅰ期にみられた口縁部中央に鈍い稜を有するものが、第Ⅱ期に消失する。また、胴部下半から底部へと至る変換点が、Ⅱ期において明瞭化しなくなるようである。Ⅱ期には小形の短頸壺も認められる。
- ⑨ 土師器甕Aでは、Ⅰ期からⅡ期にかけて、長胴化、頸部の縮化、口縁部短縮・直立化、外面胴部のヘラケズリの多用化という傾向が窺える。殊にその長胴化は、カマドの登場に対応したものと考えられる。
- ⑩ 土師器甕Bでは、Ⅰ期からⅡ期にかけて、有稜口縁の消失、外面胴部ヘラケズリの多用化の傾向が窺える。
- ⑪ 土師器甕は、Ⅰ期・Ⅱ期を通じて比較的径の大きい単孔のものが認められる。Ⅰ期では、「く」の字状口縁、Ⅱ期では素口縁のものが認められた。
- ⑫ 須恵器は、第Ⅰ期においては4点認められたが、第Ⅱ期においてはみられなかった。

以上、前田遺跡第Ⅰ期・第Ⅱ期の土器様相の違いについて論及してきた。これを総括すると、土器様相全体としては第Ⅰ期・第Ⅱ期を通じて大きな変化は認められないといえる。ただしその細部においての変化は窺えよう。すなわち、坏・埴類における内面黒色処理化、壺・甕類における有稜口縁の消失、カマド登場に伴う甕の長胴化等がそれである。

3 前田遺跡第Ⅱ期土器群の編年的位置付け 付図 5

前田遺跡第Ⅱ期の土器群についてこれまで述べてきたが、それは編年的にはどのように位置付

けられるのであろうか。

さて、前田遺跡第Ⅰ期の土器群は、伴出した4点の須恵器から5世紀の第Ⅳ四半紀を中心に位置付けられることが明らかになった。そして、本第Ⅱ期の土器群は、その土器様相から第Ⅰ期土器群に継続して出現することも捉えられた。そこからは、当然の帰結として、本第Ⅱ期土器群が6世紀初頭に位置付けられるものであることが導き出される。

ところで、6世紀初頭といえば、古墳時代中期から後期へ、関東では和泉式から鬼高式へと移行する時期でもある。本第Ⅱ期土器群は、古墳時代後期いわゆる鬼高式土器メルクマルとされる須恵器模倣の坏（底部丸底、底部と体部の境に稜を有し、体部が直立するもの）を含まないことや、基本的には前時期とあまり変わらない土器様相を示すことから、古墳時代中期の最終末期の土器群として位置付けておこう。

なお、本第Ⅱ期の土器群と同様なものとしては、佐久市西裏遺跡第1号特殊遺構出土土器群が該当してくる可能性がある。ただし西裏の土器群については前述したように、本第Ⅰ期に併行させるか、本第Ⅱ期に併行させるかが微妙な問題ではある。また、その他、小諸市五ヶ城遺跡第7号住居址出土土器群（小諸市教育委員会 1981）は、本土器群に近似した様相を呈しているといえる。

(3) 古墳時代後期中葉（前田遺跡第Ⅲ期） 第447図

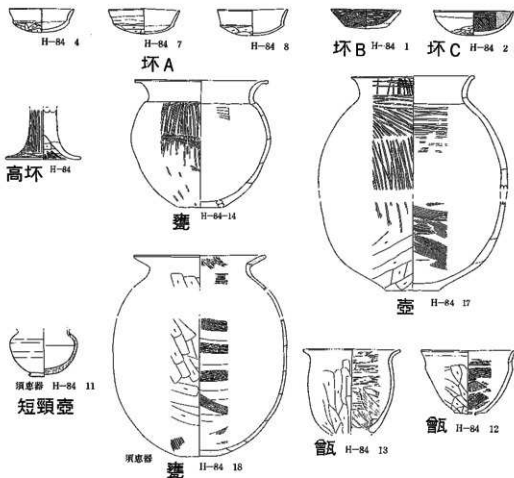
本遺跡において古墳時代後期中葉に位置付けられる土器群を伴出した住居址は、第Ⅱ区H-84号住居址1軒のみであった。H-84号住居址の北東区コーナーからは、良好な状態で一括資料が検出された。このH-84号住居址の一括資料をもって、前田遺跡第Ⅲ期が設定される。

H-84の土器群中には、須恵器短頸壺・土師器坏・高坏・壺・甕・瓶の各器種がみられた。
土師器

坏 9点検出された。A・B・Cの三者に分類される。

- A 底部丸底、底部と体部の境に稜を有し、体部が直線的に外反するもの。7点認められた（3～9）。調整は、内面がヨコナデ・外面体部ヨコナデ・外面底部ヘラケズリが一般的である。
- B 底部平底、体部は底部との境に稜をもって外反するもの。1のみが該当する。内外面にはヘラミガキが施されている。
- C 底部は偏平な丸底を呈し、体部が丸味をおびて外半するもの。2のみが該当する。内面には黒色研磨がなされている。

高坏 脚部1点のみが認められたにすぎず、詳細は不明。



第47図 第III期土器分類図

甕 3個体認められたが、長胴のものは含まれなかった。14は、ほぼ全体の器形を知り得るもので、口縁部が外湾し胴部球状を呈し底部平底の甕であった。

甗 甗は、口縁部が胴部との境に稜をもって外反し、胴部は底部にかけて逆「八」の字状にすぼまる9孔の甗12が1点認められた。また、底部が接合帯より欠損したために甗として再利用されたと思われる13も認められた。

須恵器

甕 18は、土師質の須恵器甕である。内面には土師器にみられる刷毛目状調整が窺える。短頸壺 11は、須恵器短頸壺と考えられるものである。

以上が前田遺跡第III期の土器群の内訳である。これらの土器群は、殊に环A・甕・甗等の形態をもって古墳時代後期中葉の所産と考えられるのである。その実年代については、特徴ある須恵

第165表 須恵器坯底部調整数一覧表

I 回転ヘラキリ						II 回転糸切り						II 不 明					計
a	b	c	d	e	f	a	b	c	d	e	f	c	e	g	h	i	
32	0	4	1	21	7	54	2	0	11	0	0	11	21	1	9	3	177

ここで取り上げている須恵器坯は、いうまでもなくすべてロクロ整形によるものである。

それらの坯はどのような手法によってロクロから切り離されているのか。そして、さらにその底部にはどのような調整が施されるのかを検討してみることにする。

第164表は、その底部切り離し手法および調整手法のバラエティを概念的にまとめたものである。須恵器坯の底部のあり方は、概ねその分類の最末端のいずれかで理解できるものである。

それでは、ここで扱う底部には具体的にはどのようなものがみられるのであろうか（第165表）。

まず、その後の調整等によって消されることなく底部切り離し手法の確認できるものを観察すると、回転ヘラキリ手法（I類）が65例、回転糸切り手法（II類）が67例認められ、それ以外の静止ヘラキリ手法や静止糸切り手法は認められなかった。

また、底部切り離し手法の確認できないもの（III類・切り離しの後全面に調整が施されるもの、破片、風化剥落の激しいもの）は、45点（26%）みられた。これらがどのような手法によってロクロから切り離されているかは、厳密には判断しかねるが、切り離し手法の捉えられるものなかに、静止ヘラキリや静止糸切りがまったく認められないことを勘案すると、概ね回転ヘラキリまたは回転糸切り手法によるものである蓋然性が高いといえよう。

続いて底部調整手法についてみてみることにする。

そのバラエティとしては、a・切り離のまま未調整のもの、b・周囲回転ヘラケズリのなされるもの、c・全面回転ヘラケズリのなされるもの、d・周囲手持ちヘラケズリのなされるもの、e・全面手持ちヘラケズリのなされるもの、f・部分手持ちヘラケズリのなされるものがある。なお、破片等のためその調整範囲が不明なものでは、回転ヘラケズリのみみられるものをg（実際にはbまたはcに属する）、手持ちヘラケズリのみみられるものをh（実際にはd・e・fのいずれかに属する）、また、風化・剥落等により調整の不明なものをiとして扱った。⁽¹⁾

まず、回転ヘラキリによるI類では、aが32例、bが0例、cが4例、dが1例、eが21例、fが7例認められた。a・eが圧倒的に多く、b・dがほとんど認められない傾向がみられる。

次に、回転糸切りのなされるII類では、aが54例、bが2例、cが0例、dが11例、eが0例、

fが0例となった。aが圧倒的に多いが、dもいくつか確認でき、bの事例も僅かに認められた。また、I類に認められたf例はまったく認められなかった。なお、c・e例は後述するIII類のc・e例に含まれている可能性も残るため、これをもってのみその事例が存在しないとは言いきれない。

最後に、切り離し手法の不明なIII類であるが、そのc・e・g・h・iは、I・II類のa～fのいずれかに包括される蓋然性が高いことは前述したとおりである。ここでは、cが11例、eが21例認められ、実態が不明瞭なgが1例、hが9例、iが3例あった。

住居址毎における底部切り離し手法および調整手法の構成とその変化

さて、前述した須恵器坏底部切り離し手法および調整手法が、一住居址内においてどのような構成をみせるかについて考えてみる。つきつめれば当然扱った住居址分だけの構成が捉えられることともなろうが、その主な構成様相を取り上げてみることにする。

第166表を参考にして捉えられる主な構成様相とは以下の4様相である。

1. 主に回転ヘラキリのまま未調整であるI類aが認められ、殊に回転糸切り手法のみられない構成様相。以下の住居址に代表される。

H-1、H-6、H-19、H-21、H-29、H-38、H-39、H-107。

2. 全面手持ちヘラケズリ調整（I e・III e）の認められる構成で、回転ヘラキリ手法は認められるが、回転糸切り手法の存在が不明な構成様相。以下に代表される。

H-32・H-37、H-47、H-48、H-53

3. 全面手持ちヘラケズリ調整をみせるeと回転糸切りによるII類dが主な構成要素となるもので、回転ヘラキリ手法と回転糸切り手法の共存がみられる構成様相。以下の住居址に代表される。

H-23、H-28、H-44、H-46、H-55、H-64

4. 回転糸切りのまま未調整であるII類aが主体を占め、他の類例のあまりみられない構成。殊に、回転ヘラキリ手法がほとんどみられなくなる。以下の住居址がある。

H-3、H-4、H-20、H-26、H-115。

以上、代表的な4つの構成様相について述べたが、これらの構成様相が底部切り離し手法および調整手法の時間差あるいは段階差を示しているのではないかということに気がつく。それではそれはどのようにしたら確かめることができるのであろうか。そしてその変化をどのように追うことができるのか。

幸いなことにそれらを検証する手だては残っている。すなわち住居址の切り合い関係による検証である。上記の構成様相の代表例としてあげた住居址のいくつかは切り合い関係をもっている。そうした切り合い関係をもとに構成様相の変化を追ってみよう。

第166表 須惠器环底部調整事例一覽表 (住居址毎)

	I						II						III					I						II						III			
	a	b	c	d	e	f	a	b	c	d	e	f	c	e	g	h		i	a	b	c	d	e	f	a	b	c	d	e	f	c	e	g
H-1	2																H-53	1	1	3							1	1					
H-2																	H-54					1											
H-3																	H-55	1		1		2		2				1					
H-4							3										H-56											1					
H-5							6										H-57					2											
H-6	1						1										H-58					1											
H-7								2									H-59																
H-8								1									H-64	1						1				2	1				
H-9																	H-68															1	
H-10	1																H-69					2											
H-11														1			H-70																
H-12																	H-72				1			1		1							
H-13	1							2									H-76					1											
H-14													1	1			H-78																
H-15																	H-79											1					
H-16	1																H-80	1									1						
H-17																	H-81	2										1					
H-18																	H-82																
H-19	1																H-83	1															
H-20							4										H-85																
H-21	1																H-86			1	2												
H-22																	H-87				3												
H-23		1						1	2				1	1			H-88																
H-24							2										H-89	1						1									
H-25							2										H-90																
H-26							5		1								H-91																
H-27							2										H-92																
H-28							1										H-93																
H-29	1																H-94													1			
H-30							1										H-95																
H-31							1										H-96																
H-32	1																H-97											1					
H-33	1							2									H-98																
H-34																	H-99					1											
H-35																	H-100						2										
H-36	1																H-101			1													
H-37		1	1														H-102																
H-38	1																H-103	1										2	1				
H-39	1																H-104																
H-40																	H-105																
H-41	1																H-106																
H-42																	H-107	1															
H-43																	H-108	2					2							1			
H-44	1							2									H-109																
H-45																	H-110																
H-46	1																H-111																
H-47																	H-112											1				1	
H-48	1																H-113																
H-49																	H-114																
H-50																	H-115																
H-51																	H-116																
H-52	1		1														H-117	1															

まず、構成様相1のH-19号住居址は、構成様相4のH-20号住居址に切られている。したがってその序列は、構成様相1→構成様相4と捉えられる。

次に、構成様相1のH-29号住居址は、構成様相3のH-28号住居址に切られている。したがって、構成様相1→3の順となる。

構成様相1のH-39号住居址は、構成様相2のH-47号住居址に切られている。したがって、構成様相1→2の順となる。

構成様相2のH-37号住居址は、代表例とはいえないが構成様相3のなかで捉えられるH-36号住居址に切られており、その序列は、構成様相2→3となる。

ここまでで捉えられた構成様相の序列を整理すると1→2→3となる。また、構成様相4は1より新しいものであることが捉えられたが、2・3との序列は住居址の切り合い関係からは導き出すことができなかった。しかし、回転糸切りのまま未調整である底部Ⅱ類Ⅱが凌駕するという構成様相4は、3に後続させ最も新しい段階として捉えることが可能である。これは、これまでの当該期の研究成果からみても妥当かつ容易なことであり、何びとも異論のないものであろう。したがってその構成様相の変化は、

構成様相1→構成様相2→構成様相3→構成様相4

の順で追えると結論できる。

この構成様相の変化は、従来からいわれている当該期の回転ヘラキリ手法から回転糸切り手法への転化という大きな流れのなかにあっても矛盾せずよく符合するものといえる。^[2]

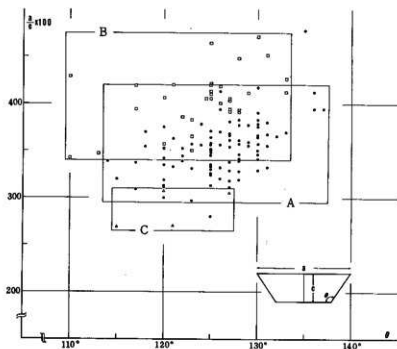
2 須恵器坏の形態と器形

本項で扱う須恵器坏については、まずその器形および法量の相異をもって大きくA・B・Cの3形態に分類し、さらにその形態下における器形を類型化することにした(第448・449図)。

形態 A

体部が外反し底部が平底を呈する器形。形態Bに比べ体部の外傾度が強く、器高が高いのが特徴。法量は、口径15.7~12.4cm、底径11.3~6.0cm、器高4.7~3.2cm、外傾度114°~137°の範囲におよぶ。

- A₁ 底部は縁部から中央に向けてやや突出するため、丸味を帯びた平底を呈するもので、底部から体部にかかる変換点もシャープにならない器形。
- A₂ A₁に比べると底部の突出はほとんどなくなり、平坦な平底をみせる器形。ただし、底部から体部への折り返しはシャープとはいえず、丸味を帯びて外反する。
- A₃ 底部の突出はなくなり、偏平かあるいは中央のやや窪む底部をみせる器形。ただし底部から体部への折り返しは依然としてシャープとはいえず、丸味を帯びて外反する



第448図 須恵器環形器 A(●)・B(□)・C(△)の法量分化

もの。

- A₄ 底部は突出のみられない平底を呈し、底部と口縁部の変換点もシャープとなる器形。体部は比較的直線的に外反する。
- A₅ 口径に比して底径が小さくなり、その外傾度が急になる器形。底部は突出のない平底を呈し、底部から体部にかけての変換点もシャープになるもの。

形態 B

体部が外反し底部平底を呈する器形。形態Aに比べ体部の外傾度が弱く、器高が低いのが特徴。いわゆる盤状の形態を呈するもの。法量は、口径15.3~11.8cm、底径12.3~7.0cm、器高4.0~2.8cm、外傾度110°~133°におよぶ。

形態 C

体部が外反し底部平底を呈する器形。形態A・Bに比べ口径・底径ともに小さくなるが、口径・底径に対し器高が高いもの。肉厚な小形品である。3点みられたのみである。法量は、口径13.5~11.6cm、底径7.4~6.4cm、器高5.0~3.8cm、外傾度115°~127°を測る。



A1 H-39-2



A2 H-113 2



A3 H-23 6



A4 H-12 1



A5 H-30 2



B H-37 4



C1 H-53 3



C2 H-3 3

第449図 須恵器杯分類図

- C₁ 底部が丸味を帯びた平底を呈する器形
 C₂ 底部は丸味を帯びない偏平な平底で、底部から体部にかけてシャープに変換する。

3 底部切り離し手法および調整手法と器形

さて、これまで調整手法あるいは器形の個々のレベルで話を進めてきたが、ひとつの坏は両属性の総合体であり、決してその結びつきを切り離して考えることはできない。ここでは、底部切り離し手法および調整手法がどのように器形を規制するかを考え、両者の結びつきをみとめることにする。

まず、かかる手法がどのように器形を規制するかを以下に列記しよう。

- ① 底部切り離し手法によって規制される底部の形状は次のようである。

まず、回転ヘラケリの場合、ヘラがロクロ中心に向かって下向きに切り込まれると、A₁類のように中央の突出した底部となる。

逆に、ヘラがロクロ中心に向かって水平あるいは上向きに切り込まれると、B形態にみられるような平坦な底部か中央のやや窪む底部となる。

回転糸切りによる場合は、平坦な底部か中央のやや窪む底部となるが、A₁類のように中央が突出する底部は生み出されない。

- ② 底部調整によって意図される形状は次のようである。

まず、回転糸切りの後周回手持ちヘラケズリがなされた場合、底部から体部への折り返し部分の角がとれてシャープさがなくなり、A₂類にみられるような器形となる。

底部全面手持ちヘラケズリがなされる場合、主に外周部がよく削られA₃類にみるような丸味を帯びた底部が形成される場合と、突出部分中心に削りがなされより平坦な底部が形成される場合とが認められる。

部分手持ちヘラケズリがなされる場合、例えば回転ヘラケリの際の中央のヘソの除去など、不都合な突起の除去等が意図される。

回転ヘラケズリがなされる場合、より平坦な底面の確保が意図される。

以上が、切り離し技法および調整手法によって規制される器形である。では、それをふまえての両者の結びつきはどのようであろうか。その主な結びつきを以下に記しておこう。

- ① 器形A₁は、調整手法I類aと強い結びつきをみせる。
 ② 器形A₂は、調整手法eとも強い結びつきをみせる。
 ③ 器形A₂は、調整手法I類aと強い結びつきをみせる。
 ④ 器形A₂は、調整手法eとも強い結びつきをみせる。
 ⑤ 器形A₃は、I類aとの結びつきもみられるが、殊にII類a・dとの結びつきが特徴的であ

る。

- ⑥ 器形A₄は、調整手法Ⅱ類aとの結びつきが強い。
- ⑦ 器形A₅は、調整手法Ⅱ類aとの結びつきが強い。
- ⑧ 器形(形態)Bは、Ⅰ類・Ⅱ類のいずれとも結びつきを見せている。
- ⑨ 器形C₁は、Ⅰ類との結びつきをみせる。
- ⑩ 器形C₂は、Ⅱ類aとの結びつきをみせる。

4 底部調整手法の変遷からみた須恵器環の器形変化

さて、前項では調整手法と器形との結びつきが明らかとなった。また、調整手法の構成様相が1~4の順で変遷することも前述しておいたとおりである。それでは、調整手法の変遷に基づいて須恵器環の器形変化がどのように追えるかを明らかにしておこう。

- ① まず、環形態Aにおいては、相互に重なる部分がありながらも、おおよそA₁→A₂→A₃→A₄→A₅の順での器形変化が追える。
- ② ①に述べた環の器形変化とは、具体的には、丸味を帯びた平底からより平坦な平底への変化(底部の平坦化)、底部から体部にかかる変換点の明瞭化、体部の外傾化、底部径の縮小化であるといえる。
- ③ 形態Bの器形は、底部調整手法の変換に僅みて追っても、ほとんど変化がないものといえる。
- ④ 形態Cにおいては、C₁→C₂の器形変化が追え、底部の平坦化がみられる。

5 須恵器環の製作・焼成について

須恵器環の製作・焼成について簡単にふれておこう。

まず、その成形について考えてみる。かつて須恵器環の成形技法は、ロクロ水挽き技法によるものとされたが(阿部 1971)、近年ではマキアゲ水挽き技法によるものであることが有力視されている(中村 1980、田辺 1981)。事実、本遺跡のH-114号住居址出土の須恵器環内面体部には、粘土の紐痕が残っており、また本遺跡と隣接する小諸市鋳物師屋遺跡においては、体部に幾重にもわたってかなり明瞭な粘土紐痕を残す須恵器環が検出されている。この僅か数例をもってのみ、その成形技法がマキアゲ水挽きによるものであると判断するのはいささか危険であるが、須恵器生産の統一性・均質性をふまえてみた場合、数少ない資料から引き出される様相もある程度の普遍化が可能であるといえる。したがって、本遺跡にみられる須恵器環の成形技法としても、一般に考えられているマキアゲ水挽き技法を想定しておくのが妥当といえよう。

次に須恵器環の成形の際のロクロの回転方向についてはどうであろう。図示した個体のうち、ロクロの回転方向の捉えられる個体は165個体であり、その内訳は以下のようである。

総数165個	ロクロ右回転 130個 (79%)
	ロクロ左回転 35個 (21%)

時期や生産地の異なる可能性のあるこれらについて一概には比較できないが、そのおおよその傾向は抽出できる。その傾向とは8割がたが右回転のロクロによるものであることである。このロクロ回転方向の偏りは注意されねばなるまい。そこにおいては、須恵器生産における製作上の規範が現われているものとも解釈されようか。あるいは単にロクロ使用者の「利き」や「くせ」の偏りとしてでも捉えられようか。

さて、須恵器は一般に、ロクロを用いて成形され還元焰焼成された灰色の焼き物であるとされる(中村、田辺 前掲)。本項で扱った坯の大部分も灰色を呈するものである。しかしその一部には橙色を呈するものが含まれていることが注意される。従来、こうした橙色を呈する土器については、「須恵質土器」(天野・他 1974)・「土師質須恵器」(松村 1977) などとの認識もある。しかし、ここでは、橙色を呈するそのような土器が目的的に生産されたものでなく、須恵器焼成で酸化焰焼成をへて還元焰焼成へと移る過程において還元が不十分であったために生み出されたものであると考え、「須恵器」の範疇で捉えることとした。

ところで、本遺跡においてこのような「橙色の須恵器」は、前述した形態A₁に多く見出せることが注意される。形態A₁は本項の須恵器坯のなかでは最も古い器形として捉えることができ、当該期の初期段階においては須恵器坯の還元焰焼成が不十分な場合も多かったことを予測せしめるのである。

これらの須恵器坯はいずれから供給されたものであろう。在地窯からなのか、他の地方からの搬入品なのであろうか。在地にあっては、御牧ヶ原古窯址群・八重原古窯址群が須恵器生産窯址として展開しているが(坂詰 1982、福島 1986)、その詳細は不明である。しかし、佐久市石附古窯址(林 1982)にみるように、すでに7世紀後半段階において在地での須恵器生産が一部開始されており、8世紀段階に在地窯からの須恵器の供給があったであろうことは推測に難くない。ただし、在地における須恵器窯の実態が明らかになったうえで、集落出土の須恵器との対比が試みられ、胎土分析等による科学的手法を用いた裏付けがなされない限り、在地窯の須恵器供給の問題についてはこれ以上言及できない。

註

- (1) この他の調整手法として第164表に掲げたナデがある。ただし、当遺跡の須恵器坯の底部にはナデのなされているものが認められなかったため、ここでは具体的事例として取り上げていない。

- (2) ちなみに多摩ニュータウン地域の古代の土器編年のメルクマールは次の通りとされている(栗城・鶴岡・比由井 1982)。

第Ⅰ期 口縁部と体部の境界に稜を有する鬼高的様相をもつ環

第Ⅱ期 従来、美濃須恵衛陶跡群からの搬入品とされている高台環の須恵器環

第Ⅲ期 底部が回転糸切りの後、全面あるいは外周をヘラケズリ調整されている須恵器環

第Ⅳ期 底部が回転糸切りのままで、調整の施されない須恵器環

第Ⅴ期 体部外面がヘラケズリ調整された粗雑なつくりのものや、内面にヘラミガキ調整を施し、黒色処理されるなどバラエティー富む土師環

殊にこのなかでも、第Ⅲ期・第Ⅳ期の指標は、本構成様相3・4と共通するものであり、本構成様相が編年のメルクマールたり得る妥当性を支持してくれている。

- (3) 小諸市教育委員会花岡弘氏の御厚意により実見させていただいた。

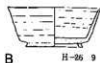
(2) 須恵器高台付環

Ⅰ 須恵器高台付環の形態

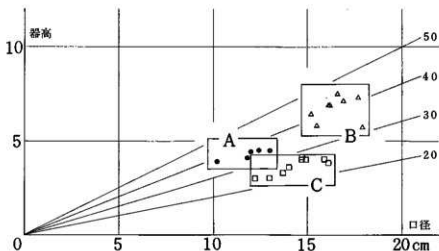
本遺跡で検出されている須恵器高台付環は、主にその法量の分化と器形によって以下に形態分類ができる(第450・451図)。

形態 A

口径13.0~10.2cm、底径(高台部径)8.7~6.4cm、器高4.5~



第450 須恵器高台付環の形態



第451 須恵器高台付環形態A・B・Cの法量分化

第167表 須恵器高台付坏底部調整数一覧表

I 回転ヘラキリ						II 回転糸切り						III 不明					計
a	b	c	d	e	f	a	b	c	d	e	f	c	e	g	h	i	
0	0	0	0	0	0	2	5	0	0	0	0	18	2	1	0	2	30

3.9cm、の範囲におよぶもので、体部が比較的直線的に外反し、底部平底を呈する器形。形態Bとは相似形をなすが、量量によって小形に分化する器形。5例認められた。

形態 B

口径17.9~15.2cm、底径14.1~9.9cm、器高7.5~5.7cmの範囲におよぶもので、体部が比較的直線的に外反し、底部平底を呈する器形。形態Aとは相似形をなすが、量量の点で大形に分化する。9例認められる。

形態 C

口径16.1~12.2cm、底径12.1~9.8cm、器高4.0~3.0cmの範囲におよぶもので、形態A・Bに比べ、口径・底径・器高の三種の属性のなかで器高の数値が低くなる盤状の器形を呈する。9例認められた。

2 須恵器高台付坏の底部調整と高台

須恵器高台付坏の底部調整にどのような手法がみられるかを、須恵器坏の項で前述したそのバラエティに即応させ検討してみよう（第167表）。

まず、その底部切り離し手法については、回転糸切り手法によるものが確実に認められた。また回転ヘラキリ手法によるものは確認できなかったが、数多く検出されている底部切り離し手法の不明なⅢ類のなかに含まれているものと考えられる。

次に、その底部調整手法についてであるが、殊に周囲回転ヘラケズリ調整bと全面回転ヘラケズリ調整cが特徴的にみられることが注意される。前述したように、回転ヘラケズリの意図は平坦な底面の確保にあるといえる。平坦な底面は高台部貼り付けの際に有効でもあったのであろう。いずれにしても、底部回転ヘラケズリ調整は本器種における重要な特性と評価できよう。なお、回転ヘラケズリ調整の他、切り離しのまま未調整のaや全体手持ちヘラケズリによるeも若干みられた。

さて、高台部は1点を除きすべて貼り付けによるものであった。例外の1点とは、H-111・5にみられる削り出し高台である。なお、西弘海氏によれば削り出し高台は9世紀前半の緑釉陶器に

みられるもので、晩唐越州糸青磁の影響下における革新技術であるという(西 1974)。しかし、後に位置付けられるようにH-111号住居址は8世紀代の住居址であり、削り出し高台の出現期を測る住居址ということになってしまう。また5の環の高台部は底部をこえて突出しておらず用をなしていないこともあって、本個体が恣意的に生み出されたものであることを考えさせるのである。

(3) 須恵器長頸瓶

須恵器長頸瓶と考えられるものは、21個体みられるが、いずれも部分品のみで完形が存在せず実態はわからない。また、頸部を失うものについて長頸瓶と判断するにはいささか危険が伴う。したがってここでは、その若干の様態についてふれておくのみとする。

まず、その口縁は外側に折り返し帯状を呈する口縁をみせるものが4点あるが、H-41・4にみるような葉口縁のものもある。

底部では、高台の貼り付けられるものと、高台をもたないものの二者がある。また、底部調整のバラエティとしては、回転糸切りのまま未調整のⅡ類aが6例、全面回転ヘラケズリのなされるⅢ類cが6例と目立った。

なお、底部径から推測して、これらの長頸瓶の器形には大小の二種が認められるらしいことがわかった。

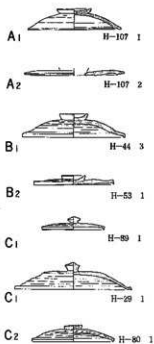
(4) 須恵器蓋 第452図

須恵器蓋は47点を図示したが、それらを次の視点によって分類してみた。すなわち、①内面のかえりの有無、②つまみ部の形状、③偏平度の3点である。導き出された形態を以下に記そう。

形態 A₁ 内面にかえりを有する蓋で、つまみ部は径が大きく中央が窪む皿状のもの。その中央に向かって器高が高まる器形。主に2例が該当する。

A₂ 内面にかえりを有する蓋で、中央においても器高の高まらない偏平な器形を呈する。1例のみでありつまみ部の形状は不明。

形態 B₁ 底面にかえりを有さない蓋で、つまみ部が環状もしくは皿状を呈するもの。その中央に向か



第452図 須恵器蓋分類図

って器高が高まる器形。主に3例が該当する。

B₂ 内面にかえりを有さない蓋で、つまみ部が皿状を呈するもの。その中央においても器高が高まらず、偏平な器形を呈する。偏平な点においてはA₂と共通する。1例認められた。

形態 C₁ 内面にかえりを有さず、つまみ部が宝珠形を呈するもの。なお、口径の点においてH-29-1のように口径の大きいものと、H-89-1のように口径のきわめて小さいものなどがみられる。主に16例が該当する。

C₂ 内面にかえりを有さず、つまみ部が偏平なボタン状を呈するもの。なお、本例のつまみ部の形状は、C₁の宝珠形つまみの退化したものと捉えることができ、C₁の範疇に含めて理解することも妥当といえる。9例認められる。

以上、須恵器蓋の形態を示したが、これらの蓋は基本的には坏類とセットをなすものと考えられる。ちなみにH-7号住居址では、須恵器坏と蓋がセットで出土しており、貴重な事例といえる。一方、B₂の蓋は、佐波理塚蓋の模放形態とされ(西 1974)、特定形態の坏とのセット関係も想定できようが、むしろ在地にあってはそのようなセット関係は崩れ、独立した器種として存在しているものとも思われる。

(5) 須恵器円面硯 第453図

須恵器円面硯は、H-20号住居址・H-108号住居址の2軒から各1点ずつ検出されている。この2軒は、前田遺跡第VII期(8世紀第IV四半紀から9世紀初頭)に位置付けられるものである。

H-20の円面硯は、脚台部に9ヶ所の透しを有するもので、その脚部には4条の沈線が認められた。磨墨面には顕著な磨滅もみられず、墨の付着も認められなかった。

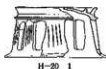
H-108の円面硯は、脚台部を失うが、おそらくその脚台部に透しを持たないことが、前田遺跡佐久市分出土の円面硯二例から類推できる。本円面硯の磨墨面には、磨墨による磨滅や墨の付着は認められなかった。⁽¹⁾

なお、鑄師屋遺跡群における円面硯の出土事例は、現在までに総数5例となっている。内訳は、前田遺跡御代町分2例・同佐久市分2例、小諸市鑄物師屋遺跡1例である。⁽²⁾

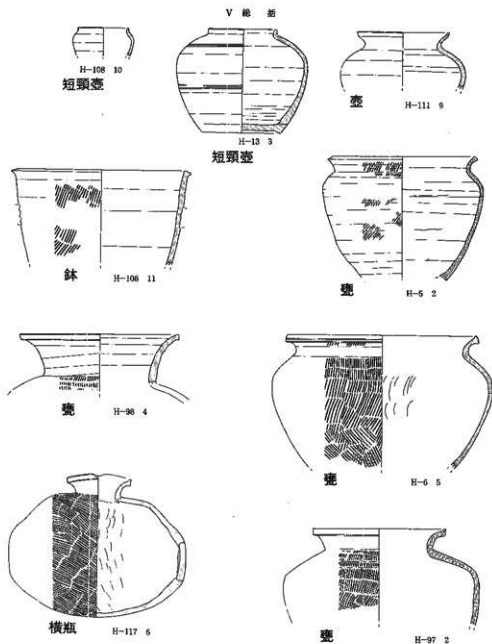
註

(1) 佐久市前田遺跡では、本第II期(8世紀第II四半期中心)に位置付けられる住居址2軒(H-3、H-5)から1点ずつ円面硯が検出されている。

(2) 小諸市教育委員会花岡弘氏の御厚意により、実見させていただいた。



第453図 円面硯



第454図 須恵器その他の器種

(6) 須恵器その他の器種 第454図

須恵器では、これまで扱ってきた器種の外、壺・短頸壺・鉢・甕などが検出されている（第454図）。しかしいずれの器種も断片であったり、僅少であったりして実態を捉えるに至らなかった。

(7) 土師器坏 第455図

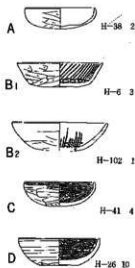
本遺跡において検出され、図示し得た土師器坏は31個体ある。それらは、器形・調整・暗文等の属性をふまえたうえで、以下に形態分類される。

形態 A 底部は偏平な丸底を呈し、体部が弓なりに湾曲する器形。外面は口縁部を中心にヨコナデがなされた後、底部から口縁部近くまでヘラケズリがなされる。内面はヨコナデがなされる。ロクロ整形によらない。図示し得たのは4個体のみである。

形態 B 内面体部に放射条暗文が施こされ、見込み部にはラセン状暗文が施こされる。外面は、口縁部を中心にヨコナデがなされた後、体部に横位のヘラケズリがなされている。また、底部にも全面にヘラケズリがなされる。平底のもの(B₁)と偏平な丸底のもの(B₂)とに分類できる。図示し得なかったものも含め18個体が確認された。なお、本形態については後に詳述することになる。

形態 C 底部は偏平な丸底を呈し、体部が弓なりに湾曲する器形。内面は黒色研磨のなされるものと、単にヘラミガキのみがなされるものがある。外面は体部から底部にかけてヘラケズリがなされ、口縁部には若干のヘラミガキがなされる。ロクロ整形によらない。図示し得たのは4個体のみである。

形態 D 底部は平底を呈し、体部が外反する器形。ロクロ整形による。内面は黒色研磨がなされる場合が圧倒的に多いが、ヘラミガキのみの場合もみられる。外面体部はロクロヨコナデ痕を残したまま未調整である(ただし厳密には底部からのヘラケズリが体部最下位におよぶ場合がある)。底部はロクロからの切り離しの後、全面に手持ちヘラケズリのなされる場合がほとんどある。なお、回転糸切りのまま調整の底部が1例のみ認められている(H-20・6)。



第455図 土師器坏分類図

(8) 土師器長胴甕 第456・457図

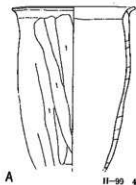
土師器長胴甕は、須恵器坏とともに、当該期の土器組成中において最も普遍的な器種といえ、その土器様相を考えるうえにおいて欠かせないものである。

ここでは、次の4つの視点、すなわち①器形・②器厚・③調整・④胎土のあり方から形態分類

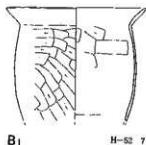
を行い、その変遷を追ってみることにする。

まず、形態は以下のように分類される。

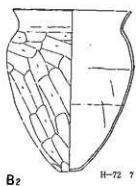
形態 A 長胴を呈し口縁部がゆるく外反する器形。肉厚で、最大径は口縁部にある。胴部外面においては、息の長いヘラケズリが下から上へ（口縁部近くまで）なされるのが特徴。胎土は以下の形態に比べ精選されない。図化できたのは3例のみである。



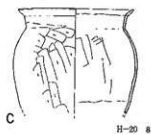
形態 B₁ 長胴を呈し口縁部が「く」の字状に外反する器形。肉薄で、最大径は口縁部にある。胴部外面においては、上位に横方向のヘラケズリ、中～下位に縦方向のヘラケズリがなされる。また、胴部内面にはヘラナデがなされている。口縁部はヨコナデによる。胎土は形態Aに比べ精選されている。図化した甕のうちの22例がこれに該当した。



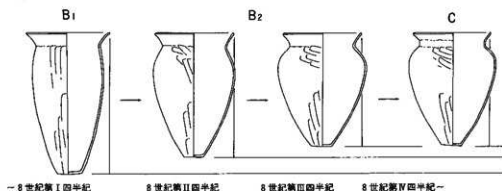
B₂ 長胴を呈し口縁部が「く」の字状に外反する器形。B₁と異なるのは、最大径が胴部上半にあることである。また、口縁部の外傾度はB₁に比べゆるくなり、立ち上がり気味となる。調整手法・胎土等はB₁と変わらない。図化したものうち53例がこれに該当した。



形態 C 長胴を呈し口縁部が「コ」字状に外反する器形。肉薄で、最大径は胴部上半にある。胴部外面においては、上位に横方向のヘラケズリ、中～下位に縦方向のヘラケズリがなされる。胴部内面にはヘラナデがなされ、口縁部にはヨコナデがなされている。胎土は形態Aに比べ精選さ



第46図 土師器長胴甕分類図



第457図 土師器長頸甕器形変遷模式図

れている。16例がこれに該当した。

なお、ここでいう形態B₂はいわゆる「く」の字状口縁の「武蔵型甕」、形態Cは「コ」の字状口縁の「武蔵型甕」と同様なるものである。近年、この種の甕は武蔵地域のみならず、上野・下野そしてこの信濃地域の一部において認められており、広範囲にわたる分布のひろがりが見られる。したがってこの種の甕について、「武蔵」という地域的限定を伴った型式名が与えられるべきではなく、ここでもそのような名称を用いないことにする。

さて、本来であれば土器群全体の様相が把握され、その変遷が明らかにされて後、個々の器種の変化が語られるべきであろうが、ここでは後の説明の煩雑さを解消するため、後に捉えられる土器様相から見出すことのできる土師器長頸甕の変遷を追ってみることにする。

その変遷は以下に記す（第457図）。

- ① 土師器長頸甕の形態変遷は、相互に重なり合う部分をもちながらも、古いものからおおよそ形態A→B₁→B₂→Cの順で追える。
- ② 形態AからB₁へと移る過程においては、器種の肉薄化、胎土の精選化、ヘラケズリの調整方向の変化、口縁部の伸張化、口縁部の外傾化、胴部のふくらみが強まる、等の変化が認められる。胎土の精選化は肉薄の器厚への対応を示すものであろう。なお、形態Bの系譜を形態Aに求め得るかどうかは、微妙な問題でもある。
- ③ 形態B₁からB₂へと移る過程においては、最大径が口縁部から胴部上半部へと移る、口縁の外傾化が弱まる、胴部から口縁部への変換点のシャープさがなくなる、胴部のふくらみが強まる等の変化が認められる。
- ④ 形態Cの系譜をB₂に辿り得るものかどうかは微妙な問題でもあるが、B₂からCへと移る

過程においては口縁部の「コ」の字化が認められる。「コ」の字の屈曲は時期が下がるにつれてますます強まるようである。

- ⑤ 形態A→B₁→B₂へと移る過程においては、器高の短縮化がみられるようであるが、各形態において底部まで残る個体が少ないため言明できない。

(9) 土師器小形球胴甕 第458図

土師器小形胴甕と認識できるものは29個体ある。それらは、器形・器厚・胎土・調整等のあり方から以下に形態分類できる。

形態 A 口縁部は外反し、胴部は球状を呈し、底部平底を呈する器形。肉厚で、胴部外面には主として縦方向のヘラケズリがみられる。胎土は形態Bに比べ精選されない。10個体認められた。

形態 B 器形は形態Aと変わらないが、ロクロ整形によるもの。外面胴部下半には、須恵器の調整にみられる叩き目、内面胴部下半には青海波文がみられる。1例のみ認められた。

形態 C 口縁部は外反し、胴部球状を呈する肉薄な器形。胴部外面にはヘラケズリがなされ、胴部内面にはヘラナダがなされる。胎土は形態Aに比べ精選される。小形甕とはいえその大きさには大小2種が認められそうである。

18個体を該当させることができるが、このうち底部のないものの中には台付甕が含まれる可能性も残る。



第458図 小形甕分類図



第459図 土師器甕

(10) 土師器埴 第459図

土師器埴に分類される個体は、僅かに3点認められたにすぎない。本器種は一部土師器環と同様な器形を呈しており、区分が困難な面があるが、ここでは便宜的に口径5.9cm以上、器高7.1cm以上のものについて埴とした。

検出された埴は、いずれも内面黒色研磨がなされており、外面においてもヘラミガキが認められる。器形は、いずれも丸味をおびた底部をみせ、全体により半球状に近い器形をみせるもの(H-46・3、H-86・5)、やや偏平な器形をみせるもの(H-6・4)がみられた。

なお、これらは、佐波理器の模放といわれている(西 1974)飛鳥Ⅱ・飛鳥Ⅲ段階の坏A・坏Cの器形に近似していることが注意される。

(11) 土師器その他の器種 第460図

これまで取り上げてきた以外の土師器器種についてふれておこう。

まず、高台付坏は、ロクロ整形により内面黒色研磨のなされたものが1点ある(H-37・9)。

高坏は3点認められたが、1点はロクロ整形によらないもので(H-22・1)、他の2点はロクロ整形によるものである(H-19・6、H-98・2)。ただしこの2点は、前述したような「環元焰焼成が不十分な須恵器」である可能性も残る。

特殊な器種としては、H-93・1の高台付高坏がある。本器種と同様な器形を示す例は、千葉県金山市山田水呑遺跡第79号住居址(山田水呑遺跡調査団 1977)の須恵器にみられる。仏具等の模放形態とも考えられようか。⁽¹⁾

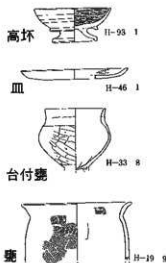
この他、皿が2点(H-46・1、H-86・6)、手抱土器1点(H-86・1)がみられた。台付甕は3点検出されたが(H-33・7・8、H-108・18)、いずれも器体の一部を欠いており全体を知り得なかった。

前述した以外の土師器甕では、口縁部が短く外反し胴部が直線的に下降するもので、刷毛目状調整がなされた甕もいくつかみられた(H-19・9・10、H-44・11)。H-1号住居址にみられた土師器大甕は、須恵器大甕の模放によるものと考えられ注意される。

なお、検出された器種のうちでも、甗は認められなかった。

註

(1) 長野県史刊行会笹沢浩氏の御教示による。



第460図 土師器その他の器種

(12) 奈良・平安時代の土器様相とその編年的予察

さて、これまで、当該期土器についての器種分類および形態分類を行ってきた。殊にその中でも、須恵器環についてはその構成様相を明らかにし、その構成様相が段階を追って変化することを明らかにした。

ここでは、構成様相の変化が、当該期をさらに画するうえでの重要な要件であると考え、須恵器環の構成段階に対応する各器種・各形態の組み合わせを捉えてみたい。そしてその各段階毎の土器様相全体を明らかにし、編年を組み立ててみよう。

なお、本編年について「予察」としたのは、本遺跡群の広がりやさらに大きなものであり、現在継続中の調査の成果のいかんによって、細部の様相が修正される可能性をも孕んでいるからである。

I 各段階の土器様相 第168表

各段階毎の基本土器組成を明らかにするためには、住居址内における真の共伴遺物を抽出することが第一義であろう。この点において、いわゆる一括資料 (Fund) がまず有効なものとして見出されてくる。しかし、良好な一括資料が住居址において遺存する状況は稀であり、実際に我々が扱わなければならない遺物のほとんどは、遺構覆土中のものである。だが、覆土中の遺物の共伴性についても、統計学的方法で伴出頻度をみることによって検証でき、有効性を持たせることができる。

ここでは、山田水呑遺跡の報文において用いられたような共伴頻度表 (松村 1977) を作成し、各段階にみられる主要な土器器種をふるい出した。そこから窺えた各段階の土器様相について以下に記す。

第1段階 須恵器環の構成様相1で代表される段階。

- ① 底部が丸味をおびた平底を呈し、回転ヘラキリのまま未調整の須恵器環形態Aがその組成の主体をなす。
- ② 須恵器環形態Bも土器組成中にみられる。
- ③ 須恵器高台付環では、形態A・Cはみられるが法量の大きい形態Bはみられない。
- ④ 土師器環では、ロクロ未使用・丸底・体部内湾気味の形態Aがある。
- ⑤ 須恵器蓋では、かえりを有する形態Aがみられ、形態B・Cもみられる。
- ⑥ 土師器長胴甕では、前時代の様相を色濃く残す、肉厚・長胴・縦方向ヘラケズリをみせる形態Aが残っている。
- ⑦ 土師器長胴甕で主体となるのは、肉薄・「く」の字状口縁の形態B₁である。その最大

径は口縁部にある。

- ⑧ 土師器小形球胴甕では、肉厚で縦方向のヘラケズリのみられる形態Aが特徴的に存在している。

第2段階 須恵器坏の構成様相2で代表される段階

- ① 須恵器坏形態Aでは、底部に全面手持ちヘラケズリがなされ、丸味を帯びた平底をみせるものが特徴的に見出せる。回転糸切り手法は認められない。
- ② 須恵器坏ではこの他形態B・Cもみられる。
- ③ 須恵器高台付坏は、形態Cが認められる。
- ④ 土師器坏では、畿内型暗文の施こされる形態Bが特徴的に認められる。
- ⑤ 須恵器蓋では、環・皿状つまみでかえりを有さない形態Bがみられ、宝珠つまみの形態Bもみられる。
- ⑥ 土師器長胴甕では、形態Bの「く」の字状口縁ものが主体的にみられるが、そのなかにあっても口縁部に最大径があるB₁より、胴部上半に最大径があるB₂が圧倒的に多い。
- ⑦ 土師器小形球胴甕では、肉厚な形態Aも存在するが、肉薄な形態Cもみられる。

第3段階 須恵器坏の構成様相3で代表される段階

- ① 須恵器坏形態Aでは、回転糸切りの後周囲手持ちヘラケズリのなされるものが特徴的にみられる。また、切り離しの後、全面手持ちヘラケズリのなされるものも存在する。
- ② 須恵器坏ではこの他形態Bがみられ、形態Cも存在するものと思われる。
- ③ 須恵器高台付坏では、形態A・形態Cがみられる。
- ④ 土師器坏は、クロク整形・平底・内面黒色研磨の形態Dがみられるようになる。
- ⑤ 須恵器蓋には、形態B・Cがみられる。
- ⑥ 土師器長度甕では、「く」の字状口縁で胴部上半に最大径のある形態B₁が主体を占める。
- ⑦ 土師器小形球胴甕では、肉厚な形態Aはみられなくなり、形態Bが主体的にみられるようになる。

第4段階 須恵器坏の構成様相4に代表される段階

- ① 須恵器坏では、回転糸切りのまま未調整のものがそのほとんどを占める。

第88表 時期別出土器種・形態数一覧表

形態 時期	須恵器 蓋			須恵器 高台付 坏			土師器 坏				土師器 長胴甕				土師器 小形球胴甕		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C	D	A	B ₁	B ₂	C	A	B	C
IV	2	3	3	1	—	2	3	2	1	1	3	13	8	1	5	1	1
V	1	2	8	—	1	3	—	7	2	3	—	5	27	2	5	—	4
VI	2	3	2	3	2	1	—	1	0	2	—	3	9	1	1	—	6
VII	—	—	11	—	6	2	—	—	—	8	—	—	12	11	0	—	8

- ② 須恵器高台付坏では、殊に形態Bが顕在化するようになる。
- ③ 土師器坏では、ロクロ整形・底部平底・内面黒色研磨の形態Dの存在が顕在化し始める。
- ④ 土師器長胴甕では、「く」の字状口縁で胴部に最大径のある形態B₂も存在するが、「こ」の字状口縁の形態Cの存在が顕在化しつつある。
- ⑤ 土師器小形球胴甕は、肉薄の形態Cのみの存在に限られるようになる。

以上、当該期における4段階の土器様相について、その概要を列記してみたが、ここでいう「段階」とは、「時期」と言い換えることも可能である。ところで、前述したように、本遺跡においてはすでに古墳時代中期・後期において集落が形成されており、それらは第Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期として位置付けられている。本第1段階は、その第Ⅲ期（古墳時代後期中葉）より継続的に移行するものではないが、これを第Ⅳ期として位置付けておこう。したがって各段階は、次のような時期として編年される。

第Ⅳ期（第1段階）→第Ⅴ期（第2段階）→第Ⅵ期（第3段階）→第Ⅶ期（第4段階）

2 当該編年と実年代

さて、当該編年における4時期について、実年代を想定し、本項を閉じることにしよう。

まず、実年代推定の直接的根拠となり得るのは、紀年銘をもつ木筒・漆塗文書・墨書土器等である。当然、本遺跡においてはこのような遺物は検出されておらず、また、近隣にも認められていない。一方、伴出古銭の鑄造年代は、共伴遺物の上限を押えることにおいてのみは有効といえる。古銭は、神功開宝（765）が南隣りの野火付遺跡、萬年通宝（760）・隆平永宝（796）・饒益神宝（859）が北隣りの十二遺跡の各住居址から検出されている。

実年代推定のための次の手だてとしては、採集期間の明確な窯址からの製品や、流通（使用）期間の限定される製品を遺物中に見出すことである。例えば、南関東においてそうされているよう

に美濃朝倉窯の製品をもって年代を与えたり、飛鳥・平城地域で用いられた畿内産の土師器をもって年代を与える方法である。着用期間の限定される帯金具などをもって、ある程度の年代を与えることができる。

最後の手段は、特定地域（例えば平城地域）の整然となされた編年と在地の編年との整合化を測り、その年代観を援用する方法である。そうした意味においては、与えられた年代は、実年代たり得ないともいえる。しかしこの問題は、タイムスケールを大きくもつことによって解消されよう。

以上の方法のいくつかを用いることによって、想定できた各期の実年代とは次のようである。

第Ⅳ期 8世紀第Ⅰ四半紀を中心とした年代を想定しておく。理由は以下による。

- ① 佐久市分の前田遺跡のH-1号住居址は、本Ⅳ期に位置付けられる住居址である。^[1]このH-1号住居址からは、銅製の巡方1個が検出されている。阿部義平氏によれば、この巡方等の付される鐙帯は、707年～796年・807年～810年の間に限定して着用されたという（阿部 1976）。この使用期間に基づけば、伴出した土器群は少なくとも707年を測り得ないことになる。

したがって本期の年代の一点を707年以降におくことができる。

- ② 本期の土器群は、7世紀代の土器様相を一部にとどめている。例えば、須恵器蓋の内面のかえりや、肉厚・息の長い縦方向のヘラケズリをみせる長胴甕形態Aの存在がそれである。したがって8世紀代においてもその時期がさほど下り得るものではない。

第Ⅴ期 8世紀第Ⅱ四半紀を中心とした年代を想定しておく。その理由は以下による。

- ① 本期に特徴的な土師器環Bにみられる畿内系暗文は、体部1段放射状暗文+見込み部ラセン暗文である。このような暗文構成は、畿内においてはすでに平城宮Ⅲの段階で消失している。したがって、ここにみられる暗文土器の展開は、平城宮Ⅲ（代表S K820=749年）以前とみるのが妥当といえる。

- ② 本期に顕在化する土師器環B₁は、いわゆる盤状環といわれるものである。南武蔵において土師器盤状環が成立するのは、現在のところ8世紀第Ⅱ四半紀と考えられている（福田 1983、河野 1983）。ここにおいて想定した年代は、南武蔵の年代観とも矛盾するものではない。

- ③ 土器様相の連続性から、第Ⅳ期に後続し、第Ⅵ期に前出する年代が与えられるべきである。

第Ⅵ期 8世紀第Ⅲ四半紀を中心とした年代を想定しておく。

- ① 本期においては、回転糸切り手法が採用されるのが特色としてあげられるが、当該期編年研究の進んでいる南関東地方であっても回転糸切り手法の登場は8世紀第Ⅲ四半紀

とされており(神奈川考古同人会 1983)その年代観と矛盾するものではない。

- ② 土器様相の連続性から、第V期に継続し第Ⅳ期に前出する年代が与えられるべきである。

第Ⅳ期 8世紀第Ⅳ四半紀から9世紀初頭にかけての年代を想定しておく。

- ① 本期の土器群に後続させることができるのは、野火付遺跡第Ⅱ期の土器群である。野火付遺跡第Ⅱ期の土器群は、9世紀前半に位置付けられるという猿投糸のいわゆる灰始灰釉を伴っている。灰釉陶器の示す実年代をさらに繰り上げて考えるべきであるという指摘もあるが(高島 1971)、野火付第Ⅱ期の土器群は神功開宝(765)も伴っており、少なくとも765年を遡り得ないことも明らかである。そのような点からいって野火付第Ⅱ期の土器群を9世紀前半におくことは、妥当であるといえる。

いずれにしても、野火付第Ⅱ期に先行する本期は、9世紀前半未満の年代を与えることができる。

- ② 土器様相の連続性から、第Ⅵ期に後続する年代が与えられるべきである。

以上、奈良・平安時代の各時期の年代観を示してみた。各期は、四半世紀程度の存続期間を持つことが明らかになった。

この年代観を今後継続される鑄師屋遺跡群の調査の成果によって検証し、さらに確かな年代観の確立を旨としてゆこう。

註

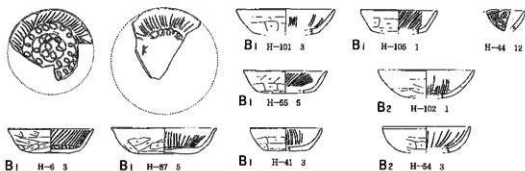
- (1) 佐久市分の前田遺跡H-1号住居址からは、第Ⅳ期の様相を示す、土師器形態A、土師器形態Bが検出されている。佐久市教育委員会の御厚意によって実見させていただいた。
 (2) 愛知県陶磁資料館赤羽一郎氏の御教示による。

(13) 畿内系暗文を有する土師器環について 第461図

後述する本遺跡第Ⅴ期(8世紀第Ⅱ四半紀中心)に特徴的な、土師器形態Bには、体部に一段の放射状暗文、見込み部にラセン暗文が施されている。

ところで、土師器の器面に施される放射状暗文+ラセン暗文は、空間的には飛鳥・平城地域を中心とした畿内に認められ、時間的には7世紀から8世紀にかけてみられるものである。ここにおいて、かかる暗文は「畿内型」と認識される。

本遺跡の土師器環にみられる特徴ある暗文は、この「畿内型」暗文の模倣と考えられる畿内系暗文である。なお、放射状暗文のみを取り上げてみたならば、在地においてもその糸譜を辿り得ないものではないが、ここにラセン暗文が加えられるとその存在はいわば特殊なものとなり、畿



第4図 畿内系暗文を有する土師器環

内との結びつきが想定できるようになる。

以下には、ここでみられた畿内系暗文を有する土師器環の特徴等について記す。

- ① 畿内系暗文を有する土器は、本遺跡において16軒の住居址・2棟の掘立柱建物址から、19個体(小破片も1個体に含める)が検出されている。これが検出されたのは、H-6、H-21、H-23、H-41、H-44、H-46、H-48、H-54、H-70、H-88、H-101、H-102、H-103、H-104、H-105、H-113の各住居址と、F-53、F-72の各掘立柱建物址である。
- ② 畿内系暗文を有する土器は、本遺跡第V期(8世紀第II四半紀中心)に特徴的にみられる。
- ③ 体部の放射状暗文は、畿内のそれと比べると太くかつ疎である。また、見込み部のラセン暗文も太い。畿内のシャープな暗文に比べ、本暗文には全体的に稚拙な感を受ける。
- ④ 畿内系暗文を有する土器の器形には、底部平底で体部との境に稜がある⁽²⁾⁽³⁾B₁と、底部丸底で体部との境に稜をもたないB₂がある。

殊に、畿内の環A・環Cにおいて、底部と体部との境に稜を持つB₁のような器形は知られていない。形態B₂はいわゆる盤状環とよばれる環の形態と一致するものであろう。

- ⑤ かかる土器の大きさには、大小の2種が認められそうである。ただし一定の分量分化をもつものかどうかは個体数が少なくてわからない。
- ⑥ 本土器は、その中に畿内に認められない器形B₁がみられることや、暗文が稚拙であること、胎土があまり精選されないことなどから、おそらく畿内産ではないものと考えられる。付編における胎土分析の結果では、本土器の胎土は在地の領域(石附領域)内に入り、在地産の土師器である可能性を示唆している。

註

(1) ここでいう畿内系暗文の概念は、西山氏のいわれる(西山 1984・1985)「畿内系暗文土器」

の概念とはやや異なる。本用語は、いわば氏のいわれる「在地陶土器」の概念に近いものであろう。

また、林部氏は、「畿内産」という用語を用いて、畿内における陶土器を他と画している(林部 1986)。

いずれにせよ、この種の土器についての系統だった用語の整理・統一が急務であろう。

- (2) 奈良県橿原考古学研究所において、石野博信・林部均氏の御配意により、飛鳥地域の檜前・上山遺跡(林部 1985)の土器を実見させていただき、本遺跡のものと比較してみた。
- (3) 佐久市若宮遺跡においても、体部に二段の放射状暗文・見込み部にラセン暗文の施れた坏が1点検出されている(小山 1985)。若宮例は暗文もシャープで、分量や胎土も畿内のものと近似している。この土地は、飛鳥ⅡもしくはⅢの坏AⅠに対比することができ、林部氏のいわれる「畿内産」土器として捉えてよいものではなからうか。

4 奈良・平安時代の石器・鉄器について

(1) 石 鎌

本遺跡の奈良・平安時代の竪穴住居址5軒からは、黒曜石の石鎌4点とチャートの石鎌2点が検出されている。いずれもその出土状況は良好ではないので、住居址に伴うものかどうか判断し難かった。石鎌はいわゆる飛道具としての移動性が高いので、遺構内に混入する可能性は大である。ちなみに、『続日本後記』には石鎌が天から降ってきたとする記事がみえるので、当時の人々にとって石鎌は実用から離れた好奇の対象だったことも窺える。

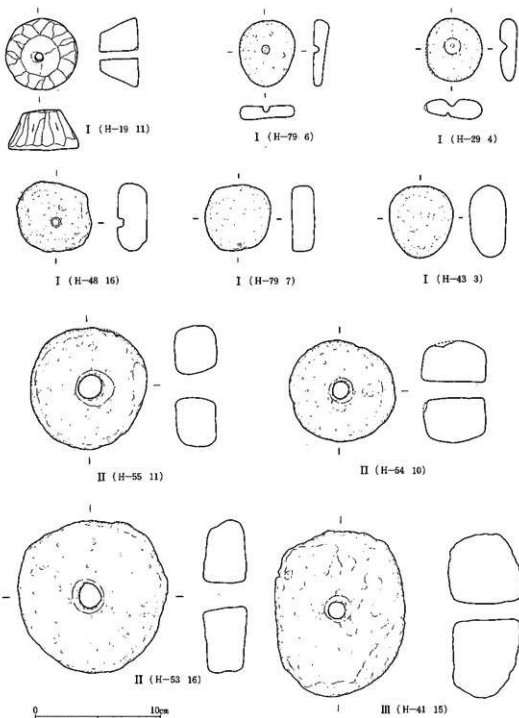
しかし一方では、石鎌=縄文時代の石器という安易な考えは避けるべきで、黒曜石やチャートの原産地に近い本遺跡にあって、貴重な鉄鎌にかわる石鎌が副次的に行われる狩猟に用いられていたとしてもさほど疑問はなからう。

(2) 紡錘車 第462・463図

奈良・平安時代の10軒の竪穴住居址からは、6点の紡錘車と5点の紡錘車未成品が検出されている。

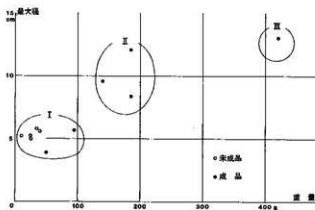
その材質をみると、1点が滑石製・1点が須恵器製で、残る9点は軽石製であった。殊に軽石が多用される傾向が窺えようが、それはカマドの構材と同様、軽石が在地において入手し易かったことと、加工が容易であったことに起因するものであろう。紡錘車における軽石の多用は饒師屋遺跡群のひとつの特色であるといえる。なお、須恵器製の紡錘車は、北佐久群望月町の岩清水遺跡(望月町教育委員会 1986)においても検出されている。

さて、ここで、10点の紡錘車の大きさと重さについてみてみよう。その最大径と重量について



※H-19の11は灰漆器製、他はすべて磁石製

第462図 奈良・平安時代の紡錘車 (1:3)



第463図 紡錘車 最大径と重量のグラフ

は、第463図のグラフに示した。このグラフを見ると、その大きさと重さの分布がおおよそ3群に分かれることが理解される。すなわちI・II・III群である。I群は径が5cm程度で重量100g未満、II群は径8～12cmで重量は100～200g、III群は径13cm重量420gを測るものである。

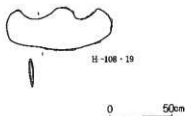
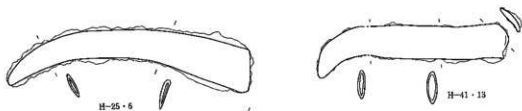
ところで、佐原眞氏によると(佐原 1979)「同じ繊維を重軽二種類の紡錘車で撚ってみると、重い紡錘車で撚ったものは撚りが粗く、軽い紡錘車で撚ったものは細かなものとなる。このように紡錘車の性質を考えるうえでその重さは重要な特徴となる。」との指摘がある。また、滝澤亮氏によれば(滝澤 1985)。石製紡錘車は麻糸系の紡錘に、鉄製紡錘車は絹糸系の紡錘に使用されたのではないかという推測がなされている。このようなことを合わせて考えると、本紡錘車における大きさ・重量の異なりは、紡がれる糸(麻糸?)の粗細を意味しているのではないかということに気づく。しかしそれにしてもIII群の紡錘車は、従来のもので大きさを超えて大きなものであることが注意される。

ちなみに、小泉郡海野郷からの調の麻布が正倉院中に現存していることから、信濃における麻布生産の一端が窺え、紡錘車による紡糸の実際を想起させてくれる。

(3) 鉄器 第464図

本遺跡から検出された鉄器は、鎌3、刃子3、鐵1、燧鉄1、その他不明なものである。鋤鎌先等は検出されなかった。

鎌は、第IV期の第I区集落の2軒の竪穴住居(H-16、H-41)から各1点ずつ、第VII期・第I区集落のH-25号住居址より1点の計3点が検出されている。うち、H-16の1点は破損品で他の2点は完存品(ただし2点とも折損する)である。完存品は2点ともいわゆる曲刃鎌であった。ちなみに、鶴間正昭氏によれば、曲刃鎌は8世紀前半に出現し、それによって稲の根刈りが



第169図 奈良・平安時代の鉄器

第169表 遺跡毎における鉄製農具出土数

遺 跡	竪穴数	掘立数	鋤鍬先	鎌
前 田	104	87	0 ※	3
山田水呑	143	52	1	5
村 上	155	24	3	14
井 頭	124	12	1	10
鷹 尾	169	117	1	12
向 原	184	161	1	10

※ ただし前田遺跡佐久市分においては1点出土している。

一般化したとされている(鶴間 1985)。さて、鉄製品は錆直しがきくものであり簡単に廃棄されるようなことは少ないという鬼頭氏の見解(鬼頭 1985)に基づけば、一概にその出土数を問題にすることは危険であるが、とりあえず当該期の竪穴住居址100軒以上が検出された集落とその数を対比すると、第169表のようになる。かつて原島礼二氏は、鉄製農具は6世紀以降には大家族のもとにまとめて私有され、国分期になって各竪穴単位に私有が移行したとされた(原島 1965)。一方で鬼頭氏は8世紀当時の集落ではどの竪穴住居においても鉄製農具が使用されていたとみている(鬼頭 前掲)。本遺跡における鎌の出土率が当時の鉄製農具所有のどのような状況を示すかは判断に苦しむ。しかしいずれにしても、その出土数以上に鉄器が存在したことはそれ以上に出土した砥石の存在からも裏付けられよう。

さて、鎌の他は、H-48号住居址からは鉄鎌が、H-20号住居址からは刀子が出土している。

H-108号住居址からは燧鉄が1点検出された。山口氏によれば燧鉄は日常品ではなく儀式具、祭器ではなかったかという(山口 1977)。本遺跡においても、燧鉄が出土したのはH-108のみであること、同じH-108からは特殊遺物である円面硯が出土していることなどから、その特殊性を考慮しておこう。

なお、鉄器生産に関しては、H-29号住居址からスラグが検出されていることなどをみると、本集落において簡易な製鉄はなされていたものとみて大過あるまい。

5 前田遺跡における遺構および集落の様相

これまで、前田遺跡における土器様相について言及し、それらがⅠ～Ⅷ期の8時期に時期区分でき得ることを明らかにした。また、Ⅰ期は5世紀第Ⅳ四半紀、Ⅱ期は6世紀初頭、Ⅲ期は6世紀末葉から7世紀前葉、Ⅳ期が8世紀第Ⅰ四半紀、Ⅴ期が8世紀第Ⅱ四半紀、Ⅵ期が8世紀第Ⅲ四半紀、Ⅶ期は8世紀第Ⅳ四半紀～9世紀初頭を中心に実年代がおさえられた。

それでは、各時期にいて遺構はどのようなあり方をみせ、また、その構造はどのように変化するのか。そして、各時期の遺構のまとまりである集落はいかなる様相をみせ、いかに変遷するのか、ここでは、それらの諸点についての考察を加えよう。

その手順として、まず竪穴住居址を取りあげ、火鉢のあり方、規模、主柱穴のあり方の検討に主眼をおいて、その構造を捉えてみる。そして、その構造変化を追ってみよう。

次に、掘立柱建物址の構造についてふれ、その機能、所属期について考えてみる。また、各期における竪穴住居址との組み合わせについてもふれなければならぬ。

最後に、遺構の総体としての集落、その様相についてふれ、集落の形成から消滅に至るまでの変遷を追ってみよう。

なお、同一遺跡である前田遺跡の佐久市分については、現在これと併行して整理が進められているため、その様相が明らかでない。したがって、集落全体の様相を追うのには、かなりの制約を伴うのである。そうした事情もあって、ここでは佐久市分の前田遺跡の発掘調査成果の影響を、直接的に大きく被らない地区の集落を中心に取り上げてゆきたい。その集落とは、自然地形によって画される第Ⅰ区の集落、第Ⅱ区の集落、第Ⅲ区の集落である。

(1) 竪穴住居址

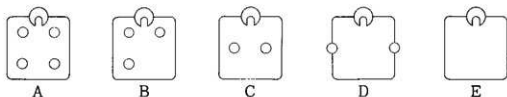
1 竪穴住居址の構造とその変化

前田遺跡における各期の竪穴住居址の構造とその変化を追うために、全時期をとおしての住居址の構造の分類規準を示し、その規準にもとずいて各期の住居址の構造を分類、相互に比較検出してみることにする。

各期の竪穴住居址の構造

まず、竪穴住居址の構造の分類規準を示そう。

住居址の構造を考えるうえで、最初に問題となるのは火鉢のあり方である。基本的には次の三



第465図 竪穴住居における支柱穴のあり方

者がある。

- I 住居内に炉を有するもの。
- II 住居の壁中にカマドを有するもの。⁽¹⁾
- III 住居内において炉・カマド等の火爨の認められないもの。⁽²⁾

次に、住居の規模を問題としよう。

続いて、支柱穴のあり方を取り上げるが、基本的には次の6者が認められよう（第465図）。

- A 屋内に4個の支柱穴が規則的に配されるもの。
- B 屋内に3個の支柱穴が規則的に配されるもの。
- C 屋内に2個の支柱穴が対で配されるもの。
- D 壁中に2個の支柱穴が対で配されるもの。
- E 支柱穴のまったく認められないもの。
- F その他。

以上、火爨・規模・支柱穴のあり方3点が、まず住居の基本構造を考えるうえで重要なポイントとなる。これに関連させて、付随するピットの有無、壁溝の有無、掘り込みの深さ等の属性を拾いあげ検討してみよう。

このような視点からの分類作業に基づいて、抽出された各期の住居の構造とその構成を以下に列記しよう。

第I期 本期の住居5軒について記す（第170表）。

- ① 炉を有する住居（I）が3軒（H-61・H-62・H-65）みられ、炉の認められない住居（III）が2軒存在した（H-60、H-71）。
- ② 炉は、住居の中央よりやや一方の壁寄りに設けられていた。
- ③ カマドを有する住居（II）は、本期には認められなかった。
- ④ 住居の面積としては、（第466図）、4軒は約10～20㎡の間にさるものであるが、H-61のみは65㎡と他と掛け離れて大きなものであった。住居の平均床面積は26.3㎡である。

第17表 第I期竪穴住居址一覧表

遺 構	平 面 プ ラ ン					主軸方向	炉	ビット	備 考
	形 態	東西	南北	深	面積				
H-60	隅丸方形	4.7	4.8	0.15	18.7	N-19°-W	無	E	
H-61	隅丸方形	8.3	8.1	0.2	64.7	N-7°-W	有	A	
H-62	隅丸方形	4.7	3.8	0.15	15.3	N-23°-W	有	E	
H-65	隅丸方形	3.5	4.1	0.2	11.7	N-20°-W	有	E	
H-71	隅丸方形	4.9	5.2	0.25	21.3	N-18°-W	無	E	

単位 m、㎡

- ⑤ 上記の約10～20㎡の面積を有する住居址4軒は、いずれも主柱穴の認められない(E)ものであった。一方、大形のH-61は四方のコーナーに主柱穴が配されていた(A)。

第II期 本期の住居址5軒について記す(第171表)。

- ① 炉を有する住居址(I)が1軒(H-77)、炉とカマドの双方を有する住居址が1軒(H-63)、カマドを有する住居址(II)が3軒(H-66、H-67、H-75)存在した。

カマドの登場と炉の消滅という過渡的な様相が、これらの住居址の火扱のあり方から窺うことができる。

- ② 住居址の規模としては、約14㎡を測るやや小形のもの1軒(H-63)、20㎡前後を測るいわば中形の住居址が2軒(H-66、H-75)、35～40㎡を測る大形の住居址が2軒(H-67、H-77)認められた。

- ③ 住居址の平均床面積は、26.4㎡である。

- ④ 主柱穴は、大形の2軒(H-67、H-77)と小形の1軒(H-63)には認められなかった。(E)。一方、中形の2軒では(H-66、H-75)4本の主柱穴が認められた。双方の住居址の柱穴は、いずれも径の小さいものであった。

第III期 該当する1軒の住居址(H-84)について記す。(第172表)。

- ① H-84は、カマドを有する住居址(II)であった。
 ② 面積は、13.1㎡を測った。
 ③ 主柱穴は、まったく認められなかった。

第IV期 該当する24軒の住居址について記す(第173表)。

- ① カマドが確認されたのは、24軒中22軒であったが、残りの2軒もカマドを有していた

第174表 第II期竪穴住居址一覧表

遺構	平面プラン					主軸方向	カマド・炉	ピット	備考
	形態	東西	南北	深	面積				
H-63	隅丸方形	4.25	3.85	0.2	13.5	N-28°-W	有・有	E	カマドと炉の双方を有する。
H-66	隅丸方形	5.2	5.15	0.5	22.2	N-17°-W	有・無	A	
H-67	隅丸方形	6.6	5.95	0.3	35.0	N-7°-E	有・無	E	
H-75	隅丸方形	5.2	4.75	0.3	19.8	N-17°-W	有・無	A	
H-77	隅丸方形	7.0	6.6	0.2	41.6	N-7°-W	無・有	E	

単位m、㎡

第175表 第III期竪穴住居址一覧表

遺構	平面プラン					主軸方向	カマド	ピット	備考
	形態	東西	南北	深	面積				
H-84	隅丸方形	4.4	3.5	0.3	13.1	N-45°-W	北壁中央	E	

単位m、㎡

ものと思われる。したがって、本期の住居址のすべてがカマドを有していることになる。

- ② 住居址の規模としては、7～12㎡の間の小形のものが6軒、14～20㎡の中形のものが11軒、24～29㎡の大形なものが6軒、36㎡を測る大形住居が1軒認められた（第466図）。

- ③ 住居址の平均床面積は18.8㎡である。

- ④ 主柱穴が4つ認められるAは17軒、主柱穴が3つ認められるBは1軒、主柱穴が屋内に2つ認められるCは1軒、壁中に2つ認められるDは1軒、主柱穴の認められないEが4軒あった。

②で述べた大形住居はすべてAで、Eは小形住居に限られていることも捉えられた。

- ⑤ ②で述べた大形住居・Aには、壁溝が全周し、カマドと対峙する南壁際中央に1・2個のピットを有するものが特徴的に認められた。これは4軒ある。

- ⑥ 各住居址の最深部の数値を用いた本期の住居址の深度の平均値は34cmである。

第V期 該当する23軒の住居址について記す（第174表）。

- ① 本期の住居址は、重複によってカマドの存在が確認されなかった1軒を除き、すべてカマドを有していた。

- ② 住居址の規模としては（第466図）、7～12㎡の小形なものが5軒、15～20㎡の中形の

第173表 第IV期竪穴住居址一覧表〈その1〉

遺 構	平 面 プ ラ ン					主軸方向	カマド	ピット	備 考
	形 態	東西	南北	深	面積				
H-1	隅丸方形	3.8	3.8	0.3	11.7	N-13°-W	北壁中央	E	
H-9	隅丸方形	4.0	3.35	0.6	9.8	N-14°-W	北壁中央	E	
H-11	隅丸方形	4.0	4.9	0.35	20.1	N-23°-W	北壁中央	A	
H-16	隅丸方形	5.3	5.03	0.2	24.3	N-14°-W	北壁中央	A	
H-19	隅丸方形	5.45	5.75	0.5	24.7	N-5°-W	北壁中央	A	
H-22	隅丸方形	4.5	4.6	0.45	18	N-22°-W	北壁中央	A	
H-29	隅丸方形	4.35	4.3	0.3	15.5	N-3°-W	北壁中央	A	
H-38	隅丸方形	4.7	4.4	0.4	16.1	N-13°-W	北壁中央	B	
H-39	隅丸方形	4.6	4.85	0.3	19.9	N-24°-W	北壁中央	A	
H-41	隅丸方形	5.5	5.8	0.4	29.1	N-13°-W	北壁中央	A	
H-42	隅丸方形	4.5	4.4	0.3	16.7	N-2°-W	北壁中央	D	
H-52	隅丸方形	6.55	6.15	0.3	36.7	N-3°-W	北壁中央	A	
H-86	隅丸方形	4.75	4.9	0.45	7.3	N-25°-W	北壁中央	A	
H-94	隅丸方形	4.7	4.9	0.12	20.5	N-11°-W	北壁中央	A	
H-97	隅丸方形	3.95	5.0	0.2	15.2	N-36°-W	北壁中央	A	
H-98	隅丸方形	4.8	4.7	0.2	17.6	N-39°-W	北壁中央	C	
H-99	隅丸方形	5.4	5.4	0.25	26.4	N-25°-W	北壁中央	A	
H-100	隅丸方形	3.2	3.4	0.02	10.8	N-27°-W	北壁中央	E	

単位 m、㎡

第17表 第Ⅳ期竪穴住居址一覧表〈その2〉

遺 構	平 面 プ ラ ン					主軸方向	カマド	ビット	備 考
	形 態	東西	南北	深	面積				
H-101	隅丸方形	4.0	3.5	0.2	12.5	N-22°-W	北壁中央	A	
H-107	隅丸方形	5.0	4.65	0.2	19.1	N-6°-W	北壁中央	A	
H-109	隅丸方形	4.0	3.2	0.3	10.8	N-12°-W	—	E	
H-110	隅丸方形	4.4	4.6	0.6	14.9	N-5°-W	北壁中央	A	
H-111	隅丸方形	5.8	5.5	0.4	28.4	N-9°-E	北壁中央	A	
H-114	隅丸方形	5.2	5.4	0.4	25.0	N-0°-W	—	A	

単位 m、㎡

ものが10軒、22~28㎡の大形なものが7軒、35㎡を測る大形住居が1軒認められた。

- ③ 住居址の平均床面積は19.0㎡である。
- ④ 支柱穴が4つ認められるAは17軒、3つ認められるBは1軒、2つのCは1軒、まったく認められないEが4軒あった。
C・Eは、②で述べた小形住居に限られることも捉えられる。
- ⑤ 壁溝の認められる住居址は2軒のみで、②でいう大形と最大の各1軒ずつであった。
- ⑥ カマドと対峙する南壁際中央に、ビットを1個有する住居址が4軒認められた。
- ⑦ 各住居址の最深部の数値を用いた本期の住居址の深度の平均値は30cmである。

第Ⅵ期 該当する15軒の住居址について記す(第175表)。

- ① 本期の住居址では、14軒がカマドを有し、小形の1軒のみがカマドを持たなかった。
- ② 住居址の規模としては、7~13㎡の小形のものが6軒、17~20㎡の中形のものが6軒、23㎡の大形のものが2軒、33㎡を測る大形のものが1軒認められた。
- ③ 住居址の平均床面積は、16.7㎡である。
- ④ 支柱穴が4つ認められるAは9軒、3つ認められるBは1軒、支柱穴の認められないEは5軒あった。
Aは②でいう中・大形住居に、Eは小形住居に限られることが捉えられる。
- ⑤ 壁溝の認められる住居址は2軒あるが、1軒は最大の面積をみせる住居であり、もう1軒は中形のものであった。
- ⑥ カマドのある北壁中に2個のビット(柱穴)を有する住居址が2軒存在した。

第IV表 第V期竪穴住居址一覧表〈その1〉

遺 構	平 面 プ ラ ン					主軸方向	カマド	ビット	備 考
	形 態	東西	南北	深	面積				
H-6	隅丸方形	4.1	3.7	0.2	12.5	N-7°-W	北壁中央	C	
H-10	隅丸方形	4.8	4.9	0.1	20.2	N-12°-W	北壁中央	A	
H-14	隅丸方形	5.7	5.88	0.2	28.6	N-14°-W	北壁中央	A	
H-21	隅丸方形	4.35	4.4	0.3	16.2	N-17°-W	北壁中央	A	
H-32	隅丸方形	5.25	5.6	0.15	25.3	N-22°-W	北壁中央	A	
H-37	隅丸方形	5.3	5.15	0.3	24.1	N-6°-W	北壁中央	A	
H-45	隅丸方形	4.8	4.85	0.4	18.2	N-12°-W	北壁中央	A	
H-47	隅丸方形	4.05	4.25	0.1	15.7	N-15°-W	北壁中央	A	
H-48	隅丸方形	5.65	5.7	0.3	27.8	N-7°-W	北壁中央	A	
H-53	隅丸方形	6.1	4.9	0.4	25.4	N-8°-W	北壁中央	A	
H-54	隅丸方形	4.7	4.7	0.25	18.8	N-4°-W	北壁中央	A	
H-78	隅丸方形	4.4	3.8	0.2	15.5	N-10°-W	北壁中央	A	
H-80	隅丸方形	5.0	5.1	0.4	22.9	N-14°-W	北壁中央	A	
H-81	隅丸方形	4.3	4.4	0.5	14.6	N-10°-W	北壁中央	A	
H-87	隅丸方形	5.2	5.3	0.5	24.3	N-28°-W	北壁中央	A	
H-88	隅丸方形	3.6	2.8	0.3	7.7	N-20°-W	北壁中央	E	
H-90	隅丸方形	4.1	3.1	0.4	9.4	N-8°-W	—	E	
H-102	隅丸方形	4.5	4.6	0.2	17.1	N-3°-W	北壁中央	A	

単位 m、㎡

第174表 第V期竪穴住居址一覧表〈その2〉

遺構	平面プラン					主軸方向	カマド	ピット	備考
	形態	東西	南北	深	面積				
H-103	隅丸方形	4.9	4.9	0.4	19.5	N-3°-E	北壁中央	A	
H-104	隅丸方形	4.6	4.35	0.15	17.8	N-2°-W	北壁中央	A	
H-105	隅丸方形	4.0	3.6	0.2	11.2	N-0°-W	北壁中央	E	
H-112	隅丸方形	3.5	3.3	0.7	8.8	N-5°-W	北壁中央	E	
H-113	隅丸方形	6.3	6.8	0.35	36.8	N-0°-W	北壁中央	B	

単位m、㎡

第175表 第VI期竪穴住居址一覧表〈その1〉

遺構	平面プラン					主軸方向	カマド	ピット	備考
	形態	東西	南北	深	面積				
H-23	隅丸方形	4.4	4.85	0.25	18.0	N-11°-W	北壁中央	A	
H-28	隅丸方形	4.95	5.0	0.3	20.1	N-7°-W	北壁中央	A	
H-36	隅丸方形	3.4	3.1	0.2	8.9	N-8°-W	北壁中央	E	
H-43	隅丸方形	4.8	4.7	0.25	18.6	N-8°-W	北壁中央	A	
H-44	隅丸方形	4.8	4.3	0.45	18.0	N-5°-W	北壁中央	A	
H-46	隅丸方形	4.0	3.9	0.5	13.2	N-9°-W	北壁中央	B	
H-49	隅丸方形	5.3	5.2	0.4	23.9	N-4°-W	北壁中央	A	
H-55	隅丸方形	6.2	6.5	0.35	33.3	N-4°-W	北壁中央	A	
H-117	隅丸方形	3.3	2.8	0.5	7.6	N-8°-W	北壁中央	E	
H-64	隅丸方形	3.3	3.05	0.4	8.4	N-13°-W	北壁中央	E	
H-68	隅丸方形	3.7	3.3	0.2	10.9	N-13°-W	無	E	

単位m、㎡

第175表 第VI期竪穴住居址一覧表〈その2〉

遺 構	平 面 プ ラ ン					主軸方向	カマド	ビット	備 考
	形 態	東西	南北	深	面積				
H-69	隅丸方形	4.35	4.8	0.2	17.9	N-9°-W	北壁中央	A	
H-72	隅丸方形	3.2	3.1	0.5	7.9	N-8°-W	北壁中央	E	
H-79	隅丸方形	5.4	5.1	0.3	23.8	N-18°-W	北壁中央	A	
H-93	隅丸方形	4.5	4.9	0.2	20.5	N-6°-W	北壁中央	A	

単位 m、㎡

また、カマドと対峙する南壁際中央にビットをもつ例が1軒あった。

- ⑦ 各住居址の最深部の数値を用いた本期の住居址の深度の平均値は33cmである。

第Ⅳ期 該当する39軒の住居址について記す(第176表)。

- ① 本期の住居址は、カマドを有するものが35軒、次に述べる小形の住居址でカマドを有さないものが2軒、その存在が不明なものは2軒あった。
- ② 住居址の規模としては、3～4㎡の最小のものが4軒、7～13㎡の小形住居址が24軒、16～19㎡の中形住居址が7軒、28㎡の大形住居址が1軒認められた。
- ③ 本期の住居址の平均床面積は11.8㎡である。
- ④ 主柱穴の4つ認められるAは5軒、3つのBが1軒、2つのCが4軒、壁中に2つの主柱穴が認められるDが10軒、主柱穴の認められないEが15軒、屋内に2個壁中に2個認められる例Fが1軒あった。
- ⑤ 壁溝の認められる住居址は3軒あった。
- ⑥ 各住居址の最深部の数値による本期の住居址の深度の平均値は19cmである。

第Ⅳ期 該当するのは2軒の住居址である。

- ① 2軒とも炉を有する住居址であった。
- ② 2軒とも面積は20㎡前後を測った。
- ③ 一方(H-73)は主柱穴の2つ認められるC、もう一方は主柱穴の認められないEであった(H-74)。
- ④ 双方とも周溝は認められず、壁高は10cm程度を測った。

竪穴住居址の構造変化 第466・467図

以上、各期の竪穴住居址の構造の諸類型を捉えてみた。

ここでは、本遺跡において継続して営まれる集落のなかで、住居址の構造がどのように変化す

第18表 第Ⅶ期竪穴住居址一覧表〈その1〉

遺構	平面プラン					主軸方向	カマド	ピット	備考
	形態	東西	南北	深	面積				
H-2	隅丸方形	4.0	3.5	0.15	11.9	N-5°-W	北壁中央	D	
H-3	隅丸方形	5.5	6.1	0.1	28.1	N-14°-W	北壁中央	A	
H-4	隅丸方形	3.66	3.25	0.1	9.9	N-16°-W	北壁中央	D	
H-5	隅丸方形	3.8	3.4	0.1	10.5	N-10°-W	北壁中央	D	
H-7	隅丸方形	4.35	4.2	0.2	16.2	N-6°-W	北壁中央	C・D	
H-8	隅丸方形	3.9	3.5	0.1	12.7	N-2°-W	北壁中央	E	
H-12	隅丸方形	3.65	3.4	—	10.7	N-10°-W	北壁中央	E	
H-13	隅丸方形	3.5	3.4	0.1	10.3	N-14°-W	北壁中央	D	
H-15	隅丸方形	3.9	3.7	0.05	12.9	N-3°-W	無	E	
H-17	隅丸方形	4.7	4.7	0.1	18.9	N-19°-W	北壁中央	E	
H-20	隅丸方形	3.8	4.1	0.15	13.0	N-10°-W	北壁中央	E	
H-24	隅丸方形	3.6	3.28	0.2	10.0	N-2°-W	北壁中央	D	
H-25	隅丸方形	3.5	3.0	0.25	8.5	N-14°-W	北壁中央	E	
H-26	隅丸方形	4.35	3.7	0.25	13.1	N-10°-W	北壁中央	D	
H-27	隅丸方形	2.9	3.7	0.1	9.6	N-16°-W	北壁中央	D	
H-30	隅丸方形	3.33	3.6	0.1	10.7	N-13°-W	北壁中央	D	
H-31	隅丸方形	3.65	3.4	0.05	10.8	N-17°-W	北壁中央	D	
H-33	隅丸方形	4.25	3.5	0.15	11.9	N-19°-W	北壁中央	C	

単位 m、㎡

第176表 第Ⅶ期整穴住居址一覧表〈その2〉

遺 構	平 面 プ ラ ン				主軸方向	カマド	ビット	備 考	
	形 態	東西	南北	深					面積
H-34	隅丸方形	2.85	2.92	0.1	7.2	N-14°-W	無	E	
H-35	—	—	—	—	—	—	—	E	
H-40	隅丸方形	2.35	2.4	0.15	4.7	N-70°-E	東壁中央	E	
H-50	隅丸方形	(2.8)	3.9	0.25	—	N-7°-W	—	E	
H-51	隅丸方形	(2.1)	3.7	0.15	—	N-7°-W	北壁中央	E	
H-57	隅丸方形	4.7	5.1	0.2	19.4	N-0°-W	北壁中央	C	
H-58	隅丸方形	4.75	4.6	0.45	17.5	N-0°-W	北壁中央	A	
H-59	隅丸方形	3.6	3.7	0.4	18.7	N-2°-W	北壁中央	B	
H-70	隅丸方形	3.45	3.7	0.15	11.0	N-9°-W	北壁中央	C	
H-76	隅丸方形	3.87	3.15	0.2	10.7	N-11°-W	北壁中央	C	
H-82	隅丸方形	3.5	2.93	0.05	9.0	N-18°-W	—	E	
H-83	隅丸方形	3.8	4.1	0.2	11.9	N-82°-E	東壁中央	E	
H-85	隅丸方形	2.9	2.9	0.25	7.3	N-19°-W	北壁中央	E	
H-89	隅丸方形	4.8	4.55	0.4	18.5	N-15°-E	北壁中央	A	
H-91	隅丸方形	3.6	3.15	0.5	8.3	N-17°-W	北壁中央	D	
H-92	隅丸方形	2.8	2.4	0.3	4.2	N-15°-E	無	E	
H-95	隅丸方形	3.1	3.2	0.3	8.3	N-20°-W	無	E	
H-106	隅丸方形	3.3	3.2	0.2	5.4	N-0°-W	北壁中央	E	

単位 m、㎡

第176表 第VII期竪穴住居址一覧表〈その3〉

遺構	平面プラン					主軸方向	カマド	ビット	備考
	形態	東西	南北	深	面積				
H-116	隅丸方形	2.4	2.1	0.2	3.8	N-19°-W	無	E	
H-108	隅丸方形	4.9	5.3	0.6	19.2	N-7°-W	北壁中央	A	
H-115	隅丸方形	3.2	4.0	0.1	10.8	N-5°-W	北壁中央	E	

単位 m、㎡

るかを追ってみる。したがって、第Ⅰ期→第Ⅱ期と、第Ⅳ期→第Ⅴ期→第Ⅵ期→第Ⅶ期という集落変遷のなかの竪穴住居構造の変化を、中心に取り上げることになる。

◎第Ⅰ期→第Ⅱ期

古墳時代中期後半にあたる第Ⅰ期から第Ⅱ期の住居址の構造変化とは以下のようである。

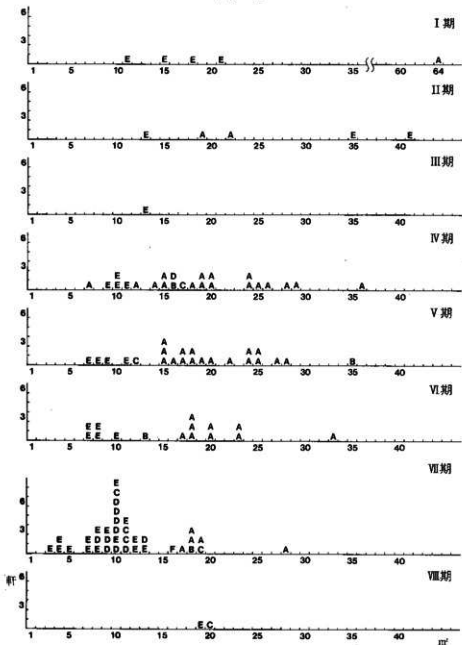
- ① 第Ⅰ期から第Ⅱ期へと移行するなかで、最も大きな住居址の構造変化とは、カマドの登場と炉の消滅である。第Ⅱ期の住居址中には、カマドと炉の双方を有する住居址も認められ、過渡的な様相も窺えた。
- ② 第Ⅰ期・第Ⅱ期ともに住居址の平均床面積は変わらず、26㎡を測った。
- ③ 第Ⅰ期・第Ⅱ期を通じての住居址の主柱穴のあり方には、主柱穴4つのみられるAか主柱穴のみられないEの二者が認められたのみであった。殊に、主柱穴のみられないEの存在は特徴的で、大形の住居址においてもこれに該当するものもあった。

◎第Ⅳ期→第Ⅴ期→第Ⅵ期→第Ⅶ期

8～9世紀初頭・奈良時代から平安時代初頭にあたる第Ⅳ期から第Ⅶ期にかけての住居址の構造変化とは以下のようである。

- ① まず、各期を通じて、カマドが普遍的に認められることがいえる。
- ② 一方、第Ⅵ期・第Ⅶ期では、カマドを有さない小形の住居址も僅かに認められる。
- ③ 住居址の平均床面積は、第Ⅳ期から第Ⅴ期では19㎡程度と変わらないが、第Ⅵ期で16㎡とやや減少し、第Ⅶ期においては11㎡と前2期に比べ半減することが捉えられる。ちなみに、第Ⅰ・Ⅱ期の平均面積の数値とくらべると、第Ⅳ期～第Ⅶ期の平均床面積の数値が小さいことも窺える。
- ④ ③で述べた平均床面積の減少は、大・中・小の規模の住居址の増減に影響されているといえそうである。第466図の時期毎の住居址の面積の分布をみてみよう。

第Ⅳ期から第Ⅴ期にかけては、最大・大形・中形・小形の住居址の構成比は1：3：

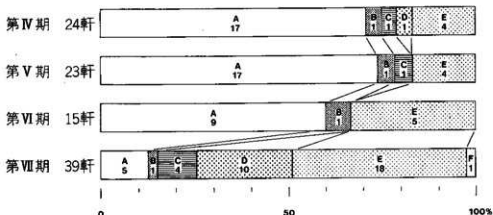


第4図 各期毎の竪穴住居址形態別面積分布

4 : 2 で、ほぼ変わりが無い。

第VI期になると大形の住居址は激減し、中形の住居址も減少する。

第VII期では、大形の住居址がほぼ消滅し、小形の住居址が激増する。また極小の住



第467図 奈良・平安時代時期別住居形態構成比 ※数字は住居数の軒数

居址もみられる。殊にこの時期の小形住居址の急増は、他の時期とは一線を画した顕著な様相変化であるといえる。

- ⑤ 主柱穴の個数は、後にも述べるように住居の大きさと対応するものである。すなわち、大・中形においては4個の主柱穴を有するもの(A)がほとんどで、小形においては2個(C・D)もしくは無柱穴(E)のものがほとんどである。
- ④でみた住居址の規模の変化に伴って、主柱穴のあり方の変化が追える(第467図)。
- 第IV期から第VI期では、大・中形の4本柱穴(A)の住居址が優位にあるが、無柱穴のEも一定して認められる。
- 第VII期では、小形の住居址の増加に伴い、2本柱穴のC・壁中2本柱穴のD・無柱穴のEの住居址が増大する。この中で、Dは、前3期にはほとんど認められなかった柱穴の配置をみせるもので、本期に顕在化するタイプといえる。
- ⑥ 壁溝や、カマドに対峙する南壁際中央にみられるピットも、大形の住居址によく付属するものである。小形の住居址が増加するにつれ、こうしたものもみられなくなってくる傾向が窺える。
- ⑦ 住居址の深度の平均値は第IV・V・VI期を通じてはほぼ変わらないが、第VII期において減少することが窺える。つまり、第VII期には浅い住居址が増加する傾向があるといえる。住居址の深度は住居址の規模とも比例するようであり、そうした意味においては小形の住居址の急増は、浅いものの増加と無関係であるまい。

注

- (1) 炉とカマドの双方が認められる住居が1例あるが(第II区H-63号住居址)、これについて

はカマドに主体性があるものと解し、IIの範疇に含めた。

- (2) 火爨は、一般に消費生活の単位を示すものとされ、その存在が、住居址を住居址たらしめている由縁であろう。しかし、それがはたして真実なのであろうか。火爨をもつ竪穴状遺構はすべて住居址なのか。また、火爨をもたないものは住居址ではないのか。

実際、本遺跡にあってはカマドをもつ竪穴状遺構でも、居住のひとつの条件である就寝が不可能かと思われるくらい小さなものが存在している。このようなものについては釜屋等としての機能しか想定しえないのではなかろうか(ただし、その上屋構造が著しく拡大していた場合は別である)。また逆に、火爨をもたない例でも別に釜屋があるとすれば居住の他の条件(就寝等)は満たせることになる。そのような問題もあって、火爨の有無が居住施設かどうかの最終判断の規準とはなり得ないことがわかる。

ここでは、かかる遺構について学史的な背景をもつ竪穴住居址という名称を用いたが、その一部は「居住施設」と必ずしも同義語とはならない可能性も残る。

- (3) ここでは第IV期から第VII期の住居址の面積分布の偏りによって大・中・小の規模の規準を設けた。

最大は30㎡以上のもので、大は29カマド～22㎡、中が21～14㎡、小は13～7㎡、極小は6㎡以下となった。

- (4) 時期の異なる住居址について、確認面からの深度は一概に比較できるものではないとの反論もあろう。なぜなら、各期の生活面が当然異なる可能性もあるからである。生活面(地表)は時期を追って徐々に高くなるものとみるのが妥当であろう。それならば、確認面からの住居址の深度は時期を追って徐々に浅くなる傾向も認められなければならないまい。しかしここでは、そのような段階的な浅化の傾向は認められず、むしろ第VII期に入っただけの急な浅化の傾向が認められるといえた。よってその傾向は、生活面の異なりに還元されるものではないことがわかる。

2 竪穴住居址の構造

ここでは、本遺跡の竪穴住居址の上屋構造、カマドの構築、住居内の空間利用、竪穴住居址の機能等について考えてみる。

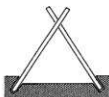
竪穴住居址の上屋構造

まず、第I・II期の住居址の主柱穴のあり方としては、4本柱穴のAと無柱穴のEの二者が認められたのみであった。このなかで、35～40㎡を測る大形住居址の2軒も無柱穴であったことは注意される。しかし、これらについては、面積からいって主柱をもたない上屋構造を想定するには無理があり、柱穴が穿たれないまでも何らかの工法で主柱が立てられていたものと考えておきたい。

さて、次に奈良・平安時代(第IV期～第VII期)の住居址についてみる。

先にも述べたように、主柱穴の数は住居址の大きさに対応している。すなわち、大・中形においては4個の主柱穴を有するもの(A)がほとんどで、小形においては2個(C・D)もしくは無柱穴(E)のものほとんどであった。

それでは、こういった主柱穴のあり方について、どのような上屋構造を想定でき得るものであろうか。まず、主柱穴が4個認められるAについては、当該期の一般的な工法といわれる小屋組みによる上屋構造(第468図1)を想定しておこう。また、無柱穴の小形住居址は、主柱をもたず合掌と垂木だけで竪穴を覆う構造(宮本 1986)が想定できよう。一方、Dは壁中に対になる2個の柱穴が穿たれたものであるが、この柱穴が斜めに開いている場合が多く認められ



竪穴住居址Aの小屋組み
(鬼頭 1985)より



竪穴住居址Dの構造

第468図 竪穴住居址の上屋構造の推定

た。このことから、主柱はいわば垂木的に傾斜されて埋め込まれ、上位で交叉させられて組まれたことが想定できる(第468図2)。これは、構造的には無主柱のものに近いものとみなせよう。

小形の住居址内において主柱が認められないのは、構造上の必要性が薄いことに起因しようが、一方住居内の空間の有効利用にもつながったものと思われる。

ところで、当該期の小形住居址について、竪穴部分はいわば土間であり平地部分に広間が存在したとする考え(笹森 1978、高橋 1979)もある。そこでは、その上屋構造も竪穴部分よりさらに大きくなると考えられている。興味深い見解ではあるが、現在のところ根拠に乏しく、説得力のないものといえる。

さて、本期の大形住居址には、壁溝の認められるものがいくつかあった。壁溝は、壁の土どめのための板を埋めた痕跡であるともされている(工楽 1977、鬼頭 1986)ものである。

最後になったが、H-32号住居址の4つの主柱穴のうちの1つより、主柱が検出されているのでふれておく。検出された主柱は残存径15cmを測るもので、バリノサーヴェイ(柵)により「クリ」材と同定された(付編参照)。クリ材は、加工はやや困難であるものの、強度・耐久性にすぐれているため住居主柱には適した材といえそうである。本遺跡の近隣・八風山麓には、現在でも自生のクリが多く認められる。おそらく当時であっても、入手容易な材であり、多用されたと思われる。

竪穴住居址の機能

竪穴住居址とは、本来的には居住機能を有する遺構について冠せられなければならない名称であろう。居住とは、基本的には食・寝や作業を伴う屋内での生活とでも言い得ようか。

本遺跡において、竪穴住居址としたもののほとんどは、居住施設としてよいものと考えられる

が、そのごく一部は居住行為のすべてを伴う施設ではないものと思われる。そのごく一部とは奈良・平安時代第VI期～VII期のカマドを有する小形の住居址のいくつかと、カマドを有さない小形の住居址である。

まず、カマドを有する住居址で、その床面積が6㎡未満のものが2軒認められた(H-40、H-106)。このうちH-40は、2.4×2.4mで床面積4.7㎡を測る非常に小形なものであった。1.5坪弱の空間の中で、食・寝を伴う日常生活が可能であったとは考え難い、ましてやそこに家族何人かの居住を想定することは不可能に近いといえるのではなからうか。その竪穴にかかる上屋構造が前述した見解(笹森 1978他)のように平地部分の広間を取り入れた大きなものであったと考えた場合には、人々の居住はうなずけるかもしれない。しかし、それについて十分な根拠がしめされていない現在では、この見解には納得できない。

そこで浮かび上がるのが、この遺構が釜屋として機能していたのではないかという考えである。後述する掘立柱建物址のいずれかが主屋で、こちらは付属する釜屋ではなかったかということである。これについては、かかる遺構と掘立柱建物址との結びつきが検証されたうえで、成り立ちうる仮説といえる。ちなみに伊丹氏も、相模国の掘立柱建物址を検討するなかで、掘立柱建物址が母屋で竪穴住居址は釜屋ではなかったかと推論されている(伊丹 1985)。

いずれにしても、カマドを有する小形竪穴遺構の一部が釜屋である可能性も、今後考えてゆかねばならない問題であろう。

さて、次に、カマドをもたないものについて、みてみよう。

カマドを有さない住居址は、3軒認められたが(H-68、H-95、H-116)、いずれも4～11㎡を測る小形の住居址であった。これらがカマドを有さないことにおいては、まず居住施設ではない可能性(倉庫等)が浮かび上がろうし、食・寝・作業のうちの食の部分の欠落する施設であったことも想定し得るのである。

ところで、著名な山上憶良の貧窮問答歌には東国農民の暮らしぶりが歌われており「……楚取五十戸里長我許惠波 寢屋度麻(倭) 米立呼比奴……」とある。ここにおいて寢屋戸という施設が存在することが窺え、生活施設が分割して機能していた場合があることも想定できる。

本遺跡にみられるカマドを有さない遺構が、寝室であったとは言わないまでも、何らかの生活施設であったとすることは過ちはあるまい。

今後は、竪穴住居址について、すべて居住施設として片付けてしまうのではなく、他の機能をもつものも幾つかあることがふまえられなければならない。神奈川県向原遺跡の1軒の住居址について産屋の可能性を想定した中田氏のような積極的な試み(中田 1986)もまたなされなければならない。

カマドの構造

各期のカマドの構造についてふれておく。

6世紀初頭にあたる第Ⅱ期は、本遺跡のカマド出現期でもある。

第Ⅱのカマドは、偏平安山岩が袖石等として多用される事に特徴づけられる。この安山岩は、いわゆる「安原石」と呼ばれる平尾山系の石材かと考えられる。この石材がさらに粘土で固められ、カマドが構築されている。なお、本期のH-66のカマドには、一点面取り軽石が用いられていた。後述するように、面取り軽石は本遺跡第Ⅳ期以降のカマドに多用される構材である。その利用の萌芽がカマド出現期の本期にあることは注意しておく。

第Ⅲ期の住居址は1軒認められたのみである。そのカマドは、粘土のみが用いられて構築され、石材は用いられていなかった。煙道部が屋外に長く延びるのが特徴的であった。

第Ⅳ期から第Ⅶ期にみられるカマドは、面取りした軽石が構材に多用されることに特徴づけられる。軽石が多用されたのは、全体層序第Ⅶ層の追分火山灰流層中に軽石が多く含まれ入手が容易であったことと、加工（面取り）がし易かったことに起因しよう。

当該期のカマドの最前部の袖石には「┌」状に面取りされた軽石が用いられる場合も多く、またその他の葺石・天井石等には直方体状に面取りされた軽石が多用されていた。支脚石においても、角柱状に面取りされた軽石が用いられる場合があった。一方支脚石には長楕円形の河床礫が用いられることもあった。これらの石材が粘土で固められ、カマドが構築された。

奈良・平安時代の住居址のカマドにおける面取り軽石の多用は、本遺跡群の住居址の構造を最もよく特徴づける事象のひとつといえよう。

竪穴住居址の空間利用 第469・470図

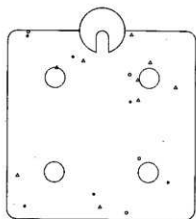
ここでは、本遺跡の第Ⅳ期から第Ⅶ期の集落において、共通した或は特有な住居内の空間利用があったものかどうかを考えてみる。長岡氏の指摘（長岡 1986）される「集落内に共通した居住空間の利用方法のデザインがあったとするならば、ひとつひとつの竪穴住居址の遺物の出土状態を集成することによって、これを復原することが可能になる」「遺物の出土位置が住居使用時の家財（遺物）の収納位置を反映しているとするならば、これを探ることによって当時の空間利用の状況を知る間接的な手懸りとしてすることができる」ということに同調し分析を進める。

具体的には、各期ごとに住居址の遺物の出土位置を相対化して1枚の図にプロットし、さらにそれらと比較検討してみることになる。ここでは、遺存度が高く床面に近い位置より出土した土器について取り上げた。各期ごとの住居址内における相対的な土器の出土位置は、第469図に示した。

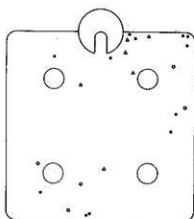
第469図の遺物分布から読みとれる傾向を以下に列記する。

- ① 第Ⅳ期から第Ⅶ期の各期とも、坏・甕の分布はカマドの両側のⅠ・Ⅱ区に集中、ことにその両端ともいえる壁際に集中する傾向が窺える。

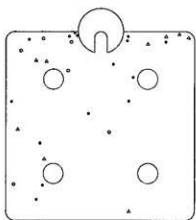
V 期 区



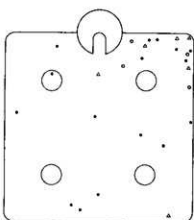
IV 期



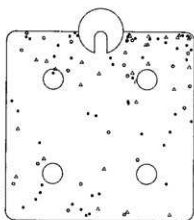
V 期



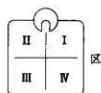
VI 期



VII 期



IV~VII期
全体



- 墓 (Tomb)
- 环 (Ring)
- △ 礎 (Foundation)

第403图 奈良・平安時代時期別遺物分布图

② ①で環・甕類の分布がカマド両脇に集中すると述べたが、特にその中でも第Ⅰ区の壁際(北壁際東半分)に分布が集中することがわかる。なお、ドット化した遺物のなかで完形品・床面直上遺物のみを取り上げてみた場合、その傾向はさらに顕在化する。

③ 第Ⅳ期から第Ⅶ期を通じ、住居址中央には遺物の分布があまり認められない傾向がある。

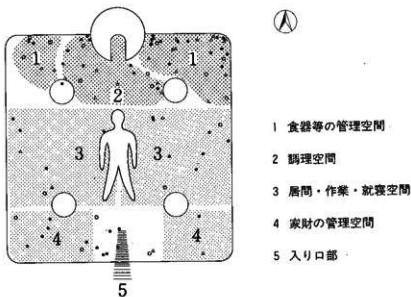
④ 器種別にみた場合、環(食器)は住居址Ⅰ・Ⅱ区に集中するとはいえず住居址全体に散らばるが、甕(煮沸器)はⅠ区壁際的位置にいわば固定的でその分布はあまり散らばらない。

以上が分布図から読みとることのできる傾向である。それでは、その分布のあり方を参考に、竪穴住居内の空間利用を想定しておこう(第470図)。

まず、①~④でいう食器・煮沸器の分布の集中は、それらの管理空間(長岡 前掲)や調理空間を表していると捉えられよう。そしてその管理空間や調理空間が炊事施設であるカマドに接することは当然といえば当然である。

次に、食器等の分布があまり認められなかった中央では、他の道具(鉄器・石器等)類の分布もあまり認められないようであった。つまり、そうした家財管理の空間ではなかったとも察せられよう。家財の分布を寄せ付けない空間とは、さしずめの作業空間・居間・就寝空間を想定できようか。

さて、従来竪穴住居の入り口部についてはカマドと相対する位置が考えられていたが、群馬県黒井峰遺跡(石井 1986)の調査では必ずしもそうでないことが明らかになった。いずれにしても、入



第470図 前田遺跡 奈良・平安時代竪穴住居址における機能空間の想定

り口部がカマドを有する壁側にあることはまず想定できず、他の3壁部分のいずれか、しかも出入りによって主柱が邪魔になることのない主柱間中央にあたる位置にあったものとみて大過あるまい。ちなみにD類とされた壁中に対で主柱を有する住居址では、3壁がカマド・主柱で占領されているので、入り口部は残る1壁部分（カマドと相対する壁）に想定せざるを得ない（第468図2）。また、一般的な四本柱の住居址で深度の大きいものの中には、カマドと相対する壁の中央に梯子もしくは踏み台等の入り口部施設を仄めかすようなビットが存在するものもあった。したがってここでは、黒井峠の事例を認めつつも、従来言われてきたカマドと相対する位置に入り口部があったことを想定しておきたい。

なお、本遺跡の第IV期より第VII期の各期においては、住居址のカマド施設方向と棟方向に統一性が窺え、これが集落の統一的な設計意匠であったと察せられる。そしてこの統一的な集落の設計意匠は4時期を通じてほぼ変わらないのである。したがって、ここから還元される個々の住居内の基本的な空間利用もまた、4時期を通じて統一されあまり変化のないものと解されよう。

(2) 掘立柱建物址

I 掘立柱建物址の形態

ここでは総数87棟の掘立柱建物址について、その平面形と柱（穴）の配置による形態分類を試み（第471表）、あわせてその大きさを検討してみよう。

まず、掘立柱建物址はその平面形によって次の二者に分類される。

I 平面形がおおよそ正方形を呈するもの。

II 平面形が矩形を呈するもの。

次に、柱（穴）の配置には、以下のようなあり方が認められた。

総柱となるもの。

A 桁×梁の柱の配置が3本×3本（2間×2間）となるもの。

側柱となるもの

B 桁×梁の柱の配置が2本×2本（1間×1間）となるもの。

C 桁×梁の柱の配置が3本×2本（2間×1間）となるもの。

D 桁に3本、梁に2・3本の柱の配置がみられるもの。

E 桁×梁の柱の配置が3本×3本（2間×2間）となるもの。

F 桁に2・4本、梁に3本の柱の配置がみられるもの。

G 桁に3・4本、梁に2本の柱の配置がみられるもの。

- H 桁×梁の柱の配置が4本×2本(3間×1間)となるもの。
 I 桁に4本、梁に2・3本の柱の配置がみられるもの。
 J 桁に3・4本、梁に3本の柱の配置がみられるもの。
 K 桁×梁の柱の配置が4本×3本(3間×2間)となるもの。
 L 桁×梁の柱の配置が3本×3本(2間×2間)となるもので、その1辺に3本の柱の配置によるいわゆる廂の付属するもの。
 M 桁に2本、梁に2・3本の柱の配置がなされるもので、その梁側の1辺に2本の付属柱(廂)のみられるもの。

























以上が柱(穴)の配置による分類である。このうちDはE(2間×2間)のバリエーションとして、GはH(3間×1間)のバリエーションとして、F・I・JはK(3間×2間)のバリエーションとして捉えることもできよう。また、基本的には、LはEの、MはKのバリエーションとみることもできる。

以上、本遺跡の掘立柱建物址の形態分類の規準を示した。具体的には、第471図のように、各掘立柱建物址がこれに該当することになる。

次に、上記で分類されたI・II、A～Mの面積はどのように分布するのであろうか。第472図にその分布を示しておこう。なお、その分布の偏りから、掘立柱建物址の規模を次のように設定できる。すなわち、小形が面積10㎡以下のもの、中形が11～19㎡程度のもの、大形が20㎡以上のものである。

さて、これまで本遺跡の掘立柱建物址の形態分類を試みてみた。これらをまとめると、本遺構についての次のような形態的特質とその構成が明らかにされている。

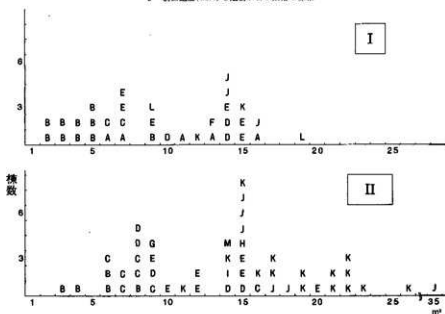
- ① 本遺跡の掘立柱建物址には、正方形(I)・矩形(II)の双方の平面プランが認められるが、その数はIが34棟(39%)、IIが49棟(56%)で、不明が4棟あった。
- ② 矩形のIIには、大・中・小の規模の三者が認められるが、正方形のIでは20㎡以上の大形建物が認められなかった。
- ③ 本遺跡の掘立柱建物址には、総柱式が5棟(6%)、側柱式が82棟(94%)認められ、側柱式が圧倒的に多いといえる。なお、側柱式のなかにもいわゆる廂付のものが3棟みられた。
- ④ 2間×2間の総柱建物5棟の面積は、6～16㎡の間にばらつき、特に集中はみられない。
- ⑤ 掘立柱建物址の中でも、1間×1間のBは特微的に認められた。その数は16棟で、全体の18%に及んだ。Bのプランには正方形・矩形の双方があるが、その面積は10㎡以下の小形のものがすべてで、特に5㎡以下の極小のものが目立った。
- ⑥ 2間×1間のCには、矩形のプランを呈するものが多かった。その面積は6～9㎡に集中し、小形なものほとんどといえた。

	I				II					
A		F-25 F-61	F-32	F-36	F-44					
B		F-12 F-65 F-76	F-23 F-70 F-80	F-30 F-74	F-63 F-75		F-8 F-77	F-15	F-20	F-41
C		F-1	F-64				F-27 F-58	F-49 F-60	F-50 F-67	F-51 F-72
D		F-3	F-4	F-83			F-13	F-14	F-56	F-78
E		F-10 F-62	F-40	F-43			F-9 F-46	F-24 F-69	F-29 F-85	F-34
F										
G		F-2					F-53			
H							F-52			
I							F-66			
J		(F-16)	F-28	F-35	F-59		F-7 F-81	F-22 F-87	F-26	F-33
K		F-5	F-19				F-6 F-37 F-45 F-55	F-11 F-33 F-47 F-67	F-18 F-39 F-48 F-68	F-21 F-42 F-54 F-71
L		F-17	F-31		M		F-86			

第47図 掘立柱建物址の分類

- ⑦ 2間×2間を基本形とするD・Eには、正方形・矩形の双方の平面プランが認められ、そのそれぞれにおいて大・中の2者の規模が認められた。
- ⑧ 正方形のプランを呈するIで、桁行3間を基本とするものには、F・G・J・Kが認めら

5 前田遺跡における遺構および集落の様相



第47図 掘立柱建物址形態別面積分布

- ② ビット掘り方の平面形は、円形もしくは楕円形を呈するものがほとんどすべてといえた。
- ③ ビット掘り方の底面に礎石の認められるものが2例あった (F-31、F-38)。
- ④ その柱痕は、いずれも円形を呈しており、太さは建物の規模に比例するようである。
- ⑤ 建物の規模に比例して、側柱の本数が増加している。
- ⑥ 本遺跡にみられる独立柱建物には、高床式、平地式の二者が認められると考えられる。

確実に高床式と考えられるものに、総柱のAがあげられる。そのプラン中央の柱は、床が高くなければ存在し得ないものだからである。中央の柱が高床にかかる重圧を支えたのであろう。

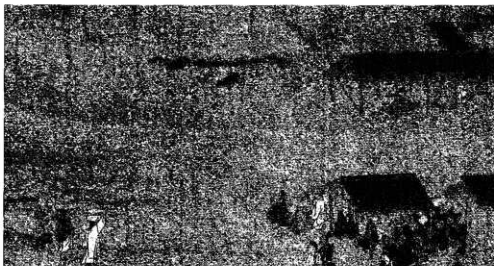
- ⑦ 一方、平地式の可能性が高いものは、側柱の建物10㎡以上を測る中形・大形の建物である。仮にこれらが高床の建物であったと考えてみても、東柱なしにはある以上の加重には耐えられなかったであろう。なお、高床自体、構築上煩雑なものであり、その設計には十分な目的がもたれたと考えられる。床を高くする目的とは、第一に地表からの湿気の回避であり、湿気を嫌う施設とは一般的にみて穀(稲)倉か住居であろう。ところが穀(稲)倉や住居は床にかなりの加重がかかる施設であり、ある規模以上のものでは東柱なしには高床が保たれなかったと思われる。こうした矛盾点から、消極的ではあるが、ここにあげた中・大形の側柱の建物のほとんどが平地式の建物であることを想定しておこう。
- ⑧ 小形の側柱の建物については、高床式、平地式のいずれを判断し難い。ただしこれは次に述べる建物の機能ともかかわってくるのであるが、これらの建物で穀倉と考えられるもの以外は、構築上煩雑な高床の建物ではないとみておくのが妥当といえようか。
- ⑨ 本遺跡の独立柱建物址について、その上屋構造を知るべき直接的な手掛かりはない。

ちなみに、秋田県男鹿市臨本や大館市胡桃館で発見された洪水による埋没家屋は、その上屋構造を考えるうえで参考となろう。胡桃館例は板壁を有しており、観音開きの板扉であるという(永井 1975)。

中田英氏は、「一瀬聖人絵伝」(歡喜光寺本)の福岡の市にみる独立柱建物の壁体に板と草葺の双方が認められることを指摘している(中田 1981)。また、同じく歡喜光寺本の一瀬聖人絵伝にみる佐久郎大井太郎の住宅では、土壁も認められている。佐久平野の市にみる独立柱建物の屋根は草葺きとなっている(第473図)。これらは、鎌倉時代の事例ではあるが、当該期の独立柱建物址の上屋構造を考えるうえで十分に参考となるものであろう。

一方、当該期の倉には、板倉・甲倉・丸木倉があるとされるが、富山氏によれば板倉は板を柱の溝に落とし込んだ落としはめ方式、甲倉は角材(六角形)によるあぜ組み、丸木倉は丸木によるあぜ組みの倉であろうと考えられている(富山 1974)。

本遺跡の独立柱建物址については、総柱の建物(次に述べる穀倉)は丸木組みによる上屋



第43図 一遍聖館にみる掘立柱建物址（佐久郡伴野市・歡喜光寺本）

構造を、側柱で中・大形の平地式と考えられる建物は、屋根が草葺き・壁体は草葺きあるいは板材からなるもので、切妻を呈する上屋構造を想定しておこう。

機能

当該期の掘立柱建物址は、東国においてはこれまで漠然と「倉庫」として考えられてきた。しかし、はたしてそれらのすべてが「倉庫」であったのだろうか。もし仮に、それらのすべてが「倉庫」であったとした場合、本遺跡では住居址117軒に対し87軒もの「倉庫」が存在していることになる。

東国の掘立柱建物址＝「倉庫」という既成概念を打ち破ったのは、千葉県山田水呑遺跡の報文（山田水呑遺跡調査団 1977）である。山田水呑遺跡では、検出された52棟の掘立柱建物址について、倉庫・住居・作業所・納屋という4つの機能が与えられている。このうち、作業所・納屋の性格付けに関しては根拠薄弱であるが、掘立柱建物址の機能を積極的に推定した点において高く評価されよう。

また、東国の掘立柱建物址のうち3間×2間・2間×2間の側柱のものを居住施設として捉えてゆこうとする伊丹氏の努力（伊丹 1985・1986）も認められる。

さて、本遺跡で検出された87棟の掘立柱建物址は、いったいいかなる機能を有していたのだろうか。そして、その性格はどのようなものと考えられるのか。ここではその機能についてのささやかな推定を以下に試み、集落再構成の手だてとしよう。

- ① 本遺跡にみられた総柱の建物Aは、稲倉と考えておこう。

建物Aは、正方形のプランを呈する総柱の高床建物である。高床は湿気を避ける機能を、

総柱は加重に耐えようとする構造を反映しており、そのような条件を要求する建物としては稲倉がまず想定されるのである。



第474図 墨書土器「倉」

ちなみに、正倉院文書にみられる正視帳から倉の平面形を導き出した松村氏によれば、倉の平面形は正方形に近いものであるという(松村 1983)。本建物Aは、この点においても矛盾しないといえる。

ところで、本遺跡のH-7号住居址からは、「倉」と墨書された須恵器環が検出されている(第474図)。本集落内における稲倉の存在を仄めかしてくれる好資料といえる。この「倉」⁽¹⁾とは、H-7号住居址と同時期(第VII期)の所産とみられるF-25号掘立柱建物址を指していたのかもしれない。

なお、松村氏の計算によれば、滝川政次郎氏が想定した標準房戸10名に班給された口分田1町2段240歩に対する最大見積収入量は600束前後で、これを収納し得る倉は3.6m×3.6m(13m²)程度のものであるという(松村 前掲)⁽²⁾。一方、ここで稲倉として捉えた建物Aは総数5棟(平均床面積11m²)、各期の集落に1棟ぐらいつつ付随しているのみで、集落の規模からすればやや不足している感を否めない。ここにおいて、建物A以外にも稲倉として機能したであろう建物の存在の可能性も考えられてこよう。

- ② ①で述べた稲倉Aの不足分を補う機能を有する建物として、本遺跡に特徴的に認められた建物B(1間×1間)の存在があげられようか。こちらは、小形の建物であるので東柱なしにも稲倉としての高環は保たれていたものと考えられる。いずれにしてもこの建物Bは、大方5m以下というその小形さゆえ、住居としては考え難く、稲倉ではないとしても広義の「クラ」もしくは納屋と想定しておくことに大過あるまい。

なお、この建物Bも稲倉として機能していたと考えるとき、建物Aとは異なる性格の稲が収納されたであろうことは、両者それぞれの構造の特殊性から推察に難くない。一方は種稲、一方は一般食料としての稲の収納倉、というように性格が異なったのかもしれない。

- ③ 本遺跡にみられた、多くは矩形、もしくは正方形プランを呈する掘立柱建物で、10m²以上を測る中・大形のものは、平地住居としての機能を考えておこう。

集落内における客体的施設(倉・納屋・作業場・その他)には、主として小形の建物址39棟を充てたとして、その39棟という数自体客体的施設を満すには余りある棟数といえる。となると残された中・大形の建物址48棟には、主体的施設(住居)としての機能を与えざるを得ないのではあるまいか。

なお、これらの建物を住居と考えた場合に問題となるのは、消費生活の基礎となる火焚の

所在であろう。残念ながらこれらの建物址からは火焔の存在は確認されず、また置カマド等の検出をみることもできなかった。上面が削平されてしまっている可能性が高いとはいえ、火焔の何らかの痕跡は残らないものなのだろうか。見方を変えれば、掘立柱建物址（母屋）の釜屋が小規模な竪穴住居であると推察する伊丹氏の見解（伊丹 前掲）にも魅力があらう。

さて、ここで住居址とした中形（10㎡以上20㎡未満）の建物には、正方形プランを呈するものもいくつかみられた。しかし、鬼頭氏によれば、正方形の掘立柱建物は住居ではない可能性が高いという（鬼頭 1985）。古墳時代以来の居住用建物は、いずれも長方形であるのが原則だとされるのである。そこでは説得力のある根拠が示されている訳ではないので、この点についてはまだまだ検討の余地が残らう。

以上 本遺跡の掘立柱建物址の機能についての推察を重ねてきた。しかし、その推察のもつ危険性は、山田水呑の報告以来10年を経た今日でもあまり変わってはいない。掘立柱建物址自体の提示する情報量が著しく増大したともいえない限りにおいては、しかたのないことなのかもしれない。だが、何かしらその機能を積極的に推定する糸口は見出し得ないものなのだろうか。この点については、来年度、再来度へと継続される鑄師屋遺跡群の調査・報告の課題としよう。

3 掘立柱建物址の時期

これまで、掘立柱建物址が集落研究のなかにおいて市民権を得られなかった理由のひとつとして、この遺構の時期決定が非常に困難であることがあげられよう。掘立柱建物址は、竪穴住居址のように良好な伴出遺物をもつことがほとんどなく、また、そのピット中から遺物が検出されたにしろ、その遺物が遺構の所属期を必ずしも示すものではないという条件の悪さを負っているのである。

しかどのようにかして、その時期を決定する手掛かはないものなのだろうか。その手掛かりとは、次にあげる事項とならうか。

- ① 掘立柱の埋土中から遺存度の高い遺物が検出された場合、その遺物は意図的に埋め込まれたものとみることができる。そして、その遺物の示す時期が遺構の所属期であるとも考えられよう。具体例として、須恵器環が検出されたF-48、F-49があげられる。

遺物の埋納行為は、建物を建てる際の地鎮的な意味合いをもつ場合もあったのであろうか。

- ② 掘立柱の埋土中にみられる土器片は、少なくともその建物が土器片の示す年代以降に建てられたものであることを物語ってくれている。
- ③ 時期の明確な遺構と掘立柱建物址の重複がみられたとき、その新旧関係を捉えることによって掘立柱建物址の時的的位置付けの見通しを得ることができる。
- ④ 危険の伴う作業ではあるが、時期の明確な遺構との配置関係（主軸方向の統一性や占地の

あり方)を捉えることによって、掘立柱建物址の時的的位置付けの見通しを得ることができ
る。

以上が、その手掛かりである。この中で①以外は、厳密な意味での時期決定の手段とはいえない。
①より順に④の方法をとるにつれて、その危険度は増すものともいえる。しかしここにおい
て頼らざるを得ないのは②③④(殊に④)の方法である。その危険度を考慮しつつ時期を考えな
ければなるまい。

なお、ここでまず確認しておかなければならないのは、本遺跡の掘立柱建物址の該当する時代
である。結論的にいえば、それらはすべて本遺跡の第IV期から第VII期、奈良時代から平安時代初
頭の所産であるとみることが出来る。それは、①の手掛かりによって本遺跡第VI・VII期に位置付
けられるものがあることから窺えようし、古墳時代中期(第I・II期)の住居址が分布する地
区に掘立柱建物址がほとんど存在しないという、古墳時代遺構との結びつきのなさからも肯定で
きる。

一方、本遺跡の掘立柱建物址はそれ自体で、最高3棟が重複する場合がある。このことは掘
立柱建物址の所属期が少なくとも3時期にわたることを示している事実といえる。ここにおいて、
各掘立柱建物址が、第IV期から第VII期のいずれかの時期に所属することを考えるのが妥当となる。

さて、上記①～④の手掛りに基づいて本遺跡の掘立柱建物址の時期を考えてみた。各建物址は
第177表に示したような時期に分けることができた。この時期区分から窺うことのできる掘立柱建
物址のあり方とは以下のようである。

- ① 各時期毎の掘立柱建物址の棟数は、竪穴住居址の軒数の増減に比例している。

ちなみに第I区では、第IV期から第VII期を通じて竪穴住居址と掘立柱建物址がほぼ同数存在
している。また、全体をみても、第VII期を除いた各期においては、竪穴住居址と掘立柱建物
址がほぼ同数ずつ存在していることが窺える。

- ② 前頁において稲倉と想定した建物Aは、各期を通じて1棟程度存在している。

- ③ 建物Aとは異なるが稲倉とも考えられた建物Bは、各期を通じて数棟ずつ存在しているこ
とが捉えられる。なお、その分布は、他の建物群とか住居址の分布からやや掛け離れていて
隔離的であることが、後に示す時期別分布図よりわかる。

- ④ 平地住居と想定した中・大形の圓柱建物は、IV期からVI期にかけては10棟程度認められ、
第VII期にやや増加して16棟程度認められるようになる。

- ⑤ 後に示す時期別分布図をみると、各期を通じて掘立柱建物の占地が集中する地区が何カ所
かあることが窺える。その集中地区とは、第I区スー42グリッド付近、セー43グリッド付近、
セー42グリッド付近、セー40グリッド付近である。

第177表 掘立柱建物址一覧表（時期・形態別）

時期	棟数	I											II										
		A	B	C	D	E	F	J	K	L	B	C	D	E	G	H	I	J	K	M	不明		
IV	23	F-33	F-65												F-8	F-27	F-13				F-95	F-87	F-8
		F-75	F-74												F-41	F-65	F-14				F-81	F-21	F-47
V	22	F-44	F-30	F-3	F-40					F-17	F-20	F-51		F-46					F-22	F-39	F-96	F-82	
		F-13	F-63	F-83								F-72	F-94									F-75	F-79
VI	15			F-64	F-59			F-35	F-19	F-21	F-15	F-50							F-25	F-65	F-84		
					F-43																F-36	F-48	F-54
VII	27	F-25	F-23	F-1	F-4	F-10	F-3	F-26	F-5					F-45	F-76	F-9	F-53	F-52	F-7	F-37			
		F-35	F-61											F-67	F-24	F-20	F-85	F-89		F-18	F-18	F-57	F-55

註

- (1) 「クラ」は、現在では取納施設一般を指すように用いられているが、当時はその機能によってあてられる字が異なっていたと考えられる。「倉」とした場合には稲倉を、「庫」は武器庫を、「廩」とした場合には財物を取納する施設をそれぞれ表しているものと思われる。
したがって、この「倉」とは稲倉を表す用字とみて差し支えあるまい。
- (2) この収入量は、田稻・糠稻・出挙本利稻、その他が支出される以前の数値である。なお、集落内の倉はすべて横（徳を束ねたもの）稲倉であったとされている（松村 前掲）。

(3) 前田遺跡における集落様相

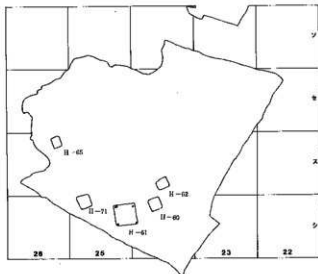
本項においては、前項で捉えたあるひとつの総合的土器様相を示すものとしての「時期」に属する遺構群を、「集落」という形で捉え、その特質と変遷を追ってみる。

ところで、これは考古学の「集落論」上に常についてまわる問題であるが、ひとつの土器様相で表される遺構群をすぐさま「集落」と呼んでよいのかということがある。同一時の居住の集合状態が本来の集落であるのなら、ある程度の時間幅をもつ土器様相でくられる遺構群を厳密には集落とは呼び得ない場合もあるからである。同一時の遺構の把握方法としては、旧石器時代の研究方法論として用いられている遺物の遺構（ブロック）間接合や個別資料の遺構間共有をみる方法等があげられようが、後時代の集落論にこの方法をすぐさま適応できない点に難も残る。

いずれにしても、現段階ではある土器様相の表象体としての遺構のまとまりをして「集落」と呼ばざるを得ず、これもいたしかたないことであろう。なお、そこにおいては、集落の正確な居住員数を推定するうえでの大きな支障があることを予め断っておかねばなるまい。

1 第1期（5世紀第IV四半紀中心）第475図

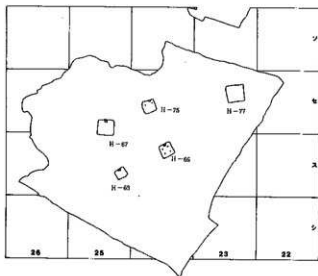
- ① 本期の集落は、第II区において認められるもので、竪穴住居址5軒から構成されるものである。これは、本遺跡の当初を飾る集落であり、いずれかの地からの移住によって形成されたものであろう。
- ② 集落は、東西を低地に画される約7000㎡の帯状微高地の南端部に展開し、その広がりはおおよそ2500㎡程度におよぶものである。
- ③ 本集落を構成する住居址5軒のうち、4軒は10～20㎡を測る中形のものであるが、残りの1軒は他とかけ離れて大きく(H-61)、約65㎡を測るものであった。このことは、H-61の居住者の財力を象徴しているかのようにも思える。もし推定がゆるされるのであれば、この大形住居址は集落内の首長一家の居宅でもあったとも考えられよう。ちなみに、この住居址は有孔円板等が検出されていることにも特徴づけられる。
- ④ 5軒の住居址とも、その棟方向はほぼ統一され北北西を指している。
- ⑤ 本集落において火爨として採用されているのは、炉である。
- ⑥ 一人あたりの居住に必要な面積を3.7㎡と設定すると、本集落の住居の総床面積131.7㎡から算定される構成員総数は35.6人となる。ただし、大形住居においては余裕をもった居住がなされていたとも考えられるので、その構成員数（人口）は30人強とみておいて大過あるまい。



第475図 第Ⅰ期の集落 (1:1,500)

2 第Ⅱ期 (6世紀初頭) 第476図

- ① 本期の集落は、第Ⅱ期において認められ、竪穴住居址5軒から構成される。
- ② 集落は、東西を低地によって画される約7000㎡の帯状微高地上に展開し、その広がりはおおよそ2500㎡程度におよんでいる。
- ③ 本集落は、第Ⅰ期より継続して営まれる集落である。その占地は、第Ⅰ期と入り組むことがなく、むしろ隣接地に対称的ともいえるようなあり方をみせている。
- ④ 前第Ⅰ期においては、中形住居4軒：特大住居址1軒という構成であった。これより継続される本期では、中形住居3軒：大形住居址2軒(35㎡・41㎡)という構成となる。特大住居のある種の性格が大形住居2軒に分化したことも想定してみなければなるまい。
 なお、第Ⅰ期の総床面積は約132㎡、第Ⅱ期も132㎡と同数値を示しており、継続して営まれる集落の等質性の一面を窺わせている。
- ⑤ 本集落を構成にする竪穴住居が、その構造上において第Ⅰ期と画される点は、火爨としてのカマドの採用にある。ただし、前時期の火爨として用いられている炉をとどめている住居址もなかにはあり、過渡的な様相を窺わせている。
- ⑥ 本集落を構成する4棟の住居址はその棟方向を北北西にとっているが、残りの1軒はややずれ北北東にその棟方向をとっている。
- ⑦ 1人あたりの居住に必要な面積を3.7㎡とすると、本集落の住居の総床面積(132・1㎡から



第476図 第II期の集落 (1:1,500)

算出される構成員総数は35.7人となる。この員数は、第I期の35.6人と変わりのない数値である。大抵みでは、30人強とみておいて差しつかえあるまい。

- ⑧ 本集落は次期に継承されてゆくものではない。それは自然消滅を辿るのではなく、新転地への移住といったかたちで継承されたのであろう。考えてみれば、本集落の前進である第I期の集落が移住によって突発的に形成されたのと理由を同じくするのかもしれない。

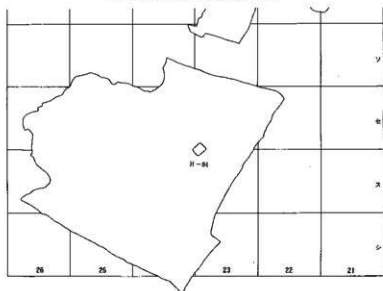
3 第III期 (6世紀末葉～7世紀前葉) 第477図

- ① 本期は、第II区にみられる住居址1軒(H-84)のみで構成される時期である。25万㎡にもおよぶ広大な調査区なかで、本期と同時期の遺構はまったく検出されなかった。

また、本期は第II期に継続するものではなく、後の4時期の前身とはなっていない。

時間的にも空間的にも隔離されたところに本住居址の特異性がある。

- ② 本期の住居址は、面積13㎡を測る中形のものでその北壁中央にカマドを有していた。棟方向は北西を指す。
- ③ 時間的にも空間的にも隔離される本期の単独住居址は、平安時代におけるいわゆる離れ国分(中山 1976)ともよばれる単独住居とも同様なあり方を呈している。
- ④ 本H-84号住居址は、本遺跡における1人あたりの居住必要面積 3.7㎡を算出する基礎となったものである。本住居址には、3.5人の居住が想定される。



第477図 第III期の集落 (1:1,500)

4 第IV期 (8世紀第I四半紀中心)

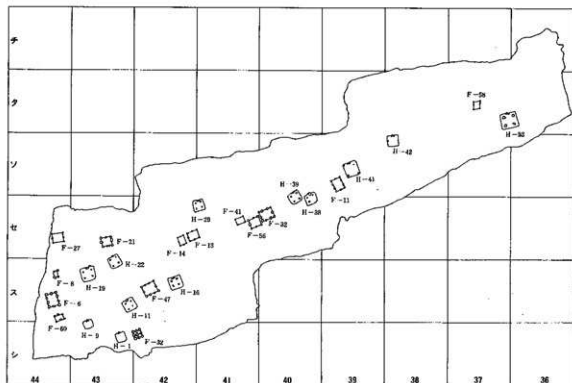
本期の集落は、前III期より継続的に営まれているものではない。8世紀になって、いわば忽然と現れる集落である。

なお、前述したが、本第IV期から第VII期にかけての遺構の分布は、佐久市分の前田遺跡についても多数認められるところである。したがってこれらの時期全体を語るには、佐久市分の前田遺跡の様相が明らかにされないことには不可能といえる。そうした事情をふまえ、ここでは、前田遺跡佐久市分の調査成果の直接的影響を被らない地区の集落についてのみ取り上げることとする。

その集落とは、自然地形によって画される第I区の集落、第II区の集落、第III区の集落である。

第IV期・第I区集落 第478図

- ① 本集落は、南北を底地によって画される約11000㎡の帯状微高地(第I区)上に展開する。
- ② 本集落は、竪穴住居址12軒・掘立柱建物址14棟によって構成される。
- ③ 竪穴住居址は掘立柱建物址の占地については、グリッド40例以東では竪穴5軒に対して掘立柱2棟という構成をみせ、それ以西では竪穴7軒・掘立柱12棟という構成をみせている。つまり40例以東では竪穴が分布の主体となり、以西では双方がみられながらも掘立柱が主体となる占地といえる。
- ④ 本集落の竪穴住居址の規模は、小形1：中形6：大形5軒という構成をみせている。
- ⑤ 本集落の竪穴住居址にみられるカマドは、いずれも北壁中央に設けられている。



第478図 第IV期・第I区集落 (1:1,500)

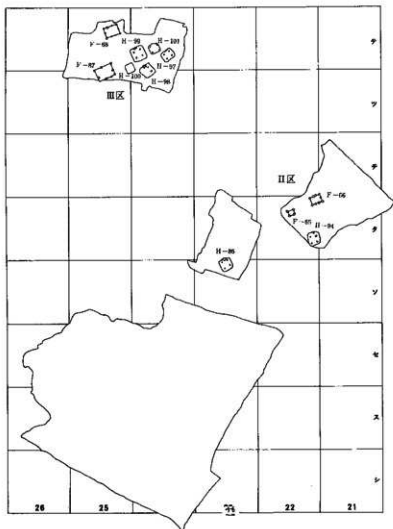
- ⑥ 本集落の掘立柱建物には、稲倉と考えられるAが1棟 (F-32)、B (稲倉?) が2棟、平地住居かと考えられる中・大形のもが8棟、小形のもが3棟認められた。
- ⑦ 本集落の竪穴住居址・掘立柱建物址は、すべてその棟方向を北北西にとっている。
- ⑧ 1人あたりの居住必要面積を3.7㎡とすると、竪穴住居址の総床面積242.6㎡から算定される人口は65.5人となる。

一方、住居と考えられる掘立柱建物址8棟の総床面積は140.6㎡で、算定される人口は38人である。

双方の合計から、本集落の構成員数を103.5人と想定しておこう。

第IV期・第II区集落 第479図

- ① 本集落は、東西を底地によって画される約7000㎡の帯状微高地 (II区) の南半分に、約1800㎡の広がりを見せて展開する。
- ② 本集落は、竪穴住居址2軒・掘立柱建物址2棟によって構成される小規模集落である。
- ③ 竪穴住居址1軒と掘立柱建物址2棟は比較的近接し、他の竪穴住居址1軒はやや隔離した位置にある。



第479図 第IV期・第II・III区集落 (1:1,500)

- ④ 竪穴住居址2軒は、いずれも中形の規模を呈するものであった。
- ⑤ 竪穴住居址2軒のカマドは、いずれも北壁中央に認められた。
- ⑥ 掘立柱建物址は、稲倉とも考えられたBが1棟と、住居と推定される桁行3間の中形建物Iが1棟認められた。
- ⑦ 本集落の竪穴住居址・掘立柱建物址は、いずれもその棟方向を北北西にとっている。
- ⑧ 1人あたりの居住必要面積を3.7㎡とすると、竪穴住居址の総床面積37.8㎡から算出される人口は10.2人、住居と考えられる掘立柱建物址の面積14.3㎡から算出される人口は3.8人、総計14人が本集落の構成員数であると推定しておこう。

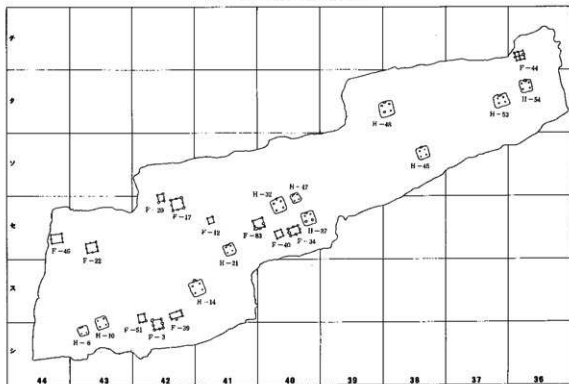
第Ⅳ期 第Ⅲ区集落 第479図

- ① 本集落は、周囲を底地によって画される約1000㎡の微高地（Ⅲ区）上に展開する。Ⅲ区に認められるのは本期の集落のみである。
- ② 本集落は、竪穴住居址5軒・掘立柱建物址2棟によって構成される小規模な集落である。
- ③ 竪穴住居址5軒は、比較的近接した位置に寄り添うように並んでいる。やや混み入りすぎているきらいもあり、あるいは同一時期内のさらに細かな建て替えのサイクルを示す分布なのかもしれない。
一方、掘立柱建物址は、一棟は竪穴住居址群の横に並び、一棟はやや離れて存在するといった占地をみせている。
- ④ 本集落の竪穴住居址の規模は、中形4軒：大形1軒という構成であった。
- ⑤ 本集落の竪穴住居址にみるカマドは、いずれも北壁中央に設けられていた。
- ⑥ 掘立柱建物址は、住居と考えられる桁行3間の大形ものが2棟認められた。
- ⑦ 本集落の竪穴住居址・掘立柱建物址は、いずれもその棟方向を北北西にとっている。
- ⑧ 1人あたりの居住必要面積を3.7㎡とすると、竪穴住居址の総床面積84.3㎡から算定される人口は22.8人、住居と考えられる掘立柱建物址の総床面積57.3㎡から算定される人口は15.5人、総計38.3人が本集落の構成員数と推定しておこう。

5 第Ⅴ期（8世紀第Ⅱ四半紀中心）

第Ⅴ期・第Ⅰ区集落 第480図

- ① 本集落は、南北を低地によって画される約11000㎡の帯状微高地（第Ⅰ区）上に展開する。
- ② 本集落は、第Ⅳ期より継続して営まれるもので、竪穴住居址11軒・掘立柱建物址14棟によって構成される。
- ③ 竪穴住居址と掘立柱建物址の占地については、グリッド40列以東では竪穴7軒に対して掘立1棟、それ以西では竪穴4軒：掘立13棟という構成をみせている。つまり、40列以東では竪穴が分布の主体となり、以西では掘立が主体となる占地であり、第Ⅳ期と同様な傾向をみせていることがわかる。
- ④ 本集落の竪穴住居址の規模は、中形5軒：大形6軒という構成をみせている。
- ⑤ 本集落の竪穴住居址にみられるカマドは、いずれも北壁中央に設けられている。
- ⑥ 本集落の掘立柱建物址には、稲倉と考えられる総柱のAが1棟（F-44・集落東隅）、1間×1間のB（稲倉？）が3棟、平地住居かと考えられる中・大形の建物が7棟、中・小形の建物が3棟認められた。



第480図 第Ⅴ期・第Ⅰ区集落 (1:1,500)

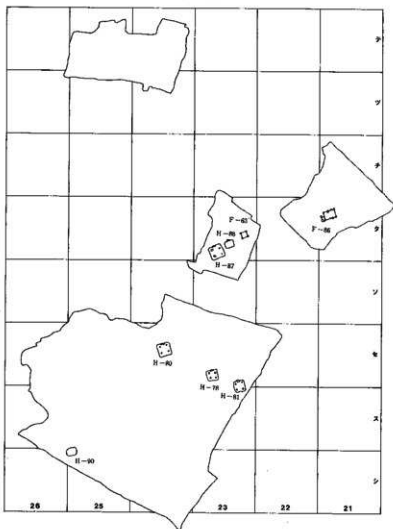
- ⑦ 本集落の竪穴住居址、掘立柱建物址は、すべてその棟方向を北北西にとっている。
- ⑧ 1人あたりの居住必要面積を 3.7m^2 とすると、竪穴住居址の総床面積 232.6m^2 から算定される人口は62.9人となる。
- 一方、住居と考えられる掘立柱建物址7棟の総床面積は 104.8m^2 で、算定される人口は28.3人である。

双方の合計から、本集落の構成員数を91.2人と推定しておこう。

第Ⅴ期・第Ⅱ区集落 第481図

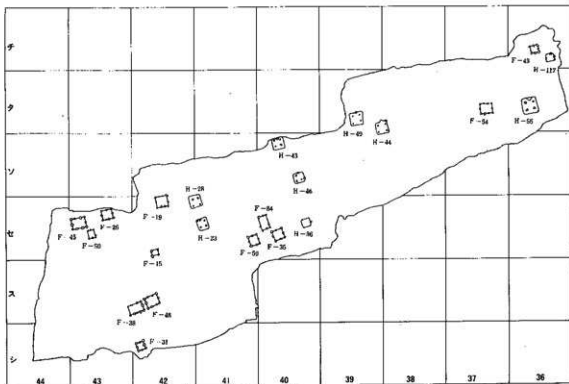
- ① 本集落は、東西を底地によって画される約 7000m^2 の帯状微高地(Ⅱ区)上に展開する。
- ② 本集落は、竪穴住居址6軒・掘立柱建物址2棟によって構成される。掘立柱建物址が竪穴住居址を凌駕する本期第Ⅰ区集落に比べ、本集落は掘立柱建物址の数が少ないといえる。
- ③ 竪穴住居址は、前Ⅳ期Ⅱ区と比べ4軒の増加をみせ、さらに南側へと広がっている。一方、掘立柱建物址は、前Ⅳ期と同様な構造の2棟がほぼ変わりのない占地をみせている。
- ④ 本集落の竪穴住居址の規模は、小形2軒：中形2軒：大形2軒という構成をみせている。
- ⑤ 本集落の竪穴住居址のカマドは、いずれも北壁中央に設けられている。

V 総 括



第48図 第V期・第II区集落 (1:1,500)

- ⑥ 掘立柱建物址は、稲倉とも考えられたBが1棟と、住居と考えられる湘付の中形建物Mが1棟認められた。
- ⑦ 本集落の竪穴住居址・掘立柱建物址は、いずれもその棟方向を北北西にとっている。
- ⑧ 1人あたりの居住必要面積を3.7㎡とすると、竪穴住居址の総床面積94.4㎡から算定される人口は25.5人、住居と考えられる掘立柱建物址の面積14㎡から算定される人口は3.8人で、総計の29.3人を本集落の構成員数と想定しておこう。

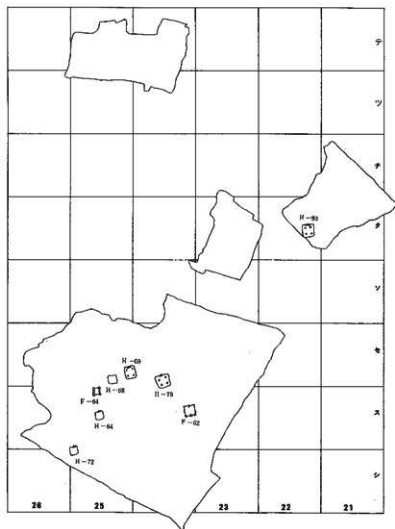


第42図 第VI期・第I区集落 (1:1,500)

第VI期 (8世紀第III四半紀中心)

第IV期・第I区集落 第482図

- ① 本集落は、南北を低地によって画される約11000㎡の帯状微高地(第I区)に展開する。
- ② 本集落は、第V期より継続して営まれるもので、竪穴住居址9軒・掘立柱建物址13棟によって構成されている。
- ③ 竪穴住居址と掘立柱建物址は、集落のほぼ中央を境として東西に対峙するような状態で分布している。前IV・V期の当地区においても竪穴住居址と掘立柱建物址の占地がそれぞれ異なるような様相が窺えたが、本期においてその傾向はさらに顕在化したものとみられる。
- ④ 本集落の竪穴住居址の規模は、小形2軒：中形4軒：大形3軒という構成をみせている。
- ⑤ 本集落の竪穴住居址のカマドは、いずれも北壁中央に設けられている。
- ⑥ 掘立柱建物址では、前IV・V期において1棟ずつ認められた稲倉と考えられる総柱建物Aは認められなかった。この代替となる建物としては、F-31・F-43のいずれかを充てることもできる。1間×1間のBは1棟認められた(F-15)。中・大形の圓柱建物で住居と考



第483図 第VI期・第II区集落 (1:1,500)

えられるものは9棟認められた。

- ⑦ 本集落の竪穴住居址・掘立柱建物址は、いずれもその棟方向を北北西にとっている。
- ⑧ 1人あたりの居住必要面積を3.7㎡とすると、竪穴住居址の総床面積161.7㎡から算定される人口は43.7人、住居と考えられる掘立柱建物址の9棟の総面積166.1㎡から算定される人口は44.9人で、総計88.6人を本集落の構成員数と想定しておく。

第VI期 第II区集落 第483図

- ① 本集落は、東西を低地によって面される約7000㎡の帯状微高地 (II区) に展開する。
- ② 本集落は、竪穴住居址6軒・掘立柱建物址2棟によって構成される。掘立柱建物址が竪穴

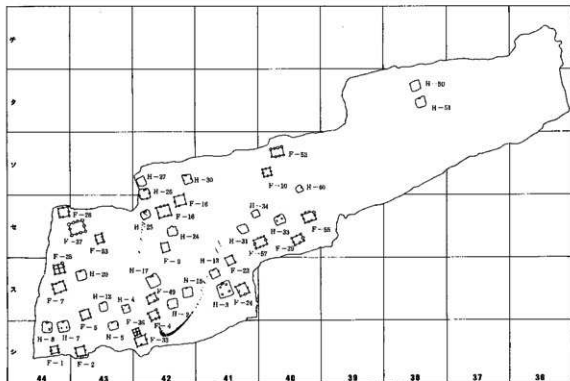
住居址の数を上回る本期第Ⅰ区集落に比べ、本集落は掘立柱建物址の数が僅かである。

- ③ やや遊離して存在する1軒の竪穴住居址(H-93)を除いて、他の竪穴住居址と掘立柱建物址はほぼ弧を描くような状態で並んでいる。
- ④ 本集落の竪穴住居址の規模は、小形2軒：中形2軒：大形2軒という構成をみせている。
- ⑤ 本集落の竪穴住居址のカマドは、いずれも北壁中央に設けられている。
- ⑥ 掘立柱建物址では、正方形のプランを呈する2間×1間のCと、2間×2間のEがそれぞれ1棟ずつ検出されている。Cは稲倉としてのEは住居としての機能を担っていたのであろうか。
- ⑦ 本集落の竪穴住居址・掘立柱建物址は、いずれもその棟方向を北北西にとっている。
- ⑧ 1人あたりの居住必要面積を3.7㎡とすると、竪穴住居址の総床面積89.4㎡から算定される人口は24.2人、住居と推定してみた掘立柱建物址の面積15.0㎡から算定される人口は4.1人、総計28.3人を本集落の構成員数と想定しておく。

第Ⅶ期（8世紀第Ⅳ四半紀～9世紀初頭）

第Ⅶ期・第Ⅰ区集落 第484図

- ① 本集落は、南北を低地によって画される約11000㎡の帯状微高地（第Ⅰ区）に展開する。
- ② 本集落は、第Ⅵ期より継続して営まれるもので、竪穴住居址23軒・掘立柱建物址22棟によって構成されている。竪穴住居址・掘立柱建物址とも、前Ⅵ期に比べ2倍近い数に膨れあがる事が捉えられる。
- ③ 竪穴住居址と掘立柱建物址の占地は、グリッド40列以西に集中し、しかも双方が入り組み建て混んだ様相を呈している。一方、前3時期において竪穴住居址の主体的な分布がみられたグリッド40列以東では、小形の竪穴住居址2軒のみの分布しか認められなくなる。
- ④ 本集落の竪穴住居址の規模は、13㎡以下の小住居址19軒：中形住居址3軒：大形住居址1軒という構成で、小住居址の軒数が前Ⅵ期に比べ増大する傾向がうかがえる。
- ⑤ 前Ⅵ期に比べ竪穴住居址の軒数は9軒から22軒と倍加するが、その総床面積は161.7㎡から271.6㎡と1.5倍程度の増加にとどまっていることには注意しておきたい。
- ⑥ 本集落の竪穴住居址のカマドは、北壁中央に設けられている。ただし1列のみ東カマドが認められる(H-40)。
- ⑦ 掘立柱建物址は、稲倉と考えられる総柱建物Aが2棟認められ(F-25、F-36)、1間×1間のBが1棟、住居と考えられる中・大形の建物は14棟、小形の建物は5棟認められた。
- ⑧ 本集落の竪穴住居址・掘立柱建物址は、いずれもその棟方向を北北西にとっている。

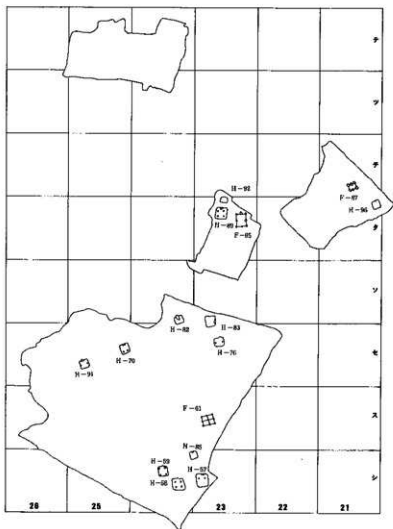


第484図 第VII期・第I区集落 (1:1,500)

- ⑨ 1人あたりの居住必要面積を 3.7m^2 とすると、竪穴住居址の総床面積 271.6m^2 から算定される人々は73.4人、住居と考えられる掘立柱建物の総面積 233.5m^2 から算定される人口は63.1人、総計136.5人を本集落の構成員数を想定しておこう。

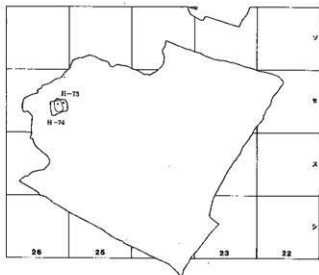
第VII期・第II区集落 第485図

- ① 本集落は、東西を低地によって画される約 7000m^2 の帯状微高地 (II区) に展開する。
- ② 本集落は、竪穴住居址12軒・掘立柱建物址3棟によって構成される。掘立柱建物址が竪穴住居址の数を上回る本期第I区集落に比べ、本集落は掘立柱建物の数が僅かである。
- ③ 本集落を構成する遺構は、概ね三つのまとまりをみせて分布している。
 - 一つは、グリッドシ・ス列の竪穴住居址4軒と掘立柱建物址1棟 (総柱) のまとまり、もう一つは、グリッドセ列の竪穴住居址5軒のまとまり、グリッドタ列の竪穴住居址3軒と掘立柱建物址2棟のまとまりである。
- ④ 竪穴住居址の数は、6軒から12軒と前VI期に比べ倍増している。その規模としては、小形5軒：中形7軒という構成となっている。



第45図 第VII期・第II区集落 (1:1,500)

- ⑤ 本集落の竪穴住居址のカマドは、北壁側に設けられているものが8軒、東壁側に設けられるものが1軒認められた。他は不明か、カマドを有さないものである。
- ⑥ 掘立柱建物址では、総柱の建物Aが1棟(F-61)、住居かと考えられる側柱の大形建物が1棟(F-85)、小形の建物が1棟認められた。
- ⑦ 本集落の竪穴住居址・掘立柱建物址は、いずれもその棟方向を北～北北西にとっている。
- ⑧ 1人あたりの居住必要面積を 3.7m^2 とすると、竪穴住居址の総床面積 137.5m^2 から算定される人口は37.2人、住居と考えられる掘立柱建物の面積 20.1m^2 から算定される人口は5.4人、総計42.6人を本集落の構成員数と推定しておこう。



第486図 第VII期の集落 (1:1,500)

なお、本期を最後として、これに継続する集落は前田遺跡では認められなくなってしまう。土器様相の断絶から、それは徐々に消滅したのではなく、ある時期の集団移住によって短時間に消滅した可能性が高いといえよう。

第VIII期 (古代末期～中世) 第486図

- ① 本期に属する遺構は、第II区において重複する竪穴住居址穴住居址2軒が認められたにすぎない。
- ② 2軒の竪穴住居址では、双方とも火爨として炉が採用されていた。
- ③ 双方ともその棟方向を北北西にとっている。
- ④ その面積から、一方(H-73)は5.5人の居住を、一方(H-74)は5.4人の居住を想定できる。なお、この2軒は建て替えの結果として残された可能性も残ろう。

註

(1) 1人あたりの居住面積は、縄文時代においては、岡野氏による3㎡という見方や(岡野1934)、姥山貝塚での5体分の人骨出土例から2.4㎡とする見方もある。

ここでは、とりあえず、住居内にはば一括して残されたと考えられる食器から、その食器を使用したであろう人数を割り出し、住居址の総面積をその人数で割って1人あたりの居住面積を算定してみた。

具体的には、何らかの理由で生活の中断を余儀なくされ、食器類がそのまま住居内に遺棄されていると考えられる本遺跡のH-84号住居址を取り上げてみた。H-84では、最も基本的

な食器となると考えられる坏Aは7点検出された。これが1人2点ずつの割合いで用いられていたと考えるとき、その使用人数(=居住人数)は3.5人となる。これを住居址の面積13.1㎡で割れば1人あたりの居住面積が3.7㎡強と算定される。

なお、この数値はあくまで目安であり、いくつかの前提をもつものであって、このような単純計算どおりに1人あたりの居住面積が落ちつく保障は大きいとはいえない。しかし、無条件で岡野氏らの縄文時代のデータを借用するよりは根拠がない訳ではなく、また、これに替わるべき方法がないこともあって、この数値を用いることにした。

(4) 奈良・平安時代における住居廃絶時のカマド破壊について

本遺跡の奈良・平安時代(第IV期～第VII期)の住居址にみられるカマドの大部分が、住居廃絶時に破壊されているものであることは、すでに述べたとおりである。後世の擾乱等によって、カマドのあり方が捉えられないものを除くと、100%に近い割合でカマドが破壊されているといっても過言ではないだろう。ここでいう破壊とは、あくまで人為によるものであり、住居廃絶に伴うカマドの自然崩壊とは当然意味が異なる。そこに人為が介在していたことは、カマドの構材である軽石のいくつかが破壊後整然と一カ所にまとめて置かれていたり、カマドの位置からかなり遊離した場所から袖石等が検出されるという状況において明らかであろう。

さて、住居廃絶時におけるカマドの破壊とは、いったいいかなる意味をもつものであったのだろうか。当然、その行為が恣意的なものであったとは考えられまい。その行為のもつ意味とは、おおよそ次の二者に集約されようか。

① カマドの破壊行為とは、祭祀的な意味合いをもつ。

② カマドを破壊し、その構材(袖石・支脚石等)を新たなカマドに再利用する。

この二者のうち、殊に後者の②は、その意味合いが薄いと思われる。なぜなら、実際、カマド破壊の後にも良好な袖石等が住居址内に置き去りにされている場合も多くみられるからである。多くのカマドの構材となっている軽石は、浅間山起源のもので、在地において容易に入手でき、また加工も簡単なこともあって、再利用の効用もさほど大きいとは言えない。

ここに浮かび上がってくるのが、カマド破壊行為のもつ祭祀的な意味合いである。

これに関連して、桐原健氏のきわめて興味深い指摘が思い起こされる(桐原 1977・1981・1982)。すなわち桐原氏は、カマド支脚石には雷神・宅神が憑っており、その支脚は転居に伴って抜去され、新しい家のカマドに移されたと推論するのである。雷神がとりもなおさず宅神であり、その信仰が庶民にもゆきわたっていたことについては、「今夜家神件雷神来坊門、……」(明月記)・「即如庶人宅神祭也」(神祇令夏季月次祭義解)の記載をあげ説明している。また、桐原氏は、カマド信仰祭祀は当初渡来人系氏族の間にのみ沈潜したとも推察している。

一方、寺沢知子氏の指摘(寺沢 1986)も見逃せない。寺沢氏は「カマド祭祀はそれ独自の新

しい祭具と祭祀形態を備えていたというより、「住居廃棄」と一体化した祭祀として機能していた場合が多い。——中略——カマド祭祀は各住居の個別祭祀のように考えられがちであるが、集落全体の意図をうけて実施されていた可能性が強い。」(傍点筆者)と述べている。寺沢氏がふれるのは主に古墳時代のカマド祭祀についてであるが、その見解は十分傾聴に値しよう。

前田遺跡においては、桐原氏のいわれる支脚石の抜去とはやや行為が異なるが、住居廃絶時にカマドを破壊するという祭祀行為が、集落全体におよんでなされていたものと推察される。それは、8世紀の初め頃から9世紀に至る各期を通じて認められるのもである。そのカマドの破壊は、一部のみであるか全体であるかという個々の差はあるようであるが、破壊するという意味においては変わりのないものであったのだろう。中には、破壊後にカマドの構材をその場所に整然と置いてゆく例もみられる。また、H-86号住居址(第I期)のカマドからは、手捏土器も検出されており、祭祀の一端が窺える。

いずれにしても、本遺跡の奈良・平安時代における住居のカマドの破壊を伴う祭祀とは、住居廃絶により、家宅の神を古い家から送り出すような意味をもつものであったのだろうか。

ちなみに、6世紀初頭に位置付けられるH-63号住居址のカマド中からも、鉢形の手捏土器が検出されている。この住居址は、本地域にカマドが登場してくる初期段階のもので、カマドと炉が併存する住居址でもある。本地域においてはカマド登場当初から、カマド祭祀がなされていたことを窺わせている。

6 前田遺跡における古代集落の性格とその歴史的背景

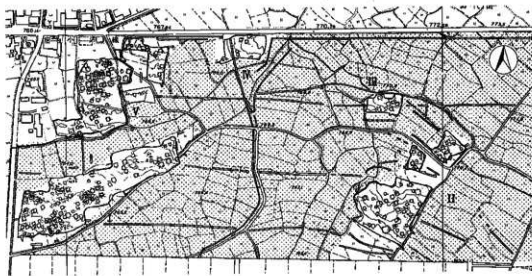
これまで、前田遺跡の特質について多岐にわたって論じてきた。最後にその総括として、前田遺跡の古代集落の性格について本地域の歴史的背景をふまえながら考えてみよう。

(1) 古墳時代中期 (前田遺跡第Ⅰ期・第Ⅱ期)

本遺跡において検出された古墳時代中期相当の集落は、2時期に区分され、第Ⅰ期は5世紀第Ⅳ四半紀中心、第Ⅱ期は6世紀初頭の年代が与えられた。

双方の集落は、竪穴住居址5軒・集落構成員数推定30数名程度の様相をみせるもので、土器様相の連続性から継続して営まれているものであることが捉えられた。

ここにおいて認められた竪穴住居址5軒に居住する人々のまとまりは、かつて近藤義郎氏や(近藤 1959)、和島・金井塚岡氏(和島・金井塚 1966)の指摘された経営・消費単位としての「単位集団」とみることができよう。それでは、本単位集団における経営・消費とは何だったのだろうか。ある意味での特殊性をみせていない本単位集団の経営とは、水田経営とみておくのが妥当ではあるまいか。その水田可耕地としては、本集落の西にひろがる低地がまず挙げられよう(第487図)、本来ここに水田が存在していたかはどうかについては、来年度に結果の出されるプラントオーバー分析によって明らかになってこよう。いずれにしても水田は集落からそう遠くないところにあつたと考えられる。



第487図 前田遺跡の集落と低地(網点)

ところで、本地域の気候が冷涼なことは前述したが、冷涼な気候は水田耕作の大きな障害となつたであろう。事実、稲作技術の未発達な弥生・古墳時代前期の遺跡が本地域にまったく認められないことは、これを如実に物語っていると見える。本遺跡第Ⅰ期の5世紀末頃が、本地域と比べ温暖な佐久の平野部より、本地域に水田が拡大してくる時期とみることができ、それに伴って人々の居住もなされるようになったのであろう。

さて、本第Ⅱ期になると、住居内の火爨としてカマドが登場するという画期的な様相が窺えた。カマドの登場については、在地において多元的に発生するという見方と(高橋 1975)、須恵器窯とともに大陸から日本にもたらされたという見解(大川 1955)がある。近年では高橋氏も自説を撤回し(高橋 1986)、カマドは大陸からもたらされたものであるという大方の見方が固まってきた。そしてその初見は、5世紀初頭に求められるという(高橋 前掲)。

6世紀初頭の本第Ⅱ期のカマドは、その初見より1世紀後出するものではあるが、現段階では佐久地方で最も古いものであり、佐久地方でのカマド出現期の様相を探るうえでの好資料となるものであろう。

なお、集落におけるカマドの出現が消費生活の自立化を示すものであり、石製模造品の保有が祭祀権の掌握を意味すると考えるとき、そこにおいて家父長的世帯共同体の自律化が窺えるとする見解(高橋 1971)がある。また、群馬県黒井峰遺跡では、6世紀後半の集落においての宅地の所有が明らかにされ(石井 1986)、家父長制評価の一要因ともなる宅地所有が考古学的には比較的古い時期から認められることを示している。かかる成果をふまえるなら、本遺跡に認められる単位集団が家父長的世帯共同体として自立しているものかどうかを当然検討してみなければならないであろう。しかし、文献史学の側では、家父長制世帯共同体の自立は少なくとも7世紀以降であるという見方が大勢で、鬼頭氏によるなら8世紀段階にあってもその自立には到達していないという(鬼頭 1977)。したがって、このような問題も残るので、本単位集団における家父長制のあり方等についての言及は、別の機会にゆずることとしよう。

(2) 古墳時代後期 (前田遺跡第Ⅲ期)

前田遺跡第Ⅲ期に位置付けられるのは、第Ⅱ区において検出された竪穴住居址1軒のみである。

6世紀末葉から7世紀初頭と考えられるこの竪穴住居址は、時間的にも空間的にも隔絶されるもので、3.5人程度の居住がなされていたものと推察された。単位集団として認識された前時期の集落とは明らかにその様相を異にするものである。それはいわば、後の平安時代にみられる「離れ国分」(中山 1976)と呼ばれるような単独住居と類似するようと思われる。「離れ国分」の性格としては、鋤物師屋・木地屋といった特殊作業小屋、農民の季節的な作業小屋、浮浪人や逃亡民の住居等々が考えられている。

いずれにしても、この、単独住居の構成員のみにおいては、殊に水田経営を行うことは不可能と考えられる。その水利ひとつをとってみても、共同体的な協業なしには実現し得ないからである。ここにおいて具体的には表現できないが、その特殊性を想定しておくことに無理はあるまい。

(3) 奈良・平安時代 (前田遺跡第IV期～第VII期)

奈良時代を中心とした8世紀代から9世紀初頭にかかる時代が、本遺跡のいわば最盛期となることは繰り返し述べるまでもないであろう。この時代を、さらに4時期(第IV期～第VII期)に区分し、各時期の特質と集落の様相をこれまで明らかにしてきた。

本遺跡においては、8世紀代に入ると突如として集落が形成され、それが一世紀あまり継続された後、忽然と姿を消してしまうというきわめて特徴的な様相が浮かび上がってきた。それとともに、その集落においては竪穴住居のみが存在するのではなく当初から掘立柱建物が顕在化しているという興味深い現象も把握された。殊に第I区においては、各時期において竪穴住居と掘立柱建物かほぼ同数ずつ存在しているという事実が認められている。ちなみに、掘立柱建物では、住居と考えられるものが主体をなしたが、総柱の稲倉も確実に認められ、その他納屋等の客体的施設の存在も想定できた。

ここで、本遺跡の第I区の集落を取り上げてみた場合、前時期を通じてその構造が一定化している訳ではないことに気づく。竪穴住居と掘立柱建物の数を問題にするなら、第IV期から第VI期の3時期を通じてはその数が一定的で増減の少ない傾向が窺えるが、第VII期になって双方とも倍加するという大きな変化が認められる。しかし一方では、竪穴住居についてののみたならば、その軒数は倍加しても、総床面積自体は1.5倍程度にとどまっていることも注意された。その背景には、大形竪穴住居の消滅と小形竪穴住居の増加という二つの現象が隠されていたのである。

ところで、奈良時代末から平安時代に及ぶにつれ、竪穴住居の小形化という現象がみられることが以前から指摘されている。本遺跡の第VII期の様相は、まさにその竪穴住居の小形化現象のなかで捉えられるものであろう。これまでその原因としては、律令的取奪による一般民衆の貧困化(和島・金井塚 1966)等が考えられていたが、真の原因とは他にあるように思われる。すなわち、「居住の分散化」ではないだろうかということである。本第VII期集落における小形竪穴住居並増加の意味も、そこに求められるのではなからうか。

そして、このような「居住の分散化」は、居住形態の分化(例えば釜屋と寝室の分離)を意味するのだろうか。あるいは、核家族化を意味するのか。また、当時の家父長制世帯共同体の自立化なかであって「居住の分散化」がどのように位置付けられるかは興味深い。⁽³⁾

さて、本遺跡の第I区集落にあっては掘立柱建物と竪穴住居がほぼ同数存在していることは前

述した。一方、第Ⅱ区集落にあっては竪穴住居が主体的にみられ、掘立柱建物が付属するというあり方であった。中田英氏によれば、神奈川県内の当該期の集落には、掘立柱建物が竪穴住居と肩を並べるほど多数検出される「鷲尾型」の集落と、竪穴住居のなかに掘立柱建物が散見される「上浜田型」の集落が存在するという(中田 1983)。中田氏の言を借りるなら、本第Ⅰ区集落は「鷲尾型」に、本第Ⅱ区集落は「上浜田型」にそれぞれ比定されよう。隣接する集落においてこのような二者の構造が認められる事実は何を意味するのであろう。それは集落間のある種の格差を物語っているものとみられる。竪穴住居に比べ掘立柱建物の住宅は一步進んだ居住施設であり、集落内へのその取り込み方が集落の進歩度を測るバロメーターともなる。したがって「鷲尾型」の第Ⅰ区集落より進歩的な新しい形の集落で、「上浜田型」の第Ⅱ区集落は⁽⁴⁾いわば後進的な在地色の濃い集落ともみなせよう。

ところで、本集落が8世紀になって突如として形成され約一世紀続いた後、忽然とその姿を消してしまうということについては冒頭で述べた。かつて直木孝次郎氏は、古代集落の一類型としての「計画村落」の存在性を指摘されたことがある(直木 1965)。それは、「当該村落の外にある力——公権力——によって計画された村」であるという。その「計画村落」の存在を支持した高橋一夫氏は(高橋 1979)、その具体例として、栃木県井頭遺跡(栃木県教育委員会 1975)、千葉県村上遺跡(房総考古資料刊行会 1974)、千葉県中馬場遺跡(柏市教育委員会 1972)、千葉県山田水呑遺跡(山田水呑遺跡調査会 1977)等を挙げている。そして、それらの集落はいずれもある一定の時期に突如として出現し、ある一定の時期に突如として消滅してゆくような大集落であるという。本集落はまさしくその「計画村落」と同様な様相を示しているものではないかと考えられる⁽⁶⁾のである。

それでは、本集落を「計画村落」であると考えた場合、それはいったいいかなる「計画」に基づいて施設されたものなのであろうか。ここにおいてまず問題としなければならないのが、本集落をとりまく歴史的環境である。

律令期にあっては、本鎗師屋遺跡群の北隣には『延喜式』記載の御牧「塩野牧」^{しほの}が展開していたものと思われる。また、官道として整備された東山道がこの付近を通過していたことも予想され、その駅家の一つである「長倉駅家」^{ながくら}が本遺跡の近くに施設されたという説もある(一志 1957)。このような歴史環境と強い結びつきを示す発見が、隣接する野火付遺跡の調査によってなされた(御代田町教員委員会 1985)。野火付遺跡においては、それら御牧や駅家の馬ではないかと考えられる(堀 1986a)平安時代初頭の埋葬馬5頭が検出されたのである。本集落においても、F-36やH-48・H-66から馬歯が検出されており、馬とのかかわり合いが彷彿させられる。

ちなみに、「塩野牧」には少なくとも100頭程の馬は飼育されていたものとみられ(堀 前掲)、「長倉駅」には15匹の駅馬が置かれたとされている(『延喜式』)。既述令によれば、牧には牧長一

人と牧帳一人がおかれ、馬牛100頭の一群には牧子二人があてられたとみえる。この他飼丁・足工・騎士などがいたらしい。一方、駅では、駅馬一匹の飼育につき駅戸のうちの中戸一戸があてられたとみえる。単純に考えれば、駅馬15頭の飼育には中戸15があたったことになる。なお、『続日本紀』の文武天皇四年(700年)三月丙寅の条には、「令諸国定牧地放牛馬」とみえ、官牧成立の目安を8世紀初頭におくことができる。

本前田遺跡に居住した人々は、そうした「長倉駅」あるいは「塩野牧」の経営に係わった人々ではなかったか。つまり駅経営や牧経営にあたって「計画」された村落が、本集落ではなかったかと考えられるのである。本集落において検出された円面硯や巡方は、その中の長的な人物の所持品だったことも想定に難くなく、また、多量に認められた畿内系暗文土器は、本集落と中央との結びつきを考えさせる。なお、計画村落の建設には渡来人の労力によるところが大きかったとされる(直木 前掲)。本集落において普遍的に認められたカマド祭祀も、当初は渡来人系氏族間に沈潜した信仰であるともいわれている(桐原 1977)。このように、本集落を残した人々のなかには渡来人の影をも見出せるのではなかろうか。

さて、本集落を残した人々は駅や牧経営に深く関わっていたとしながらも、一方では当然稲作に携わっていたとみなければならぬ。本集落から検出された稲倉と考えられる建物址はその証左といえようし、隣接する野火付遺跡では稲作を仄めかす「大田」という墨書が坏に認められている。また、駅や牧経営にあてられる駅田や牧田の存在も当然考えられよう。しかしいずれにしても、当時の人々の食生活を満たし得る稲作が当然どこかで行われていたと考えなければならず、仮に第IV期・第I区の100名程度の集落をのみ取り上げて単純に計算してみても、その年間食料を満たし得る約230000㎡にもおよぶ水田(8)がいずれかに存在していなければおかしことになる。その水田の存在候補地としては、遺跡中央の低地がまず挙げられようが(第487図)、本来ここに水田があったものかどうかについては、米年度に結果の出されるプラントオナール分析によって明らかとなることを期待したい。

なお、ここにおいては、本集落が駅経営に係わるものなのか、あるいは牧経営に係わるものなのかという判断を下し得る直接的な証拠を持ち得なかった。そうした問題の解決の糸口が、今後継続されてゆく鑄師屋遺跡群の調査のなかで見出し得れば幸いである。

註

- (1) また、第VII期となって竪穴住居址と掘立柱建物址の占地が近接し、両者の結びつきが強まると考えられるような様相も窺えた。
- (2) 他方で、竪穴住居址の増加の原因が人口の大幅増加にあるということも考えられよう。その場合それは自然的人口増加ではなく、移住による人為的人口増加と考えられる。もし仮に自然的人口増加(集落内での出産に基づく)を考えるなら、当該期の当初の第IV期から徐々に人口増加が認められるような現象(例えば竪穴住居址の軒数が徐々に増すような現象)がみられな

ればならないからである。しかしそのような現象は認められない。

一方、その集団移住による人口増加の可能性も薄いとみられる。その理由としては、壱穴住居址・掘立柱建物址が建て込みすぎていることが挙げられよう。新しい人々の居住がなされるとすれば、よほど狭い土地が特別の理由のない限りその占地にゆとりをもつのが常識だからである。

- (3) 前述したように鬼頭氏は、8世紀においてなお家父長的世帯共同体の自立には到達していないものと考えられている（鬼頭 1977）。

また義江明子氏も、家父長制家族の成立を9世紀以降に求めている（義江 1986）。

一般的には、いわゆる郷戸縦制説に基づくなら、家父長制の成立は遅く考えられようし、実態説に基づくならその成立を早く求めることができよう。

- (4) 掘立柱建物の充実度をもってするならば、佐久市分の前田遺跡にみる掘立柱建物の充実度はかなりのもので、ある意味でここが集落間の中核であったとも推察される。
- (5) 直木孝次郎氏は、計画村落は水田開発に強く結びついたものであると考えられている。
- (6) 計画村落の存在性については、いくつかの疑義が出されている（伊丹 1986、他）。
- (7) 榎原健氏の御教示による。
- (8) 100名の年間食料を満たし得る水田の面積230,000㎡とは次のように算出した。

かつて滝川政次郎氏が算出した（滝川 1944）標準戸戸相当の10名の年間食料が稲627.8束であるとする、100名の年間食料とは稲6278束となる。また、滝川氏によると当時の水田の一町あたりの平均的収穫は314束強とされている。したがって稲6278束を収穫する水田のひろがりとは、約20町ということになる。当時の1町は、現在の11400㎡にあたるので、約20町の水田とは現在の228000㎡の面積となる。

引用・参考文献

- 【ア】阿部義平 1971 「クロコ技術の復元」(『考古学研究』18-2)
 阿部義平 1976 「鈔巻と官位制について」(『東北考古学の諸問題』)
 天野 努・他 1974 『八千代市村上遺跡群』
 荒木 実 1978 「東山218号窟の古式須恵器について」(『古代人』33)
- 【イ】伊丹 徹 1985 「奈良、平安時代相模国の掘立柱建物」(『神奈川考古』20)
 伊丹 徹 1986 「奈良平安時代相模国の集落遺跡における大形住居址と掘立柱建物」(『神奈川考古同人会10周年記念論集』)
 石井克己 1986 「古墳時代後期の集落跡」(『季刊 考古学』16)
 一志茂樹 1957 『御代田の古史を探る』
 井上尚明 1985 「古代集落における掘立柱建物址について」(『土曜考古』10)
 井上尤貞・他 1976 『律令』 日本思想大系3
 岩崎卓也 1982 「城の内遺跡・灰塚遺跡・生仁遺跡・馬口遺跡」(『長野県史』考古資料編1-2)
 岩崎卓也 1986 「古墳時代の社会」 追求の視角 (『季刊 考古学』)
- 【オ】大川 清 1955 『カマド小考』(『落合』)
 小笠原好彦 1982 「東日本における掘立柱建物集落の展開」(『考古学論叢』)
 小川貴司 1976 「回転承切り技法の展開」(『考古学研究』26-1)
- 【カ】柏市教育委員会 1976 『中馬場遺跡第三次発掘調査報告書』
 金井汲次 1971 「新井大ロフ遺跡」(『長野県考古学会誌』10)
 金井汲次 1982 「新井大ロフ遺跡」(『長野県史』考古資料編1-2)
 神奈川考古同人会 1983 『奈良・平安時代の諸問題』
- 【キ】菊池清人 1985 『佐久の交通史』
 鬼頭清明 1977 「八世紀における社会構成史的特質」(『日本史研究』187)
 鬼頭清明 1985 『古代の村』 岩波書店
 桐原 健 1977 「古代の東国における鬼信仰の一側面」(『国学院雑誌』78-9)
 桐原 健 1981 「かまどといろり」(『月刊百科』)
 桐原 健 1982 「神座としての竈」(『伊那路』)
- 【ク】工楽善通 1977 「竪穴住居と高床住居」(『日本の建築』1 古代1)
 黒坂勝美 1985 『延喜式』 吉川弘文館
- 【コ】河野喜映 1983 「3. 奈良・平安時代の鶴見川流域」(『奈良・平安時代の諸問題』)
 見玉幸多 1982 「古代の官牧について」(『論叢 房総史研究』)
 古墳時代土器研究会 1984 「古墳時代土器の研究」
 駒見和夫 1984 「古代における炉とカマド」(『信濃』36-4)
 小諸市教育委員会 1981 『五ヶ城遺跡』
 小諸市教育委員会 1983 『曾根城遺跡』
 小諸市教育委員会 1983 『野火付古墳』
 小諸市教育委員会 1984 『久保田遺跡』
 近藤義郎 1959 「共同体と単位集団」(『考古学研究』6-1)
- 【ク】酒井清治 1981 「房総における須恵器生産の予察」(『史館』13)
 坂崎秀一 1982 「八重原原跡」(『長野県史』考古資料編1-2)
 佐久市教育委員会 1972 『下前田原古墳群発掘調査報告書』

- 佐久市教育委員会 1976 『市道』
- 佐久市教育委員会 1984 『若宮遺跡』
- 佐久市教育委員会 1985 『鉢形屋遺跡』
- 佐久歴史文化財調査センター 1986 『西裏・竹田峯』
- 笹沢 浩 1976 『ウ 奈良・平安時代の土器について』(『長野県中央遺産文化財包蔵地発掘調査報告書』諏訪市その4)
- 笹沢 浩 1982 『駒沢新町遺跡』(『長野県史』考古資料編1~2)
- 笹森健一・他 1978 『埼玉県上福岡市川崎遺跡(第3次)、長宮遺跡発掘調査報告書』
- 佐原 眞 1979 『手から道具へ石から鉄へ』(『図説日本文化の歴史』1)
- 【シ】白倉盛男 1985 『III 層序』(『野火付遺跡』)
- 【タ】高島忠平 1971 『平城京東三坊大路東側溝出土の地軸陶器』(『考古学研究』57-1)
- 高橋一夫 1971 『石製模造品出土の住居址とその性格』(『考古学研究』18-3)
- 高橋一夫 1975 『和泉・鬼高期の諸問題』(『原始古代研究』1)
- 高橋一夫 1979 『報告1 計画村落について』(『古代を考える』20)
- 高橋一夫 1986 『生活遺構・遺物の変化の意味するもの』(『季刊 考古学』)
- 滝川政次郎 1944 『鎌倉時代の農民生活』
- 滝沢 亮 1985 『古代東国における鉄製紡錘車の研究』(『物質文化』44)
- 竹中工務店仮設道路用地内遺跡調査会 1985 『すぐじ山下遺跡』
- 田名綱宏 1985 『東山道』(『信濃路』47)
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』
- 丹野雅人 1985 『N o 769遺跡』(『多摩ニュータウン遺跡—昭和57年度』)
- 【ツ】堤 隆 1985 『平安時代の埋葬場について』(『野火付遺跡』)
- 堤 隆 1986 『野火付遺跡における平安時代の埋葬場をめぐって』(『信濃』38-4)
- 鶴岡正昭 1985 『武藏国における鉄鐙の型式分類とその編年の予察』(『法政考古』10)
- 【テ】寺沢知子 1986 『祭祀の変化と民衆』(『季刊 考古学』16)
- 【ト】東洋大学未来考古学研究会 1982 『シンボジウム 釜状坏』
- 初木県教育委員会 1975 『井頭』
- 富山 博 1974 『正倉建築の構造と密遷』(『日本建築学会論文報告書』216)
- 【ナ】直木孝次郎 1965 『古代国家と村落』(『ヒストリア』42)
- 永井規男 1985 『秋田の埋没家屋』(『家』日本古代文化の探究)
- 長岡史起 1986 『遺物の出土位置からみた竪穴住居の居住空間について』(『神奈川考古同人会10周年記念論集』)
- 中田 英 1981 『古代東国集落における掘立柱建物の一考察』(『神奈川考古』12)
- 中田 英 1986 『古代東国の一集落における一軒の住居址の性格について』(『神奈川考古同人会10周年記念論集』)
- 中田 英・伊丹 徹・他 1983 『向原遺跡』
- 中村 浩 1980 『5. 須恵器』
- 中山吉秀 1976 『離れ国分考』(『古代』61)
- 【ニ】西 弘海 1971 『土器様式の成立とその背景』(『考古学論考』)
- 西山克己 1984 『東国出土の暗文を有する土器(上)』(『史録』17)
- 西山克己 1985 『東国出土の暗文を有する土器(下)』(『史録』18)

- 【ハ】花岡 弘 1976 「第2号住居址・第3号竪穴状遺構」(『市道』)
 林部 均 1986 「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」(『考古学雑誌』72-1)
 林 幸彦 1982 「石附製炭窯跡」(『長野県史』考古資料編1-2)
 原島礼二 1965 「七世紀における農民経営の変質」(『歴史評論』117・179・181)
- 【ヒ】比田井克仁 1985 「7世紀における多摩地方の土器様相」(『研究論集』3)
 比田井克仁・他 1982 「多摩ニュータウン地域の古代(i)」(『研究論集I』) 東京都埋蔵文化財センター
- 【フ】福島邦男 1986 「御牧ヶ原・八重原における古窯址研究の推移」(『長野県考古学会誌』No.53)
 福田健司 1983 「II 南武蔵地域」(『シンポジウム 奈良・平安時代の諸問題』)
- 【マ】松村恵司 1977 「土師質須恵器環形土器の分類」(『山田水呑遺跡』)
 松村恵司 1983 「古代稲倉をめぐる諸問題」(『文化財論叢』)
- 【ミ】宮本長二郎 1986 「5 住居」(『日本考古学』4)
 御代田町教育委員会 1975 「馬瀬口下原古墳」
 御代田町教育委員会 1985 「野火付遺跡」
 御代田町教育委員会 1985 「大沼遺跡」
 御代田町教育委員会 1985 「宮平遺跡」
- 【ム】村山好文 1982 「房総における和泉式土器様相」(『日本考古学研究所集報』V)
- 【モ】望月教育委員会 1986 「岩清水遺跡」
- 【ヤ】山口直樹 1977 「III. 出土鉄製の集成と考察」(『山田水呑遺跡』)
 山田水呑遺跡調査団 1977 「山田水呑遺跡」
- 【ヨ】義江明子 1986 「古墳時代の社会構造」(『季刊 考古学』)
 吉岡康暢 1983 「第二章 奈良平安時代の土器編年」(『東大寺横江庄遺跡』)
 吉田 晶 1980 「日本古代村落史序説」塙書房
 吉田 孝 1976 「律令制と村落」(『日本歴史』3)
- 【ワ】和島誠一・金井塚良一 1966 「2 集落と共同体」(『日本の考古学』V)
 渡辺泰伸 1976 「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告」(『陸奥国官窯群』II)

前田遺跡出土材の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) 試料

試料は1点で、H-32号住居址P₄から検出された主柱とされる材である。

(2) 方法

試料は乾燥・収縮し、表面には無数の割れ目が入っていた。これを水で煮て軟化させたのち、その一部を切出し、剃刀の刃を用いて木口・柀目・板目三面の切片を作成、ガム・クロラル(Gum Chloral)で封入、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版(図版百八十五)も作成した。一方、残りの試料はアルコールを用いて脱水和し、再び乾燥させた。

(3) 結果 (図版百八十五)

試料は、クリ(*Castanea crenata*)と同定された。その主な解剖学的特徴は次のようなものである。

環孔材で孔圈部は1~2列、孔圈外で急激に管径を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形~楕円形、小道管は単独および2~3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った楕円形~多角形、ともに管壁は薄い。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽されるブナ科の落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐久性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、積木や海苔組染などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ、果実は食用となる。各地の遺跡からの出土例の多い樹種の一つである。強度・耐久性に優れることから、住居主柱として用いるには適した材といえる。

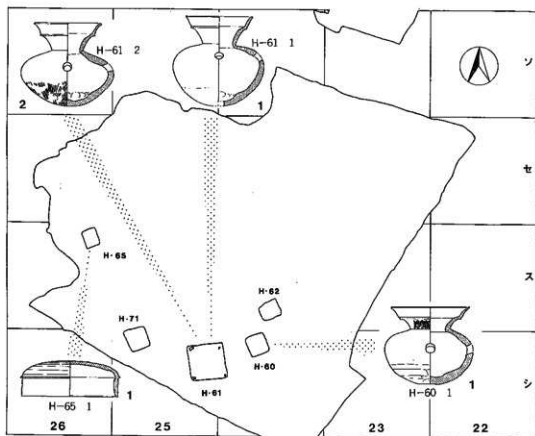
前田遺跡の初期須恵器について

木下 亘

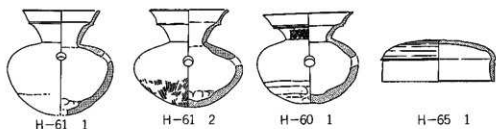
前田遺跡は、古墳時代から平安時代に及ぶ大規模な集落遺跡である。今回の発掘調査に於いて、古墳時代の住居址3軒より初期須恵器が検出されている（第1図）。

H-60号住居址より甕1点、H-61号住居址より甕2点、H-65号住居址より坏蓋1点の合計4点の須恵器である。これらの須恵器は、いずれも古式の様相を示し、初期須恵器の範疇でとらえられるものである。

従来より当地域では、初期須恵器の出土は多いとは言えず、この点からも前田遺跡の初期須恵器は、当該地域への須恵器導入時期と考える上で、一つの重要な資料を呈示したと言えよう。又



第1図 前田遺跡第一期集落と初期須恵器の分布



第2図 前田遺跡出土初期須恵器

供伴土師器が多い点からも好資料である。

まず、各住居址出土の須恵器について、その諸特徴を観察した上で、所属型式を明らかにしていきたいと思う。

H-60号住居址からは、1の壺1点が検出されている。口径9.9cm、器高9.8cmを各々はかるほぼ完形品である。頸部は短く、又大きく外反している。その基部は太く作られている。口縁部は、頸部より更に屈曲、外反するが、それを画する稜線は、やや鋭さに欠けている。口縁端部には凹線が巡り段をなしている。頸部には、単位14本ほどの櫛指波状文が一条施文されている。体部は、その中央上位に最大径をもつ扁球形を呈し、やや上方から円孔を穿っている。体部には文様帯はみられない。全体に器壁が厚く作られている。

手法面からみると、底部口外はヨコナデ調整によっている。底部は、弱いヘラケズリによって仕上げられている。

口縁部内外面及び肩部外面、内面底部付近には、自然釉の付着が認められる。色調は内外面共に暗灰色を呈し、焼成は良好、堅緻な仕上がりである。

H-61号住居址では、2点の壺が検出された。

1の壺は、口径8.6cm、器高約11.5cmをはかるものである。頸部はその基部が細くしまっており、そこからハの字状に外反する。頸部と口縁部を界する稜線は鋭く作られている。口縁端部は水平面をなし段をなさない。体部は肩が良くなり、その最大径は上位3分の1に存在する。底部は尖り気味に作られている。肩部には上方から比較的径の小さい円孔が穿たれている。

手法面からみると、口縁部、体部共に丁寧なヨコナデ調整によっている。底部は入念なナデ調整が行われているが、成形時の粘土巻き上げの痕跡を認める事が出来る。又、肩部内面には、頸部接合時の指頸痕跡を顕著に残している。

口頸部内面及び肩部には、深緑色を呈する自然釉を厚く被っている。色調は内外面共に黒色～褐色を呈し、断面はアズキ色である。焼成は良好で堅緻な仕上がりである。

もう1点の壺2は、口径8.8cm、器高10.6cmをはかるほぼ完形品である。細くしまった頸基部から頸部は大きく外反する。頸部と口縁部を画する稜は鋭く突出している。口縁部は頸部に屈曲し、

緩やかに外方へのびる。口縁端部は、平坦に仕上げられている。口頸部の形態は、端部を除くと1の甕と近似している。体部はあまり肩の張らない扁球形を呈し、その最大径は中央に位置している。中央やや上方に円孔が穿たれている。

手法面では、底部以外はヨコナデ調整である。底部外面は細くこまかい平行叩きがなされている。特に中央部分では、叩き目が交叉し、一部格子状を呈する部分も認められる。底部内面には叩き成形時のアテ具痕跡を明瞭に残している。全体に器壁は厚く作られている。

色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。又、胎土に微砂粒を多く含んでいる。

H-65号住居址からは、1の坏蓋1点が検出された。口径12.5cm、器高4.6cmをはかる完形品である。口縁部は垂直に立ち上がり、口縁部と天井部を界する稜は鋭く突出している。口縁端部は平坦に仕上げられている。

手法上からみると、天井部は回転ヘラケズリ、他はヨコナデ仕上げである。回転ヘラケズリは、その削りの幅も狭く入念になされており特徴的である。

色調は内外面共に暗灰紫色を呈し、焼成はやや悪く軟質である。胎土は精良で、砂粒はほとんどみられない。

以上、各住居址出土の須恵器について、形態・手法上の特徴を記述してきた。

次にこれらの観察から、各須恵器の編年的な位置付けを行っておきたい。

H-60号住居址出土の1の甕は、頸基部も若干太くなりつつあり、頸部も短く大きく外反している。口縁端部も段をなしており、新しい様相を示している。以上の諸点からこの甕は定型化以後のものと考えられ、TK208型式に対比することが出来よう。

H-61号住居址の1の甕は、頸基部が細くしまり、頸部も高さを有している。又、体部は肩が良くはり、尖り底を呈する特徴的な形態を有している。又、手法面でも底部まで入念にヨコナデ調整がなされている。これらの諸点からTK73型式の特徴を良く示していると言えよう。もう1点の2の甕は、体部最大径が中位にあり、1の甕よりやや新しい様相を持っている。しかし全体的には定型以前の形態を示すと言え、TK216型式に対比するのが妥当であろう。

H-65号住居址の坏蓋は、天井部にあまり丸味を持っておらず、偏平な感を受ける。稜線は鋭く突出し、口縁端部は僅かに丸味を有するが、ほぼ平坦に仕上げられている。天上部に施されるヘラケズリもその幅が狭く入念になされている。以上からこの坏蓋はTK216型式でもやや新しい段階に位置付けられると思われる。

これらをまとめてみると、

H-60号住居址 甕 1——TK208型式

H-61号住居址 甕 1——TK73型式

甕 2——TK216型式

H-65号住居址 坏蓋 1——TK216型式



H-28号住居址出土 坏 (1:4)
(佐久市教育委員会 1981)

第3図 佐久市舞台場遺跡

初期須恵器

この様に H-61号住居址のものが最古式に、H-60号住居址のものが一番新しく位置付けられよう。

次に当遺跡周辺地域の初期須恵器についても概観しておきたい。

隣接する佐久市域に於いても近年、僅かながら当該期の資料が蓄積されつつある。

佐久市舞台場遺跡 H-25号住居址から、初期須恵器の坏身と考えられる小破片が検出されている。⁽¹⁾口縁部を欠失しているため、全体の形態を明確にし難いが、恐らく釜形と称される坏身に近似するものと思われる。受部直下に櫛描の稚拙な波状文を施し、底部は不定方向のナデ調整によって仕上げられている。又、この土器は還元焼成されておらず、生焼の状態である。これらの特徴から TK73型式に対比しうると考える。同様の形態を呈し、受部下に櫛描波状文を巡らす例は、尾張地域で比較的多く認められる。

次に佐久市大字前山所在の中遺跡 H-3号住居址出土の甕があげられる。口径10.3cm、器高11.3cmをはかる完形品である。頸部はその基部がやや太く、口縁部に向かって大きく外反している。口縁部には櫛描波状文が施される。この甕には TK216型式をあてることが出来る。

古墳出土のものとしては、佐久市大字岩村田所在の北西久保遺跡14号墳周溝内より甕1点が検出されている。口径9.2cm、器高約10.5cmほどをはかるものである。口縁部は細くしまった頸基部より外方へ大きく広がる。頸部には櫛描波状文が施され、頸部と口縁部を界する稜線は鋭くつくられている。口縁端部は僅かに凹面をなしている。体部は中央やや上位に最大径をもち、肩部に凹線が一条巡っている。その直下には櫛描波状文が1条施される。手法上では、底部付近を丁寧に手持ヘラケズリで仕上げている点が注目出来る。この甕は、明らかに定型化と認めることが出来るがその調整手法については、手持ヘラケズリという古い技法が用いられており、注意すべき遺物の一つである。

最後にやや時期は降るものの、佐久市大井城遺跡 H-2号住居址より、まとまった資料が検出されている。坏蓋4点、坏身1点である。この内坏蓋3点と坏身は、施される回転ヘラケズリの範囲も狭くなり、口縁端部も段はなすものの鋭さは認められない。口径も11cmほどで小形である。これらからみて TK47型式に位置付けられるであろう。もう1点の坏蓋は、他に比較して、稜も鋭く突出しており、天井部のヘラケズリも入念である。口縁部は垂直に立ち上がっている。口縁部には丸味をもっているが、全体としては TK208型式に対応すると思われる。

以上、周辺地域の初期須恵器も含めてその概略を記述して来た。

終わりに、前述の須恵器について若干の検討を行っておきたい。

まず、これら須恵器の生産地について考えてみたい。現在、当該地域では、この段階に概当する窯址は未発見である。更に集落などに於いても出土数は少なく、その特徴の抽出など十分な検討はなしえない。しかしながら、その全てが陶器窯から搬入されたとは、一概に言い切れない面も存在している。例えば、前述の佐久市北西久保遺跡14号墳周溝出土の甕は、定型化した器形に

手持ヘラケズリという、TK73型式に特徴的に認められる古い技法が使用されている。この様に形態と調整技法上の特徴に若干のズレが認められる点は、その生産地を考える上で一つの重要な視点となろう。又、舞台場遺跡出土の坏身の様に、尾張地方の影響を考えうる資料も存在している。

長野県内で、初期須恵器生産の可能性を考えうる地域として、善光寺平域を挙げる事が出来る。長野市信更町松ノ山窯址は、6世紀初頭、TK47型式に対比することが出来、この段階では確実に須恵器生産を確認することが出来る。更に周辺の更埴市域では、森將軍塚古墳を始めとして多くの初期須恵器が検出されている。これは土口將軍塚古墳にみられる格子叩き技法の地輪の存在とも呼応して、初期須恵器生産の可能性を考えうる地域である。

須恵器生産、特にその初期の段階は、その地域の古墳の動向と密接に関連し、導入、展開するものと思われる。この面から佐久平域をみた場合、善光寺平域の様に顕著な古墳分布を深めることは出来ない。よって、当地域に、須恵器生産そのものが導入された可能性は低いものと言えよう。

何れにしても、5世紀代の遺跡が比較的稀薄な当地域に、初期須恵器が搬入される背景は、今後、資料の増加を待ち、更に検討されねばならない課題と言えよう。

本文をなすにあたり、前田遺跡の須恵器については、御代田町教育委員会堤隆氏より御教示頂いた。又、佐久市内の資料実見については、佐久市教育委員会林幸彦、羽毛田卓也氏、佐久埋蔵文化財調査センター、高村博文、三石宗一、小山岳夫氏のお世話になった。記して感謝いたします。

註

- (1) 佐久市教育委員会 1981 『舞台場』
- (2) 笹沢浩・原田勝美 1974 「長野県下出土の須恵器(以下)」(『信濃』26-9・11) 信濃史学会
- (3) 岩崎卓也・他 1985 「森將軍塚古墳」(『保存整備事業第4年次発掘調査概報』) 更埴市教育委員会

前田遺跡出土土器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

(1) 胎土分析による産地推定の考え方

土器の素材は粘土である。粘土を1350℃の高温で焼成しても、その化学特性に変動がないことは粘土の焼成実験によって確かめられた。この結果、土器のもつ化学特性は素材粘土のもつ化学特性ということになる。

各地の土器の化学特性がわかれば、古墳や遺跡出土の土器を分析し、その化学特性が何処の土器のそれに対応するかを調べることによって産地を推定することができる。そのためには、各地の土器を分析し、その化学特性を整理しておかなければならない。このような基礎データを得る上に都合のよい土器が須恵器である。何故なら、須恵器を焼成した窯址（生産地）は全国各地で発見されており、そこには多数の須恵器片が埋蔵されていることがわかったからである。これらの須恵器を多数分析すれば、各地の須恵器の化学特性、言い換えれば、各地の粘土の化学特性が知られる。勿論、窯跡出土須恵器には天然物特有のばらつきがある。そのため、1窯跡について1点の須恵器のみの分析では、その窯跡出土須恵器の化学特性を十分には把握できない。通常、1窯跡について、10～30点の須恵器片を分析する。そうすると、全国各地に発見されている数千基の窯跡出土須恵器を分析するためには、少なくとも数万点にのぼる試料の分析が必要である。このように多数の試料の分析を可能にするのはエネルギー分散型蛍光X線分析法のみである。筆者のところでは年間、3000～4000個の試料を分析している。通常、この装置で測定される土器中の含有元素はK、Ca、Fe、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）の5元素である。また、この方法の分析精度はどの元素についても、変動係数にして5～10%程度である。一方、1窯跡出土須恵器を分析すると、変動係数にして20～30%程度ばらつきの普通であり、この研究を遂行する上にこの分析法のもつ精度で十分である。これ以上の精度をもつ分析法を使っても、試料そのものがばらついているので無意味である。

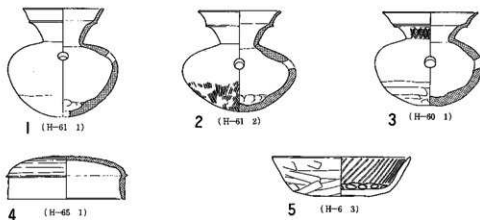
さて、筆者は過去十年間にわたって全国各地の窯跡出土須恵器を分析してきた。この結果、各地の須恵器にばらつき以上に大きな地域差があることが見つけられた。また、同一窯跡群、言い換えれば、同じ地質構造をもつ地域内の窯跡出土須恵器はたとえ、窯の操業年代が奈良時代、平安時代という具合に違っていても、同じ化学特性をもつこともわかった。このことは全国どこ

窯跡群についても成立し、素材粘土は地元産であることを示唆する。もし、素材粘土を現代窯業におけるように遠方から運び込むとすれば、どこかの窯跡群には化学特性の異なる須恵器を出す窯が見つかる筈である。そのような窯はこれまでのところ皆無である。さらに、各地の窯跡出土須恵器のもつ化学特性は窯の後背地を作る岩石の化学特性に支配されていることも明らかにされている。このように、全国各地の窯跡から出土した須恵器の分析データから素材粘土は地元供給であるとする説が有力である。そうすると、仮に、長野県下に5世紀代の未発見の窯跡があるとしても、7、8世紀代の窯跡出土須恵器と同じ化学特性をもった須恵器を出すはずである。また、地質構造、つまり、基盤岩石の化学特性からみて、大阪陶邑産須恵器と同じ化学特性をもつ須恵器は長野県下では製作されていないはずである。したがって、もし、大阪陶邑産須恵器と同じ化学特性をもつ須恵器が長野県下の遺跡で発掘されたとなると、これは大阪陶邑から運び込まれたとしか考えようがない。このように、遺跡出土須恵器の分析結果をまず地元の窯跡出土須恵器の化学特性に対応させてみる。対応すれば地元産と考える。対応しないときには、同時代の有力な須恵器生産地の須恵器と対応させる。5世紀代では大阪陶邑がもっとも有力な対照生産地となる。これが胎土分析による須恵器の産地推定の基本的考え法である。

以下に、長野県御代田町の前田遺跡から出土した、5世紀代と推定される須恵器と8世紀代と推定される土師器（第1図）の分析結果について報告する。

(2) 分析法

須恵器資料は表面の灰釉を削りおとしたのち、タングステンカーバイド製乳鉢（硬度9.5）の中



第1図 前田遺跡蛍光X線分析対象土器

で100~200メッシュ程度に粉砕した。灰釉を削りおとす理由は、灰釉はK、Ca、Rb、Srに富んでおり、そのまま粉砕すると、土器の分析結果に影響を及ぼすからである。

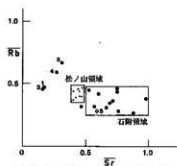
次に、粉末試料を塩化ビニール製リング枠の内にいれて約15トンの圧力でプレスし、直径20mm、厚さ3mmのコイン状の錠剤を作成した。この錠剤にX線を照射し、発生する2次X線（蛍光X線という）をエネルギー分散蛍光X線分析装置で測定した。K、CaはTiを2次ターゲットにして真空中で、また、Fe、Rb、SrはMoを2次ターゲットにして空気中で測定した。岩石標準試料JG-1を標準試料にして定量分析を行った。分析値はJG-1による標準化値で標示した。

(3) 分析結果

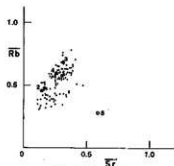
第1表に分析結果を示す。この結果に基づいて、はじめに、前田遺跡出土須恵器が地元産であるかどうかの目安をつけるため、Rb-Sr分布図上で地元窯に対応させてみた。Rb-Sr分布図を最初に描くのはこの分布図が各地の須恵器の地域差をよく表示し、どこの産地のものかを大まかに目安をつける上に役立つからである。地元窯としては、時代は異なるが、長野市の松ノ山窯、佐久市の石附窯を選択した。その結果を第2図1に示す。松ノ山領域、石附領域はこれらの窯跡出土須恵器をほとんど包含するようにして定めた。この領域は定量的意味をもつものではなく、これらの窯の須恵器はこの領域に分布するということを示す定性的な意味をもつ領域である。定量的に産地推定を行うためには、全因子を統計的手法でまとめて計算し、マハラノビスの汎距離を計算しなければならない。今回はそうしなくても、図面上における定性的な産地推定法でも十分結果を理解できるので、作図法の理解のし易さを優先させて作図法による産地推定を行った。第2図1よりNa1、2、3、4の須恵器は4点とも地元窯には対応しないことがわかる。Na5の土師器のみは石附窯領域に対応する。土師器は窯跡（生産地）が残っていないため、その産地推定法の開発は遅れている。ここでは須恵器のデータを参考にして分析結果を考察することにした。第2図1よりNa5の土師器は4点の須恵器とは別の胎土であることは明らかである。

第1表 前田遺跡出土土器の分析値

No	出土遺構	器種	器形	K	Ca	Fe	Rb	Sr	備考
1	H-61号住居址	須恵器	甕	0.367	0.069	2.24	0.471	0.167	5世紀後半
2	H-61号住居址	須恵器	甕	0.380	0.058	2.61	0.455	0.159	5世紀後半
3	H-60号住居址	須恵器	甕	0.485	0.113	1.76	0.676	0.312	5世紀後半
4	H-65号住居址	須恵器	蓋	0.496	0.116	2.72	0.594	0.267	5世紀後半
5	H-6号住居址	土師器	坏	0.360	1.47	3.57	0.278	0.592	8世紀前半

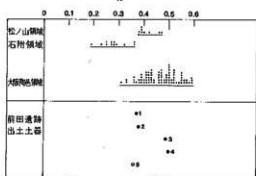


1 Rb-Sr分布図における地元産との対応

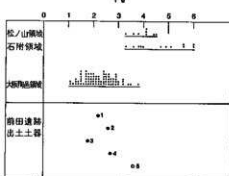


2 Rb-Sr分布図における大塚陶器産との対応

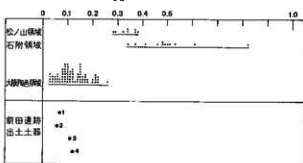
3 K因子における対応



5 Fe因子における対応



4 Ca因子における対応



第2図 前田遺跡出土土器の各因子の分布と他遺跡との対応

次に、4点の須恵器が地元産ではないとなると、5世紀代の最大の須恵器生産地である大阪陶邑の須恵器と対応させなければならない。その結果を第2図2に示す。この図には大阪陶邑のTK-73、TK-87、TK-306、TG-22、TK-85、ON-22、TK-305、TK-218、TK-37、TK-303、TK-67、TK-109、TK-15、ON-44、ON-34などの窯跡出土須恵器もプロットしてある。そうすると、前田遺跡出土の須恵器は4点とも大阪陶邑産須恵器によく対応していることがわかる。

以上の結果、前田遺跡出土の5世紀代と推定される4点の須恵器は大阪陶邑産の可能性が出て来た。この推定をさらに確実なものにするためには、他の因子についても大阪陶邑に対応させなければならない。第2図3にはK因子を対応させてある。4点の須恵器は大阪陶邑領域による対応している。第2図4にはCa量を比較してある。地元産の須恵器に対し、大阪陶邑産の須恵器にはCa量が少なく、完全に相互識別は可能である。そうすると、前田遺跡の4点の須恵器はすべて大阪陶邑領域に対応する。Na5はCa量が多く、この図では右端にはみ出してしまふ。第2図5にはFe因子を比較してある。地元産に比べて大阪陶邑産の須恵器にはFe量が少なく、Fe因子でも相互識別は可能である。そうすると、前田遺跡の須恵器は4点とも大阪陶邑領域に対応することがわかる。

以上の結果、前田遺跡の4点の須恵器はRb-Sr、K、Ca、Feの全因子で大阪陶邑領域に対応し、地元産の須恵器には対応しないことが明らかになった。したがって、これら4点の須恵器は大阪陶邑からの搬入品であると推定される。一方、土師器の方はRb-Sr、Ca分布図などで大阪陶邑領域から大きくずれており、畿内からの範入品とは考え難い。むしろ、石附窯跡の須恵器に対応しており、長野県内産である可能性の方が大きい。ただ、土師器の産地推定法の開発は遅れており、今後、各地の多数の土師器の胎土分析のデータを集積していく過程で、より明確に産地推定されることであろう。

